





AC                      Gunsho ruiju  
145  
G855  
1939  
v.28

East Asia


PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

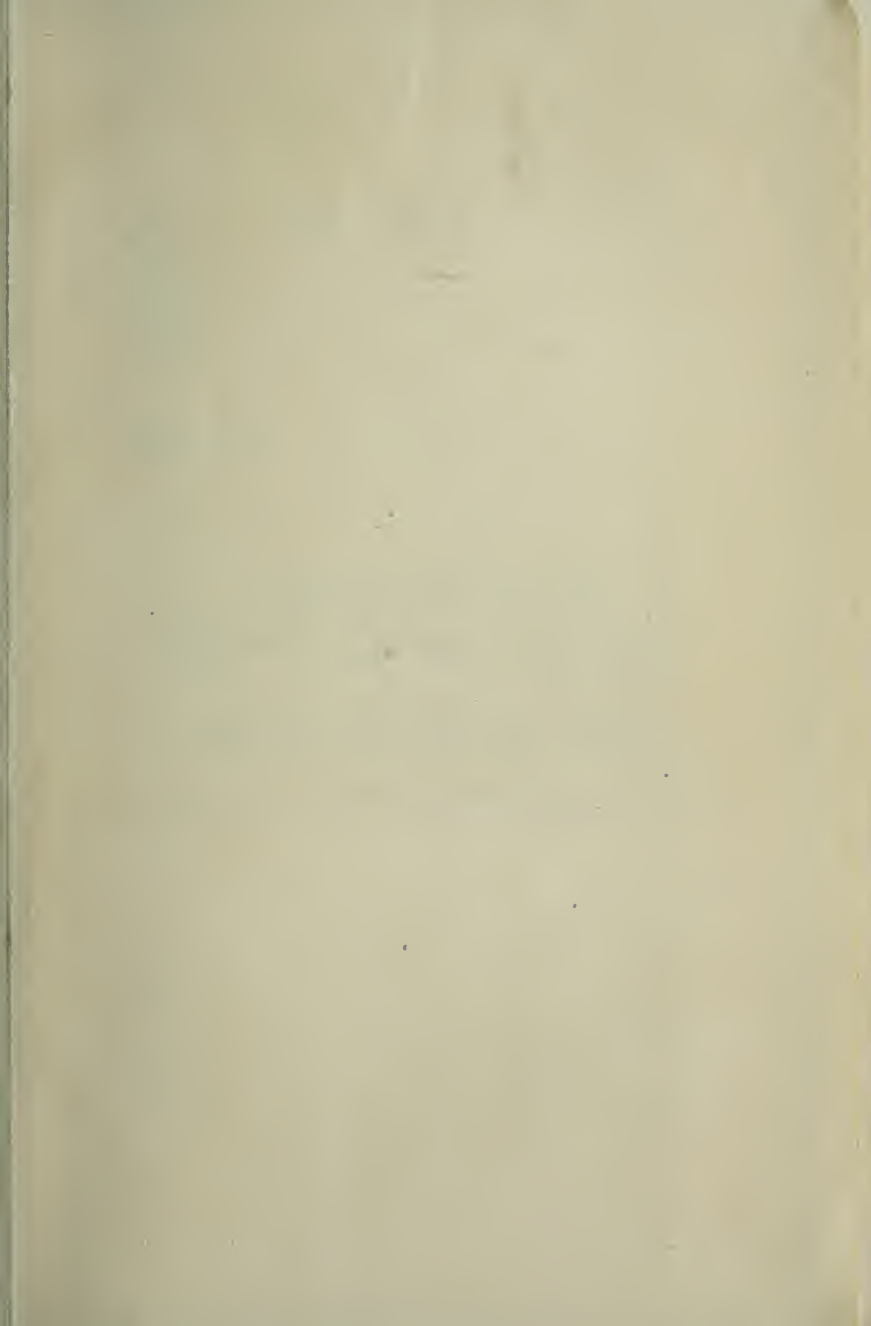




Digitized by the Internet Archive  
in 2011 with funding from  
University of Toronto

<http://www.archive.org/details/gunshoruij28hana>







# 羣書類從

第貳拾八輯

東京 續群書類從完成會





AC  
145  
G855  
1939  
v.28



# 群書類從第貳拾八輯目次

## 雜部

卷第四百八十九	大槐秘抄	九條伊通	一
卷第四百九十	おもひのまゝの日記	二條良基	一七
卷第四百九十一	眞俗交談記	建久二年九月十日自 十至甲同日夜今記之	三五
卷第四百九十二	騷驢嘶餘		四六
卷第四百九十三	門室有職抄		五八
卷第四百九十四	海人藻芥	宣守	八五
卷第四百九十五	駿牛繪詞		一一二
卷第四百九十六	國牛十圖		一三五
卷第四百九十七	夜鶴庭訓抄	世尊寺伊行	一四二

才葉抄一名筆跡抄	藤原敦長	一四八
入木抄	尊圓法親王	一五五
卷第四百九十五	本朝書籍目錄	清原業忠
仙洞御文書目錄		一八一
倭片假字反切義解	花山院長親	一八五
通憲入道藏書目錄		一八八
諸家點圖		二〇〇
卷第四百九十六	桂林遺芳抄	菅原和長
卷第四百九十七	新撰字鏡	昌住
卷第四百九十八	中正子	國月
卷第四百九十九	常陸國風土記	三四八
豐後國風土記		三六一



卷第五百

對馬國貢銀記……………三六六

伊勢國風土記……………三六七

駿河國風土記……………三七〇

卷第五百一

安東郡專當沙汰文……………三九五

康正二年造内裏段錢并國役引付……………四一〇

卷第五百二

東北院職人歌合……………四四一

鶴岡放生會職人歌合……………四四七

三十二番職人歌合……………四五三

卷第五百三

七十一番歌合……………四六四

卷第五百四

十二類歌合……………六〇七

調度歌合……………六一〇

狂歌合永正五年正月二日……………六一四

常盤姫物語……………六一九

精進魚類物語一名魚鳥平家……………六二六

柿本氏系圖……………六四一

後奈良院御撰何曾……………六四四

卷第五百五

公武大躰略記……………六五三

世諺問答……………一條兼冬六六三

卷第五百六

曆林問答集……………賀茂在方六八八

群書類從卷第貳拾八輯目次終



群書類從卷第四百八十九

檢 校 保 己 一 集

雜部四十四

大槐秘抄

九條太政大臣伊通公

君はよの事をきこしめさむとおぼしめすべきなり。きこしめさではいかでかはうるはしき事をば。そらにはをこなはせおはしますべき。格と中文にはおほくあしき事をこそなをされて候へ。しかれば世の事をきこしめして人にいかなるべきぞとおほせられあはせてをこなはせ給なり。きみはまいる人にいかにも御目をみかけて。心よき御氣色をして。あへしらはせおはしますべきなり。心あるうるせき人は。よの事など奏申事かたく候なり。

たと思ひたる所もなきもの。よしなし物がたりつかうまつるが。をのづから世の事は申出さぶらふなり。人にはかれがこのむことをとはせおはしますべきなり。才智あるものには文の御物がたり。和歌このむものには歌のこと。弓馬をこのむものには弓馬。管絃を好むものには管絃の事。なにともなきものにはよしなしごとなどを仰たまひとはせおはしませば。其中によの事もきこしめしつ。また參する殿上人もこれをよろこびて。めしかよほさねども日々にまいり候へば。やすく公事もなり候。又禁中も人がちに候なり。殿上人ま



いれども。参りたりともしろしめさずして。事  
きびしきには。聞にくゝのみしてあしく候な  
り。かつは殿上人。みやづかへつかまつるば  
かりの事にてなむさぶらふなる。ひじりの御  
門は人をすてさせたまはぬなり。かれがこの  
むもろ／＼につけて。つかはせおはしますと  
きは。無益人候はず。しかれば書に云。君の臣  
をつかわせ給ふ事は。よきたくみの木をえら  
ぶがごとしと申也。まがれる木をばわにつく  
り。なをき木をばながえにつくる也。かくの  
ごとく人をえらばるれば。すてらるゝ人も候  
はぬ也。つかはるゝ官のともがら。もしは殿  
上人みやづかへつかまつりたるが。一の事に  
て候なり。九條の右大臣左大臣と申人のかきをきて  
候物には。才學ありといへども。みやづかへ  
は。擧するにちからなしとぞしるして  
候。後冷泉院の御時。堀川の左大臣俊房と申

候し人を。大二條左大臣關白のまいりて候けるにう  
れへさせ給ける。おほかたみやづかへをせぬ  
なり。關白申けるやう。きくわいの事にこそ  
さぶらふなれ。かれらだに君の宮づかへつか  
うまつらでは。たれかはつかうまつるべき。み  
かど。さればいふ事のあるなり。學問をつか  
うまつる間にいとまなくて常にまいらぬな  
りといふなりと仰候ければ。關白。そこぞち  
からをよばぬ事に候なれ。君につかうまつら  
んとて。わかき程學問つかうまつらんは。よ  
ろづのとがゆるべき事にこそ候なれとぞ申  
候ける。その左大臣。後にかたり候けるは。し  
ぬとおぼえしに。この人のかく申されたりし  
かばこそたすかりたりしか。今はさやうの事  
申べき人もなしとぞかたりける。君は我御座  
ならぬ所にゐさせおはします。ひさしかる  
べき時は。殿上の御椅子めしてぞゐさせ給け



る。いまはさしもさぶらはず。殿上の御椅子におはしまして。殿上人の歌合つくりよませて講せさせてきこしめすは恒例の事也。石灰の壇に圓座めして。冬は火たかせて。しかるべき上達部めして御遊候。これ恒例の事なり。殿上に御座して。樂所人弓場殿にめして音楽きこしめす。又恒例の事也。弓場殿にわたらせおはしまして。しかるべき上達部直衣ゆりてまいる人。殿上人などして。まます弓御覽する恒例なり。寛平遺誠には。昇殿すべきものによくこゝちよく。ゆみいるものとかやさぶらふ。君には。すゞろなる人は。御くだ物御茶などはまいらせぬ事なり。關白。護持僧。御乳母。御侍讀などのまいらせ候なり。内藏頭などは。まいらすべきにこそ候めれ。これをもて思に。この人々にあらずとも。御外戚などは。さだめてまいらせ候らむかし。いみじく御外戚などにて

候とも。御持僧にあらぬ僧には。おほむくちうつしにものは仰られぬ事に候。いみじくしたしく候て。御祈の密事などを仰ごとあるにも。男女のあいだ一人御前に候て。それに仰らるゝ舁にて候なり。御あはせ。御くだ物は。人のまいらせたる物をきこしめせども。御飯は。いかにも内膳の御飯をめす事にてさぶらふ也。しからざるはまたきこしめさぬ事候。女御后にまいる程の人は。いづれかはをとりまさりの候べきとは申候へども。やむことなき後の御かたにては。御くだもの御酒などまいらせらるれば。きこしめす事にて候也。御てばこのふたに入て。後のみづから陪膳してまいらする事にて候なり。むかしはたけの臺のたかうな生たれば。藏人御はむもちておりて。みづし所に給ひて。ゆでてこそ御膳にまいらせて候へ。承平の御門の院號ののち朱雀



院におはしますに。天曆のみかど行幸せさせ給ひて。左衛門尉のがりとりめして。池のいをとらせてこそめしたるよし日記にしろして候めれ。竹の臺のたかうな。朱雀院の池の魚などの躰のことは。たえて今はあるべくも候はぬことかな。七條。朱雀。東西に鴻臚館と申所候。異國の人參れる時ゐる所にてなむ候ける。物がたりにしつたへて候。こまうどなど申人も此やにて候ける。くに／＼にしたがひてべち／＼のやに候。村上の御日記に。蜜瓜のたねを鴻臚館のあづかりに給ひて。鴻臚にうへさせられたりとこそ候めれ。おほやけは。よきうりうへさせてきこしめしけるにこそ候めれ。今は人の領となりて候めり。いつよりまかり成たるにや候らん。いままでもへうの山は其所よりぞひき候なる。ふるき府案をのぞき候しかば。すしあゆ。しほからし。自今以

後は鹽うすくしてまいらせよと仰られたる宣旨こそさぶらひしか。むかしは節會の座には。おほむみきは七八獻十獻なども候けり。あそばせおはしましけるにこそ候めれ。今の世となりては。かやうの遊びはたえ候にけり。上達部は封戸たしかにえて。節會旬。もしは臨時の御宴の祿を給はりて。はふ／＼候ばかり也。祿法はめのれうなどに候也。それは多々にて候。おほよそみなたえ候にけり。忠雅中納言のゐて候花山院と申所は。京極の太政大臣の内大臣に任たる寂前のとしの封戸をもちてつくりたるやに候。家は我ちからをもちてつくりたるが。はへは候とぞ申事にて候が。これぞ封をもてつくりたる所にて。其まゝにいまだやけぬ家にて候。今の上達部は封戸すこしもえ候はず。庄なくばいかにしてかはおほやけわたくし候べき。近代の上達部。おほ



く國を給はり候は。封戸のなきがする事なめ  
りと思候に。めさるゝこそ力をよばぬ事なれ。  
君は五節のまいりの夜ならぬかぎりは。おほ  
んさしぬきたてまつる事候はず。むかしはめ  
しけるに候めり。今はおほかたさる事候はず。  
御まりあそばすときは。こぐちの御はかまと  
いふ物をめしてあそばすに候。こぐちの御は  
かまは。こあふひのあやの紅の御はかまにく  
くりをさゝれたるに候。おほんさしぬきの文  
は。窠の文をめすに候。これはおほんうへの  
はかまの文をめすに候。たゞ人は。窠の文の  
さしぬきはき候はず。藏人の此御さしぬきを  
おろしてきるは。つねの事に候。よるひるをわ  
かすすこしことありて御直衣めす時は。かな  
らずうちおむぞをめす事にて候也。しかるを  
官奏のときは。うちおんぞをたてまつらぬ事  
にて候也。是は故實に候。文書をくりまきせさ

せおはしますあひだ。やすらかならんための  
御用意にこそ候めれ。おぼろげの事候はぬか  
ぎりは。日の御膳にはつかせおはしますべき  
事となん申つたへて候。陪膳もをのこのかな  
らずつとむる事とこそ申つたへて候へ。殿上  
人の見參のはしにて候なり。おほよそ代のは  
じめの藏人は。御卽位のさきに臨時に叙爵す  
る事候はず。御卽位の叙位にさだまりてする  
ことに候。しかるを今度はじめて御卽位以前  
にかうぶりを給はりて候なり。おほよそ藏人  
の臨時に叙爵仕る事は。ありがたかるべき事  
なり。世會の諸大夫のなを年少にて藏人に補  
て候などが臨時の叙爵はし候を。近代は一日  
まかり成ぬれば。みな叙爵せむと思ひあひて  
候也。藏人の受領に任せし事は。六年侍中の勞  
に候。しかるを近代一日をへて巡にあづかり  
候之條。本意には。たがひ候にたり。一代に年



號の多つもり候と當代の藏人五位とのおほくつもるはよしなき事に候。御用心候べき事也。藏人の代々多つもりたるがゆへに。今はいとあさましき人おほく藏人に補候にたり。此四五十年がさきまでは。なるべきもののならぬはおほく候き。なるまじきもののなりたるは候はざりき。近代はさも譜代と申者のいとおちぶれたるもの一兩人。藏人になさぬは候はず。あさましき藏人はいとおほく候める。自今以後は一臈へたらん藏人をもちて受領の巡にはいるべし。一臈へざらむをばいるべからず。たゞしゆへ有て叙爵せむは。このかざりにあらずとだに仰くだされ候なば。いとかくいそぎのく者はさぶらはじかし。この四十年がさきに藏人五位のはてにて。人くづと諸人に思ひ申候し者は。惟明。季良と申て二人侍き。其時これらは何ともなき上達部のもと

二三所四五所などまかりかよひ候しなり。今のくちきく我はとおもひて候藏人五位は。すこしうるほひある上達部殿上人は申べきにもあらず。われ／＼おなじこと藏人へたる諸大夫のすこしもうるほへるがもとには。はう／＼とまかりあひて候なり。人の心のわろくなりて候か。もしは受領になるみちの候はで。すぢなく世の捨がたくて。身をすて候かの間なり。ちかうまで侍ぞ物のはぢをしりてさぶらひしが。昨日けふになりてこそいとみだりがはしきふるまひきこえ候めれ。長谷雄。善宰相清行などが。外記をへて上達部にいたり候は。君につかうまつらんと學問をしてこそなりのぼりてえもいはず候へ。是はあまりに匡房民部大輔が子にて。三事をかねて正二位中納言までなりのぼりて候も。みな身をもてのぼり候へば。人もえもいはぬ事にこそ申思ひ



て候へ。一文しらぬ者なども人のあしのした  
によくはひくゞりえ候ぬれば。なりあがり候  
ぬ。左大辨爲隆が大弁の宰相にて中納言所望  
し候事を。待賢門院の白河院に申させ給ひけ  
るには。爲隆は大辨宰相なり。尤中納言にな  
るべき者なれども。臣家のうしろみしたるも  
のは。さすがに中納言にはかたき事なりとこ  
そ申させおはしました。爲隆が關白攝政の  
うしろみして。家の下文に判して候はむは。な  
にのあしき事にては候べきぞとこそはおぼ  
え候へども。爲隆が其時院に候はずばこそ。御  
さまたげにて仰さぶらふかとも思ひ給べき  
に。關白のもとにて院に候て。ことのほかに  
御響應候し時に候。いはむやつぎ／＼の所に  
まかりて。もとゞりはなちてねたる所に。ひ  
もさしかためて候はむものは。いかゞ候べか  
らむ。これらがすこしのさたになり候はゞこ

そ。はづかし今はせじともおもひ候はめ。才  
學たかきものの嗚呼の歎に成候ぬれば。いか  
なるつみとがもゆり候ぬ。嗚呼になりぬるは。  
才學もきこゆる事に候。大江の匡衡は人にゆ  
びさゝれたる者とこそきこえ候へし。かれは  
さばかり程のものが。弁などにぞえなり候は  
ねども。儒官はきはめてもちひられてぞ候け  
る。才學など人にすぎぬる程の者は。かれも  
大納言それがしが子。これも大納言かれがし  
が子などおぼしめして。たゞおなじやうに  
つかはれ。もしは昇進もつかうまつるが。人  
のためきはめたるうれへにて候也。官同じや  
うに候へどもふるまひありさまなどわるき  
者をば人あなづりて候。我等もすこしはきう  
して候ものを。君さもしろしめさずして。お  
なじやうにおぼしめし候へば。かれをこりは  
ぬ人すさび候て。さらばとてもかくてもあり



なんに。人の心なり候也。物のはぢしりたる者としらぬものとの差別の候べきなり。なにもこれは候事也。それをしろしめしてつかさを申も。やすき事にめしつかうも。もしは臨時祭の舞人のあいだにつけても。その差別の候。すこしねむもある事にて候也。誰かはむかしわろきもの候しかども。しだいのおやのふるまひ。我ありさま。みな人しりみゆる事に候なり。しか候へばこそ物のほしきを念じ。せまほしき事をもし候はね。なま上達部がたうなどは。昔はこれをばことに君におぼしめししりてもちひさせ給事に候。文範の民部卿は正左中辨。三條關白賴忠は權左中弁にて。まつりを三條關白わたるべきにて候けるに。三條の關白わたくしに文範にあひて。祭は我等がやうなる人のわたるなり。我わたり給へと申されければ。さ侍とてこそ文範わたり候け

れ。むかしは人の心うるはしくて。かくのごとき候けるなり。今の人はわがやくをせさせむとこそ思ひ。かつはつかうまつり候めれ。よき諸大夫とあやしのきむだちとは。はるかに絶席したるものにてなん候ける。然るを白河院のおほむ世に。御めのとに顯季卿が子孫をひきあげさせおはしましあひだに。なまきんだちは申にもをよばず。つみゆりたる人どもも。くびかきつめられて候し故に。いづれもいづれもたゞおなじ事のいま少しなりよきに。へしふせられて候なり。しかればひとつにかゝるべき事とはしろしめすまじとおぼゆる事にてなむ候。見し代まで五節などの殿上の座には。諸大夫は座をよしあるきむだちにはゆづりて。しもにこそお候しか。諸大夫の上居このみはじめ候事も。顯季の三位のし出したる事にこそ候めれ。諸大夫は臨時祭の一舞



はおほかたせぬ事にてなむさぶらひける。あやしのなまきむだちのする事にて候也。中納言長實さばかり位階上臈の舞人にてあやしのきんだち舞あひ候けれど。一舞せでやみ候にけり。鳥羽院の御時に待賢門院中宮にてはじめて臨時祭御覽じ候し年。いまの重通の大納言遲参して。白河院むづからせおはしまして。一舞のさたなくて。中納言入道清隆こそはじめて諸大夫の一舞したる事候しか。そののちはみだれたることにや候らん。これらぞ人をえらばるゝやうなる事は候し。藏人頭以下殿上人は。殿上に大盤かきのけさせて。疊よせて殿上にふしなみて。ねおきのかうぶりぎはにて。あけぼのにぞ日給はし候し。殿上にふさぬ人は。夜はえいり候はざりき。にくき下臈の藏人ある時は。まだくらきに日給をかゝせて。かきそこなふを勘發する因縁にはつか

うまつり候し。殿上の小庭には。夏はじの木といふ木をなん植て候ける。ちいさくてたけたくならぬ木の枝ざし。いみじくおかしげなるにてなむ候ける。夏は燈爐をば人寐候ける時は其木にぞかけける。南殿の橘の木は。この京に。いまだ内裏たてられ候はざりけるさき。人の家の候けるが木にて候ければ。きられずしてなむ候ける。殿上人は南殿のおほゆかにて。枝ながらたち花くひなどしけりと申候は。それは誠にや候けむ。木は一定のふるきになむさぶらひける。帥大貳に武勇の人なりぬれば。かならず異國おこると申候けり。小野好古が大貳の時。隆家が帥の時。とり分と異國の人おこりて候なり。かれらはたゞわが心どもの武をこのみけるに候。今平清盛大貳にまかりなりて候。いかゞと思ひ給ふるに。高麗に事ありと聞候。高麗は神功皇后のみづか



ら行むかひてうちとらせ給たるくに候。千  
よ年にや成候ぬらむ。東國はむかし日本武尊  
と中人のうちたいらげ給ひて候也。それは日  
本の内事に候。高麗は大國をうちとらせ給ひ  
て候を。いかに會稽をきよめまほしく候らん。  
然れども日本をば神國と申て。高麗のみに  
あらず。隣國のみなおちて思ひよらず候也。  
鎮西は敵國の人けふいまにあつまる國なり。  
日本の人は對馬の國人。高麗にこそ渡候なれ。  
其も宋人の日本に渡躰にはにぬかたにて。希  
有の商人のたゞわづかに物もちてわたるに  
こそ候めれ。いかにあなづらはしく候らん。し  
かれば制は候事なり。異國の法は。政亂ぬる  
國をばうちとる事と存てさぶらふが。鎮西は  
隣國をおさるべきやうに格に。此間脱文。神事ならぬ時  
は日々にまいりてぞ候し。就中行尊はよるも  
ひるもはなれまいらせ候はざりき。御持僧は

かくさぶらへばこそ殊なる朝恩にあづかり  
て。幸は候へ。いまやうはたゞ御持僧と申ば  
かりにてまいりもより候はずば。かひなく候  
なん。ゆめのおほむいのりきとせよ。なにくれ  
などちかくて。女房もみぐるしきことは。おほ  
せがきしてつかはしつ。藏人もはしりまはり  
て。おほせさぶらふことのもしさも候はずば。  
あしく候なん。又御持僧には當時にとりて徳  
行やむごとなき僧をし候。なにもより候は  
ずめすことにてなむ候を。今の世となり候て  
は。たゞ人がらやむごとなき上臈。もしは僧正  
など申程の人みなまいり候。なをこれぞはか  
らひたづねきこしめして。たのみおぼしめし  
つべからむ僧一人。壇所にちかくあけくれ候  
べき也。東寺の僧は正月後七日の御修法。そ  
のほどしり候べきなり。月のつごもりごとの  
御念咒しり候べし。仁壽殿の觀音供しり候べ



き也。弘法大師のおほやけのおほむ祈りあるべきことぞ眞言院申たてゝしをかれたる事どもに候。正月の後七日の御修法。又大元帥法。これをだにしりたらん僧。如法におこなひ候なば。國土に年中は。あながちの凶事は候まじきなり。末代はしれらん僧のをこなひ候はむだに。行もなく修もなからむ僧は。いかとうたがはしく候を。しらずなる僧のをこなひあひて候へば。いとどなに事か候べき。むかし人もかしこく僧も智惠候し時。このをこなひはきみのおほむため國土のためにもよかりしなりしとて申をき。つかうまつりきたることはよしなし。公事などのやうにまかり成て。世のいのり君のおほむ祈とて他事の候。これはよくく心えぬ事に候。むかしよりあるべき道理のことを如法にしをきて。其うへにいかなる事も候はゞこそおほんいの

りのそうにては候め。近代のおほむ祈は。いまはじめてをこなはるゝを賞して。ふるきはすてらるゝやうに候也。きのふけふはしり候はず。うけ給候しよは。公家のもとより候三壇の御修法はさたもなき事にて。いまはじまる御修法の賞せられしなり。なをかくのごとき候はゞ。おほむいのりのかさなりおほくなるにはあらで。他のおほむ祈のひかへらるゝにて候也。太元の法は白河院のよろづの僧に尋させおはしたるに。みなしらすくと申たる法に候。たゞ範舜僧正と申す僧一人しりたる法にて。範舜が弟子に能登の少將がをちに良雅と申候し僧一人しりたる事にて。しばしそれをこなひ候し。其のちはしるもしらぬも。僧のをこなひあひて候へば。其修中にわるき事どものいでき候を。みなものゝはぢもしり候はず。太元の阿闍梨は。をぐるす秋篠



など申て。知寺の候へば。それをしらむれうに  
 所望しあひて候なり。其を知僧たしかに良雅  
 にならひて候。増俊と申て。中納言の阿闍梨の  
 なのり候僧。嵯峨と醍醐とにかよふ八九十の  
 僧候。又は定海僧正にならひたる弟子や候ら  
 む。前僧都明海ぞ定海にならひて候らむとお  
 ぼえ候。定海がてよりくはしからねど。次第な  
 どうるはしくかきとりたる僧は。鳥羽の供僧  
 にて淡路の阿闍梨源えむと申僧こそ候らめ。  
 ならひもやつかうまつりたらんとおぼゆる  
 僧一人。又醍醐に候歟。後七日の法は。醍醐に  
 さもよろしく法ならふばかりの者はみなし  
 りて候。四五人は候也。その中にもなをくはし  
 くならひたるは二三人候なり。仁和寺の僧は  
 おほかたしり候はず。是はおほむ心えさせお  
 はしまして。御披露はさぶらふまじ。東寺の  
 長者もしり候はぬ事也。此法知人は明海。宗

海。宗明。源雲。寶満。已上麗高野畢一海。これらにや  
 候らむ。まだ候らめど。たしかにならひたる  
 はこれらに候。勸修寺の僧に岩意律師は弟子  
 一人候なり。前關白のつかふ僧なり。これらや  
 しりて候らん。山の眞言師は大畧たえて候た  
 りとぞ申候。相實法印事の外にならひたる物  
 にてのこりて候。たゞし眞言は次第のつゞき  
 候べきか。これは諸宗にありきてならひたり  
 とぞ。本寺にぞいともうけ候はざる。相命  
 法印これぞうるはしく相承して。よくならひ  
 たる人にて候。喜イ善仁と申あざり候。きよきもの  
 といはれ候き。俊圓法印ぞ弟子にて候し。若  
 傳て候はゞ是らや候らん。行玄座主の弟子聞  
 え候はず。三井寺前大僧正習ひたりと聞え候。  
 權僧正覺忠。三井寺にとりてはあたりをばら  
 ひたる人に候。三井寺の眞言は唐塔經藏房イ二つ  
 流が候を。此二の流をならひたる人にて候な



り、次には宗實律師とて候。公尊前内供。又良  
修法眼が弟子に良明が弟なる僧候なり。これ  
らぞうるせき物にては候なる。仁和寺には下  
野のあざりと申て、永巖法印と申僧のをとゝ  
ぞうるせき僧候なれ。御意よりおこり侍御修  
法など候はゞ、これらをめしてをこなはせら  
るべく候。すこしもおほむいのりにならん事  
はこれら候なり。御曆四年の帝の有御子は後  
三條の院なり。其御子白河院吉例也。御曆三年  
の帝の有御子光孝天皇なり。其御子寛平法皇  
吉例なり。御曆二年の帝の有御子は當時一院  
之御子。我君已叶吉例て候なり。かくのごと  
きのことは、おほかたたがひ候はぬ事なり。こ  
のよしを存じおぼしめして、御心にも可令  
御祈念候也。此外に件年々のみかどの御子お  
はしますは候ぬなり。御子とはかくのごとき  
つがせおはしますを申候也。世はことの外に

ひさしくなりては、非常のこゝろある者いで  
まうでき候ぬれば、きはめたるよしなき事に  
て候也。むかし物がたりには、嵯峨天皇をば人  
思ひかけまいらせたるに、田村丸を近衛將監  
になしたび候ければ、冠たまはらむをまち候  
あいだに、少將になしたびてけり。四位して  
のにんをまつに中將になり。大將になりては  
なれたてまつらざりければ、えなんおもひよ  
らざりけるとこそ申つたへ候へ。さも候はむ  
武者一人は、たのみてもたせおはしますべき  
なり。おほよそ臣下にも、たのもしからむ人  
をばもたせおはしますべき事にて候也。おそ  
ろしきものは人にさぶらふ。やう／＼何とな  
くたのみまいらせたる人をまうけさせおは  
しますべきに候。白河院のよをむしろのごと  
くにまきてもたせおはしましたりしが、なを  
武者をたてゝ。おほよそたゆませおはします



ざりしに候。仰候けるは。一條院はよのおこ  
の人にて有けるときくに。頼義を御身をはな  
たでもたれたりけるが。きはめてうるせくお  
ぼゆるなり。我まもれとこそ忠盛にはおほせ  
さぶらひけれ。禁中はよるはひし／＼として  
こそ候けれ。藏人は殿上にならびふす事に  
候。殿上人もちかくまで殿上にふして。かうぶ  
りのひたひあがりてこそ。日給のおりはゐあ  
ひてさぶらしかと。近代は殿上にふす人もさ  
ぶらはぬ。けうのことに候。いそぎひとめす  
事などの候に。とのゐ所よりさらにさうずき  
てまいるびなき事にて候也。藏人の受領にま  
かりなり候は。六年があいだかくのごとく侍  
中してさぶらひつる賞なり。いまはたま／＼  
候も。みなかたずみにねあひて候。またいそぎ  
叙爵してあれば。なに事の賞にかは受領にも  
まかりなり候はむ。かくえなり候はぬもしか

るべき心とする事に候や。御學問のさぶらは  
まほしき故。このおもむきのことを。唐にも日  
本にもしけるやう。委旨をしろしめさむがた  
めなり。たゞ詩賦つくらせおはしまさむが爲  
にはさぶらはず。臣下をつかはせおはしまさ  
むも。この事をすこしもまなびしりて。その  
まゝをふるまふものをつかはせおはします  
べく候なり。學文すとして。詩このみてつくり。  
もしは我まなびたれど。たゞ詩賦つくりばか  
りをしりて。よの事しらぬものは。よしなしも  
のに候。よおさまるやうをまなびて。心にすこ  
しもかけたらむ人の候べきなり。臣をば君の  
しろしめす事にて候也。えもいはぬ人にさぶ  
らふとも。我身のことはりを思ひて。よの事を  
しらざらむものは。君の御かたきにて候。た  
ゞ／＼むかしのごとくに人のみななしをう  
ちてさぶらはゞ。それだにもあつきとき寒さ



時。大事に候に。近代となりてこはきものゝうへに。猶こはき物をきかためて。こしあて。かぶりといめ。ゑぼしといめなど申て。ちからもをよばずしたてあひて候なかに。しほくくだくとして。あさましげなる雜色一二人ばかりぐして。けうの前駈などぐして出仕候こそいかなるぬすみもしつべき事にて候へ。物ほしがりとてこそきはめたる道理にて候へ。人の寒温をしろしめしてだに。人をつかはせおはしまさばよく候なんかし。犬死犬産のけがれあるまじといふさたのむかし出まうできて候けるなり。それに犬死犬産なくば上達部はちみてむずといふ事なりて。犬死犬産のゑはなをさぶらふところ。申候めれ。さればひらせめのもよほしは。人にしたがふべき事にや候はむ。としごろ君につかうまつりさぶらひて。かたのごとくかくのごときの學文をつ

かうまつりて候を。その心ざしのあらはれたるにや候らむ。なににもさぶらはぬけうのもの。の相傳の給ひに。か様にさだめられ候が。たのむかたも候ぬもの。の大臣一のかみまでまかりなりて候は。この心ざしのつかうまつるなめりとは思たまへながら。此つかうまつりたる學文のさりとともく。と思給候つるあいだに。これをすこしも君にしられまいらせ候て。すでに七十に成候ひなむず。旦暮けふあすにまかり成て候にたり。執とまりておぼえ候て。ことのありやうをうけたまはり候ばやとて。十七條の憲法をおそれながら書進じてさぶらふに。御興の候とうけ給よろこびて。すこしのことはしぐをきとおぼえさぶらふ程をやはらげかきいでられて候なり。さらばさらんよにも。しかぐのものは是を思ひて學問はしけれとおぼしめしいでられん



ためにかきて候也。この心をもて。まなにするはしくかきて。叡覽にそなへて。すなはちやがて火にやきたまふべし。又この造紙は自筆いよく見ぐるし。かきうつされなば。とくとくかへし給ふべし。

思ふことあつめたることはそくたしを  
はてよ風にちらすな

帝王のおこり臣下あがめたてまつる事。

帝王の人民をあはれびさせ給ふべき事。

帝王のおほんつゝしみのありやう。

帝王のおほむまつりごとのうるはしかる  
べき事。

帝王の臣下をおもくせさせ給ふべき事。

帝王のおほむ心つかはせ給ふべき事。

帝王の人の善惡をしらしめしてつかさを  
なさせ給ふべき事。

帝王のふるきあとをたづねさせ給ふべき

事。

帝王の人をつみさせ給ふべき事。  
〔せ殿殿〕

帝王の人を賞せさせ給ふべき事。

帝王の御祈のやう。

帝王の諸國をおさめさせ給ふべきやう。

帝王人の能を賞せさせ給ふべき事。

帝王無才の人をとくなしあげさせ給はぬ  
事。

帝王人の寒温をしらしめさるべき事。

帝王神事をあがめさせ給ふべき事。

帝王佛事をもはらにせさせ給ふべき事。

上達部國を給はれるあながちにひだうに  
あらざる事。

賢才にいたては沙汰にをよばずしからざ  
るともがら品秩にしたがひて官をなさ  
るべき事。

上下の官をなしたまふやう。



此本すこぶる世にまれなるにや。またとえ  
ざらむが御よしむ也。ゆめく披露すべか  
らず。

九條太相國伊通公意見。

進二條院云々。

右之一冊以芝山勘解由次官廣豐本令書  
寫且遂校合畢。

元祿五年二月 日

左中將公詔

右四辻宰相公詔卿以自筆奥書之本令書  
寫訖。

元祿八年仲冬廿七日

おもひのまゝの日記

後普光園攝政良基公

この十とせあまり。おさまりかね侍つるよもの波かせ名残なくしづまりぬれば。秋津洲のうちしまの外までも。あまねき御めぐみをよはざるかたなし。大樹將軍又文治のかしこきあとをしたひて。まつりごとをむかしにかへさんといふねがひのあさからざれば。あらゆる神々もこの心中をみそなはして。我國をまほり。武威をたすけ給なるべし。神事佛事を興行せらるれば。宗廟しやしよくよりはかなきかた山寺に至るまで。天のしたを祈りたてまつる事ふた心なし。などか天の心にもこたへざらん。四方の國々しづかなれば。万民にいたるまでその幸をかうぶらずといふことなし。



しん羅百さいのみつぎまでふるきに立かへり侍る。まして家々のいとなみさらにわづらひあらず。はかなき山がつまでも。腹つゝみをうち。木こり草かりの重うたまでも。謳歌のこゑちまたにみちたり。延喜天曆の御代にもかくばかりやは侍べき。五百年に一どの名せいは。たゞけふこの比のことと見えたり。關の外をば鎌倉の武衛いみじくおさめて。吹かせも枝をならさず。都には又京白河かけて。さるべきぶしの家々。くげの人々のすみかにはまじらす。大内をなかにをきてつくりならべたり。四十八か所のかゞりとかやきびしければ。よなくのおそれもなく。龍田山の白波も立かくれ所あらじとぞおぼえ侍。賢才の人おほき比なれば。御まつり事さらにたがふ事なし。武家もいさめをいれたてまつるべき御あやまりなければ。御心のまゝに世をこ

なはせ給ふ。すべて賢才をえらばせ給ふ事。むかしにもこえたり。しかも人をすて給はねば。はかなきうらみごと聞えず。いやしきみち大路なるおさめみかはやうどまでも。をのがじしゑみまけて。時にあひたるさま。見るもこゝちよげなり。しばめる草木の雨にあひ。つかれたる魚の水をえたらんも。これにはすぎじとぞ見え侍。としあらたまりぬ。やぶしわかぬ空のけしき。くもりなき御代の光さしそふ春日うらゝにはれて。花の色鳥のねまでも物心ちよげなる世のけしきなり。まして九かさねの雲のうへのありさま思ひやるべし。ことしはけふの節會より年の中の公事ども。ふるき跡をたづね。めづらしき事をおこさせ給ふ。するの世のためにもとて。かたのごとくかきつけ侍なり。四方拜はれいのことなれど。まだ夜ぶかきに御しやうぞくよそひたれば。殿



上のうへ人廿人ばかり。よべよりまいりこもれり。奉行の藏人をはじめとして。しそくのひかりひるにをとらず。御しやうぞくのぎは。供花よりはじめて。ふるきまゝにきら／＼しくよそひたり。まだ寅の刻に事はてぬれば。人々まかでぬ。やう／＼夜あけ行ほどに。小朝拜御くすりの奉行の人々まいりあつまりて。とく／＼ともよほす。ちか比のならひにいでいざりする人々。あしを空にてさはぎあひたり。外記方も藏人方ももよほしげたいなければ。まだみの時に御薬の儀はじまる。これは例の事なれど。江次第などにまかせて興行せらるゝ事。おほし。ことしの陪膳には更衣さぶらひ給ふ。いとめづらしき事なるべし。後取のかはらけ殿上にをきたれば。やがて人々のみくだしなどちかき比見をよばぬことおほかり。關白のはいらい辰のときばかりにはてゝ。

まづ院にまいりてはいらいあり。やがて上達部ひきつれて殿上にまいりぬれば。小朝拜もよほさる。前關白大殿にて。堀河嘉ほうより此かたかしこき代々のあとをたづねて小朝拜にたつ。牛車にのりてすいじん十人いとめづらかなるさまなり。大殿殿上のおくの座につきぬれば。關白はしにさぶらふ。太政大臣。左右大臣。左右大將。數をつくして卅人ばかり。殿上所せきまでつきならびたり。無名門よりいるほどおもひ／＼に追つれたる隨身のさきのころ／＼いとおどろ／＼しきほどなり。しだいに座をたちてゆば殿につらなりたつ。事のよしを申。出御のしきなど皆例のことなり。前關白關白兩人ねる。これもめづらしき事なるべし。大殿しやくをつきて。宿老の拜とかや用らるゝ。後醍醐元弘にも故殿かやうにふるまはれけるとかや。やう／＼節會の御しやうぞ



くもよほす程。兩殿。だいはん所にさぶらふ。其ほか左右の大臣。左右の大將など。さりぬべきにつきて。だいはん所にめしいれらるゝも有べし。内侍威儀の人々。だいはん所につきたり。典侍たち。朝がれぬの間にさぶらふ。きぬの色あひ。物の心ばへえならぬさま。いづれともわきがたし。たと春の花秋の紅葉をこきまぜたる心地とするや。内侍いぎなどはかずさだまれるほどに。わざと見所ありて。おかしきをえらばせ給て。甘人ばかりつけさせ給ふ。さりぬべきわかし人々。まいりたれば。あふぎさしをかせて。もてなやめるおもゝちなど。けふをはれとつきじろふもことはりならむかし。わかき上達部たちははかなき思草のたねとなるもあるべし。たとあまつをとめのあまくだれるかとぞおぼえ侍。よろづあまねき御うつくしみにひかれて。せいよくをもてあそ

ばしめたまはねども。をのれとかゝるたぐひはまいりあつまるなるべし。節會のぎしきまつねの事なれど。立樂などふるきにまかせて。御せんのくさくまことのからものどもをつくさる。さけのかみなどまいりて。行酒のぎしきなどいとめでたし。よろづむかしをおこさせたまふゆへに。内弁まへの物てまさぐりにとりてくらふも有べし。三こんの後諸卿をひすゝみて。しやうかし唄哥うたひて。かは笛ふくもあり。天曆の古風いとおもしろし。太政大臣れちにはくはゝらでわきよりのぼりておくの座にさぶらふ。これもふるき例なるべし。かやうの事どもかずゝおほけれどみなもらしつ。

二日。だいはん所のぎしきなどいときらくしく見ゆ。さんざする人々。だいはん所にまいる。ほどくにつきて御せんのめしあり。けふ



は又殿上のゑんすいとてひしめく。ゑいきよ  
くの人々數をつくして廿人ばかりさぶらふ。  
かみのとにて御覽あり。すそかづきの女房卅  
人ばかり御あたりになぶらふ。きぬの色々花  
びらをちらしたる心地して。いとめもあやな  
り。五せちのおりにもをとらず。御かたぐの  
すいさん。ゑひすごしたる殿上人などたびた  
び袖うちふるけしき。心ざまにておもしろし。  
さてもけふは東宮拜禮はいきんの事有。せいりや  
うでんの御ちやうにつかせ給ふ。春宮まいら  
せ給て。すのこにて拜せさせ給ふ。内侍のろく  
などのぎしき例の事なれど。ちか比はこれも  
めづらしき事なり。けふやがて二宮のたいき  
やう有べけれど。とても大内つくりてこそと  
てこれはなし。う杖。立春のわか水などいふ  
事。さしたる事なければみなもらしつ。  
五日の叙位。れいの事なり。これもしゆくらう

の人々。さいかくをたしぶのらうなど。ちむや  
くをたゞさせ給なるべし。し熱筆ひつは左大臣さ  
ぶらふ。

七日になりぬ。けふの白馬の節會。外弁に中務  
の宮。ひやう兵ちやう伏やうをつがひてたゞせ給べし  
とて。是を見にとてきぬかづきどもひしめく。  
まだ午の刻にことはじまる。左大臣内弁にて  
はしにつく。太政大臣おくの座のさぶらふ。公  
卿卅人ばかりちんの座せばければ。びんぎの  
所々に立やすらひたるもおほし。大殿。關白。  
御後にさぶらひて事をこなふ。中務の親王當  
代の宮にて世のおもはせ人のもてなし給ふ  
事がぎりなし。ひやうちやうさきのころぐ  
はなやかにて。外弁にてさぶらひ給。のぼり  
ておくの座につかせ給。東宮も節會にさぶら  
ひ給べきさた有しかど。たえてひさしき事な  
ればとて。けふは其事とゞまりぬ。たゞ御後



のかたにて御らんせさせ給ふ。左右の大將そ  
うをとるほど。いとはなやかにおもしろし。こ  
とはてぬれば。御馬清涼殿にて御らんあり。殿  
上の人々うちのおもしろいとおかし。さてもけ  
ふははつ子日なりとて。内侍のかみわかなた  
てまつる。いろ／＼のうすやう。えならぬ哥の  
心ばへなどふでもをよびがたければ。中々も  
らしつ。

八日。御さいゑのはじめ。式にまかせてをこ  
なはせ給ふ。上卿は左大臣なるべし。眞言太元  
の法。承和のむかしの跡をたづねて。しんごん  
院いみじくつくりたてられて。あじやりのい  
でたちなどめも心もをよばず。女叙位。女王  
の祿などいふ事。さしたる事なけれど。これも  
ふるき事ともあるべし。今年男路はなむたう哥を  
こなはるべしと聞えしかど。閑院せんかうの  
のちとぞきたありし。たうかの節會はつねの

事なれど。御かた／＼ないけう坊のぶぎなど  
廿人にあまたり。雪ふり月おもしろくてい  
とえん也。この節會はわざと酉の時ばかりに  
はじめらる。これもさま／＼の心あるべし。  
十八日にはのりゆみの事有。ゆばにいでさせ  
たまふ。しふのさうなどいとおもしろし。公  
卿弓矢もち。ともなどつけてあるさま。ちか比  
めなれぬことなり。大將そうとるほどなど。例  
の事なれど見所おほし。除目は十一日より  
はじめらる。そのほどの事くだ／＼しきうへ。家  
家のひじどもにてあれば。中々かきつくるに  
及ばず。南殿にてをりなくだされんなどさ  
ありしかど。それはとゞまりぬ。さてもない。え  
んは廿一日にて侍れども。中比よりたえて久  
しき事なればとて。たゞ正月中にをこなはる。  
後白河保元よりたえてなき事なれば。この比の世の  
もてあそび此事なり。みち／＼のはかせ。い



と竹のしらべまでも。其道にたへたるをえら  
びとゝのへ給ふ。公卿青色のはう雨いとめづら  
かなり。ひかうの程。かうせうの聲。雲井にひ  
びき物すごし。けふの詩ども人の口すさびと  
なりて。いとありがたきためしなり。はいせん  
には更衣さぶらふ。御遊のざしき。雲井にひ  
くもののね。身のけもよだちていはむかたな  
し。外記のまつりごと。ことしは左右の大臣  
まいりてはれの儀をこなはる。吉書奏。左大臣  
さぶらふ。鬬白の臨時きやく。大臣家の母屋  
の大きやうも有しかど。わたくし事なればか  
かず。まことと議定はじめ。兩殿以下人々七八  
人さぶらふ。神事こう行やがてさだめ申まゝ  
にをこなはせ給。ことしよりはしきの議定の  
ほかに。神事。任官。公事。興行の事別して日を  
をかるべしなどを聞えし。

二月にもなりぬ。事しげかりつる大やけ事ど

もはてぬれば。春日うらゝになりまさりて。い  
とゞのどけき世のけしき也。御遊はじめ詩哥  
の御會あり。詩は絶句。哥も一首のはれの御  
會なり。三月に中殿の御會あるべければ。いま  
だ能おうせい屋しん上をかゝず。御遊はじめ。物の  
ねいとおもしろし。十日比に御書所のはじめ  
有。二月はかれいとてまづその所ををかる。作  
文は三月なるべし。そのさまはつねの事なれ  
ばしるさず。きねんのまつり。きねんこくの  
奉幣などしきのまゝにをこなはる。みな大臣  
上卿にてぞありし。諸社のまつりども。近比ま  
いらぬしよししくまでもとゝのへさせ  
給。しだひたがはずみな本社にまいりてをこ  
なふ。いとめでたし。臨時の仁王會。きの御讀  
經などいふ事ども。月たがへすみなをこなは  
せ給。三月になりぬれば。よもの木末もけしき  
づきていとおもしろし。十日比。南殿のさくら



さかりなれば。花のえんせさせ給ふ。延喜天曆の例にまかせて。南殿の御しやうぞくうるはしくしつらひて。いとめづらかなるためしなり。舞人はさるべき家々の人をえらばせ給ふ。わかき雲のうへ人は。樂人も舞人もけふをはれとつきじろひあひたり。柳花苑。春鶯囀などかの花のえんのおり。思ひ出られていとえんなり。胡飲酒などは童舞なれば。ろくかくるぎしき御賀などのおりにたがはず。童舞の父の大納言。ろくとりて笏もちながら。えならぬ舞の一曲。袖かへしたる程などいはんかたなし。御かたぐもけふの物見をすごさじとまうのぼらせ給ふ。おかしきうへわらは二三十人。えりとゝのへさせ給ふ。きぬの色々あこめのすがた。さまぐおかしき事おほかり。

三月十日の夜に中殿の御會はじまる。まづ詩の御會あり。虫 つゞきたり。前關白 虫 な

ど事にたへたる十四五人さぶらふ。からのも大和もたぐひなき哥の風情どもつくして。秀逸もおほく人の口に侍にや。御製は大閑やがて懷中す。さる例あるにや。御遊れいの事なれど。今夜はことに耳にとゞまりてきこゆ。懷紙のかきやうなどまでもさまぐめづらしき事どもおほかれども。さのみはかきつくしがたし。御せいにつくりあはせたる詩には。別祿など侍もふるきためしなるべし。廿日比には當代はじめたる賀茂八幡の行幸とてひしめく。その日にもなりぬれば。上達部うへ人の馬。くら物のぐまでいみじくとゝのへたり。將軍大將かけて本ちんにぐぶす。いとめづらかなるためしなり。帶刀などいふ物四五百人。えならぬもののぐそくをつくして照かゞやく心地ぞする。建久俊房にかまくらの右大將東大寺供養の行幸にもまいりたりしかど。前官に



て本ちゃんにはさぶらはざりしに。此度の儀いとめでたし。はしがための官人さゝ木何がしとかやうけ給はる。そのいでたちまたいはむかたなし。御みちのほど御舟わたりのふながくなどいとおもしろし。おとこ山の花さかりなれば。かたぬぎたるかたまひの袖にちりかかれる雪。うちはらふすがたどもも。わざとつくりいでたるやうにいとおかしくみゆ。神の心もなびきつべき花のしらゆふかけそへて。けふの御願。かすくめでたし。賀茂の行幸やがてこの月なり。そのしきまたむかしにもたちまさりて侍し。やうく青葉まじりの比なれば。そのかみ山の本だち。松もさくらもにしきをこきませたる心ちして。おりからいとおかし。たゞすのもりにひきならべたる馬車。さながら繪にかきいだしたる心ちぞするや。三月のすゑやうくはなはちりがたになり

ぬ。この比はさりぬべき公事もはてぬれば。御まりのあそびあり。あげまりは。朝まりには難波うけたまはる。ことくしく申たて侍り。二そく三足のせちも。けふならではとぞ見え侍し。おなじき夕まりには。御子左の家の人。あげまりをうけたまはる。おもひくふるまひいとおもしろし。けふは御たち大殿左のおとこ。左右大將をはじめて。此道の人々上八人なり。賀茂の者ども上手ばかり四五人をえらばせ給。つゆばらひより數おほくあがりて。風のどかなる日なれば。空も心あるこゝちぞするや。さくらはよきてこそなどおもふ所ある人も有べし。なよ竹のあぢきなきもの思つきたる色好どももおほく侍とかや。中々何ごとの見ものよりもたちこみて所せきまでみゆ。大殿。左右大將の隨身さぶらひてまりをとる。雑人などはらひたるも。いとおりがほな



り。かすたび／＼あがりぬれば。まりうくる人の作法などさだめてやうあらんかし。やうやう夜になり行ほどにことはてぬれば。名殘戀しき心ちぞするや。石清水の臨時祭はつねの事なれど。これもことは舞人のしやうぞく馬がたの障子のほとりにかけわたして。かすかすまいりあつまりて。御せんにて給はる。ふるきにかへる事どもおほかるべし。庭の座五こんてんさんの儀あり。北のちん。舞人の馬ものゝぐまでも。いときら／＼しうみゆ。夜にいらぬさきに八幡へまいりつくやうにいそがせたまふなるべし。さても大内はたえて久しくなり侍うへ。この比はさうおうせざれば。閑院のさしづに東宮の御かたをそへて。ちかく貞和にさたありしさしづ。めし出してつくる。四月には遷幸有べしとて。將軍造國司うけたまはりて。西園寺大將奉行す。建長文保の

例にまかせてよろづさた有。三月つごもりごろ。女御入内の事有。よろづ上東門院の例にたがはず。大殿より女房四五十人。心ことにえらばせ給ふ。その夜のけしきは例の事なれど。大殿をはじめて。しんぞくの拜にたゝる。ろけんの日のしき。御書のつかひ。御ふみうたなど。いとやごとなき事おほけれど。さのみはかきつくさず。四月十日比。やがて立后あり。御てうど。ふかき寶藏よりめし出され。月次の御屏風の下繪。色紙哥の心ばへなど。ことにえりとゝのへさせ給ふ。三ヶ日のぎしき。れいの事なれど。いとおもしろし。えぐちかんぎきの君どもしもつ所にまいりあつまりて哥うたひあそぶ。わかき上人（僧號）のめでもてあそぶさま。いとおかしき事どもおほかり。五月の節よりさきにとて。新内裏のせんかうあり。よろづ文保の例にたがはず。その外なをめづらかな



る事どもくはゝるべし。内裏は東<sup>山イ</sup>しい閑院の  
さしづに殿二三を猶つくりくはへらる。承明  
建禮門などをぞ立られたる。節會などのため  
にやとおぼえたり。南殿のしつらひ。賢聖の  
障子などめも心も及ばず。櫻。橘。竹の臺など。  
草木にいたるまでも。昔にかはらずうへさせ  
給。御溝水もの清くながれて。清涼殿のありさ  
まなどむかしおぼえたり。三ヶ日の儀はてぬ  
れば。やがてせんかうの旬の儀ありて。はじめ  
て南殿にいでさせ給ふ。官奏には左右臣さぶ  
らふ。つねの事なれどさま／＼のそうなどい  
とおもしろし。さても四月一日。二まうの旬い  
とおもしろし。あふき給ふ内侍のさまなど。お  
りからおかしうみゆ。まひはくはうじよなど  
いふひじどもなり。大臣以下のろくをもわた  
きぬなどあるにまかせて給はず。これも近比  
はたえたる事なり。まことや賀茂のさい王は。

ちか比<sup>たえたりつイ</sup>なき事なりつるを。此御代にまいらせ  
給。この月は御稔のぎしき。一條の大路たちこ  
みておもしろきものみなり。大將などわたる  
ほど。さゝのくまの心ちして。あぢきなき物  
見車どももおほかるべし。むらさき野の物見  
牛このむ人々。いと／＼おどろ／＼しくをひ  
のゝしる。あらぬさまの車あらそひもおりか  
らいとおかしくみゆ。關白の賀茂詣もことし  
はじめてあり。殿上の前駆四五百人むかしに  
かはらず。これもいとおもしろき見物なり。八  
日の灌佛などはれいの事なればかきとゞめ  
ず。上達部女房のふせなど花の色々をつくし  
ていとおもしろし。五月五日は武徳殿のむか  
しの跡をたづねて。節會走馬などあるべし。菖  
蒲のかざりくす玉など用意する人々ありし  
かど。さのみ久しくたえたる事をこなはせ  
給はんもとて。ことしはやみぬ。左右近のあら



てつがひなどは。大將むかひていときら／＼しくをこなふ。ひをりの日の右近のばい。心ある女車どももおほし。寂勝講いつもの事なれど。山寺などのがくしやうどもをすぐられたれば。論議のさまなどいときゝ所ありてたうとし。賑給の定使所々〔に殿敷〕むかひて。こくさう院の物どもみなくたまふ。民ども手をあはせて拜もいとことほりなり。月次神今食に行幸ありて。よろづ式文にたがはずをこなはせ給いとめでたし。六月廿日ごろ。いとあつき比なれば。いづみもてあそび給ふとて。二條の家に幸有。御かたがひのよしなり。あるじの殿だちぬけいめいせらる。山のすがた。水の心ばへいとおもしろし。東にたかき松山あり。山のふもとよりわきいづる水のながれ。松のひびきをそへていとすゞし。水のうへに二かいをつくりかけたれば。やがて座の中をながれ

行石間の水。さながらそでうつばかりなり。ながれの末の池のすがた。入江々々にしま／＼のたゝすまぬ。いとおもしろく。西のながれのすゑに山を隔て五尺ばかりの瀧落たり。瀧のうへにつくりかけたる二かいのさまなど山里めきていとおかしう見ゆ。池の水には三の舟をうかぶ。詩哥管絃なるべし。まづ哥の舟にめされて御あそびあり。あるじの殿。左右の大將など御ふねにまいる。詩の舟には太政大臣のる。管絃は右大臣以下のる。池水三まはりののち。また管絃の舟にめしうつりて御樂あり。そののち一日の殿におりさせ給て。なを御遊。簾中の物のねどもいとおもしろし。詩哥のひかう夜に入て。やがてつり殿に御椅子を立てつかせ給。水の流にさか月うけて詩哥つかうまつる。曲水の宴の心ちぞするや。ひ水すいばんなどまいりて。よ一夜あそびあかさせ



給。かつらのうがひかゝりともして。にし河の  
あゆなどもてあそばせ給ふ。あくるあした。北  
の馬場のおとゞにて殿上人すいじんのけい  
ばあり。腰輿にてば、殿へ行幸あり。殿以下み  
なあゆみつかせ給ふ。ばゝのやはにしひん  
がしへおかしくつくりつゞけたり。ひんがし  
おもてにはまりのかゝりあり。いとすゞしき  
木だちものきよげに。塵もすへぬしらすに。あ  
をみわたれる柳さくらの夏ふかき木だちも  
おりしりがほなり。松屋の殿上人どもおもひ  
おもひに出たつ。けいこのすがたいとおもし  
ろし。きい馬はてぬればやがて御まりあり。弘  
長嘉元の例にまかせて。あるじの殿あげまり  
をつとむ。難波。御子左の人々おもしろき足  
ども。数をつくしておもひやるべし。月になり  
ゆくまで数おほくあがる。はてぬれば。また  
いづみのやへかへらせ給。今夜はまた内々の

詩哥あはせなり。いとおもしろき女房の哥ど  
もを名ある文人に合らる。三百番の判者をさ  
だめられて。こと葉をかくべきよしきたあり。  
これもいみじきすゑの代のもてあそびもの  
ならんかし。けふ三ヶ日御とうりうさまゝ  
のことをつくさせ給。さてもこよひあるじの  
殿。天盃を給はる。御かはらけ給て。みぎりに  
おりて舞踏す。直衣のすがたいとめづらし。家  
禮の人々卅人ばかり地にくだりゐる。いとび  
びしくぞ見えし。家のしやうに二位三位など  
する女房もあまたあるべし。夜に入て上のし  
むでんよりかへらせ給。御馬十疋うつしをき  
てたてまつる。その外御をくり物。くだくし  
ければ中々にしるさず。七月にもなりぬ。吹た  
つかせのけしきもやうく物おももしろき比  
なり。七日は七百首の詩。七百首の哥。七調子  
の管絃。七十韻の連句。七十韻の連歌。七百の



かすの鞠。七こんの御酒なり。さま／＼れいの事なれば注に及ばず。此月はすまふの節あるべしどてひしめく。使諸國に下てすまふ人やう／＼のぼる。いとめづらしき事なるべし。嘉應以後はなき事とぞうけ給はりし。十六七日のほども仰あり。

廿日あまり。うちとりのしきいとおもしろし。やがてめしあはせ。南殿にいでさせ給。左右の大將奏とりなどはなやかなる事おほし。まけのかたの大將かへりあるじまうく。これもこの比はなき事なるにや。關白大臣などすまふ人めしてきやうちし給人おほかり。この比のもてあそび。またこれのみにてぞありし。祈年こくの奉幣。仁王會など春にかはらず。

八月釋奠。これも上卿左大臣にてはれの儀をこなはる。宇治の左府申さたの後はたえて久しくなるにや。十一日官の定考あり。そのしき

れいのことなり。この月は放生會などいふ神事。みなしきのまゝにをこなはせ給。さてももち月の御馬。今年はまだことのおくのへいの馬ども四五さいの行末はりうにもなりぬべきものどもなり。人々あらそひとるもらうがはし。よきをすぐりて左右馬寮に十疋たてら、よく／＼かひいたはるべきよしさたあり。

九月はれい幣に行幸あり。その儀おもひやるべし。ことは齋宮ぐん行あれば。野の宮の秋のけしき。むかしおぼえたる事どもおほかるべし。群かうの日。大極殿のぎしき。わかれのくしなどさし給ほどおぼしめしいづるためしもありけんかし。長奉送使には權大納言つかうまつる。伊勢路のおかしき心ばへなど。さだめてこの人しるしをかれ侍らんかしとゆかしくぞおぼえ侍る。十月一日には句の儀。四月におなじ。けふはひをといふいを公卿に



たまふ。かくなどいとおもしろし。又弓塲はじめあり。れいの事なれど。これも公卿殿上人。弓にたへたる人おほくて。賭射つかうまつるいとおもしろし。この月にはさしたる公事などもなければ。きくもみぢにつきておかしき御あそびどもあり。十日あまりに菊あはせさせ給。やがて哥を合らる。天曆の例にたがはず。清涼殿にいでさせ給。左右のねん人。かんたちべ廿人ばかりさぶらふ。けふの判者。天徳建仁の昔のあとをたづねて大閤うけたまはる。その道にはいまだ入たゝねど。おほやけわたくしの嘉例なるべし。左右のすばまのだいしろがねこがねをつくし。哥の心ばへなどさまざまおかしく見ゆ。天徳にはかねもり。物やおもふといふ哥をつかうまつりて。日ぐらし陣にさぶらひけるが。此哥かちたるよし聞て。やがて拜して。のこりはきゝてもよしなしとて。ま

かりいで侍けるとかや。けふのうたの中には。判者。天氣にゆづり申事おほし。いかなる秀逸にてか侍らん。たづねて書べし。かちかたの舞などあり。夜に入て御遊いとおもしろし。

十一月一日ごろより五節のひしめきまた世のいとなみに見えたり。新嘗祭の行幸。しむ膳の儀。ことにとゝのへさせ給。大みのやに基うちなどふるきためしいとおもしろし。中のうしの日は五節のまいりなり。公卿のも受領のもみなみめかたちをえらばせ給へば。えならぬ舞姫どもおほし。やがてうへ宮仕。さいはひひきいづるためし。いとおかしき事どもなり。御前の心見御覽の日などはへくしくもてなさせ給。東宮中宮のえんすいとおもしろし。色々のくしどもかざりたるたななど心もことばもおよばず。この月のまつりくみなこう行せらる。賀茂の臨時祭。またむまの時



にはじまる。大臣以下廿人ばかりさぶらふ。けふは三こん也。十二月。月次神今食は六月にかはらず。佛名などいふ事はいたく見所なき事なれど。近衛の陣のかへなしなどいふ事。ふるき跡にかはらず。大將のふるまひなどいとおもしろし。僧どもふすまわたなどかづきて。心ちよげなるさまいとおかし。この月はやはやけ事しげくて。やう／＼春のいとなみにまぎれて。よろづ かきつけ侍らず。内侍所の御神樂。所作人などことにえらばせたまふ。さても明年の正月には朝賀あるべしとて。としのうちよりひしめく。擬侍従の定ことしはまことの親王など入たてまつる。近ごろは面かげばかりにて侍つるに。よろづ正暦の例にまかせてさたあり。さても一とせの事どもをもらさじとかきつけ侍ほどもに。いとくだ／＼しくなりて。ことの葉もつゞかず。このおもかげは。

としごとの事になりて。卅一年御位をたもたせ給ふありがたきためしなるべし。のちのさかの院にも立かへらせ給たる。なをゆく末の御さかへおもひやるべし。大殿も建久元弘の例にたがはず。三度のさいにんして。世のさいはい人のためしにいひたてらる。宇治の關白。京極の大閤にもたちまさり侍べからんかし。まことや殿上のこう行は藏人頭ことに申さたす。毎日二たびの日給ふるきが。ことし上日。あきらかにふだにかきつけて。殿上人のほうこうのじやう儀によりて。皆官爵をさづけらる。御せむなどにも公卿陪膳につねにさぶらふ。たきぐちのもむじやく。左右近衛のとのぬ申までもふるきあとにたがはずこう行せらる。月ごとの月そう。人々の上日かくれなければ。われをとらじとつかうまつる人々おほかり。三どの議定。庭中雜訴などの外に神



事。佛事。諸道こう行の評定りんじにあり。また御文談御文。史書全經。その道の人々まいりてをこたらず。記録所には日ごとのちやくたう。一日もかきたるものをばやがてしゆをのぞかる。明經明法の輩。記録所にてつねに本書をかうす。簾中にてきかせ給。道のこう行。人のけいこ。いづくにかくれあるべしとも見えす。さいがくはかくしからぬ輩は。はなしろめておこがましき事おほかり。さてもく法勝寺の九重のたうは康永光明にやけたりしをつくりたてゝ供養せらる。建仁土御門の例とぞきこえし。行幸行啓ありて。公卿卅人ばかりさぶらふ。そうらいには大臣三人ねる。これも建久東大寺供養の例なるべし。この御塔供養をさせたまひぬる事まめやかにめでたし。佛法王法の興隆とぞ世の人のゝしるめり。天龍寺供養又康永の例。たがはず。事おほければさのみは

かゝす。いつの比ぞとよ。白河院承保の例に任て大井河の行幸付き。鷹にかゝづらふすい身。左右の大將をはじめて。いとめづらしかなる事なれば。けふをはれといろくのをめしやうぞく。からやまとの色あひをつくしたり。御みちには都よりさが野まで。秋の花紅葉をわざとこきちらせる。にしきのうへをあゆむ心ちぞする。左右の鷹飼。かり衣のすがたいとおもしろし。おりしもうち時雨たる雲まの夕日に。こがね色なるきじのたちのぼるをいとしろきたかのとりて。ほうれんのうへにゐたるさま。延喜の白せうがふるまひもかくこそといとえむにめも心も及ばず侍る。大井川のせうえうの和歌序は左大臣たてまつる。承保に土御門の右大臣の名句どもかゝれたるにもなをたちまさりて。世のもてあそび物。人のくちずさみになり侍りけん。むかしはつね



のことなりしを。天神なども申とゞめさせ給ひしかば。まれなる事に侍しを。白河院の御代のおさまれるあまり。野の行幸までもはへばへしくさたありしとぞ。このたびもうけたまはり侍し。あさ光などいひしみめよき大將などはちかごろはなかりしに。けふは左右大將いづれとわきがたく。みめかたちすぐれて見ゆ。源氏の太政大臣。大原野の行幸のためし。おもひいでゝ。烏たてまつる人もあるべし。きりふの岡の千代のためしをかけたることのはども中々とてかきとゞめず。みなをしはかるべし。行幸は春日。日吉。稻荷。祇園。北野。かずをつくしてとしぐの御願どもはたさる。いまはむかしよりまれなりつる事どものこりなくかすをつくして行はせ給ひぬれば。家のさいかく日記どもも末の代のかゞみともなり侍べきにや。すべてよろづの色香をも

はへぐしくとりなし給ふ。つねは源氏。さ衣。伊勢物語やうの代々のふるき事までも御だんぎなどあれば。女房のさえもあらはれ。いとはへぐしく雲のうへなり。さればをのづからたちまじはれる人々も。みななさけ有さまにおかしき事どもおほかれど。かず／＼申のべがたく侍り。かゝる思ひのまゝの代に生れあひぬる事をわれも人もさいはいとおもへり。千代萬代をかけて。すゑの代までもいまの御時をためしにひきたて申侍べしとぞ本にはかきて侍し。

この日記は春日の神の御告なれば。見む人はよろづのねがひかなひ。思ふ事あるまじと人のしけんにて侍とかや。

本云

右一帖者。一條兼良公以御自筆寫之。數校了。

正保二年仲春日

右おもひのまゝの日記以屋代弘賢藏本及扶桑拾葉集校合畢



群書類從卷第四百九十

雜部四十五

眞俗交談記

建久二年九月十日自十至甲同日夜今記之

昨日重陽少會如形執行之。自長和親王時。此御所舊例每良辰要被展會席之事。代々无闕怠。然間相語和漢好士。遂其節者也。會式日者。正月七日。但每年令修公家御祈事有之。或門下輩令參勤。後七日修法之事。當時事其營。故。改七日。用三十五日。且爲三聖。三月三日。俗呼名三。廟手向也。正月七日名三承陽會。五月五日。名端午。又曰三絲節。六月十八日。名三旬曲會。仙。七月七日。名乞巧祭會。八月晦日。名迎涼會。迎涼。涼藻掛簾云々。九月九日。號三重陽會。又號三三會。九月十三夜。名三桂。開會。延秋會云々。一詠再吟者也。昨日。會衆內少々被拘留坐談座。權僧正覺成。前權僧正定遍。仁性律師。覺秘律師。澄覺阿闍梨。心

覺阿闍梨等。權中納言親經。參議資實。從三位爲長。大藏卿有家等也。予取條以問。

一王城異名非一。其內號九重之意如何。親經云。

三神山各有三壺。三々九也。摸彼故名。帝都於九重云々。資實云。北辰所居宮名紫微。此宮有

九位。九位者九極也。極則九重也。是故帝臂。北辰城。名九重云々。爰勸修寺成實權僧正就曼

茶羅寺事企參之間。先揖入談語席畢。頗適意

月面。感快風詞。其勢氣相同。野馬屬草。山猿抱

樹者歟。忘却所望。而盡日不念退出。而及晚

寔道好士哀覺倚。倚覺。

一禁裡記錄。近延久長親王。云。御鈴緒盡事。自古繪所一



人相傳之。每盡工不知事也云。其事如何。滿座縑素共不答。皆合日良久。然問予重爲問。資實向親經致小禮云。凡此條有職事。號秘旨其一也。御鈴緒畫事。曩祖有國記云。仁壽殿北面西隅。御格子間珠簾有件緒。件緒練絹空色染之。北極圖繪之。或記七星畫之。又九星之云々。家記九星也。其形好現見星。以胡粉圓形畫之。白雲上列纏也云々。親經所存无相違之由。令指南了。予重爲問。被畫北極圖御用如何。資實暫不申其旨。有斟酌氣。親經一具可被申之由。被加誘詞。資實重答云。天子每宵令拜北辰。給然陰夜不露之故。拜彼畫圖星宿御也。御指令之時。被召伯輩爲御容代令勤此事給。若后妃令勤其御代給事有云々。親經爲長等。頻守資實面。有美氣容色。座客各低耳聞之。

二間御鏡奉拜給日時事如何。親經云。每月十

一日辰一點。奉拜之給。奉聞御箱事伯輩役也。大神宮法樂御所作有之云々。重以問。彼御鏡奉拭事。每月有式日哉。親經。資實。爲長等未存知之由。一同申了。其以下无知輩。自答云。嵯峨天皇御記云。每月朔朝。御代鏡奉拭之。伯督所役也。着淨衣用覆面。但正月分朔日无其事。除夜聊勤仕也云々。以上。

一神祇官八神鎮坐事。八神由緒如何。資實云。有國記云。八神者。八埏鎮護尊神也。又天子八卦掌一年奉守神明也。伏羲氏時。龍背八卦起帝運之始也。神武天皇爲人代。上奉崇八神給其由一揆也。八卦者八埏也。所謂守乾卦運。守坎卦運。守艮卦運。守震卦運。守巽卦運。守離卦運。守坤卦運。守兌卦運。八神也云々。親經問云。此八卦八段以何段爲首哉。資實云。說々不同也。易八卦者。自乾皆連始之。左傳八卦自坤皆斷始之。乾坤者。天地陰陽方也。乾皆連陽



也。坤皆斷陰也。乾三爻者。是天地人。三才始彰事自此方。又自離中斷始之。是宿曜家說歟。此一卦。各具八郎六十四卦也。是六十四運人卦也。凡人身有八神。配中八卦主也。其八神加魂神時。九神也。今八神殿者。此由也云々。

一賀表松筆事。此木自何山取之哉。資實等閉目不答。頃之爲長云。此松自三笠山取之云々。雖然菅淳茂。天曆賀表。蒙勅勤此事之時。取之所松枝造筆書之畢。當家守此記云々。資實尋其所之時。爲長以扇二三度打座前。潛嘯不答。予頻雖尋之。終以隱密止問。資實云。凡取松。在所非一。春日山。男山。加茂山。北野等也。然而以春日山爲其始。匡衡記錄男山松取之云々。明衡記。自春日山取之云々。爰敦光背明衡例。自賀茂山取之。則鳥羽院御宇天永元年正月御元服。勤此事畢。依別勅。自賀茂取之云々。

一神泉苑廻地十町內。令京職栽柳。町別七株云。必栽柳事。其由如何。爲長云。栽柳事。本文非一。先柳者陽樹也。典春方池畔要栽柳云々。文。神泉池龍神勸請所也。故有便者歟。錦繡記唐云。青龍降種。化爲柳云々。然間被栽柳也云々。資實云。金谷廣典云。无水所栽柳。然後歷三年。引水脉云々。文。神泉自元飽水。水龍王德也。龍王移他所之時。此池隨而水可无云々。取意。雖爲龍緣木。柳不可勝龍。龍去水柳其枯竭。然者无用歟。栽柳事。自此之外尙有深意哉。凡五龍神時。水龍者方冬。柳者春木也。木龍不隨水歟。龍柳者方木龍。今神泉龍王。水龍也如何。爲長答云。今雖有其謂。始終論之可一值者也。五龍時。青龍掌木。黑龍掌水。神泉苑龍王者水龍也。柳者青龍種木也。水龍木龍雖各別。木水是一也。其故五龍有相尅相生義。水生木云々。然者木龍水龍。全非外配。資實云。



以相生義。水龍池邊栽木龍柳事。尤可爾者歟。五季配物錄唐本云。木以水爲命。春水王氣移木。冬木氣還水云々。文。又左氏云。山有水見木知云々。水與木其氣可同也。企淺難事。爲聞深意也。就栽柳猶有深義哉。爲長小禮不答。資實對親經。又以問无答。資實云。嵯峨親王御記云。神泉苑栽柳事。叡慮被思。食深旨者也。善女龍王勸請事。弘法炎旱御祈之時也。天皇與弘法有御深約。曰。治國先以民。育民先以穀。育穀先以雨露。穀者木德也。朕木德。及于國土事。依師加持。此池龍神移留事。併師法水故也。然以柳栽此岸。可當木德指掌者也云々。雨僧正。神泉御修法之時。竊取件柳枝爲散杖。此事內々伺叡慮云々。記錄被載之。是僧正定被辨存舊事。故歟。爰成寶僧正暫守資實面。爲粧淚浮感作。奇異思。其時予彼資實。當時隨保壽院僧正。深仰密教。先〔无款〕貳心之由語。

成寶。彌僧正不堪極感之氣也。

一禁中制律云。杖一百云々。如何。親經云。凡登高臨禁中者。杖一百。又宮牆四面道內。不得積物。其近宮闕。不得燒臭惡物。又不得通哭聲。若犯此四者。杖一百可當之云々。

一鬼間繪事。人不見之。先年相尋繪所之處。固辭申。終不顯其繪樣。如何。爲長云。凡此條。自古至今雖聞鬼間名。未見其消息云々。秘藏故歟。然存人尤稀也。不可言上之由辭申。賦目於兩卿。親經資實同辭之。予自答云。鬼王三面三目有一角。其色赤色也。間良方畫之。形如迹去勢。又勇士一人提劒如追鬼王。願勇士走形也。此時爲長云。朱雀門鬼者。鬼間鬼王所變也云々。彼鬼青色一面也。長谷雄卿記有之云々。赤色。青色。異說也。後可決之。

一朝覲行幸之時。御引出物用和琴一張給事。自何御時始哉。資實云。延喜二年醍醐天皇仁和



寺行幸御時。法皇御對面後。茶二盞有御勸。和琴一張爲御引出物令進之給。歸幸後。彼和琴被送進掖主畢。自爾以降不改其御例。每度如斯云々。是又有國記載之。爰爲長應。當今勅喚。忝退出。親經卿又貽老。長座頗不堪之間。辭西都五宮竹園。歸東洛六角蓬屋有家。稱有先日約期之文會。早拋。今夕文詞之錦談。資實一人投轄於井中。留之。舉鞍於軒下不免。又極位宿老忘寺院兩三輩。漸欲演宗家故實之處。予暫請衆。問大內配圖。

皇城有名如何。資實无爭。臣答云。大唐西京。皇城在京城之中。東西五里。一百一十五步。南北三里。一百四十步。今謂之子城。南面三門。中曰朱雀。左曰安上。右曰含光。朱雀正南當明德門。正北當承天門。門外橫街正東直春明門。正西直含光門。東面二門。北曰延喜。南曰景風。延喜門。卽承天門外橫街東直通化門。西面

二門。北曰安福。南曰順義。安福門西直開遠門。其中左宗廟在安上門內之東。右社稷在含光門內。大唐六典又宮城在皇城之北。南面三門。中曰承天。東曰長樂。西曰永安。其北曰大極門。其內大極殿。朔望則坐而視朝焉。有東上西上二閣門。東西廊。左延明。右延明。一門次。北曰朱明門。左曰度化門。右曰肅章。門未明殿之西曰暉政門。度化之東曰武德西門。其內有武德殿。有延興殿。又北曰兩儀門。其內曰兩儀殿。常日聽朝而視事焉。兩儀殿之東曰萬春殿。西曰千秋殿。兩儀之左曰獻春門。右曰宜秋門。宜秋之右曰百福門。其內曰百福殿。百福殿之西曰承慶門。其內曰承慶殿。獻春門之左曰立政殿。立政之東曰大吉門。其內曰大吉殿。兩儀之北曰甘露門。其內曰甘露殿。左曰神龍門。其內曰神龍殿。右曰安仁門。其內曰安仁殿。又有興仁。宣猷。崇道。惠訓。昭德。安禮。正禮。宣光。通福。光



暉。嘉猷。華光。暉儀。壽安。緩福等門。薰風。龍  
 日。翔鳳。咸池。臨昭。望僊。鶴羽。乘龍等殿。凌  
 雲。翔風等閣。大唐六典。大明宮在禁苑之東南。西接  
 宮城之東北隅。南面五門。直南曰丹鳳門。東曰  
 望僊門。次曰延政門。西曰建福門。次曰興安  
 門。丹鳳門內正殿曰含元殿。階上高於平地四  
 十餘尺。南去丹鳳門四百餘步。東西廣五百步。  
 夾殿兩閣。左曰翔鸞閣。右曰栖鳳閣。夾殿東  
 有通乾門。西有觀象門。其北曰宣政門。外東廊  
 曰齊德門。西廊曰興禮門。內曰宣政殿。殿前東  
 廊曰日華門。門東門下省。省東南北街。南直含  
 耀門。出昭訓門。宣政殿前西廊曰月華門。門西  
 中書省。省西南北街直昭慶門。出光範門。宣政  
 之右曰東上閣。西曰西上閣。次西曰延英門。其  
 內之左曰延英殿。右曰含象殿。宣政北曰紫宸  
 門。其內曰紫宸殿。卽內朝正殿之也。殿之南面紫  
 宸門。左曰崇明門。右曰光順門。殿之東曰左銀

臺門。西曰右銀臺門。次北曰九僊門。殿之北面  
 曰玄武門。左曰銀漢門。右曰凌霄門。其內又  
 有麟德。凝霜。承歡。長安。僊居。拾翠。碧羽。金  
 鸞。蓬萊。含涼。珠璋。三清。含氷。水晶。紫蘭等  
 殿。玄武。明義。大用。等觀。鬱儀。結麟。承雲。修  
 文等閣。禁苑在大內宮城之北。北臨渭水。東  
 拒瀋川。西盡故都城。其周一百二十里。禽獸蔬  
 菓莫不毓焉。南面三門。中曰定鼎門。右曰長  
 夏。右曰厚載。東面三門。中曰建春。南曰永通。  
 北曰上東。北面二門。東曰安喜。西曰徽安。西  
 四門。南曰迎秋。次曰遊義。次曰籠煙。北曰靈  
 漢。東京皇城在都城之西北隅。南面三門。中曰  
 端門。左曰左掖。右曰右掖。東面一門。曰賓輝。  
 西面二門。南曰麗景。北曰宣輝。東城在皇城之  
 東。曰宣仁門。南曰承福門。皇城之內。皇宮  
 在皇城之北。東西四里一百八十八步。南北二  
 里八十五步。周四十三里二百四十一步。南面三



門。中曰應天。左曰興教。右曰先政。其內曰乾元門。東廊有左延福門。西廊有右延福門。興教之內曰會昌。其北曰章善。先政之內曰廣運。其北曰明福。乾元之左曰萬春。右曰千秋。其內曰乾元殿。則明堂也。殿之左曰春暉門。右曰秋景門。北曰燭竜門。明福之東曰武成門。其內曰武成殿。明德之西曰崇賢門。其內曰集賢殿。武成之北曰長壽殿。集賢之北曰僊居殿。其東曰億歲殿。其東曰同朋殿。其內又有觀禮歸義。昭成。光慶等門。延祥。延壽。觀文。六合等殿。宜春。僊居。迎祥。六合等院也。其西北出洛城西門。其內曰德昌殿。北曰儀鸞殿。德昌南出曰延慶門。又南曰韶暉門。西南曰洛城南門。其內曰洛城殿。又曰勛羽殿。上陽宮在皇城之西南。南臨洛水。西拒穀水。東面卽皇城。右掖門之南。其西有西上陽宮。兩宮夾殿。水虹橋以往來。已上然後止。辭畢。始中終无思案形。懸河流水。語鳥巧

吾何如之。欲記更迷翰。再問。重染墨。希代珍事也。寔有國再誕无疑者歟。自此以後。發出世談話耳。

爰資實申云。乍纏白衣。放逸之業。塵列纏帶。高德之會座事。且悅宿執之成分。且恐冥睞之照覽。倩以大師天長御記云。縱雖爲在俗。於至卿大夫位之輩者。其機求我教。敢莫恠之。則可爲輪王所屬之受者云々。文。然今日蒙令免。可言上不審之由申之。予惟延久比江都督建久今藤相公。誠身在俗塵。心在眞實者歟。不耐感。无左右授許畢。

一資實云。无畏三藏一行阿闍梨者。非東寺法流祖師。然何相州號八祖哉。予答云。於八祖有二種異。所謂付法。住持是也。付法時。除无畏一行。用元初大日金薩也。住持時。除遮那薩埵。用三藏闍梨也。其上大師請來大日經疏者。无畏講釋。一行筆者。二十卷疏也。然者半可稱祖



師歟。御傳云。般若三藏吾祖師也云々。華嚴經御相傳。三藏尙以被遊祖師畢。況於大日經疏師哉。

一資實云。小野廣澤四度御次第等作者如何。予云。廣澤四度次第者。寬平聖主御作也。但護摩私記非法皇御製。十八通兩界次第等也。以眞雅僧正護摩記法皇令用之給云々。然今當流所用護摩私記者。三御子作也。彼護摩次第。本尊有異。所謂不動與大日是也。予流以大日爲本尊。

一資實云。大師御時四度御次第有无如何。予云。御作次第乍四度有之。梵本也。其御次第當寺經藏有之。

一資實云。小野流四度次第何師所造乎。成實僧正云。如意輪次第般若寺僧正作也。兩界次第石山内供作云々。但說々不同也。護摩次第延命院僧都作也。自行三段次第。又五段次第。六段次

第。皆彼作云々。

一資實云。小野廣澤兩流御聖敎事。小野聖敎。皆被納曼茶羅寺經藏畢。後被遷渡鳥羽寶藏云。其目錄悉江中納言匡房卿東秘記乙載之畢。然間小野重書所在无。不審者也。當寺御經藏御書等目六未拜見之。是非本經木輪等錄事。只自大師以下師々所調書籍事也云々。

予云。委細目錄不能具答。先當流相承重書者。根本三合三十帖御筆本也。但三合三十帖乎。自眞雅入滅後。相隨同法南池院源仁受法了。四合書。眞雅御手。益信相傳之。眞雅手。源仁相傳之。源仁又相附聖寶了。自大師眞雅。自眞雅源仁。自源仁益信相傳也。又

大師四合御聖敎聖寶相承之。爲小野本書歟。又大師十七帖祕法清涼殿御記被載之。令加釵點給云々。貞觀寺僧正相傳圓城寺僧正。是又當流相承書云。爲之根本書籍也。又大師御在唐御受法記錄號大雙紙一帖。同當流相傳也。後師書籍等代々有之。



二三合。唐櫃。

一卅合。草子。

一十七帖。塗宮。

一十卷抄。白表紙。塗軸。

一十四卷抄。番表紙。塗軸。

一六卷抄。白表紙。唐木軸。

一七卷抄。黃表紙。水精軸。

已上草子。

一長和記。匡房蒙三大御室仰調進畢云。十七之卷无軸表紙也。

成就院抄。五十帖。唐折表紙。杉小辛櫃。

範俊僧正薄香。唐櫃。二合。

觀音院僧都聖教。草子。六合。

堀池僧正聖教。腹籠。囊一。

勝憲僧正書籍。辛櫃。二合。

覺印阿闍梨自見抄。廿卷并記六卷。毛皮囊一。

惠什阿闍梨聖教。草子三合。依罪被召。及書籍云々。

此外高野親王御自筆聖教二合。又愚抄就流之。

草之辛櫃四合。塗宮二合也。

已上聖教。皆是事相御書籍也。

資實申云。委細御目錄。後口可下給也。載家

記備後證云々。

資實云。如寶尊勝。或如法尊勝書之。法與寶字

同。以爲本哉。成實僧正云。凡此二字任意諸師

用之。但眞實正傳寶字也。雖然常用。法字之

間。師々如法書之宜也。於寶字者。深奧習有

之。如寶愛染。至極習事也。

資實云。華藏院三品親王目錄中。三无木次第一

帖云々。尤不審如何。覺成僧正云。南向事三南方

八卦圖也。无木者向也。三爻中爻不續。曰離中

斷云々。故爲祕南向。如此造名字歟。

資實云。孔雀經御修法記錄云。伴僧經机前。各

三木丁一脚。置燈器。高二尺許云々。蓮臺寺僧正

記也。餘師多分用小燈臺。又云。人記錄皆小燈

臺也。或陳座三木丁。又後七日香水机三木丁。

眞言院建立之。此外无用之如何。覺成僧正云。古樣



宜云々。

資實云。承安二年後七日記云。阿闍梨與威儀師懷承記。聊有相違。其相違者。阿闍梨記云。退紅仕丁云々。懷承記云。赤衣仕丁云々。退紅者紫歟。然者赤衣仕長如何。予云。退紅仕丁者。着紫仕丁勿論也。又赤衣仕丁者。着紅仕長也。名赤衣丁是也。不可云赤衣事歟。退紅仕丁者。古樣親王家之外不用之。精華家人用赤仕長云云。平黨用白仕長也。但當世立有職輩退紅仕長者。着紅也云々。或人云。紅疎色云。退紅云々。荒染讀也。然紫與紅共可有退紅名者歟。又大藏卿爲房記云。帶紅仕丁云々。不審。退紅也。定有所存者也。禁裡下仕當時着紅號退紅。此相論未決之。彼不審。予年來蓄懷也。紫有退紅云名之條顯然也。又紅荒染云。退紅事可有之。退紅安良曾免訓故。又或記云。義孝少將着退紅二重云々。是紫二重而非紅。於退紅有見合古

今記錄。甚漫者也。所詮如此於有異儀事者。自昔難決事也。只守一記用之。更无其難歟。雖然予意。退紅仕丁者。着紫仕長也。禁裡親王家用之式也。赤仕丁者。着紅仕長也。執柄以下清花族可用之。又禁闕竹園。赤仕丁可有之。赤仕丁事書退紅。紅條雖有一說尙不宜歟。如爲房卿記可書帶紅也。彼承安阿闍梨者。着紫仕丁不可召具之仁也。是則紅云。退紅。一義存之歟。又威儀師記書赤衣仕丁。无謂者也。乍同事。赤衣言有憚于仕丁事也。是可申仕長云々。

仁海僧正傳受集云。眞言行者。佛菩薩明王天等及雖爲何法。不覺本次第之時。指寄而則可修用意有之。謂以一印一明可渡用諸尊也。其印外五古明佛眼咒也。爲本尊加持印言可修之祕云々。又勝覺僧正內祕抄云。諸尊通用印明者。外縛印金大明云々。又成就院御傳云。諸



尊通用印云者。金掌印胎大日言也。名无所不  
至明云々。此三師傳相違。尤不審。見本經本軌  
說歟。又師說歟。爲師說者不可有不審者  
也。經軌說者多分一同也如何。慥可承指南云  
云。予云。此已上印言。皆師說也。經軌中正諸尊  
通用印言云事无之歟。只師々以經軌義分任  
意樂用之也。此外猶諸尊通用印言。口傳多々  
也。但成就院傳者。以普門印无所重言。被用  
之尤宜也。

今日。已上二十箇條眞俗談畢。衆皆約後席。  
各又飛歸駕耳。

文永二年四月二日於鳴瀧御所書寫畢。同五  
日校之云々。  
隆澄

正中二年十月七日三時未申酉書功畢。故大僧正  
御坊自筆御本也。  
權律師通春

依數寄之志難有奉付與尊重律師了。

于時文明十七年二月日  
賢教  
此書在于鎌倉鶴岡雪下山。  
等覺院

右眞俗交談記以林崎文庫本書寫以太田覃本校合畢



# 驥驢嘶餘

一傳信和尚隱三子。慈威和尚。諱惠鎮。後醍醐天皇戒

黑谷。

師也。法勝寺白河法皇皇居也。其後天台宗主持

聖道衣也。後醍醐勅命慈威住持法勝寺。從其

時成律衣。後醍醐布薩着座給也。戒師。左座頭

テ

也。次第着右頭下座也。後醍醐右末座着給也。

法勝寺從其時紫衣御免。衆僧十九歲。度僧寺

ニ定

位定故。勅裁不申平僧。ヤガテ上人ト號也。

## 叡山十六谷。

一東塔。南谷。北谷。西谷。東谷。

佛頂尾檀那院西谷也。檀那院梶井殿脇門跡御

座アリタルニヨ

リ號檀那院。

無動寺。但南谷ヨリ分也。青蓮院御進止。

一西塔。北谷。南谷。東谷。南尾。北尾。

一横川兜率谷。般若谷。樺尾谷。解脱谷。戒心谷。

飯室谷。

同別處。

一神藏寺。律衣。帝釋寺。律衣。黑谷。黑衣。法然上人

開山也。靈山。

惠心隱遁地也。

安樂院。

惠心僧都隱遁地也。兩寺黑衣ハリ衣也。

右五箇所。衆徒隱遁地也。

一出世。

院號。公家。或公家養子。

坊官。

坊號。妻帶。

侍法師。

國名。妻帶。

御承仕。

持佛堂ヲ司ル。妻帶出家隨意。御格勤。

御膳ヲ調也。

下僧。

下法。師也。

一山門三門跡脇門跡。院家。出世。清僧。坊官。

或有。

侍法師。山徒。衆徒同位也。

同位。

一廳務。坊官隨分衆任之。脇門跡。雜務ト呼ナリ。坊官ハ

官人ト喚也。以下有ニ差別。脇門跡モ。天台座主ニハ被

任也。

一候人。

門跡ニ召使ハルル惣衆ヲ云也。

一三綱。寺家以下ノ衆多シ。輪番ニ執當職ニ任

也。執當山門ノ諸堂ノ司ヲ知ルナリ。諸役者ニ

補任ヲ成ナリ。

一堂衆承仕。中方ノナル役。公人下法師ガナルナ

リ。處々ノ堂ニヨリテ任ズル也。

一ハリ衣。門跡緇ナリ。

色ハ香。香トハ紅也。

平人布也。

衫ヲ重

子ノウカウアリ。衫ハ綾ナリ。給ト云也。

ナリ。



一東塔西塔執行ト云也。横川別當ト云ナリ。衆僧一老任之役也。執行代別當代若キ衆徒任之。右實全話之。

一七社。大宮。本地釋迦。號二大比叡大明神。二宮。藥師。號二小比叡大明神。

聖眞子。阿彌陀。觀音。客手。十一面觀音。十禪

子。地藏。三宮。普賢。右三如來四菩薩也。二宮西

塔ヨリ知之。聖眞子横川ヨリ知之。自餘ノ五社

東塔ヨリ知之云々。

一七座公人四至内。職モタ子バ衆徒。維那。同中方。法會

也。輪取。前唐院ノ輪アツカル也。出納。被物録物取出

又納也。庫主。下法師。佛供ヲ調ル者也。政所。中堂御常供佛供ヲ

調スル也。專當。下法師。若輩タリト云ヘ杖ヲツクナリ。執當與

前ニ行也。右ハ執當ノ補任也。執當ニ隨ナリ。

一門跡御與昇。八瀬童子也。從二閻魔王宮一飯ル時。與チ昇タル鬼ノ子孫也。十二人チ一結ト云也。是

ハ淨衣チ着シテ。髮チ唐輪ニワゲル也。長一人ハ淨衣ニテ。

造チサゲテ。御與ノ前ニ行ク也。以上十二人。今ハ御下行カ造チナリ。故ニ西坂本ノ坂與。四方與等ノ事也。山中ノ木下法師御與チ昇ナリ。坂與。ニカマウ。故ニ四方與ノ屋

彌チ除テ。下バカリ坂與ト云也。六人ハ署義也。片ト云也。又遠路ハ與昇多シ。近所ハ少ナシ。雖レ近ニ大臣。公卿ハ廿四人。二結モ被ニ召供。下官ハ雖レ遠片。或一結ビ也。

一御車ノ時。牛飼也。菊童以下也。八瀬童子トハ別ナリ。

二三門跡。

脇門跡。

院家。

出世。院號權大僧都法印官位共ニ極ルナリ。御持佛堂ノ法事チ勤也。堂上ノ息或ハ養子ナリ。

坊官。齒黑。坊號公名叙位不任官也。御門主ニ奉公給仕スル也。出世等輩也。不レ禁三四足二足類。以下輩同ジ。兒ノ時水干。

侍法師。同。國名叙位不任官也。兒ノ時長絹。坊號チモ付ナリ。

御承仕。名乘也。慶信慶光ナド云ナリ。御持佛堂事ヲ司也。莊嚴チ仕佛具ノ取沙汰アルナリ。幼時佛童子也。國名チモ付。又名乘之外。金光。金祐。金黨。眞宗。眞光。眞黨ト云付ナリ。

御格勤。同。

下僧。下法師也。淨衣肩袖袴。幼名必有二異名。

一直叙ノ法印。一直叙ノ法眼。大納言以上ノ息ハ直叙也。養子モ同ジ。梶井廳務代々直叙也。



一妻帶モ僧正法印。官位共ニ極ル。事ニヨリ家ニヨル也。

二三綱。堂衆。公人。下僧。下法師山徒法師并

中方妻帶衆禁。四足二足不禁魚。叙位不任官也。

一衆徒。清僧也。權大僧都法印が極メナリ。僧正ハ希也。平民モ德ニヨリテ任ズルナリ。東寺ニハ多也。

一梶井殿。古來無院號。入滅之後贈ニ院號。或ハ隱居御時アリ。

梶井。在ニ坂本。梶井ノ芝トテ。今ニ舊跡アリ。山岳山ノ東御座ノ時ハ大宮御所ト申ナリ。御代々宮門跡也。

攝家將軍家御一代モナシ。

一門跡御相伴。堂上殿上人マデ被<sub>レ</sub>罷出也。殿上人ノ膳ヲバ居事ハ坊官也。アグルコトハ侍法師也。公卿ハアグル事モ坊官ナリ。院家ハ御相伴也。出世坊官。御相伴ニ古來不出也。但シ可依<sub>レ</sub>家ノ流例。衆徒召使童子ヲ御門跡御寵愛アレバ。白衣中帶ノ鉢ニテ御次ノ間マデ參。半身ヲ出ノ盃ヲ給。或被<sub>レ</sub>召迄也。後ハ膳次被<sub>レ</sub>亂也。

一梶井殿堯胤親王。東塔南谷圓融房。御住山御登山已後。一生不被<sub>レ</sub>下山也。坊官五日ノ番オハリテ下山仕ル。次ノ番未<sub>レ</sub>登山。衆徒ニハ被<sub>レ</sub>居間敷由被<sub>レ</sub>仰。御膳不參也。執當貫全ヲ坂本江召ニ人ヲ下ス。夜半ノ時節登山。御膳ヲ進也。

一梶井殿平生御膳。一日兩度也。御器。表裡黒漆也。江州クルシノ庄ヨリ毎年進納。今ハ不懸盤。面皆朱。縁モシ。脚已下全鉢黒シ。銅ニメツキナリ。進膳同ジ。御菜本膳三ツ。進膳二ツ。汁二ツナリ。木皿四ツ。皆黒シ。御湯ノ時。ナモユガ盃ルナリ。

昔ヨリ如<sub>レ</sub>此。

一猪熊ノ寺家。梶井ノ寺家。此一族多シ。ミナ山門ノ執當ニ任ズル家也。猪熊今ハ斷絶。梶井寺家イニシヘハ清僧也。貫全マデ八代妻帶也。

當門跡ニ隨ナリ。但梶井殿家來也。

一兒。公家息ハ白水干着ル也。武家ノ息ハ長絹着スル也。クビカミノ有ヲ白水干ト云。無ヲ長絹ト云也。イヅレモ菊トチハ黒シ。中堂供養ノトキ。御門跡ノ御供奉。貫全童形ニテ仕ル也。其



色不定也

トキハ空色ノ水干其時節ニ似合タル結花ヲ。  
菊トデニシ法師ノ肩ニノル也。歩時ウラナシ  
ノ蘭金剛也。  
イダシ

一御童子ハ。素襖袴ニテ髪ヲサゲ。肩ヲツクル。  
スエフ



兒眉。上ニシンヲ立。末ニホフ。



御童子眉。三日月ナリニ臨ニシンヲ立。兩方ニホヒアリ。

一堂衆ノ事。根本中堂長講。一ノ長講ニノ長講ト云也。氏任此職ニ准ニ上。三人清僧スシ。中方ナレ方ニ弟子兒ヲ持也。承仕。三人清僧スシ。中方ナレ。呪師以上七人。

一執當。根本ハ清僧也。中古ヨリ以來妻帶ノユヘニ。寒中三十三日曉垢離ヲトリ。從正月朔至十五日修正。每晚彼堂至内陳出仕也。此外妻帶不入内陳。言全ハ不修此行。貫一ツタクハ一生修此行也。

一東塔南谷ノ常行堂ハ。上方清僧。法華堂。上方ナドヲ存ズレバサカル。又中方ヨリハ。アカレホト、トデモト云ナリ。清僧勤也。トテモノ事。中方御童子ニテナウソ。若衆ダチノヲトテ云。ツレトハ天地各別也。以下ノ堂々。或ハ中方。或ハ公人任レ之。妻帶ハ堂ノ務ヲ存ノ。堂ノ勤行等ヲバ清僧ヲ供養ノ勤レ之。

右皆執當之補任也。妻帶中堂ノ内陳へ入事ナシ。執黨人也。

一僧。下法師也。後ニ公人ニ成ル。公人ノ息モ御童子ニナレバ中方ト成ル。中方ノ息モ兒ニナレバ上方ト成ル。下法師モ三代目ニハ上方ニ成ルトハ申セ也。中方ニハ成レバ上方ニ成ル事ハ稀也。

一横川中堂ハ。觀音也。舍臺堂。四季講堂。四季ニ大會アリ。勅使參向ノ



故。慈惠大僧正ノ御廟アリ。正月三日誕生故。元三會ト云也。便正三ニ大會アリ。大師ニアラズ。和尚ノ事別記。

一西塔ノ中堂ハ釋迦堂ト云也。

一門跡坊官。武家出頭之時。一和尚一人。直綴。練大口。或ハ布ノ白袴也。自餘ハ素袍。<sup>スワウ</sup>小袴。チイサ刀。先規如此。近代ハ皆直綴。白袴也。

一御樽着進上ノ時。梶井殿ハ目錄ニテ披露ナリ。

妙法院ハ御樽着。御前御縁ニ置也。御門跡ノタダズマイモカハル也。

一横川ノ別當ハ。衆入ノ一老ガ持也。衆入マテ兒立ノ衆徒也。縱兒立ナレ<sup>レ</sup>。行斷トテ擯出セラレテ飯レバ。衆入ニテナシ。別當不持ナリ。東塔西塔ノ執行ハ横入。<sup>他宗交衆入ル人也</sup>。他方來モ事ニヨリ持也。

一梶井殿ノ圓融房。舊ハ階アリ。高欄等アリ。宮ノ造ナリ。廢壞ナル間。中堂再興之次。彼御房再興。中門車寄以下常ノ御所造ニナルナリ。青蓮妙法。舊ノ御坊ナレ<sup>レ</sup>。御所ツクリナリ。

一毘沙門堂殿。<sup>梶井殿ノ脇門跡ノ今ノ門主。中院也。院家シヤウシヤク院。在三ノ相國寺ノ東也。</sup>

一比叡山三塔アリ。各出トテ物ヲ出ス時。譬ヘバ百貫文出ル事ニハ。五十貫東塔。廿五貫西塔。又半分横川也。又物ヲ取ル時モ如此。法會ニ衆徒ヲ出スモ如此也。<sup>輕</sup>

一香色トハ。タテ紅。<sup>經</sup>スキ黃也。

一大口ノ事。公武猿樂等着スルハ。タ、ミノ面ヲ背ノ方ノ内ヘ入ル、也。又樂ノ時。舞人ハマヘハリト云物着スル也。ソレハ。背ヲ細ク前ヲ廣クシ。サハラヌル也。舞人ハ樂人ヨリ下ナリ。法中ニハ。大口トハ云ヘ<sup>レ</sup>。疊ノ面ヲ入ル事ナシ。只袴也。練大口ハ。山ノ衆徒着スルナリ。生絹大口ハ。御門跡ノ候人着也。寺家同ジ。練スバシ共ニウラハ絹也。精好ノ大口。面ハ小精好。裡ハ大精好也。御門跡御拜堂。<sup>中堂ヘ御參ノ事也</sup>。御拜賀。<sup>御社參ノ事也</sup>。候人衆供奉ノ時着也。

一轆轤袴。布ヲカチンニ染テ。ク、リヲ入テ。下



ク、リトテ。クル<sup>様</sup>ブシノ上ニテク、ルナリ。衆徒内々時着スル也。山上雪深シ。其時ノ用也。雪履疊ノ面ニテ。ヒツカバ<sup>キハ</sup>ミノ際迄筒ヲシテ脚下ハキ。能キヤウニコシラヘヤウアリ。又奈良ヨリ來ハキモノアリ。

一、大紋ノ指貫ノ事。寺家并坊官<sup>マデ</sup>着之。綾ウキ紋。藤ノ丸。紋不定。上ミク、リトテ。膝ノ下ニテク、ル也。公家同ジ。下輩ハ大紋ヲ不<sup>レ</sup>許ナリ。差貫不<sup>レ</sup>苦者ノ歟。探題々者。大會ノ時。大紋差貫着スト云々。自餘衆徒不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>許<sup>レ</sup>着也。

一、僧綱トハ法眼以上ヲ云。譬バ公家ノ公卿ノ心ゾ。凡僧トハ法橋等。寺主。維那以下ヲ云也。

一、上ノ袴ハ白綾。ウキ紋窠。<sup>花形ノヤウナルモノゾ</sup>霞紅ニテ覆輪ヲトルベシ。御門跡<sup>ハ</sup>候人至。寺家坊官同ジ。

一、法服ノ時。小袖ノ上ニ上ノ袴。頸立トテ布ヲ糊ゴハニシテ。袖ナシ肩衣ノ如クナルニ。ソウカ

ウヲタテ着シ。其ノ上ニ布ノカサチヲ着ス。法服ノ上ニ御門跡ハ香色ノ綾ノ紋アリ。裳同。法服ノ上ニ候人衆徒ハ。綾ヲフシガ子ニテソメルナリ。裳同ジ。衆徒ノ上ノ袴ハ練貫覆輪。紅也。

一、鈎色上袴。頸立カサチシ。上ハ小精好。御門跡香色。平人白シ。裳同ジ。

一、ハリ衣。<sup>重子衣トモ云。裡衣ニソウカウノアル有リ。</sup>上ノ袴。<sup>門跡候人生衆徒練貫。</sup>頸立重子同ジ。門跡ハ香色平絹也。

一、御門跡。平生香御衣ヲ被<sup>レ</sup>着也。其御衣ハ素絹ノ縫ヤウニテ。御エリヲ廣ク、ケズ。メヲイテ小袖ノ如ク折テ被<sup>レ</sup>着也。平絹香色也。

一、素絹ハ坂衣トテ公界江不<sup>レ</sup>出也。坂ノ上下ノ用又ハ武者ノ時。太刀刀ヲ可<sup>レ</sup>差爲ゾ。慈惠ヨリ初ルナリ。

一、直綴。門跡。差貫ヲ着夏アリ。又布白袴。生絹ノ大口御伴ニヨルゾ。衆徒ハ布白袴。スバシ大



口差貫不着也。

一袈裟。衆徒ハ紫行コウジャウ青行カウ。摠行カウ。袈裟法事ノ時

掛也。地ト行ト別也。皆七條。若キ御時ハ白シ。香色御門跡バカリ。

一平袈裟。一色ナルヲ云ゾ。浮線綾ハウキ紋也。

金欄。段子。綾。紋紗。皆七條。門跡付候人掛レ之。

一橫鼻ハ右ノ肩ヨリ左ノ脇江掛。是ハ其ニテ鼻

ナドカムム事也。〔符款〕

一裏衣ハ凡僧着レ之。但京坂本里マデハ。素絹チ不ニ着セ。故坊官モ着スル也。

一上ノ帶スバシノ絹也。法服鈍色。同橫鼻。袈裟

ニカクレテ不見ナリ。

一比叡山開闢ヨリ十八代ノ座主慈惠大和尚迄

三百年律衣也。酒不登山。慈惠云。山嵐癖霧ニ

衆徒被侵サ病ヤムナリ。五辛ヲ可入歟云々。然

ノ初テ酒登テ五辛不登。衆徒坂本江下テ五辛

ヲ用也。チモトハ山江登テ。今ニ用テ不苦。

一律僧ハ夏了テニラヒトモジヲバ用ルナリ。自

餘ノ五辛ヲ堅ク禁ズル也。比嶺大乘律ノ辛也。〔ト〕

一寺家年頭武家御所江參ル時ハ。裡衣ニ白綾。平

絹ヲ裡付タルヲ重子ニシ生絹ノ大口ヲ着テ。

五條ノ袈裟ヲカク。スリ與ツカイ小者。伴ニ中

方。裡衣ロクロ袴ノ衆多シ。其アト若黨中間ア

リ。御太刀進上。奏者大館左衛門大夫。被物一

重賜也。同比丘尼御所江被參也。

一被物一重トハ。綾小袖。或練貫一重ノ事ゾ。祿

物金銀等也。末法橋凡僧ハウス袈裟トテ。平絹ノ裡ノナキ袈裟ナリ。

一五條袈裟ハ表大精好。裡小精好。色白シ。門跡

ハ香色。綾浮文也。衆徒法印以後ハ紫綾。紋白

シ。

一浮線綾ハウキ紋ノ綾也。平人不<sub>レ</sub>得着也。

一梶井殿。年頭御參内。御門跡。香ノ御衣ニ五條

袈裟。北ノ御門ヨリ被入。長橋被參。三荷三種

被進也。進物。小高檀紙一束。扇一本。院家モ出

世モ不御伴。只一人御參也。寺家井坊官。ウツ

ラ衣。スバシノ大口也。ウツラ衣トハ。重子ノ



ナキヲ云ナリ。足半ヲ着テ敷皮ヲ敷キ。長橋ノ庭ニ居也。

坊官武家出仕ノ時ハ。直綴スバシノ大口。チイサ小刀。ガタナ或布ノ白袴也。

直綴。坊官山徒。カタナザシ刀差ハチバミヲ揚ル也。寺家

ハ刀ヲサ、ヌ故ニチバミヲアゲズ。衆徒モアゲヌゾ。

一傳教大師ヲ山家ノ大師ト申ナリ。別當大師ハ寺家曩祖也。傳教慈覺ノ時。三千ノ衆徒ヲ養シ人也。

一東塔ハ號止觀院。西塔ハ號寶幢院。横川云楞嚴院也。

一執當御拜堂并御マツリ事ノトキハ。変テ不付也鈍色ノ袍バカリエ大紋ノ指貫ヲ着スル也。宿直裝束ト云也。

一寺家四分ノ記錄。顯密律記也。記ハ山家ノ記錄トテ。三院ノ事ヲ錄スルナリ。

一借執當ノ事。近代妻帶ナル故。院家ノ人ヲ倩テ。靈寶ナドヲ取次テ門跡江掛御目時入ルコ

トナリ。取出ス夏ハ一ノ長講也。

一宿直裝束トハ。鈍色ノ上バカリ。裳ヲ不着セ。

大紋ノ差貫ヲ着スル也。寺家坊官同ジ奉公ノ時ニヨリテ。裝束色々アリ。侍法師御承仕ハ。

平絹ヲ青ク染テ差貫ニスル也。

一堅義ノ時。證誠。第一ノ上首也。大學匠ノ所作ナリ。御門跡方御沙汰アルナリ。精義。讀師。講師。問者。

一山門衆徒五人。題者勅許也。

一山王ノ鳥居ヨリ内ニ上七社。王子宮第一也。熊野權現也。中七社。下七社。

二十一社アリ。外ニ上七。大將軍第一也。中七。下七社

アリ。大將軍ハ傳教ノ母也。故ニ駕輿丁ガ參テ。別テ祭スル也。

一院家衆ハタ袖ナシト云ハ。御門跡常ニ被着絹御衣ノ如。襟ヲツケズシテ縫也。御門跡ノハ袖

二服也。院家ノハ袖一服半也。若キ時ハ淡黒ナリ。僧正以後ハ香色。

一日吉山王神宮次第。貫全話。社務一。廊御子。二。淨衣也。宮仕三。御子。四。女置守五。掃除共ノ。禰宜祝。同位ナリ。



一社務稱宜祝下輩マデモ平生ハ淨衣ナリ。ハレニハ袍サシヌキ也。黄衣ハ下スソノ衣ヤト子ト云也。

一賀茂下上神職事。神司トハ神主祝等ヲ云。其次ハ座ノ上ミ。是ハ神司ノ弟或ハ庶流ノ人也。神司ガ闕レバ神司ニ加ル事モアリ。又成下テ氏人ニナル事モアル也。其次氏人ナリ。是ハ侍也。サレバ鞠或歌ノ御會ナドニ才智ニヨリテ被召出ヌモアリ。長明ナド其類也。其下重々アリ。其中ニ淨衣ハ上リ。黄衣ハ下リ也。ト子ハ下人。黄衣長ヲヤト子ト云也。

一賀茂上ノ社ハ天雷社。下社ハ御祖神。下社モ賀茂ノ字本ナリ。

一上賀茂六郷。本郷ハ不入。六郷ノ中ニ岳本名ト云アリ。其レヨリ菩薩池ノ邊岳本郷ナリ。岳本郷。小野郷。一乗寺邊氏神ヨリ上西チ云也。河上郷。實茂チ云ナリ。大宮郷。中村郷。小山郷。已上六郷。岳本雅樂助話レ之。

一氣比社。神主。櫻井。船木等也。端郡ナリ。

一氣多。端郡ナリ。能州一宮雉使者。能州一國。鷹ヲツカハザルハ此故也。

一能州郡モリ松波。千二百貫ノ知行也。本城。四百餘貫。久能利。百餘貫。山形。不知。皆日野殿存知地也。

一院ノ廳ハ院ノ御所ノ廳務也。法務御門跡ノゴトク。坊官侍法師以下候人諸職相同ジ。イマハ伏見殿ニ奉公仕也。侍法師ハ男ニナリテ奉公仕ナリ。六條長講堂モ院廳在之。長講堂ハ院御所御持佛堂也。春日社ヨリ訴訟アリテ神木ヲフラル、時ハ。先長講堂江奉入也。

一南都門跡ニモ上北面。下北面ト云者ヲ被召仕。法師也。院御所上北面ハ諸大夫。下北面ハ青侍也。瀧口ハ當帝被召使侍也。南都門跡ニ中講小講ト云者被召使。是ハ侍法師ノ上。平位ハ法橋ナリ。

一世尊寺。清水谷ハ能書ノ家也。是ヲ家樣ト云ナ



リ。舊院様ヨリ後圓融院家様ヲアソバシ改テ  
勅筆ガクヲイカニモ風流アソバシ出シ。諸家  
ニ學<sup>有筆話</sup>之。

一武士ノ者。武衛ノ叙爵ヲモセズ。直叙三位。或  
ハ三好修理大夫ガ直叙四品ノ類。是一向分外  
ナリ。御法外云々。

一惣ノ攝家清華ヲ初メ。堂上地下社家等越階ナ  
シ。

一地下ハ上階少シ。越前ノ半井。療治ノ賞ニ正三  
位スル也。安陪氏。土御門有脩<sup>ナガ</sup>先祖。御祈禱ノ  
禱ニ正三位スル也。アキトミハ從二位スルナ  
リ。正二位ハ從一位ノ次ナル間。勅許アルコト  
少シ。半井閑嘯軒。法躰以後三位勅許。是モ療  
治ノ賞ナリ。生絹<sup>ベシ</sup>ノ大口。法躰已後勅許也。

一帷ノ事。端午ニ菖蒲帷トテ。サラシノ布ヲ紺地  
白ニ染テ。五月中着スル也。自六月朔日越後  
帷至七月六日着ナリ。自七夕至八月晦日

サラシノ白帷ヲ着ス。自九月朔至九月八日  
袷ヲ着ス。自重陽至三月晦日小袖也。自四  
月朔至同晦日袷也。勢州云。但シ時ノ宜ニヨ  
ルナリ。田村精觀云。過ル服ヲ不着セ。先ノ服  
ヲバ夏ニヨリテ着ス。東福寺住持猷甫云。內衣  
俗ニ習フ。但シ住持又大老ハ帷時袷ヲモ着ス  
ル也。

一小袖ハ織筋ウス板カ。古ヨリ本ニ着。染小袖ハ  
畧義也。アツ板ノ織物。上臈着スル服ナリ。平  
人不着也。又町人已下ノ下賤ノ者ハ一向却テ  
不苦也。田村精觀云。上古ハ織物着夏ナシ。花  
ノ御所ノ華麗ヲ好テ着セラル。今ニ着ナリ。只  
ウス板ノ織筋本ナリ。

一十六カハリ八カハリノ小袖。貴人ノ外不着。  
四カハリハ平人モ自然ニ着スルナリ。

一紫ノ小袖ハ平人不着。細川京兆。正月三日一  
度着。其日觀世大夫ニ被下也。



一唐織。貴人ノ外不着也。

一縷綢縁ハ五色絹糸ニテ織也。紋ハ菱ナリ。

内裏様御座二重縁。惣ガ五色ノ絲也。大紋。經<sup>タテ</sup>

ハスバシ絲。緯ハシケノ糸ゾ。フシカ子染ニシ

紋ヲ織也。紋ハ鹿ノ爪ノ跡ナリ。木瓜ノヤウナ

ル物ゾ。木瓜ヲタテニシタルニ似タリ。二重縁

ノ上也。下ハ白絹ニ菊水ヲ繪ニ書也。内裏様御

座ニモアリ。清涼殿ナドニモアリ。長サ一間マ

デハナシ。五尺バカリ也。武家御所御座ハ大紋

ニテ。小口ニ稻ニ雀ヲ畫ナリ。面横分五貫ニテ

横也。稻ヲ萩ノ如ク豎ニ畫テ。町ノ如クスデヲ

引也。

一小紋ハ。紋。高麗國ノ旗ヲ形ドル也。調伏ナリ。

染高麗ノ紋ノ如シ。如<sup>ス</sup>。大紋。生絹<sup>スシ</sup>豎シケノフ

シカ子ヨコナリ。一疊ヲ三百文ニテ。ヲドノ工

屋ニテ織也。餘大紋ニ同ジ。門跡院家。菊水ヲ

盡ナリ。

一赤縁。絹ヲ染タル物也。内裡様ニハ布縁ハ下タ  
ニモナシ。一重縁ハ赤縁バカリナリ。

一禪家。菊水ヲ藍摺トテ。紋ヲ切テ上カラスルナ

リ。二重縁ハ染高麗也。紺屋ニ染也。上モ下モ

布也。客殿バカリ。禮ノ間ハ一重也。檀那ノ間

同。但檀那ニヨルカ。

一大紋小紋共ニ下ル。葛ニ繪ヲ書ナリ。是ハ畧義

也。上下ノ縁共ニ織紋ガ本也。

一金欄<sup>宗全語</sup>トハ。地ヲ金ニテ織テ紋ヲ絹ニテ織也。世

話ト云也。

一金段トハ。紋ヲ金ニテ織テ地ハ段子也。

一金紗ト云ハ。地ハ紗ニテ紋ハ金欄也。

一蜀江ノ錦トハ。錦ニ金ヲ交タルヲ云ナリ。

一棕蘭地ト云。蘭トハ蘭ノ葉ノ色。淺黄ナリ。棕

蘭地トハ海松色ノ事。濃淺<sup>コキ</sup>黄也。

一惠林院ノ御代ニ御所ヨリ絹屋ヘウツクシイ

ロヲ織テ進納セヨト云。絹屋衆評定。一老人



云。椿ノ薄色ノ如ク織ベシ。卽チ織テ進上ノ  
云。ウツクシノ色ト申夏ナシ。彼ヤウノヲ申ベ  
キカ。御所一段御感アリ。

宗可

一染ソコナイト云フアリ。糸ヲソメナヲスニ。イ  
マダヒヌサキニス、ギヲトセバ。ヲチテソメ  
ナヲサル、也。乾カタメテシウ染デ後ニハナヲ  
ラス也。人ノ養生モ如此。



群書類從卷第四百九十一

雜部四十六

門室有職抄

御領御下文案。

二品親王廳下 其國其御庄官等

定補預所職事

右人宜令彼職執行庄務之狀。依仰下知如件。御庄官宜令承知。勿違失。故下。

年號月日

公文

別當

院司

此公卿。若禪僧。僧綱ノ給御下文案也。ヲサヘテ其名不可被書。名所ヲバアケテ可置。殿上

人。里法師。僧綱。又凡僧ナラバ。直可書名也。假令。

定補預所職事

大法師某

吉書解文書樣。

加賀國司解 申請御封米事

合五石

右當年料內。且進上如件。以解。

年號月日

官位姓朝臣名

返抄書樣。

二品親王廳返抄。



檢納 御封米一石

右加賀國所進當年料。且檢納如件。以返抄。

年號月日

公文

別當

先懸紙裏紙ヲ加テ。覽箱蓋ニ入テ覽之。返給  
テ於便宜所。懸紙裏紙ヲ引而下書ヲ可書。

其書樣。

可成返抄

別當法眼判

或裏紙懸紙ヲ不引シテ。詞ニテ返抄可成ト

テ返給。

被寄御領於寺之時。其庄領家許ヘ可遣狀。

其國其庄。宜令其寺領以。其絹何疋募。御年  
貢每年可令弁備給之由所仰也。仍上啓如

件。

年號月日

同等若下ザマノ人ナラバ。

者依

仰旨如此。悉々謹狀。若以狀。

領家請文云。

其國其御庄。令其寺領。每年可被弁備絹何  
疋之狀。跪所請如件。

催御所公事狀云。

其國其庄御年貢。每年可令弁備絹何疋給  
之旨所仰也。

被進攝政殿御教書。

賀茂御庄官訴事。棕橋御庄民狼藉事。其後何  
樣沙汰候哉。早可被糾斷之由。可申旨所  
仰也。以此趣可令披露給。恐々謹言。

月日

某奉

謹上 右中弁殿

長吏親王御出之時。可被召具御前三綱之由。  
仰遣寺執行之許狀。

其日其事。御前三綱可令召返給旨。依



仰執啓如件。

其執行若非御房人者。

可令召返給之由所仰也。仍執啓如件。

執行承仰テ催三綱狀。

其日其事。可令勤仕御所役給旨。依。

長吏仰執啓如件。

慶賀御教書狀。

御加級事。悅聞食候者也。故過三ケ日之間。

自然遲々之由所仰也。仍言上如件。某恐惶

謹言。

月日

某奉

此ハ中納言宰相三位許也。又僧綱ノ奉ナラバ。

仍言上如件。

大納言已上人許ヘハ。

御加級事尤珍重。定御自愛候歟。故過三ケ

日之間。自然遲々之由。御消息所候也。某恐

惶謹言。

官ハ御慶賀事ト可書。以後同前。僧綱ノ奉ナ  
ラバ。只恐惶謹言ト可書也。

自子之許遣父之許奉書樣。

者依御氣色言上如件。某恐惶

謹言。

月日

某奉

進上 人々御中。若居所名チ可書也。

自父之許遣子之許樣。

依御氣色執啓如件。

月日

二合

何御房

人々許ヘ物ヲ遣狀。

先日依令申給。其定其物所令沙汰遂候

也。

此ハ公卿。若禪僧。僧綱ノ許ヘ遣也。

依令申給。其定其物所被沙汰遣也。

此ハ殿上人。三綱。僧綱許也。



以御教書召人狀。

可被參之由所仰也。謹言。

此ハ醫師。陰陽師。大外記。大夫史。諸道博士。  
明法。綱所等許也。但紀傳博士之許ハ。

可令參給之由所仰也。恐々謹言。

如章茂許ハ。

可被參之狀如件。

樂人舞人之許ヘハ。

可被參之狀。依仰執達如件。

佛師。縱雖法印。如章茂歟。經師之許ヘハ以。

公文消息。可被遣狀。

來何日可被書。金泥經。今明之間可令參

給之由。依其御房御奉行執達如件。

人ヲ催。慥字荒涼ニ不可書。先催之狀事。故障。

其次相扶所勞。可令參給ト云々。又故障猶可

催。猶相扶所勞ト可書。此上猶故障ヲ申時。

召釣使ヲ遣。其狀ニハ慥付御使。可令參給ト

可書也。一定可召釣者不可有實檢使。依御

氣色若所催也ト書。必奉ノ字ヲ可書也。奉請

文狀。上等字疏可書也。注ニ不可書也。倭名文

ニ米ヲコメト不可書。物ト可書也。なに事か

わたらせ給と不可書。なにごとかおはしま

し候らんと可書也。

貴所御書ヲバ御硯蓋ニ可入。公家御書ヲバ柳

宮ニ入也。

消息ヲ封ニ。畏所ヘハ別紙ヲ切テ逆ニ可封

也。主公ノ御許ヘ遣ニハ封所ニ自之實名ヲチ

イサク可書也。其後禮紙卷之。次立封ヲウル

ハシク名ヲ可書也。又密事ナドヲ不書ハ。強

ニ封ヲバ不書事モアリナム。墨ヲヒキテモア

リナム。

至極貴所ヘ進消息様。

禮紙二枚ヲカサテ卷之。上ニ又一枚卷テ。

普通可封也。二枚禮紙ト云ハ。一枚卷テ可封。



封所ニ某ノ二字ヲチイサク可書。其上ニ又一枚卷之。不可封。仁和寺ニハ長者已上人ノ許ヘハ。門弟ノ名ヲ可書。進上也。恐惶謹言也。公卿并小僧都。法眼已上ニハ進上也。三綱。僧綱。律師。殿上人ハ謹上也。謹々上ハ同等人。聊思マシタランニ可書也。立文ハ上下可結。又不結モ無難。急事ナラバ上許ヲ可結。立紙ノ中ニ又書ヲ加タランハ必可結也。封タル消息ニハ上所ヲ不可書。但奥ニ人ノ名ヲ書ハ心ニマカスベシ。古ハ封文ニ位所書タル事粗有之。封タル人ノ返事ニ合點スルコト不可苦。縱雖立文。無内外之由ヲ存バ。何事有哉。平出ハ主公ノ御先祖。御名。又天氣院宣也。主上。院ニハ奏。女院。后宮。春宮ハ啓。親王殿下申。但別申文并消息者覽。人許ヘ遣裝束時。必書。目錄。可相具。書樣。

鈍色御衣一領。白五帖袈裟一帖。御裳一腰。御奴袴一腰。御下袴一腰。御帶。御扇。

月日

可加小袖者。帶上ニ御小袖何領ト可書也。於人前物書樣。

先硯沃水。以墨ヲ小摺前ニ。筆ヲ取テ硯水ニサシヒタシテ。サキヲ聊見。次紙ヲ卷テ置前。式寂。次以墨。三度水ヲ硯ノ面ニ上テ和墨。次取紙染筆書也。如此事。上請聊氣色ヲシテ可書也。

人前ニ硯ヲ取出ニハ。蓋ヲ取ノケテ可取出。

瓦硯置折敷樣。

水入土器



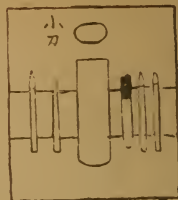
小刀外ニ可レ向。筆二管。墨一挺也。



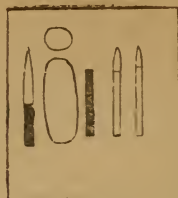
筆臺硯。

カメグツルハ  
外へ可<sub>レ</sub>向。

雕入硯。



筆二管。  
ムスビチガヒメ  
ナリ。黒一挺。  
小刀ウツブスツ  
ル也。  
筆一管。又二管  
モ。



イカナラン硯ニ  
モ。小刀ニカサ  
ナ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>指。

諸寺執行被<sub>レ</sub>仰下狀。

被<sub>レ</sub>綸言稱。宜<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>圓宗寺上座執<sub>レ</sub>行寺務。

宜旨未<sub>レ</sub>到之間。且可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>此旨者。

綸旨如此。悉<sub>レ</sub>之以狀。

年號月日

判

某上座御房

請文云。

跪請<sub>レ</sub>綸言事。

右宜<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>圓宗寺上座執<sub>レ</sub>行寺務之狀。所請如

件。以此旨可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>奏給。某恐惶謹言。

月日

凡僧名請文

諸寺執行上卿許へ直可<sub>レ</sub>遣狀云。

大乘會式日延引之由。以閭巷之說承<sub>レ</sub>之候。

而未<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>補之間。難<sub>レ</sub>散<sub>レ</sub>不審候。仍令<sub>レ</sub>言上候

也。須<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>啓候之處。聊所勞候。乍恐捧<sub>レ</sub>短札

候。某恐惶謹言。

月日

某上

進上權大納言殿

雖<sub>レ</sub>凡僧可<sub>レ</sub>遣。

假令。

圓宗寺御封米事。一日御參之次。令<sub>レ</sub>申上候

了。雜掌何様申候哉。有限用途闕如之間。重



令言上候也。某恐惶謹言

月日

某

進上安藝守殿

執行直遣消息之處。返事若奉書ナラバ。次度同等ナルヤウニカキテ可<sub>レ</sub>遣。狀云。

加賀御封米事。雜掌申候狀無<sub>レ</sub>謂候歟。有限參期過畢後。有名無實歟。重可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>下知<sub>レ</sub>給之狀如<sub>レ</sub>件。

月日

某

何藏人殿

大寺三綱ハ尋常ナラバ。四位諸大夫ニ可<sub>レ</sub>准。但如<sub>レ</sub>靜遍法橋三綱ハ。雖<sub>レ</sub>僧綱可<sub>レ</sub>准<sub>二</sub>祭主三位<sub>一</sub>。

御出御共時馬上禮事。

公卿非參議以上大弁ニハ無<sub>レ</sub>左右不可<sub>レ</sub>下馬。但祭主三位ニハ不下。攝政前駈一切不下也。法眼小僧都以上ハ不可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>異議<sub>一</sub>。但又律師法

橋中ニハ祭主三位ニ准<sub>二</sub>禪人ニハ不可<sub>レ</sub>下也<sub>一</sub>。又雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>下間人。車ヲアシダラサヘタラムニハ不下シテ可<sub>レ</sub>過也。

扈從僧綱ハ大臣并殿下ニ可<sub>レ</sub>下。貴女ニハ殿上人。前駈ナドニハ無<sub>レ</sub>左右。不然者不可<sub>レ</sub>然也。

二品親王御車ハ殿下ヨリ上ニ可<sub>レ</sub>立。無品親王ナラバ殿下ヨリ下ニ可<sub>レ</sub>立。太政大臣ヨリモ上也。但於陽明門者。雖<sub>二</sub>二品親王御車<sub>一</sub>殿下御車ヨリ下ニ可<sub>レ</sub>立。陽明門ノ中門ノ北ニ殿下御車ハ立也。御室御車ハ南ニ可<sub>レ</sub>立。於自餘所者。御室御車ヲ北ニ可<sub>レ</sub>立也。凡東西向所ハ以北爲上。南北向所ハ以東爲上。

御出之時御車事。

御車ハ前ハ以右爲上。薦後ハ以左爲上。薦前ノ儀ハ自左進。御榻右ヨリ進。御尻切也。後ハ右ヨリ御榻。左ヨリ御簾也。御後ニシテ御ハキ物ヲ可<sub>レ</sub>給也。御車ノ開戸ノ役ハ。御前ハ榻ノ



役人勤仕之。後ハ御簾役人勤仕之。御簾モチ  
アゲ。又以前可開。乗御了ナバヲシタツベシ。  
院御車御簾役ハ殿下令勤仕給。但開戸役ハ  
近法性寺殿マデ被勤仕。近來全無此儀。開戸  
役ニハ殿上人ヲ被召也。降雨之時者。御笠役  
人ト御足太ノ役人ト一方ニ可立也。御足太ノ  
役人ハ自ノ笠ヲ不用。御笠ヲ儲タランニ入テ。  
御榻ノ下ニ可立也。御榻役人ハ從者ニ笠ヲ可  
指也。御榻ハ前駈ノ上臈。御笠ハ下臈役也。御  
笠ヲ指テ左右ニ立事ハ心ニ可任。凡ハ共ニ車  
ニ乗テ可敬人ニアフタラントキニハ。吾忍ト  
モ人張威儀ハ。無異儀可禮。僧正若東寺長者  
ニ遇テ。車ヲバヲサヘヨ。喻バ可敬人ノ車ノ  
□ヨリシテ來バ。東ノ方ヘ吾車ヲ引向テ。カケ  
ハヅシテナガエノウチニ可立。家禮セント思  
ハバ。長エノ外ニ可蹲踞。

### 御前綱所與三綱相論事。

前後ハ可然御出之儀也。其寺ノ御拜堂ノ時  
者。以其三綱可爲上臈也。自餘ハ不可然。是  
則大臣大將本府ニ着時。府ノ將ヲモテ爲上  
臈也。

### 行列次第。

先召使。官掌。本府外記。史。弁。少納言。殿下御  
賀茂詣并春日詣必召具御前。弁。少納言。外記。史  
各一人。官掌二人。召  
使一人。

弁。史。官掌ヲバ自官催也。少納言。外記。召使ヲ  
バ自外記催也。先アラ催也。使弁  
侍。故障之時。職  
事以書催。其狀云。

來某日。關白春日詣御前役。相扶所勞可令  
參勤給者。依。

天氣執達如件。

荒催之時。無左右領狀ハ尾籠事也。

### 御所御裝束事。

御疊ヲ引カサ子ムニ下ヘ可向。御簾ハ御所々



カクバ母額モヤビイヨリモヒモヒトタケヲ可置御所  
 ヒキクバ母額ト同程ニ可卷也。母屋ノ御簾ハ  
 五尺屏風ヲ下ニ立ニ不障程ヲ可計也。縁ニ  
 疊ヲ敷ハ端ヲ可責也。前ヲ爲道。纒綱ノ縁疊  
 茵不鋪バ不可敷。シト子ハ公卿非參議已上  
 ノ家ニ可敷也。然者雖法橋不依禪里可敷  
 也。大文高麗ハ寢殿母屋ニ非バ不可敷。何人  
 家ニモ敷也。屏風ハ至極ノ長五尺也。又四尺  
 也。三尺也。普通六枚也。車寄屏風ハ四枚也。寢  
 殿ニ可然事アラバ。中門廊ノ燈ハ三綱役之  
 公卿座又人既着タラバ同可勤仕也。兩所共  
 非晴者。密々侍何事有哉。於殿上者。雖何晴  
 侍勤之立燈臺ニハ上薦打鋪。次臺末油器  
 也。シタガハラケカサ子テ可進也。打鋪ハ非  
 莊嚴之儀。タバアブラコボサジ料也。然者雖  
 晴シカザランハ敢非難。其座セバクバ四方  
 ニチ井サクヲリテ可鋪也。箱ニ居ハ内々事

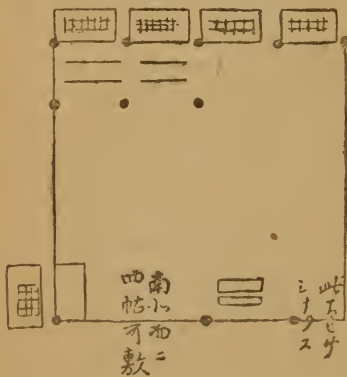
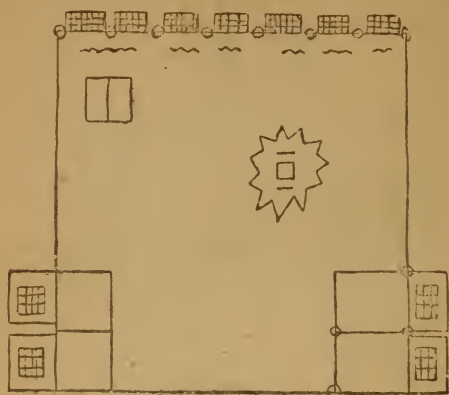
也。打數ハ貴賤ノ家ヲ不嫌可數也。爐ニ火ヲ  
 置ニハ土器ニヲ重テ火ヲ入テ打鋪ニスエテ  
 可取出。箸ヲ不可具也。炭ヲサストキ。古ハ以  
 箸不指シテ。テツカミテ取之云々。然共近來  
 無此儀。皆以箸指之。仍全自近爐ニ箸ニツ置  
 也。本ハ一可置也。非主人者。不取之故也。以  
 火桶爲□鉢。次ニハ桐火桶也。爐ハ火桶ノ代  
 也。然故ニ四方ニ指也。イリズミナドハ。ウチ  
 マカセヌ事也。但又以爐皆用晴儀也。  
 移徒之夜不可歌舞。攤簀許也。其所ノ別當院  
 司家司ニアラズシテ。所ノコマヲ勿奉行。  
 寢殿御裝束可依其所大旨。

調度事。

原本圖在此間今依便宜移于後

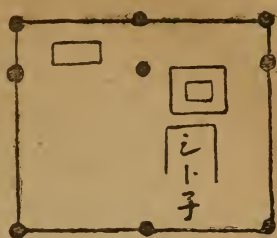
母屋調度ニハ四尺屏風一帖。二階一脚。唾壺。  
 打亂箱一合。已上二階ノ下ノコシニ可置。女  
 房調度ナラバ上ノコシニ火取ヲ可置也。庇調  
 度ニハ棚厨子二脚也。一脚ノ上ニ刻箱二合。一





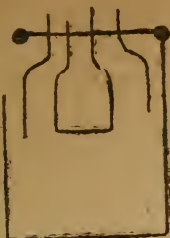


御帳ヲ立ニハ東西南北行心ニマカスベシ。茵ヲ可レ敷バ  
上ノ一帖ヲ不レ可レ敷。ホトリシキ左右心ニマカスベシ。



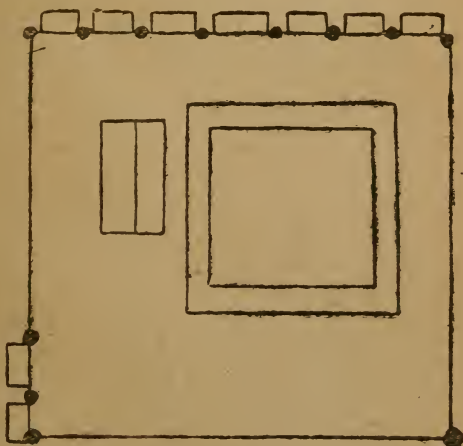
爐ヲ可レ居。此定也。  
寢殿茵屏風常事ニアラズ。  
非レ晴只疊也。

車寄装束。



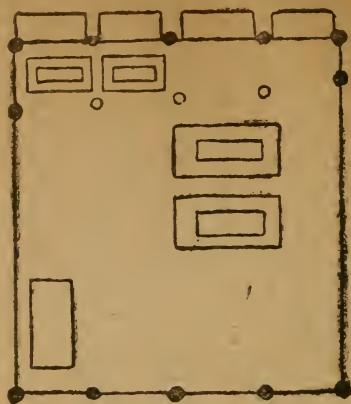
妻戸左右外ニ屏風ヲヨセ  
カケテ可レ立。車寄ノ疊ハ  
小文高麗也。薙ヲ用ハ無  
下襲事也。

寢殿御装束可レ依其所大旨。此ハ異本之様也。聊  
書寫之也。有替目之間。所々



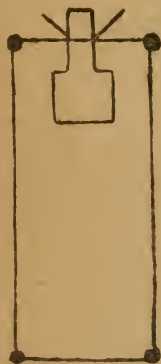
御帳ヲ立  
ニハ東西  
南北行心  
ニマカス  
ベシ。茵  
ヲ可レ敷  
バ上ノ一  
帖ヲ不  
レ可レ敷。  
ホトリシ  
キ左右心  
ニマカス  
ベシ。



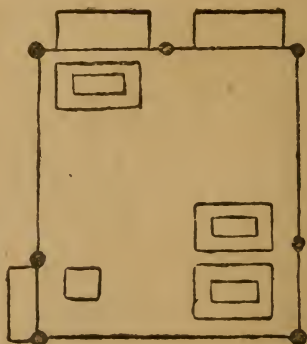


此間ヒサシナ  
ラズ。

南北面ニ四帖  
可レ敷。



妻戸ノ左右ノ外ニ  
屏風ヲヨセカケテ  
可レ立。車寄疊ハ小  
紋高禮也。庭ヲ用  
ハ無下疊事也。



爐ヲ可レ居此定也。  
寢殿ノ茵屏風ハ常  
事ニノラズ。非  
レ暗只疊也。



脚ノ上ニハ搔<sup>カ、ゲ</sup>上ノ箱一合。泔坏一口。在<sup>レ</sup>臺。普通厨子ハ母屋ニモ庇ニモ立<sup>レ</sup>之無<sup>レ</sup>憚。但又非<sup>レ</sup>晴儀。母屋ノ調度ヲ立ニハ庇ノ調度ヲ不<sup>レ</sup>立。庇ノ調度ヲ立ニハ母屋ノ調度ヲ不<sup>レ</sup>立。但清涼殿ニハ母屋庇調度共有<sup>レ</sup>之。

大盤ヲ行時。其前ヲ努力々々不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>過。若依<sup>レ</sup>御氣色并急用可<sup>レ</sup>過者。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>禮儀。只無<sup>レ</sup>旁之由ヲ存テ走過也。

掉貫ニ物ヲ懸ニ。上ゴシニハ晴ノ裝束ヲカクベシ。下ノコシニハ褻裝束ヲ可<sup>レ</sup>懸也。縦女房ノ裝束ハ。カサヲタル衣アラバ上ニ可<sup>レ</sup>懸。二衣二少小袖ナドアラバ其ヲ下ニカクベシ。又男女ノ裝束ヲワキマヘズ。以下シタニ可<sup>レ</sup>懸。先シタニ下袴。其上ニ指貫。其上ニ狩衣也。

付<sup>レ</sup>公私<sup>レ</sup>テ用アテ人ノ許ヘ行向ニ。凡僧并三綱僧綱ハ大臣已上ノ中門廊内ヘ無<sup>レ</sup>左右不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>入。禪僧僧綱ハ非<sup>レ</sup>制限。又雖爲<sup>レ</sup>殿下御息

所御許。大納言以上ナラバ。凡僧ナリトモ廊内ヘ可<sup>レ</sup>入。但大臣親王家トイフトモ。廊外縁何事有哉。

地ニ敷タル疊ノ上ハ沓<sup>レ</sup>乍着ツク也。然者僧ノ尻切ヲハキナガラノボラム何事有哉。

於主公御前申<sup>レ</sup>人名様。

參議非參議已上法印大僧都已上ハ可<sup>レ</sup>申字。殿上人ハ雖<sup>レ</sup>藏人頭實名也。小僧都ハ二人アラバ實名。一人アラバ字也。以下ハ實名也。女房ヲバ其所ノ某ト可<sup>レ</sup>申也。縱上東門院伊勢大輔。若一宮ノ紀伊卿ノ三位。又宣陽門院別當三位ナド可<sup>レ</sup>申也。

參賀ノ申次詞。

公卿ハ權大納言藤原朝臣ト云。四位ハ其朝臣ト云。五位ハ名。六位ハ姓名也。

御返事詞云。キコシメシツ。

公卿ナラバ中門廊ノ脇戸ヨリ可<sup>レ</sup>出遇。殿上人



ナラバ自妻戸可出遇也。

恒例公事用途。自其所申欲充諸國之由狀。  
殿下仰。先ハ可奏。次奏聞マウシノマヽニ。次  
此由ヲ殿下ニ申。殿下仰云。サムコサナシ。  
公家御遊ニ。公卿前ニ物ヲ置ニハ五位殿上人  
也。五位殿上人指合之時者藏人役也。殿上人前  
ニハ藏人也。主上ノ御前ニハ藏人頭也。藏人頭  
指合之時者藏人役也。

置物厨子事。或說上ゴシニ不可置。  
シモノコシヨリ可置。

普通ニハ四重也。第一笛箱。次比巴。次箏。次和  
琴也。大内ニハ三重也。第一笛箱。大水龍  
在之。次玄象  
次鈴鹿也。

主上ノ御裝束ニ參トキ。自手下書ヲ不可出。  
御前御後ニテハヒザマヅクベシ。御室御手巾  
ハ紙一枚可置。主上御手巾。晴儀ニハ紙一枚  
ヲ木ニハサミテ奉也。但朝餉ノ御手巾ノ箱ニ  
ハ布ヲ疊テ入也。

主上ノ御盞ヲ給樣。

盞ニ酒ヲ入テ給ハ。座ヲ立テ給テ復本座テ  
後。他盞ヲ乞テ入。移シテ飲之。御盞ハ即可懷  
中也。酒ヲ不入シテ給バ。於御前可懷中。歸  
座他ノ盞ヲ乞テ可飲也。

引出物事。

牛馬冬春ハ雖着衣。引出之時脫之引也。太刀。  
笛。琴。舩ハ必入袋乎。本ハ薄樣檀紙等可裹物  
枝ニ付時。以錦等裹之。非貴人外ハ。付枝儀  
無之。

人々差酒飯儀。

先居例飯。稱高。次一獻。坏居折  
敷持參。次居比目。次二  
獻。不可有二獻者。居  
比目後可有二獻。次居汁。次三獻。次居冷  
汁。次居菓子。次居湯漬。可有  
儀也。  
至極饗應之時。高坏十二本備也。其時必用。打  
敷高坏。次八本。次六本。次四本。次三本云々。普  
通高坏用之。



異本也。

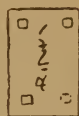
第八



第六



第七



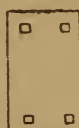
第五



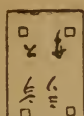
第四



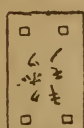
第二



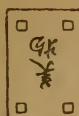
第三



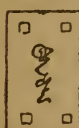
第一



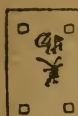
第十一



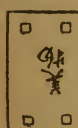
第九



第十二



第十



汁二種。汁チバ高坏二本ガ  
中央ニ可レ在。可ニ立居一也。

四種ハミソ。シチ。ス。サケ也。  
近代ハ酒ヲ略シテ藝チ用。タ  
テナキ時ハワサビ。ハジカミ。  
ミソ藝。必説レ醉也。  
トク

或此猶精進物。

湯漬アハセ二種チ加テ可レ居。



異本也

第八

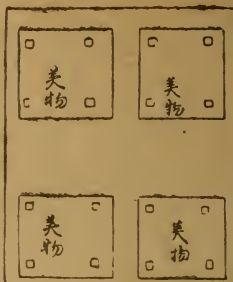
第七

第四

第三

第十一

第十二



第六

第五

第二

第一

第九

第十

四種ハ味曾。鹽。酢。酒。近代ハ酒ヲ略シテ蓼ヲ用。タデナキトキハワサビ。ハツカミ等也。味曾蓼ハ必酢ニ可レ解也。

レイノ。

或是猶精進物。

湯漬ハアハセ二種ヲ加テ此ニ可ニ取合。



汁二。折敷。各追物。或四種或二種居加テ。一番折敷ヲ第五高坏ニ取居ベシ。次折敷ヲバ第六ノ高坏ニ可取居也。追物二折敷ノ内。精進二種必可有之。追物ハ時之珍物也。春ハ鳥ノ引垂ツツミ鳴ツボ。間夏モ有之。鯉ノナマス。ナマヒヲ夏ハエユノ敦作。ムシアハビ。マロアハビニテモ切盛之。秋ハ此上スバキノナマスヲ可加也。其時鯉ノナマス不居也。湯漬アハセニハ必カハキタルモノヲ可居也。此又引垂ヲ具事有之。八本六本十二本ヲ略シテ。アハセノカズヲ多居加也。

原本圖在此間今依便宜移于後  
三本褰無打敷。三本ハ褻儀也。此時必比目ヲ可具。ハシタテ、ノチ。別ノ折敷ニスヘテ。追物或四種二種居具テ。第二高坏ニ可取居也。

事ヲ始次第。

先居了一獻又卽一獻。次立箸。ヒ有時ハ先也。次箸也。次汁。此時食也。アツキ時ハヒヤケシル。サムキ時ハアツジル也。近代此ヲ不レ弁シテ以ニ熱汁一爲レ先也。次三獻。次又汁。已事了。此上可有五獻者。此

汁了。次四獻。次暑預粥。夏冬ハ飴燐也。次五獻。次湯漬。必略也。夏ハ水漬。必ケツリ水ヲ可入。飯ヨリ左ノモノヲサシコシテハサムベカラズ。魚ノヤキタラムハ。ムシリテ多不可食。鯨ハカイシキノ紙ノミエルマデ。内ノ子ナドヲ不可食。□ハ骨ナガラ可食。不然者不可食也。シギツボハ。食了後如元フタヲホウナリ。汁ノミハ。鯉ノワタイリナラバ。齊太ガ所バカリヲハサミアゲテ可食。

布施取次第。

先被物。先錦。次唐綾。次生衣。秋夏ノ外ハ無之。次例布施。次法服。在草鞋。次鈍色裝束。次横皮。次念珠。次綾懸子。次絹懸子。次糸懸子。次綿。次色々布。次重裝束。或念珠可最取。次手箱。次椶手洗。次紙。此外ノ雜物。紙ヨリ上ニ可取也。金銀ノ類アラバ。綾上ニ可取也。

原本有之  
私云。顯寛律師傳法灌頂之時。爲長等布施承



異本也

第三



第二  
クホツキ  
ノモノ



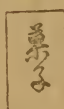
第四



第一  
クホツキ  
フモノ



第四

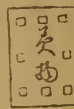


タカヤ

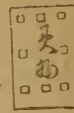


第一

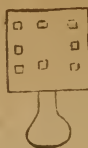
第三



タカヤ



第二





之。予見之處。法服之次ニ草鞋。横皮。念珠。鈍色裝束等也。定有由歟。仍記之。

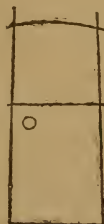
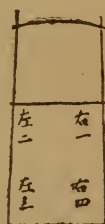
隨季節用裝束事。

四月一日ヨリ賀茂祭マデハ練貫ニス<sup>ハ</sup>シノヒトヘヲ可<sup>レ</sup>着。祭ヨリ五月五日マデハス<sup>ハ</sup>シノキヌニ帷ヲカサヌ。ヨクワカキ人ハス<sup>ハ</sup>シノヒトヘヲカサヌ。五月六日ヨリ八月彼岸ノマヘノ日マデハス<sup>ハ</sup>シノヒトヘ。此間引倍岐ヲ可<sup>レ</sup>着歟。束帶ニハ八月一日ヨリ引倍岐ヲ着也。八月彼岸初ヨリ九月晦日マデハス<sup>ハ</sup>シノキヌ。此間或猶ヒキヘギヲ着也。十月一日ヨリ三月盡日マデハ子リヌキニネリヒトヘナリ。

帷ハ祭以後八月彼岸以前ハ。不論晴裏可<sup>レ</sup>着也。非難也。香帷ハ正月一日着之。若人濃ヲ用。老人ハ薄ヲ用也。ス<sup>ハ</sup>シノサシヌキハ九月盡日マデ可<sup>レ</sup>着也。引倍岐トヒトヘトカサ子キルコトモアリ。然而打任ハアマリノコトナリ。賀

茂祭ナドニ引倍岐ヲ出ニハ。必ヒトヘヲカサヌ。ヒトヘヲバ不出也。

乘車様。



一人乗時。正可<sup>レ</sup>向<sup>右</sup>左方也。

事。

師主之許ヘ遣消息ニハ。以此旨可<sup>レ</sup>令披露給<sup>ス</sup>ム。恐惶頓首謹言ト可<sup>レ</sup>書也。謹々上ト書。進上ト書テ祇候人之許ヘ遣也。假令。謹々上備後阿闍梨御房ナド書也。同輩人ノモトヘハ謹上ト書。恐々謹言也。自我サガリザマノ人ノ許ヘ



ハ不書。上所只惣在廳御房ナド書也。其上ニ只謹言ト可書。或仍執達如件可書也。但此ハ奉時也。

### 居所事。

參御室御所人ハ隨其職有其居所。向僧正許ハ無左右。昇中門廊居妻戸内。僧正ハ無左右。着客殿。凡僧ハ居中門妻戸内也。逢近習者。房主被出客殿之後。隨其氣色可居客殿。向法印已下許時ハ。只無左右可着客殿座。

### 禮儀事。

於路頭逢師主者可下車。其外雖僧正可控車。自餘准之。自車下者。長轅外居也。是深禮也。禮イタク不深者。立長轅内。雖僧綱逢師主者可下也。於庭前逢師主者。立留可居深禮也。不然者只立留。被通時。深腰ヲカバム。是淺禮也。僧正ニテモ非師主者可致淺禮。縱

雖凡僧於師主者可致深禮也。立縁上時。師主入門參者。可下立砌下。居事如前。自餘僧正ニハ隨躰可下逢。有便宜者可立隱歟。若被見付者。必可下逢也。但凡僧之時事也。僧綱ハ無下于人之儀之故也。

### 引馬事。

上臈ハ右繩。下臈ハ左繩取也。隨身南庭ヨリ還時。於中門承取之。又上臈ハ承取右繩。下臈承取左繩。中門際マデ右繩ヲモテ下臈ニトラス。下臈承取之後。下人ニトラスル也。僧裝束ハ指貫ニクツヲハク。常ノ前驅ノナリ也。

### 尋常人高野詣次第。

先大塔。

誦經物一疊。若絹一疋。但隨鉢。導師施主任心。次金堂。作法如次。大塔。人々ハ山籠。

御影堂。

導師檢校被物一重。誦經物一疊。導師任心。一重。若經供。次御社。施主任心請之。被物

絹一疋。奥院。

養アラバ布施任心。

此書ハ出雲故戸部禪門作也。被進入綾小路二品親王者。末代龜鏡也。努々不可出關。



外。穴賢々々。

牛車宣旨事。

乍駕車自<sub>レ</sub>上東門入。二町西行。土御門ト壬生トノ角ニテ下車云々。已上宣旨ハ攝政關白被<sub>レ</sub>許之。或親王宿老之大臣又許之云々。

輦車宣旨事。

輦車之鉢如唐車云々。

如<sub>レ</sub>前乍駕車自<sub>レ</sub>上東門入テ至<sub>レ</sub>朔平門。於<sub>レ</sub>其門乘<sub>レ</sub>移車輦。手引ニシテ到<sub>レ</sub>玄暉門之前下車云々。已上左右攝政關白被<sub>レ</sub>許之。又親王爲<sub>レ</sub>御持僧之上ニ宿老人許之。不<sub>レ</sub>蒙ニケ之宣旨人ハ於<sub>レ</sub>宮城門下車云々。

車樣事。

檳榔。爲<sub>レ</sub>公卿人皆乘云々。

庇車。院。親王。關白。大臣乘之。

庇ノ鉢ハ如<sub>レ</sub>四方輿ノ上白。袖ハ唐草。中ハ

管文也。

半庇。院。親王駕之。

物見ノ上許ニ有<sub>レ</sub>庇。自餘事如<sub>レ</sub>庇車云々。半蔀。院。親王。關白。大臣。若大將乘之。

以<sub>レ</sub>物見爲<sub>レ</sub>半蔀。文ハ如<sub>レ</sub>車文。

車文事。

院御車文。中ハ大八葉。袖ハ唐草。上ハ白。此晴儀之御車也。又大八葉ノ長物見。此褻時ノ御車也。

親王長物見ノ小八葉。當事也。

一ノ人ハ上ハ白シテ袖ハ牡丹。中ハ嫡子ハ大八葉。次々ハ小八葉也。此晴儀也。又大八葉ノ切物見。此褻儀也云々。

花山院并中御門左府。杜若。

中院源氏。

通親之黨也。

上ハ龜甲。中ハ大顔。袖ハ杜若

中ノ鶴。

實宗卿。鞞畫。

閑院黨也。

泰行卿。大酢漿ト杜若トフシマゼタリ。物見ニ

文ヲ指セリ。



實禎卿。篠圓。

兼良卿。菱中ニ牡丹。

公繼卿。御簾ノ裳額。

德大寺左府實能之時此文ハ出來云々

信清卿。龜甲。

公房卿。磐篠。閑院也。

宗賴卿。袖菱子。中ハ八葉也。

寬修寺氏也。

兼仲卿。大酢漿。中院也。

宗輔卿。龍膽。

親雅卿。杏葉。寬修寺也。

公時卿。鸞。閑院也。

實明卿。菊。閑院也。

經家卿。澤瀉。諸大夫也。

季經卿。文同。諸大夫也。

季能卿。文同。諸大夫也。

隆房卿。鴛圓。諸大夫也。

親能卿。蝶飛散。

高三位。滋小葉。諸大夫也。

六波羅黨。蝶圓。

成□卿。鷄冠圓。

知光卿。ニフチニ立涌雲。俊成黨也。

經房卿。此一家ハ三葎ノ圓。寬修寺也。

日野氏。松鶴。

平家。竹ニ雀。或穀葉。又葵ニ雀。

車乘下事。通ニ公私僧俗一也。

凡車ニ乘ラバ。男子ハ乘右。女子ハ乘左。乘時

車簾人擡之。下時ニハ自揚之。自我已下人ノ

許ヘ行テハ門ニ向テ下リ乘。自我以上ノ人ノ

許ニテハ門ノ傍ニテ下乘云々。下時履足駄之

外ハ皆置前板着之。置時ニハ轅ノ外ヨリ指

及テ令置之。至足駄者。榻ニモ前板ニモ不

置之。置土着之云々。下□以人可令下車簾

出轅中之時ハ。ナガヘノスエテ越テ可出也。

不可越轅。履役ハ從僧中童子等隨時勤之。

貴人御車役事。

御簾ノ役。僧綱勤之。御尻切役。尋常有職勤之。

御榻役。前駟勤之。至御簾之役。令乘御車御

時事也。令下給時ハ御手自令揚御云々。

榻事。

院。親王。關白。大臣。已上黃金物打之。大納言。

中納言。大將。赤銅散物ノ金物打之。自餘人々

皆鐵金物打之。



榻ヲバ左右轅ノ下ヨリ随有便宜立之。貴人ハ前駟ノ役。普通俗家ハ雜色役。僧中ハ大童子役也。

下簾事。

大納言懸之。法印僧都准之。二位。宰相。三位不懸之。法眼。律師。法橋准之。

甬卷事。

凡甬卷ハ片綱之時ノ儀也。仍宰相。三位卷之。律師。法眼准之。大中納言車副有。一人之時ハ。下簾ヲ懸テ卷之。法印。僧都又准之。二位猶片綱ニシテ有甬卷云々。法眼准之歟。甬卷スル時ハ車副。或ハ牛童共ニ遣之云々。

追前事。

公達不嫌無□皆追キヤイセキト云是也。公卿不論。公達。諸大夫皆追之。ヲヤイセト云。又切聲ノサキヲモヲフト云。諸大夫ノ爲殿上人之時。大弁。藏人頭之後ハ切聲ノ前許追之。已

上前ハ雜色追之。此外院。關白。大將。隨身追之。隨身ノ前ト云是也。藏人頭。五位藏人。六位藏人。御藏ノ小舍人追之。大弁。中小弁。弁侍追之。大威儀師同上。諸寺別當。小綱追之。

警蹕事。出時警言也。入詩蹕云也。

院。親王。關白。大臣。大中納言。大將在之。以上車副唱之。一町三所可追之。

車副事。

院十二人。或八人。關白八人。或六人。親王同。大臣六人。或四人。大納言四人。或二人。中納言二人。宰相。三位各一人。僧正四人。或二人。僧都。法印二人。律師。法眼。法橋各一人。

前駟事。

僧俗共無定數。只以廿人爲限。近代法印以上具前駟有數。可隨時歟。僧正十人。或十人。法務八人。法印。大僧都六人。法眼。少僧都四人。律師。法橋一人。



大旨可有此數歟。

與乘下事。

四方輿ニハ自傍下乘。左右任意。若自傍無便ニハ自前可下之。四方輿ノ簾ヲバ前へ一面揚之。三面ハ人相遇之時下ス。有煩故也云々。

續松。

續松ハ僧綱二燃。凡僧一燃也。二燃ハ左右共ニ門内ニテ燃之。門外ハ有禁儀也云々。

參向人許之儀。

初參ニハ用ニ戌亥。隨時日。有ニ時善惡云々。

先無左右履ヲ沓脱ニ脱テ登中門廊。以人童中也。可申入參向之由。次人出向テ入之。爲僧

綱之人無左右可着客殿。凡僧者徘徊中門廊妻戸内。逢近習者。房主被出客殿之後。隨

其氣色可參客殿。向僧綱之時。無左右昇

中門廊。居妻戸内。向法印已下許。時ハ無左

右可着客殿。御座簾ヨリ入ニハ有便宜。簾妻

ヲ引開テ可入。若左右ニ有人

無

骨之時ハ褰中可入也。居ル時ニハ先可着左膝。起時ニハ先可立右膝。懷中疊紙等不落料也。參入貴人御前之時。無左右不可着座。躄蹲居之後。

無左右不可出

語。同可待。貴人命。扇等深懷中シテ。努々不可披顯云々。於貴人御前申。人事時。大臣僧正ヲバ直不申實名。餘人ヲバ縱雖爲父并師範。猶可申其名云々。但父若公聊タラバ某卿ト可申。四位宰相ヲバ朝臣ト申ス。過法者成ヌレバ字ヲ加云々。師若綱位タラバ某法印ト可申。或隨時某院法印。某寺法印ト可申也。退出之時聊動座蹲居シテ。時遮テ令立給云々。其後可罷出。由若雨雪降時。沓脱有煩。緣ノ上ニシテ可着履。但此事ハ隨時可斟酌歟。又自階上ル時。履ヲ土ニ脱テ上ル様。次ニ自下第一重ノ級ニ脱テ上ル様。兩說共ニ宜也。隨時可脱也。又下時ハ自下第一重ノ級ニ置



履可着之云々。

入客之儀。

自我向上人ヲバ以修學者入之。若等閑并已下人ヲバ以侍入之云々。侍ヲバ緣者ニ蹲踞スベシ。修學者ハ無左右不可居。聊腰ヲカバメテ可引道也。其後自我向上ヲバ。先客殿ニ入。後可出遇。自我已下ヲバ。先出居テ。後ニコレヘト可呼也云々。初對面之外ハ雖尋常之人可勸坏飯。付中凌遼遠之路來人。不勸膳者頗無心事也。至盃膳者。近隨官位也。但無左右客人前々勸歟。此條頗不甘心云々。凡食事間。俗家ニハ頗以習多之。僧中ニハ無別樣云々。其中ニ飯ヨリ左ナルアハセヲ及箸食事不可有云々。又敬人ニハ以高坏可勸。侍品ニハ折敷常事也。敬人ニハ酒ヲ不可強。若強之時。重可居嘉肴云々。事畢退出之時。自我向上人。師匠若嚴父ヲバ擡簾可出之。卽

從後至沓脫之整可遣之。若降雨之時ハ可儲笠云々。但不可及着履歟。可隨便宜也。又寺之上薦乃至宿老之人ヲバ至中門廊バ廻之。立向テ今見之時可歸入云々。等閑ノ人ニハ出時同時可入。

於中門廊對面人儀。

於中門廊對面之時。先於連子之間可謁云云。若寒中之比。臨時テ如半疊可敷之。

於門對面人儀。

於門外乍立可謁。若穢者ナラバ門外ニ立テ我於門中隔車突可謁云々。

於庭上逢師主儀。

若於庭上逢師主之時。立留テ無左右可居是深禮也。不然者。又立留テ被遇之時。深ク腰ヲカガム。是淺禮也。縱雖僧正。非師主者可致淺禮。縱雖凡僧於師可存深禮也。又立緣上之時。師主入門來バ砌下ニ可下。立居儀同前。自餘僧



綱ニハ随<sub>レ</sub>躰可<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>便宜不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>立隱歟。若見付タラバ必可<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>也。

於路頭奉<sub>レ</sub>逢<sub>レ</sub>貴人儀。

院。親王。師主以上人ニハ。若駕車之時、自車下テ轅ノ外ニ可<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>。是深禮也。與等同<sub>レ</sub>之。此外大臣。僧

綱等ニハ下<sub>レ</sub>車轅

又准

之。又高位宿德之人ニハクビキヲ懸ハツシテ示<sub>レ</sub>敬儀。或車ヲ、サヘテ可<sub>レ</sub>遇<sub>レ</sub>人也云々。凡如此事等、臨時可<sub>レ</sub>斟酌也。

過<sub>レ</sub>靈寺社及并貴人御前儀。

靈驗所并有<sub>レ</sub>旨社頭ニハ。駕車之時ハ無<sub>レ</sub>左右可<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>也。乘輿之時ハ昇居下<sub>レ</sub>簾。法施等可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。乘馬之時。又無<sub>レ</sub>左右可<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>云々。至<sub>レ</sub>内裡下四面。物ニ乘テ無<sub>レ</sub>過儀。院御所モ大略如<sub>レ</sub>内裏云々。親王。關白之御前一面許下<sub>レ</sub>之云々。自<sub>レ</sub>乗物下テスグル猶無<sub>レ</sub>方事也。不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>過云々。但留守之時ハ乍<sub>レ</sub>乗物スグル。更無<sub>レ</sub>憚也。

上中門事。

本式ニハ立<sub>レ</sub>四足之家ニ皆上中門有<sub>レ</sub>之。但近來ハ棟門ニモ又有<sub>レ</sub>上中門歟。

脇壁并裏壁事。

大臣以上皆塗<sub>レ</sub>之。又爲<sub>レ</sub>關白之子息。近來大將并親王在<sub>レ</sub>之。父爲<sub>レ</sub>大臣之人塗<sub>レ</sub>之。僧中ニハ法親王。僧正塗<sub>レ</sub>之。裏壁ハ脇壁塗<sub>レ</sub>ル所ニハ大樣塗<sub>レ</sub>之。脇壁ハ築地一本。二丈。板葺ノ門モ皆塗<sub>レ</sub>之云々。

立砂事。

慶賀之時乃至貴人之御儲ニ立<sub>レ</sub>之。宗トハ門外又庭前兼日立<sub>レ</sub>之。臨時ニ可<sub>レ</sub>散<sub>レ</sub>之。意前日ニ砂ヲ散サズ。翌日ニ雨ナムド降ル時。可<sub>レ</sub>散<sub>レ</sub>之料。仍<sub>レ</sub>内裏ニハ長日之左右衛門府ノ立砂ト云是也。

弘安第四曆臘月中旬之令書寫之畢。

大法師



被仰僞伴僧宜爲法成寺權寺主者。

仁治三年八月十六日

別當防鴨河使從五位下行左衛門權佐藤原朝臣經俊奉

永和二年四月十六日。自二位得承尊雅之  
許相傳畢而已。

傳圓守



群書類從卷第四百九十二

雜部四十七

海人藻芥

惠命院權僧正宣守記

弘安以來自僧中遣俗中書札禮之事。

僧正。

奉大臣。某恐惶謹言。表書或子息。或家司。

奉大納言。謹言上。上啓如件。誠恐謹言。

奉中納言。謹々上。執啓如件。恐惶謹言。

遣藏人頭。謹上。執達如件。恐々謹言。

遣四位雲客。同藏人頭。

遣五位雲客。無上所。如件。

遣諸大夫。同五位雲客。

遣五位外記史。可被之狀如件。

法印。大僧都。小僧都。法眼。

奉大臣。以此旨。可令申入給。仍言上如件。某頓首誠恐謹言。表書家司名。

奉大納言。進上。言上如件。某恐惶謹言。

奉中納言。謹々上。言上如件。某謹言。

奉參議。三位。等。謹上。執啓。恐惶謹言。

遣藏人頭。執啓。恐惶謹言。

遣四位五位雲客。謹上。執達。恐々謹言。

遣諸大夫。無上所。恐恐謹言。

律師。法橋。

奉大臣。以此旨。可令申入給。仍言上如件。某頓首誠恐謹言。家司名。

奉大納言。進上。某誠恐謹言。



奉中納言。進上。言上如レ件。某謹言。

奉參議。二位。謹々上。上啓如レ件。誠恐謹言。

遣藏人頭。謹々上。上啓如レ件。恐惶謹言。

遣四位五位雲客。謹上。恐謹言。

遣諸大夫。無上所。恐謹言。

有職。非職。

奉大臣狀。一向家司當レ書進上之間。不及是非者也。

奉大納言。某恐惶謹言。人々御中。

奉中納言。同大納言。

奉參議。二位。進上。某謹言。三位。

奉藏人頭。謹々上。誠恐謹言。

遣四位雲客。謹上。恐惶謹言。

遣五位雲客。謹上。恐謹言。

遣諸大夫。無上所。恐謹言。

僧中禮節事。

僧正。

遣法印。大小僧都。法眼。法橋等。謹上。恐謹言。

遣有職。非職。無上所。謹言。但內時者。恐々謹言。

法印。大小僧都。

奉僧正。謹々上。恐惶謹言。

遣法眼等僧綱。謹上。恐謹言。

遣有職。非職。無上所。恐謹言。

法眼。律師。法橋。

奉僧正。謹々上。誠恐謹言。

遣法印。大小僧都。謹上。恐謹言。

遣有職。非職。謹々。恐謹言。

有職。非職。

奉僧正。進上。言上如レ件。某誠恐謹言。

遣法印。大僧都。謹々上。上啓如レ件。某恐惶謹言。

遣小僧都。法眼。謹々上。某謹言。

遣律師。法橋。謹上。恐惶謹言。或恐々謹言。

以上。



一位二位ヲ一品二品ト云事ハ。不經次第加階。直至其位ヲ云也。如言一階僧正ト云々。國王條々事。

東宮立。又立太子。儲君。立坊。御禊。

是常言河原御禊也。

即位。受禪。讓國。讓位。踐祚。是受御讓言即位給也。

在位。御位之間事也。

大嘗會。天子即位以。其年新米獻伊勢太神宮。謂之大嘗會。十一月卯日也。此意ハ御即位

マシマセバ。天下ノ五穀ヲナメタマフ風情也。

凡御禊大嘗會ハ付即位沙汰スル事也。

脫屣。是御位下事也。意ハ被弃御位事如脫屣。無差意也。

不豫。帝王之病患也。晏駕。帝王ノ崩御也。

登霞。仙院薨御ノ事也。仙院ヲバ不可言崩

御也。登霞。ガト濁リテモ讀也。

諒闇。忌中事也。國王ハ崩御。院ハ薨御。若宮同。又大臣同。大中納言以下卒去。常之人ハ逝去。他界也。

三家者。久我。花山。閑院也。

名家者。日野。勸修寺。平家也。

清花。花族。英雄ト者。三家ノ人々云也。

惣法務者。御室バカリ被宣下也。是ヲ言綱務也。正法務ハ東寺一長者必被宣下。自餘輩ハ皆權ノ法務也。

僧正。僧都。律師。是官也。

法印。法眼。法橋。是位也。

三綱者。上座。寺主。都維那師是也。

各權一人有之。

山門三門跡者。梶井。青蓮院。妙法院。

是也。此外ノ門跡モ亦拜任座主跡是多シ

淨土寺。竹內。岡崎。東南院。檀那院。



積善院。毘沙門堂等也。此外若出身ノ輩有之者可拜任者也。

圓城寺長吏者。聖護院。圓滿院。南龍院。常住院。實相院等。岡崎如意寺。被拜任。此外其例稀ナル者也。

仁和寺長吏者。寺務也。此外別當モ有之。但別當者。不及寺務沙汰也。

東寺者。長者也。言凡僧別當者。長者ノ下ニテ寺務ヲ申沙汰也。

醍醐ハ。座主被寺務也。

大覺寺者。近代後字多法皇ノ御願也。不及座主寺務稱號者也。

興福寺者。一乘院。大乘院以下諸院家多被補別當也。

東大寺者。東南院。西室尊勝院被補別當。此外仁和寺。醍醐上綱被補任例繁多也。

八幡社務ハ。武内大臣後胤被宣下者也。善

法寺。新善法寺。田中。北。南。平等王院。檀。

竹。騷河小路。此輩ヲ祠官ト號シ。被賞朝家者也。仍被叙直法眼。近代一向四位雲客ノ振舞也。

鶴ガ岡八幡別當者。宮以下出世僧綱被補之。近代親王拜任ノ例多有之。

佐目牛若宮別當職者。近代三寶院門跡令進止者也。

四天王寺別當者。世一僧拜任云々。但近代御室無拜任。自寺家申子細有之云々。

六勝寺者。法勝寺。尊勝寺。寂勝寺。延勝寺。圓勝寺。成勝寺是ナリ。惣檢校者。御

室也。於寺務者。一向自御室沙汰也。別當者各有之。

神護寺別當者。文覺上人弟子淨覺上人寄進申ス。北院御室守覺。但近代自寺家申ス子細有之云々。



金剛峯寺者。御室進止也。但東寺長者被寺務者也。廣隆寺者。惣檢校。御室別當職者。佐々目頼助僧正以來上乘院門跡進止云々。

桐尾高山寺者。明惠上人建立地也。於彼寺者。宮住寺不可有之。上人誠之云々。坊ハ五也。近代以外繁昌歟。闕伽井坊。東坊。池坊。尾崎坊。田中坊是也。

根來傳法院別當職。付法院。眞光院門跡相傳之所。近代三寶院拜任云々。

鹿嶋社。春日社者。時ノ關白御計也。是言氏長者也。

梅宮。勸學院同之。

獎覺院。淳和院者。源家相續之處。久我相國具通公。鹿苑院殿へ永ク去進セラレ畢。

北野社別當職者。竹内門跡代々相續也。又有氏長者。

執柄家者。近衛。九條。二條。一條。鷹

司。以上此五流也。

四流源氏者。久我。堀川。土御門。三條

坊門也。是皆兄弟四人之流也。

勸修寺者。内大臣高藤公後胤也。當時朝遊ニ仕

アル輩多之。經任卿子孫。中御門ト號ス。當時頗斷絶歟。甘露寺。

吉田。勸修寺。中御門。又號ニ長谷。万里小路。九條。葉室。

土御門。當時頗斷絶歟。坊城。

日野家者。參議有國後胤。當時仕朝家者。東

洞院。裏松。柳原。町。廣橋。北小路。武者小路等

也。

閑院者。三條。西園寺。德大寺。今出川。洞院等

也。此外末葉數輩也。不可勝計云々。

花山院。中山。是一流也。

大炊御門。

飛鳥井。

中御門。園。持明院。是一流也。

安雲居。平家也。當時頗斷絶歟。



御子左。斷絶冷泉。是一流也。

菅家。

僧俗裝束相當之事。

法服ハ俗ノ束帶也。裘代ハ俗ノ直衣也。鈍色ハ俗ノ狩衣也。衣ハ俗ノ直垂也。俗人ハ直衣并狩衣ノ時ハ下ニハ令着用指貫之處。慈鎮和尚申公家被止之云々。當時坊官以下三綱。世間法師ハ鈍色等之下ニハ用指貫也。

法服。裘代。鈍色ノ時者持檜扇ヲ。衣ノ時者不持也。一向中古以來山門。南都。園城。上綱用檜扇。頗比興之事也。

穀衣。大臣息ノ外不可用云々。袒。元亨比雖被止之。近年諸寺平僧皆令着用者也。

袒。僧綱ハ用綾。凡僧ハ可用平絹之處。中古以來東寺門徒專用練貫。太無其謂者也。可止之云々。俗中ニハ大臣以下公卿皆用綾。四位

以下ノ雲客皆用平絹。而ニ僧中用練貫事。更ニ無准據。有恐。可憚者也。

於公家引布施時。僧綱ニハ綾ノ被物。綾ノ褂。又綾褻物也。凡僧平絹被物。褂褻物ナリ。練貫被物以下有之者。准綾引僧綱云々。錦。唐錦被物等者。親王并大臣祿物歟。細々不可有之。

疊之事。

帝王。院。繻綱端也。神佛前半疊用繻綱端。此外實不可用者也。大紋高麗ヲバ親王大臣用之。以下更不可用。大臣以下公卿。小紋ノ高麗端也。僧中者僧正以下同。有職非職ハ紫端也。六位侍ハ黃端ナリ。諸寺諸社三綱等皆用黃端云々。四位五位雲客用紫端也。

車之事。

唐車。飾車。糸毛ノ車。賀茂祭日典侍乘之。渡一條大路也。唐庇車。仙院或親王或執柄被召之。



檳榔毛車。大臣以下公卿乘之。僧中ハ僧正乘之。近比法印。大僧都乘之例有之。凡不打任事也。可有斟酌歟。

大八葉車ハ俗中大臣以下公卿。僧中ハ僧正以下僧綱用之。小八葉ハ四位五位雲客。僧中有職非職等用之。紋車。家々紋。綱代組付。又袖ニ毛繪書之。顯職殿上人乗用之。顯職者藏人頭。內藏兵衛佐等也。五位等侍ノ車。堅縁不打之云々。

榻。俗親王大臣以下。僧中ハ僧正以下僧綱皆用之。

輿之事。

鳳輦。帝王乗物。四方輿ハ僧俗皆用之。手輿。腰輿。是

者或寺中於社中用之。張輿。僧俗一向内々ノ時用之。駕柄輿。是者田舍等用之。當時板輿ト云物ナルベシ。

雨具之事。

雨衣。生絹ヲ淺黄ニ染用レ之。輿車同ジ。但可レ有大小也。張筵車ニ用之者

也。

法親王叙品之事。

二品ハ御室バカリ叙之。而近代諸門跡連綿

歟。一品高尾御室。後深草院皇子。性仁。於僧中者始叙之。

而又大覺寺。龜山院皇子。寬尊親王。青蓮院。後伏見院皇子。尊道親王。令

望叙之云々。

准三后事。

開田法助初任之。但母儀北山准三后譲リ與云

云。其後僧中任之例及兩三人。然而近日連綿

也。准三后ハ太皇太后宮。帝王祖母。皇太后宮。帝王母后。皇

后宮。帝王后妃。此三宮准之。我朝ニハ中宮職アリ。

仍テ四宮ト號スル也。關白息ヲバ於俗殿大

將。殿大納言ト申之。於僧中者殿僧正。殿法印

ト可申也。

僧中ニハ親王ノ外ハ宮ト云事不可有之。其

謂ハ宮ハ王姓也。既成僧正。法印等凡官ナリ。

仍宮號無其謂也。但宮ノ息ヲバ多分宮ノ僧



正ナド謂事有之。是ハ只會釋ノ鉢也。於公方更不可稱事也。

諸門跡ノ藝ハ詩歌茶香ノ會。春ハ雀小弓也。然シテ近代青蓮院尊道親王。理性院僧正宗助。圍碁會張行有之云々。不可有事也。東寺ノ門徒殊可斟酌者也。

人前ヘ硯ヲ持出時ハ蓋ヲ取テ可持參者也。但文臺ニ居テ持ツ時。蓋ナガラ置也。

手洗水ヲ置中居邊。椀水瓶ヲ入手洗中置之。提ヲ不入置之事也。

提ハ右ノ手ニテ持テ左ノ手ヲ寄セズ。銚子ハ左右ノ手ヲ以テ持之。

公方ヨリ御布施請取書樣事。但僧綱。從僧書也。凡僧ハ自身書之者也。

謹請

結緣灌頂御布施事。

合一貫文者。

右爲其院僧正。法印以下。法印坊御布施。謹所請如

件。

年號月日

大法師判可爲從僧。

僧綱如此仰從僧書出之。

謹請 結緣灌頂御布施事。

合一貫文者。

右謹所請如件。

年號月日

大法師判可爲自身。

凡僧如此自身書之。

卷數送狀事。隨其所々樣々可書改也。

執柄諸院宮ヘハ。

長日御祈禱卷數一枚。謹獻上仕候。以持參體可令洩披露給某誠恐謹言。

月日

法印某上僧正。大小僧都等。判形不載之。

進上 某官殿

歲末卷數不書。長日御祈禱。月迫令結願。歲末進之。俗中ニハ歲末卷數ト云歟。自僧中歲末卷數書事。無其謂者也。



撫物入弘蓋仕丁持之。卷數ヲバ力者持之。略弘蓋入長櫃昇之。兩様也。

湯屋風呂ニテ進退ノ事。湯ヲ汲搔。筭懸ル所へ添左手。手ニ湯ヲ添テ懸ル也。不添手バ湯飛汁散近所。無骨ナル者也。或ハ於湯屋様々故實多之。當時者其禮絕畢。高野山ナドニハ當時致其禮云々。入風呂時可敲戸二三度。是禮也。於湯屋雜談。不可然事也。

廻文之事。立紙ノ時ハ加奉。折帋ノ時ハ合點ナリ。

三席ト者。詩歌管絃。此三ノ御會也。池ナドニ御舟ヲ浮ベラル、時者。三ノ船ト申ベキ也。

和歌披講事。讀上ル人ヲバ言講師。又講人謂讀師。常ノ講讀師ニハ替レリ。

連歌執筆事。本式居末座。對主人書之。當時於尋常人方。着上座書之。

行幸。帝王。御幸。仙院。御出。親王。仙院御移徙ヲバ攝家。

遷幸。遷御ト云也。還幸。帝王。親王。殿一人。仙同。還御。執柄。殿一人。關白。御室ノ事ナリ。世一僧トハ。

一身阿闍梨者。其人一人被下有職宣下也。執柄ノ息或ハ宮得度受戒ノ後宣下セラル、也。古ハ然ベキ大臣ノ息被宣下例有之歟。

逆鱗者帝王ニ限テ云事ナリ。腹立ハ尋常人ノ事也。帝王ノ御子ヲバ御子宮。執柄以下大臣公卿ノ子息。雲客以下ノ子ヲ子ト云々。又子息ト稱ス。

玉體。寶壽。帝王。太上天皇ニ限テ云フ事也。后宮等ヲバ不可言也。

然ベキ大臣等。誰ト問誰ト呼ブ時ハ。實名ヲ答フ。自然又雜談アル時。我が實名ヲ申サルレバ。此方モ實名ヲ名乗合セテ少ト氣色ヲスル也。如此事無禮。無下未練ニ見ユル也。

俗中假名事。執柄子息。殿ト稱之。大臣以下公卿ノ息。任父官稱之。常様武士ノ子。或名僧ノ



子等二位三位宰相以下。八省卿可名乗。大納言。中納言トハ更不可名乗。公卿猶子猶以斟酌スベキ事也。

假名文ノ事。立文ハ二枚也。略儀ニハ折一枚。立文ノ上捻ル所ヨリ引墨也。腰文封ジ目ヨリ下ニ表書ヲ書也。

同輩ノ人。乘輿與乘馬ニテ行合フ時。先乘馬ノ人可下。後乘輿ノ人下テ可謝之。但無骨ノ在所ナラバ不下。以下部可謝遣也。

執柄大臣ノ門前。乗物ヨリ下テ可通。不然者通裏築地外也。別當ノ家門前。通裡檜垣外也。法親王門跡ノ前ヘ不可乗打也。

御室門跡者。自寛平法皇以來皆親王也。但峯殿息准三后法助入室之例有之。南都兩門跡。一乘院大乗院

執柄息相續也。其外東寺山門三井寺諸門跡。隨時宮一ノ人或ハ三家ノ息令入室也。於南都

兩門跡者。他家ノ競不可有之者也。

仕丁裝束ノ事。親王大臣家ハ退紅。公達等ノ家白丁也。僧中ニモ隨家門可用之。

塗足駄。准沓。俗人ハ用尻切。裏無ハ可謂禮非限云々。尻切。俗人ハ月卿雲客。諸大夫用之。僧中。法親王以下。僧綱凡僧以下三綱用之。裏無同前。但於裏無者。夏衆并諸堂預リ用之。但調法有檳榔毛ノ裏無。兒用之。無職ノ物也。仍故實也。親王用之。僧俗有官輩勿用之。

公家御膳飯者強飯也。執柄家等如此。姫ノ飯全分略ノ儀也。但人々ノ依好惡用之。強飯ノ時。湯飯湯也。而近代姫ノ飯ノ時。ヲモユ參ラセヨト召。不叶理者哉。

八月朔日ニ小花粥。内裏仙洞以下令用給。良藥ト云々。彼粥調法ハ薄ヲ黑燒ニシテ粥ニ入合ス也。

火鉢置炭。角折敷ニ入炭令持參。取手置之。火ヲ入土器以火箸。又火箸ヲ指灰。努々不



可致事也。炭ヲ入炭取。全ク分略ノ義也。

加油入土器。居折敷令持提。ナドニ入ルハ内事儀也。

內衣ノ事。主上ノ御服平絹也。仙院御服ハ練貫ヲモ時々令調進。綾唐織等努々不及調進。宮大臣ノ息等十五歳ヨリ内ハ色々ノ綾唐織物用之。其外ハ一切不可用之。御室門主。平絹之外更ニ不被用。近比他門ノ門主。白綾ノ小袖被用之云々。大乘院大僧正教尋被用紫紬。比與ノ事也。

絹直綴ハ貴賤共用之。道服者俗隱者用之云云。而大覺寺ノ寛尊親王被用之。自由之至。世人皆爲比與云々。

檜扇。僧綱。

公卿扇。

凡僧。

殿上人扇。

十五歳ヨリ内。

非職ハ綾相ノ扇用之也。

蝙蝠扇橋事。六橋ハ別當。大小弼。廷尉持之。十二橋常ノ人持之。

猫間骨ハ大臣家ノ物也。侍ハ瀧口ノ輩至。孫子用之。其外家ノ侍一切不用之。然而近年田舍上下共用之。結句世外禪律野僧持之。言語道斷ノ事也。

鐘ハヘイカウ二度入。三度入是也。然近代間ノ物五度入。七度入。十度入。塞鼻如斯。種々土器令出來。酒興盛故也。

盲目參事。於御室門跡者庇候。着圓座申。音曲。梶井門跡小書。於青蓮院門跡者着疊云々。德大寺故相國實時公被命云。盲目風情者當時以外過分也。古ニ於諸亭者候。大床申。音曲云云。久我家門。當時モ如斯。諸門跡非例出來不

可然云々。

僮僕事。中童子二人。大童子四人。力者十二人。牛飼一人。白丁一人也。前駟ハ六騎。後騎ハ一人也。然ニ範俊僧正拜堂ノ時ハ七十餘騎云々。不足爲例。



水瓶ヲバ入<sup>レ</sup>手洗<sup>二</sup>力者持<sup>一</sup>之。鼻廣居<sup>レ</sup>柳宮<sup>一</sup>持<sup>レ</sup>之。筒者竹二筋許切テ、上ヲ削。口五寸許下以<sup>レ</sup>帛張也。是白丁仕丁相添傘持<sup>レ</sup>之。

上蓋裝束事。狩襖。下ニハ着指貫。鬘金濃也。水干。本結引合。直垂。

布直垂ハ全分内々舂也。直垂着用ノ時ハ馬ニハ不<sup>レ</sup>乘。内義ノ故也。又長途乘馬ノ時着<sup>レ</sup>帛子淨衣有<sup>レ</sup>之。其時ハ以<sup>レ</sup>花帽子<sup>一</sup>裹頭也。

袍。言<sup>レ</sup>海老色ト<sup>一</sup>袍有<sup>レ</sup>之。是ヲバ被用<sup>二</sup>執柄家<sup>一</sup>。而ニ御室門跡ニ香ノ法服未<sup>レ</sup>被用時分ニ被用<sup>レ</sup>之。他門ニハ被<sup>レ</sup>任<sup>二</sup>親王<sup>一</sup>即<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>香云々<sup>一</sup>。南都

兩門主。僧正以前用<sup>二</sup>海老色<sup>一</sup>云々。

麴塵袍。帝王御衣也。但殿上六位中一鵬ヲ稱<sup>レ</sup>極鵬<sup>一</sup>入着<sup>レ</sup>之。自<sup>二</sup>帝王<sup>一</sup>申下シ給儀ト云々。親王同被用申<sup>二</sup>給義也<sup>一</sup>。

五條ノ袈裟事。顯文沙。抄生長絹。各入薄墨。穀。精好不

入<sup>レ</sup>墨。

香袈裟ハ穀并織地也。大紋平民不用<sup>レ</sup>之。可<sup>レ</sup>爲<sup>二</sup>

小紋也。染平絹。内々ナドハ用<sup>レ</sup>之歟。

紫袈裟者。醍醐方ノ若僧綱用<sup>レ</sup>之。仁和寺ニハ坊官。僧綱用<sup>レ</sup>之。三井寺同前。無紋ノ紫ヲバ叙三綱法橋等後用<sup>レ</sup>之。近比用<sup>レ</sup>有紋。輩有<sup>レ</sup>之。過分至不<sup>レ</sup>可然也。

仁和寺。東大寺ニハ有職ノ衣ニハ更不<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>墨。他門墨ヲ少入<sup>レ</sup>之云々。

龜絹衣者。山門三井寺方用<sup>レ</sup>之。無機袖モ衣ノ單衣也。仁和寺。南都ニハ十五歲ヨリ内ノ時ハ長衣ト云テ衣ニモ單衣ニモ用<sup>レ</sup>絹衣。成身之後ハ一向止<sup>レ</sup>之。凡絹有<sup>二</sup>四種<sup>一</sup>。謂<sup>レ</sup>ユル長絹。平絹。細絹。龜絹是也。而龜絹袈裟ノ事ハ不足言也。袈裟等最以下品龜絹縫<sup>レ</sup>之。アマリニ聊爾也。只言<sup>二</sup>長絹袈裟<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>然。龜絹ノ衣。實有所謂<sup>二</sup>機袖<sup>一</sup>ヲダニモ入ヌ單衣ナレバ。其名最モ相應ノ者也。

打衣者。南山籠之時。可<sup>レ</sup>然門主以下用<sup>レ</sup>之。於本



所苦提院門跡ニハ着打衣。朝夕勤參集云々。朝夕勤ニハ宮以下可會事也。御室猶以常ニ令着座給。況半人乎。三家等人。言半人。

朝夕勤行并御影供ニハ僧綱不行道。凡僧計行道。雖然近代昇進早速之間。僧綱ハ多ク依凡僧稀。律師加行道。自餘所役准之。

承仕法師事。仙洞執柄家以下被召仕。至宿老者。皆叙法橋。法眼。御室ノ門跡ニハ不許僧綱。雖然觀音院等預。皆僧綱上ヘ令着座云々。他門ノ承仕ハ連綿叙僧綱歟。

大威儀師者。必叙法橋。其外威儀師。從儀師以下ノ三綱。不被許僧綱。猶仁和寺モ諸門跡ノ三綱ハ宿老ノ後叙僧綱。是皆諸院主ノ免許也。非御室貫首免許也。三綱者。上座。寺主。維那師。各有權宜。

兒童爲服用。僧坊取入魚鳥見苦。山門。三井寺ノ門跡。可其本所住山之處。細々爲公請令在京之間。京白川ノ坊ハ皆假ノ宿坊也。仍古

不定法式。及末代特亂吹也。仁和醍醐門跡。自古本所也。然ル間諸門跡寢殿ニハ不入酒肉五辛。就節供等。酒自古許之。肉五辛當時モ有心院主制止之。於對屋密々可用之。五辛。同院主藥草之時。於對屋可用之。藥艸服用ヲ謂服藥。打聞惡。只可言服藥艸也。如此事只同事モ打聞ノナニトヤランアシキハワロシ。自餘ノ事可准知之。

門跡人數上下ノ事。出世者。自大臣ノ息至殿上人ノ子ニ稱レ之。禪侶。自諸大夫子至北坊官。自大臣息至殿上人子。稱面等之侍子。稱レ之。是在家ノ法師也。限費所門跡被侍法師。勤三童子。中間法師。勤承大童子。力者。兼花。牛飼童。下部ノ男。副威儀師。從儀師者。朝家器也。依爲綱務。御室被召仕之。威儀師。宿直裝束云物用之。上ハ法

服。下ハ白練ノ裳也。下ニ着指貫。是ハ宿直裝之儀也。袈裟者。精好五條也。公請奉行之時。着赤平袈裟。裝束ハ法服也。綱務并法務。相隨御



前供奉之時ハ用赤五條也。

常陸上野上總此三ヶ國ニハ以介爲受領守

ニハ親王任之仍殿上人以下不任之。

禪侶者古多分付國名近代一向公名計也無

其謂者哉。

侍法師者近代皆國名也古多分聖名也。

僧名書樣。

前大僧正。

前僧正。

僧正。

前權僧正。

權僧正。

法印。

法印大僧都。

法印權大僧都。

大僧都。

權大僧都。

少僧都。

權少僧都。

法眼。

權律師。

法橋。

大法師。

如此書之不可依文字ノ多少可見許（軒）  
書合三字上中下ヲ書合ス二字ヲバ上與

中ト書合スル也。如此事以今案。異樣事

惡公請僧名惣在廳ノ書樣。如在以之可

本樣トス者也。

寺社三綱者。

上座。權上座。寺主。權寺主。都維那。權都維那。以上六人也。

於其

寺社有法會者必三綱隨所役也。進儀時

上座二人執綱役勤之。寺主執蓋ノ役勤仕

也。上座若不私指合ノ時者權上座可勤之

權上座於有指合者次第々々次ノ人可與

奪是寺社役等ノ大法也。隨其寺社之例或

會ノ行事式樂行事舞童行事是皆三綱所役

也。

持幡童事宮以下大臣息阿闍梨勤仕之時ハ侍

ノ子ノ兒勤之。大中納言ノ息以下阿闍梨勤仕

之時ハ中童子也。行遍僧正。

號菩提院國師。東寺以下數ヶ寺之寺務也。

龜山院御灌頂大阿闍梨勤仕之時持幡童者用

中童子。其外度々大阿闍梨及數十度皆用中

童子也。行遍僧正者三河法眼行延御室坊官也。之子



也。仍於事令斟酌哉。諸山寺ニハ其所ノ一和尙或學頭等阿闍梨ノ勤仕スレバ。其寺兒執綱役。持幡ノ童ノ役等勤之。若自他助威儀意歟。凡自由之儀也。不定爲例。<sup>(足殿)</sup>後宇多法皇御灌頂之時ハ。持幡ニハ被用僧云々。是寛平法皇御灌頂之古例也。

堂童子者。五位ノ殿上人ノ所役也。布施ハ一人以下。大臣。公卿。殿上人等取之。一人。大臣等取給ヘル布施ヲバ。自取之可渡從僧也。但如此事。依時隨人事兼難定之間。臨時可有故實事也。

御室被行法會之時。公卿殿上人令家來有取布施事。御室ハ依被補任俗別當如此。又綱所威儀師令奉行法會。是任惣法務給故也。自餘ノ門跡ニハ如此ノ條々更不可有之。

承仕法師者。仙洞執柄家等。皆許面縁被召仕

之。御室ニハ不被許縁。只於厨所邊候被召仕。頗似無其謂。三門跡貴所ニハ。侍法師ヲバ門主御座間ヘハ不被入之。於中居邊勤雜役。於御室者。侍法師專致近習。是ハ後白河法皇專被召仕北面輩例准之。北院御室。守覺。殊侍法師近習被召仕云々。

綸旨書紙曰。宿紙。五人職事。内裏ニ宿直シテ以件紙書下綸旨儀也。

内裏二間ト申スハ。在仁壽殿。此所令護持僧參申御加持也。二間之觀音供ナド申。於此所行之也。帝王常ノ御座故。護持僧之外。綱所ナラデハ不參入也。サレバ綱所ヲバ曰二間預也。亦本尊等安置此所云々。護持僧者。東寺一二以下長者之事也。

法成寺者。執柄御願寺也。無双寺也。然ヲ近代令顛倒無跡形。結句寺院敷地皆成鴨川。而モ不知何處。無念也。



讃岐國善通寺者。弘法大師父ノ寺也。其實名謂善通。則用寺號。又誕生院者。則大師誕生之處也。兩壇ノ灌頂堂并勸學院有之。中古宥範法印。是教相之明匠。彼院主也。妙用抄廿卷ハ宥範抄之。其弟子宥賢又明匠也。仍任極官。但不勤仕束寺御影供令入滅畢。頗可謂無念。彼寺別當職者。随心院門跡有相傳。竄以爲規模者也。

位署者。前官。只實名計注之。但大僧正者。注前大僧正。其外前官。不注位署。然而近年僧正以下官位。其數不定之間。不及辭退。仍前官人ハ不可有之。今世ニモ若其員有沙汰者。律師以上其員外可爲前官。大僧正許一人法式守。其法者也。俗人モ大臣以下辭退其官。以後散位書之。其下注實名。國司計任四ヶ年後モ。前其國守ト注之也。

出世者ハ出世ニ可近付也。可然同宿ヲ不斷

アタリニ可置之。殊更病氣之時。世間者ヲ不可近付。旁可隔心者也。

若同宿ヲ細々ニ不可遣。他坊。縱法會ナリ共。不公事者時々者可斟酌。

若同宿ニ兒童ヲ不可預。共以失立身基也。可成出世兒童ニ。世間者ヲ不可近付。自幼稚出世之事ヲ耳ニ觸レバ。出世ノ後彌翫之也。

雖他宗可然人ニハ最可近付也。他宗之宗躰法則等ヲ一向不存知ハ無下ナル者也。所詮僧俗共。名人トイハン人ニハ可近付。必一得可有之。縱同法ナリ共。惡キ人ニハ不可近付。如何ニ心得テ振廻共。一度者可有不覺也。此事一品御室法守。常被命下。サレバ此宮ニハ自他門禪律宿老。公家ノ人々。常ニ令參上給。近比之様ヲ見及ビ。自門ノ事猶以知ル人ハ稀也。況他宗ノ禮儀哉。俗中之禮儀不存者。臨時ニ可迷惑事也。内裏仙洞ノ御事ハ有限御



事ナレバ。人皆有口傳攝家以下公卿之儀。可有故實事也。

茶者。自上古我朝ニアリ。挽茶節會トテ於内裏被行公事儀式。然葉上僧正入唐之時。重而茶ノ種ヲ被渡。桐尾。明惠上人翫之。サレバ本ノ茶ト云ハ桐尾也。非ト云ハ宇治等ノ事也。若人ノ人前ニテ茶持アツカヒ不知ハ無下也。大方可習知事也。建盞ニ茶一服入テ。湯ヲ半計入テ。茶筴ニテタツル時。タマフサタト湯ノ音ノ聞ユル様ニタツルナリト。阿伽井顯弁上人被申キ。サレバ彼同宿ドモノ茶タツル音ヲ聞ハ尤可然也。

人ノ同宿若輩ニテ。主人或ハ師匠ノ前ニテ珠數ツマグリ所作スル事不可有之。佛前或ハ堂社ニ參籠ノ壇所等ニテハ無子細可意得事也。

德大寺相國實時公被命云。人ノ藝能ハ。タトヘバ

連哥ノ最上手ト名譽ハ有トモ。歌ヲ一向無沙汰ナランハ愛ナカルベシ。圍碁ハ上手ナリトモ將基知ザランモ亦無念也。唯能程ニ何事モ習渡タランゾヨカルベキ。但其家々ノ家業ヲ繼グ人ハ。專其業ヲ本トスベキ也。

同相國被命云。人之家中ノ具足結構無益也。僧中ナラバ佛具以下ノ道具。俗中ニハ硯。文臺。風情ハ誠可結構。其外ノ事無益也。當時禪家并時衆風情ノ輩。坊中ノ具足ヲ令結構。以之。旦那ヲモテナシ令快然。是併世ヲヘツラフ而已ニアラズ。人ヲタブラカサント也。努々公家方ニ不可有事也。

周明監寺云。人ハ平生醫師ニ近付テ脉ヲ取ラズベシ。平脉取覺ツレバ。違例ノ時。脉又分明也。又病氣大事ナリトモ。日比令療治醫師ヲ。左右ナク改之事然ベカラズ。但無双ノ名醫師來ラバ可談合云々。二條殿故攝政良基公。仰云。大



人ノ輕タシキハ小人ノ重キニハ劣レリ。大人ハ物ヲ見ル事虎ノ如クニシ。歩ム事ハ牛ノ如クニスト云本文有云々。去ナガラモ上臚ノ上臚シキト。味噌ノ味噌クサキハ下品ナリ。（下服）御利口有ト云々。

依相承院之命、任筆之。努々不可有外見者也云々。

應永廿七

庚子

五月廿三日

宣守在判

僧俗重服事。

僧ハ灌頂之師匠也。俗ハ二親他界之時也。

僧者。衣袈裟ヲ

フシ金ニ染。帶モ同染テ令着用。珠數モ桐ノ

木也。扇ハ無紋ノ淺黃地也。不如法時者。袈裟

ニテモ帶ニテモ一色フシガ子ニ染ル也。法流

相續ノ仁ハ一廻着服。自餘ハ。五十ケ日以後

令除服也。但其モ可爲所意也。

忌中佛事者。或亡者之任置文。或相續ノ仁ノ

隨所意可有沙汰也。後常瑜伽院御室一品法守。忌

中十二時ニ彌勒供養ノ法也。朝ノ勤ニハ九條

錫杖。理趣經。光明真言等也。日中ニハ舍利講。或伽陀供養法之間ニハ誦五字明。夕ニハ禮懺尊勝陀羅尼三反。光明真言廿一反也。二六時中者。不斷彌勒ノ寶號ナリ。一時ニ三人番也。世間者モ加番唱寶號也。七日七日ニハ漸々理趣三昧有之。禪助僧正忌中如此。但其時者。七日毎ニハ八名三昧ヲ行畢。

俗人之服衣者。白直垂也。袖ノ露ヲ令略トテ糸モナシ。紐計也。紐ヲモ略スル說アリ。可爲所意也。烏帽子モコユヒヲ略スル也。童形モ着服ノ時ハ眉ヲ不畫云々。鎌倉ニハ白布ニ墨ヲチト入テ薄墨ニ染也。尤以道理ニ叶者也。

忌中三十五日以前。籠僧他所へ出ベカラズ。又他所ノ人モ内へ入ベカラズ。於門前令對面也。三十五日以後ハ自他出入無子細者也。近日奉行頭人等内々ノ云次ヲ稱奏者哉。傍若無人ノ事也。奏ノ字ハ限天子言事也。然則



關白以下諸家ニ物ヲ申者。申次ト稱スベシ。如  
レ此事。當世以外亂吹也。雖然順時世可得其  
意也。

細川武藏守頼之迄ハ執事ト稱ス。其以後皆稱  
管領。如レ此事依時事歟。

勸進ノ田樂。猿樂。棧敷ニ出ル事。先々ハ一官  
一職ニ至ル程ノ人不望其處。然而近代。二條  
攝政殿初テ見物セシメ給。門跡ニハ梶井門主  
同令出給。其後公家ノ輩并諸門跡見物連綿ナ  
リ。雖然近衛殿。一條殿ハ未出給ハズ。門主ニ  
ハ御室曾テ不令出給也。一年田樂棧敷多ク  
崩レテ。見物ノ道俗留命。其棧敷ニ二條攝政殿  
以下公家ノ人々。多令出棧敷之間。何者カシ  
タリケン落書ニ。

田樂ノ將某タヲシノ棧敷ニハ王計コソ登  
ラザリケレ

同棧敷ニ梶井宮令出給ノ間。落書ニ。

釘付ニシタル棧敷ノ破ル、ハ梶井ノ宮ノ  
不覺ナリケレ

其比者。如此棧敷ナドヘサリヌベキ人ノ出タ  
ルハ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然事ニ諸人思ヘリ。仍テ落書ナド  
モ有ケルニヤ。當代ハ只出ザルヲ以加難儀。  
諸門跡ノ兒ノ本結ハ左本結也。髮ヲモ左ノ脇  
ヘ引廻シテ直垂ノ腰ニハサム也。然ニ妙法院  
門跡ニハ本結モ右本結也。髮ヲモ右ヘ取テ腰  
ニハサムト云々。

狩襖等ノ付物結花。後ニハ略<sub>レ</sub>之。單物ノ後ノ  
トヂ革ハ略セズ。單物着用ノ時ハ。髮ヲカラハ  
ニ結テサゲザルニ依リテ也。狩襖。水干。直垂  
等ヲ着用ノ時ハ髮ヲサグル也。髮ニサハルニ  
依テ。付物等ノ菊トヂヲバ令略也。袍并舞裝束  
ノ時ハ髮ヲビンヅラニ結也。本結ノ上ニハス  
ガタトテ金ニテ打タル物ヲ付也。袍并狩襖ノ  
時ハ兒モ持<sub>二</sub>檜扇<sub>一</sub>。六位ノ扇。廿三橋也。十五歲以前ノ人ハ



アヤ杉ノ扇ヲ持也。綾杉トハ。黒キ栢ノ木ニテ作也。

受法師匠奉書ノ時ハ。禮節如何ニモ敬可書ナリ。日比ハ爲門弟程ノ人ナリトモ。受法ノ後ハ。禮節恐惶。表書ハ人々御中ト可書也。自元敬ベキ高家ナドナラバ。以此旨可令披露給ト書テ。禮節ヲバ。恐惶トモ又ハ恐々トモ可書也。表書ハ同宿之名ヲ可書也。

敎相師匠并聲明ノ師ニハアナガチ書札ノ禮無之。但ソレモ人ニ依リ時ニシタガフ也。

我ヨリ種姓遙ニアガリタル人ナレドモ。書札禮隨官位書遣ス事ナレドモ。其狀ノ文章ヲバ思ヒ入テ書ベキ也。禮節ハ同輩ニ書タレドモ。文章ヲバチト敬テ書タルガ可然也。但其モアマリニ敬テ殊ノ外禮節相違シヌレバ見苦也。タトヘバ禮節ハ恐々ト書遣トモ。文章ニハ如仰蒙仰畏入候ナドト可書也。又恐惶以上ノ禮節ヲ書テ奉ル程ノ人ノ方ヘノ文章ニ

如承候。如示給候。悅入候。本意候ナドト書タルハ以ノ外見苦キ者也。且ハ無智ナル程モ頓テ顯レテ口惜キ事ナルベシ。凡書札ハ後マデ殘物ナレバ。思入テ書ベキ也。禮節ト文章ト相應スルヤウニ能々思惟シテ書ベキ也。手跡ノ善惡者。昔ハ更々沙汰ニ及バズ。只狀ノ書樣。文章ノクダリ樣。文章ヲ請取手爾葉ナドノ事ヲ習沙汰セシナリ。手跡ノ善惡ナドノ沙汰ハ元享年中ノ比ヨリ粗アリケルニヤ。其昔ノ傳奏ノ仁。殿上ノ職事等ノ手跡モアナガチ善キハ稀ナルヲヤ。殊更名家ノ人々ハ年少ヨリ依令申沙汰。公事朝夕繁務ノ間。手ヲ習事ナカルベシ。サレバ古ノ傳奏并奉行之職事ノ書タル繪旨。御敎書以下アナガチ能書ト覺シキ手跡モ不見。中比ヨリ以來能書共多ミユル。定家卿ト云フ名人ノ手跡。以外ノ惡筆也。然ドモ明月記ト云フ名譽ノ記錄六合。皆自筆也。相搆テサ



リヌベキ人ハ。僧俗トモニ如何ニ惡筆ナリトモ自筆ニ書テ。文章ヲ惡シカラヌ様ニ書連ベキ也。用他筆者書ハ。ヲ、イナル無念ナル事ナルベシ。

僧俗トモニ人ノ遺跡ハ大事也。タトヘ嫡子生得ナリトモ。家ヲ持チ煩ヒ。奉公不沙汰ナラン非器ノ子ニ跡ヲ繼ガセンハ。斷絶ノ基也。僧中ノ法流坊迹又同之。見臣不如君。見子不如親ト云フ本文アレバ。見弟子不可如師匠歟。然ドモ依愛執多クハ非器ノ者ニモ令讓與事ノミアリ。口惜キ事ナルベシ。峯殿ノ御子ハ數輩マシマス御中ニ。御嫡子ハ九條殿。關白致次男二條殿。關白良實。三男一條殿。關白實經。ニテマシマス。一條殿最末ニテ御座セドモ。御器用ト大殿見參ラセサセ給テ可嫡流ノ由御置文ヲ添ラレ。一流ノ御文書等殘ラズ一紙ニ讓進セラレ畢。然三流ノ御中ニ今ノ世マデモ一條殿ハ

御才學モ勝レテ御座セバ。大殿ノ御讓リモ賢クコソ。

同宿等主人ノ心中ヲ不知者。云甲斐ナキ事ナルベシ。夙夜ニ主人ハ何トカ思フラント心ニ懸テ思ヘバ。自ラ可<sub>レ</sub>知者也。唯何心モナク振廻ハンニハ。必ズ違ヌル事ノミ可有。主人ハ十日廿日ノ堺ヲ隔ツ共。不斷ニ其主人ノ心ヲ爰ニテ思案ヲ廻ラサンニ。サノミ違フ事ハアルベカラズ。

同宿以下。主人ノ心ニ不<sub>レ</sub>違者ハ大切ナリ。眞實我如思振廻ハ誠ニ有ガタシ。然トイヘドモ自年少常ニ加折檻令<sub>レ</sub>近習者。ナドカハ心ニ不<sub>レ</sub>違者モナカラン。深山ニ有猿風情之者猶以隨人訓恐人倫何ゾ不<sub>レ</sub>隨主人之命。只主伴ト共ニ無沙汰ナル故ニ人ハ惡クナル者也。サリヌベキ人ノ子ヲバ殊ニ十歳ヨリ内ニテ能教ヘ習ハスベキ也。其人天性惡カルベキ人



ナリトモ。能人ニ添ヒ能ク習ハサバ必ズ能ナルベシ。如何ニ器用ノ人ナリトモ。惡クモテナサバワロカルベシ。第一サリヌベキ若キ人ニ。若キ人ヲ不可<sub>レ</sub>近付<sub>レ</sub>必失アルベシ。若人ニハ宿老ノ近習付ヌルガ自然ト能キ者也。年少ノ人ノワルクナルハ。扶佐ノ人ノ不覺ナルベシ。譬バ馬二曲ヲ乗付タランガ如シ。如何ニ曲々シキ馬ヲモ能キ乗手ノ乗バ能ナル也。況詞心ヲ知レル人倫ヲ教訓仕損ズルハアタラシキ事ナルベシ。年少ノ時ハ能事ニダニモ數寄タルハ。成長ノ後カナラズ惡ク成也。年少ノ人ハ。少年ナルサマニテ諸事イトケナキガ次第ニカシコクナル者也。

居所ノ事。大臣家ニハ四足アリ。上中門アリ。殿上有。公卿ノ座アリ。公卿ノ座ノ邊ニ障子上ゲト云所アリ。此所ハ諸大夫ノ候スル所ト云云。古ハサリヌベキ大臣家ニハ藏人所モ有ケ

ルトカヤ。源氏ノ大將ノ亭ニハアリケルト見エタリ。遠侍トテ侍ノ候スル所アリ。小御所ナドノ傍也。隨身所有。車宿リ有。丸柱ナルベシ。親王家。右ニ同ジ。

名家以下月卿雲客ノ亭ノ事。四足不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。上中門同前。殿上并障子上。隨身所不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。寢殿ニモ日藏不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。車宿ノ柱モ四方ナルベシ。但勸修寺ノ經顯公任大臣ノ後造改宿所之間。悉以大臣家也。經顯公子息大納言經重。其子中納言經豐以下雖不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>大臣。父祖舊亭ニ令<sub>レ</sub>居住之間。譜代ノ半人ノ諸亭ニ不相替。又裏松一位大納言宿禰。一向大臣家ノ如シ。近代兩名家如此。

法親王家之門跡者。大臣ノ家ノ亭ニ同ジ。然而仁和寺御室ノ御坊。大聖院者。頗二條内裏ヲウツシテ造ラレケルト云々。

常ノ諸院家ハ月卿ノ諸亭ニ同ジ。



武士ノ家ニハ不造檜皮屋。皆板屋作ナリ。然近年稱將軍家渡御ノ在所。各構檜皮屋畢。中門廊以下。月卿ノ家ニ同ジ。但不立棟門。皆モロオリ戸也。又上ゲ土門ヲ立ル輩少々有之云。凡武家屋形作ノ様。随時代随威勢無其法式哉。

諸山寺ノ坊舎ノ作様。多分寢殿ハ板屋作リニテ中門廊有之。對屋ハモロハヤ也。但高野山ニハ檜皮屋ノ坊舎少々有之。度々御幸ナラシメ給フ謂レト云々。

近年サリスベキ諸院家ニモロハヤノ對屋有之歟。無下ニ見苦キ者也。對屋ハ對屋作トテ定レル様有之。上別ノ作様更無其謂。モロハヤヲバ常ニハ雜舍作ナド稱之哉。對屋作トハ軒ハ十間廿間ナリトモ妻ハ二間也。實ニ所用ノ子細アラバ。何間モ庇ヲ指ベシ。孫子庇マデモ無子細哉。北山殿ノ對屋ニ上乘院僧正道

尋于時橫川長吏。三昧院別當。祇候之間。依爲狹少庇ノ外ニ

又庇ヲサス。鹿苑院殿被御覽テ清涼殿ノ心地シテ有其興之由。被仰下畢。清涼殿ノ孫子庇ト申ハ。檜皮葺之庇ノ外ニ又板ビサシヲ指ル也。檜皮葺ニハ。時雨ノ音聞エテバ。板ビサシヲ指テ時雨ノ音ヲ聞召サントノ爲也。

家々文事。各當家ノ文ヲ車輿ノ網代以下ニ付之。或杉障子ノ縁ノ繪。或ハ唐紙障子ノ文等。一切ノ家中家具ノ蒔繪以下ニ。皆家ノ紋ヲ付ル也。又裝束ノ紋ニ。家ノ紋ヲ付ル家門モ多之。僧中ニモ家門ニ随テ紋ヲ付クル段子細ナシ。但僧中法服ノ紋マデ如家門紋ナラズトモ有ナン。且ハ片腹痛キ事ニモアリ。只法服袈裟ノ紋ハ。通用ノ物ニテアレバ蓮華唐草ノ宜シキ中比蓮花唐草ノ外ハ異紋トテ一向嫌ハレタル事モアルニヤ。其モ又一偏ノ儀ナリ。如此事ハ随時随人能々可有思惟事也。所詮其時



ノ宿老并有職ノ仁躰ニ每事談合スベシ。古ハ好ト申トモ當世アシキ事アリ。唯難ナキヤウニ可<sub>レ</sub>相計也。表ノ袴ノ紋ハ大紋多分通物也。相ノ紋ハチイサク遠文ニ織タルガ好ナリ。其モ人ノ所意ニ随フベシ。アナガチ定レル分ハ不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之也。

僧俗ノ衣紋ハサノミ引ツクロハデ。然モ衣紋ノウツクシキ様ニ着ナスベシ。凡裝束ノ衣文。上代ハ沙汰ニ及ズ。鳥羽院ノ御代ヨリ強キ裝束ヲ用ル故ニ。衣紋ノ沙汰出來スルナルベシ。上代ハ皆ナヘ裝束トテ。フクサニテ強クハ不<sub>レ</sub>調也。然ニ鳥羽院已前ノ人ノ影ヲ書トテ。鳥羽院以後初タル強裝束ノ衣紋ヲ書タルハ繪師ノ不覺也。如此事見知ラデ。或ハ難ヲ加ヘ。或譽ル人モ稀ニ成ヌレバ。好テモ惡クテモ有ナン。凡彼御代以前ハ男眉ノ毛ヲ拔キ。鬢ヲハサミ。金ヲ付ル事一切無之。及<sub>レ</sub>末代每事矯飾

ノ至也。大唐ニハ今世マデモ無<sub>レ</sub>略如<sub>レ</sub>此風情者也云々。

マナ初メ。袴着。元服。移徙以下祝ノ酒肴ハ。必ズ三獻ト云々。如何ニモ時刻延ザルヤウニ取沙汰スル也。凡酒無量不及亂云々。雖然後光嚴院御愛酒ニテ御坐ケル程ニ常ニ御酒宴有テ數獻ニ及ト云々。其御代ヨリ獻數加増シテ。或ハ五獻七獻九獻マデ被<sub>レ</sub>聞召<sub>レ</sub>タリ。依テ近比ハ酒ノ名ヲ九獻トゾ申合ケル。建武以來朝廷廢レハテ。天下ノ政絕果テ。君モ臣モ御隙有ケルニヤ。御酒宴ノミニテ有ケル。口惜シキ事ナルベシ。

内裏仙洞ニハ一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被<sub>レ</sub>召事也。一向不<sub>レ</sub>存知者當座ニ迷惑スベキ者哉。飯ヲ供御。酒ハ九獻。餅ハカチン。味噌ヲハムシ。鹽ハシロモノ。豆腐ハカベ。索麪ハホソモノ。松茸ハマツ。鯉ハコモジ。鮎ハフモジ。鵜ハ



ツモジ。但ツグミチ供御ニハ不備也。ツクトシハツク。戴ハ

ワラ。葱ハウツホ。如此異名ヲ被付。近比ハ將

軍家ニモ。女房達皆異名ヲ申スト云々。御菜ヲ

バラメグリト云。常ニヲマハリト云ハワロシ。

相原ヲバスイバ。引合ヲバヒキト申也。

内裏ニ御スエト云所アリ。常ノ人ノ所ナラバ

中居ナドノ邊也。内裏并仙洞ニ限テ御スエト

申スニヤ。近比者其外ニモ御スエト申ストカ

ヤ。御厨所トハ内裏仙洞ノ外者諸宮ニハ不可

申。而ニ御室ニハ寛平法皇ノ御時ヨリ御厨所

ト申傳タリ。常ノ貴所ニハ臺所ト稱之。又ハ

膳所ナド稱之哉。臺盤所ト申所ハ。内裏。仙洞。

執柄家ニ在之。又内裏ノ御厨所ヲバ臺所共可

申ニヤ。臺所ノ別當トテ中膳ノ女房ノ中ニ然

ベキ仁躰ヲ撰ラン。此職ニ被補。別當ノ局ト

號スルハ臺所ノ別當ノ事也。

毎日三度ノ供御ハ御メグリ七種。御汁二種ナ

リ。御飯ハワリタル強飯ヲ聞召ナリ。

大鳥ハ白鳥。鴈。雉子。鴨。此外者不備。供御ナ

リ。小鳥ハ鶉。雀。雀。鳴。此外者供御ニ備ヘズ

ト云々。

四足ハ惣テ不備之。然ヲ吉野帝後村上院ハ。

四足ノ物共ヲモ憚ラセ給ハズ。聞召シケルト

カヤ。サレバ御合躰ノ後。男山マデ御幸成ラセ

給ヒケレドモ。又吉野ノ奥ヘ還幸成セ給フテ。

都ヘハ終ニ一日片時モ入セ給ハズ。是ハ併天

照太神ノ神慮ニ違ハセ給ヒケル故ナリトゾ

人皆申合ヒケル。

御室ニモ古ヨリ參ラセザル物多之。而近比ハ

當世樣ト號シテ其沙汰ナシ。不可說之云々。

親王ト大臣ト參會之時者。每度各盃也。德大寺

ノ故太政大臣。實時公。後ノ常瑜伽院御室。一品法守。惠

命院ニ御座ノ時常ニ被參之間。連々被勸。一

獻三獻ナガラ各盃也。但彼太相國未ダ内大臣



ノ大將ニテ有シ時。三獻ヲス、メラル、ニ。二獻者各盃。三獻目ニハ。大將我前ノ盃ヲバ潜ニ袖ノ中ヘ引入テ。一品御室ノ聞召タル御サカヅキヲシキリニ被<sub>レ</sub>申請畢。如此事時ニ隨ヒ。故實更ニ兼日ノ指南ニ難<sub>レ</sub>及者也。

山名修理大夫入道。

紀州。作州。兩國守護。

之比仁和寺ニ居住之間。年始ニ罷<sub>レ</sub>向彼宿所之處ニ三獻ノ義アリ。每度各盃也。銚子ハ片口ヲ褻タリ。此事

高尾張入道以正。難之云。銚子ノ口ヲ褻事ハ全分略義也。彼禪門ノ家中ニハ不足ナリ云々。於以正者雖不肖ノ身。片口ノ銚子以下祝ノ義式ノ具足ハ。高武州師直ガ代ヨリ京中ノ職人給之間。如形不足ナシト云々。

於内裏殿ト人ヲ申ハ。執柄家之外ハ不可有之。關白殿御參リ共。攝政殿ヨリ何事ヲ申サル、共。於御前申スニ諸人無異儀也。親王ヲ於御前何殿トハ不申也。大臣以下公卿ヲ

バ官途計ヲ申スナリ。參議ト僧正以下ヲバ實名ヲ申也。

親王。攝政家ニテハ。參議ト僧正トヲバ實名ヲバ申サズ。居所ト官トヲ申也。法印以下ノ僧綱ヲバ皆實名ヲ可申也。

僧正ノ前ニテハ。法印以下僧綱ヲバ皆實名ヲバ不稱。但其僧正貴人タラバ。法眼。律師等ヲバ可稱實名。可依人。時ニ臨ミテ能々可思慮者也。

内裏ニ武士ノ女ヲ被<sub>レ</sub>召仕ニハ。熱田大宮司高。上杉ノ女ハ中臈ニ被<sub>レ</sub>召仕。其外ハ下臈女房ニ被<sub>レ</sub>召仕。中比一色ノ大入道ガ女。内裏ニ祇候セシ下臈女房也。但如斯事隨時代相替事アリ。一定スベカラザル事歟。

女房次第。大上臈トハ攝家ノ御女也。上臈トハ三家等ノ大臣ノ女也。中臈トハ名家等ノ女也。但名家ノ女。典侍ヲ渡スレバ至<sub>レ</sub>上臈。令<sub>レ</sub>勤御



陪膳。名家ノ女外ハ典侍ヲバ不渡也。下薦女房トハ諸大夫或ハ北面等ノ女也。御室ノ坊官行賢法印後胤ノ女。安居院澄憲法印ノ後胤ノ女。八幡祠官ノ女ハ皆中薦ニ被召仕也。但俗人ノ猶子ニ成也。後圓融院ノ御母儀崇賢門院ハ八幡祠官ノ女也。而ニ廣橋大納言兼繼卿猶子ニシテ後光嚴院ヘ參ラセケルヤ。初メハ三位局トテ中薦ニテ宮仕ハセ給ヒケリ。

童殿上人トテ古ハ攝家ノ御子ナドモ。元服以前ハ宮仕ハセ給ケリ。然シテ其儀久シク絶タリ。中比八幡ノ祠官。善法寺。兩三代令相繼。童殿上人ニ令參給ニ昇殿面目之至無。比類者歟。頗可謂傍若無人ト。凡文永弘安兩度御祈禱ノ賞ニ被准。四位殿上人之間。當社之社務以下祠官一向成。殿上人之思。雖然五位職事等遣御教書。不書上所云々。仙洞トハ尊號蒙ラセ給テ後ニ申ス也。未ダ宣

下ノナキ時者。院ト申也。太上天皇ノ宣下ヲバ尊號トハ申也。位ニツカセ給ハヌ宮ニテ渡セ給ヘドモ。其御子位ニ即セ給ヘバ。父宮必ズ尊號ヲ蒙セ給也。御位ヲスベラセ給タル院ニテ渡ラセ給ヘドモ。尊號蒙ラセ給ハヌ事モアリ。御位ニ即セ給ハナドモ。御子位ニ即セ給ヘバカナラズ尊號ヲ蒙セ給也。近比高倉院ノ御子ニ守貞親王ト申宮マシマシケリ。其御子後堀河院踐祚之後。尊號蒙ラセ給テ後高倉院ト申ケリ。凡如此例不可勝計。

本云

墓ナクモ書集タルモシホ草賤キ蜚ノシハサトモ見ヨ

同七月日重テ書加畢。

ムサラシキ事書アツメタレバ。此一帖ヲ海人ノ藻芥ト名付ベシ。

長享二年三月十六日書功訖。尊重。廿七歳。永祿九年六月五日書功訖。尋惠。五十一歳。右海人藻芥以屋代弘賢本并流布本按合了



群書類從卷第四百九十三

雜部四十八

駿牛繪詞

此ごろ牛ごのみとかや。車好みとかやいひて。  
おどろくしく目に見え。耳にも餘りたる事  
おほく聞ゆめり。大かたは人として我もちゐ  
る程の事の行衛もしらぬは。いと本意なかる  
べき事なり。まして出仕の行粧などは人の目  
をたつる事なれば。牛飼のふるまひ車だちな  
ど。かたぐなゝらむは見ぐるしかりぬべし。又  
褻御幸などは天下の見物にする事になり  
たれば。上様にもよしあしを御覽じわかれて。  
御牛飼をもめしつかはるべきことにや。故常  
盤井入道相國寛正は。すべてこくしんをさきとし

て。子孫までも駿牛など好む事をばいましめ  
られけれども。我身はその道をよくしりて。  
うちくゝのありきには。牛を車にいるゝより  
かけはづすまで。牛飼を教へられしと。その  
世にあひたりし人の語り侍りしと。祖父の相  
國頼朝禪門さやうのさたありけるうへ。後鳥羽院八十八代  
ちかくめしつかはれければ。かたぐゝ才覺も  
おはしけん。又馬の手綱をよくしりたる人  
におはしければ。馬の口。牛の鼻のあひしらひ  
かはらぬ事にて侍なれば。さやうのかたにも  
かよはししり給ひけん。それは褻御幸などに  
も御うしをはるゝ事は。返々見ぐるしき事成



とぞ申されける。御牛の心をも振舞をも御牛飼よく見おほせて。もだし難き所などを。をのづから一あし二あしあがらせたるおりも。かならず御車をとめて。むながいなどゆひなをすよしにて。供奉の人。馬のあしをいたさずして。まいりつるやうにまかなふ事などぞうけ給りをきはんべりし。上様の御事は。みまくもかしこければ。をろかなる身にてともかくも申にをよばねども。人の目をもみゝをも驚かすやう成事は。御用意あるべくやとおぼす。周の八駿も諷諭のはしとなる。まことに深きゆへあらんかし。けやけきものをあいすることは聖人の戒むる所なり。されば唐の太宗も用る所おほき時は。政のすたるゝ事をいましめ給ける。すべて上の好所には下したがふならひなれば。すくまじからぬ事猶しかあり。ましてかやうにそゞろがましき事は。なべて

人の好むならひなれば。家々のいとなみと成ぬべし。いたく家ゆたかならむともおぼえぬ人々。牛飼童。中間男。色々のいもん。いやうのひたゝれ。丹青の妙をつくし。金銀の泥。まして我をとらじと競ひてたつこと。その日のついえをおもふに。ほど／＼十家の産にすぎたらむも。朝家のためやくなし。私門の爲わづらひあり。抑牛飼おほくはしらかす事。いつ比よりいできたれる事にかと覺束なし。彌王丸が子孫繁昌して。室町院御牛などに多くめしぐせられけるよりの事にやと覺ゆ。臣下にきては牛飼數輩めしぐする事しかるべからざるをや。事の次いかでかいましめざるべきをや。善相公の貞觀の封事にもおろ／＼かきのべられたる。時として。何事にても人のわづらひ。財をついやす事あれば。やがて一國のついえとなりて。天下おとろふるなり。心あらん



人。よく／＼わきまへしるべき者なり。

昔は台岳の蘿洞をしめて。一乗圓頓のをしへをまなび。今は大原の草庵に住して。九品往生の行をつとむる隱老あり。去五月五日。舊友にいざなはれて。都のかたぎまへたちいづ。鳩杖にたすけられ。岩のがけ地を匍匐して。ひつじの終ばかりに賀茂の河原に到ぬ。雲收天晴て日影もことにはしたなきに。はる／＼と青みわたりたる芝の上涼しげに。所々のあふちの花おりえがほにさき匂ふ。所どもの木かげ露おち。みたらしの河風涼しくて。ゆきすぎがたければ。しばし寄りゐつゝいきつぎをる程に。方々より人多く集りきて。木のもと堤のうへなど思ひ／＼にならびゐたり。あやしげなる事をやりきたり。牛をかけはづしひきならぶ。かたはらなる人にこはなに事にかと尋ぬれば。けふなん此宮の五月會競馬見物の車のか

へさ見侍らんとて。いであつまる人なりといふ。扱はかゝる山がつの身には。なにばかりの見事あるべしとも覺え侍らねど。かのさかを越きつる老の身くたびれて。なをたちさり難ければ。やすみゐたるに。さま／＼のうしをひき來りて。こゝかしこの木かげ。水のあたりにて。なではたくめり。かゝるほどに。北の方より車一兩やりく。人これを見て。むれゐたるともがらたちゐのぞみ走りむかひなどす。堤の北にあふち六七本なみだちたるしたに。牛をまうけてかけかへんとす。うし走りめぐりて。なにとやらむひしめくとおもへば。はやかけてけり。ちかくよるをみれば。まづ若き童三四人。繪かき縫物したるさま／＼の直垂に金銀にてつくれる刀をさしたり。かろらかにしりたる足元。いとめやすし。車をみれば。ながえことのほかにそり上りて。網代あをくこま



やかなるに。こはしさしはりたる下簾を簾の左右よりはさみいだしたり。ながえの金物は鈴などをうちをきたるごとく。さきほそくつくりあげたり。牛をみれば、せいすこしちいさくおもやせたるが。額けざやかに白きに。あさぎなる縄を鼻にとをして。うなじにむすびたり。これもわかき牛飼。すはえをこしにさして。縄をばうしろざまにとりて。さきにたちてすこしこしらふるさまに歩みたり。若き男のすがた。ことがらわらぐつのはきやうまでも牛飼にかはらぬ。むながいとあはせて左の手にからみて。右の手してくびきのもとにをしつれたり。牛くびきをいたゞきあげ。尾をふりてあゆむに。いくほどなくて牛飼車の右方へたちなをりて。縄くりもちたる左の手をながえにかくるかとおもへば。牛のあがきをいだしておどる。この男むながいをすてゝ。かの

そりあがりたるながえをさへげてはしる。うしは車を出ても猶とゞまらぬを。さきに走つる牛飼かへりあひて。はなにとをしたる縄にとりつきて。とかくしてひきとゞめたり。さるを龜の甲のかたちしたる笠のひの木してつくりたるをかづきて。あるひはけしかる衣。或はおかしき直垂などきて。さまぐの姿したる者共走りかさなりて。車の前後にたち進みて。とかく興じのゝしる。はては車も牛もみえぬまでたちめぐる。夢などを見る心地ぞし侍也。凡此事を案するに。法華經譬喻品に。長者火宅にあそぶ。諸子をば大車をつくりてこれをたばかり出す。其車高廣。衆寶莊校。周匝欄楯。四面懸鈴。又於其上張設幢蓋。亦以珍奇雜寶。而嚴飭之。といへり。かの車高く廣して。その飾めづらかにさまぐなりと見えたり。しかあればながえのそりあがり。鈴にことな



らぬ金物も。ゆゝしき下簾も。すでに經文に叶へり。又いはく。駕以<sub>レ</sub>白牛。膚色光潔。形軀殊好。有大筋力。行歩平正。其疾如風といへり。かくるところの白牛。はだへいさぎよく。其姿殊よく。大きに力ありて。歩みたひらかにたゞしく。早き事風のごとくといへり。黑白は相對の色也。これによりて。白牛は人間にあらざれば。黒牛をこれになすらふ。そのさまを遊び。はやきをこのむ。又々經文に叶へり。けふこのさまの牛車をみるに。釋尊。まよひの衆生の愛着。そのみちまちくなるべきを。とりわき牛車のたとへをしもとき給けるは。人間のもてあそび。これにすぎたる事あらじとばかり示し給ひけんも。今更たとく。隨喜の涙もとゞまらず。濁世の凡夫この道に心をかけざらんも。かへりて木石のたぐひなるべきと覺えし。ある車は。元よりゆひたるむながいをはか

にとりて。そひ牛飼。そばひらにてなにかとまさぐるは。はなもしはわきなどを。とがりたる木のはしゝてさすなるべし。牛いたさにくらくしてあがきをいだせば。やがてむながひをはずす。あるはうしろおちたる牛をとかくひき入ければ。わの音におちて。かたへの車の中へをどりいれば。かたはらいとくるし。あるは又下簾の中をとちたれば。すゑばかり分れてひらめく。こはき下簾の浦山しさに。糸してとちたるなるべし。うちにこもりゐて。世中思ひやりたるらん心の中。いとおぼつかなや。あるはながえけしからずそりあがり。うちたへてさしあげたるやうなれば。中にて人のり給へるべしとも覺えぬを。かたへの人にとへば。半帖をかたたかのやうにさして。うしろにさうやくの樣につなをはりたりといふ。のり給らん人の御心おもひやるもわびし。かやうの



事ども目をとめて見わたるかたはらに。よ  
はひもゝとせにをよぶらんとみえて。びんひ  
げは黒きすぢなき翁の。これもかさをきたり。  
いやしきさまながら。目ぎはことがらいと心  
あるものと見えたるが。牛車の事とかくい  
ひゐたり。そのかたはらにふかく頭をつゝみ  
て。目ばかり出して。くろき衣のあやしげな  
るを着て。たづななどいふものにやあらん。濃  
く薄きむらごの布をおびにして。かろらかに  
いでたちたるものよりゐて。さまゝの事を  
かたらひあへり。めづらかなる事をもきくか  
なとおもふほどに。

繪

衆頭者問云。されば車はいづれの頃よりいで  
きて。かゝる世の飾とはなり侍けるやらん。い  
かゞき置給ふと。翁答云。そのことはり侍。た  
れもこのこと覺束なくて。ある上臈にとひ申

侍しかば。この事。内典には法花經譬喻品に三  
車のたとへをとかれたるは。佛御在世の已前  
より侍けるにこそ。外典には文選と中文の序  
に椎輪は大輅のはじめといへる。その元始を  
たづぬれば。漢家には黃帝の御代天下にはじ  
まりたることおほく侍なかに。奚仲車を造と  
いへり。事のおこりまことに久しくなり侍け  
り。本朝にも上古には后宮などのほかにたや  
すく用ひられざりけるが。仁明天皇の御宇承  
和の比よりぞ大臣以下公卿はまゝゆるされ  
侍ける。五十九宇多の御門御宇寛平の頃よりぞあま  
ねく世にびろまりける。今はさしも侍ぬとも  
がらまでも世ざまゆたかになりぬれば乗用  
する事になり侍。いと淺ましきこと也とこそ  
おほせられ侍しかといふ。重間云。牛をさか  
りにもてなさるゝ事は。いつごろよりの事に  
て侍りけるやらんといふ。答云。我等かやうに



はべる下臈はつたへる日記文書もはべらず。  
たゞ人のおほせらるゝ事の耳にはとゞまる  
ほか別の才覺もはべらねば。むかしの事は知  
侍らず。これも上臈の仰られ侍しは。漢家には  
農耕のもととして。牛を車などに用ひること  
はいと侍らぬにや。本朝には仙洞の儀式は白  
河鳥羽<sup>ニセキ</sup>の御時よりこそはじませ給けれど  
も。彼兩御代は猶こと幽玄にて。牛馬の御沙汰  
などまでは分明ならず。臣下の御中にはさる  
人々もおはしましけるやらむ。江中納言殿匡  
房。御才覺人より殊におはしましけるが。牛の  
事もはらさたし給ひけるとなん。さては後白  
河院御代こそよろづのみち／＼は花やかな  
る御事にておはしましけるが。その御代には  
池大納言<sup>頼盛。平太政入</sup>。牛道よく知給たりけれ  
ば。勅定によりて。一卷の文をつくりて奏聞せ  
られける。御牛童十王丸おなじくこの道をき

はめ存知したりければ。十王丸が説とのせら  
れたり。又堤大納言殿<sup>朝方。冷泉中  
納言殿御息</sup>。牛馬の道すぐ  
れたる人にておはしましける。出雲國を知行  
し給けるに。牛相すべき様など當國へしるし  
下されたりけるをば。堤大納言殿牛文とて。今  
の世までも残りともまりたるとぞ承りをよ  
ぶ。ふるき名牛の類の中に。新大納言伊良禮子。  
牛<sup>出雲</sup>。是はもし彼亞相の御牛にや覺束なし。其  
後は後鳥羽院御代<sup>八十二</sup>。諸道を御興行ありしかば。  
牛馬の御沙汰もことにはえある御事にて侍  
ける。王胤には冷泉宮<sup>頼仁親王  
小嶋と申</sup>。ことに御好あり  
て。一卷の文をえらび給。これ小嶋宮牛文と  
て世にとゞまり侍。執柄家には普賢寺禪定殿<sup>兼通</sup>  
下。なにごとにも暗からぬ御事にておはしま  
しけるが。それこそ又うるはしく牛の髓腦を  
ばしらせ給ひて。あるべき式まで御記にとゞ  
まりたるとうけ給りをよび侍しか。晝圖の御



筆までもたぐひなき御事と聞えさせおはしましに。良經後京極攝政殿又御才覺もめでたくけるが。御筆の自在に御意に任せられけるあまりにや。御繪をぞあそばされ侍ける。さてぞ後京極殿御馬、普賢寺殿御牛とて、一双の御事には申つたへて侍。卿相には按察使中納言殿。光親。葉室中納言光雅息。雲客には牛玉中將殿。御實名なにと申さゆゑしき。僧には二位法印御房。尊長。一條二位殿能保息。この道をこのみて人々にあらそひ申されける。紫野のかへり遊に申ける事に。法印御房がしきりに按察殿の車をぬかむとせられけれども。ひまもあらせずやりければ。前途を達せられず。師子丸と申名牛は。すなはち彼法印の牛なり。それもかへり遊の日。彼牛をかけられけるに。一條大宮にて石にはせかけて。車をうちかへして落車す。時にとりて世のさたにて侍き。か

かるほどに承久に時うつり事變せし後は。天實錄下いたくはなぐしきことも侍らざりけり。おほかたかの御代には。牛馬の事にもいとめづらかに興ある御事どもおほく承及びしかども。あまりに久しくなりてみなわすれ侍。同御代。吉田邊に播磨僧都實名何と申しやらむ。と申人こそ。うしにとりてゆゑしきすすき人にて侍しか。坊中に數十間の牛屋をつくりて。洛中の病牛もしは小牛のゆくするをかひたつる事をこのみ沙汰しければ。世こそりて飼口をつけをきてあづけ侍しかば。さまぐいたはりたて、本主にかへしつかはしけり。播磨僧都の牛文と申て世につたはりて侍なり。又後堀河院御代の程にや。傳法院法印御房道嚴。五明の道くらからずして。人畜の醫療も鏡をかけておはしまし、が。牛の事その随一にて。當道の先達にはこれをぞあふぎ申侍し。さても後嵯峨院八十七



は末代の明王。何事もむかしにはむず。めでたきはなやかなる御事にておはしましゝに。御隨身。御牛飼までもすぐれたるともがら林をなして侍き。御馬。御牛も名をとめたるおほくきこえて侍き。寛元四年御脱履のはじめ。西園寺太政入道公経殿。もとより牛馬の御沙汰世にすぐれておはしましければ。御隨身。御牛飼も彼御かたよりめし進せられ侍き。孫太郎。應法師。賽王丸等也。これらかたへにこえたるともがらにて侍き。又室町院應子女宮にてわたらせおはしましゝかども。牛の善惡をもしらせおはしまして。御このみ他事なかりしかば。彼院中の月卿雲客をはじめて。上下我もゝとさたありしかば。牛逸物も牛飼の遣手も世におほく。この道の中興とも申べく侍き。そのゝち龜八十山院文永十一年歟。御脱履のゝち。よろづのみちゝことに興行侍しうち。牛馬の御さたも

故院後醍醐の御代にかはらぬ御事にて。彼御代の御牛ども。ふるきともがらひきうつされて。殊にはえある御代にておはしましゝに。室町の院御よはひひさしき御事にて。御牛の御沙汰もさしつゞきてうけ給はり及び侍しかば。夫よりこのかたけふまでの事は。みなをのゝ見さゝ申さるれば。とかく申におよばずとて。うちさりねぶりて。時々念佛してゐたり。曇頭又申て云。かずゝうけ給はる事。まことにとおぼゆ。かつは才覺つきて侍。むかしいまのうし飼のなりもてゆくやう。猶こまかにうけ給侍らばや。老翁いはく。さきにも申つるやうに。後嵯峨院御代ほどに名をえたる御牛飼。肩をならべて召仕はれたる事はべらず。孫太郎。たか法師。さい王などは。たぐひすくなきものどもにて侍しに。彌王丸非重代のものにて侍しかども。その身の器量拔群したりしを。女



院さまへ御さた有て進せられたりしかば。これまたかたへにはおらずと御さた侍けり。つぎの事はまづさしをき侍べし。これ四人の輩はいまのちかき世の上手どもにて侍しか。さればそのころ孫太郎。たかぼうし。さい王などには。さんさいのわらはべいづれもとより。うかゞひをしへられんところ。心に掛けて侍しか。さるにつけても次々にも名をあらはし。人にかぞへられたるうしかひいくらか侍けんに。今はその子孫侍らず。孫太郎がすゑいとうけ給りをよばざりき。高法師が子息。たか王丸。後嵯峨院ことに叡慮にかなひたりとて。朝弊はなはだしかりしが。子そく小たか父におさなくよりをくれて。かひくしからずやなど申侍しを。<sup>八十八</sup>後深草龜山兩仙洞へめし。いだされて侍しが。容儀進退父にもたちこえて。あながち牛かすにもあひたる事はべ

らざりしが。生得の器用とみえて。行すゑいばかりかとおくふかくみえ侍しが。おもひの外に横死にあひしかば。人みなこれをおしみ侍き。さて高法師があと。いまはたえはて侍り。さい王が子に六王。これもとく父にをくれて侍しかども。むまれつきたる堪能にて。父がつかひしなはどもつたへつぎて。ありがたかりし上手なり。いまはそれ程のてき見をよび侍らず。彌王は。後嵯峨院より龜山院までこにめしつかはれて。藝晴のこる所なくふるまひて。さい王。たか王などもまかりにしのちは。一のものにて子孫おほく繁昌し。嫡子いや松あとをつぎて。世にゆるされたりし。其子孫おさなくより逸物どもになれ。成人の今までも父たちそひて侍つれば。さすがなる所も侍らんかし。後嵯峨院の御代。諸亭には京極の大。臣殿の彌禪師。四條大納言殿の乙王など申侍



しは。その身の所作もがいぶん不足なく侍き。此ほかにもそうぞく中にしかるべく人にゆるされたるもののかず侍しかども。かのあゝとて聞え侍らず。まことや此うちいや王がすゑいや一。たうじ持明院殿には御つかひてつかうまつり侍は父が餘慶なるべし。又問云。牛にさまざまの名をつけらるゝ事。いづれの頃よりいできたるぞや。答云。牛馬異名。そのおこりはるかにとをし。天竺。震旦よりはじまりけるにや。悉多太子御馬は韃渉と名付られ。王君父といひける人の牛は八百里と號し。劉訓といひし人の牛は黒牡丹と名付けり。その外馬には周穆王八足。秦始皇七馬以下さまざまの名侍とかや。我朝には甲斐國より聖德太子にたてまつりける龍馬は。黒駒とて別の異名ははべらざりけり。又江談とて江中納言おほせられたる事をするされたるには。日本の

名物どもの中に馬はおほく見え。牛は見え侍らぬとかや。但ざい中將殿とてやさしき人のためしに申傳へたるは。平城天皇の御子なにかしの親王とかやの御息。皇孫とてもてなし申されて。仁明天皇の御宇承和十四年正月藏人頭になり給ひて。おなじ二月春日まつりの使にたゝれしに。公家よりびりやうの御車に角白と申御牛をかけて下されけり。さればかの角白や。この國の牛の名のはじめにてはべらむ。さてその中げんの事はしりはべらず。後白河院貳丸。後鳥羽院師子丸。香象。湊黒など。その影をうつされて。鳥羽殿の寶藏におさめられ侍とぞうけ給はる。後嵯峨院の御代よりの牛。洛中に名あるほどの牛。いくらか見をよび侍つらむ。すぎぬるかたはしだいにわすれはべれども。おもひ出すにしたがひてかたり申べし。又ことになをえたる牛どもは。所々に



影にかきとどめたる事おほくはべり。なにの  
要なき事にて侍れども。小童部よりふかく思  
ひそめにしほどに。上らうの御あたりに見を  
よびはべりしを。所望してとりをきたるが侍  
し。もとめいでて見せたてまつらむとて。後日  
にをくりたびたりしを少々うつしとどめた  
る。かくなん。

貊丸。筑紫牛。

後白河院御牛。鳥羽殿へ御幸に羅城門の前よ  
りかけらるゝに。彼御所の門まで歩足なくを  
どり侍ける駿牛なり。

香象。筑紫牛。

以下後鳥羽院御牛也。

獅子丸。越前牛。

もと尊長法印牛。彼法印兩度車を破て落車。名  
譽の駿牛なり。  
湊黒。

以上四頭。勝光明院寶藏本之由有其說。

新大納言伊良禮子。出雲牛。

小額。筑紫牛。

御室御牛。

傳法院寶螺丸。越前牛。

荒鳥。筑紫牛。

懸牽。越前牛。

已上五頭。左中將實忠朝臣筆。

繼木。筑紫牛。

山口。但馬牛。

玉箒。越前牛。

松谷樹。筑紫牛。

以上四頭。仙洞筆。

牛玉。筑紫牛。

常盤井入道相國。仙洞に進せらる。

引水。御厨牛。

同前。



下帷。筑紫牛。

雨雲。越前牛。

敦朝朝臣牛仙洞へめさる。勢大になりよき逸物也。

小角。筑紫牛。

若宮別當實清法印牛。仙洞へ進。容儀ことにすぐれたり。ちいさき角のおひめぐりて。目のしりにさゝへ侍し程に。度々さきをきられしなり。

長頭巾。越前牛。

敦朝朝臣の牛。女院へめさる。ながき角のさがりて。うしろへまがりて。角顔ありがたき牛の心すぐれたる逸物也。

丁子染。越前牛。

北山入道大相國。仙洞へ進せらる。此牛本國にてやぶさめかさかげに馬のごとく乗用し侍けるに。すぐれたるはしりにて侍ける。角のさ

きをきり侍しを後につくりあはせられしかども。ふつゝかにて見にくゝこそ侍しか。ありがたき牛也。

足白。丹波牛。

持衡朝臣牛。北山入道相國仙洞に進せらる。宇和末濃。

北山入道大相國仙洞に進せらる。

文字鳥。筑紫牛。

一條大納言公勝卿牛。仙洞にめさる。異賊がために筑紫牛まれなりし程。この牛逸物にて出来

侍しは。めづらしき事にてはべりき。

臥猪。相良牛。

同大納言牛。仙洞へめさる。勢大に心はやき逸物也。

此兩頭。檢非違使宗村法師是を飼いたす。

初花。丹波牛。

妙觀院經海僧正牛。仙洞へめさる。彌松丸。龜



山殿にて。東の四足より東西の上中門。すべて三門をへひ入て。勅祿にあづかりける駿牛也。あまりにつよくふるまひけるほどに。西中門の砌下の石輪にあたりて。車くだけたりしは。其まゝにていまに彼御所に残りはべりけるとぞ。

花菖蒲。但馬牛。

威徳寺實寶僧正牛。仙洞へめさる。勢ちいさく。なりよく。心又逸物なり。

池尻。大和牛。

持衡朝臣牛。仙洞へめさる。

方丈。丹波牛。

六條院長老牛。仙洞にめさる。角頸眼すぐれたり。又きつきの骨。左右へいでたる事。普通のうしにこえたり。尾毛ながくおほし。振まひことなる逸物なり。

夜叉天。周防牛。

毘沙門堂實超僧正牛。女院へめさる。かくるところ。すまひ。またすこし物におどろくせあり。

黒栗。越前牛。

四辻經豪法印牛。女院へめさる。

相村。大和牛。

高倉二位。

公兼卿。

牛。暫仙洞へめさる。遺手をわき

へいれず侍しを。彌松丸。祭御幸還御に左右殊にふかく入て。雨皮つけに付て。しづかにあゆ

ませて侍し駿牛也。

諸鬘。筑紫牛。

任寛法印牛。仙洞へめさる。此牛。前のえだはりてながほそく。すべてなりおもふやふならず。目の前に獅子の眉のごとくなる完あり。腹あしくてをどりをこのむ。

唐庇。牛名。

安嘉門院の御牛。北白川そだちなり。所生のは



じめよりさまぐにいたはりたてられしかば。勢もおほきに容儀もたぐひなき程の上牛也。女院御秘藏の次第のべつくしがたきもの也。眞影を花幔にうつされて。清凉寺の本尊の帳にかけていまにあり。

土用鶴丸。牛飼名。

岩山。牛名。塵王丸。敦朝牛飼。

敦朝朝臣牛。八十七後嵯峨院へめさる。勢大なる逸物也。

鷹法師。鷹王丸。

三色。牛名。

堀川大相國。牛脱殿仙洞へ進せらる。

唐柑子。

伏見宴遍僧正牛。仙洞へめさる。万里小路殿より常盤井亭へ御幸はじめにめされ侍しを。賽王丸仕まつりて。御車のくび木を引きらす。勢ことにちいさく。心ことなる駿牛也。

荒屋。

彌禪師丸。

善勝寺大納言。隆顯卿。牛なり。龜山院御脱履のはじめこれをめさる。

頸上。筑紫牛。萱王丸。

難波津。乙王丸。

大袖。丹波牛。六王丸。

前藤大納言。爲世卿。牛。しばらく伏見院にめしを

かる。勢ちいさき牛の心ことにわきかへりたる逸物也。

鵲。小鷹丸。

室町院御牛。被進。八十八後深草院。弘安二年六月三

日。仁和寺宮御受戒のとき。後深草院。龜山院。

兩院。一條御棧敷にて御見物。還御の時。小鷹

深艸院の御遣手にて。此御牛をつかふまつり

付き。諸人目をおどろかし侍しなり。

角總。河内牛。七王丸。

夏引。御厨牛。一名長黒。彌王丸。



常盤井入道大相國。仙洞へ進せらる。勢大になりすがたうつくしく。身まろくながくて。深山の骨そばよりはたかく見え。前よりは掌をあはせたるごとくにうすく。木つきの骨。左右へさしはりて三角にみえたり。あゆみをどりたぐひすくなき車引の逸物なり。後には女院へ進せらる。

虎丸。同牛名。

子細さきのごとし。勢大きにふとくあつく。完かたく力つよく。大かた心に和議ある逸物なり。

高倉宰相茂通卿。賀茂祭近衛使にて。花山院より出立侍しに。かざり車にかく。西の四足の内より出て。北へ向てをどる。彌王如木して是につきてはしりて。ことゆへなくわたし侍りしこそ。いとめづらかなる事にて侍しか。是もはじめ仙洞。後には女院へ進せらる。

薄彩色。河内牛。

彌松丸。

女院ちかごろたぐひなく御秘藏あり。そのあいだの子細つぶさにのべがたし。大方そのふるまひありがたくはんべりき。彌松丸がほか。つゐにこれをやらせられず。

大黒。越前牛。

彌一丸。

女院より大覺寺殿へ進せらる。大きな牛の容儀よく進退ある逸物なり。

武藏野。筑紫牛。

彌鷹丸。

實淵僧正牛。女院へめさる。をどりてとゞまらぬ駿牛なり。うす色むさし野とて一双に申侍き。

岩波。大和牛。  
本名伊和野邊。

彌六丸。

左中將爲道朝臣牛。女院へめさる。ことなる逸物なり。車にて餘にかしらの高く侍と難ありき。

鴈。越前牛。

彌石丸。



任寛法印牛。仙洞へめさる。勢大に容儀すぐれたる牛也。をどりをこのみてやすくといまらず。

横笛。御厨牛。

彌孫丸。

北山入道相國牛。寛金龜山院へ進せらる。大なるう

しの容儀よく心はやくたぐひなき駿牛なり。

八幡末濃。筑紫牛。

松一丸。

尙清法印仙洞に進。毛色めづらしう。勢大に心

ある逸物なり。

松風。大和牛。

彌童丸。

朝忠朝臣牛。仙洞へめさる。庭にて殊に愛あ

り。

大笛。

松有丸。

妙法院僧正牛。仙洞へめさる。大なる牛の力あ

りてこゝろはやりたる逸物なり。庭にても車

にてもこまやかにけうあるさまに見えはべ

らず。

褻頭のもの又云。あはれおもしろう興ある事かな。つたへうけ給に。むかしの牛飼はみな牛をこらしてやり入侍けるに。このごろはうしをたすけほこらして。さまでなきうしをも面あるさまにもてはやさるゝはいかなる事にやといふ。老翁これをきゝて又云。よろづのことむかしいまの様はみなかはりたる事なれども。牛うし飼のありさまは。あらぬ式になりて。牛飼と申ものはうせはてたるとも申ぬべし。まづふるさまにいみじかりし牛のふるまひ。とをきあとまでは。しばらくさしをき侍らむ。翁がまのあたりみ及び侍し牛ども。このごろのうしにくらぶれば。獅子麒麟ともや申べかりつらん。それもみな車なれば。べらざりし程こそ。難車などにかけてさきづなむながいをもとり侍しか。やりいれられて。逸物の名をとりぬるのちは。縄ひとつにておもふさ



まにこそふるまはせて。主をば牛ごのみとも申。牛飼をば遣手とも申侍しか。されば持明院殿にいくらの御牛をかめされつらめども。いすかと申御牛。車なれずはべりしとき。北白川殿の御幸にかけられしにこそおもがいはいれ。さきづなむながいをもとられて侍しか。いすか程の駿牛。むかしもためしなく。のちにもありがたきなれども。これ猶ことのはじめばかりや。さるを當世未練の新牛を大略牛ごとむながいをとりて。人の中へいだす事。自を損じ他をあやまつ道なるべし。さるはたゞうゐくしく。たどくしきばかりにて。げにはすくよかにはしたなからねば。しいだしたることもなき。いふがひなしとも。我をしたりがほにもてなす事。かへすくかたはらいたく見ぐるしき事に侍。おほかたいかなる駿牛もしづまる繩は侍ぞかし。されば容儀よく

なりぬる牛は。檳榔。半蔀以下もしはかざり車などの晴の車にすかしもちひるこそ先途にてはべれ。綱などさす程になりぬることに。小はなづらをいれず。それになはぬ程の牛はまれなる事にてこそ侍めれ。されば冷泉の大臣殿院へ進せられたりしあしくまと申しふしぎの駿牛も。かざり車にかゝりて侍き。但これぞはじめて。小はなづらないれてかゝり侍し。それを。當世はいたくさしたることもなきものを。たゞ物さはがしくとりあらしてくるはせ侍は。牛のふるまひも。牛飼の手もとあしづかひも見えはべらねば。牛飼とは申がたし。牛おどろかしとぞ申べき。かやうにしつけぬるともがらこゝちしづまりて。まことしく牛をも歩ませて。目出あらん人に見え侍らんことのかゝはゆさにかくまぎらはし侍やらん。又實にもしとやかにやりとをしがたきにこそとをしはからるれば。



かへりてはことほりなるかたも侍。かゝる程に。いまはうしごのみと申ぬれば。荒者狂人のおぼえを主人にとらせたてまつる事不便にこそ侍れ。それをおもしろう興あるさまに。人の申さるゝこと。老者が所存にはたがひはて侍り。おほかたは。はづみかゝりたる逸物をよくあひしらひたるに。牛はながえのうちにて身をもみたるを。いかほども遣手はしづまりてあらしあしをもふみ。こぶしをもつかはずしてなびやかに。たとへば廻雪の袖の管絃にあへるごとくに。て。はかなき畜類のふるまひとも見えぬまでやるこそ。大事にても見ごとにも侍れ。さてをのづからをふときは。いづくをいかにするとも見せず。いだしてたゆむあしなくをひて。又心のまゝにとゞめ。或はをどりあしにて門をいだし。いれ。辻のまはり河のはひあがりなど。ことにおもひいれて。

興ある繩をもつかひたるをぞ。逸物のことゝ遣手のおもしろきことゝはきゝ侍りしか。賽王丸。冷泉大臣殿の御車を今出川殿のそう門のとよりをひて。そう門のうちの東西の中門。屏中門。五の門をたゆむ足なくをひ入て後。なをして御車よせにからりとよせける。これらこそ口傳も故實も侍らめ。さやうの車いまはおもひだにもよらず。沙汰の外に侍にこそ。また逸物とくせ物とはあらぬ事にて侍を。當世はたゞくせ物を逸物と心得侍る。大なるひが事に侍り。さては見物の庭にて車をたつることこそ牛飼の大事にて。牛の所作をもきらふ事にて侍しか。車あまた立たるあはひのいと廣からぬはざまへ。うしろざまにこれをいれ。かしらをなほすこと。又左右心にまかせて。牛飼のこぶしをまもりて。たまるところなきこそことなる見事にて侍を。いまものさは



がしげにやりもてきて。いかほどひろき所にも。牛をばいだしてさし入ひきいだすこと。いとみぐるしき事也。いづれのとしにて侍しやらん。公卿の勅使をたてられしに。もの見車たちこみたりしに。京極右大臣殿の御車をそくたちて。善勝寺の大納言殿の御車のそばに。僅に車一兩いるばかりのひまある所に。萱王丸御車をなをして入しに。どうばな大納言殿の御車のどうばなに。いさゝかさはりたりければ。不覺したりとて。しばしをひとめられけり。おほかたたてたりし物見車のうしをいだす事。ふるぎまは侍らず。前後左右おもふまにふるまはせて。たてしづめぬる後は。くび木やすめといふものをたてゝ。はたらかす事なく侍き。これもたゞよく繩にいりぬるうへの事なるべし。さるほどにいさゝかも。ふるぎまのまことしき事をもしらせ給へる御かた

がたには。近來の牛飼のさましかるべからずとおほせらるゝも侍とやらむ。當時牛にのりていでたまふは。大旨諸僧の中の兒。俗中にもわかくおはします御かたゞ。牛のいかなるがおもしろきとまでは分別し給はず。車のうちとしづかならず。人中にてけざましくおどろおどろしく。めにたてられたるばかりを本意にて。當時には其沙汰もなく。花の禊祭のころとて。にはかに中間牛飼のいたく牛の善惡もわきまへ侍らぬを。大和。河内。小野。細川などへつかはして。するかひをきたる新牛のそらぼこりしたるを見あひて。ありがたき物とおもひてとりきたれば。京中にでとかくなぶられぬれば。やがてこゝちもすてつ。まだいく程の日數をへぬまゝに。なを心もおちしづまらぬをば。ゆゝしき事とおもひて。その一節にものぐるはしくふるまはせぬるばかりに



て。そのゝちは又さしをき。其沙汰にもをよびはべらねば。なじかはまことの逸物も侍べき。おほよそむかしは見物の車前後をあらそひて勝負をし侍き。されば牛をこのむ人々の遣手は。すぐれたる逸物をわがものにやりつけて。もたむところ執しあひて侍りしか。をのが手にあまりては。勝負さらに心にまかすべからず。かつけふもみたまひつらん競馬のつかひの馬。いさゝかもあしにも口にものりじり心にかゝるところ侍れば。これをえらびあます。むかしの遣手と申は。みな此定にこそ心にかけて侍しか。上様の御事は申につけてかたじけなくおそれあることにて侍れども。先年後嵯峨院賀茂北野にて勅願の競馬あり。御車をたてられて観覧の時。御車の簾をなかよりきりて。二枚にてかけられ侍き。是もめづらしくはじめたる御事と拜し奉りしを。ある上臈

のおほせられしは。むかし冷泉院御子帥親王。敦道親王祭のかへさ御覧に。上東門院女房和泉式部とあひのり給しとき。一のすだれを中よりきりて。主が御かたばかりあげたまへりけると世繼に見え侍るとかたり給ひしは。これらをやなすらへもちひさせおはしましけん。かやうに残るところなき御さたにて侍しに。ある時。室町院賀茂に御幸ありて還御月くまなかりけるに。仙洞しのびてかむだちへ御幸ありて御勝負あり。仙洞御牛は引水。御遣手賽王丸。御あとぞひ牛飼鷹王丸。女院御牛には夏引。御遣手彌王丸。御そひうし名をえたる大牛の逸物也。かひなし。二頭御厨牛。ともにたる御牛どもにてこそかゝる御勝負も侍しか。仙洞御方やりなはされ。御車のやおれて侍り。女院の御車より御遣繩をまいらせられたりける。おもひよらぬふしぎとはうけ給をよ



びしか。あくる日おれたりける御車のやをつ  
つみて。女院よりまいらせられたりければ。仙  
洞にはねたくおもしろき事におぼしめされ  
けるとなむ。又いづれのとしにて侍やらん。そ  
のかみ賀茂のまつりに白川中將<sup>伊</sup>と二位法  
印御房<sup>俊</sup>と勝負侍き。中將殿牛はともずり。牛  
飼は四郎丸。法印御房牛はしか丸。牛飼千法師  
丸。土御門東洞院よりかけくみて。近衛。東洞  
院。花山院なつめの門の前にて。兩方とゝろめ  
かしはべりしか。いづれも牛逸物にて。かれこ  
れとどこほりなく侍しに。鷹司。東洞院のほど  
にや。溝のどろを牛蹴あげたるに。やり繩のき  
れ。はかまのすそよごれて侍しばかりこそ。な  
を千法師かずにさゝれて侍しか。これ二頭の  
牛。その頃の名譽の駿牛にて侍しかども。みな  
かやうにやりいれてぞ。かゝる勝負もはべり  
しか。おほかたそのかみのうし牛飼のやう。み

なこのしきに侍しかばこそ。物さはがしく  
かろくしきことは見をよびはべらず。いま  
は人の心なさけなく。物に心えぬことに侍  
ればさやうの勝負はあるべきにもあらず。さ  
りながら繩にいりぬる逸物をわがものにや  
りて侍はみどころもありて。心やすくこそ侍  
らんずらめとおぼえはべり。おもがひをい  
る事。持明院殿に小智と申し御牛。ふるく成て  
のち。はなきれいりてあぶなく見え侍しをこ  
そ。角はなづらを入。おもがひをいれられて侍  
しか。それも牛黒かりしかば。こんの糸をふと  
くして毛の色にまぎらはして入られき。人に  
見せじとなり。さやうの事はいまもまたにを  
よばず。此ごろよろづの牛にこれをいるべき  
事とおもへる。おかしき事にこそみをよび侍  
さればむかしのうしかひは。いかにしておも  
がひをいれず。むながいをもとらずして名



ある牛どもをばやり侍けるやらむ。まことにむかしの牛がみな驚牛どもにて侍けるかとぞいまはおぼえ侍。古今の不審なり。扱も牛の庭をひと申事。馬の庭乗にかはる所なし。まづ牛のおもむきを見參に入てのち。をふべきよしをうけ給りぬれば。繩をとりあはせ。楮をたて。牛飼のあしをふみさだめて。牛をしづかにもあらくもまはして左右へちがへ。とりあはせてはからせ。からせてはまたしづめ。かやうにをひ侍しかばこそ。うし飼ちからをいれず。うしのふるまひも残るところなく侍しか。さるを女院の御このみにて。庭の四方へとをくあゆませて。牛をひきたてならへる繩にて。いだすことをもてなされしを。彌王丸ことにそのていをえて。その姿ををひはじめしより。いまはみなくこのようをならひまなばんと心にかけて侍るやらん。さる程に彌王丸

がめづらかなりしさまはえつたへず。ふるき姿はうせはてぬ。又庭にても車にてもすはへは立てゝもちたるこそ本義にて侍れ。そのあいだはふかきゆへ侍り。たやすさればいまもはれの車をやるときはみなこれをたてたり。かつ見給らん。仙洞には年始元三の御薬のとき。御馬御牛を覧あるに。つなをさしていづる一の御牛もすはへをたてたり。又賀茂祭のかざり車をわたすやうなどは。いかなる小童部までもえをよびはべらむ。むねとはさやうのしきの程にて心得べし。よろづは外儀をなぞらへて内儀を用る事。諸道の通規なり。さるを當世の牛飼は。さしもはたらきはべらぬ牛に。楮はぬきもつことなし。たゞいかなる牛にもおぢおそれたるさまにて。すべて見るしう侍り。おほかたは延喜のこよみとかや。物の用にもたゝぬふる事をたづね給にしたがひて。申さゝらむ



もやうくしかりぬべきまゝに。口にまかせたるたはことども。いかにおかしく不思議にも聞給らん。としよりにゆるしたまへかしといふ。

駿牛繪詞者。花山院家秘抄也。輿服之制殆如指掌。最可秘藏云々。

元祿十三年正月

特進藤原判

右駿牛繪詞以大久保西山藏本校合畢

## 國牛十圖

あらたなり。こゝに馬は東國をもちてさきとし。牛は西國を以てもとす。はかりしんぬ。陰陽の精靈たるによりて。名をふたつの境にえたりといふことを。ことすこしきなりといへども。あへて此ことはりをわきまふるものまれらなるものか。但馬は賢哲のをしへかたがたあきらかに。牛は菟薺のうたがひなをのころところなり。王侯將相〔王侯將相〕これをもてあそび。泰民匹夫これをたのむによりて。五畿七道より京洛にあつまる事蟻のごとし。其うち皮肉筋骨につきて。かの所生の國あらはなることまみ及ぶところわづかに十ヶ國。見んものさとりやすからむがため。其形軀をしるして十圖と名づく。もとより管見のいたりなれば。十に八九はあやまる事おほかるべしといへど



も。をのづからかなふところあらば。又その要  
なかるべきにあらず。これたゞ心ざしのゆく  
にまかす。後見のあざけりかねておもひまう  
くるものなり。

筑紫牛。以<sub>ニ</sub>壹岐嶋牛<sub>一</sub>稱<sub>レ</sub>之。

そのかたち。めうしがほにて角さきほそく。耳  
じるしをきる。くびきのしたすこしうすく。骨  
ほそく。皮うすく。完すくなう。筋あらはにけ  
みじかく。すべてそのすがたうつくしく。えだ  
づめかたく。としおふまで。つまもとさはやか  
なり。印まち／＼なり。

上古より上牛駿牛これにおほかりけるに。ひと／＼世異  
賤。此嶋にをそひ來て。かすをつくしていけにへにもち  
ひけるによりて。なかごるまれになりたりしが。いまは  
もとのごとくいできになりとかや。



御厨牛。以<sub>ニ</sub>肥前國宇野御厨眞牛<sub>一</sub>稱<sub>レ</sub>之。

角ながく骨ふとく。皮完あつく。えだふとく。

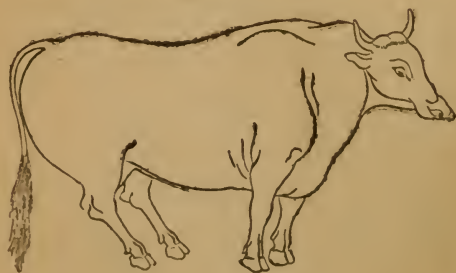


おほかた牛  
 大きなり。  
 中古の名牛  
 おほくこれ  
 にあり。印。  
 大文字に鞆  
 繪。自三故今出  
 川入道太  
 政大臣家被  
 下此印云々  
 或云。大文  
 字にはあら  
 ず。散毬打に  
 鞆繪といふ  
 と云々。



淡路牛。

あたませばく。  
 角さき上へは  
 ねて。完かた  
 くなか骨すぐ  
 に。みじかぶと  
 なり。凡せいち  
 いさくして力  
 たゞし。すぐ  
 れたる逸物す  
 くなきものか。  
 近年西園寺  
 より御厨の  
 印をさゝせ  
 られ。又大  
 きなる牛も  
 出来歟。





但馬牛。

ほねほそ  
く。完かた  
く。皮うす  
く。腰背ま  
ろし。つの  
蹄ことに  
かたく。は  
なのあな  
ひろし。逸  
物おほし。



丹波牛。

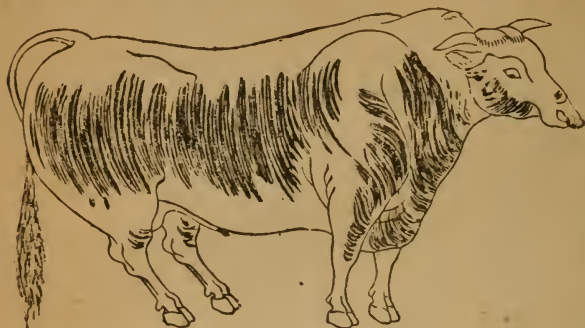
大略但馬牛  
におなじ。ひ  
たゐの。かみ  
しげり。まな  
こおほきに  
出たり。□  
□ ひり  
て。皮さきの  
骨つき出て。  
よせなはの  
あたりかれ  
たるごとに  
けやし。近年  
逸物おほし。





大和牛。

ほねふとく。完皮あつく。頭肩大に。ひくさが  
 へうしろお  
 ほきなり。腰  
 ひらにあし  
 ふとく。蹄大  
 にうすく。角  
 はこまかに  
 ひさしくつ  
 く。角蹄やは  
 らかによは  
 し。ふるうな  
 るまゝに足  
 もと見ぐる  
 し。近年逸物  
 おほし。



河内牛。

角のつきや  
 う。あたまよ  
 りことにお  
 ひ出たるさ  
 まにて。額さ  
 し出で。こう  
 ろぎがほな  
 り。はなのか  
 はつよく。あ  
 なひろし。蹄  
 かたく。えだ  
 に完なく。せ  
 なかうすく。  
 はらぼねさ  
 しはる。逸物  
 あり。





遠江牛。

相良牧。白羽立牛。稱三相良牛。件庄蓮花王院領。

あたませばく。

角もとすき。つ

らそりて。耳の

ねつよく。小ひ

くさがり。上頸

あつく。腹骨ま

ろく。身ながく

してしたすぎ

たり。皮のかゝ

りえだ蹄。つく

し牛にまがふ。

腰尻さきまで

すぐにて。髀骨

のあたりみに

くし。よせなはの

あたりかれたり。

すべて牛す

くなうして駿牛あり。車にてはぬるくせあり。



人おほく誤りてつくし牛といふ。印いほりの  
なかにものあり。又すはまをもさすにや。

故今出川入

道太政大臣

家よりつく

し牛のちゝ

はゝを。こ

のまきにう

つされてよ

り。このす

がたなるよ

し有某説。

越前牛。

角もとふとく。

さきほそく。

耳すこしおほ





きなり。はなのかはながくつよし。うへすぐに  
わたりて。したくつろぎ。骨ふとく完あつくし  
かもかたし。腕すこしをして蹄うすくしてさ  
きぼそなり。あたらしき時はみじかくしてう  
すらかに見ゆるものなり。大なる牛。逸物おほ  
し。

### 越後牛。

あたませばくて。額のかみなし。つのながくお  
ほきに。耳おほきに。肩うすく。腹おほきに骨  
ふとく。完うすく。牛大に力あり。逸物まれに  
あり。十牛のすがた。大概はしにしろしをはり  
ぬ。このほか出雲。石見。伊賀。伊勢などよりも  
事よろしき物いできたるよし。つたえきゝは  
べれども。そのさまいまだ見さだめず。抑おな  
じたちのうち。角のかづき。身のつゞきよりは  
じめて。駒駿おなじからざるさま。しなぐに

して。いひつくしするを。このたつおもてに目  
をとめて難をくはふる人あるべし。是柱に  
ゝかはするたとへ。をろかなるをしはかりな  
るべし。たゞしるとしらざると。もちひるもち  
ひざるとなり。時に延慶三年戊辰五月十日あま  
り。雨の中のひまにしろしをはりぬ。

### 河東牧童寧直磨記之。

右國牛十圖以左京藤貞幹本書寫了



群書類従卷第四百九十四

雜部四十九

夜鶴庭訓抄

宮内大輔伊行朝臣

入木とは手かく事を申す。この道をこそはなに事よりもつたふべけれ。されど額。御願の扉。また異國の返牒。御表。色紙形。願文など人かゝすまじ。それがしの子とて。内院よりかけとも仰あるまじ。されど假名はかくべき也。世に手書につかはれむ定。御さうしなどぞ給はりてかゝむする。さはいへども假名はみちせばくやすき事なれば。このまんになどかかゝざるべき。

一さうし書様。まづひきひろぐるはしより書べ

し。普通には中より書也。家のならひにてはしより書なり。かくはしりたれど。多く中より書たる事あり。それはぬしのこのみにても又思ひあやまりても。又次々の人の。は。とてもかくても能ていに執せぬ也。されどさるべき事とはしるべきなり。又ての様々を一帖がうちにみせてかゝるべし。やう／＼といふはいろはかき。さうみだれたるさまかへて書べし。それも人々おほくさうしあはせなどにてても。てかきあまたきおひかくに。かたつまありてかく也。君の御造紙一部とあるものなどは。さは書まじ。うるはしくあるべし。ものがたりは手書



かゝぬ事也。人あつらふとも。とかくすべりてかくべからず。

一哥を書様。二行ならば五七五。一行七々。二行三行ならば五七。二行五七。七。一行。まで三くだりにあるべし。たゞ手だにうつくしくばないふ事はむげの事也。さればこそみちはいみじけれ。それにとりては三代集を書に口傳あり。古今には題不知。讀人不知。後撰には題不知。讀人も拾遺には題。讀人不知とわかちて書也。又先祖の大納言殿帥殿三代集を書給たるに。躬恒が名を三常とおほく書給へり。又法師とある所を法しとかゝれたり。様のある事なんめり。その人の子孫などは。先祖のしたる事をまなぶべき也。若人も難問人あらば。かうかうと答べし。造紙のほかのものは。女のためよしなけれど。家の風なれば。人よりもつまづまをすこしづつ可<sub>レ</sub>知事也。少々可<sub>レ</sub>注申。

一御喪。關白。攝政。大臣などのつかさを辭する事を申草は。はかせにつくらせて手書の書也。大事也。公卿の座のする。もしは藏人所のかみ。東三條殿にては二棟の廊の東面などにて書也。装束は衣冠。はかせは束帶。衣冠おもひおもひ也。料幣は檀紙。かならず三枚。御名注例によりてかく。祿ある度あり。祿あれば拜あり。二拜。

一大嘗會御屏風大事也。悠紀主基とて左右あり。五尺。六帖。四尺。六帖。づつ左右にあるなり。五尺には本文を書。四尺にはかなを書。はかせ二人。左右にして。本文はかんがへて。やがてそのはかせ哥よみなれば。哥も兼よむ也。さらねば別の人もよむ。悠紀の方の哥をばたゝかなに。主基の方はさうに書。秘説也。

一額は第一大事也。されどおほく古本を見て書額にとりて大内額。書かふる所どものある也。



一いそぐもの書には。筆の管みじかきよし。又いたくすみすらす。

一御願のとびら。本文をゑにあはせて土代をして書に。とびらの上の色昏形はすこしおほきに。しもはちいさく。さうなるひらはさうに。真なるひらは真に。一枚がうちに書ませたるはわろき事也。

一但居屋などのけちかき障子の色昏形は。上下によりて大小あるまじ。ゑなどは。上はちゐさく書。そのゆへあるべし。

一硯。第一唐硯。すゞりのよきといふは。するに墨も硯もともにつぶるやうにおぼゆべし。すりたる水のをそくひ。又泡ふかず。とろめかず。なめらぬをよきといふ也。

一夏の硯はとくきたなくなる。よひの水わろし。一墨はからすみよし。唐墨もわろきはおほくあり。からすみのよきは。をそくつひえめでたき

もの也。又墨よけれどもきらめかぬ料紙有。厚紙。檀帟。唐帟などの墨つかぬあり。されどそれもよきすみにて書たるが。墨つきはよくみゆる也。

一筆は第一菟の毛よし。大なるにてちゐさき文字かゝれ。ちゐさきにて大文字かゝる。をそくつゝ愛あり。たゞし書たる物ぞすこし文字よはくみゆる所あれど。わが手がらによるべし。詮にきらふはわが手いたらぬ時の事也。

一扇の手習は。文字繪あらば。ゑの心にかなはん詩哥を可書。あしでなどもよみときて書也。君の御扇には祝の詩哥を可書。又たゝみたるおりめにかくまじ。たゝみたるにものかきたると見せず書べし。かゝぬまのあるといふはこれ也。うらにかゝず。たゞし様によるべし。其故は。大納言殿一條院御時扇合ありけるに。唐紙のほそばねにはりたるに。みづから樂府



をおもてには眞に。うらには草にかゝれたりけるを。ことに御秘藏ありけると申つたへたれど。事にしたがふべしといふ也。

二硯瓶は一銀。二茶碗。三貝。四銅。

一わら筆。こも筆。書樣。結樣。とり樣あり。常の筆とるやうとはかはる也。

一鹿の毛の筆にて小字を書けるよし。

一雨中にも書。かたぐよし。身苦からず。はやくかゝる。墨もかはかず。

一燈の前にてものかくやう。ひるよりはすこしちいさく書とおもふが。おなじおほきさの文字にはかゝるゝ也。夜はおほきにかゝるゝがゆへ也。

一番帳とて堂僧の持物は手書書也。かならず三枚有。其三枚と云ひらに三行を書べし。是秘説也。東塔西塔によりて替る事有。かはると云は。偈の數の多くすくなき也。料紙。めでたき

昏にいろ／＼繪有。

一出家して戒牒と申ものあり。四月十一月にあり。檀紙した繪あり。三枚おくに比丘といふところをば必三行に書べし。端の行よりはすこしひきあげてたかくかく。座主の判所。眞に可<sub>レ</sub>書。

一經は本鉢は眞にかく。大納言殿かくべきやう書をかれたるには。いたく眞なるわろし。草といへば點おつるほどの草にはあらず。經師げなく見よきほどの眞にかゝるべし。法華經一部を人々あまたにかゝするに。一の卷八弓をば。其中の手書にかゝすべし。

一年中行事障子。

十二月の月文字を十二様に書べし。書かへてかく事。もじは行ごとにあれば書かへがたし。されどそれも。月をかふるていに。一月づつもかはりて書べし。すゝしのきぬにて。墨のいか



にもつかぬをば。はじめをいれてすりて書也。秘説也。

一君の御前にて御硯給てものかくやう。おりにつけて仰書などする事もあるに。御硯をば君にむかへまいらせておきて。われはさかさまにて書也。御硯なりとも御前ならざらんにはいふにをよばず。筆はいかならん成とも。とりつる筆にて。これかれとりてえりなどするこにあるべからず。筆をぬらしてきとまもりあげまいらすれば。かくべき事仰あり。たびくとひまいらするはびんなき事也。書はてゝは。硯の水にきとすゝぎて。かさゝして置べし。

一内裏額書たる人々。

十二門額。

南	美福。	朱雀。	皇嘉門。	已上弘法大師。
西	談天。	藻壁。	殷富門。	已上野身材。
北	安嘉。	偉鑒。	達智門。	已上橘逸勢。

陽明。待賢。郁芳門。已上嵯峨天皇。

又内の額書人々。

道風。内藏頭。佐理。左大弁。行成。大納言。定頼。中納言。

兼行。大和守。弘經。少納言。源左府。俊房。入道殿下。

皆有勸賞。

冷泉中納言朝隆。宮内少輔伊行。

紫宸。仁壽。承香。常寧。已上自南北。貞觀。

安福。校書。清涼。弘徽。已上自南北。登華。

春興。宣陽。綾綺。麗景。已上自東北。宣耀。

溫明。後涼。西東。

飛香。藤。凝華。梅。襲芳舍。又云雷室。昭陽。梨。

淑景。自南。

内裏の門。殿舍多かれどかゝす。むねとある

ところ許を書也。

平等院。字治殿。額源左府。俊房。

法成寺。御堂。額大納言行成。屏兼行。

尊勝寺。廣川院。額源左府。屏主殿大夫。

圓宗寺。額兼行。色紙形長季。

法勝寺。白川院。額屏俊房。



阿彌陀寺。御塔主殿頭公經。扉放入道殿定信。

證金剛院。色紙形中御室。額俊房。

寶莊嚴院。額入道殿下。屏朝隆中納言。

成勝寺。額入道殿下。

歡喜光院。額入道殿下。扉放入道定信。

寢殿。放入道定信。

御湯殿御所。平等院僧正行尊。廊花園左府有仁。

むげにまちかき御願どものとびら額など。又

たれが御願ともしらぬ事は。むげなれば少々

しるしたり。

悠紀主基御屏風書人々。

醍醐（生殿）野美材。朱雀。村上。道風。冷泉（時文）。圓

融。花山。一條。佐理。三條。後一條。行成。

後朱雀（定賴）。後冷泉。後三條。白河（兼行）。

堀河（伊房）。本院（定實）。章（兼藤）。新院。定信。近衛（後白）。當

院。朝隆。二條院。伊行。六條院。同。當今（高倉）。朝方。

能書人々。

寂勝寺。法隆寺。額關白殿。

圓勝寺。額入道殿下。屏放入道定信。

金剛勝院。額入道殿下。

法金剛院。額入道殿下。後戶御室。

殿上廊。入道殿下。

弘法大師。讚岐國。嵯峨天王。桓武第二皇子。敏行。右兵衛督。

美材。大内記。兼明。親王。中書王。道風。內藏權頭。

時文。木工權頭。文正。加賀守。佐理。左大弁。

具平。村上第七皇子。行成。權大納言。延幹君。法師也。

文時。定賴。中納言。恒柯。

橘逸勢。但馬守。關雄。下野守。兵庫頭。素性法師。

兼行。伊房。中納言。長季。土佐守。

定實。左京大夫。定信。宮內權大輔。伊行。宮內少輔。

弘法。天神。道風。三聖之由見。世事要略。

此抄は伊行卿被書與息女云々。

明應三甲寅秋九月廿八日。任書本。雖爲不密

繁多。偏爲備愚昧之所見。卒馳短毫畢。敢勿

及外見之嘲哂比興也。

右夜鶴庭訓抄一卷以立原萬藏本書寫以屋代弘賢藏本按

合畢

夜鶴庭訓抄

卷第四百九十四

夜鶴庭訓抄

百四十七



才葉抄

一名筆跡抄

宰相入道教長口傳。

安元三年七月二日。於高野山庵室密談。

諱は觀蓮。難波權大納言忠教卿  
第六男。參議正三位。

一筆は未染墨新筆にて文字を書は。帶とけひろげてあしき也。墨をぬりて乾て。少し墨枕あるが能也。

一法性寺殿の御筆はかく人の右へひらみたる也。

一文字は一字を取はなしても。各々の文字なる跡にうつくしく見ゆるやうに可書也。仍重なる文字は高かるべき也。竝ぶ文字は横へひろがるべき也。

一墨を筆にたぶくと染て可書也。

一行の物の中に眞文字も相加ふべき也。道風は左様に書たるを愛敬といふ。

一文字不具なる事あるべからず。篇小にして作り大に。外圍大にして内をば小く書事也。あしき也。道風。佐理。行成の手跡。不具なる字畫なきなり。

一長く引點は斜す。又麗はよはき也。少しゆるめて引也。

一頭の字は皆ひらみたる也。それがよき也。

一文字はうるはしく書が見通しある也。點をかたよせなどしたるは一旦の愛にて。始終は見弱りする也。

一未練の間は文字を高く可書也。究竟になる時は少し平に成事也。去ば道風などの書たる物は。わかき手のときは文字高きなり。老後に至てはひらみて見ゆる也。

一申狀。諷誦。願文は眞に可書也。廻文は行に可書也。

一法性寺殿の手跡は。若年の時攝政などの時は



能也。後には筆ひらみて。打付く書給によりて。習ふ人の手跡損すべきなり。何も此心を得べき也。

一點のをはりの筆をば必返すべき也。是が能也。

一眞の筆は立べき也。行の筆はひらむべき也。

一筆を打立て後は行にまかせて可書也。筆をすまいて書つれば。筆こはくみえてわろし。ゆるゆるさしのべたる筆にて。みたくなさず書る物は見立有也。強き筆にて書たるは無見立也。

一手書はつねに物を可書也。不然ば筆あし。

一朝隆は能書也。去どもおさなき物を書出す也。

一眞行草ともに前の點の先をうちて。後の點のはじめをば返すべき也。

一文字は分て一字も眞に書。合字にても見よかるべき様に書事は大旨の事也。字によりてゆ

がめて篇を書て吉字もある也。よく可意得也。

一前點は後點を兼る約束なれば。眞行草ともに前點の筆崎を受て。後點の初を可書也。

一文字をばみる可書也。ハツキたるは見あしきなり。

一行成の手跡は筆に任せてかゝれたるとみえたり。又法性寺殿の筆は不然。よつてをとらせ玉ふ也。

一草は游たる筆を以やはらかなる筆にて書たる字のやうに書べき也。

一先物を書には。靜なる所にて心をしづめて可書也。物を急敷書事なかれ。急敷書たるは。いたらぬ故といふ人有べし。是は故實をしらぬ人也。何事も思はですると龜相にすると替事也。殊更手は。硯筆紙墨四の物相叶て可成也。此事は今の案にあらず。本文に有。第一卒爾の時誤



事多。又文字落  
事一定有事也。

一手跡と形とは一也。又人の心も見ゆべき也。されば異様に不可書、皆本文に有。

一我好むやうならずとて、さうなく人の手を謗事あるべからず。手にむじんの様有。又人の心万差也。但筆づかひ、筆の品の善惡をわきまふべき也。如何にも手書の書たる物を早く書よしをして筆をはやくつかふ事。却てをそき様也。相構て筆を立る所、おる所、引はつる所に心をかくべき也。とかく能書には目を付て可<sub>レ</sub>見也。

一物忿なればとて散々に書事有べからず。眞行草ともに何れもねばく書べし。未練の手跡は物を早く書なして僻事ある物也。何に疎草に書物成とも。筆の捨所に心を懸べき也。

一未練の時左右なく物を書と披露すべからず。よく／＼習練して。手の品を書出してのち。手

本をも書。又人にも見すべき也。其人は能書なるなれども。少々しられて後は。少しわろき事ありとも被<sub>レ</sub>思免也。物わるく被<sub>レ</sub>見被<sub>レ</sub>沙汰ぬれば。後に能書となる時も人の許す事難也。手書は分限を見べし。世間に手書少し。非なる手書多き故に。非<sub>レ</sub>手書ばわろしと罵をいつも定て信ずる也。されば昔の手書は手習したる反古をも焼捨ける也。但手の故實をも習ひ談議せん人にははづべからず。相互に可談也。

一額。色紙形。申文。願文。諷誦。叡山四番帳。戒牒。一品經等可<sub>レ</sub>書次第は。廣く夜鶴庭訓といふ書にみえたり。是先達の仕をきたる事なれば可<sub>レ</sub>信也。

一眞の物は第一の大事也。唐人は。先是を習ふ也。我朝にもしかるか。近代は皆行の物を先に習へり。されば眞に達したる人稀也。少々文字不具なれども。能書の様とて書様有。又只さは



さはとゆがます。文字の座もはたらかず書たる一の品也。宋朝の歐陽が眞は如此也。是は少し愛を取也。心より愛敬のあるは難也。都而上古の能書も皆満足する事は難也。されば法性寺殿はむかしの手書には道風。佐理。行成。此三人を能書と宣り。此三人に三德三失有也。道風は強く書て少し俗道也。強きは德。俗道は失也。佐理はやさしくしてよはし。やさしきは德。よはきは失也。行成は打付に愛敬有て。手の少し正念なき也。愛は德。無正念は失也。故に太平御覽には。骨多肉少は筋書。肉多骨少は墨猪。力多して筋ゆたかなるは聖也。力なく筋なきは病なりと云々。

一物を書には能々心を調て思量すべし。荒書事なし。猶々可存事。太平御覽には。軍陣に向て可成合戦思也云々。又云。右軍題衛夫人筆陣圖曰。夫紙者陣也。筆者刀稍也。墨者鎗甲也。水

硯者城池也。本師者將軍也。心意心意者副將也。結構者謀畧也。颺筆者吉凶也。出入者號令也。屈折者殺戮也。夫欲書先研墨。凝神靜思。豫想字形之大小。偃仰平直振動。令筋骨相連。意在筆前。然後作字云々。一番に可<sub>レ</sub>知也。

一手本を習にはまづ本の筆づかひを可<sub>レ</sub>心得也。本の意趣を心得ずして筆にまかせて習つれば。本にむかふ時ばかりにて。我とかゝれぬ事也。尤故實の人に習ふべし。何の手本を習ふにも此心得べき也。

一手を習ふに本にも似たり。我もよく書と思て。本を捨て雅意に任せて書は。自然に損也。いかにも初心の間は。よく可<sub>レ</sub>用意也。去ば或先達の中は。四五十歳に成て手は定ると申候ひしが。此事さる事也。筆もしたゝまり。功が入て後は。ともかうも書たるは不<sub>レ</sub>苦也。一手を習ふには。本の筆使意趣をこゝろへすし



て只學び。又習たる文字計をおぼえては。不習字はかゝれざる也。大旨だにも得つれば。自然に似事也。手本の意趣を心得事は。未練の時は難知。先達に可習也。手跡にて人の心の程は被知也。されば相構て異様に不可書。故に本文曰。用筆在心。心正則筆正と也。

一手本を多く可見也。我習はぬ手ならねばとて。必不可毀也。如何成手跡も皆面白也。所捨可<sub>レ</sub>知。又いかにも我と不被書文字をば。本を見<sub>レ</sub>て被書也。縦又我習ふべきならねども。手書の書つる物を見れば。才覺付也。

一手本を數多可<sub>レ</sub>持也。我好すぢならねばと思ふ事なかれ。打見よく書たれば。おもしろく能候也。能の中には手が第一也。身の爲人の爲。よしあしに付て有難。能書は大切也。されば大國にも此道をこそおもくせられ侍也。

一手本には古哥古詩を可書也。但人の所望なら

ば。新哥新詩をも可書也。消息も古き本にて可書。假字消息はすべて書まじき也。

一屏風書寫などは子細有事也。道風の筆を見しが。綾の屏風に大きらかなる下ゑをしたりしに。頭をさしつどへて。只行草に筆に任せて書りと見ゆ。大躰此躰無有也。

一嬾からん時。物書事なかれ。文字あしきのみならず。左様にしつけつれば。手あしく成也。吉筆料紙にて。心のいさましからん折可書也。非能書は此次第をしらずして。いつもたやすく書とのみ知て費書する也。去ば手を執せん人は。如何様に人云とも。とかくすべりて書間敷也。惡書つれば。人に隨て耻ある也。人に隨て書は我耻也。我損也。如此事は誰も易知事なれども。故實の多とは如此の事をこそ申侍れ。手書ならざらん人も。此心を可得也。管絃などとするには。あしき調子はかへてすべき



也。あしくとも不構。卒爾に其事となくする事は僻事也。諸道只如此也。

一物語草子書事は。能書のいとせざる事也。夜鶴に次第見えたり。

一手習せんには。本に向てよく習て物ぐさからぬ程よき筆墨料紙にて書べき也。必其習つる文字ならねども。筆なるゝ也。又本を持て習て。本をばかたぐに置て不見して書て。本にあはせて見べし。只以本習たる計にて。不覺は徒事也。

一手習するに不似文字を相構て似せんと其字計に心を盡しぬれば。手習に退屈する也。兩三度も習て不似ば。暫其所を闊て。別の所を習て。又歸て可習也。如此度々重ねたれば。自然に似也。

一手習に貧福を不<sub>レ</sub>思。又我も書人に物を書せんにも。能々入木の道をば可<sub>レ</sub>進也。されば南史

曰。江夏王鋒。字宣穎。高帝第十三子也。年四歲。好學。書無紙札。乃倚井欄爲書。書滿則洗之。已復書。五歲。高帝使學鳳尾諾。一學卽工。高帝大悅。以玉麒麟賜之。曰。麒麟賞鳳尾矣。異國例を以。我朝にも額色紙形等書には必祿を賜事也。餘准之可知。委夜鶴に見えたり。書人もかゝせん人も。如此故實を可知也。顏魯卿公奉勅額を書。絹百疋を賜と也。

一願文等の草案をば。清書の許に留をく也。清書する故實には。不審なる事といへども。任草案可<sub>レ</sub>書也。是清書の誤にあらず。草案の僻事也。

一物を人に誂てあるに。料紙のあまりたらんをば引放て不止也。料紙書餘りて。不書して歸すは。手書の耻辱也。

一色帛形に物書には。よくゝ文字つゞきを草案して可<sub>レ</sub>書也。



一必手本にさし當て不習といへども。つね々心懸て見れば。自然に隨分と成也。我書たる物をも常々見て。善惡を可思量也。

一近來弘誓院殿の御筆を學事。多以損失也。其故は。地舛に自在をえてあそばされたるに。筆勢を書たる御筆どもも相交て。我筆勢の程をも不弁。御筆震てあそばしたるを習故。一定損する也。地舛くせもなく。筆もおさまりて後。少筆勢をやつすは故實也。且は涯分を計て手も可習事也。何様にもまづなをく可習也。扱此御筆は一旦習似する様にはおぼゆれども。始終は難也。故實多き人は此様を捨て他筆を學事也。能々得心なしには爭可損哉。いづれの筆も。おそらく心えては。損ずる事成とも。此御筆は大事に侍也。

三月 日

伊 經

右一卷千代丸依。所望書與之畢。

承元三年五月八日

行 能

右才葉抄一卷以古寫本書寫以屋代弘賢藏本校合畢弘賢曰題筆陣圖一章及鳳尾諸故事原誤寫不少據本書改正



# 入木抄

贈一品尊圓親王

取筆事

字勢分事

古賢筆仕事

不可好異樣事

御稽古分限露顯事

御稽古時分事

手本多大切事

御筆事

御料紙事

手跡時代分明事

以上

御手習間可得御意條々。

一筆を取事。

御稽古の始より可令取定御候。あしく取付

御本一段々々御稽古事

筆仕爲肝要事

離邪僻可專正姿事

眞行草字事

稽古間善惡相交事

手本用捨事

以消息不可爲手本事

御墨事

入木道本朝超異朝事

被用能書事

候ぬれば難被改事にて候也。其取様は。中指

タケタカ。の兩ふしの中央に筆をきて。頭指

人さしのそばと大ゆびのはらとにてをさへて取

候也。無名指くすし。とこゆびと二をばにぎらす

して。ひしとよせて。中指のしたに重ねて。中

指の力になし候也。たな心の内をば。うつろに

なして握らず候なり。大ゆびのふしをば。たて

たるもそらしたるも見あしく候。よき程に筆

をよくとりて。手つきはまろ／＼としてよく

候也。此取やうは。はじめはとりにくき様に候

へども。後にはことによく候。ふでも自在につ

かはれ。字もよくかゝれ候間。如此とり候を

本とし候也。筆のとりやうあしく候へば。字も

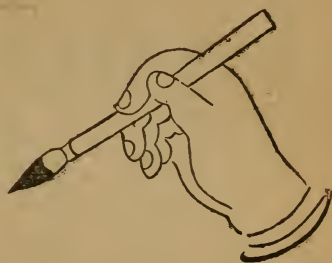
したがひてよろしからず。又筆をいか程もつ

よくとり候也。

一御手本一だん／＼御ならひあるべき事。  
御本一卷を一度に首尾をならはせ給御事は



弘法大師の  
執筆法には  
圖繪をのせ  
られたり。  
それも聊今  
の取様には  
たがはず候  
間。又圖之。



あるべからず候。先詩一二首などを取返々々  
數反。數日御けいこ候て。御本のおもかげさは  
さはと御心にうかみて。そらにあそばされ候  
も。無相違候程になりて後。次第々々におく  
をも御ならひあるべし。はじめよりよく稽古  
し候ぬれば。後には其ほどにこうも入候はね  
ども。やすくあひ似候也。

一字の勢分事。

初心のほどは。本よりも事のほかに大にかゝ  
れ候事にて候。たゞ手本の文字ほどにならひ  
候なり。又いかにも本よりは大にて。筆ほそく  
なり候事にて候。これがあしく候。字のせひ大  
に候はゞ。筆のふとさも本よりふとくてこそ  
相應すべく候へ。所詮字勢も筆のふとさも本  
にたがふべからず候也。本よりいさゝか見ま  
さり候くるしからず候。本よりちいさくはあ  
そばすべからず候なり。

一筆仕肝要たる事。

紙上に字をなし候事は。能筆も非能筆も同事  
にて候へども。筆づかひによりて善惡あひわ  
かれ候なり。其筆づかひのやうは。古筆をよく  
よく上覽候て御心えあるべく候。就其なを御  
不審の事候はゞ。仰下され申入べく候。所詮手  
本をならひ候に付て。字形と筆仕とよくなら



ひ候人は。一致にして無相違候。あしく習ひ候人は。文字のすがたを似せんとし候へば。そのすがたは似候へども。筆勢をうつしえず候へば。精靈なきがごとくに候也。これはいたづら物にて候。けりやう字かたちは人のようばふ。筆勢は人の心操行跡にて候。所詮諸道の習學は心の上の所作にて候間。能古賢の心にもとづきて。其道をまなび候へば。自然に妙を得候也。屈曲横豎の點。一々に不<sub>レ</sub>任自由。先哲の行跡にしたがひて筆を下候へば。をのづから通達し候也。御稽古のはじめはあひかまへて御ふでをしづかに能々執してあそばさるべく候。御通達の後。御筆にまかせられ候も。筆法に達すべからず候。孔子のこと葉に七十にして心の欲する所に從へども。矩を不<sub>レ</sub>踰と申候も是にて候。御手跡の御稽古もこれをもて是とすべく候也。

#### 一古賢筆仕事。

此事。古筆をひらきて。御心得あるべきよし。のせ候了。以言難述候。以筆難記之故也。但細細昵近も不可<sub>レ</sub>叶上者。きと難申披候。然者又此一ヶ條殊肝要也。誠に筆語所及までは可書述候也。古賢能書の筆のつかひやうは。いくにも精靈ありてよはき所なし。筆をたてはじめより。引はつる處。點ごとに心を入て。あだなる所なくかくべき也。能書は筆を打立る所。終る點折候所。はぬる所。如此の處々に心を留て精を入候也。非能書の書たる物は。木などを折かけたる様にて用のなき也。所詮一點を下ごとに其心をおもへば。あだなる點あるべからず。一點もあだなる所あれば。一字みなわろく見ゆ。まして一字を心をとめすは。さながらいたづら物なり。ひろくこれを申候は。浮雲瀧泉の勢。龍蛇の宛轉たるすがた。寒



松の屈曲せる木だち。此等しかしながら手本也。古賢の筆仕たゞ是にて候。義之が用筆の圖に。かやうにひきからして候點を。万歳の枯藤と申て候。此等にて候。御心へあるべく候。所詮能筆の手跡はいきたる物にて候。精靈魂魄の入たるやうに見候也。さ候へば。字勢分よりも大に見候。これは用を具足したるゆへにて候也。

一邪僻を離てまさしきすがたを專すべき事。此道をしらす。口傳をうけずして。なまじゐに道に耽輩多正路に不叶。必邪僻を起す也。古筆を見ても極てなびやかにうつくしき所をば不習して。達者の筆せいをふるひ。眼前の風流たる所の目どを。きやうをこひねがひてうつさんとする也。返々不可說事也。其位にいたりぬる上の所作は。ともかくも自在也。何と書たるも殊勝也。是をあしくならひ候へば。ま

さしき所をばうつしえぬまゝに。きと目にたつ所をにせ候事極てわるく候也。唯いさゝかも異途に目をかけずして。一すちに正路にしたがひて。たゞしき所をならひ書候へば。其ふでに達候ぬる後は。彼の自在無窮の躰も心にまかせてかゝれ候なり。曲折風流を本とし候へば。さらに風流曲折もうるはしくうつされず候。見しらず候人は。其躰ばかりをあさく見なして。あひにたりと見候へども。道をしりたるまなこのまへには。あらぬ物にて候也。うつくしからんとて。ふでをつくるひて。わななきかきたれども。よはくかはゆげにこそ候へ。一切うつくしくはみえず候。又つよからんとて。筆をかみにつよくあて。筆をあしく仕候へば。たゞらうききにあれたる物にて候。更つよき所なく候なり。如此事を外道の邪見などは申候。道の魔障にて候。此事にかぎらず。此



道其實を申候へば。佛法のさとりよりおこりて。世俗の伎藝に出候ては。管絃。音曲。詩歌。いづれもく諸道の邪正是にて候。用捨あるべく候。一切事。其理二は候はず。そのさとりにて候。されば方法さながら實相の一理にて候なり。此二ヶ條。ことに詮要にて候。能御心得あるべく候。

一異様の事を好むべからざる事。

初心の時。器量ある人。ひだり字。たふれ字。うつぼ字等筆に任てかき候事。よにけうありてうらやましく覺候なり。したがひてこれをおかしく。其骨あれば人も此事をもてなし。我も乗興の程に。一向これが正宗になりて。本牀の稽古は次になり。返々斟酌すべし。かゝる事を好む人の手跡は。さ程の事をかきたるはさやうに見ゆれども。極信なる清書は。いかにもひが事かきたるにはおとりなり。はなはだ本意

なきなり。これを好みもちゐるはやすき事也。たゞいくたびもうるはしくまさしくかく事大事也。大道はとをくして難隨。邪徑はちかくして易踏おぼえ。殊に器量の人ありぬべき事也。よくく可謹慎なり。弘法大師は大唐にて左右の手足ならびに。口に筆をさしはさみて。五行の字を一度に書て。五筆和尚の名を得たり。日本にては應天門の額を門上にかけて後。應字の上の圓點を下よりなげくはへられたり。大權の垂跡なり。入木の達者なり。たとひ權者にあらず候とも。大師ほどの能筆ならば。爭不思儀を現せざらむ。たとひ能筆の達者ならずとも。權者現化として自餘の不思儀多候へば勿論なり。今人末代に及て如此のあとを心にかくべからず候歟。大文字など時時かき候。興ある事なり。又筆のいきをひも出来。且又壁字等には。御用の事もあるべく候。



## 一眞行草字事。

先行字を御習あるべく候。行は中庸故也。點を不略して筆跡を行に書たるは行の眞也。點を路し。草の字作をも書交て。行に筆を仕たるは行の草也。仍通用稽古のためよろしき也。聊行の字を習得て後。草をも眞をも可學也。眞は一行草に通せず。草又眞行に不通候也。眞は一の點を引放て書之。草は點も字も連續して兼たる跡也。

## 一御稽古の分限可露顯事。

五日十日などに一度御本の字を暗に能々執して被遊候て。月日を被書付て可被置。後被御覽合候者。勝劣可爲分明候。且は未熟の所をも能々被御覽定候て被直候へば。次第に如御意なるべく候なり。又さやうにとりをかかれ候はんを細々にくだし給候て。所存を申上べく候。

## 一稽古間善惡常相交事。

初心の時。は。手習を仕候へば俄に筆もつまり。字形も本に不似。凡不思儀事必々出來候。此時ものぐさく成て。退屈の所存おこり候也。それに目をかけずして。たゞおなじ様に稽古候へば。四五日乃至十日こそ候へ。又よくなり候。今度は以前によく書候様に覺え候つるよりも猶すぐれ候也。如此數遍におよび候。初心の程は更不斷絶事也。やがて一だん／＼かさのあがる跡にて候なり。

## 一手本用捨事。

三賢等筆なればとて。初心の人先達に不談して。此本面白。彼字興ありとてならふも。時にしたがひ筆づかひおなじからず候。何としても書出候へば。殊勝の物にて候へども。手本のためこれをならふべき風跡も候。初心の人これをならふべからず候筆跡も候なり。



一手本多大切の事。

多本歴覽大切の事候。御けいこは。御本をさだめられ候て數本を御覽候へば。御才學になるべく候也。

一當世多消息を手本とす不可然事。

近日手本所望の輩。多分消息也。所存にたがふといへども。人の所望にしたがひて。多以かきあたふるもの也。これしかしながら。不知案内の人の所爲には。一わう又如。此だうりにて候。彼のともがらが意におもふやうをさつし存候に。能書に成て手本をもかき。色紙形。諷誦。願文をも清書せん事はふしむなり。只指あたりて。消息一通なだらかに書たらんに可爲足。仍消息をならふべしと存候歟。此條ひとへに道をしらざるゆへなり。先此みちをばいかに意得。我器量をばいかに存じて。みだりに其はうをさだめて。分齊を置べきぞや。一切事。

稽古の道の更にその際限なき事なり。佛法を學するも。大師先徳の己證をさぐり。佛知佛見をさとりきはめむと學候へば。更其きはめなき事にて候。世間の伎藝におよびて又同かるべく候。消息と申物は。あながちに筆跡をかひつくろはず。只するく書下候間。古賢の筆も手本に成ぬべきは。希有の物にて候。まして當世の手跡。沙汰の外の事にて候。しかるをわれは消息をならはむとて。能筆のかきすてたる消息。ひろひあつめて習學候は。更に消息をもなだらかにかき得ず候。まづいかにも道にこゝろざしをふかくして。清書の本を習候はむに。數奇もすたれ。器量もおよばず候は。さてとまり候とも。さすがに一しきり習て候はんに。功むなしかるべからず候へば。能書までならずとも。消息などとは見苦しからぬ程にかき候べく候。はじめより消息と出立候は。消



息もかき得ず候なり。太宗の詞に法を上にとる故に爲中。法を中にとる故に下たる事を得と申ことも此心也。手本として往來などかくは。たゞ書狀などにはにす。いさゝか筆をかひつくろひてこそかき候へども。それも消息にて候間。いかにも清書の物には筆仕もちがひ候也。さ候へば上古の手本三賢等筆は。みな文集詩にて候。消息を手本として書たるは。いたく見えす候なり。

## 一御筆事。

御手習にもよき筆よろしく候なり。御筆。手本の筆に相違し候へば。字形もにす候。御手本に相應の筆よろしかるべく候なり。凡筆を用事料紙により候なり。打紙には卯毛。只の紙には鹿毛にて候。檀帟には冬毛。杉原には夏毛。綾にも夏毛。布には木筆。木筆は櫛木にて作之。上古は多用夏毛。一切に通用候。昔の夏毛殊

勝候き。當世は夏毛わろく成て。さきも候はすいたづら物也。仍杉原の外はたゞうさぎの毛を通用よろしく候也。大方筆の毛もわろく。筆人も候はず候間。當世は吉筆候はず候也。

## 一墨事。

御稽古には藤代墨相違あるべからず。から墨當時希有候歟。御手習に枝葉に候哉。唐墨をもあしくをき候へば。やがてそんじ候。つゝますしてぬり物に入候て常にごる候。寂上秘事也。

## 一料紙事。

細々御手習。檀紙相違なき歟。眞のものは打紙よく候也。凡つねになにをも可被用候。初心の時は。つねに書付候はぬ紙には書にくゝ候間。てうれんのためには何紙にもかき候也。

## 一御稽古の時分事。

毎日一時二時などしばらく御さたあるべく



候。凡万機御計會、他事御稽古さしをかるべきにあらず候。これを以不可被爲本之條、勿論たゞ可有時宜候。但諸道稽古の法、しばらくはげみて功を入候はねば難成候なり。一二年せめては二三百日もまづいさゝか火急に御さたしかるべく候。さて其後やう／＼に御さた相違あるべからず候なり。

一入木道の一流本朝は異朝に超たる事。

弘法大師入唐の時、王宮壁字、王羲之の筆、一間破損、依無其仁闕之。大師奉勅書者。晉代より唐朝にいたる迄、久絶たる道を被興上に。又道風の申文にも、万里の波濤を隔て名を唐國に驅と書たり。文時匡衡等が文にも、此詞を不載歟。測知、此道本朝に拔群の人多しといふ事を、これによりて諸道、唐朝之風をうつすといへども、手跡の事は唐書の説あながちに、此口傳之外他説をもちゐず候。したがひ候て、近

來宋朝の筆跡、多分神妙にあらず候。當世文學輩、宋朝の筆跡を摸する間、或懷希或は綸旨院宣に頗異跡不可然事候也。又舊は旧、盧は声。如此の約束の抄物字難用事也。聖教にも如此抄物字多之。菩薩は井。菩提は井等也。然而抄物外不書也。本朝は每事跡を追て國風を不失也。異朝は不然。先代の舊風を改て當世の風俗を流布せしむる也。仍筆跡も皆改也。硯の作やうにも古今事異也。本朝は魚養樂師寺の額を書。是能書を用寂初也。一筆に書候由申傳たれども、今これを見るに趣字のごとし。まことに不可説の跡也。其筆跡もたゞ皇后、中將姫。當麻曼陀羅感得人也。弘法大師、嵯峨天皇、橘逸勢、敏行、美材等まで大旨一跡也。筆は次第にたをれたるやうに成なり。そのうち聖廟拔群也。聖廟以後野道風相續す。此兩賢は筆跡相似たり。佐理行成は道風が跡をうつしきたる。野跡、佐跡。



權跡。此三賢を末代の今にいたるまで此道の規模としてこのむ事。面々彼遺風を摸也。仍本朝の風は不相替者也。

一本朝一躰なれ共時代に付て筆躰分明事。

弘法大師前後の程の手跡大略一樣也。道風以後又各野跡の風也。行成卿は道風が跡を摸といへども。いさゝか我様を書出せり。其後一條院御代よりこのかた。白川鳥羽の時代まで。能書非能書も皆行成卿が風躰也。法性寺關白出現之後。天下一向此様に成て。後白川院以來時分如此。剩後京極攝政相續之間。彌此風さかりなり。

一後嵯峨院比までも此躰也。其間に弘誓院入道大納言等。聊又躰替て。人多好用歟。凡者法性寺關白の餘風也。法性寺關白は又權跡を摸する也。伏見院御筆。近來さかりに奉賞翫之。就中假名は一向其様也。此かなも法性寺關白以

來。照念院關白の筆躰也。是を被摸て。御天骨にてあそばし出されたる也。眞名は佐跡を被摸歟。此等次第に成來たる様爲御分別事。次に申出候也。躰を不改。但時代にしたがひて次第に替たるやうに外儀見れども。其實は全同物なり。更異風を不交。行能卿以來今の行忠まで殊同姿也。能々うつし得たりと見候なり。

一能書を被用事。

上古には物を書候へばとて無左右清書に染筆。其道の先達にもゆるされ。又朝家にも被用。書役をも被仰候程に成て。能書とは申されけり。又隨分神妙の手跡なれども。其時分猶勝たる人あれば。それにをされて無名望。これも此ゆへなり。公任卿は殊勝なれども。行成卿拔群の同時たる故に人も不用。我も思きたして不勤書役。其も定頼卿は父にはをとり



たれども。其時行成卿程の拔群の仁なければ。門殿額以下隨書役預其賞。これにて可得其意。事歟。已上三ヶ條は。御手習の要次にあらずといへども。以次注申候也。

右條々。初心御稽古の詮要大略如此候。其外事御習學之間。御不審に付て可申上候也。又色紙形乃至額等事は追可申入候。加様事は道の大事にて候へども。口傳を受候ぬれば。凡の入木の道を得候ぬる上には。中々やすき事にて候。只返々も正路にうちむきて。稽古を沙汰事が第一かたき事にて候也。本云。

青蓮院二品親王依。勅命令注進給云々。於柳原大納言宿所更令書寫之。

延文元年卯月廿九日云々。

于時文安第二曆林鐘晦日書功訖。大方先賢依。勅命被注進。消息詞たる上者。一字も

たやすくあらたむべからず。しかれ共少童御所望により所々まなをかなにやはらげ沙汰之。其憚千万候上者。筆牀大かう御存知ばかりにて。外見あるべからず候。比興の惡筆にて寫候事。旁其恐憚すくならず。穴賢穴賢不可令漏脱也。

散位師繁之

右入木抄一卷以屋代弘賢藏師繁眞跡之本書寫以一本接合畢



群書類從卷第四百九十五

雜部五十

本朝書籍目錄

神事。

天書。

十卷。

大納言藤原  
成實撰。

古語拾遺。

一卷。

忌部廣  
成撰。

大和本記。

二卷。

記三代古事。上  
宮太子御撰。

神別記。

十卷。

日本紀私記曰。天皇  
天孫交具在此書。

伊勢太神宮儀式。

二卷。

皇太神宮一卷。豐受宮一  
卷。延曆二十三年注進。

同機殿儀式。

二卷。

神麻續一卷。  
神服一卷。

帝紀。

舊事本紀。

十卷。

開闢以來推古天皇以徃。聖  
德太子。蘇我馬子大臣撰。

古事記。

三卷。

自三代推古天皇。  
太朝臣安萬侶撰。

初天地本記。

見神鏡  
勳文。

日本史記略。

官史紀。見本朝月令。

日本書紀。

三十卷。

舍人親王撰。從神代一  
至持統。凡四十一代。

續日本紀。

四十卷。

宮野真道等撰。從文  
武至桓武。九代。

日本後紀。

四十卷。

春澄善繩撰。從桓武延曆  
十一年至淳和天長十年。  
凡四代。

續日本後紀。

二十卷。

忠仁公撰。仁明一代。天長  
十以後嘉祥三年以前。

文德實錄。

十卷。

都良香撰。或昭宣公撰。從嘉  
祥三年三月。至天安二年八  
月。

三代實錄。

五十卷。

大藏善行撰。或本院左大  
臣撰。從清和一至光孝三  
代。

類聚國史。

二百卷。

菅家御撰。

新國史。

四十卷。

朝綱撰。或清慎公撰。  
自仁和一至延喜。



養老五年私記。

一卷。

弘仁四年私記。

三卷。多朝臣人長撰。

承知六年私記。

菅野朝臣高平撰。

元慶二年私記。

一卷。善淵朝臣愛成撰。

延喜四年私記。

藤原朝臣春海撰。

承平六年私記。

矢田部宿禰公望撰。

康保四年私記。

橘朝臣仲遠撰。

日本紀私記。

三卷。

帝王本紀。

雜氏本記。

庶民本記。

本朝帝紀。

敦光撰。

本朝世紀。

二十卷。藤原通憲撰。

扶桑略記。

三十卷。阿闍梨皇圓抄。

帝王系圖。

二卷。神武以降至白川院。記代代君臣事。中原口撰。

新抄。

白後白川院。至順德院。中原師重撰。

春秋曆。

三卷。記和漢年々吉凶事。親經卿撰。

和漢春秋。

大外記師弘撰。

續新抄。

大外記師光抄。

國後抄。

自仁和三至堀川院。敦基抄。

邦典秘抄。

六十一卷。

國後要抄。

二卷。中御門右府抄。

國史以後臨事公事鈔。

曆錄。

四卷。

日本略雜記。

一卷。

日本紀問答。

一卷。

神別記。

十卷。

肥人書。

五卷。

薩人書。

月舊記。

一卷。

平京雜記。

七卷。

公事。

本朝月令。

六卷。或四卷歟。記年中公事本緣。公方撰。

清涼記。

五卷。大曆御撰。雅材奉勅書。若小一條左大臣奉勅撰。



西宮鈔。

四卷。八卷。十卷。十五卷。左大臣高明撰。

北山抄。

十二卷。

撰集秘記。

節會抄。

十六卷。

中納言資仲抄。

江次第。

廿一卷。

中納言匡房卿撰。

青陽抄。

六卷。

記。列見考定事。

蓬萊抄。

一卷。

記。雲客作法。右衛門權佐重隆撰。

雲圖鈔。

二卷。

圖。圖。三年中公事御裝束指圖。大納言藤朝隆撰。

里雲圖抄。

二卷。

同撰。

仙洞年中行事。

一卷。

同撰。

仗儀論。

一卷。

禁秘記抄。

一卷。

後三條院御抄。諸公事。

備忘抄。

六卷。

新撰年中行事。

二卷。

九條右丞相抄。

東宮年中行事。

二卷。

行成卿撰。

日野年中行事。

四卷。

禁省日中行事。

一卷。

后庭抄。

十卷。

后宮中公事。

長秋抄。

四卷。

后宮事。

春玉秘抄。

八卷。

花園左府抄。有奧書。

除目抄。

同。

九條相國抄。

同抄。

加叙位。

一卷。

伊通。

叙位除目抄。

同。

土御門右府抄。

官班抄。

廿卷。

叙位除目抄。

白馬節會抄。

一卷。

妙音院相國抄。

四節八座抄。

同。

定能卿抄。

裝束記文。

五卷。

夕秘抄。

外勘記。

五十卷。

諸公事事例。

外記廳例。

一卷。

乾鈔。

知足院入道撰。

政要。

和漢皇代記。

各一卷。

弘帝範。

參議大江音人撰。



日本夏始。

二卷。記天象地儀草木禽獸類。日本始。

夏始畧抄。

一卷。

別式。

廿卷。神祇伯石川年足撰。

民部省例。

同。民部卿和氣清磨撰。

政事要畧。

百三十卷。記公務交替國文札彈雜事至要臨時雜事等。惟宗允亮撰。

柱下類林。

三百卒卷。朝家有重事時仰諸道博士被召勸文。或云。杖叢類集成數卷。中原師安撰。

雜例抄。

廿卷。或十三卷。大外記師重抄。

官曹夏類目錄。

卅二卷。延曆廿二年二月十三日。

外記事類目錄。

六十一卷。起自大寶元年。盡于延曆二十二年。

事抄。

九卷。自延曆二十三年。盡弘仁三年。

次事抄。

五卷。自弘仁三年。盡天長元年。

新抄。

同。自天長二年。盡承和十五年六月十二日。

續新抄。

同。自嘉祥元年。盡貞觀三年。

擬潜夫論。

一卷。

十三箇條意見。

同。

律。養老二年。

律附釋。

同集解。

律疏。

律。大寶元年。

令。養老二年。

令釋。

令義解。

令。天智天皇元年。

令集解。

令。大寶元年。

三十卷抄。

弘仁格。

貞觀格。

延喜格。

類聚三代格。

古格。

十卷。

十卷。

三十卷。直本撰。

同。

六卷。不比等大臣與令并作。

十卷。與律并作。

七卷。

十卷。有大臣夏野奏進。

廿二卷。近江令是也。

卅卷。直本撰。

十一卷。不比等大臣與律并作。

卅卷。兼明抄。

十一卷。大納言藤原冬嗣等奏進。

十二卷。大納言藤原氏宗奏進。

十二卷。左大臣藤原時平奏進。

卅卷。

卅三卷。



天長格抄。

卅卷。起延暦十一年。盡三  
後太上天皇十年。

格後抄。

左右檢非違使式。

同。貞觀十七年四月廿七日中  
納言南淵年名等撰進。

格後事類。

親王儀式。

二卷。延光卿  
撰。

弘仁式。

卅卷。弘仁十一年奏進。  
大納言冬嗣卿撰。

北堂有司式。

一卷。

貞觀式。

卅卷。貞觀十三年奏進。  
右大進氏宗公撰。

藏人式。

同。橘廣相  
撰。

延喜式。

五十卷。延長五年左大臣  
忠平等奏進。

廷尉式。

同。

弘仁儀式。

十二卷。

刪定律令問答。

同。上中下連  
華王院。

貞觀儀式。

十卷。

法曹類林。

二百卅卷。法曹勳文類集加通憲  
今案。藤原通憲撰。

延喜儀式。

同。

法曹至要抄。

三卷。明法博士坂  
上明兼撰。

內裡式。

三卷。右大臣冬嗣  
等奉勅撰。

禁法畧抄。

一卷。右同。

內裡儀式。

一卷。

檢非違使私記。

五卷。

儀式。

十卷。

檢非違使至要抄。

四卷。

新儀式。

六卷。

類聚檢非違使私記。

三卷。

交替式。

二卷。延暦年中勘解  
由使撰奏。解由  
貞觀年中勘解由  
使新定奏。解由  
延喜廿一年正月廿五  
日勘解由使奏進。  
并序。式部大輔  
菅清公撰。

類聚判集。

百卷。

新定內外官交替式。

延喜廿一年正月廿五

類聚律令刑官問答私記。

一卷。惟宗允  
亮撰。

內外官交替式。

延喜廿一年正月廿五

法意簡要抄。

同。

新定酒式。

一卷。并序。式部大輔  
菅清公撰。

法意簡要抄。

同。



裁判至要抄。

一卷。明法博士坂上明基撰。

令惣記。

朝筆要抄。

十一卷。

延尉裝束抄。

三卷。

上古問答。

一卷。

八十一例。

同。

六十一例。

同。

十七箇條憲法。

同。上宮太子御撰。

彈例。

同。

問答五條。

同。

吏途抄。

八卷。

斷罪抄。

同。

法家明句抄。

同。

延久諸司實檢繪旨。三卷。

氏族。

帝王系圖。

一卷。舍人親王撰。

同系圖。

同。菅爲長卿撰。

帝王廣系圖。

百卷。基親卿撰。

帝王系圖。

一卷。兼直宿禰抄。

諸氏系圖。

同。

和氣譜。

和氣清鷹撰。

神別雜氏記。

卅卷。

新撰姓氏錄。

凡一千一百八十氏。四品万多親王。右大臣藤原國朝人等撰。

地理。

國府記。

七卷。行基菩薩撰。

風土記。

記諸土地本緣。

海外國記。

四十卷。天平五年春文撰。

西京新記。

同。

民部省圖帳。

同。

類聚。

同。

群籍要覽。

四十卷。大江音人卿奉勅撰。

秘府略。

千卷。貞主卿以二十時東宮學士因歸介與諸儒撰集。

會分類聚。

七十卷。菅原是善卿撰。

文鏡秘府論。

三卷。弘法大師撰。



本朝文粹。

十四卷。明衡撰。

續文粹。

十四卷。季綱撰。

朝野群載。

三十卷。記作文書札等牋。三善爲康撰。

類聚集。

十卷。記三筆。創事。

字類。

新字。

卅四卷。境部連石積等撰。

東宮切韻。

廿三卷。菅原是善卿撰。

倭名類聚抄。

二十卷。源順撰。

和名。

十卷。

詩苑韻集。

同。

季綱切韻。

二卷。

古文切韻。

二卷。

孝韵。

孝範撰。

世俗字類抄。

四卷。

假名玉篇。

三卷。

字鏡抄。

一卷。

詩家。

經國集。

廿卷。近人詩人新作詩良峯安世。滋野貞主等撰。

銀勝朝翰。

十卷。菅原是善撰。

菅家三代集。

廿八卷。

菅家后集。

十卷。同撰。

集韻律詩。

二卷。朝綱撰。

後江相公集。

一注。清行。

善家集。

十二卷。六十一。紀齊名。廣相撰。

扶桑集。

八卷。廣相撰。

橘氏文集。

五卷。

野相公集。

二卷。高階積善。

本朝麗藻。

一卷。

江金吾集。

五卷。藤明衡撰。

本朝秀句。

三帖。

續紀家詩集。

一卷。枯一。

後江李部集。

三卷。法性寺大閼。枯一。

續本朝秀句。

二卷。私敦光撰。枯一。

慶保胤集。

二卷。



日本佳句。

同。

本朝佳句。

八卷。

都氏文集。

一帖。

拾遺佳句。

三卷。藤周光撰。

勘解由相公集。

二卷。

江音人集。

一卷。

江匡衡集。

二卷。

新撰秀句。

三卷。長方卿撰。

續新撰秀句。

三卷。前內大臣基家公撰。

源時綱艸。

一卷。

本朝策林。

十五卷。

直軒草。

一卷。

菅相公草。

一卷。

額聚句題抄。

二十卷。

本朝無題詩。

十二卷。

續本朝佳句。

三卷。

近代麗句。

十卷。

日觀集。

打聞集。

三卷。蓮禪撰。

詠句抄。

五卷。

續類聚句題抄。

三十卷。

一句抄。

蓮禪撰。

古今詩抄。

十卷。

當世麗句。

二卷。

格律清英集。

百卷。

詞苑麗則。

十卷。

詩十體。

三卷。中御門攝政御集。

風心抄。

三卷。

藍田集。

一卷。

昭白抄。

三卷。

約聽抄。

褒萬抄。

文筆要抄。

一卷。

清吟抄。



菁華抄。

華實抄。

七步抄。

文鳳抄。

本朝詩雜例。

懷風藻。

凌雲集。

菅家御文章。

類聚近代作文。

文華秀麗集。

雜抄。

世俗諺文。

掌函補抄。

日本靈異記。

私教類聚。

貴嶺問答。

禁秘抄。

十卷。菅爲長卿撰。

一卷。

一卷。

一卷。

十二卷。

百廿卷。

三卷。嵯峨帝勅仲雄王撰當代詩。

二卷。

十卷。

三卷。

一卷。

一卷。

二卷。順德院。

拾芥畧要抄。

中山三條口傳抄。

和歌。

勅撰以下別有目錄。

勅撰家集等外。如鈔物打聞之類。七十部有之。然而見懷中抄歟之間略之。

和漢。

和漢朗詠。

二卷。公任卿撰。

新撰朗詠。

同。基俊撰。

拾遺朗詠。

同。

和漢拾遺朗詠。

同。

和漢兼作集。

廿卷。

管絃。

梨園舊風。

一卷。

東遊笛譜。

一卷。奉勅撰。

梁塵秘抄。

廿卷。後白川院勅撰。

龍吟抄。



三五要略。

妙音院太政大臣撰。

三五要錄。

十二卷。同撰。

仁智要錄。

同撰。

仁智要畧。

同撰。

糸管抄。

十卷。北院御室御抄。

殘夜抄。

孝道抄。

類聚樂錄。

類聚箏譜。

桂譜。

三五中錄。

十二卷。孝時撰。

宜陽殿竹譜。

大田丸撰。

南竹譜。

貞保親王撰。

長竹譜。

博雅卿撰。

綿譜。

賴吉撰。

懷中譜。

惟季撰。

風俗譜。

二卷。

催馬樂譜。

同。

神樂譜。

醫書。

大同類聚方。

撰攝養決。

金蘭方。

五十卷。菅原峯嗣奉勅與二諸名醫撰。

掌中方。

一卷。輔仁撰。

醫心方。

三十卷。丹波雅忠撰。或康賴撰。

倭名本草。

大醫博士深輔仁奉勅撰。

難經開委。

一卷。廣貞撰。

集注大素。

卅卷。小野藏根撰。

養生抄。

七卷。輔仁撰。

養生秘抄。

一卷。

陰陽。

世要動靜經。

三卷。滋岳川人撰。

六甲六帖。

同撰。

指掌宿曜經。

一卷。同撰。

新術遁甲書。

二卷。同撰。



金匱新經。

三卷。同撰。

樞機經。

同。陰陽寮從八位下歷志悲連猪養撰。

宅肝經。

一卷。滋岳川人撰。

占事略決。

同。晴明朝臣撰。

曆林。

十卷。賀家抄。

新書。

一卷。家榮朝臣撰。

傳記。

聖德太子傳。

二卷。

田村傳。

師能書。

儒傳。

三卷。

藤氏傳記。

一結。

攝關。

二卷。

大臣。

一卷。

大將。

一卷。

〔本傳〕  
太朝神仙傳。

一卷。江匡房撰。

〔續撰〕  
大職冠。

同。

菅家。

同。

日本儒林。

同。

昭宣公。

同。

淳和第二親王。

二卷。

菅家二代。

一卷。清公是善。

吉備大臣。

同。

清慎公。

全。

和氣清丸。

全。

善相公。

全。

良大納言。

全。

統理平。

全。三統理平。

野相公。

全。

音人。

全。

道風。

全。

橘贈大納言。

全。

太政大臣源朝臣。

全。嵯峨皇子。

南大納言。

全。

紀家。

全。



民部卿保則。

全。

故賢。

全。

滋野貞主。

全。

小町。

全。

大納言秀房。

全。

敏行朝臣。

全。

百川。

全。

浦鳥子。

全。

藤六。

一卷。

葛井親王。

一卷。

武智丸。

全。

廣相公。

全。

忠仁公。

全。

淡海公。

全。

宗公房。

全。

業平朝臣。

全。

文雄。

全。

恒貞親王。

全。

白箸翁。

全。

江帥。

全。

女院后宮尙侍。

全。

官位。

內外諸司補任帳。

同歷名帳。

神祇官補任帳。

公卿補任。

辨官補任。

少納言補任。

職事補任。

外記補任。

史補任。

八省補任。

侍從補任。

內記補任。

監物補任。

后宮補任。

諸寮補任。

諸司補任。

判事補任。

彈正補任。

諸職補任。

春宮坊補任。

諸使補任。

檢非違使補任。

諸衛補任。

受領補任。



藏人補任。

僧綱補任。

任公卿雜例。

大外記  
師季抄。

任官雜例。

大外記  
師季抄。

雜々。

宣命譜。

一卷。

宣下抄。

全。

奏事。

全。

年中例奏文。

全。

寬平遺誠。

全。

嵯峨遺誠。

全。

九條右丞相遺誠。

全。

高名錄。

全。江帥抄。

小野宮敎命。

全。

貞信公敎命。

二卷。

清慎公九條殿行事不同抄。

九條。

仁和以後記目錄。

名所抄。

一卷。

御所抄。

全。皇后抄。

居宅抄。

全。

雜抄。

江談。

六卷。江匡房。

打聞。

一卷。

古事談。

六卷。顯兼卿抄。

舊事秘抄。

一卷。

本朝事始。

全。

房內秘書。

全。

秘玉抄。

一卷。大外記師  
遠別記。

見聞記。

一卷。

十節錄。

全。

比喩抄。

全。

視聽抄。

廿卷。

隨見聞抄。

一卷。師遠抄。

隨見。

同。

視德抄。

同。

雜抄。

二卷。



口遊抄。

一卷。大外記師元抄。

懷中曆。

十卷。三善爲康抄。

傳聞故實。

一卷。

亟中抄。

二帖。大外記師安抄。

掌中曆。

四卷。

法鏡。

八卷。秦覺抄。

日本國秘抄。

一卷。

江談。

三卷。

楚忽抄。

二卷。法性寺太閤抄。

言談。

一卷。

本朝要抄。

一卷。

善家秘記。

一卷。

愚管抄。

三卷。慈鎮和尚抄。

假名。

伊勢物語。

二帖。

大和物語。

二卷。

源氏物語。

五十四帖。紫式部抄。

世繼。

四十卷。白字多天皇。至則川院御宇。載君臣事。藤爲業撰。

大鏡。

六卷。

水鏡。

三卷。中山內府抄。

唐鏡。

十卷。茂範卿抄。

今鏡。

全。

彌世繼。

二卷。

秋津嶋物語。

續代系記。

十卷。

蜻蛉記。

三卷。

清少納言枕草子。

二卷。

同注。

十卷。李經卿注。實朝臣抄。

今物語。

四卷。鴨長明作。源隆國作。

四季物語。

廿卷。源隆國作。鴨長明作。

宇治拾遺物語。

發心集。

三卷。鴨長明作。

方丈記。

一卷。同撰。

寶物集。

六卷。平判官康賴入道抄。



和泉式部日記 一卷

紫式部日記 二卷

義孝日記 一卷

平中日記 一卷

閑居友 二卷

肥後物語 一卷

難波物語 全

三國物語 全

松殿物語 二卷

高家口傳物語 全

和漢雜談 全

國中抄 一卷

中外抄 二卷

簾中抄 全

夜鶴庭訓抄 全是行作

雅抄 六卷

隆聰抄 二卷

大槐秘抄 全九條相國伊通作

助无智秘抄 三卷

芳問抄 三卷

秘記抄 三卷

高光日記 一卷

讚岐典侍日記 三卷

太后御記 全

續古事談 六卷

澄月上人渡唐日記 一卷

著聞集 廿卷橘季成

蓮胤伊勢記 一卷

東屋日記 一卷

六代勝事記 全

前栽秘抄イ 全

大和宣旨日記 全

十訓抄 三卷

樂府和歌 二卷



以仁和寺宮本<sub>一</sub>書之。普廣院殿被<sub>レ</sub>尋之時注文云々。

此抄入道大納言實冬卿密々所<sub>一</sub>借賜之本也。

永正二年八月四日寫之

師名在判

# 仙洞御文書目錄

## 一甲御文車。

杉櫃 一合。主上御元服。

一合。卽位。

一合。行幸以下雜記第七。

一合。行幸抄。大將并公卿次將作法。

一合。堀河左府記曆記。自康平五年至應徳三年。

一合。雜記。

一合。雜例并裝束抄等。雜記任官抄等在之。

一合。朝觀行幸記。上四帙。自順治天皇至鳥羽院。

一合。朝觀行幸記。下。三秋自土御門院至院。一秋家説部類。自康治至正安。

一合。御禊大會。

一帖。造内裡指圖。

## 一乙御文車。

杉櫃 一合。勘例。

一合。中宮御産。建武二年。

一合。御元服。

一合。小一條左府記。

一合。諸社行幸。

一合。任官叙位例。

一合。立親王。

一合。御卽位。

一合。東宮御元服。

一合。朝觀行幸記。中四帙。自樂徳院至後鳥羽院。

一合。御禊大會。

一合。第六勘例雜々。七十。

一合。入内立后。



一合。御産記。

一合。雜記下。

一合。斤木。

一合。五節記。

一合。公卿補任。

一合。入木。

一合。御産。

一合。最秘抄。

一合。佛神事。

一合。南山抄一部十三卷。北山抄一部十卷。古語拾遺一卷。中山承和親王。

朴櫃一合。秘抄。

手箱一合。古語拾遺一卷。中山承和親王。

覽篋一合。秘抄。

御手箱一合。行成卿記目錄。

小皮子一合。諸次第。

覽箱一合。雜記。延喜以來。

一丙御文車。

杉櫃一合。八代集抄。

一合。座。詩一。

一合。絃譜。

一合。山本。

一合。樂曲雜秘。

一合。家集上。

一合。家集中。

一合。家集下。

一合。蹴鞠。

一合。三十首。

一合。代々集。

一合。詩歌雜。

一合。御ないの御さうし廿七帖。

一合。御笛譜。

一合。詩抄。

扇御手箱一合。三五要錄。

松江葉御手箱一合。無銘。黒漆御手篋一合。管文和三年八月廿二日自天野廣政得之。四條前大納言兼行之。同年十二月廿四日重被返納之。

一辛御文車。

杉櫃一合。伏見院御てのうち。の法花經一部。此一合。御賀御の外阿彌陀經など。

一合。最勝王經。

一合。佛事。

一合。御灌頂。

一合。御受戒。

一合。御堂新。

一合。仁和寺。

一合。御如法。

一合。御如法。

一合。經。

一合。經。

覽篋一合。後堀河院御經。

小櫃一合。往生要集。

以上四丙。此間洞院殿御所被立之。而今

日被渡納同御文車畢。

一丁御文車。

杉櫃一合。經典籍第一。三雜々。

一合。日本後記。

一合。白氏文集。

一合。續日本後記。文德實錄。

一合。白氏文集。

一合。第七通典。

一合。玉篇。

一合。第八。



一合。雜雜。

一合。第四雜。

一合。第二雜。

一合。書籍。

一合。朗詠。

一合。漢書傳。

一合。第五雜々。初學。記自紀六帖。

黑漆御手箱一合。無銘。

同御手箱一合。上。集註文選。全經史書。

同御手箱一合。全絕市文。

杉櫃一合。後漢書帝紀。

一合。無蓋。註文選。群書治要。入。加之。

一合。周禮。

一合。群書治要。

一庚御文車。

杉櫃一合。律十卷。

一合。凶事。

一合。第九。

一合。長曆御記。

一合。第三定智中。

以上二丙御文書。今日自新御所被渡納洞。

院殿御文庫畢。

右御文書目錄如斯。仍注進言上如件。

文和三年六月五日

廳官左衛門尉中原盛氏

御文書目錄。

左衛門尉中原清種  
主典代散位安部朝臣資爲

朴櫃十合。自第一至第十一。

拾上下二合。

心日五合。

甲乙二合。

春夏秋三合。

拾遺一合。

古今并貫之集一合。

後撰一合。

秘中秘一合。

言木一合。

御手本一合。

同 一合。

同 一合。三。

舊院御筆一合。

後深艸院御書一合。

ふしみの院の御文ども一合。

伏見院御書一合。新院御書一合。

同 一合。

同 一合。

入道左府狀一合。

御會和歌一合。銘御會哥合。

懷紙短冊一合。

虫鳥柄一合。

座右一合。

古御詠并御贈答一合。



ふるくあたらしきくわいし一合。

大事の御哥一合。

院御方御袈裟一合。

無銘葛一合。

慈惠僧正三衣一合。

葛一合。春のぐそく。

又一合。

又一合。春下。

又一合。

又一合。たんじやく。

又一合。御哥卷物共。

大夏御ふみども一合。

きぬかさもの一合。

院御方の御願書一合。

手箱一合。薛搔。

御所々御書共一合。

和歌愚艸一合。

御詠草御百首。

神秘一合。

六條院文書一合。

羽田庄一合。

室町院御領事一合。

御領折中事一合。關東。院領事自室町院關東御抄依。

新御領一合。

玉葉集中書一合。

手箱一合。

入替願可達之由自天野殿被仰之聞入他禮進之被返納之時大五力善藤之由被押銘。

以上六十八合。自<sub>二</sub>御室<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>渡也。

仙洞御文書内。自<sub>二</sub>前太政大臣家<sub>一</sub>被<sub>二</sub>渡進<sub>一</sub>目錄。

一合。諸御領文書。薛繪小唐櫃。

一合。諸地券。杉小唐櫃。

一合。長講堂領文書。黒漆御手箱。

一合。長講堂寺用以下。黒漆御手箱。

一合。諸地券并御領文書。杉櫃。

一合。諸御領文書。杉櫃。

一合。關東奏狀。杉櫃。

一合。御領文書。下司。

一合。大事御文書。葛。

一合。新御領。葛。

弘長百首。

天曆御記。

以上十三合。正平七年後二月廿二日。被<sub>レ</sub>預。

左府文庫。

都合廿四合進<sub>二</sub>上<sub>一</sub>之。自<sub>二</sub>元被<sub>レ</sub>付<sub>一</sub>御封。廳不披見。四條前大納言家。廳爲<sub>レ</sub>存知<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下。如<sub>二</sub>御注文書<sub>一</sub>進上。於<sub>二</sub>彼御注文者<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>返進之由有<sub>レ</sub>仰。杉櫃一合。黒漆御手箱一合。都記<sub>レ</sub>櫃無<sub>レ</sub>御封。廳不披<sub>レ</sub>見之。於<sub>二</sub>洞院殿<sub>一</sub>申入之所。開闔安藝前司入道重覺。存知事也。當時下<sub>二</sub>向田舍<sub>一</sub>。上洛之時有<sub>二</sub>御尋<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰之由被<sub>レ</sub>仰下。資爲<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>封。右注進言上如<sub>レ</sub>件。

文和四年七月十二日

廳官 左衛門尉中原盛氏

左衛門尉中原清種

主典代大藏大輔安部朝臣資爲



倭片假字反切義解加序

風聞大古之代未有漢字。君臣百姓老少口々相傳。及乎應神天皇御世。始渡儒經。學書契。而凡國家用文字。有眞字。有假名。眞字對假字正也。假字對眞字權也。字名義卽物名也。言天下之萬物。本無其名。非此字。強設其名。作此字。譬視水火精之像。作<sup>○</sup>火精象<sup>レ</sup>君。<sup>○</sup>水精象<sup>レ</sup>臣。<sup>○</sup>實也。光明盛實矣。<sup>○</sup>天。兩字。音實缺。<sup>○</sup>缺也。滿缺々滿也。卽是日月焉。乃訓日月曰比流圖幾。比流圖幾卽日月假字也。日月卽是比流圖幾眞字也。<sup>○</sup>比流者燄也。日光燄<sup>○</sup>月光亞<sup>○</sup>日。都不過於以義爲眞字。音爲假名而已。此舊事本紀。日本書紀所用男假字。數多皆是也。亦如古事記。萬葉集。兼用眞字假字。以義與音相雜筆之。到於天平勝寶年中。右丞相吉備眞備公取所通用于我邦假字四十五字。省偏旁點畫作片假字。抑四十字音響及阿伊

字江乎五字。此乃天地自然之倭語焉。是故堅列五字。橫列十字。加入同音五字爲五十字。且又橫十字隨唇舌牙齒喉。用宮商角徵羽變宮變徵七聲哉。蓋世俗傳稱之云。吉備大臣倭片假字反切。有其口決矣。然後弘仁天長年中。弘法大師釋空海造四十七字伊呂波。<sup>○</sup>四十五字。以便于女童其體則草書。此伊勢物語。古今和歌集所用女假字四十七等是也。予學和歌樂音律。其餘力觀吉備大臣倭片假字反切。則闕無音義竊注己意。亦考全書以解片字。名曰倭片假字反切義解。聊述由緒冠假字首云爾。

假字反切音義

宮 假 字 反 切 音 義  
イ ウ エ ヲ

喉開。清。  
輕。宮音。



㊦ イ ウ エ オ 喉閉。濁重。 宮音。

㊧ イ ユ エ ヨ 半喉。不閉。 變宮。

ナ <sup>サ</sup>ニ ヌ ノ 舌末。清。 徵音。

タ <sup>チ</sup>ツ テ ト 舌本。濁重。 徵音。

ラ <sup>リ</sup>ル レ ロ 半舌。不進。 變徵。

ハ ヒ フ ヘ ホ 唇外。清。 角音。

マ ミ <sup>ム</sup>メ モ 唇內。清。 角音。

カ キ ク <sup>ケ</sup>コ 牙前。清。 商音。

サ シ ス セ <sup>ソ</sup> 齒後。濁重。 羽音。

假字反切口訣。

上父字行堅。下母字行橫。其隅生子字。

例 伊 <sup>イ</sup>上父。和下母。反阿。隅子。

亦 也上父。字下母。反勇。隅子。

橫行歸父字。堅行歸母字。其歸生子字。

例 阿 <sup>ア</sup>上父。和下母。反阿。歸子。

亦 也上父。勇下母。反勇。歸子。

假字音義方位。

角 <sup>ハ</sup>ヒ <sup>フ</sup>ヘ <sup>ホ</sup> 唇外。濁輕。 詞有<sup>レ</sup>濁。

腹發音。脾。

宮 <sup>ワ</sup>イ <sup>ウ</sup>エ <sup>オ</sup> 喉閉。濁重。 詞有<sup>レ</sup>濁。

腰發音。腎。

變 <sup>ヤ</sup>井 <sup>ユ</sup>ヘ <sup>ヨ</sup> 腰發音。腎。

半喉。不閉。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

徵 <sup>ラ</sup>リ <sup>ル</sup>レ <sup>ロ</sup> 舌末。清輕。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

胸發音。心。

半舌。不進不退。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

微 <sup>ナ</sup>ニ <sup>ヌ</sup>子 <sup>ノ</sup> 舌末。清輕。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

胸發音。心。

唇內。清重。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

角 <sup>マ</sup>ミ <sup>ム</sup>メ <sup>モ</sup> 腹發音。脾。

羽 <sup>サ</sup>シ <sup>ス</sup>セ <sup>ソ</sup> 齒後。濁清重。 詞有<sup>二</sup>濁清<sup>一</sup>。

胸發音。肺。

舌本。濁重。 詞有<sup>レ</sup>濁。

徵 <sup>タ</sup>チ <sup>ツ</sup>テ <sup>ト</sup> 舌本。濁重。 詞有<sup>レ</sup>濁。

胸發音。心。

宮 <sup>イ</sup>ウ <sup>エ</sup>ヲ 喉開。清輕。 詞無<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

胸發音。腎。

商 <sup>カ</sup>キ <sup>ク</sup>コ 牙前。清濁輕。 詞有<sup>二</sup>清濁<sup>一</sup>。

胸發音。肝。

倭片假字畫解。

阿伊宇江平  
アイウエヲ



和  
ワ  
イ  
ウ  
エ  
ヲ  
オ

於

井  
ヤ  
イ  
ユ  
エ  
ヨ

園

奈  
ナ  
ニ  
ス  
ネ  
ノ

太  
タ  
チ  
ツ  
テ  
ト

良  
ラ  
リ  
ル  
レ  
ロ

半  
ハ  
ヒ  
フ  
ヘ  
ホ

末  
マ  
ミ  
ム  
メ  
モ

加  
カ  
キ  
ク  
ケ  
コ

サ  
シ  
ス  
セ  
ソ

追  
考  
伊呂波字畫解。

い  
以  
ろ  
呂  
は  
波  
に  
仁  
ほ  
保  
へ  
邊  
と  
登

□内五字。序所謂

同音五字是也。改

乎伊作於園者。空

海所爲焉。

ち  
知  
り  
利  
ぬ  
奴  
る  
留  
を  
違  
わ  
和  
か  
加

よ  
與  
た  
太  
れ  
禮  
そ  
曾  
つ  
園  
ね  
欄  
な  
奈

ら  
良  
む  
武  
う  
宇  
ゐ  
爲  
の  
乃  
お  
於  
く  
久

や  
也  
ま  
末  
け  
計  
ふ  
不  
こ  
己  
え  
江  
て  
天

あ  
安  
さ  
左  
き  
幾  
ゆ  
由  
め  
女  
み  
美  
し  
之

る  
惠  
ひ  
比  
も  
毛  
せ  
世  
す  
寸

仲春日

花山耕雲散人明魏愚草

右一卷。搜求舊庫反故中。而手錄以歸庵。情開。

秘密之奧藏。示權實之正軌。然音義輕重清濁。

猶未盡曉。而有益于後學。功不少矣。嗚呼惜哉。

未知耕雲散人明魏爲何世何人而已。

元和庚申歲夷則下弦

阿闍梨良正

右一間。於難波速川氏家許借之。命筆染紙。

彼花山耕雲散人明魏考。耕雲自作和歌口傳。

則應永年中出家住山州花頂山焉。續作者部

類卷下曰。凡僧明魏。花山院流尹大納言師賢



孫權中納言家賢卿子。名長親。南朝任權大納

言。新續古今集和歌六首。亦親葉集載。右大將長親詠歌。有

數首。蓋長親慕君至孝。長歌慣音於我朝。遭

親喪。凡三年居憂者。唯遠世貞觀年中紀夏井

也。近代正平年中藤長親耳。長親入道明魏匪

直也人者也。

于時正德三癸巳歲孟春三八日

以寧局今出河如雞

以呂波仁保亡秋切。土。作止非也。知利奴留遠和加與

太禮會門都登切。禰奈良武宇爲乃於久也末計不已

衣作江非也。一說沿。天安左幾由妙美之惠比毛世寸。

門亂。ツオ。ト。直音。ツオ。拗音也。南天。中天。

細井廣澤知慎考

通憲入道藏書目錄

一合。第一櫃。

周易一部。十卷。九箇卷。欠。同注疏經一部。十卷。

周易副象。二卷。上下。周易集注。二卷。四五

易通統卦驗玄圖。一卷。

周易略例。二卷。周易音義。一卷。

一合。第二櫃。

釋注毛詩。四卷。毛詩音義。三卷。

許義音辨五帖。摺本。禮記二帙。上下。上帙。欠。二卷。

禮記子本疏兩帙。一帙欠。二第八卷。二帙欠。第四卷。

一合。第四櫃。

禮記正義第一帙。欠。二九十。見七。

禮記正義第二帙。十。同三帙。欠。第三。見九。

同七帙。欠。第七。見九。

一合。第五櫃。

一結。二禮圖上帙。一結。沿革禮一部。十。



一結。三禮圖下帙。一帙。五行定分法。卷三

一合。第七櫃。禮家六。樂家。

江都集禮下。

第六帙。十卷。

第七帙。九卷。欠三第

第八帙。八卷。

第九帙。八卷。

第十帙。九卷。欠二第

第十一帙。八卷。

樂書要錄一結。十司。

一合。第八櫃。

釋義序集一帖。七司。

以言集八帖。

江碩文一結。

性靈集。五司。

本記一卷。

五兆占四帖。

天曆御集一帖。

一條院御集一帖。

寒山詩一帖。

王逢蒙求一卷。

西京雜記。一司。

遊仙窟一卷。

四條殿遺誠。一卷。

千字文。一司。

一合。第十櫃。

聖證論七。一卷。

五經異義一部。見三司。欠二十七司。

孝經私記。一卷。孝經去或。一司。

孝經弦。一卷。孝經援神契意隱。付鈞命決意隱。

七經發題。一司。六藝一論。一司。

梁集雅義趣。一卷。

一合。第十二櫃。

說文解字一部。十帖。字說二帙。上下。

宋韻一部。五帖。

一合。第十三櫃。

史記索隱上帙。七司。同中帙。十卷。

同下帙。九卷。古史考。九卷。

馬史發題。一卷。決疑滯一部。一帖。

一合。第十四櫃。

漢書傳一帙。十司。同二帙。十司。在二卷。十三。見

同三帙。十一司。同帝記。十三司。見在九司。

一合。第十五櫃。

漢書傳第四帙。十一司。同五帙。十司。

同六帙。十司。同七帙。八司。



一合。第十六櫃。

魏吳蜀志廿帖。

同傳七帖。五卷。

同志上帙。六司。

地理志下之上。一司。

新注漢書序例。一卷。

一合。第十七櫃。

晉書例傳一帙。十四帖。

同三帙。十一帖。

同載記。八帖。

一合。第十八櫃。小史傳。

一結。北史列傳。十五帖。

一結。同傳。十六帖。

一合。第廿一櫃。

蘇子由史記列傳。廿帖。

一合。第廿三櫃。

大宗實錄三帙。十司。

同四帙。十司。

漢書集義一部。

同問答。三卷。

五行志。七卷。

後漢書私記。一司。

漢書訓纂。四卷。

同二帙。九帖。

晉書志一帙。八帖。

同目錄并音義。一帖。

南史傳。

一結。南史列傳。廿五帖。

一合。第廿四櫃。

魏文貞故事。見六司。

說苑上裏。十司。

高士傳讚。一部。上下。

律料。一司。

格後勅。見二司。

大字經荀子。十帖。

新校孟子經白。二帖。

一合。第廿六櫃。

一結。十司。桓子新論上帙。

一結。十卷。劉子乙部。

一結。三卷。稽聖賦上中下。

一卷。物名目錄。

一合。第廿七櫃。

大字雙金。二帖。上下。

馬狀元策府精要。上下二帖。

語麗。四司。

同下。十司。

西京新記。一司。

十州記。一司。

公治長辨百鳥語。一司。

山海經。四帙。

一結。七司。同下帙。

一結。三司。晏子春秋一部。

一卷。七賢讚。

大字注列子。五帖。

釋氏注蒙求。一帖。

典言。四卷。



抱朴子。卷第十二。一卷。

意林。一卷。上。

蔡邕獨斷。一卷。

立身試一部。

九經要略。一卷。

大宗實錄三帙。十卷。

同四帙。十司。

魏文貞故事。見六卷。

一合。第廿八櫃。

說苑上裏。十司。

同下。十司。

高士傳讚一部。上中下。

兩京新記。一司。

要覽。一卷。

唐千年曆。一司。

一合。第廿九櫃。

御覽一帙。十司。

同二帙。十司。

同三帙。十司。

同四帙。七司。

同五帙。十司。

同六帙。十司。

同七帙。十司。

同八帙。十司。

一合。第卅櫃。

御覽九帙。十司。

同十帙。但見在一司。百廿一。

同十一帙。十司。

同十二帙。十司。

同十三帙。十司。

同十四帙。九司。

一合。第卅一櫃。

會要第一帙。十三司。

同第二帙。十貳司。

同第三帙。十司。

同八帙。八司。

一合。第卅二櫃。

珞林四帙。九司。

同八帙。八司。

一合。第卅三櫃。

論衡第一帙。十司。

同二帙。十司。

同三帙。十司。

試子拾遺一部。四卷。

一合。第卅四櫃。

天文要錄第一帙。十司。同第二帙。五司。

同五帙。

同四帙。內第卅九。卅二司。

一合。第卅七櫃。

病源論一帙。十司。

同二帙。十司。

同三帙。十司。

同四帙。十司。

同五帙。十司。

一合。第卅八櫃。

大觀本草目錄。一帖。

大觀證類本草。十司。上帙。



同中帙。十司。

藥證病源歌一結。四卷。

合藥方一帙。二司。

一合。第卅九櫃。

大觀本草下帙。十二司。

醫書要字。二司。上。

藥種畧決。一司。

要藥秘方。一司。

本草和名下。一帖。

應驗如神方。一帖。

宋人密語抄上。一司。

一合。第卅櫃。

勝金方上帙。九司。

同中帙。十司。

同下帙。十司。

一帖同目錄。

一合。第卅一櫃。

注榮林下帙。見八司。欠三二司。三六。

羅隱詩二帖。上五。下五。

臨川先生詩一部。五帖。

一合。第四十二櫃。

廣弘明集上帙。九ケ司。

中帙。九ケ司。

廣弘明集上帙。九司。欠第

同中帙。九ケ卷。欠第十

一合。第四十三櫃。

類聚國史一帙。十司。二帙。十司。

三帙。四司。四帙。十司。

一合。第四十四櫃。

類聚國史五帙。十司。六帙。十司。

七帙。十司。八帙。十司。

一合。第四十五櫃。

類聚國史十帙。十司。十一帙。十司。

十二帙。十司。

江都集禮第三十九弓入加之。

一合。第四十七櫃。

類聚國史十七帙。十司。十八帙。九司。

十九帙。六司。

論語二帖。六。入加之。

一合。第四十八櫃。

本朝世記承平一結。十三司。

同紀天慶一結。十五司。



〔脱載〕

合。第五十一櫃。國史四。

一結。三。

一結。十三司。

〔脱載〕  
合。第五十七櫃。

一結。近衛院。五司。康治  
一結。同十二司。久安。

一結。同六ヶ司。仁平。

一合。第五十八櫃。新國史。

一結。七箇司。世紀。上帙。一結。十一箇司。同二帙。

一結。九箇司。仁和。  
一結。四箇司。寬平。延喜。

一合。第五十九櫃。

一結。八司。自延長元年。  
一結。十司。自延喜十一年。  
十四年。廿一年。兩年欠。至同八年。但

一合。第六十一櫃。

一結。宗家勘集。八箇卷。自第一  
至第八。

令私記。二司。中下。律令格式罪科要抄。一司。

雜穢記。二十司。

一合。第六十三櫃。內

廣幡中納言記。二司。枇杷大納言記。一卷。

清慎公記。一司。安和。貞信公記。十一箇卷。

一合。第六十四櫃。納。

平家并諸家記。十二箇司。

一合。第六十五櫃。

一結。三卷。九條大納言進定  
一結。四卷。經入道本源中記。

一結。五卷。大宮右  
一結。九卷。源中  
府記。

同二帙一結。二卷。天仁。師時記二帙。康和。七司。

同記一結。六司。天仁。同四帖。六卷。永久。

橘爲仲記一結。三司。信經記一結。五司。

一合。第六十七櫃。

相撲記。八箇司。

一合。第七十櫃。同記次第一帖。

定文。十箇司。

一合。第七十六櫃。朔旦勘文。二箇卷。

日本後紀一部。冊司。



一帙。十司。

三帙。十司。

一合。第七十七櫃。

一結。七司。日本紀上帙。欠一二三。

一結。同下帙。九司。欠三第廿九。

一合。第七十八櫃。

初學指南。

上帙。見五司。欠五卷。

中帙。見五卷。欠五卷。

一合。第七十九櫃。

一結。延喜式一帙。十司。

一結。法家勘狀。二司。

一合。第八十櫃。

一結。式曆。十一司。

一結。內新國史。四司。

一帙。多治抄。

弘仁圖第五。

叙位圖第五。

二帙。十司。

四帙。十司。

一結。同中帙十司。

一結。文德實錄一部。

下帙。十司。

合七卷。但當時無。

右京職圖。一司。

一結。格勅符抄。八司。

陰陽寮次第。一司。

一帙。外記日記。

二卷。國後抄第二三。

御即位記。寬平。延久。

貞觀格四帙。

一合。第八十一櫃。

類聚檢非違使官符宣旨一結。八司。

新定檢非違使私記一結。三司。上中下。

檢非違使勘問式。二司。

一合。第八十二櫃。

和漢要術。九箇司。

同秘術。五箇司。

一合。第八十三櫃。

禊祭抄。二帖。上下。

同記。三司。

赦仰書。二司。

神宮御領目錄。一司。

御逆修。二司。

各別物記。一司。

律問答。一司。

同仲私記。一司。

令私記。一司。

新合讚撰。一司。

雜奉勅宣別當上。一司。律傍通一部。一司。

一合。第八十五櫃。

踐祚例。四帖。

同新事。一司。

齋宮歸京雜例。一司。

同記。一司。



同符案。一帖。

御卽位抄。一帖。

此內句記三ヶ号。山陵廢置記一号。被留。

御所。追可被返納云々。

一合。第八十六櫃。

着座記。七号。

御賀記。

四号。康和三号。仁平一号。同式一号。仁平。

春日祭使記。

四号。天仁。寬治。久安。仁平。

元服着袴記。一号。

春日詣次第。一号。仁平。

八幡臨時祭使記。

一号。天喜三年。京極大殿。

加茂詣記。一号。

承曆二年。

加茂祭使定文。一号。

此外御產記。十号。雖有櫃銘不見。

一合。第八十七櫃。

格後類聚抄。十帖。

一合。第八十八櫃。延久宣旨等。

三帖。

延久三年六月伊房卿。其時爲藏人頭。同三年七月。同四年正三。

一結。

六卷。同四年夏四。同秋。七月八月閏。

五月六月。七月九月。

一号。

源大丞宣旨目錄。長和五年。正二三四五六讓位大尊會。

一号。長元三年冬宣旨。

一結。加茂祭使文三股。少將殿。加茂祭使定言一。又一結。賀茂祭使文二通。指圖一枚。賀茂祭使出立所。

春日祭御文三通。

二結。

加茂祭使雜事文等。

一合。第八十九櫃。

格後抄。

二十帖。

一合。第九十三櫃。

南史帝記一帖。一二。

北史帝記一帖。一二。

孝經述議一帖。

和漢要術。三号。

源大丞記。二号。

帝代記上。一号。

直物抄。一号。

相公儀。一号。

拾遺抄。一号。

金神方忌勘文。一号。

易六日七分抄。一号。

柱下類林。二号。

類聚諸道勘文。一号。

土記抄。一号。

李部王記類聚抄。一号。

一合。第九十五櫃。

類聚諸道勘文第八帙。十号。



小右相記一結。十司。

一合。第九十六櫃。

本朝世記一結。十三司。朝野群載一結。九司。

延納言記下。相尹記一結。四司。

真信公記一結。五司。範國記一結。三司。

橘爲仲記。一司。廣幡納言記。一司。

小一條記。一司。

一合。第九十七櫃。

公卿補任。九帖。少納言補任。一帖。不見。

檢非違使補任。三帖。同補任。五司。不見。

儒歷。五卷。明經明法筆。藏人補任。一帖。

受領補任。十帖。但見在二帖。東海道西海道不見。

齋宮抄。一司。齋院抄。一司。

一合。第九十八櫃。春秋家

公羊傳一部。十二司。春秋辨議一部。十司。

左氏膏肓一部。五司。欠三六七八又二三。

穀梁傳私記。上下。春秋文苑。五司。

海陵春秋。十帖。一局。銘無之。

藥師寺沙汰文書一結。三司。

一合。第九十九櫃。

裝束記。八司。朽損第八口在之。裝束使記文。五司。朽損。

綸旨抄一部。四帖。令義解。四司。一六七九朽損。

明法部類要判集。一司。朽損。

延喜式。一司。第卅八司。

移行外記政於官廳儀式。一司。朽損。

秘記十五帖同。雖有二櫃銘不見。同記目錄。同上。

一合。第一百櫃。

本朝世紀一結。天養五司。久安三卷。

字林。一司。外記雜例一部。四司。

同雜例。一司。上。同雜例。一司。上。

加納本朝月令一部。四司。人々裝束記。二司。

一合。第一百二櫃。

青陽抄。六司。祭御記目錄。一司。

祭酒記。六司。同酒記。十司。



一合。第百三櫃。

經史目錄一部。七司。

文選目錄。三司。

微事勘文。六司。

一合。第百四櫃。

左子上帙。十司。

毛詩上帙。十司。

同下帙。十司。

左傳上帙。十司。

同中帙。六司。

同下帙。八司。

一合。第百五櫃。

一結八帖。白氏文集二帙。欠。

三帙。十帖。

四帙。十帖。

五帙。十帖。

六帙。十帖。

七帙。十一帖。

一合。第百六櫃。

一結本朝秀句一部。

一結扶桑集。九司。第一帙欠。

三帖續本朝秀句。

上中下。拾遺佳句抄。上中下。

一帖千載佳句下。

一結句題詩抄下帙。

一結絕句詩抄中。

一帖先老抄。

一卷詩判相撲立時并詩。

二卷詩令集。

扶桑集。

一卷打聞集。長句。

一句抄。上下一帖。

一結類聚句題詩抄。第十。

悠紀齊場所日記。

永承元年。

一合。第百九櫃。

一結抱朴子。上帙十司。

一結史記世上帙。十司。

一結本紀。十二司。

二司唱和集。上下。

一司匡張孔馬傳第五十一。

漢書八十八。

後漢書帝記。十司。

漢書六帙。

雖有櫃銘。不見文。

一合。第百十櫃。

續日本紀一帙。十司。

同二帙。十司。

同三帙。十司。

同四帙。十司。

指圖三枚。

一合。第百十一櫃。

世上帙。九箇司。欠三第三司。

同下帙。九箇卷。欠三第九司。



傳上帙。七局。

欠三第一二九司。

同中帙。

六箇司。欠三第六七八十。

下帙。十司。

一合。第百十五櫃。

江都督序。二帖。

以言序。一帖。

紀在昌集。三司。

文芥集一結。十司。

同集一結。七司。

菅三品序。一帖。

都督亞相草。一司。

三代御製。一司。

一合。第百十六櫃。

釋靈實年代記。九司。朽損。

王勃集。一帖。

天寶文苑集。六司。朽損。

李商隱詩集。三司。

齊名集一部。一帖。

儀同三司集。一帖。

勘解相公草。二司。

田達音集。十司。

同集一結。六司。

菅家後集。一司。

沙門敬公集。三司。

泉州尚書草。一司。

菅輔昭序。一帖。

禮部韻。一帖。

寬和抄一部。五卷。

本朝亥始。略抄。二司。

張孟押韻。一帖。

日記抄。四帖。

杜荀鶴集。一司。

七賢讚。一司。

一合。第百廿二櫃。

典麗賦集第二帙。六箇司。

同賦七帙。十箇司。

搜神後記。九箇司。欠三。醫心方九帙。自九至一。

十全要方目錄。一帖。無名抄。一帙。

桂山文律。十三箇司。四帖。

梁後畧。二箇司。一三。章語。一二箇卷。四六上。

遊仙窟。一司。律。一司。

一合。第百四十一櫃。

一帙。勘荅集。九司。第二不見。五帖。同目錄。

一卷。大神寶記。一卷。弓場始記。

一卷。考文。一結。天文抄。四司。

一司。符案。三司。一卷。祭之料。二司。

一卷。傳。七卷。一司。長德二年記。



一卷。除目叙位記。

一弓。八十嶋祭祀。

一卷。金剛新律抄。

一弓。寬平遺誡。

一卷。黃帝太一法。

一卷。大一勘文。

一卷。太一要抄。

一卷。本策林目錄。

一卷。法家文書目錄。

一弓。大治五年十月。

一卷。五節定文。

一弓。外題破損文。

一合。第百四十二櫃。

一結。天文書抄。

一結。同書抄。

一帖。大嘗會御禊次第。同頓宮圖三。

天文勘草。

易命期注私記。

大判事永直朝臣勘合。

殿上記。二弓。

一合。第百四十三櫃。

十全要方。

三十卷。自<sub>二</sub>第廿一弓<sub>一</sub>。

至<sub>二</sub>五十弓<sub>一</sub>。

一合。第百四十五櫃。

一結。近代和漢年代曆。六十弓。

一結。舊記。七ヶ弓。村上。

一結。宣旨目錄。九ヶ弓。朽損。

一弓。寬和類聚抄。法家。

朽損。

一弓。裝束使記。但朽。

一卷。內侍司式。同。

一卷。雜抄。

一合。第百四十六櫃。

宣旨目錄。七弓。

本朝世記。七弓。

御書解狀宣命上表一結。

已上多虫損。

一合。第百五十五櫃。

禮記正義一帙。十弓。

周禮疏一帙。十弓。

史記傳。四弓。

雜々書一結。御書。

一合。第百七十櫃。

大嘗會。

缺文。

一合。通憲書。

筆談上帙。十弓。皆朽。

中帙。十弓。同朽。

下帙。三弓。

文粹上帙。十弓。

下帙。八弓。

令。一帖。

公卿補任。一帖。

唱和集。二弓。



抄物。三帖。

貞信公教命。

扶桑集卷第六。

唐書目錄。

天地瑞祥志第十六。

一合。

晉書。十八卷。

魏書。十六卷。

隋書。十卷。

宋書。七卷。

陳書。十六卷。

一合。

東宮切韻。十二帖。

廣益玉篇。三帖。

字寶前集。二帖。

句題持抄。十帖。

皇宋百家詩。三帖。

唐韻。四帖。

列子。二帖。

相馬經。二卷。

良馬圖。一卷。

日本紀。三卷。

律。一卷。

前漢志書。一帖。

隋書經籍志。二帖。

諸家點圖

喜多院點

東南院點

圓堂點

觀音院僧  
正加點

中院僧正點

寶幢院點

智證大師點

西基點

三寶寺點

水尾點

禪林寺點

遍照寺點

香隆寺點

淨光房點

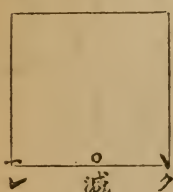
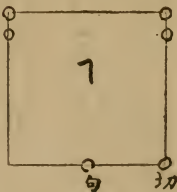
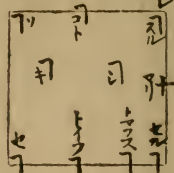
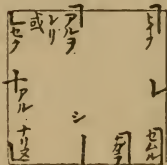
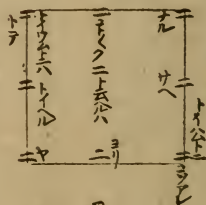
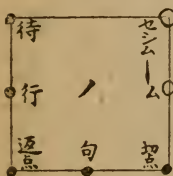
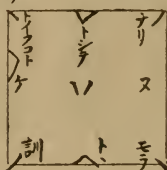
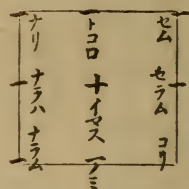
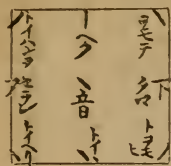
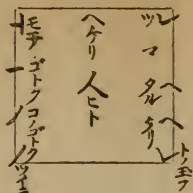
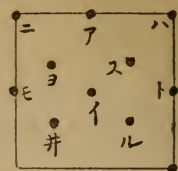
順曉點

俗家點

經點



# 興福寺法相宗喜多院點





東大寺三論宗東南院點醍醐同用之

ト	ハ
ヨ	ス
リ	モ
	ニ
	テ

レ	ナ	ク
ー	ニ	ツ

フ	シ	テ
ハ	ヘ	ノ
マ		

タ	タ	タ
タ	タ	タ
タ	タ	タ
タ	タ	タ

イ	ハ	シ	キ
ナ	リ	テ	ス
ハ	ニ	ル	ニ
ナ	リ	テ	ス

アル	コト	セル
レ	ン	モ
レ	ン	モ
レ	ン	モ

ナ	ス	ル
ナ	ス	ル
ナ	ス	ル
ナ	ス	ル

セ	セ	セ
セ	セ	セ
セ	セ	セ
セ	セ	セ

フ	リ	フ
フ	リ	フ
フ	リ	フ
フ	リ	フ

ニ	ニ	ニ
ニ	ニ	ニ
ニ	ニ	ニ
ニ	ニ	ニ

ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ

ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ
ト	ハ	ヤ	モ	ヘ	リ	ミ

ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル

ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル
ナ	ス	ル	ナ	ス	ル

シ	カ	フ	シ	カ	フ
シ	カ	フ	シ	カ	フ
シ	カ	フ	シ	カ	フ
シ	カ	フ	シ	カ	フ







觀音院僧正被加點

人 シラ	人 ミテ	人 ヨテ
人 ミ	人 シ	人 シラ
人 ミ	人 シ	人 シラ

フ ミ	フ ミ	フ ミ
フ ミ	フ ミ	フ ミ
フ ミ	フ ミ	フ ミ

ム	ラ	ト
ハ	ラ	モ
ヨ	ミ	ヌ

セ	ミ	サ
ノ	ノ	ケ
ラ	ス	サ

リ	リ	リ
リ	リ	リ
リ	リ	リ

シ	シ	シ
シ	シ	シ
シ	シ	シ

ソ	ソ	ソ
ソ	ソ	ソ
ソ	ソ	ソ

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ



中院點 高野所用也

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ

ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ
ハ リ	ナ リ	ハ リ	ナ リ







ヒリ	スス	シ
ー	リ	ラ
モ	レ	タ

ハ	ハ	ハ
訓	訓	訓
ハ	ハ	ハ

リ	リ	リ
リ	リ	リ
リ	リ	リ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ

マ	マ	マ
マ	マ	マ
マ	マ	マ











ム	ム	ム	ム
ム	ム	ム	ム
ム	ム	ム	ム
ム	ム	ム	ム

シ	シ	シ	シ
シ	シ	シ	シ
シ	シ	シ	シ
シ	シ	シ	シ

ス	ス	ス	ス
ス	ス	ス	ス
ス	ス	ス	ス
ス	ス	ス	ス

三寶寺點

幾菩提心寺用之

第二圍文初コト本書無朱第五圍愛點無朱

セ	セ	セ	セ
セ	セ	セ	セ
セ	セ	セ	セ
セ	セ	セ	セ

カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ

ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト

ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト
ト	ト	ト	ト

フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ

佛	佛	佛	佛
佛	佛	佛	佛
佛	佛	佛	佛
佛	佛	佛	佛

ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ

ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ	ナ



水尾點 圓堂僧正用之

フ	音	エ
ト	人	ト
モ	訓	ハ
テ		

マ	ハ	ム
一	テ	シ
カ	ヒ	ク

ル	ワ	ハ
ト	ク	ヒ
ル	下	ヤ

ル	マ	ト
	イ	エ
ヨ	フ	エ

セ	タ	サ
ラ	テ	ケ
ワ	ス	サ

ノ	下
---	---

--

ハ	イ	ハ
イ	テ	ヤ
ハ	モ	イ
ハ	エ	ハ

ニ	マ	ニ
マ	ア	ニ
	ニ	

フ	フ	フ
ヨ	ヒ	フ

ト	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ
ハ	ハ
ハ	ハ



禪林寺點

ニ	ハ
ノ	ミ
テ	ラ

ス	ス	ス
ス	ス	ス
ス	ス	ス

ニ	ニ	ニ
ニ	ニ	ニ
ニ	ニ	ニ

セ	セ
タ	タ
ム	ム

人	人	人
人	人	人
人	人	人

レ	レ	レ
リ	リ	リ
リ	リ	リ

ト	ト
ム	ム
ム	ム

--

ト	ト
ム	ム
ム	ム

カ	カ
ル	ル
ラ	ラ

--

レ	レ	レ
リ	リ	リ
リ	リ	リ

セ	セ
タ	タ
ム	ム

--

ト	ト	ト
ム	ム	ム
ム	ム	ム



遍照寺點

エ	カ	テ
シ	ヲ	シ
テ	モ	ハ

アリ	。	ス
セ		ワ
		ム

リ	ヲ	キ
ヨリ		ナ
ル		ク

エ	ヤ	シ
ニク		レ
リ	ト	ナ



フ	ク
フ	セ
フ	フ

ト	ト
ト	ト
ト	ト

イ	ホ
ク	リ
ミ	シ

フ	フ
フ	フ
ヨリ	フ

ル	ル
ル	ル
ル	ル

ト	ト
ト	ト
ト	ト







淨光房點

ニ	ム	リ
カ	ノ	ト
テ	ハ	

シ	シ	モ
ハ	ア	リ
ノ		ヨ

セ	ト	シ
ノ	イ	ハ
ハ		

セ	リ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	セ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

順曉點

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ



俗家點

カ  
リ  
トナ  
セハ  
ヤ

ナ  
アリ  
セハ  
シハ  
シ  
ノ  
ス

レ  
シ  
レ  
サ  
レ  
モ  
ノ

ヲ  
テ  
人  
人

ア  
ヌ  
セ  
ル  
セ  
ル

ル  
セ  
レ  
シ  
レ  
モ  
ル

ア  
ト  
ス  
ム  
ン  
テ  
カ  
ハ  
ニ

リ  
音  
訓  
ノ

俗點

リ  
ナ  
リ  
セ  
ル  
セ  
ル  
リ

セ  
音  
ナ  
リ  
セ  
ル  
セ  
ル  
リ

モ  
リ  
セ  
ル  
リ

セ  
リ  
ナ  
リ



マ	ム	ワ
ヤ		ヲ
エ	イ	ス
送	引	句

ト	夕
訓	音
序	ト

レ	レ	ス
ル	ル	ナ
ル	名	ナ

ワ	ノ
リ	訓
リ	音
金	名

ト	主	ト
ト	名	ト
ト	多	ト

一	一
セ	シ

レ	レ	ス
ル	ル	セ
ル	ル	ル

ニ	ム	
カ	ン	ハ
ケ	ス	ハ

ワ	ヤ	モ
ワ	ヤ	ソ
人	ワ	ケ

ル	一	ル
ル	一	ル
ル	一	ル

レ	名
レ	

リ	リ	リ
リ	リ	リ
リ	リ	リ







右點圖

内外

以興福寺中山上下藏院教弘本  
貞享二乙丑歲七月廿日字之

ヘ	ヤ	モ
ヘ	ヨ	ソ
ヘ	ラ	ケ

エ	ム	ヲ
カ	ノ	下
ヲ	ス	ハ

ハ	フ	ラ	ヨ
可	ホ	ニ	ク
リ	ヤ	キ	

ナ	シ	ル
ヌ		ヒ
ロ	シ	ル

ナ	ナル	ト
ナ	ル	ナ
ナ	ル	ナ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

官名	人名	取名
----	----	----

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

書名
----

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ

漢書	吳	訓
----	---	---

ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ
ナ	ナ	ナ

ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ
ハ	ハ	ハ



經家

リ	リ	リ	リ
訓	吳	漢	吳
テ	リ	ス	ハ

上	去	ニ	ム	フ	ナ	レ	ス
輕	輕	カ	ノ	ハ	ス	シ	ル
平	入	テ	ス	ハ	フ	シ	ル

官名	人名	地名	ト	ヲ	ハ	ニ	ス
名	名	名	ト	ヲ	ハ	ニ	ス
名	名	名	ト	ヲ	ハ	ニ	ス

書名	ト	ハ	ニ	ス	フ	ナ	レ	ス
訓	吳	漢	ト	ハ	ニ	ス	フ	ナ
訓	吳	漢	ト	ハ	ニ	ス	フ	ナ

リ	リ	リ	リ
訓	吳	漢	吳
テ	リ	ス	ハ

リ	リ	リ	リ
訓	吳	漢	吳
テ	リ	ス	ハ

紀傳



經傳

石  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

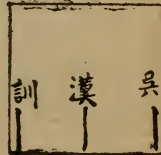
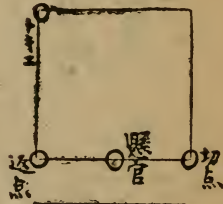
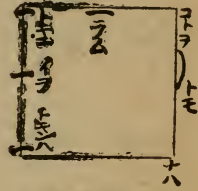
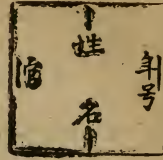
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光

光  
光  
光  
光  
光  
光  
光  
光







群書類從卷第四百九十六

雜部五十一

桂林遺芳抄

儒門繼塵目錄。

一學問料事 附欵狀并諸例事 外記續別紙可書宣旨事

一入學吉書事 附蔭子蔭孫并字等事

一文章得業生事 附儒學并年紀以下諸例事

一寮省試事 附本堂字并諸說翰林貢舉狀寮解

狀題同詩評定文等事

一進士給官事 附學生以下諸說事

一方畧宣旨事 附欵狀并諸例事

一課試宣旨事 附儒舉并覆問宣旨等事 又有諸例

一當氏二年策例事

一問頭博士事 附欵狀并諸例事

一問頭題者兼行例事

一郡事屋申文事

一禮籍事 附禮物贈事

一試衆小屋事 附神座事

一題者事 當日儀

一策文事 同前

一問頭書問事 同前

一古文文字事

一判儒事

一獻策雜例事

重服例試衆多少例省試獻策同例策勞例給

墨例大破子已下例事



一當日文章院參仕事 附廟拜事

一當日郡事屋事 附判事評定文事

已上大概分如件

一給學問料事。

號給料。給料後號學生也。位署等書學生也。

此事儒門繼塵之初道也。學鬻之燈燭料申賜宣旨。自穀倉院配分也。故云給料也。今則雖爲告朔餼羊。必先申請也。此後當氏并江家學生等者。在文章院稽古積功也。藤氏人者。給料之后。在勸學院成稽古也。兩院各有二人宣旨。必獻上宣旨。每度之儀也。所望之欸狀云之內舉。或父或祖父舉中也。無父祖時自身申賜云之自解云々。儒卿又舉奏。古來之義也。欸狀文章四六也。書調時又別副消息付職事也。上古者。年齡闌申之。近代者。幼年二三歲之時卽申

之。二歲之時號三歲也。雖然七八歲許之時申給宜也。堅固幼少者。無冥伽歟。可得意事也。若又年齡馳過之人者。三年以上付上申給也。假令十五歲之人者。十二歲計書上年紀也。此事非曾自由之義。古來如此。故二歲之時號三歲。一歲付上也。省試獻詩計之人。二三歲之時又如此之例也。

欸狀調樣事。

文章以四六可積螢雪之功由也。如舊草可計會強紙一枚書欸狀。同紙以一枚爲裏紙。以一枚爲懸紙。但近代。皆略懸紙。卷加消息故也。消息或又強紙。或杉原等也。凡此欸狀與方。宣旨之詞書載之程。相計可置餘慶也。但復文章多之時者。不可及此儀也。外記續加別紙例存之矣。消息者付職事。職事奏聞之后。下上卿。上卿下外記。外記書載宣旨詞送其人也。



一瑞雲院贈内府記云。欸狀高檀紙ニカク。裏紙懸紙アリ。欸狀奥ニ餘分ナケレバ。外記局ニテ裏紙ヲ續加テ宣旨詞ヲ書ナリ。件草如此云々。草在レ下。

一口傳抄云。内舉ニハ不隱子。外舉ニハ不穩仇。起自晉祁侯之舉子。見晉世家。

一無父祖之時稱自解自身申云々。此事予難信。予申學問料之時依無父祖。故大藏卿顯長入道令商量欸狀等令計會。然處自解例舊草不見及。又大藏卿入道家傳未練也。於時了見之義歟。不審也。無舊例者。予一代之誤。不可爲後例也。草在レ下。

一瑞雲院贈左府記云。所望ノ狀。是ヲ内舉ト云フ。或父或祖父舉中。卿位ニ昇輩兩三人ヲ舉申。四品一巡一人ヲ舉。五位ハ舉セズ。藤家ハ四位以後數輩舉奏ス。傍若無人事也云々。以之思之。父五位時不舉。儒卿舉之例者。應永七

年四月散位正五位下。菅原爲興息男爲嗣給料。父舉申之處。欸狀不被用之。同十一年十二月。迎陽御舉也。舊草在レ下。如此之時。自解之申狀尙以不審次第也。舊例可尋決一矣。

一文永元年十月。式部大輔良賴卿申狀云。曩祖清卿不至志學之齡。始給學問料。紀傳道之濫觴云々。

一申學問料事。被尋儒卿例。

曩祖長卿請文云。

臣宮者後醍醐天皇田口公良之孫也

長勝學問料所望事。桃宮三位欸狀。加一見返上之。儒卿第二之舉者。皇澤無變之恩也。所内舉無子細。宜在時儀。以此趣可令洩披露給。長誠恐謹言。

十二月十八日

刑部卿長

奉行頭左中弁忠光朝臣也。

右一紙以迎陽御筆蹟注記之畢。

長勝者淳嗣朝臣之弟也。仍云第二之舉歟。欸狀舊草。卿位之時者端不書位署也。雲客之時端先書位署也。大略欸狀之法樣也。已



一藤氏例。下同。

請殊蒙。天恩因准先例依奉公勞以男

正六位上兼宣被恤賜學問料狀。

右兼綱謹考舊貫給料有闕之時儒卿舉子之日採用異他者。皇化之規範吾道之故實也。

爰兼綱補五位侍中昇仙郎貫首從大丞平章事歷王言吐納官其父既有勞其子豈無賞哉望請天恩因准先例依奉公勞以件兼

宣被恤賜學問料者將誇九枝之明詔令繼累葉之舊業矣兼綱誠惶誠恐謹言。

貞治七年正月廿五日從二位藤原朝臣兼綱

菅氏例。

請殊蒙。天恩因准先例以男正六位上長

清給穀倉院學問料令繼門業狀。

右益謹檢案內受菅氏門業給穀倉院料者聖朝之嘉猷吾道之故實也何況徒有兩闕

既送多年爰益雖登三品之班未及一子之舉夜鶴之思尤切夏螢之學不荒望請天恩因准先例以件長被賜學問料者彌仰淳朴之聖日將繼累葉之儒風矣益長誠惶誠恐謹言。

文安三年十月廿日從三位行左大弁兼山城權守菅原朝臣益

宣旨。此宣旨外記續加他強紙書。

正三位權中納言藤原朝臣隆遠宣奉

勅依請者。

同年同月廿三日

大外記中原朝臣師胤奉

五位者不內舉例事。父非成業之時又不舉之例是同也。

菅爲興五位時雖舉申息男爲嗣歟狀不被用數年之後儒卿迎陽卿舉也之舉也次第下知如此。

舊草。

散位正五位下菅原爲興誠惶誠恐謹言。

請殊蒙。天恩因准先例以男正六位上爲



嗣被給穀倉院學問料令繼儒業狀。

右爲興謹檢案內。受菅氏門葉。給穀倉院料者。聖朝恒規。吾道故實也。爰爲興雖非成業之身。欲舉慈愛之子。夜鶴之思尤切。夏螢之學不荒。今所推薦。誰謂非據。望請天恩因准先例。以件爲嗣被給學問料。彌仰崇文之化。增勵遊學之功矣。爲興誠惶誠恐謹言。

應永七年四月日散位正五位下菅原朝臣爲興右父非成業之時。亦不得學子之例。同見此欸狀。口傳之旨不替者也。

迎陽御舉狀草。

請殊蒙天恩因准先例以男正六位上爲嗣給穀倉院學問料令繼門業狀。

右秀長謹檢案內。學問料者。內舉之道。先蹤雖區。優帝師之學。賞儒宗之勞。必有恩許。尤爲嘉猷。何況徒有兩闕。既及數年。早達舉奏。可謂洪恩。爰爲嗣。八歲入小學。三餘勵殊功。

望請天恩因准先例。以件爲嗣被下學問料。將知重師之義。彌揚弘儒之名矣。秀長誠惶誠恐謹言。

應永十二年日參議三位行式部大輔兼因幡守菅原朝臣秀一

從二位行權中納言兼太宰權帥藤原朝臣資落宣奉勅。件爲嗣宜仰穀倉院給學問料者。

同年同月廿五日 大外記兼越前權守清原真人賴秀奉

次第下知上卿。

宣旨。

式部大輔菅原朝臣申請殊蒙天恩因准先例。以男正六位上爲嗣給穀倉院學問料。令繼門業事。

仰依請。

右宣旨。早可被下知之狀如件。

十二月廿五日

太宰權帥判

四位大外記局

一自解欸狀事。

例不審之段記前段。



正六位上菅原朝臣和長誠惶誠恐謹言。

請殊蒙。天恩因准先例給穀倉院學問

料令繼儒業狀。

右和長雖受菅氏未浴洙水之波雖遊杏壇猶迷翰林之道慈考已令早世祖父又卜他生有誰傳詩書顧已過志學伏檢案內賜燈燭纏筆硯者洪儒之芳蹤聚螢火繼箕裘者大業之舊貫和長以自解企舉奏也望請鴻慈因准先例被下宣旨者爲聖朝佳猷拜院料令扇門風者爲吾道餘慶矣和長誠惶誠恐謹言。

文明八年二月十二日正六位上菅原朝臣和長

正三位行權中納言藤原朝臣胤宣奉

勅依請。

同年同月同日掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

一息男兩人舉奏事。

從四位上行少納言兼侍從文章博士大內記

越中權介菅原朝臣和長誠惶誠恐謹言。

請殊蒙。天恩因准先例以男正六位上

長標給穀倉院學問料令繼儒業狀。

右和長謹檢舊貫承箕業於菅氏給燈料於穀倉者皇家之嘉猷吾道之故實也匪嘗有兩闕況復送數年爰和長雖近不惑之齡未達內學之志常苦鶴籠之思而屬螢案之勤望請天慈因准先例以件長標賜學問料者彌扇蓬嶋之聖風式誇杏壇之遊學矣和長誠惶誠恐謹言。

明應五年正月廿三日

從四位上行少納言兼侍從文章博士大內記越中權介菅原

朝臣和長

正三位行權中納言藤原朝臣季種宣奉

勅依請。

同年同月同日

大外記中原朝臣師富奉

此長標十五歲夏自入釋門畢。



請殊蒙。天恩因准先例以男正六位上長  
淳給穀倉院學問料令繼儒業狀。

右和長謹檢舊貫承箕業於菅儒生賜燭料於  
穀倉院者。聖朝之嘉躋吾道之恒規也。爰和  
長雖送五十之餘春秋未得一子內舉時節幸  
有兩闕況惟及數年偶加五更式欲被優賞  
望請鴻慈因准先例以件長淳給學問料  
者早慰鶴籠之恩彌勵螢幌之勤矣和長誠惶  
誠恐謹言。

永正九年六月九日正三位行權中納言兼大藏卿菅原朝臣和長  
從二位行權中納言藤原朝臣元長宣奉

勅件人宜仰依請者。

同年同月同日從四位下行掃部頭大外記造酒正助教中原朝臣

師象奉

右公卿雲客端作之差別如此之法也。

一入學吉書事。

此事近代無沙汰無謂省試時必有之初參

之日可有吉書事也可再興矣。

給料后文章院初參之日入學名簿學生隨身  
而下堂監也。入院名簿同事也。吉書又同事也。  
家記云。入學名簿之事。堂監覽博士歟云々。近  
代大學寮并東曹西曹依退轉無入字之儀間。  
自然無沙汰不可然於秀才不可付寫之義  
見又不可然書樣者。一門五位必書之也。近  
代四位又多分也。本堂字之事。此入學日所付  
之字也。瑞雲院贈左府云。次文章院ニ參ス。氏  
院ニ參ノ如シ。手ヲ洗テ廟拜廿一反。但員數不  
定云々  
次臺盤座ニ着ス。北上東面也。座定盃酌。此座  
ニテ吉書アリ。堂監吉書二枚ヲ讀テ後試衆等  
ニ授。試衆二字ヲ加テ返給テ退出云々。

件吉書事。是ヲ氏院入院名簿ト號同事也。

兼日二通堂監ニ書給。各裏紙懸紙アリ。厚  
紙ニカク。正中ニハ一通ニハ署ヲ加返  
給。一通ハ懷中云々。



建仁ニ加ニ二字テ返賜云々。堂監書進之。

蔭子正六位上藤原朝臣弘行。年八歲。

正六位上行左衛門尉弘資男。

正三年二月廿八日正五位下行春宮權大進藤原顯盛貢

如此書也。蔭子蔭孫者。依父祖位可書。位

署ニハ一門五位令書云々。於正統者不書

之云々。此奧ニハ堂監如此三行令書。

判。以藤槐爲本堂

字者。

同年同月同日堂監前周防守藤原重親

此奧。秀才加署。

文章得業生正六位上藤原朝臣兼。

或記云。寬平八年十二月十三日。齊世親王入

學。當日早朝召文章博士紀長谷雄。御自持名

簿賜之。長谷雄拜舞。親王參當云々。

一蔭子蔭孫事。

父之位高時者云。蔭子。祖父之位高時者云。蔭

孫。以父祖之位定學生之位故也。此事朝廷者

無如爵。是同事也。儒門者以蔭子蔭孫爲初

位也。但於令者諸人皆以蔭子蔭孫定也。當時

者諸家皆以五位爲初位間。不及此義也。儒

門初位者爲六位條。專用此義也。儒者不越

次第之法也。

令云。凡學生在學。各以長幼爲序。初入學皆

行束脩之禮於其師。各一端。私云。長幼之序。依有煩。立蔭子蔭孫也。

延喜式云。凡遊學之徒。情願入學。不限年多

少。總加簡試。其有通一經聽預學生。但諸王

及五位已上子孫不預簡試。

蔭子蔭孫。

或記云。現在之父在。于時書蔭子。現在之祖父

在。于時書蔭孫云々。

一字事。上古樣。

凡如漢朝於字者。上置姓之一字。下置別字

也。



聖廟御字者菅二三善清行字三耀、文屋康秀字文琳、紀長谷雄字紀寬、藤道明字藤階、橘澄清字橘上、平惟長字平昇、源扶義字源敦等也。

此外有姓字不取也。

藤菅根字右生、橘廣相字朝凌、田口忠臣字達音、春淵良規字朝二等也。例兩樣繁多也。近代之樣者、依堂監相計用藤槐菅寮等也。委細尙注省試之段畢。

一補文章得業生事。文章生者進士也。

此事學生賜一官之儀也。宣下後云文章得業生也。或號秀才、或稱茂才也。但位署只文章得業生。上古者通一經

之時、被登用補秀才也。今者翰林學士以簡試分欸狀。文章博士之舉也。仍云儒學也。獻上宣旨也。雖儒學於欸狀者、學生書調之送翰林兩所之亭請加署也。位署悉書連於名字二字。兩人加之也。上首翰林必與也。文章者四六也。料紙又同。給料欸狀消息又是同。年紀事。

上古者九年或七年也。今者歷四ケ年可申分也。雖然例不定也。

瑞雲院贈左府記云。給料后四ケ年ヲ經テ秀才ニ登ベキ式法ナレドモ。只闕ニ隨テ申任ズ。隨テ承久元年例ハ翌年ニ轉任シキ。是ハ儒舉ト申テ。文章博士署ヲ加テ申ス。欸狀ヲ書調テ。翰林二人カ一人カ位署ヲ書テ。内々ノ狀ニテ。先上首。次ニ下薦ノ翰林ニ遣テ署ヲ取テ後職事ニ付ク云々。

欸狀草。

請殊蒙天恩以學生正六位上藤原朝臣兼宣被補文章得業生狀。

右兼宣者。貞治七年給穀倉院學問料。爰秀才兩闕有之。兼宣一闕當仁。登用之處誰謂非據。況亦黃闕譜代之蹤。祖胤不淺。書齋競陰之學。幼聰呈譽。不舉若人何勵。後昆望請天恩。以件兼宣被補文章得業生。將闕茂才之榮。



令繼累葉之慶。仍勒事狀。謹請處分。

應安三年十二月 日

從四位下行文章博士伊豫權介藤原朝臣

正四位下行大學頭兼文章博士越後介菅原朝臣

給料兼宣揚歷事儒學執進候。急速可令奏

達給。恐々謹言。

十二月廿日

兼綱

頭弁殿

一五ヶ年例。年紀。

請殊蒙天恩以學生正六位上菅原朝臣

長直被補文章得業生狀。

右長直者。去文安三年給穀倉院學問料。爰秀

才有闕。長直當仁。況亦親瑩囊兮志學不瀟。

闕蠶簡而幼敏有譽。功績所至。推薦豈私。望

請天恩因准先例。以件長直被補文章得業

生者。彌勵龍門之志。令件鵷班之陰矣。仍勒

事狀謹請處分。

寶德二年三月廿三日

從四位下行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣爲賢

正三位行權中納言藤原朝臣定嗣宣奉勅。件

長直宜補文章得業生者。

同年同月同日

大外記兼主水正助教清原真人宗賢奉

一四ヶ年例。

請特蒙天恩以學生正六位上菅原朝臣

長教被補文章得業生狀。

右長教者。去應永四年給穀倉院學問料。秀才

有闕之時。給料學生被轉補者古今之例也。次

第所推。長教當仁。就中性稟幼敏。勤編蒲之

功。跡慕累塵。求折桂之譽。不舉若人何勵。後

輩望請天恩以件長教被補彼闕者。忽仰

就日之恩。彌勤競陰之學。仍勒事狀謹請處

分。

應永七年三月日

從四位上行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣長方



從四位上行文章博士菅原朝臣長遠

正二位行權大納言藤原朝臣實豐宣奉勅件長教宜補文章得業生者。

同年四月廿二日大外記兼博士越中權守清原真人賴季奉

請特蒙天恩以學生正六位上菅原朝臣

長清被補文章得業生狀。

右長一者。文安三年給穀倉院學問料。秀才有闕之時給料學生被轉補者。古今之例也。次第所推。長清當仁。就中學務時習。志期日新。該貫乎六藝之文。手未釋卷。總括乎百家之說。口弗絕吟。不舉若人何勵後輩。望請天恩以件長一被補彼闕者。彌仰配天之皇澤。將繼累世之儒風。仍勒事狀謹請處分。

寶德元年十一月三日

從四位下行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣爲賢

從四位下行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣繼長

此宣旨續別紙外記書宣旨詞畢仍記此

歟狀。

正三位行權中納言藤原朝臣定嗣宣奉勅件長清宜補文章得業生者。

同年同月十二日大外記兼主水正清原真人宗賢奉

三ヶ年例。

請殊蒙天恩以學生正六位上菅原朝臣

有長被補文章得業生狀。

右有長者。去應永廿五年給穀倉院學問料。秀才有闕之時給料學生被轉補者。古今例也。次第所推。有長當仁。就中學而習時。敏而稟性。今舉若人欲勵後輩。望請天恩以件有長被補彼闕者。彌繼累家之門業。特發一流之名望。仍勒事狀謹請處分。

應永廿七年二月十六日

正四位下行大學頭兼少納言侍從文章博士菅原朝臣長政

正四位下行文章博士菅原朝臣在直

從二位行權中納言藤原朝臣實秀宣奉



勅依請者。

同年同月十八日 大外記兼肥後守中原朝臣師胤奉

一二ヶ年例。即翌年也。

大府卿爲御傳云。壽永二年正月廿六日給穀

倉院學問料。元暦元年四月廿日補秀才。文治

二年一月廿日兼越前掾。同三年正月十六日獻

策云々。已下略。

一文章生後補秀才例。

西曹始祖清卿。御傳云。清一者。近江介從五位下

古一四子也。父古一儒行高世。不與人同。家

無餘財。諸兒寒苦。清一年少略涉經史。延暦三

年奉試補文章生。學業優長。被學秀才。十七年

對策登科。已下略。

良賴卿申狀云。曩祖清一卿不至志學之齡。始

給學問料云々。秀才爲志學之年。彼是之說契

符歟。

又文章生後給料秀才例。

菅原茂長卿御傳云。茂長者。參議正二位長經卿

男。本名俊長。正應三年三月廿八日文章生。于時

同四年二月七日給學問料。穀倉院。同六年二月

十三日補秀才。永仁二年任因幡權少掾。同三

年二月十二日對策。同十九日叙爵。于時俊長。

又給料后文章生秀才例。

菅原房長。本名種長。改在基。又改房一。

正安二年二月廿五日給穀倉院學問料。

年月日補文章生。

嘉元四年二月十日轉任文章得業生。

菅原在成。

延慶二年三月廿七日給穀倉院學問料。

同三年四月廿八日補文章生。

同年五月廿日蒙方略宣旨。

同年六月二日獻策。同三日判。

又罷秀才蒙方略宣旨例。

菅原房長。文章生見于前。又令還任一歟如何。非宣下。問還任不審。省試又不。可再遂歟。



嘉元四年二月十日轉任文章得業生。

同年□月廿三日罷秀才蒙方略宣旨。

同年三月十八日對策。同廿一日判。年十一歲。

### 一察省之試事。

此事必爲擬進士也。秀才者必不受此試也。入學之后得翰林試。既補秀才之間。直蒙課試之宣旨。對策及第也。又給料之后不補秀才。遂省試。可爲進士。亦有例。注于前。近代藤氏人者。必擬進士也。仍遂省試爲進士也。進士之后蒙方略宣旨。對策及第也。

寮試者大學頭之試也。省試者式部輔之試也。故云寮省之試也。家記云。寮試後日行省試。而近代同日相行也。寮試者讀書。省試者賦詩。但此詩大卿作之。給試衆等令清書。分諸方名賦文。又云。判者省試評定也。又云。就省試必可有寮試也。又云。試衆者宣旨分二人。院御分一人。殿下分一人。省官分三人。兩博士分二人。判

儒分三人。此上仁大卿所給之進士名餘貢。代々廿人定例也。若廿人餘之時者。小省試トテ別行之。有其例云々。

右思此等之人員。上古詩試者專爲御前試也。其謂者宸宴之日。堂上堂下獻詩。於其中以其勝及第也。依之省試之時。作者多端也。多端之內。以絕勝可及第之義也。上古之例多分也。

或記云。聖武天皇神龜年中始進士試。進士及第例。承

和六年春五星若連珠詩。及第三人。三月廿日判。少輔藤原氏

宗朝。孫王。茂世王。桓武御後。仲野親王男。三原永道。文長河。

登科記云。式部卿是忠親王二男。進士及第。式

瞻王延喜十六年八月廿八日試。行幸朱雀院。

御題高風送秋詩。以鐘爲韻。七言六韻。及第四人。九月廿一日判。

藤原高樹。字藤原童。近江。大江維時。字大江。二。春淵良規。字朝

二。藤原春房。字藤原葛。

已上四人不作開韻及第二云々。



登省記曰。康保二年十月廿三日。行幸朱雀院。御題於藏人所被行之。

飛葉共舟輕。勒七。澄。陵。水。興。鷹。

及第一人。橋倚平。字橋宣。式部丞。飛驒守是輔等。

藤原雅材獻策。辨。散。樂。村上御間也。

放嶋試事。

朱雀院試者。學生皆乘舟行中嶋作詩也。文章生試者。式部省行之。云省試也。今日朱雀院爾天被行之也云々。

一名簿事。

其儀委細注于前段。省試之時。又必可書下也。給新之時者。入學之名簿也。於茲者。試衆之名簿也。故大學寮寮試一通。式部省省試一通。各二通被書上之云々。又於字者。堂監後日與書加云々。

蔭孫正六位上菅原朝臣益長。年三。

正四位下行大學頭兼少納言侍從文章博

士越前權守長遠朝臣男。

應永五年十月廿日。式部權少輔從五位下菅原朝臣在直貢

判以菅寮爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監正六位上右兵衛少尉藤原朝臣程教

右此時二通也。正文二通有之。依同文只今

一通分記之也。尙舊草注左矣。

蔭孫正六位上菅原朝臣在行。歲九。

前出雲權守正六位上在保男。

應永五年三月廿八日。長部權少輔從五位下菅原朝臣在直貢

判以菅寮爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監正六位上行右兵衛少尉藤原朝臣親教

右此牀一格之樣也。仍記之。

蔭孫正六位上菅原朝臣治長。歲十二。



正四位下行少納言兼侍從文章博士信濃權守長方朝臣男。

應永十六年十月五日 從五位下行大內記菅原朝臣長政貢

判以「菅寮」爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監正六位上行右兵衛少尉藤原朝臣親教

蔭孫正六位上藤原朝臣盛光。年十二。

權中納言從三位資國卿男。

應永十年三月廿八日藏人權右少弁正五位下藤原朝臣有光貢

判以「藤寮」爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監正六位上行右兵衛少尉藤原朝臣親教

蔭孫正六位上藤原朝臣清光。年十。

藏人頭正四位上行右大弁資家朝臣男。

應永十年三月廿八日 從五位上守右兵衛佐藤原朝臣定光貢

判以「藤寮」爲

本堂字者。

同年同月同日

蔭孫正六位上菅原朝臣在廣。歲廿六。

從三位在宣卿男。

應永十年三月廿八日

散位從五位上菅原朝臣在興貢

判以「菅寮」爲

本堂字者。

同年同月同日

蔭孫正六位上菅原朝臣定長。歲十五。

從四位上行少納言兼侍從文章博士美濃介

長方朝臣男。

應永十年三月廿八日 從五位上行大內記兼出雲權介菅原朝臣長一貢

判以「菅寮」爲

本堂字者。

同年同月同日。已上堂監同前也。仍畧位

署。



右已上用一門之五位例也。

蔭孫正六位上菅原朝臣惟長。歳七。

從五位上行大内記出雲權介長賴男。

應永十年三月廿九日從四位上行少納言兼侍從文章博士阿

波權介菅原朝臣長一貢

判以菅寮爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監又同前。

蔭孫正六位上藤原朝臣宣光。年八。後改兼郷。

從二位行權中納言兼太宰權帥兼宣卿男。

應永十五年十月廿二日 從四位下右中弁藤原朝臣有光貢

判以藤寮爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監同又畧。

蔭孫正六位上菅原朝臣光長。年三。

正四位下行少納言兼侍從文章博士長清朝

臣男。

文正元年十二月八日 正四位下行大學頭兼少納言侍從文章

博士菅原朝臣顯長貢

判以菅寮爲

本堂字者。

同年同月同日

堂監正六位上行右兵衛少尉藤原朝臣國次

右已上用一門之四位例也。此子細注前段

畢。

一翰林貢舉事。

家記云。貢舉トテ試衆ヲ博士學之云々。此舉

狀者。學生中可承寮省之試輩。翰林注送大學

頭之舉也。仍兩博士之署也。大學頭受此旨。又

寮舉トテ又以解狀送式部省也。

貢舉狀。進士或云貢士也。仍云貢舉也。

請令奉擬文章生試學生等事。

合

蔭孫正六位上藤原朝臣義資。宣旨分。加三分字事。省試之詩事也。



正六位上藤原朝臣量光。宣旨分。

正六位上菅原朝臣在教。聖廟御分。

正六位上藤原朝臣宣光。殿下仰。

正六位上菅原朝臣益長。大輔分。

牒。件人々通習史漢。堪爲擬文章生。仍貢舉如件。謹牒。

應永十五年十月十九日

從四位上行少納言兼侍從文章博士信濃權守菅原朝臣長方  
晉位下學頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長遠  
一學生一人例。

請令奉擬文章生試學生等事。

合

蔭孫正六位上菅原朝臣治長。宣旨分。

牒。件人々通習史漢。堪爲擬文章生。仍貢舉如件。謹牒。

應永十六年十月三日

正四位下行少納言兼侍從文章博士信濃權守菅原朝臣長方

晉位下行大學頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長遠  
一察舉事。或云察解也。同事也。

大學頭以兩博士之貢舉。又舉式部省之狀云。察舉。此狀者必大學少允書上也。仍載位署也。奧爾大學頭必加署也。如此之后有式部省之試也。

察舉狀。

大學察

請奉試擬文章生等事。

合

蔭孫正六位上藤原朝臣義資。不書何分之字。

正六位上藤原朝臣量光。

正六位上菅原朝臣在教。

正六位上藤原朝臣宣光。

正六位上菅原朝臣益長。

右得從四位上行少納言兼侍從文章博士信濃權守長方今月十九日解狀。併件人等通習史



漢堪爲擬文章生。仍貢舉如件者。寮依例申送。以解。

應永十五年十月廿二日正六位上行少九草部宿禰久重

正四位下行頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長遠

一同一人例。

大學寮

請奉試擬文章生等事。

合

蔭孫正六位上菅原朝臣治長。

右得從四位上行少納言兼侍從文章博士信濃

權守長方今月十九日解狀。件人等通習史

漢堪爲擬文章生。仍貢舉如件者。寮依例申

送。以解。

應永十五年十月廿二日正六位上行少九草部宿禰久重

正四位下行頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長遠

一試衆十一人例。

請令奉擬文章生試學生等事。

合

蔭子正六位上菅原朝臣時長。宣旨分。

正六位上紀朝臣淑明。宣旨分。

正六位上菅原朝臣在信。一院御分。

蔭孫正六位上菅原朝臣在英。院御分。

正六位上菅原朝臣長益。院御分。

正六位上菅原朝臣爲綱。春宮御分。

正六位上菅原朝臣長親。聖廟御分。

正六位上菅原朝臣豐長。殿下仰。

正六位上菅原朝臣國兼。

正六位上菅原朝臣貞範。

正六位上菅原朝臣長興。大卿分。

牒。件人々。通習史漢堪爲擬文章生。仍貢舉

如件。謹牒。

曆應三年三月廿二日

房前明臣

家前明臣

正四位下行文章博士兼越後介藤原朝臣

正四位下行文章博士兼越中權介藤原朝臣



家記云。春宮御座之時者。御分有先例。院御分有無隨時云々。

牒之詞。依別樣記事。試衆十二人例。

請令奉擬文章生試學生等事。

合

蔭子正六位上藤原朝臣忠光。宣旨分。

正六位上菅原朝臣貞朝。宣旨分。

蔭孫正六位上菅原朝臣秀長。一院御分。

正六位上藤原朝臣氏種。院御分。

正六位上藤原朝臣家氏。院御分。

正六位上菅原朝臣長賢。春宮御分。

正六位上惟宗朝臣光通。聖廟御分。

正六位上藤原朝臣正業。殿下仰。

正六位上菅原朝臣長規。

正六位上菅原朝臣富長。

正六位上藤原朝臣業範。

正六位上惟宗朝臣光宅。大輔分。

牒。件人人稍習文章。堪爲眞生。仍貢舉如件。  
謹牒。史漢以下別樣也。

康永二年三月廿七日

治部卿正四位下文章博士越後權介菅原朝臣

大學寮。

此日部仕人也頭兼文章博士菅原朝臣在淳。

式部省。

大輔菅原長員卿。

一寮省試日役人出仕事。

寮試方。

大學寮。

大學頭。

翰林。一人歟。

寮官。少允。堂監。

試衆之員不定。可隨時。書者雖通習史漢。

只讀史紀許也。況近代只讀牀許之間無殊。

事。

省試方。式部省。

家記云。登省之時者。後漢書紀卜讀也云。

云。侍讀之時。別讀之儀也。

式部大輔。

卽題者。

同少輔。

典。省掌。

試衆之員。同寮試人。詩者大卿作之給試衆。



等。各清書持參。宿紙一枚書之也。以髮搔懸  
『塀書』之也。見『舊草』。

應永十年癸未三月廿八日乙巳省試。

大學寮。寮試方。

頭從四位下行大學頭兼式部少輔菅原朝臣爲守

從四位上行少納言兼侍從文章博士阿波權介菅原朝臣長一

試衆二人。正六位上菅原朝臣在廣。正六位上菅原朝臣惟長。已上。自餘不

參。

堂監正六位上行右兵衛少尉藤原親教

少允正六位上行少允草部宿禰久重

式部省。

參議正二位行大輔兼因幡權守菅原朝臣秀長

從四位上行大學頭兼少輔菅原朝臣爲守

試衆二人同前。今日試衆六人也。藤原盛光。同清光。菅原在廣。同定長。同惟長。同在行。

典 正六位上守日向守紀朝臣重弘

省掌正六位上紀宗弘執行幸弘代

已上

一當日試衆一人出仕事。

此畧儀。尤違道理之上。且者不知冥加歟。雖

然古儒之爲舊例一條不及是非。依年少獻詩

計也。翰林見名簿。貢舉之狀書連也。祖父亞相

二藏時號三歲遂省試。應永十四年誕生。文明六年卒。春秋六十八歲也。此

外例多分也。一人例在左。二人例在右矣。

勘申 省試御時試衆一人參勤并判儒二人

事。

應永元年十二月十八日省試。

蔭子正六位上藤原朝臣隆光。宣旨分。

蔭孫正六位上藤原朝臣有光。宣旨分。

正六位上菅原朝臣顯信。新院御分。

正六位上菅原朝臣長登。聖廟御分。

正六位上菅原朝臣在綱。大輔分。

今日試衆一人參勤。

蔭孫正六位上藤原朝臣有光。

判日判儒二人例。



應永十年三月廿八日省試。同日判也。以翌日之分<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。

從四位上行少納言兼侍從文章博士阿波權介菅原朝臣長一  
從四位上行大學頭兼式部少輔菅原朝臣爲守  
右今間勘申分注進如件。

應永十五年十月廿日 年預重弘上

一題事。

口傳抄云。試詩之時有虛題實題。虛題トハ風月題也。實題トハ史書之題也。試詩實題之時猶本書置也云々。

輔宣日書儲之。於當座以書由出也。杉原一枚書之。必切韻也。

一詩事。

其作必五言也。句之數大略六對十二句也。六十字ト注之。或八對十六句也。八十字ト注之也。韻字之置處又不定也。舊草分一之句。二之句。四之句。第六之句。第十之句等也。料紙宿紙也。懸髮搔之堺書也。端作二行者。堅之堺許也。詩

者每字有堺。橫堅之堺也。尙見舊草矣。

八十字篇。

五言奉<sub>レ</sub>試賦得<sub>二</sub>海內同悅詩一首。以平爲韻。八十字成篇。

陰子正六位上菅原朝臣時長

海內誇<sub>二</sub>皇德<sub>一</sub>。相同悅<sub>二</sub>伏情<sub>一</sub>。

聖君施<sub>二</sub>政教<sub>一</sub>。士庶樂<sub>二</sub>休明<sub>一</sub>。

世實村間富。民淳區域平。

衆星拱<sub>二</sub>紫極<sub>一</sub>。仁雨洽<sub>二</sub>蒼生<sub>一</sub>。

俗有<sub>二</sub>康哉詠<sub>一</sub>。風振<sub>二</sub>穆若聲<sub>一</sub>。

巖廊垂拱後。郡國獻<sub>二</sub>琛程<sub>一</sub>。

赤縣屬<sub>二</sub>無事<sub>一</sub>。黃河遇<sub>二</sub>一清<sub>一</sub>。

雖陪<sub>二</sub>春省試<sub>一</sub>。耻隔<sub>二</sub>幼聰名<sub>一</sub>。

曆應三年四月廿六日

監試

典正六位上行左衛門少尉紀朝臣信弘

五言奉<sub>レ</sub>試賦得<sub>二</sub>君臣同德詩一首。以治爲韻。六十字成篇。

陰孫正六位上藤原朝臣宣光。

幸仕<sub>二</sub>

聖君時<sub>一</sub>。群臣一德治。

三皇曾不遠。萬國渾無爲。



仰見<sub>二</sub>北辰位<sub>一</sub>

咸扶<sub>二</sub>南面儀<sub>一</sub>

圖書皆表瑞

朝遇豈違期

王化如<sub>二</sub>麟應<sub>一</sub>

仁恩似<sub>二</sub>雉隨<sub>一</sub>

今題龍虎榜

名姓貴須知

應永十五年十月廿三日

監試

典前日向守正六位上紀朝臣重弘

五言奉

レ試賦得<sub>二</sub>君臣同德詩一首<sub>一</sub>以治爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣在教

君臣德在<sub>レ</sub>茲

萬國不<sub>レ</sub>嚴治

溫春洪慈逼

至忠貞節宜

乾坤皆正位

風雨共<sub>レ</sub>隨時

上有<sub>二</sub>新民道<sub>一</sub>

下存<sub>二</sub>報主資<sub>一</sub>

帶<sub>レ</sub>星朝<sub>二</sub>鳳闕<sub>一</sub>

伏地拜<sub>二</sub>龍墀<sub>一</sub>

雖<sub>レ</sub>耻<sub>二</sub>少年質<sub>一</sub>

倩毫文藻擯

應永十五年十月廿三日

已下位署署之。

五言奉

レ試賦得<sub>二</sub>博以學<sub>一</sub>文詩一首以才爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣治長

斯文天下恢

博學著<sub>二</sub>英才<sub>一</sub>

鑽仰功編<sub>レ</sub>竹

研覃詞詠<sub>レ</sub>梅

繡書風自卷

映<sub>レ</sub>字雪成堆

陸海深難測

潘江去不回

韜光明似<sub>レ</sub>玉

蓄<sub>レ</sub>銳勝<sub>二</sub>於財<sub>一</sub>

今日儒林試

折<sub>レ</sub>枝獨占魁

應永十六年十月十六日。今日一人遂<sub>二</sub>省試<sub>一</sub>云々。

監試

典正六位上守前日向守紀朝臣重弘

五言奉

レ試賦得<sub>二</sub>萬邦喜樂詩一首<sub>一</sub>以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上藤原朝臣盛光

萬邦仰<sub>二</sub>聖日<sub>一</sub>

鼓<sub>レ</sub>口子來口

朝野障無事

夏夷成太平

八埏歌<sub>二</sub>德化<sub>一</sub>

千載祝<sub>二</sub>仁聲<sub>一</sub>

重續<sub>二</sub>蓼蕭詠<sub>一</sub>

皆傾<sub>二</sub>葵藿城<sub>一</sub>

干戈塵永歛

玉帛禮云成

雖<sub>レ</sub>謝<sub>二</sub>甘羅敏<sub>一</sub>

願<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>仕進榮<sub>一</sub>

五言奉

レ試賦得<sub>二</sub>萬邦喜樂詩一首<sub>一</sub>以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上藤原朝臣清光

時矣德華明

萬邦歌<sub>二</sub>太平<sub>一</sub>

桑麻餘<sub>二</sub>產業<sub>一</sub>

草木被<sub>二</sub>恩榮<sub>一</sub>

帝道遵<sub>二</sub>堯典<sub>一</sub>

農功飽<sub>二</sub>舜耕<sub>一</sub>



仰瞻仁政治。

朝賀瑞祥呈。

日進國家彥。

歲揚鄉曲英。

儒林今折桂。

遂志列鴻生。

五言奉

試賦得萬邦喜樂詩一首。以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣在廣

雅頌察然世。

萬邦喜樂情。

衆民皆悅豫。

四海又昇平。

時也玄黃靜。

懿哉稼穡盈。

元々歌聖德。

物々感皇明。

莫謂唐堯昔。

豈如吾后正。

稟蹤於累葉。

折桂欲傳名。

五言奉

試賦得萬邦喜樂詩一首。以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣定長

萬邦泰道亨。

悅者賀隆平。

庶類沐仁化。

群黎仰聖明。

山川呈瑞氣。

朝野洽歡聲。

醉德催歌舞。

食功事織耕。

風同三代教。

範正九疇名。

今遇省察試。

永開藝苑榮。

五言奉

試賦得萬邦喜樂詩一首。以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣惟長

喜矣聖人氓。

謳歌天下平。

稱觴皆國老。

擊壤幾田更。

喚起唐虞德。

丕承文武聲。

鴻禧遺軌範。

鴈塔播才名。

不錯四時序。

無私百物生。

試場花助句。

屢入品題評。

五言奉

試賦得萬邦喜樂詩一首。以平爲韻。六十字成篇。

陸孫正六位上菅原朝臣在行

悅服萬邦氓。

飽開殊渥榮。

一天風不變。

四海世無爭。

仁路時抽秀。

農家歲取盈。

承恩歌既醉。

感物賦由庚。

智矣德光大。

鏐哉道坦平。

弱齡慙奉試。

嗜學列儒生。

已上。應永十年三月廿八日省試。

五言奉 試賦得皇化盈 寰內一詩一首。以平爲韻。六十字成篇。

陸子正六位上藤原朝臣季光

社稷再興日。

國家大祀辰。

寰中皇化洽。

宇內聖猷均。



豈有採芝士。

只看擊壤民。

四夷皆仰德。

九土悉皈仁。

白雪映青瑣。

紅雲擁紫震。

試場弄柔翰。

慙愧接詩人。

五言奉

試賦得皇化盈寰內一首以辰爲韻六十字成篇

蔭孫正六位上菅原朝臣光長

聖皇不下宸。

寰內自平均。

既飽舜耕日。

豈期禹漚辰。

垂衣來虜狄。

舉策列才人。

奕々貢圖馬。

循々中律麟。

山川皆出瑞。

艸木亦皈仁。

攀桂一枝手。

願言筆有神。

文正元年十二月八日

監試

典出雲守正六位上紀朝臣國弘

### 一判事

家記云。判儒又曰者儒。省官兩文章博士之外二人也。近代三人也。擬文章生詩。方略秀才策。評判不可劣三人也。又云。判儒者不接三度。

判座者召替他人。古來之諺也云々。文者書評定。古來之法也。評判之日必可爲他日也。雖然近例只同日之沙汰也。仍於文之日付者必用他日也。但又同日之例有所見也。

評定文。

式部省

評定擬文章生試詩事。

萬邦喜樂。

蔭孫正六位上藤原朝臣盛光

正六位上藤原朝臣清光

正六位上菅原朝臣在廣

正六位上菅原朝臣定長

正六位上菅原朝臣惟長

正六位上菅原朝臣在行

評。件詩等雖非絕妙。適免紕繆。萬邦喜樂之趣言志。六義兼并之句暢情。早准格條。處于丁科。



應永十年三月廿九日

從四位上行少納言兼侍從文章博士美濃介菅原朝臣

從四位上行少納言兼侍從文章博士阿波權介菅原朝臣長

省

從四位上行大學頭兼少輔菅原朝臣爲守

參議正二位行大輔兼因幡權守菅原朝臣秀長

判日同廿九日。但以翌日議省試日廿八日酉刻被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。

參着人々。

參議正二位行式部大輔兼因幡權守菅原秀

從四位上行少納言兼侍從文章博士阿波權介菅原長

從四位上行大學頭兼式部少輔菅原爲守

典正六位上日向守紀朝臣重弘。

已上。

不參判儒。

正四位下行少納言兼侍從藤原範輔

從四位上行少納言兼侍從文章博士美濃介菅原長方

已上依不參被<sub>レ</sub>出奉同狀。

奉同狀。

藤原盛光同清光菅原在廣同定長同惟長

同行等省試判事。

右依故障不能參着奉同諸儒評定之狀如

件。

應永十年三月廿九日文章博士菅原長方

藤原盛光同清光菅原在廣同定長同惟長

同行等省試判事。

右依故障不能參着奉同諸儒評定之狀如

件。

應永十年三月廿九日少納言範輔

一試衆一人評定文。

式部省

評定擬文章生試詩事。

博以學文。



蔭孫正六位上菅原朝臣治長

評。件詩雖非絕妙。適免瑕疵。博文之趣不詳。及第之義可優。早准格條處于丁科。

應永十六年十月五日

正四位下少納言兼侍從文章博士信濃權守菅原朝臣長方  
正四位下大學頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長

省

權少輔從五位下菅原朝臣家長  
從五位上行少輔兼陸奥權守菅原朝臣在直  
正二位行大輔菅原朝臣秀

式部省

評定擬文章生試詩事。

世屬太平。

蔭子正六位上藤原朝臣在鄉

評。件詩雖非絕妙。既免瑕疵。一天太平之義得趣。萬人悅豫之詞可賞。早准格條處于丁科。

應永卅二年四月十四日

省

記云。

正三位行大輔菅原朝臣在直

昨日<sup>十三</sup>藤資親營繼長。同爲輔。遂省試之間。其次可沙汰之處。次親父一品禪門於官司。俄令申云。四人可行省試之條聊懸心。今日可三人分之由頻令申之。文書既四人分令用意之上者。只可遂行之由諸儒悉令申之處。資親今日不可遂行之由堅申所存之間。彼仁又昨日棟梁也。仍就下臈除在鄉三人昨日行省試畢。仍今日獻策之次。付行在鄉一人省試者也云々。



一學生宣旨御分事。繪旨。

明後日<sup>廿二</sup>省試。藤原義資。同量光。爲宣旨御

分學生可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>登省之由。

天氣所候也。仍上啓如<sub>レ</sub>件。

十月廿日

權右中弁家俊

謹々上 式部大輔殿

明後日五日。省試。菅原治長。爲宣旨御分學生

可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>登省之由。

天氣所候也。仍執啓如<sub>レ</sub>件。

十月二日

左中弁親光

謹々上 式部大輔殿

一登省當日事。舊次第。

先寮試。

其儀。寮頭向<sub>二</sub>西廳<sub>一</sub>着床子。<sup>北第一間。南面</sup>次翰林

着同床子。<sup>北第二間。西面</sup>次試衆着長床子。<sup>北第三</sup>

<sup>西面有</sup>前床子。<sup>有前床子</sup>次寮官持貢舉入筥。置寮頭前。次寮頭

取之。置前床子。返空筥。次寮官置積文於頭翰

林試衆前。<sup>只紙一枚也。</sup>次頭曰。籀。次頭曰。令讀與次

試衆上薦讀書。<sup>史記五帝本紀也。</sup>次頭鳴笏。次寮官云。學

生日暮タリ。軸本十放チ候ゾ。物ノ様ハ見ヘ候

タリ。アツハレ朝ノ寶也。次學生退。次寮官申

云。奉試學生正六位上菅原朝臣<sup>名</sup>文義俱得タ

リ注ス。次下薦試衆次第同前。次自下薦退。

次省試儀。

其儀西廳北第四間。立大卿床子。<sup>有前床子。東面</sup>同第

四間立少輔床子。<sup>有前床子。西面</sup>第五間立長床子。<sup>試衆座</sup>

西第七間立典床子。其後立省掌床子。<sup>北面</sup>刻

限大卿少輔等着靴着床子。次典覽寮解。輔見

之返之。次輔以典試衆可<sub>レ</sub>進之由仰之。次試

衆同時着床子。<sup>北上面。堂</sup>次典省掌着床子。<sup>北面</sup>

西。次輔召典置硯於輔前。副紙兩三枚置之。次

輔書題。<sup>其由也。兼</sup>次輔目典。典來輔前。輔召筥

典持參入題給之。次典授省掌。省掌置文臺

退。次省掌取題來試衆前。後佐末爾授之。試衆



取題。見了授次試衆。次第授省掌。次試衆退。  
自下次試衆入小屋。立箸則拔之。出小屋。

案入小屋之儀者獻詩也。其間行饗膳。仍立箸也。詩兼書儲之令懷中。入小屋先取出詩於懷中。置小屋第二棚上。後可有饗之儀也。詩自身分爾兼大卿作給。清書計試衆之汰汰也。如策文問頭博士之書與歟。然則小屋儀亦可同獻策之儀也。舊次第續目計之條不巨細者也。

次判儀。輔座。北上東面判儒向輔座。北上西面翰林已下一列着座。次評詩。次判儒一人書評定文。加署進輔。次第加署後退出。

案。又此儀次第續目計也。評詩儀定。先輔已下可回覽也。又評定文兼日判儒書儲之。取出懷中。加署計歟。又是策文判之儀可同歟。此座可有饗應之事歟。次第不載如何哉。舊例可尋。相定之儀不及記者歟。

一寮試上古之樣。

寮試作法。

寮頭以下各一員。博士以下各一員。參着試廳。出貢舉交名等。博士加署渡寮頭。寮頭見畢下。允以下。以箱匣三合置試衆座前。又以讀書等置頭博士秀才。謂之試博士并試衆等前。次第召試衆試衆抱卷進。出慢門下。允仰云。版爾。試衆揖立就版。允又仰云。敷居。試衆揖於敷居下。脫沓着就座。置帙竝。頭仰云。篇。衆唯而探篇。三史之問今日讓篇也。膝行置試博士前。試博士對寮頭云。史記本紀乃帙乃三乃卷。世家乃上帙乃五乃卷。下帙乃一乃卷。傳乃中帙乃七乃卷。頭仰云。令讀與。試衆各披帙抱卷引音讀之。頭仰云。古々末天。試博士對頭云。文得多利。頭云。書注世。寮掌捧簡稱注由畢。試衆退出。堂監於慢門外仰登科酒着事。

右此作法於本寮上世之儀也。本寮退轉已



後。近代西廳之儀也。以本來之儀行。近來之儀。尤可宜也。作法珍重也。登省記登科記已

下尙可尋記。

一進士給官事。

送省試。後號進士。署擬字也。貢士。舉士。同唐名也。又號時務策。

家記云。除目之時次第任之。

當時縣召之時。進士書一定例也。

自

官相尋翰林。但此事察可舉奏歟。

一文人擬生才人事。

今案。文人者文章生。擬生者擬文章生也云々。

金樓子云。王仲任言。史記一經者爲儒者也。傳

古今者爲通人也。上書奏事者爲文人也。能精

思著文連篇章爲鴻儒也。若劉子政楊子雲之

例是也。蓋儒生博士爲通人。通人博士爲文人。

文人博士爲鴻儒也。

一學生事。明文抄。

貞觀八年三月詔。進士試讀一部經史。唐制凡

取士之道。

唐曆曰。諸州及國學每歲貢人。其類有六。一曰

秀才。二曰明經。三曰進士。四曰明法。五曰書。六

曰箒。其弘文生崇文生各依所習業。隨明經進

士例。其秀才試方略策五條。文理俱高者爲上

上。文高理平爲上中。文理俱平爲上下。文理粗

通爲中上。文劣理滯爲不第。令曰。凡秀才取博

學高才者。明經取學通。二經以上者。進士取

明閑。時務并讀。文選爾雅者。明法取通達律

令者。

唐曆曰。則天載初元年二月十四日辛酉。策問

貢舉人于洛城殿前。數日方畢。殿前試人自茲

始也。天寶十三年十月。御勤政樓。試四科舉人。

其詞藻宏麗。問策外更試詩賦。各一道制。舉人

試詩賦自此始也。

貞觀格曰。大學者尙才之處。養賢之地也。天下

之俊咸來。海內之英竝萃。游夏之徒元非公相

之子。楊馬之輩出自寒素之門。高才未必貴種。

貴種未必高才。且夫王者用人。唯才是貴。朝爲

廝養。夕登公卿。



弘代格曰。大學生徒。家道困窮。無物質給。雖有「好學」不堪。遂志云々。私曰。給料以謂之歟。

右大學并寮試省試秀才進士等。倭漢兩朝之本。證躅且如斯乎。

一遂省試者必申「方略宣旨」事。

此事。上古者方略課試不各別歟。秀才尙以「方略宣旨」可爲本儀之樣也。近代分「秀才進士之二生」宣旨各別申請者也。於舊例者尤分明也。先各別差異者。方畧欸狀者內舉也。如「給料之欸狀」或父或祖父。又者自解也。課試欸狀者兩博士儒舉也。如「秀才欸狀」凡思此事。進士策者。省試之后卽對策及第也。仍方畧宣旨者無年紀之沙汰。省試翌日卽獻策。於「同日」者未見其例。秀才策者補「文章得業生」之后。年紀凡本儀者七年。近代者三年之后對策及第。仍於「課試宣旨」者。年紀相當哉。否有「覆問之奏」。後任「式部

省續文「被宣下」也。如此之間。進士秀才各別之宣旨也。近代者無覆奏之沙汰。卽被「宣下」也。

欸狀。

請特蒙。天恩因准先例以息男正六位上行加賀少掾藤原朝臣親信奉「方略試」狀。

右親業謹稽「舊貫」。歷「文章生」奉「方略試」者。

皇家之通例。儒道固實也。爰親信稟「風累代之芳塵」。積「孫雪多歲之微功」。況亦鯉庭露底久受「提撕之雅訓」焉。馬門月前將蒙「絲綸之明詔」矣。僉議之處何無「哀憐」而已。望請。天恩因准先例以「件親信」奉「方略試」者。忽振「射鵰之譽」。宜伴「遷鶯之運」者也。親業誠惶誠恐謹言。

弘安十一年三月八日從三位行右京大夫藤原朝臣親業

從四位下行式部少輔兼筑前權守菅原朝臣長嗣誠惶誠恐謹言。

請特蒙。天恩因准先例以「男文章生正六位上豐長」令「奉「方略試」狀」。

右謹檢「案內」。長嗣雖昇「四品」。未舉「一子」。何況



列蓬宮仙郎兮。三代仕李部少卿兮。四年疲官路。經儒官。然而無繼箕裘之息子。可傳文籍於何人乎。偷期天憐所致地望也。方令豐長。學稼少秋。雖隔瞻文之才。門塵累代。盡遂射策之業。望請天恩以件豐長令奉方畧試者。且潛追馬敬德之跡。且彌勵車武子之勤矣。長嗣誠惶誠恐謹言。

曆應三十九年二月廿四日下行式部少輔兼筑前權守菅原朝臣長嗣

請特蒙天慈以男文章生正六位上音長奉方畧試狀。

右謹檢案內。爲文章生奉方畧試者。皇家之舊躅。儒胤之故實也。爰國長位昇三品。齡及六旬。情思累代之餘風。何漏無偏之聖日。內舉之至。上問宜達。望請天慈以件音長早奉方畧之試。令繼家門之業矣。國長誠惶誠恐謹言。文和二年二月十五日從三位菅原朝臣國長請特蒙天恩因准先例被下宣旨以

男文章生正六位上仲光令奉方畧試狀。

右兼綱謹檢案內。歷文章生奉方畧試者。皇家之恒典。吾道之準的也。其內依父舉浴聖恩。當時連綿。以往定繁。爰仲光聲譽雖缺。精研匪懈。一技入手。既舉照讀於桂林之月。累葉京蹤。頻擅遊學於杏壇之花。而徒漏燈燭料。明詔空泥箕裘之舊業。比之時倫。可謂晚成。望請天慈被下宣旨以件仲光令奉方畧試者。忽誇雨露之新恩。將開父子之宿望。兼綱誠惶誠恐謹言。

延文三年二月八日權中納言從三位藤原朝臣兼綱請特蒙天恩因准先例以男文章生正六位上長廣令奉方畧試狀。

右謹考舊貫。爲文章生蒙方畧宣者。王道之彝範。儒家之恒規也。爰久長雖登四品之班。未及一子之學。爲道爲家。不可不奏。且長廣年齒近於志學。時習望於登科。被施崇文之



化。宜蒙方略之恩。僉議之處。誰謂虛授。望請天慈。因准先例。奉件試者。□遂。李省大成之業。彌勵槐市三餘之勤。增仰淳朴之聖澤。將繼奕葉之儒風矣。久長誠惶誠恐謹言。

明德五年二月廿五日

左京大夫從四位下菅原朝臣久長

迎陽御記云。此款狀書樣無故實。以祖父之申狀爲本歟。國長卿位之間無子細。久長朝臣爲殿上人書樣。端ニモ可載位署也。如長嗣款狀可書也。爲後記之云々。

請特蒙天恩。因准先例。以男文章生正六位上惟長奉方畧試狀。

右謹檢案內。爲文章生奉方畧試者。策家之舊式。皇道之恒規。爰秀長居儒宗。分七旬。備帝師。分二代。或子葉或孫枝。理運當仁。舉奏有例。惟長幼而聰敏。學而勤勞。望請天慈。以件惟長令奉方畧試者。彌仰崇文之德化。欲勵弘學之功勞矣。秀長誠惶誠恐謹言。

應永十三年二月一日參議正二位行式部大輔菅原朝臣秀正二位行權大納言藤原朝臣忠定宣奉勅。件人宜仰式部省令奉方畧試者。

同年同昌大炊頭兼大外記博士越後權守中原朝臣師夏奉。爵位下行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣長方誠惶謹恐謹言。

請特蒙天恩。因准先例。以男文章生正六位上治長令奉方畧試狀。

右謹檢案內。長方雖昇四品。未舉一子。何況久居東臺侍郎。分趨官路。再司西曹主人。分入儒林。然而無繼箕裘之息子。可傳文籍於誰人乎。偏仰天憐所致地望。方今治長未及志學之齡。徐勵稽古之力。望請天慈。以件治長令奉方畧試者。早遂射鵰之業。彌積聚螢之功矣。長方誠惶誠恐謹言。

應永十三年二月一日參議正二位行式部大輔菅原朝臣秀正三位行權中納言藤原朝臣資家宣奉勅。件人宜仰式部省令奉方畧試者。



同年同月十九日大外記兼但馬權守中原朝臣師胤奉

右大外記續加別紙書 宣旨畢。

請特蒙 天恩以男文章生正六位上在永奉方略試狀。

右謹檢案內爲文章生奉方略試者王道之舊規策家之藝範也爰在永搜青篇而務時敏對黃卷而期日新既至志學之齡盍沿崇文之化比之等輩可謂晚成望請 天慈以件在永令奉方略試者忽誇雨露之 天恩將達父子之地望矣在綱誠惶誠恐謹言。

寶德三年七月 日 正三位菅原朝臣在綱右已上父祖內舉之例如件。

自解狀狀。

學問料狀狀。自解之事准此例。裁否。慥未勸得也。

文章生正六位上菅原朝臣在實誠惶誠恐謹言。

請特蒙 天恩因准先例奉方略試狀。

右在實謹考舊貫歷文章生蒙方略宣 聖朝之恒典儒家之先規爰在實傳 帝師貽厥之

孫謀爲吏部詮衡之適胤學而不倦積編蒲之功勤而□荒思折桂之試望請 天慈因准先例早蒙蓬闕之詔欲遂楊庭之名在實誠惶誠恐謹言。

應永土年七月日文章生正六位上菅原朝臣在實從二位行權中納言藤原朝臣隆敦宣奉勅件人宜仰式部省令奉方畧試者。

同年八月九日 大外記中原朝臣師胤奉

文章生正六位上菅原朝臣在通改在位誠惶誠恐謹言。

請特蒙 天恩因准先例奉方畧試狀。

右謹考舊貫歷文章生蒙方畧宣 皇家之恒規儒門之懿範也爰在通雖傳一流之儒胤未沿無偏之王化多年勵學密之功何日逢詞場之試望請 天恩因准先例早蒙芝泥之詔欲揚桂林之名在通誠惶誠恐謹言。

應永土年七月日文章生正六位上菅原朝臣在通正二位行權大納言藤原朝臣公宣宣奉勅件



人宜仰式部省令奉方畧試者。

同年同月廿九日大外記兼但馬權守中原朝臣師胤奉

文章生正六位上藤原朝臣盛光誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例奉方畧試狀。

右盛光謹考舊貫。歷文章生蒙方畧宣。朝之

彝範。道之固實也。爰盛光爲亞相之息子。稟烈

祖之儒風。雖帶官爵之恩。爲繼箕裘之業。暫

令鵷退。欲遂鵷薦。望請天恩因准傍例。奉

方畧試者。念遂大業。可繼芳蹤矣。盛光誠惶

誠恐謹言。

應永七年三月文章生正六位上藤原朝臣盛光

正三位行權中納言藤原朝臣資家宣。奉勅。件

人宜仰式部省令奉方畧試者。

同年同月廿九日大外記兼但馬權守中原朝臣師胤

奉此宣旨又續加別紙也。

文章生正六位上菅原朝臣在行誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例奉方畧試狀。

右謹考舊貫。歷文章生蒙方畧宣。皇家之規

式。儒門之固實也。爰在行欲繼家業。不顧晚

達。偏施無疆之聖恩。蒙方畧之詔命。望請

天恩因准先例。早獻鳳策。欲揚雄名矣。在行

誠惶誠恐謹言。

應永廿三年十月廿五日文章生正六位上菅原朝臣在行

從二位行權中納言藤原朝臣資家宣。奉勅。件

人宜仰式部省令奉方畧試者。

同年同月廿九日大外記兼肥後守中原朝臣師胤奉

文章生正六位上藤原朝臣行光誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例奉方畧試狀。

右行光謹考舊貫。歷文章生蒙方畧宣者。

王道之恒典。儒門之先例。爰行光亞相之息子。

累世之儒胤。且任傍例。暫罷階班。望請天慈

奉方畧之試。早獻鳳策。欲揚雄名矣。行光誠

惶誠恐謹言。

應永廿五年十月文章生正六位上藤原朝臣行光



文章生正六位上藤原朝臣量光誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例奉方略試狀。

右量光謹考舊貫歷文章生蒙方略宣皇家之恒典。儒門之通規也。爰量光爲開府之息子。稟累家之儒生。暫止秦松之爵。欲攀郤桂之枝。望請天慈奉方略試者。早繼箕裘之業。彌勵鉛槧之勤矣。量光誠惶誠恐謹言。

應永十五年正月文章生正六位上菅原朝臣量光

文章生正六位上菅原朝臣在廣誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例奉方略試狀。

右在廣謹考舊貫歷文章生蒙方略宣。皇家之彝倫。儒門之規範也。爰在廣稟尊神之餘裔。勵競陰之苦學。窺經傳兮幾日。貫穿研精。聚螢雪兮多年。照讀嗜業。望請天恩因准先例。早蒙芝泥之詔。將遂楊庭之業。在廣誠惶誠恐謹言。

應永十五年正月文章生正六位上菅原朝臣在廣

右已上自解之狀例如件。

東山左府宣下抄云。或又獻自身申文。申請之。其例等無別子細。仍不注之云々。

一上古秀才方略例。當時雖不用舊例。分注記之。

左大臣宣。宜令備後權守菅原朝臣在躬問文章得業生三統元夏方略之試者。

承平七年二月廿九日 大外記菅野朝臣奉

同日仰大錄葛井

左大臣宣。宜令大內記橘朝臣直幹問文章得業生藤原國光方略之試者。

三統公忠奉

同日召仰式部大錄水間有澄奉。

左大臣宣。宜令文章博士橘朝臣直幹問文章得業生矢田部陳義方略之試者。

天曆二年二月十七日 少外記雀部

同日召仰式部少錄賀陽眞企奉。

右已上之例上古之樣。見此問頭宣旨畢。



一補文章得業生者必申課試宣旨例。

此事。上古者方略課試不各別歟。雖文章得業生。尙爲方略策之例存之。雖然近例宣旨。如此各別也。古今之例。已下注于下。又委細注于前段矣。方略宣旨段。

家記云。課試申文者。文章博士之儒舉也云々。件歟狀如秀才之儒舉。兩翰林加署之後。卷加消息付職事也。秀才三年后。申請此宣旨。遂獻策之間。先舉給料之年紀。次學補秀才年紀。次書所望之詞。式部省續文等之覆問覆奏等者。近代無其沙汰。有無者可爲時議之間。非私之定者也。此外無殊事。

瑞雲院贈左府記云。此事儒舉也。子細秀才ノ歟狀ニ同ジ。件歟狀ヲ書テ文章博士ノ署ヲ取テ職事ニ付ク。職事奏聞ノ後。先年限并ニ例ヲ勘ベキ由宣下。覆奏ノ後。式部省ノ續文ニ任テ。

請ニ依由宣下サセラル也。近年下勘ニ及バズ。年限至レバ宣下例アリ。是モ歟狀ノ奥ニ外記宣旨ノ詞ヲ書載ス。秀才ノ宣下ニカマハズ。職事ニ付ラル、狀。是ヲモ内舉狀ト號ス。此宣下ノ後獻策ヲ遂ナリ云々。

秀才兼宣楊歷事。儒舉執進之候。急速可令奏達給恐々謹言。

八月十二日

兼綱

頭右大辨殿

請特蒙天恩因准先例令課試文章得

業生正六位上藤原朝臣兼宣狀。

右件兼宣。貞治七年二月給穀倉院學問料。應安三年十二月補文章得業生。經歷及多年。課試尤當時。爰兼宣幼而克秀。抱八龍無雙之譽。學而不倦。勵拾螢三餘之勤。倩見偉器。專堪推薦。望請天恩因准先例。被下宣旨。將行奉試矣。仍勒事狀。謹請處分。



應安六年八月 日

正四位下行大學頭兼文章博士菅原朝臣  
正四位下行文章博士菅原朝臣  
請特蒙天恩因准先例令課試文章得業  
生正六位上行越後少掾菅原朝臣在遠狀。

右在遠者。康曆三年給穀倉院學問料。永德四年補文章得業生。前後兼并。歲序相積。訪策家之例。補茂才之後。必當時三箇廻。各遂大成業。何況在遠槐市之功。已積。李部之胤嗣異他。採用之撰。推舉無私。望請天恩被下宣旨。令件在遠遂課試矣。仍勒事狀謹請處分。

至德三年十二月 日

從四位上行文章博士兼美濃守藤原朝臣元範  
正二位行權中納言源朝臣通氏宣奉勅。仰依  
請者。

同四年三月廿五日大外記中原朝臣臣師香奉  
請殊蒙天恩因准先例令課試文章得

業生正六位上菅原朝臣在貞狀。

右在貞。康曆元年給穀倉院學問料。永德二年補文章得業生。先後之勞六年于茲。秀才之後經三箇年。奉課試者例也。在貞事鴻業而勵時習。積螢功而嗜夜學。謂其器量尤堪推薦。望請天恩因准先例。課試件在貞。將令繼十五代儒業矣。仍勒事狀謹請處分。

永德四年正月 日

從四位上行大學頭兼少納言文章博士藤原朝臣淳嗣  
從四位上守刑部卿兼文章博士菅原朝臣元範  
正二位行權大納言源朝臣具道宣奉勅。仰  
依請者。

同年二月五日 大外記中原朝臣臣師香奉  
請殊蒙天恩因准先例令課試文章得  
業生正六位上菅原朝臣長教狀。

右件長教。應永四年給穀倉院學問料。同七年  
四月補文章得業生。經歷及多年。課試當理運。



爰長教幼敏而好學。精勤而積功。倩思登庸。專堪推薦。望請天恩因准先例。被下宣旨。將行奉試矣。仍勒事狀謹請處分。

應永十六年九月 日

正四位下行少納言兼侍從文章博士信濃權守菅原朝臣長方  
晉位下從學頭兼少納言侍從文章博士越後權守菅原朝臣長  
正三位行權中納言藤原朝臣資家宣奉勅。仰依請者。

同年同月廿六日 大外記兼但馬權守中原朝臣師胤奉

右已上宣旨無覆奏之儀。次第下知計也。

請殊蒙天恩因准先例令課試文章得業生正六位上菅原朝臣長狀。

右件長者。文安三年十月給穀倉院學問料。寶德元年十二月補文章得業生。前後兼并。歲序相積。爰長岐嶷著名。聰敏好學。寄身於翰墨。留意於詩書。可比陸氏之鳳雛。實是吾家之驥子。倩見偉器。專堪推薦。望請天恩被

下宣旨。令件長遂課試矣。仍勒事狀。謹請處分。

寶德二年十一月三日

從四位下行少納言兼侍從文章博士紀伊權守菅原朝臣  
正四位下行大學頭兼少納言侍從文章博士菅原朝臣  
請殊蒙天恩因准先例令課試散位正六位上菅原朝臣和長狀。

右和長者。文明八年給穀倉院學問料。同十一年補文章得業生。經歷正計歲序功勞。幾春秋。爰和長所學爲心。所習爲身。身置禮囿。醉於大道。不醒。志展詞場。苦於文義。無倦。今見器量。專堪推薦。望請天恩因准先例。被下宣旨。令件和長遂課試矣。仍勒事狀謹請處分。

文明十四年九月十九日

正四位下行少納言兼侍從文章博士式部少輔越後權守菅原朝臣長直  
此狀狀與無餘慶。仍外記續加別紙書宣旨



畢。

從二位行權中納言藤原朝臣胤宣奉勅依請者。

同年同月同日 掃部頭兼大外記造酒正中原朝臣師富奉

於此宣旨。對師富朝臣有問答事。外記申云。予欸狀與無餘慶。宣旨所書如何云々。予云。宣旨必非可成。欸狀與歟。無餘慶之時。續裏紙書宣旨云々。外記別紙無覺悟之由也。重示云。應永廿三年中原師胤問頭欸狀。續別紙書之。又寶德元年清原宗賢課試欸狀。續別紙書宣旨。其外舊例連綿由申含之處。力不及續別紙成。此宣旨畢。其時予度々正文令披見之間。散不審云々。瑞雲院贈左府記。此事分明也。爲職事經歷之家條。彌以爲規範也。后生亦可有異論之間。丁寧記之也。

一課試之時稱方略例。

問頭欸狀也。非課試方畧等之欸狀也。無詮要之間無益歟。

散位正六位上藤原朝臣惟貞誠惶誠恐謹言。

請被特蒙 天恩因准先例召仰民部大

輔三善朝臣道統爲問頭遂課試狀。

右惟貞已蒙二代之宣旨。未遂一業之本望。方今式部大輔大江朝臣齊光卿理當問頭。然而依有故障不可問者。至于他儒士者。或是有門族同房之諱。或亦與惟貞論其年齒。則已爲子弟也。望請特蒙 天恩因准先例。以件道統朝臣爲問頭。將遂課試。宜知 皇恩之無涯。且傳累業之欲絕。惟貞誠惶誠恐謹言。

寬和二年十月九日散位正六位上藤原朝臣惟貞左大臣宣奉勅。宣令件道統朝臣問。惟貞方畧之策者。

寬和二年十月五日。少外記兼直講海宿禰廣澄奉

右上古之樣如此。委旨述前段。尙例爲覺悟記之。又散位者。秀才三年後稱之。

一覆問覆奏事。次第之儀。



東山左府宣下抄云。傳宣秀才課試。

獻上

宣旨。

文章博士菅原在登朝臣申請。因准先例。  
令課試文章得業生正六位上大江朝臣維  
房事。

仰令勘例并年限。

右 宣旨。念々可令下知給狀如件。

正月廿四日

少納言平仲定奉

進上 左衛門督殿

奉入

宣旨。

文章————維房事。副下本解。

仰令勘例并年限。

正月廿四日

左衛門督判奉

大外記殿

式部省

勘申————事。

一年限。

右引勘文簿所注如件。仍勘申。

正和三年正月廿六日

獻上

覆奏文。

文章博士菅原在登朝臣申得業生大江維房年限并例事。

副文書。

右可令。奏問給之狀如件。

正月廿六日

左衛門督藤原判

藏人少納言殿



獻上。

宣旨。

式部省勘申。文章得業生大江維房課試年限并例事。

仰續文依請。

右 宣旨。念可令下知給之狀如件。

正月廿六日

少納言平仲定上

進上 左衛門督殿

副式部省例并本解下之也。

宣旨。

式部省勘申。文章得業生大江維房課試事。

仰依請。

右 宣旨。早可被下知之狀如件。

正月廿六日

左衛門督判奉

奉 大外記局

已上如此事有煩之間。近代無沙汰歟。

一當氏二年策例。

菅原高長。

嘉祿三年三月補秀才。安貞二年正月對策。

同長明。

嘉禎二年三月補秀才。同 三年正月對策。

同在嗣。

寶治三年正月補秀才。建長二年正月對策。

同清長。

建長六年三月補秀才。同 七年正月對策。

同在俊。

延慶二年三月補秀才。同 三年二月對策。

同在時。

應安元年二月補秀才。同 二年蒙課試宣旨。

右已上例如件。

於他家者。廣業以來。其例不可勝計。

一問頭博士事。

宣旨事。

於策文事者別帖記之間。略者也。

家記云。問頭申文者。省官故障爲他儒之時。試



衆之申狀也。本儀者省官可勤之事也。省官故障之時他儒タル也。非省官之公卿無勤仕之例也。但近例間出來歟。問頭ヲバ深可禮者也。道之故實也云々。此申狀又歟狀也。其調樣者如前。

瑞雲院贈左府記云。問頭博士ノ宣旨ヲ中成テ其人ヲ定ム。件歟狀如此。卿位雲客間共ニ先例アリ云々。

一問頭爲省官之時。不申請 宣旨例。

應永十五年十二月廿一日獻策。試衆二人合策。策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

舉賢以才。爲政以德。

文章生正六位上藤原朝臣義資對。

策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

褒幼敏。叙耆英。

文章生正六位上藤原朝臣量光對。

同十六年十月六日獻策。三人合策。一人別注之。

策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

叙賢德。執友交。

文章生正六位上菅原朝臣在豐對。

策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

詳日星。論花實。

文章生正六位上菅原朝臣在實對。

同十七年二月廿二日獻策。三人合策。

策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

叙朝會。弘儒雅。

文章生正六位上藤原朝臣盛光對。

策方畧文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。



梅間柳。聖遇賢。

文章生正六位上藤原朝臣宣光對策方略文貳條。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問觀政。奉親。

文章生正六位上若狹大掾菅原朝臣治長對。右已上件人々。不申問頭宣旨依大卿也。

又少補同不申宣旨例。

應永十六年十月六日獻策。三人合策。二人見上。

策方略文貳條。

明言行。詳瑞祥。

式部權少輔從五位下菅原朝臣家長問。

右件人。今度同不申問頭宣旨。舊例度々分如此。去文明十四年十月二日。和長菅在數同長光等獻策之日。問頭式部少輔菅原長直朝臣。大輔者菅原在治卿也。依故障不爲問頭。仍稱故障。各以式部少輔長直朝臣可爲問頭之

由申請畢。尤其誤不少歟。故大藏卿顯長入道雖爲先達。未練之義也。爲向後舊例等具注之者也。

散位正六位上菅原朝臣和長誠惶誠恐謹言。

請殊蒙宣旨以正四位下行少納言兼侍

從文章博士式部少輔越後權守菅原朝臣長

直爲問頭奉策試狀。

右和長謹檢案內。省官故障之時。以他儒爲問

頭者。策家古今之例也。然則爲繼孔門之舊業。

欲臨課試之詞場。忽浴聖朝之恩化。將入翰

林之文道。望請被下宣旨。以件朝臣爲楊

歷之間頭矣。和長誠惶誠恐謹言。

文明十三年九月廿七日散位正六位上菅原朝臣和長

從二位行權中納言藤原朝臣宣胤宣奉勅。依

請者。

同年同月同日掃部頭兼大外記造酒正中原朝臣師富奉

右宣旨如此。頗不叶道理歟。又省官故障無



謂大卿故障之時。用少輔者例也。卜可書也。彼是不可爲例者也。無益于悔歟。

舊例云。

文章得業生正六位上藤原朝臣公義誠惶誠恐謹言。

請殊蒙天恩被下宣旨以從五位上

行彈正少弼菅原朝臣定爲問頭狀。

右謹檢舊貫。文章得業生課試之時。東西曹分

遞爲問頭博士之例。去今通規也。因茲省若

有其人。便預其選。而今當此仁之者。大輔朝

臣少輔元範等也。各稱故障共以謙退。抑省官

間申請他儒蹤跡多存不遑毛舉。望請

天恩被下宣旨以件定爲問頭博士。適

方射鵠之業。將知拾瑩之功。公義誠惶誠恐謹

言。

長元八年七月廿日 文章得業生正六位上藤原朝臣公義

權中納言兼春宮權大夫左衛門督源朝臣宣。

奉勅宜令彈正少弼菅原朝臣定問文章

得業生藤原公義之策。

同年八月八日 主計頭兼大外記助教備後介清原真人奉

右想視此欸狀并宣旨。大卿同少輔故障之

時。申請他儒之段分明也。然上者。少輔爲問

頭者。不可及宣旨之段亦分明也。不可成異論歟

一依同房爲他儒例。

散位正六位上藤原朝臣惟貞誠惶誠恐謹言。

請被特蒙天恩因准先例召仰民部大

輔三善朝臣道統爲問頭遂課試狀。

右惟貞已蒙二代之宣旨。未遂一業之本望。方

今式部大輔大江朝臣齊光卿理當問頭。然而依

有故障不可問者。至于他儒士者。或是有門

族同房之諱。或亦與惟貞論其年齒。則已爲子

弟也。望請特蒙天恩因准先例以件道統

朝臣爲問頭。將遂課試。宜知皇恩之無涯且

傳累葉之欲絕。惟貞誠惶誠恐謹言。

寬和二年月九日 散位正六位上藤原朝臣惟貞



左大臣宣奉勅。宣令件道統朝臣問惟貞方略之策者。

同二年十月五日 少外記兼直講海宿禰廣澄奉

文章得業生正六位上美作權大掾大江朝臣通直誠惶誠恐謹言。

請特蒙天恩因准先例被下宣旨以

內記藤原朝臣弘道爲問頭狀。

右謹檢案內通直爲文可課試獻策之由被

下宣旨而大輔菅原朝臣依有故障不能

少輔三善朝臣佐忠巨勢爲時等皆是同

坊也仍爲文以勘解由次官藤原朝臣惟貞中

請問頭已蒙宣旨方今通直雖適生累葉之

家纔應茂才之舉而已過強仕之期更迷楊

歷之志爲文已蒙優許通直盍仰傍跡望請

天恩因准傍例以件弘道爲問頭將遂對冊

之業通直誠惶誠恐謹言。

正曆三年七月十日 文章得業生正六位上美作權大掾大江朝臣通直

中納言藤原朝臣顯光宣奉勅宣令件弘道

問文章得業生大江通直之策者。

正曆三年十二月廿日權少外記三園 奉

一省官同曹以他儒申請例。

文章得業生正六位上行美濃掾藤原朝臣實政誠惶誠恐謹言。

請被下宣旨以正四位下行權左中弁兼

大學頭東宮學士大和守藤原朝臣義忠爲問

頭博士狀。

右實政謹檢案內省官同曹或有障之時以他

儒士申請問頭博士古今之例也望請被下

宣旨以件義忠爲問頭博士實政誠惶誠恐謹

言。

長曆四年七月廿日 文章得業生正六位上美濃掾藤原朝臣實政

權中納言兼皇后宮權大夫右衛門督藤原朝臣

資平宣奉勅宣令權左中弁藤原朝臣義忠

問文章得業生藤原實政之策者。

長久元年十二月廿日 大外記安倍守輔奉

文章得業生正六位上藤原朝臣定光誠惶誠恐謹言。



請殊蒙。天恩因准先例被下。宣旨以。從三位藤原朝臣元範爲問頭奉策試狀。右定光謹檢案內。省或故障或同曹之時。尋其嘉躅遞爲問頭者例也。推其次第今在此人。望請被下。宣旨以件卿將爲策試之問頭矣。定光誠惶誠恐謹言。

應永三年十一月日 文章得業生正六位上藤原朝臣定光

付職事狀。

定光獻策問頭事。款狀一通進候。可令申沙汰給也。恐々謹言。

十一月廿六日

兼宣

藏人左少弁殿 一省官故障之時用他儒例。

文章得業生五位上行大和權大掾藤原朝臣爲文誠惶誠恐謹言。

請特蒙。天恩因准先例被下。宣旨以。勘解由次官從五位下藤原朝臣惟貞爲問者。遂課試狀。

右爲文謹檢案內。式部大輔菅原朝臣相當問頭。而彼朝臣俄申障由。重檢故實。申請問者課試之輩。古今已多。近則件惟貞問弓削以言。菅原資忠問藤原惟成。橘直幹問藤原國光等是也。自餘之例不可勝計。是則依有道之大事年之定限也。望請蒙。天恩因准先例被下。宣旨以件惟貞爲問頭。將遂課試。爲文誠惶誠恐謹言。

正曆三年十月廿日 文章得業生五位上行大和權大掾藤原朝臣爲文中納言源朝臣保光宣奉勅。宣令件惟貞問。文章得業生藤原爲文之策者。

正曆三年十月廿日 大外記兼博士主稅助播磨介中原朝臣致時奉

式部大錄和氣元倫奉

文章得業生正六位上行備中掾藤原朝臣明衡誠惶誠恐謹言。

請特蒙。天恩因准先例被下。宣旨於。式部省以正五位下行勘解由次官藤原朝臣國成爲問頭奉試狀。



右明衡謹檢案內。文章得業生課試。省官有故障之時。申請諸儒爲問頭者。古今之例也。近則藤原實範問頭文章博士善滋爲政。菅原定間頭東宮學士藤原義忠。藤原國成問頭散位高階等是也。爰明衡可奉試之由被綸旨矣。而當時省官故障。然間明衡聚螢之勤久積。射鵰之志難遂。望請天恩因准先例。被下宣旨於彼省。以件國成爲問頭。將沂龍門之浪。明衡誠惶誠恐謹言。

長元奉旨。文章得業生正六位上行備中掾藤原朝臣明衡大納言兼民部卿中宮大夫藤原朝臣齊信宣奉勅。宜令國成問文章得業生藤原明衡之策者。

同年同月十四日 掃部頭兼大外記土佐權守小野朝臣奉

同年同月十五日 小錄紀賴政

文章生正六位上菅原朝臣音長誠惶誠恐謹言。請被下宣旨以前加賀守從四位上藤原

兼俊爲問頭博士奉策試狀。

右音長謹檢舊貫。菅江門徒相分東西曹司。初起以來。遞爲問頭者例也。次第之所至。理運在斯人。望請被下宣旨。以件兼俊朝臣將爲獻策之問頭博士矣。音長誠惶誠恐謹言。延文元年八月日文章生正六位上菅原朝臣音長權中納言從三位藤原朝臣仲房宣奉勅。依請者。

同年同月其日 大炊頭兼大外記土佐權守中原朝臣師茂奉

文章生正六位上藤原朝臣資任誠惶誠恐謹言。請特蒙宣旨以從三位行大藏卿菅原朝臣爲清爲問頭奉策試狀。

右資任謹考舊貫。省官故障之時。尋其芳躅。申請問頭者。儒例吾道之故實也。推其次第。今在斯人。望請被下宣旨。以件卿早爲課試之問頭。將遂方畧之獻策矣。資任誠惶誠恐謹言。永享三年十二月日文章生正六位上藤原朝臣資任



散位正六位上菅原朝臣顯長誠惶誠恐謹言。

請殊蒙天恩因准先例被下宣旨以

參議正三位行土佐權守菅原朝臣益爲問

頭奉策試狀。

右顯長謹檢案內省官故障之時尋其嘉躅爲

問頭者例也推其次第今在斯人望請被下

宣旨以件卿將爲策試之問頭矣顯長誠惶

誠恐謹言。

寶德三年二月六日散位正六位上菅原朝臣顯長

從二位行權大納言源朝臣持康宣奉勅宜

令件益卿問彼顯長策者。

同年同月同日大外記兼主水正助教清原真人宗賢奉。

右已上問頭之款狀條々例如件。

一父子同日勤問頭例。

明德元年三月廿七日獻策。二人合策。

試衆。藤原有光。問頭。菅原秀卿。

試衆。同顯信。問頭。同長。

一雲客勤問頭例。

六位例。

試衆。文章得業生藤原朝臣春海。

問頭。正六位上行少內記三善清行。

又。

試衆。文章生弓削以言。

問頭。正六位上行少內記藤原惟貞。

已上文粹文。

五位例。正曆三年十二月廿日宣旨。

試衆。文章得業生藤原爲文。

問頭。解解由次官從五位下藤原惟貞。

又。長元八年八月八日宣旨。

試衆。文章得業生藤原公義。

問頭。從五位上彈正少弼菅原定。

又。長元五年七月十七日宣旨。

試衆。文章得業生藤原明衡。

問頭。正五位下勘解由次官藤原國成。



又 應永十六年十月六日策。

試衆。藏人左近衛將監菅原惟長。

問頭。式部權少輔從五位下菅原家長。

又 明德元年三月廿三日策。

試衆。文章生藤原顯信。

問頭。正五位下大內記菅原長遠。

四位例。長久元年十二月廿日宣旨。

試衆。文章得業生藤原實政。

問頭。正四位下權左中弁兼大學頭東宮學士藤原義忠。

又 長和五年十一月廿一日宣旨。

試衆。文章得業生藤原家經。

問頭。從四位上文章博士大江通直。

又 萬壽三年十一月廿一日宣旨。

試衆。文章得業生藤原實範。

問頭。從四位上文章博士善滋爲政。

又 明德五年三月廿三日策。

試衆。藏人左近衛將監菅原長政。

問頭。正四位下文章博士藤原元範。

又 應永廿三年二月十日策。

試衆。文章生菅原益<sub>良</sub>。

問頭。從四位下大學頭兼文章博士菅原在直。

一非儒官入問頭例。

延文元年八月廿九日策。

試衆。文章生菅原音長。

問頭。前加賀守從四位上藤原兼俊。

又 應永廿三年二月十日策。

試衆。文章得業生菅原在教。

問頭。正三位菅原長<sub>良</sub>。

又 寶德二年十二月一日策。

試衆。散位正六位上菅原顯長。

問頭。參議土佐權守菅原益<sub>良</sub>。

舊例。寬和二年十月廿五日宣旨。

試衆。散位正六位上藤原惟貞。<sub>散位者文章得業生也。</sub>

問頭。民部大輔三善道統。



又 正曆三年十二月廿日宣旨。

試衆。文章得業生藤原爲文。

問頭。勘解由次官藤原惟貞。

又 正曆三年十二月廿八日宣旨。

試衆。文章得業生大江通直。

問頭。□內記藤原弘通。

右已上古今之例繁多也。不遑毛舉。

一題者問頭兼行例。

應永十五年十二月廿一日。

試衆。藤原義資。同量光。合策。

題者。輔。問頭。大輔菅原秀長卿一人參仕

給。

同十六年十月五日。

試衆。菅原在實。同在豐。合策。

題者。輔。問頭。大輔菅秀長卿。又御一

人。

同十七年二月廿二日。

試衆。藤原盛光。同宣光。菅原治長。合策。

題者。問頭。輔。又迎陽一人。御兼行同前。

一少輔兼行例。

延文三年十二月廿三日。

試衆。藤原資俊。同資康。同仲光。合策。

題者。輔。問頭。式部權少輔秀長卿一人兼

行。

同前已上三人之問頭一人兼行之例。同如

件。

一郡事屋申文事。

家記云。郡事申文者。試衆申大卿之狀也。號輔宣

又云。郡事申狀之時者。大卿召省掌。獻策事具

哉之由被尋。已具之由令申。仍有行容之事也

云々。

瑞雲院贈左府記云。申文ノ袖ニ式部大輔署ヲ

加フ。是ヲ輔宣ト號ス。高檀紙二枚ニ書テ内々

狀ヲ副テ遣之云々。又云。輔宣ヲバ當日省家



二下云々。此屋在式部省裡。於此處行課試之儀事。上古以來之定例也。此屋立床子。題者。問頭秀才。各列着而行之。然近代式部省已下退轉之後。於西廳行之者。非分之儀也。仍尙准此廳於郡事屋之間。不失舊規。付申文於大卿。大卿任例加袖書返給。是云輔宣也。強紙一枚書之。不替狀也。以一枚爲裏紙。卷加內狀中遣之也。此署必草名也。上古之儀者不知。近代分如此也。

舊草。

依請者。

### 式部大輔菅原判。

文章得業生正六位上藤原朝臣定光誠惶誠恐謹言。

請殊蒙。輔宣於郡事屋奉試狀。

右定光謹檢案內。省官不具之時。於件屋被行課試者是例也。望請。輔宣於件屋被行奉試。將遂楊歷之業矣。定光誠惶誠恐謹言。

應永三年十一月日 文章得業生正六位上藤原朝臣定光  
內舉。

定光獻策。明日必定候。郡事申文獻之候。御署可申請候。恐惶謹言。

十一月廿六日

兼宣

式部大輔殿

依請者。

大輔菅原判。迎陽御署也。

文章生正六位上藤原朝臣量光誠惶誠恐謹言。

請特蒙。輔宣於郡事屋奉試狀。

右量光謹檢案內。省官不具之時。於件屋被行課試者是例也。望請。輔宣於件屋被行奉試。將遂楊歷之業矣。量光誠惶誠恐謹言。

應永十五年十月日 文章生正六位上藤原朝臣量光

內舉。

量光郡事申文進之候。任例可成。賜輔宣候。仍執達如件。



十二月十九日

性光 日野東洞院儀同  
入道俗名資教

謹上式部大輔殿

依請者。

權大輔判

文章生正六位上菅原朝臣益 長 誠惶誠恐謹言。

請特蒙 輔宣於郡事屋奉試狀。

右益 長 謹檢案內。省官不具之時。於件屋被

行課試者是例也。望請 輔宣於件屋被行

奉試。將遂楊歷之業矣。益 長 誠惶誠恐謹言。

應永廿三年十一月 日文章生正六位上菅原朝臣益 長

右已上如件。此申文大畧例文之樣也。無殊

事。

一禮籍文事。

此事名簿同事也。但於獻策者。必稱禮籍也。

瑞雲院贈左府記云。此文ハ當日問頭ノ許ヘ自

身持テ向ベキ事ナレドモ。祿物遣次。青侍一人

布衣ニテ使者トス。白麻納タル長櫃ニモ白張

雜色一人相副。桃林ヲモ狩衣着タル牛飼ニテ

引遣。近來ハ只狀ニテ禮籍文ヲモ遣ス。其禮紙

ニ祿物ヲモ申遣ス云々。

禮籍文如此。

文章得業生正六位上藤原朝臣定光

應永三年十一月廿七日

強紙一枚書之。無裏紙懸紙。又卷籠消息遣

之也。

又

文章生正六位上藤原朝臣義資

應永十五年十二月廿三日

義資禮籍進之候。尤雖可持參候。今日事取亂

之由申候。似忘禮候歟。恐々謹言。

十二月廿三日

重光

式部大輔殿

追申。

用劔一腰。螳螂一疋。鳥目千疋獻之。



返牒。

御禮籍紙給之。今日可早參仕候也。秀長誠恐謹言。

十二月廿三日

秀長

追言上。

龍蹄一疋。鵝眼十緡。御劔拜領。重寶恩賜雖爲過分。尤以祝着可令參謝言上候。

文章生正六位上藤原朝臣量光

應永十五年十二月廿三日

量光禮籍進之候。雖可持參候。今日事取亂之間。似忘禮候歟。恐々謹言。

十二月廿三日

性光

式部大輔殿

追申。

桃林一頭。麻根卅帖。殊更獻之候。

文章生正六位上行若狹大掾菅原朝臣治長

應永十七年二月廿二日

治長禮籍可持參之處。今日事無何取亂候間。且傳進之候。仍言上如件。

二月廿二日

文章博士長方

謹々上 式部大輔殿

一稱名簿例。

文章生正六位上菅原朝臣在實

應永十六年十月五日

名簿進上候。尤雖可持參候。今日事取亂候。頗似忘禮候歟。在實誠恐謹言。

十月五日

在實

坊城殿

文章生正六位上菅原朝臣在豐

應永十六年十月五日

名簿進上候。尤雖可持參候。今日事取亂候。頗似忘禮候歟。在豐誠恐謹言。

十月五日

在豐



## 人々御中

一試衆小屋事。

瑞雲院贈左府記云。此屋事。舊例ハ然ベキ上達部此屋ヲ作儲也。建仁度ハ花山院左府爲中納言被<sub>レ</sub>相訪。貞治度ハ勘解由小路中納言實宣卿被<sub>レ</sub>相當畢。近來事ハ試衆トシテ大學寮ノ寮官ニ仰テ沙汰ヲ致也。秀才兩人ノ時。上臈小屋ハ北ニアリト云々。此屋事。近代分者。式部省年預男令沙汰也。非大學寮寮官之沙汰者也。凡文書等同。彼年預男獻策。後日皆加年號位署。問頭許爾持來也。

家記云。聖廟御時。御硯被<sub>レ</sub>置式部省。而承久亂逆之時紛失畢。仍被<sub>レ</sub>寫留其形云々。執行職相傳也。就之文書等傳之云々。

一神座事。

此座如當時者。西廳乾角立八足棚爲神座也。此下行物。必自伯職五十疋之下行也。省之

年預必執沙汰之。

一題者事。

彼贈左府記云。儒中可然人躰ニ申試也。式部ノ輔。先ハ大卿也。有闕者。權大卿等有例。宣下ニハアラズ。只兼テ直申定ム。省門ニテ當座ニ題者題ヲ書テ授問頭。問頭給試衆也。然而兼日ニ間頭題ヲモ計テ策文ヲ書。題者。問頭。兼勤ル例アリ云々。

抑古人之題除之者道之大法也。但同題有例。注他帖畢。

題書樣。強紙一枚書也。

策方略文貳條。

舉賢以才。

爲政以德。

右已上如此非古文字也。迎陽題者之舊草也。自餘不相替之間畧之。秀才之時別也。又如此也。



策秀才文二條。

幼聰。

豪富。

右兩樣之書樣如件。或秀才之時。對策文二條。書載之例。又有之。是復兩樣之段也。

策文事。

又贈左府記云。本儀ハ。問ハ問頭儒カク。對ハ試衆カク。題ハ題者コレヲ出ス。近來ハ問答。題皆問頭沙汰也。問頭厚紙ニ皆書連テ試衆ニ遣ス。試衆宿紙ニ古文ヲ副テ書之。隨身。當日問頭。當座ニ題者ヲ出ス。分ニテ題ヲ見テ。問ニ條ヲ書テ以典神ニ覽テ以省掌授試衆。試衆取副笏テ入小屋。コレヲ書由シテ問對一卷ニ書テ取副笏出小屋置神前御棚テ二拜シテ退。舊ハ臂袋トテ。正校禮部韻一帖ヲ袋ニ入テ。左ノ臂ニ懸テ。問對一卷ヲモ件袋ニ入テ。其時取出テ置例モ所見アリト云々。

一問頭書問事。

舊草。續ニ強紙一書之也。

策方略文貳條。

從四位下 行文章博士藤原朝臣氏種問  
任農。

問。樊重雲之好貨殖也。善稻善梁。張興世之拜給事也。送筭送笛。及寒兮擊稿。節候欲識。待雨兮挾槍。時序莫秘。襄公卜郊。爲再占爲四占。庶民推籍。終百畝終萬畝。

垂釣。

問。呂望之到磻溪也。申揚所得之玉。蒙莊之臨漢水也。子細所持之竿。天子舍珠澤。東征歟南征歟。宋生投玄淵。七絲乎九絲乎。巨鼃戴山。有十四有十六。長蛟之吐瀾。及一丈及二丈。延文六年三月廿三日。

監試

典正六位上行彈正忠紀朝臣重弘



右。如此問頭書設令懷中也。凡此文者。又邂逅之樣也。無把題序分。已下之牀卽舉徵事句計也。古儒之作法定有先例歟。非尋常也。又徵事句十二句也。此問大畧加古文可書也。又無其儀。彼是異樣之文牀也。

一古文文字事。

上古者。皆以古文書也。近代者。或置字或詞字等之類計書也。但內題<sup>策方畧文二條</sup>并位署等者。必皆用古文文字也。是發端之謂歟。自餘者。如前言而已。

對對。策。文。式。二。條。條。正。式。三。位。位。行。行。商。賁。纁。原。翰。朝。思。臣。問。問。

右已上如此之牀也。

災之。災而。般者。壬也。何何。於歟。

右已上如此之類也。

ナ有。無無。开其。吕以。侶似。系不。可。可。

右此等之類也。此等之以字等可得其意也。於舊儀者。全篇雖爲古文。近來只置字類用者也。舊草之時。一向不見分之條無益歟。大概分尤宜也。大畧古文者。尙書孝經之類也。隸字鳥篆之類不用也。舊草可准知之也。

一判儒評定文事。

子細載省試之段間。不及重注也。仍評定文牀注之在與。

贈左府記云。舊ハ獻策之後判儒二人モ三人モ。悉策文ヲ書賦テ。是ヲモテ判也。獻策已后。日次ニ隨テ行フ。鋪設等ヲ渡遣ナリ。近來ハ獻策日則判ヲ行ル。寂略之事也云々。

或記云。舊ハ禁裡。仙洞。執柄。三公等策文有御覽云々。

一雜例事。

一重服之時遂大業例。



秀才基明。

仁安三年二月七日策。重服。

菅原在秀。

永和元年十二月十九日策。重服。

一合策時試衆多少之例。

應永元年三月廿九日策二人例。

試衆。菅在方。同在保。合策。問頭一人。

迎陽。

同十五年十二月五日策。

試衆。藤義資。同量光。合策。問頭一人。

同前。

同三人例。

同十七年二月廿二日策。

試衆。藤盛光。同宣光。菅治長。合策。

問頭一人。同前。

同四人例。

永和元年十二月十九日四人。策。

試衆。

菅長。重張。

同爲守。同長方。

同在秀。

同五人例。

應安六年八月十九日。合策。

試衆。

秀才藤範輔。進士菅長敏。

同菅久長。秀才菅長勝。同藤兼

宣。已上五人同日策也。

右已上例如件。此外不見其例。

一獻策省試同日例。

此事試衆各別。同人同日兩條之例。未曾見之。

康永二年三月廿三日策。

試衆。

菅爲綱。同賴長。二人于時藏人。

題者。

式部大輔長員卿。

問頭。

前文章博士藤秀範。兩人之問頭也。

同日省試。試衆十二人也。

試衆。

蔭子正六位上藤原忠光。

蔭孫正六位上菅原秀長。



題者同前。

右應永士六年<sup>亥</sup> 日年預前日向守紀重弘注進

一獻策號<sup>楊唐</sup>事。

家記云。獻策又曰楊歷<sup>卜</sup>。奉楊庭之試也。又云。歷試也。淮南子字歟。可見云々。

一策勞事。

家記云。自五品叙四位<sup>從下</sup>。之刻者四年也。策勞者。從上四位マデ也。

一給御墨事。<sup>唐墨。</sup>

獻策之時。每度禁裏被出御墨也。爲清書策文也云々。墨紙□秘之云々。

一大破子事。

從儒中爲合力。大破子被送之。攝家等家禮時。同申入或以代物被送之。

消息云。

賢息令<sup>途</sup>大業給候之條珍重候。大破子百荷殊更加下知候。可參賀候也。恐々謹言。

十一月十日

性光<sup>日野東洞院儀同入道</sup>

坊城殿

明日彼御獻策尤珍重候之間。事更存佳例。雖輕微候。大破子百荷百疋。加下知候。千詳期佳謁候。恐々謹言。

十一月九日

兼宣

坊城殿

一文章院參仕事。

家記云。本院顛倒之后者。以大學寮廟倉盛殿擬彼院也云々。今者於茶園裡行廟拜也。員數不定。本儀廿一反。或多分二拜。官廳之儀依遲々也。儒官經歷之度參拜。或又還補再任共參仕也。

次第。

先於傍洗手。<sup>手水手拭厨女持之</sup>次向廟前二拜。<sup>先立二軾前揖脫</sup>起座。舊則此時有吉書。堂盥沙汰。近代無此儀。



如何。其儀如入學名簿也。委細注于前段畢。  
指圖在別記。

贈左府記云。裝束畢後。公卿座ニ着テ反閉アリ。次ニ祿ヲ陰陽頭ニ給フ。青侍堂上ニテ給也。或於砌下給之由。建長四年有所見云々。藤氏試衆。先氏院ニ參ス。西門ニテ下車。南門ニ入手ヲ洗テ廟前ニ參シ。二拜之後。饗座ニ着テ勸盃三獻。舊ハ學生等多着テ朗詠ス。次又曹司饗ニ着ス。次文章院ニ參ス。氏院ニ參ノ如シ。手ヲ洗ナリ。廟拜廿一反。但員數不定云々。次臺盤座ニ着ス。北上東面也。座定後盃酌。此屋ニテ吉書アリ。堂監吉書二枚ヲ讀テ後。試衆等ニ授。試衆二字ヲ加テ。返給テ退出云々。

### 一郡事屋當日事。

同記云。舊ハ向朱雀門代。今ハ官廳ニテ行之間。向郁芳門代。秀才車ニ乗ナガラ。轅ヲ壇ノ上ニ引懸テ。鞞ハ牛ニ解懸也。此所ニテハ北上

也。舊ハ上達部車ヲ立竝。侍臣儒士以下訪來。人々門ノ内外ニ徘徊スル也云々。

### 略次第。麟御草也。

刻限人々參集。試衆在南門邊。輔於郁芳門下車。典省掌等迎謁。題者入自東門經正廳後着西廳北第二間床子。東面。次問頭着床子。東面。於西廳南端之壇下着靴。向南着之。經壇上入當間。着北第三間床子。次典省掌等着座。次輔召典。二音。或摩靴。典參進召試衆之文書。或先召視。視文書近代。典向南門取試衆之文書。課試問頭等宜視衆置之。典向南門取試衆之文書。如元入宮。次輔召典仰試衆可召之由。典向南門引試衆。試衆。先於西廳東底南端向南門着靴。經西廳東底壇下入當間。着北第三間床子。西面。次輔書題。兼書儲。自納宮。先移入宮中之文書於視宮。題許入宮。次輔召典給題。覽神座。置文書於視宮。題許入宮。次問頭見題畢。如元納宮。次書問。兼書儲。之。自懷中取出。加入題宮。



目典典取之置輔前。次輔披見乍箇中見之。問畢。召典覽神典覽畢。召省掌二音。省掌參進。典取題并問。後手爾授省掌。省掌又後手爾取之。立試衆前。又後手爾授之。試衆乍座取之。取副笏揖。起座入小屋。此間或問頭退入。次試衆入小屋二拜。立箸於饗膳。置策文於前机。拔箸。典取策文。覽神座。次試衆出小屋。改着淺沓。進神前二拜退出。

判次第

西廳北第一間設神座。輔着第二間座。東面。次判儒各着座。向輔北。次饗膳三獻之後撤之。次開見。典於輔前。先判儒退座。次神座前敷講師座。此間判儒復座。次典持策文納筭。置神座前机。次判儒一人着講師座。自座前進。典勤讀師。次講師讀畢復座。次典覽策文於輔。次第見下之。又取上之。次判儒書評定文。兼書儲レ之。次第加署進輔。輔同加署。下典令納筭封之。次自下薦退

出。

評定文。

式部省

評定

文章生正六位上藤原朝臣義資對策

文事。

合貳條。

舉賢以才。

爲政以德。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

今評件策舉賢以良才。其義雖不巨細。治政以明德。彼趣粗有博聞。已奉桂林枝折之試。須優藤家累世之名。因准格條處于丁科。

評定 文章生正六位上藤原朝臣量光對策

文事。

合貳條。

褒幼敏。

叙耆英。



正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

今評件策。多乖問意。上條褒幼敏之義不詳。下條叙耆英之情聊呈博達之謂。蓋以如斯哉。然而十六徵事。八九捷對。准之考課令處中第。

應永十五年十二月廿四日

從四位下行右中弁兼文章博士藤原朝臣有光  
晉位下登學頭兼少納言侍從文章博士越前權守菅原朝臣長通

省

少輔從五位下菅原朝臣在直

正二位行大輔菅原朝臣秀長

式部省

評定 文章生正六位上菅原朝臣惟長對策

文事。

合貳條。

明言行。

詳瑞祥。

式部權少輔從五位下菅原朝臣家長問。

今評件策。無擇言。無擇行。其義雖得。示彼瑞。

示彼祥。厥趣不詳。既登試場。宜免及第。因准格條。處于甲科。

評定 文章生正六位上菅原朝臣在實對策

文事。

合貳條。

詳日星。

論花實。

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。

今評件策。日星之詞。文光不。万丈花實之趣。義

理亘多端。博達之謂豈如斯乎。准之考課令

處中第。

評定 文章生正六位上菅原朝臣在豐對策

文事。

合貳條。

叙賢德。

執友交。



正二位行式部大輔菅原朝臣秀長問。  
今評件策。賢德之對。其義不詳。交友之詞。其交多變。早優累家之蹤。已遭詞場之試。宜發方策。次于乙科。

應永十二年十月日

正四位下行少納言兼侍從文章博士信濃權守菅原朝臣  
正四位下行大學頭少納言兼侍從文章博士越前權守菅原朝臣

省

權少輔從五位下菅原朝臣

從五位上行少輔兼陸奥權守菅原朝臣

正二位行大輔菅原朝臣

右已上評定文。大跡如斯。舊草繁多。試舉此二評如件。對策之諸例。試科之一會。已事畢矣。不參之判儒出狀事。注委細於省試之段。仍可准知也。即略之者也。

儒門繼塵事。昔日文明年中。予遂大業之時。

纔撫得家珍之文籍。成立門葉之再興以來。當氏儒流于今存在者二三家也。偏似有名而無實。頃既及暮齒。愈抱愁嘆於此道之謂。最在于兒孫之后世陵遲也。仍自茲歲三春之正月。至九夏之五月。所成抄出及多帖矣。策文古今舊草二冊。同文作法上下二冊。爰復探看少年楊歷之一鈔。號桂葉記。寔爲九牛一毛耳。既一卷裡以用捨增刊。重編此一冊。已一百餘丁也。摠并爲五冊也。吁。吾命雖不在于茲者。何有成此道之惑哉。且可爲囊庭之千金。曾莫出書厨之一笥。幸名之曰。桂林遺芳鈔乎矣。于時永正第十二載中夏十又二日筆了。

五更臣權中納言兼大藏卿菅原朝臣和長

右桂林遺芳抄以松下見林本校合了



群書類從卷第四百九十七

雜部五十二

新撰字鏡序

求法僧昌住

情以夫大極元氣之初。三光尙遙。(度)水皇火帝之後。八卦爰興。是知仁義漸開。假龍圖而起文。道德云廢。因鳥迹以成字焉。然則暨如倉頡見鳥迹以作字。史遷綴史記之文。從英雄高士耆舊逸民。文字傳來。其與尙矣。如今愚僧生蓬艾門。難遇明師。長荆棘廬。弗識教誨。於是瞻見書疏。閉於胸臆。尋讀文字。闇諸心神也。況取筆思字。宛然如居雲霧間。向紙認文。茫然如日月盆窺天。搔首之間。歎慙之。經誦詰訓。頗覺得而於他文書。搜覓音訓。勿々易迷茫々巨悟也。所以然者。多卷之上。不錄顯篇。

部。披閱之中。徒然晚日。因爲俾易覺。於管見頗所鳩纂。諸字音訓。粗攸撰錄。群文漢倭文々辨部。字々搜篇。以寬平四年夏中草案已竟。號曰新撰字鏡。勒成一部。頗察泰然。分爲三軸。自爾以後。筆幹不捨。尙隨見得。拾集無輟。因以昌泰年中。閒得玉篇及切韻。招加私記脫泄之字。更增花麗。亦復小學篇之字及本草之文。粗雖非字之數內。等閑撰入也。調聲之美。勘附改張。乃成十二卷也。片數壹佰陸拾。未<sub>レ</sub>在臨時部文數貳萬肆佰捌拾餘字。又小學篇字四百餘不<sub>レ</sub>入數從此之外。二合字並重點字等不載於數。如是二章之內字者。依煩不明音反。音反者。各見三片部耳。亦



於字之中。或有東倭音訓。是諸書私記之字也。或有西漢音訓。是數疏字書之文也。或有着平上去入字。或有專不着等之字。大槩此趣者。以數字書及私記等文。集混雜造者也。凡孝經云文字多誤。博士頗以敎授者且云。諸儒各任意。或以正之字論俗作。或以通之字。諍正作。加以字有三體之至。〔作至讀〕讀時有四音及巨多訓。或字有異形而至作及讀皆同也。或字有形相似音訓各別。專尊崇崇孟孟也。〔巨多也〕如是等字形相似。而音訓各別也。或有字之片同。相見作別也。〔ナト〕王玉壬。月肉也。〔巨多也〕如是等字。片者雖相似。而皆別也。或有字點相似皆別也。相相。相。慢。慢。等字也。馬。魚。爲等字從四點。鳥。與。此等字從一點。大略如是。至書人而文作者。皆謬錯也。至片部。悟耳。雖然。懸暗之意。部文之內。精不搜辨。若有等閑可見用者。後覺達者。普加諧糺。以流布於後代。聊隨管軸。而所

撰集。敢爲苦學之輩述亂幹。以序引耳。

### 新撰字鏡總目

一天	二日	三月	四肉
五雨	六風	七火	八連火
九人	十イ	十一親族	十二身
十三頁	十四面	十五目	十六口
十七舌	十八耳	十九鼻	二十齒
二十一心	二十二手	二十三足	二十四皮
二十五毛	二十六色	二十七疋	二十八言
二十九骨	三十尸	三十一女	三十二影
三十三支	三十四糸	三十五衣	三十六巾
三十七四	三十八食	三十九米	四十酉
四十一門	四十二馬	四十三牛	四十四角
四十五革	四十六舟	四十七車	四十八瓦
四十九見	五十勺	五十一土	五十二石



















偷竊也反勢也損也理也

僥幸也司勢也道也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

債七經也反信也

阿叔父之弟

阿婆母之弟

伯父父之弟

智毛古又

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

阿姑父之弟

從父父之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟

姨母母之弟



頰居嫌反。

面部十四

配文孝反。去而齋。

面波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

齋波反。去而齋。

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又

面方孔反。上覆也。又







鼻部十九

𦵏。𦵏。同。千崖下。旦二反。去。

鼻。為共。一弄二反。去。

六、鼻。敔。其。留。反。  
波。奈。志。戶。

與𣎵同。僖有。𣎵。二反。去。

息。伊此支。

鼻。瘻。器。反。割。

又波奈多。

鐵良反去。多。

鼻刀和太利又波奈乃和波

支。

齒部二十。

35

斷音牛。反平。波志。音牛。反平。波志。

齒。搗。同。波。爾。加。則。加。反。提。也。  
又。伊。女。久。

世反去聲

齒下介反。齒相波切也。鳴。

音五  
加无。  
又史。  
又加。  
年。

齒音同。反。習也。欠。下。力。

語。牛  
加舉反。  
戶利。上。  
又平。  
齒。不  
又。

又相不。波。

詞。又之乃反。食已出入。

反。齒不齊。與。

波爾加年又久不。

波

波爾反平。也齒不正也。

世。皇。太。女。反。留。唐。

心部二十一。

悠也以通州所波留二反平長

起。言戍反。諧也。調。

𪔐。𪔐。𪔐。  
𪔐。𪔐。𪔐。  
𪔐。𪔐。𪔐。

心態也。他載反去。意心恣

忽所立反不滑也。

慈公反乎。

手部二十二。

葵邑夫反。平。寫也。志太  
加太於支。天字豆領。

三

---











女部三十一

思。男。同。三。弄。升。也。同。和。火。

習謂之老嫗古

止石女。厚。七。

弄也。奈也。万

也。年  
加狄  
比反  
女主

宛反從也。曲也。尔己也。介

周。止。由。二。反。

飽反。按。耀也。

魯反弟妻曰  
季曰

卷第四百九十一

也。太以波意志二反。

名。不介留。又遊

良良  
女女  
也婦  
兒人  
大英

已解  
乃反  
年。直  
又好  
祿矣

○ 〇

長部三十二

亦作茅上

反。平。續。皮。世。

元反。平。陰。

長也。形同。



髻。通交反。髮也。  
髻。徒反。髮也。  
髻。徒反。髮也。

支部三十三。

岐。其反。  
岐。其反。  
岐。其反。

岐。其反。  
岐。其反。  
岐。其反。

支部三十四。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

髻。徒反。髮也。  
髻。徒反。髮也。  
髻。徒反。髮也。

岐。其反。  
岐。其反。  
岐。其反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綰。綰反。  
綰。綰反。  
綰。綰反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。

綴。綴反。  
綴。綴反。  
綴。綴反。











車部四十七。

覲同魚雞反端橫木以縛扼者也奈加江乃波志乃久佐比

輔扶也車乃加波也知助也  
車由推也反子陸已加張陸二

輶近反。又佐比。  
輶上。古緩反。訓同。又。鑣也。下

輓同於輓板久比木久佐比

瓦部四十八。

古火反。此又取戶。

商  
變也。加波良。

瓶。萍。經。反。

鄆城同己甫也。保止支也。

氣三加江反

貧。盆。同。止。轉。還。反。支。也。

殞。蠅。失。也。萬。利。

左奈太比。

已反。二字。

取利二字。

良。此。

見部四十九

夕部五十。

旬。波。良。波。比。由。久。

土部五十

壘力也。研也。古奈多。  
 壘居委更上垣也。  
 壘豆伊加支乃破處。

地者城也。豆，竿也。禮。垠，生也。反。平。八。方。

出城也。結土也。上四也。又保。

壘去也。金也。定也。保止也。土壘

增陞水也。佐加。又年久。又豆令年。

拍折也學也位介女。又比波留。

填市人也。又波爾。

壤也。古豆和。又古万个志。

聖射止。

力交。了二反。平。國。力。交。了二反。平。國。力。交。了二反。平。國。

城也。加支乃女久利。  
丘居有。盛故二及。小陵

虛。徒古去聲。二反。故丘也。大岡之基也。大岳名。

步五。入盛也。居也。盛也。伊保。又支志毛止。

上甘。上。二反。端岸。龍。力龍反。煇。雷。又可。











鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又

鉅 志反。又



鉤加夫

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鉤良

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

鐵加保

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟

櫟一作櫟























三























國 戶止反 阿平聲 國也 止反 阿平聲 國也

齋 子乃反 平聲 齋也 子乃反 平聲 齋也

都 野反 音都 都也 野反 音都 都也

陵 波同 力養反 使也 波同 力養反 使也

降 下紅反 卷也 降也 下紅反 卷也 降也

陽 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

輟 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

國 午反 陽聲 國也 午反 陽聲 國也

亮 諫同 力尚反 伏也 諫同 力尚反 伏也

都 野反 音都 都也 野反 音都 都也

陵 波同 力養反 使也 波同 力養反 使也

陽 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

輟 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

輟 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也

還 也如之 仁移反 坡也 也如之 仁移反 坡也











父部百一

父 又及羅也。

品字樣部百二

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

品 又及羅也。

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

故 已止太介又

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且

陷 介且











群書類從卷第四百九十八

雜部五十三

中正子

子生亂世。無有所以也。偏以翰墨游戲餘波。及二三子講明。遂成中正子十篇。後十年讀之。又不能无自是之非之也。此書之作。十以出乎一時之感激爾。甲申春季。圓月書。

中正子叙篇卷之一

東海

釋圓月撰

外篇一

中正子與二三子語。以仁義之道。乃及性命死生之理。或請著諸書。以廣流傳。中正子不可而曰。久矣。言不見信也。如吾因何非用言之時。

而言則窮之道也哉。二三子。毋復俾吾久處乎困窮。則可也。在昔楊雄丁。漢代用文之時。生蜀郡。毓秀之地。博究群書。文冠天下。議論至理。出乎天。入乎淵。不詭聖人。度越諸子。而作太玄五千。文苞羅元氣。通達無倫。又以爲諸子其知升馳。詆訾聖人。輒爲恠詭之辭。以撓世事。雖云小辨。終破大道。故作法言。洞徹古今。有補於世也。以予望之。由泰山北斗。不可及也。且夫西漢之爲代。文物全盛之時也。成都之爲土。人才炳靈之處也。雄生于茲。得時而不失。處者也。然亦官爲郎。給侍黃門。校書天祿閣。劉棻從而學。奇字。新室召而爲大夫。寔非微



而不顯者也。然當初之人以爲子雲。祿位容貌不能動人。故輕其書。嗚呼甚矣。人之賤近貴遠也。如此言之難見信也久矣。甚矣哉。嗚呼子雲之人而有其祿位也者。猶病之。況予非子雲之人也。且髡廢母用之躬。生乎地脉不連之洲。而距用文全盛之代。千有餘載。失時而不得處。全無祿位容貌者乎。言不見信也宜矣。何流傳之有。或者曰。子以釋爲髡廢。母用而自棄耶。抑有激而云爾乎。昔者惠遠。惠皎。道安。道宣。圓澄。跋摩。一行之術。仲虛之文。昭昭然。若日月星辰附于天而照四國也。未嘗以釋爲髡而已。子曷爲棄也。中正子曰。是八師者。有其道有其德。非髡也。釋也。如予者何人。斯無其道其德而髡。非釋也。實髡廢母用之謂也。且也。八師者。時亦得矣。處亦得矣。不肖者敢望乎。或者曰。上下无常。非爲邪也。進德修業。欲及時也。何謂時乎。聖人欲居夷而曰。何

陋之有。胡爲擇乎處也。中正子曰。俞用言之時而言。是及時也。當潛之時而潛。是無邪也。君子而言必通。小人而言必窮。月也。小人矣。去女母。復言之。或者出數日而復來請問。用則行。舍則藏。可乎。曰。可。曰。今二三子。雖不能廣行。子之道於天下。然可以自用而行之。亦不可舍也。又曰。在則人。亡則書。今子在則見有二三子。酷愛子之言。用而行之。推而知之。子之亡。則不可必無如二三子者而已。於是中正子許之。中正子以釋內焉。以儒外焉。是以其爲書也。外篇在前。而內篇在後。蓋取自外歸內之義也。或曰。賤近貴遠。人之凡也。所以子雲之書輕乎昔而重乎今也歟。中正子粲然作色曰。女言過矣。吾敢望子雲者哉。吾敢望子雲者哉。子雲之人。猶未免覆瓿之嘲。吾豈无知之之人乎。勉強而塞二三子之責而已。或問諸子。中正子曰。子思誠明。孟



子仁義皆醇乎道者哉。問。苟卿何如。曰。苟也醇而或小漓。曰。楊子。曰。楊雄。殆庶醇乎。其文也緊。請問文中子。曰。王氏後夫子千載而生。然甚俏焉。其徒過之。宣夫子之化。愈遠愈大。後之生孰能跂焉。問。退之。曰。韓愈果敢小詭乎道。然文起於八代之衰。可尚。曰。子厚何如。曰。柳也淵。其文多騷。或問歐陽。曰。脩也宗韓也。蘇子兄弟。曰。軾也。龍。轍也。善文。或問莊老。中正子曰。二子爰清爰靜。莊文甚奇。其於教化不可。或曰。釋氏能文者誰。曰。潛子以降。吾不欲言。非無也。吾不欲言。

### 仁義篇

#### 外篇二

或問仁義。中正子曰。仁義而已矣。曰。母以尚焉乎。曰。何尚之有。中正子曰。墨翟之仁。而可以尚之。問。何尚。曰。義。楊朱之義。而可以尚之。問。何尚。曰。仁。嗶嗶之仁。可謂仁乎。小仁也哉。瑣瑣之義。可謂義乎。小義也哉。聖人之道大也。

仁義而已矣。何尚之。爲。惟仁義之道大矣哉。中正子曰。惟天之春秋也。猶人之仁義與。仲明問。曰。墨也春與。楊也秋與。聖人之道也。春而秋與。中正子曰。白也可以與語。仁義之道矣。或者疑之。中正子曰。春而不秋。不可成也。秋而不春。不可生也。或者出問之。仲明曰。何謂。仲明答曰。楊朱以離仁爲義。人而無仁。何以能生。墨翟以離義爲仁。人而無義。何以能成。無仁則非人也。無義則非人也。有仁而生。生而必亨。有義而成。成而必貞。譬如天有春夏秋冬而成。非耳。中正子曰。元者生乎仁。故曰。善之長也。亨者其禮哉。嘉之會也。利者成乎義。故曰。義之和也。貞者其信哉。事之幹也。中正子曰。春元夏亨。秋利。冬貞。天之行也。仁以生禮。以明義。以成信。以誠人之行也。仁也者。天生之性也。親也。孝乎親也。義也者。人倫之情也。宜也。尊也。忠乎君也。忠孝之移。以仁義相推也耳。



名異而實一也。仁義之離。楊墨之道也。邪之道也。偏之道也。楊也爲我。墨也無親。无親何以爲仁。爲我何以爲義。是故墨之仁。非仁也。楊之義。非義也。楊墨之道。不能推而移。所以仁義離之者也哉。臣弑君。子弑父。權與乎楊墨與。惟聖人者。能推而移之。是以仁義不離。正之道也。中之道也。中正子曰。仁義者。天人之道與。天之道親親。人之道尊尊。親親之仁。生乎信也。尊尊之義。成乎禮也。天人之道雖殊。推而移之一也。一之者可謂知也哉。仲明曰。由冬而春。由夏而秋。天之道也。由信而仁。由義而禮。人之道也。此之謂乎。中正子曰。斯而已矣。仲明曰。誠行仁義。則禮也。信也。孝也。忠也。在其中矣。曰。何惟四者而止。推而行之。萬善之道備矣。仲明曰。子言乎仁義禮信忠孝。明矣。詳矣。而未聞之言乎知。何也。曰。知之之謂知也。已仁義之道推而移之。可謂知之而已矣。或者曰。

孟子曰。何必曰利。而子謂元仁亨禮利義貞信。以利爲義。何其與孟子相反之爲。中正子曰。孟子惡乎惡利。惡夫梁惠王所以爲利之利而已。利者。義之和也。宜也。通也之利。孟子寧舍諸。敢問。惠王之利何如。曰。財用功澤之利。孟子不取爾。誠王侯卿大夫士庶人交征利。則國家之危不待終日。亦何利之有。孟子不取也宜矣。孟子曰。未有仁而遺其親者也。未有義而後其君者也。

義者。宜也。天下行宜不亦利乎。惟利之大義莫之甚。中正子曰。凡天下之事。靡不有弊。仁之弊也。無威。義之弊也。无慈。无威則教導廢之。无慈則化育夷之。教導之廢。何以治之。化育之夷。何以尼之。教而不治。義不之爲也。化而不尼。仁不之施也。教化之張。仁義之行也。教化之弛。仁義之弊也。或問。楊墨而論孰賢。曰。墨子也哉。墨堅之書取之。九流有由矣夫。



中正子卷之一終

凡一千九百六十六言

中正子方圓篇卷之二

外篇三

方也者定而不變。圓也者運而不停。惟不停。故其用无窮。惟不變。故其體有常。有常之體。仁者能止焉而不動。是以樂山也。山也者起乎地。惟地也。其爲形也方。其爲勢也坤矣。無窮之用。知者能動焉而不停。是以樂水也。水也者生乎天。惟天也。其爲象也圓。其爲行也健矣。仁者誠也。知者明也。誠者生乎天之性也已。明也者成乎人之學也已。是故學不欲止。性不欲動。樂山者以其生乎性也。樂水者以其成乎學也。其性苟動。則喜怒哀樂之情輒發矣。其學苟止。則情欲之發亦不能中節也。是故性靜則中也。學進則和也。故中庸曰。中也者天下之大本

也。和也者天下之達道也。以其天生。故曰大本也。以其人學。故曰達道也。中正子曰。中焉而方。仁之體也。和焉而圓。智之用也。不仁者之方。執而偏焉。不知者之圓。循而曲焉。執而偏。故偏強以至乎狼戾。循而曲。故流轉以至乎巧僞。惟中者之方。不偏而直矣。惟和者之圓。不曲而正矣。不偏而直矣。可以矩也。不曲而正矣。可以規也。中正子曰。方者上知之與。下愚也。圓者中人也。可以上焉。可以下焉。教使然也。莊周言。吉祥止止。以天爲自然。而槌提仁義之教。則无它。專執方而不知。乾乾不息之道也。楊雄取水含山而曰。惡割也。亦无它。專循圓而不知。直方大之理也。孟軻言。性善者好中焉者之方。而惡曲焉者之圓。而云爾。苟卿言。性惡者惡偏焉者之方。而好和焉者之圓。而云爾。然孟荀楊之三子。最有益於學者也。惟莊尤益。然可以爲窒欲之警也。或問。伯夷何人哉。曰。



方也。柳下惠曰：「圓也。其於教化之道也，孰優乎？」曰：「皆不可取也。非其君，則不事。非其人，則不使。與鄉人處，其冠不正，不忍同立。望望而去。是雖清直，不能大也。固不取爾。爾也爲爾。我也爲我。於我側，祖褐無禮，醜何及我。與其人處，由由然不忍去。是雖和適，不能化也。固不取爾。」中正子曰：「方圓其載言行之器與。行者不御乎方。鳥能得誠，言者不乘乎圓。鳥能得明，能誠以定，能明以省。堯舜禹湯文武聖人之方者乎？周公孔子聖人之圓者乎？方也，故有位而立。是以能行。圓也，故無位而轉。是以能言。聖人者，欲方諸躬，而圓諸人，或者未審。中正子曰：「於躬行之以誠，誠故定而立焉。與人則教之以明，明故省而轉焉。或曰：「有位者皆可謂方也乎？」曰：「可。桀紂幽厲亦可乎？」曰：「俞。俞則與堯舜母異乎？」曰：「堯舜也。上知之方也。桀紂幽厲，下愚之方也。方則一矣。知愚之異，何啻

天淵之比而已哉。或曰：「子言周公孔子圓者也。然則中人也已。」曰：「不然。其行於躬，則方也。然何以言圓？」曰：「其教於天下，則圓也。堯舜之方，乎天下。故曰：「方也。周公孔子之圓，亦以天下言之。向使周孔有位，則其行於天下，亦方也必矣。吁！其不有位，故其行不能方於天下。而其言能圓於天下。是以吾言：「聖人之圓者也。已。或問：「舜禹匹夫而有天下，必有其德也。如此。周公孔子，德不及之乎？」曰：「否。時也。上有薦之之人，是時也。周公孔子不得時也，不可謂德不及之也。」

## 經權論

## 外篇四

中正子適烏何之國，其君包桑氏爲迎，而問曰：「夫天下之動，非武不止。是以寡人自幼好武。國中之民亦好武。民生而七歲能舞劍，十歲者可出征。是寡人之於武，可言盡心焉耳矣。然國之盜賊未去，四邊甲兵未休，何如？」對曰：「大



王且知。夫經權之道乎。王曰。未也。願聞其說。對曰。經權之道。治國之大端也。經。常也。不可變者也。權者。非常也。不可長者也。經之道。不可秘吝也。示諸天下之民。可也。權也者。反經而合其道者也。反而不合。則非權也。經者。文德也。權者。武略也。武略之設。非聖人意。聖人不獲已而作焉。作而不止。非武畧之道也。作而止。則歸文德。是則權之功也。文德經常之道。誕敷天下。而武畧權謀之備。不行於國。則堯舜之治。可以坐致。吾嘗論之。大王請聽之。王曰。寡人之望也。凡人生天地之間。實與禽獸相異。无爪牙以供嗜好。無毛羽以禦寒暑。必假它物以養其生。於是聚而有求。求之不足。爭心將作。古之聖人。卓然而行。以仁愛禮讓之文德。衆心感之。化而附之。附而成群。謂之君。君以斯文德。普施天下。天下之人歸而往之。謂之王。王者專修文德。旺化諸人者也。是以爲常。

而不可變者。經之道也。王者之心苟怠而失常。則民心亦怠而不守常。繇是小則鞭扑之。刑行之。大則甲兵之。威征之。是則權謀之道也。是故經之道欲舉。權之道欲措。可舉之道。治世而施。可措之道。亂世而爲。夫堯舜之治。不能常有。所以權之道。不能措之。由是刑罰行焉。甲兵興焉。然而戡定禍亂。以合經常之道。故甲兵之具。以有威懲也。示諸天下。則不可也。左氏之語曰。示則翫。翫則無威。是也。今王不修文道。而翫兵於國中之民。民無以威懲之心。故盜賊不去。四邊不安。宜也。如是則不惟无經之道而已。兼失權之道也。權之道失之。而謂於武盡心焉耳矣。月也竊爲大王惜之。凡經常之道。欲普行。諸天下。不可秘也。權謀之事。不欲普示。諸天下。不可不秘。今則修文者寡。講武者衆。講武者達。修文者窮。卿大夫士庶人。農工賈客。皆爲武者。不奪不厭。而國危矣。假令有。



一家者。以仁義之經普教諸兒及臧獲。其兒若臧獲。或有悖者。委其長子可用者。叱之鞭之。而威懲之。則權謀之道也。若其諸兒及臧獲。咸手鞭撻。而叱則抗叱。鞭則抗鞭。何威懲之有。而自以爲吾家能武。則大亂之道也。大王以治家之喻。推而知之於國。且天下則可也。王大喜。厚幣遺之。中正子不受而去。

中正子卷之二終

中正子革解篇卷之三

離下兌上。革。序卦曰。井道不可不革。故受之以革。雜卦曰。革去故也。中正子曰。離火也。兌金也。火能克金。金曰從革。改更之。銷鑄之。可以爲器也。離之於時夏也。於日爲丙。丙者炳也。兌之於時秋也。於日爲庚。庚者更也。凡四時之運。春生。夏養。秋殺。冬靜。靜故能生。生則

養之。是則訟之道也。既生既養。而殺之。是革之道也。是故自離而兌者。革之象也。自乾之革。凡四十有九。是以象曰。治曆明時。治曆篇備矣。易曰。巳日乃孚。仲尼曰。革而信之。中正子曰。改革之道。不可疾行也。是故周公於初曰。鞶用黃牛之革。於次曰。巳日乃革之。人心未信之時。不可改也。人心已信之日。可以革之者也。凡秋之爲味也辛。爲晏日之繼。庚以辛。辛者新也。辛艱也。是以天下國家行。有制令之新者。則蚩蚩庸庸無知之民。不習熟。故以艱辛不便之患。以至偶語於朝廷。流言於天下。故兌爲口舌也。是故改革之道。不宜速疾。必迷。其事畢已之日。則彼無知之民。漸之熟之。而后信之。反爲便利。以自行之。故曰。巳日乃孚。元亨悔亡利貞。改革之道。天下之大利也。君人者及率衆者。不可不知乎。說卦曰。離者南方之卦。明也。聖人南面而聽天下。嚮明而治。又曰。兌者說也。說



言乎兌也。中正子曰：革之爲卦也。文明之德。在內而說言之。應在外宜乎。革而信之。故彖傳曰：文明以說。大亨以正。革而當其悔乃亡。中正子曰：鳴條之誓。牧野之戰。則湯武革命之時也。汝不聽誓言。朕戮汝及孥。而無或攸赦也。前徒倒戈。攻後以北。血流漂杵。而后殪。戎殷。書作一。天下定。無乃其始艱辛而終大亨者乎。且不見夫天地之革。肅殺之行。其氣栗冽矣。其風鬻發矣。嚴霜降。草木黃。當是時也。喘喘無知之類。唧唧啾啾。若怨若愬。是非造物者不仁而使然也耶。是義也。誠不然。果穀何以能熟。果穀不熟。民何以能育。民不得育。不仁之尤毒者也。故吾言是義也。孔子曰：天地革而四時成。湯武革命順乎天。應乎人。此之謂也。或問：象曰：澤中有火。革。何謂也。對曰：澤也者穢濁之謂也。火也者文明之稱也。以文明之才。除穢濁之惡。不亦革乎。桀紂之惡穢濁之澤與。湯武之才文明之

火與。中正子曰：人生不遇。周公孔子者天也夫。中正子。一夕瞑然而坐。自初更至後更。長噓一聲。又太息又噓一聲。良久曰：革之爲體。內不革而外可革也。以濁惡故可革。以文才則不可改也。故否。周公之辭於六爻有以也哉。火者能革。金者所革。故兌變之離。下之一爻靜。而中上二爻動。周公曰：初九鞏用黃牛之革。孔子翼之曰：不可以有爲也。中正子解之曰：黃牛之皮。至固之物也。鞏者。固固九四也。下之一爻靜是也。周公曰：六二。已日乃革之。征吉。无咎。孔子翼之曰：行有嘉也。中正子解之曰：革之道不宜疾速。故初則鞏固。次則革之下體之中征而變上體之中。譬如湯之征。桀武王之征。紂也。周公曰：九三。征凶貞厲。革言三就有孚。孔子翼之曰：革言三就。又何之矣。中正子解之曰：三者總率下體之位也。文明之才。不可變動。故曰：征凶。征者動也。然常變上六之任也。是以其躬



真正乎內。其志厲危乎外。其躬不行。而以言教變之。故曰。革言三就。三者言上體三位也。周公曰。九四。悔亡有孚。改命吉。孔子翼之曰。信。志也。中正子解之曰。穢濁之時。以剛才在下。而待文明來蒞。其志信之。其才不變。而其命變。命者召也。所以稟而爲令也。九四。舊奉穢濁之召命者也。今當革言三就之時。又稟文明之召命。故曰。發命辟如伊摯。舊奉夏之命。後稷湯命。又箕子。舊殷人也。然稟武王之召。是類也。周公曰。九五。大人虎變。未占有孚。孔子翼之曰。其文炳也。周公曰。上六。君子豹變。小人革面。征凶。居貞吉。孔子翼之曰。君子豹變。其文蔚也。小人革面。順以從君也。中正子解之曰。九五。上六之二爻。所謂中上二爻動者是也。以兌之三爻。而此二爻變。則成離也。是以周公於此二爻。特言變。而它不言也。虎豹之羗。以九六之質殊也。又九五以大人稱之。上六不

稱大人。而以君子。小人繫焉。有由也夫。治曆篇。

或問。革象。君子以治曆明時。何如。對曰。中正子。四十九也哉。

自乾至革。四十九卦。周天之數。三百六十

有五。而其畸四之一。二十八宿。周天度數。凡三百六十五度四分度之一也。是以

曆有四分焉。漢有四分曆。蓋以四分度之一也。而不成數。故每度四分之一也。而一莽

之策成矣。氣延朔趣。入推而參之一。十九年而

合。謂之一章。一晝一夜之頃。周天經過一度。直至三百六十五日四分日之一。周天之度終矣。

謂之一氣之數週矣。十二月之積日。三百五十四日九百四十分。日之三百四十八謂之朔。數促也。四分而

累其十九。則七十六。莽一節之策備矣。一章。十九年。而氣朔之延促相合。然尚有不全之日。至七十六年。則氣朔相合。且無不全之日也。且四十累九。

則三百六十。氣朔之數得中矣。是則四箕十九。

四十其九。皆可言四十九也哉。又曰。四十九

策。以四揲之。則十有二。其奇一。是則莽月之數

也。其奇閏也。是奇不全之日也。四年而全得一日。十九年而得四日四分日之三。七十六年而得三十九日。而

无奇。或者曰。四十九而治曆則審矣。敢問。古



之曆志。以十九年爲天地二終之數有諸。對

曰。有之。漢律曆志。天地之數五十有五。并終數一爲十九。注。天終數九也。地終數十也。是河圖數也。

然不可然而已。抑且陰陽相距之數也哉。請問

相距之數。曰。一晝一夜之謂周天。天之一周。陽

動陰靜。陽。日也。陰。月也。陽離陰而距其程十有二。而其

時十九之七。先儒皆云。周天三百六十五度四十分度之一。而日日行一度。月日行十三度十九分度之七。今予曰。日行十二度十九分度之七。而月不行。蓋取陽動

陰止之義也。但以天周。故月亦相附而周。不能自動行也。先儒以月行觀之。則其與周天相去十三度十九分度

之七。而日行一度耳。今予以月不行言之。則日與月相距而行十二度十九分度之七。而二十八宿亦與天相旋而與月

相距十三度十九分度之七。然則日與二十八宿相爭一度耳。予嘗細考之。蓋是周天行速。日行遲。二十八宿行不及日

一度。而月但附天而周。故似速於日也。予之說。雖異於先儒。然於數則均矣。但先儒十三度之說。无徵於曆法。

予曰。十二度十九分度之七。則合十二月十九年七閏之法。一者也。又陽動陰靜。日行月

不行之說。亦陰陽之宜也。所以十有二月而成期。十有九期而成章。章之閏七。

一章。十九年之閏有七閏。其十二

者十九之。而加之七則成二百三十有五。日月相去

十二度十九分度之七。其十二則全數也。其七則奇。而不全也。凡數有奇者。不能配陰也。故今通分其全數十二者。

而得二百二十八。加三之。自然以合三十九年一其七。則二百三十有五。章之月數。一年有三十

二月。以三十九累之。則二百二十八。月。亦合。老陽乾策

更加閏月七。則合二百三十五月也。而增之。天地二終之數者也。惟天之曆數也乎。

乾有三爻。老陽數九。以四揲故三十六。六爻皆有三十六。并之爲三百一十六。更加天終數九及地終數十。則二百三

十五。中正子曰。陽來陰魄。謂之魄。陽往陰胎。月見

謂之往之來之十二而時。十二度十九分度之七也。魄極而望。魄

極而朔。二極之數。月日數盡矣。二十有九而時

九百四十分之四百九十九。是一月之策。謂之

朔數。其二十九者。太史公所言大餘也。不盈六

十之謂也。甲子法。六十以除積日。其不盈謂大餘。見史記。四百九十九者

小餘也。不盈九百四十一之謂也。或人曰。久吾

於大史書及漢志。大餘小餘之言。未能莫疑。

今之遇也。天子之幸。敢請。子詳其說。以釋吾

疑。中正子曰。天一。地二。河圖之始數也。天五。地

六。則其中數也。天九。地十。終數也。二始。三統

之原也。天統。甲子。夏正朔。地統。甲子。殷正朔。人統。甲申。周正朔。是三統曆。則本河圖天一地二之數也。



二中之數。日辰也。天五。地六。則爲三。十日。十二辰也。日辰之會。六

十而復。

天五分。爲五行。甲乙木。丙丁火。戊己土庚辛金。壬癸水。是十日也。地六分。爲六律。子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。十二辰由。此立矣。日辰六十日終而復始。

二終。日母也。天九。地十。日法之母也。日月之相去。十九分之七。故以十九爲分母。以七爲分子。更以三十二日。通分內子。而得二百三十五。以曆法四分。累之。則爲九百四十一。是爲日法。

日月之會。二十有九畸。四

百九十九。日月之會謂三之朔。自朔至晦周而復始。其一月之數也。二十九日。九百四十分日之四百九十九。是一月之數也。

其二十九者日母之全也。畸者。日母之

零也。全者之積。日也。盈日辰之會。六十日也。除之其

不盈者。積日之不盈。六十者。大餘也。是以天地二中之數。

推二終之數。推而合者則除之。其畸而不合者

爲大餘也。氣數之畸。四分之一。三百六十五日。朔四分日之一也。

數之畸。十九分之七。日月朔。去三十二度十九分度之七。每日如。此相去。直至三十九日。九百四十分之四百九十九。相會朔也。

二畸之積以合。日母之數。七十二。通分內子。更以四累之。故合日母。

則是二終之數也。畸之不盈。日

母之法謂之小餘。一月二十九日。九百四十分之四百九十九。通分內子。而得三萬七千

七百五十九。爲一月之積日母數。以十二月。累之。爲三十三萬三千一百卅八。是爲一年之積日母數。以三日月法九百四十一。約之。則爲三百五十五。而其不滿日法者。四百三十八。是小餘也。其全日。三百五十五。以甲子法六十一。除之。不盈三十一者。五。是大餘也。中正子曰。大衍之策。其用四十九。則天之曆數也。乎。分而爲二。天地之象也。掛以象三。始中終也。天地二。始三統也。二。中日月辰也。二終日母也。揲之以四。四分之曆也。四分焉。而十有二月。其奇閏也。四十九策。以四約之。則十二。其奇不盈四者。一。是閏也。四年成一。日。十九年。四日三分也。是以革之爲叙四十九也。革者庚也。魯曆用庚子。子者始也。天地之革。則天之曆數也明矣。

中正子卷之三終

外篇終

叙仁義千九百六十六言。

方圓篇九百七十二言。

經權篇四百六十四言。

革解一千二百八十言。

治曆七百二十言。

外篇三卷六篇。計字五千七百六

言。烏何國。白氏。仲明。敘革子。皆寓



言也。姦而約反。

# 中正子性情篇卷之四

內篇一

東海

釋圓月撰

中正子居。姦華子侍。中正子曰。姦。女知性情之理乎。曰。未敢問。何如。曰。居吾語女。樂記曰。人生而靜。天之性也。感物而動。情之欲也。中庸曰。天命謂之性。又曰。喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。以予言之。所謂中則靜也。喜怒哀樂未發。則性之本也。天命稟之者也。性之靜。本乎天也。是性也。靈明冲虛。故曰。覺。喜怒哀樂之發。則情也。情也者。人心之欲也。是情也。蒙鬱闇冒。故曰。不覺。人之性情。猶天之四時也乎。姦華子曰。何謂也。曰。四時之行。終而復始。周於冬至。冬至之月。建子。冬者終也。子者始也。是月也。動息地中。商旅不行。后不

省方。則天之靜也。然春陽之來。草木之生。亦以天命之性也。既生者。必求長養之道。故夏之草木。蒙鬱闇冒者。天之欲也。欲之長。不可涯。故秋殺之氣。擊彼草木之蒙鬱闇冒者。發而中節之義也。然而冬之至也。靜焉。而復復其見。天地之心乎。是故曰。人生而靜。天之性也。姦華子曰。旨哉子之言乎。人之性情。則天之寒燠也。請問。性也。靜矣。何緣感物而動。中正子曰。靜者。性之體也。常也。感而動。則其用也。變也。耳目之官。引物而內諸心府。於是其性不能不感動也。是以善惡取舍之欲生矣。苦樂逆順之情發矣。惻隱之仁。羞惡之義。則情之善者也。寇讎之暴。驕佚之邪。則情之惡者也。嗔殺怨懟之音。情之苦也。寬胖綽裕之容。情之樂也。皆無不本於性。而發於情。情之發也。不和不能節。是亦天人之道也。以言乎人道。則和則能明。明則能斷。斷則能正。正。真人道之常也。以言乎天道。即春



和。夏明。秋斷。冬正。正中天道之極也。人守常則天之極。天之極靜而已。靜天之性。寒燠雷雨天之變也。靜人之性。喜怒哀樂。人之情。情者性之變也。和而節之則歸性。猶天道之復於冬至也。是故動極則靜。靜故能動。天人性情之道也。孔子曰。利貞者性情。言俾情能復其性也。利者秋之斷也。貞者冬之正也。正者極也。中也靜而已矣。天之道非貞正。則刀物之動不靖。人之道非貞正。則萬行之業不成。故俾情復於性者。靜而已。靜而極中。天地以此富有萬物。人道以此修證萬行。是孔子子思之言。乎性也。不與吾佛之教相睽也如此。孟軻氏以降。言性者差矣。或善焉或惡焉。或善惡混焉。或上焉中焉下焉。而三之皆以出乎性者言之耳。舍本取末也。性之本靜而已。善也惡也者。性之發於情而出者也。末也。混焉者兼二末而言之。亦是末也。東漢之前。佛法未行。諸中國。故儒者

之言性。或不能辨也宜矣。然其不稽之孔子子思之教。則失也。佛法既來。夙蘊靈知之士。咸歸吾也。當知孔氏之道。與佛相爲表裏。而性情之論。如合雙璧。然。然世之儒生。猶不欲同焉。則無它。以其欲異於釋氏故也。是非君子之道也。君子黨理。同人于宗。客之道也。韓子其人也。甚矣不黨理而好異也。如此孔子子思。猶不宗焉。而兼并善焉惡焉混焉之言。三之。而曰。上焉中焉下焉。不甚乎。上焉而善。下焉而惡。中焉而混。可善可惡者混也。皆非性之本也。情也已。性之本靜。靜之牀虛。虛故有靈。靈故有覺。覺故有知。知感於物。感則動。動則欲。欲不可量也。欲而得之則喜。喜則心平。心平則善也。欲而不得則怒。怒而无度則暴惡也。一喜一怒。可以善可以惡者情之混。韓子所言中焉者是也。但非性也。性也者非善非惡非混也。善者惡者善惡混者。皆情也。性之末也。性之本



靜而已。孟子以善爲性非也。荀子以惡爲性非也。楊子以善惡混爲性。亦非也。之三子者。不見正於佛教。故誤也。宜矣。然其不稽之孔子思之教。則失也。但韓子出乎佛教之后。當見正於佛教。當知孔子之道與佛相爲表裡者也。然區區別之。甚哉韓子舍本而取末與。孔子思之道。相遠也如此。甚矣哉。有客過中正子門者。難。中正子曰。潛子作非韓以降儒之欲害於佛者。自詘矣。況於今此海外鬼方無復宗韓如歐陽公者乎。假令有之。但用潛子之書。可以屈其人足矣。然今彼書尙無攸用。而人不欲觀之。又如子何。子猶如星爾日。如電爾舌。叨叨怛怛。力發於言。而又筆於書。何其徒爲。中正子曰。然。客之待予太過也。如予者豈敢望客之所待者乎。客曰。何謂也。對曰。如予者。么麼撲楸不足道者也。豈復有望以言若書能誦人者哉。庸人尙不可誦。而況如歐陽公

者乎。縱使今吾佛教不幸。而或復有若此人者。予不敢欲以言若書抵排其人也。然今所爲書者。以二三子未明性情之理。故筆而著之。偶引孔子子思之言。以合吾佛教者而論之也。繇是糾彼孟軻氏以降言性者之差異。以至韓愈氏原性之言。或未能無誤。故言及此耳。本不欲用此書行于時。以爲名譽之街也。客退。彘華子曰。子嘗言仁義。力排楊墨鄙心。或之以謂。孟子以后。楊黨之徒不作。今子何必區區其言爲。今見子對客之言。釋然不復或之。中正子曰。古之言性情者。於其理也一矣。固不欲異諸人。亦不欲黨也。但於理而已。彘華子曰。何理。對曰。節情復性而已。凡人之情欲。无窮於物。而至暴惡。故聖人欲使節其情欲。而復其天性而已。於是制禮設戒。以使人能養其欲。而不過度者也。故禮者養也。戒禁也。味能養乎口。而禁其嗜者也。香能養乎鼻。而禁其臭



者也。聲能養乎耳而禁其淫哇者也。色能養乎目而禁其冶容者也。牀楊臥具衣服能養乎身而禁其奢而不儉者也。仁義孝弟忠信能養乎心而禁其情而不節者也。

中正子卷之四終

中正子死生篇卷之五

內篇二

子潛子曰。死固因生。生固因情。情固因性。旨哉言乎。輔敎公之道也。姦華子問。惟性無因乎。曰。性因於靜。惟靜能覺。覺而能知。知在格物。物格而知。知而后感。感而后動。覺者性也。動者情也。惟物之格也。亦非無因素乎善者果乎善者。素乎惡者果乎惡者。素乎天人果乎天人。素乎鬼神果乎鬼神。乃至素乎禽獸草木果乎禽獸草木。无素不果。無乃業之報乎。業之因素乎陰界。而其報果乎陽世也必矣。之理

不可疑之。惟物之格也。以神不以形也。故不可度矣。姦華子曰。性以覺知。故感於物。其物之格。亦以神也。然則覺知之者與其神果二否。曰。否也。知故格物。物格故知。是物也。非有體之物。物也者事也。言其性以覺知。故有所嗜好之事也。其嗜好則汝業耳。以覺知。故來其事。事來。故覺知。然則非二也。是神也。无形於陰界者。業之因也。有形於陽世者。其果也。問。神既無形何以形於陽世乎。對曰。精氣之鍾。神則御之。御之以形。形其本所嗜好之物。業因業報之謂也。物類之生。其形万差。謂之分段。分段之生。生窮而死。死生之環無常也。無常者生死之凡也。超此者聖也。必以出離。分段生死之環者也。是故聖者性而已。覺而止。謂之眞常。反彼无常而言也。若覺不止則動。動而有知。知感於物。而赴於情。是无常之因也。無常故謂之輪廻。輪廻其生死之環也。姦華子問曰。性於陰



界。動則有知。知能格物。而受其形。然孰不擇乎善。稟乎美。而或蛇虎惡毒之質。自甘資之何也。對曰。汝何不以方今之心。自徵明之。而獨疑陰界之性情。以詰之。癡也哉。陰界之與陽世。相爲表裡。形與不形。雖殊。其性情則均矣。今汝嘗姑請坐。善惡之情。泯然不舉。則性也。覺也。儻不能覺。而止之。則動乎善惡之情。隨物逐事。或喜或怒。是汝自取諸業也。又誰咎矣。戒定惠篇

內篇三

誠乎內而正之之謂定。定證於靜。靜則有信。無信者何以定焉。形乎外而行之之謂戒。戒齊於禁。禁則有禮。無禮者何以戒焉。以此道教之。人々從而效之之謂惠。惠生於明。明生於知。無知者何以惠焉。是故不信。諸心庸詎行諸身。且說諸口耶。身不行之非律也。口不說之非教也。律也。教也。非心信之者不能爲也明矣。心信之者固由定而得矣。西域大聖人

誠乎內而取信諸心之尤者也。是以身而行之。事莫不律也。口而說之。言莫不教也。今之所謂禪之別。曰律。曰教。則非也。禪也者。由定而信。其心之稱也。信其心者。言覺其性而不迷之辭也。心既信之。則善惡取舍之情皆中節。然則不待禁而自律也。不待訓而自明也。教者効也。効而知之而已。不可也。行之則可也。行之而已。亦不可也。信之則可也。惟信何往不可。不信而言不可通也。不信而行不可久也。不通者不知變。不久者不守常。惟心信之者。知變而能通其言。守常而能久其行。知變守常。道大光也。寤禪於心。則信也。傳教於口。則言也。持律於身。則行也。未有无其心而有身者。無身而有其口者。亦未之有也。是以無禪則何能有律。無律則何能有教。佛也者。一之而已。三之則末流之漓也。信之者心也。行之者身也。言之者口也。心者身之主也。身者心之國也。



口者其宰也。言者傳心王之令也。无主之國必亡。既無主且亡國。則其宰何爲。宰也者臣也。主也者君也。蔑君之臣必喪。既蔑君且喪臣。則其國何爲。無禪之律。則無主之國也。蔑禪之教。則蔑君之臣也。惟禪則心也。律者身也。教者口也。苟蔑其心者。身口之喪亡。不終日而致也。佛之法則國家之鎮也。然而禪滅則其主危矣。亡律則國不治矣。無教則令无施矣。心未信禪者。謂吾身能行律。口能言教。則予固不信之。塞北之人不夢檣柂。越南之人不夢橐駝。心不緣之。其夢必無。是以其心不緣佛法者。必无行之身言之口之理也。但心緣之則禪也。心苟得之何事不爲。且夫世間之人。或治家。或治州國。若天下者。皆莫不以仁義之道也。仁義之道治世之大本也。是亦心能信之。而后身則行之。口則言之。然則其心未信乎。仁義之道。而謂身行仁義之道。口言仁義之道。

則妄矣。真如之理。出世之大法也。固是心能信之。而后身則行之。口則言之。然則其心未信乎。真如之理。而謂身行真如之理。口言真如之理。則固妄矣。仁義之道。行之之人。有禮之人也。言之之人。有知之人也。禮也。知也。信之之人。皆可能也。无信之人。皆不能也。真如之理。行之之人。有律之人也。言之之人。有教之人也。律也。教也。禪之之人。皆可能也。無禪之人。皆不能也。且也不見夫醉者及狂者乎。皆失心之人也。然其行也。言也。如何。醉矣。狂矣。無禮之人也。無知之人也。是故不得心之人。而言吾能律也。吾能教也。則予固爲妄而已。嗚呼。人之不思也久矣。以醉者狂者爲失心之人。則僉曰。固是也。然以不得心於禪者。爲醉者狂者。則不見固是也。以予觀之。醉者狂者。固是失心之人也。不得心於信者爾。以仁義之道言之。則不得心於信者。必是不得有禮



有知之人耳。以真如之理言之。則不得心於禪者。必是不得有律有教之人耳。治世出世之教雖異。其於心之得失則均矣。中正子曰。仁義之道。以誠爲真。苟不以誠。道不行也。真如之理。以定爲正。苟不以定。理不明也。又曰。禪者信也。律者禮也。教者知也。

中正子卷之五終

中正子問禪篇卷之六

內篇四

仲明問禪。中正子默。旣而告曰。存乎德行與。存乎其人與。不可狀也。不可言也。仲明曰。禪者信也。非子之言耶。曰。信則可矣。言則不可。不言而信。不狀而證。存乎其人也。存乎德行也。仲明曰。何信何證。曰。心也已。就无諸仲明問曰。誰無心者。對曰。天下莫不有之。直不信耳。苟不信有若無也。仲明曰。害伎貪吝。淫

僻邪侈之心。執而信之。則皆可乎。對曰。不可。害伎貪吝。淫僻邪侈。皆心而之情者也。情。僞也。何信之有。心苟信之。必無焉耳。問曰。仁義禮讓之心。信之可乎。對曰。仁義禮讓之心。亦是情而之善者也。皆非我所謂之心也。我所謂之心者。佛之無上妙心也。是心也。天下莫不有之。直不信耳。信之則可言禪也。夫。敢問。无上妙心。對曰。不可言也。不可狀也。言之狀之教也已。惟禪信而已。不可言狀也。中正子曰。能信心者。不自欺也。不自欺。則无妄。无妄。則歸性。歸性之道。知而言之者。教也。履而行之者。律也。信而證之者。禪也。言者以口。行者以身。證者以心。惟心之量大而能博。故言之之教。不可涯也。人之生也有涯。有涯之生。欲究無涯之教。不可得也。言教尙不可究之。何暇身行之。心證之哉。是故禪離言教。而捷徑之道也。雖然。有患學之者。不可不知也。心之量固不可涯。



故修之之人。或其所見也寡。所知也狹。則不能通達而盡證也。故各以其性所變。情所近者。爲禪以後。其徒其後離散。分宗支派。偏執已見。是我非人。更相排軋。不亦哀哉。或問中正子曰。吾聞之。禪家之流。升堂揮麈而有恁地。便是恰好。麈不要者。般什麼說話。無道理了。那裏得箇不理會。得却較些子等語。不識有諸。對曰。有之。問曰。既有之。子言禪者不可言也。則妄矣。對曰。既有之。故可以知禪者不可言也。固是何故。問曰。何故。吾禪家之流。以離文字爲宗。故本無言教。是故於其升堂揮麈之時。假設寓言。以表真覺離言之旨。欲使其徒之不能文者直解而易信也。是亦吾禪家之教耳。禪則信而證之。斯而已。固不可言也。且夫伊洛之學。張程之徒。夾註孔孟之書。而設或問辨難之辭。亦有恁地。便是恰好不要者。般什麼說話無道理了。那裏得箇不理會得却較

些子等語。然其注意在於槌提佛老之道也。此等語。非禪也。審也。禪者佛之心也。其量大而能博。無所不容。故得其心者。發而言之。何言不中。寓而表之而已。苟不得佛心者。縱使親口佛語。亦非禪也。特教焉耳。何況恁地却較些子等語。輒疏下俚者乎。非禪也。審矣。儻不本佛心。而固執而以若此等語爲禪者。伊洛家之流。何異之耶。可言禪乎。或者曰。今之升堂揮麈之人。咸得佛心者乎。對曰。萬物之中。惟人是靈。其最靈者聖也。佛者聖乎。聖者也。萬物之中。最無靈者土木也。然塑其土。刻其木。以佛象之。孰云不然。今之升堂揮麈之人。固是人耳。土木之於佛。最靈之與最無靈。其差太遠。人之於佛。其靈近矣。雖不得佛心者。比之土木。則得矣。目之爲禪者禮也。或者引而去。中正子語。彖華子曰。或者不極問而去。汝不病之耶。彖華子曰。桑也。不敏。願承教。中正子



曰。彼土木者無情。而人有情。其於佛也。無情者近。有情者遠之遠矣。彘華子曰。向使或者極問。則子何以對之。對曰。以經權之理也。以經常之理言之。則土木也。人也。佛也。皆非真也。以權化之理言之。則爾愛其羊。我愛其禮。禮不可廢也。中正子曰。佛性常宗。經也。人情不常。權也。佛欲示其性之本有。諸人者也。然不適其情。則無緣也。故反性之經。而以情之權導之歸性。由是偏圓半滿之教作焉。非佛本意也。權也。權教之設。貴乎起變。見機而爲。隨宜而施。施之爲之不失機宜。機宜失之。教道乃墮。音驪。佛之後。分而三之。惟稱禪氏者。以心證。故能知機宜之變。是以教道不墮。是則得乎其<sub>一</sub>。該乎其<sub>二</sub>者也。其他滯乎其<sub>一</sub>失乎其<sub>二</sub>。膠而不解。治而不革者也。中正子曰。偏圓半滿。佛之教道也。禪氏者得<sub>其</sub>心而不膠<sub>其</sub>言者也。對梁王以<sub>不</sub>識<sub>達</sub>摩師之道也。彼

梁王者膠乎佛之教。而不解乎達摩師之教。是不知<sub>機</sub>宜不能適變者也。以此推之。其餒死臺城。不亦宜乎。文中子曰。齋戒修而梁國亡。非釋迦之罪也。此言當矣。滯乎其<sub>一</sub>失乎其<sub>二</sub>者。雖曰教者。實教道墮之。不知<sub>機</sub>宜何教之爲。辟如前者偶獲禽于林中。後者觀而羨之。不具田獵之器。徒守其迹于林中。固無獲之理。癡也。稱教者固不足異之。異猶曰怪。稱禪者豈無是類。竄膠乎爾師若祖所言所示之迹。而不原<sub>諸</sub>佛不證<sub>諸</sub>心。是則禪其名而實其教者也。此邦之稱禪者皆是類。德山氏。臨濟氏。雲門氏。洞山氏。能禪之尤者也。不沿襲乎佛及達摩師之迹。而得<sub>其</sub>心而不異者也。棒焉而雨喝焉而雪。分以三句。列以五位。是教道之變不可涯者也。圓悟氏。大惠氏。應菴氏。亦能禪之尤者。不沿襲乎佛達摩師及德山氏。臨濟氏。雲門氏。洞山氏之迹。而得<sub>其</sub>心而不異者



也。其教道之變。亦不可涯者也。心者經也。教者權也。經常之理。故得而不異。權化之道。故不沿襲。而能適變者也。吾嘗論之。凡以不通其心。而膠其教迹。皆當諡之曰。教者也。已。是故不通佛心。而膠乎其教。可以稱曰佛之教者也。不通達摩師之心。而膠乎其教。亦可以稱曰達摩師之教者也。不通臨濟氏。洞山氏。逮大惠氏。應菴氏之心。而膠乎其教。亦可以稱曰某氏之教者也。自此大惠氏。應菴氏以降。紛紛不勝稱者。各有其教。或高或低。或險或夷。或文而華。或質而野。或曲而藏。或直而露。其氣不醇。其後繼之者。或過此海外。鬼方之洲。闔葺之徒。師焉而尙。宗焉而黨。膠焉而不能解。沿焉而不能革。各執所見。以爲吾師若祖之所言。所示之他非禪也。可憫者也。佛之教者。上古故上也。達摩師之教者。次也。臨濟氏。洞山氏之教者。又次之也。大惠氏。應菴氏之教者。下也。

此四累者。各以適變設教。移腔換調。而其原諸佛證諸心之致一也。今此邦之稱禪者。不原諸佛。不證諸心。但師尙之。但宗黨之。固可憫者也。且夫佛之教者。四累之上。是亦非禪者也。尙可憫也。大惠氏。應菴氏之教者。四累之下。其後不勝稱者。下之下也。此邦之稱禪者。師焉而尙。宗焉而黨。膠焉而不能解。沿焉而不能革。下之下者。自甘執之。不可憫之尤者乎。向使臨濟氏。德山氏。一來此邦。而彼闔葺之徒。親見所示若所言之教。師焉祖焉。則見不手捧。不口喝者。必非之以爲禪也。於此若佛及達摩師親過此邦。亦不見容之。何也。不手捧也。不口喝也。或使靈雲氏。香嚴氏。一來此邦。而彼闔葺之徒。親見所示。若所言之教。師焉祖焉。則見不目挑。不耳竹者。必非之以爲非禪也。於此臨濟氏。德山氏。親過此邦。亦不見容之何也。不目挑也。不耳竹也。以



此推之。方今縱如大惠氏。應菴氏者。親過此邦。宜不見容之何也。異彼闖吾之徒所尙所黨之教也。嗚呼天乎。去聖時遙。人物蕭寥。人之不原諸佛。不證諸心。師則尙之。宗則黨之。不亦苦哉。故予嗚呼而告諸天而云。  
中正子卷之六終

右內篇三卷共四篇

性情篇一千七百五十七言

死生篇五百九十二言

戒定惠篇一千一百三十四言

問禪篇二千二百三十一言

四篇共五千二百一十四字。

讀中正子

有生幾何同一氣。有頑歸兮有才藝。中正子持思无邪。吐語要作金擲地。聲欬噓吸內外篇。上下出入天與淵。荒涼海國渺煙草。姦華開此扶桑顛。

建武乙亥二月十七日書于淨智方丈。四明竺仙梵僊

右中正子得古寫一本接合



## 群書類從卷第四百九十九

## 雜部六十四

## 常陸國風土記

常陸國司解。申古老相傳舊聞事。

問國郡舊事。古老答曰。古者自相摸國足柄岳坂以東諸縣。惣稱我姬國。是當時不言常陸。唯稱新治。筑波。茨城。那賀。久慈。多珂國。各遣造別令檢校。其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世。遣高向臣。中臣幡織田連等。惣領自坂已東之國。于時我姬之道分爲八國。常陸國居其一矣。所以然號者。往來道路不隔江海之津濟。郡鄉境界。相續山河之峯谷。取近通之義。以爲名稱焉。或曰。倭武天皇巡狩東夷之國。幸過新治之縣。所遣國造毘那良珠命。新

令掘井。流泉淨澄。尤有好愛。時停乘輿。翫水洗手。御衣之袖垂泉而沾。便依漬袖之義。以爲此國之名。風俗諺云。筑波岳黑雲挂衣袖。漬國是矣。

夫常陸國者。界是廣大。地亦緬邈。土壤沃墳。原野肥衍。墾發之處。山海之利。人々自得。家々足饒。設有身勞耕耘力竭紡蠶者。立即可取富豐。自然應免貧窮。況復求鹽魚味。左山右海。植桑種麻。後野前原。所謂水陸之府藏。物產之膏腴。古人云。常世之國。蓋疑此地。但以所有水田上小中多。年遇霖雨。卽聞苗子不登之難。歲逢亢陽。唯見穀實豐稔之歡。歟。

不略之。



新治郡。

東郡賀都塲大山。南白壁郡。西毛野河。北下野常陸二國塲之界。即波太岡。

古老曰。昔美麻貴天皇馭宇之世。爲平討東夷

之荒賊。

俗云曰阿良夫。流爾斯母乃。

遣新治國造祖名毘奈

良珠命。此人罷到。即穿新井。

今存新治里。

其水淨

流。仍以治井因着郡號。自爾至今。其名不

改。

風俗諺云。曰。自遠新治之國。以下略之。

自郡以東五十里在空間村。越通道路稱葦穗

山。古老曰。古有山賊名稱油置賣命。今社中

在石屋。

俗歌曰。許智多難波。畢。婆頭勢夜麻能。伊波歸爾母。爲許母郎牟。

伊波歸爾母。爲許母郎牟。伊波歸爾母。爲許母郎牟。

古非叙和

已下略之。

郡西十里有騰波江。

長二千九百步。廣一千五百步。

已下略之。

白壁郡。

東筑波郡。西毛野河。西北並新治郡。

筑波郡。

東美城郡。南河內郡。西毛野河。北筑波岳。

古老曰。筑波之縣。古謂紀國。美万貴天皇之世。

遣采女臣友屬筑簞命於紀國之國造。時筑簞命

曰。

云。欲令身名着國者。着國後代流傳。即改本

號。更稱筑波者。

風俗說云。曰。握飯筑波之國。以下略之。

古老曰。昔祖神尊巡行諸神之處。到駿河國福

慈岳。卒遇日暮。請欲寓宿。此時福慈神答曰。新

粟初嘗。家內諱忌。今日之間。冀許不堪。於是

祖神尊恨泣。曰。即汝親何不欲宿。汝所居

山。生涯之極。冬夏雪霜。冷寒重襲。人民不登飲

食。勿奠者。更登筑波岳。亦請容止。此時筑波神

答曰。今夜雖粟嘗。不敢不奉尊旨矣。

飲食敬拜祇承。於是祖神尊歡然語曰。愛乎我

胤。巍哉神宮。天地並齊。日月共同。人民集賀

飲食富豐。代々無絕。日々彌榮。千秋萬歲。遊樂

不窮者。是以福慈岳常雪不得登臨。其筑波岳

往集歌舞飲喫。至于今不絕也。

夫筑波岳高秀于雲。最頂西峰崢嶸。謂之雄神。

不令登臨。但東峰四方盤石。昇降決屹。其側流

泉。冬夏不絕。自坂已東諸國男女。春花開時秋



葉黃節。相携駢闐。飲食齋資。騎步登臨。遊樂栖

遲。其唱曰。都久波尼爾。阿波等。〔无急符〕卒等伊比志。古波。多賀已等岐波。加彌尼阿須波氣卒也。都

久波尼爾。伊保利尼〔五〕。都麻奈志爾。和我尼牟欲呂波。波夜母阿氣奴賀母也。詠歌甚多。不

勝載車。俗諺云。〔日〕筑波峰之會。不得娉財者。兒

女不爲矣。

〔自河內郡以下廿字以一本補之〕河內郡。東筑波郡。南毛野河。西

信太郡。東信太流海。南榎浦流海。

〔自古名曰以下至日高見國也六十三字以一本補之〕古老曰。難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世癸丑

年。小山上物部河內。大乙上物部會津等。請摠

領高向大夫。分筑波。茨城郡七百戶。置信太

郡。此地本日高見國也。

郡北十里碓井。古老曰。大足日子天皇幸浮嶋之

帳宮。無水供御。卽遣卜者訪占所穿。〔所々穿之〕今存雄

栗之村。從此以西高來里。古老曰。天地權輿。草

木言語之時。自天降來神名稱。普都大神。巡行

葦原中津之國。和平山河荒梗之類。大神化道

已畢。心存歸天。卽時隨身器仗。〔俗曰伊門乃〕甲戈

楯劍。及所執玉珪悉皆脫屣。留置玆地。卽乘白

雲還昇蒼天。〔以下略之。〕

風俗諺云。葦原鹿。其味苦爛。喫異山穴矣。〔常陸下總也〕

國大獵。無可絕盡也。其里西飯名社。此卽筑波

岳所有。飯名神之別屬也。榎浦之津。便置驛家。

東海大道。常陸路頭。所以傳驛使等初將臨國。

先洗手。東面拜香嶋之大神。然後得入也。以下略之。

古老曰。倭武天皇巡幸海邊。行至乘濱。于時濱

浦之上多乾海苔。〔俗云乃理〕由是名。能理波麻之村。

以下略之。

乘濱里東有浮嶋村。〔長二千步。廣四百步。〕四面絕海。山野交

錯。戶一十五烟。里七八町餘。所居百姓。火塩爲

業。而在九社。言行謹諱。〔以下略之。〕

茨城郡。〔東香嶋郡。南佐禮流海。西筑波山。北那珂郡。〕

古老曰。昔在國巢。〔クニス俗語。都知久母。又〕山之佐伯。野



之佐伯。普置掘土窟。常居穴。有人來。則入窟而竄之。其人去。更出。郊以遊之。狼性梟情。悅

窺掠盜。無被招慰。彌阻風俗。此時大臣族黑坂

命伺候出遊之時。茨藪（以）施穴內。卽縱騎兵。急

令逐迫。佐伯等如常走歸土窟。盡繫茨藪街

害疾死。故取茨藪以着縣名。所謂茨城。城郡。今存。

家所置。卽茨城郡內。風俗。或曰。山之佐伯。野之佐伯。

自爲賊長。引率徒衆。橫行國中。大爲劫致。時

黑坂命規滅此賊。以茨城造。所以地名便謂茨

城焉。茨城國造初祖。祖天津。多祁許呂命。仕息長。帶比賣。天皇之朝。當至三品。太天皇之誕時。多祁許呂命有二十

八人。中男筑波使主。茨城郡湯坐連等之初祖。祖世也。從郡西南近有河。謂信筑

之川。源出自筑波之山。從西流東。經屋郡中

入高濱之海。以下略之。

夫此地者。芳菲嘉辰。搖落涼候。命駕而向。乘舟

以游。春則浦花千彩。秋是岸葉百色。聞歌鶯於

野頭。覽舞鶴於渚。（下）社。漁娘。逐濱州。以幅

湊。商豎農夫。棹舳舳而往來。況乎三夏熱潮。九

陽。夕。嘯友率僕。竝坐濱曲。盼望海中。濤氣

稍扇。避暑者社。鬱陶之煩。岡陰徐傾。追涼者

軫。歡然之意。詠歌云。（下）多賀波麻爾。支與爾留奈爾。意

爾志與良波。又云。多賀波麻爾。志多賀是佐夜久。伊

毛呼。比。門麻止伊波波夜。志古止賣志門。伊郡

東十里桑原岳。昔倭武天皇停留岳上。進奉御

膳。時令水部新堀清井。出泉淨香。飲喫尤好。勅

云。能淳水哉。（下）俗云。與久多麻禮流。爾津可奈。由是里名今謂田

餘。以下略之。

行方郡。東南竝流海。北茨城郡。

古老曰。難波長柄豐前大宮。馭宇天皇之世癸丑

年。茨城國造小乙下壬生連麻呂。那珂國造大建

壬生直夫子等。請惣領高向大夫。中臣幡。織田

大夫等。割茨城地八里。合七百餘戶。別置郡

家。所以稱行方郡者。倭武天皇巡狩天下。征

平海。當是經過此國。卽頓蒞槻野之清泉。

臨水洗手。以玉落井。今存行方里之中。謂玉



清井。更廻車駕。幸現原之丘。供奉御膳。于時  
 天皇四望。顧待從曰。停輿徘徊。舉目騁望。山  
 阿海曲。參差委蛇。峯頭浮雲。谿腹擁霧。物色  
 可憐。鄉體甚愛。宜可此地。名稱行細國者。後世  
 追跡猶號行方。風俗云。曰立雨。其岡高敞。名。  
 現原。降自此岡。幸大益河。乘（船名）艘上。時折棹  
 尾。因其河名稱無梶河。此則茨城行方二郡之  
 界河。鮒之類不可悉記。自無梶河達于部陸。  
 有鴨飛度。天皇御射。鴨迅應弦而墮。其地謂  
 之鴨野。土壤墤塉。草木不生。野北櫟柴。鷄頭樹。  
 □之木。往々森々。自成山林。卽有耕池。此高  
 大夫之時所築池。北有香取神子之社。社側山  
 野。土壤腴衍。草木密生。郡西津濟。所謂行方之  
 海。生海松及燒鹽之藻。凡在海雜魚不可勝  
 載。但如鯨鯢。未曾見聞。郡東國社。此號縣祇。  
 中寒泉。謂之大井。緣郡男女。會集汲飲。郡家南  
 門有一大槻。其北枝自垂觸地。還聳空中。其地

昔有水之澤。今遇霖雨。廳庭濕潦。郡側居邑。橘  
 樹生之。自郡西北提賀里。古有佐伯名手鹿。  
 爲其人居。追着里。其里北在香嶋神子之社。社  
 周山野地沃。艸木椎栗竹茅之類多生。從此以  
 北曾尼村。古有佐伯。名曰疏彌毗古。取名着  
 村。今置驛家。此謂曾尼之驛。古老曰。石村玉  
 穗宮大八洲所馭天皇之世。有人箭括麻多知。  
 點自郡西谷之葦原。墾闢新治田。此時夜刀神  
 相群引率。悉盡到來。左右防障。勿令耕佃。俗云。謂她爲夜刀神。其形她身頭角。角華。紀。兎。難時有見人者。破滅。子孫不繼。凡此郡側郊原甚多所住之。於是麻多智大起怒情。着被甲鎧之。自身執仗打致驅逐。乃至山口。標挽置堦掘。告夜刀神云。自此以上聽爲神地。自此以下須作人田。自今以後吾爲神祝。永代敬祭。冀勿祟勿恨。設社初祭者。卽還發耕田一十町餘。麻多智子孫相承致祭。至今不絕。其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世。壬生連麻呂初占其谷。



令築池堤。時夜刀神昇集池邊之椎樹。經時不去。於是麻呂舉聲大言。今修此池。要孟活民。何神誰祗不從風化。即令役民云。目見雜物魚虫之類。無所憚懼。隨盡打斂言了。應時神蚺避隱。所謂其池。今號椎井也。池面椎株。清泉所出。取井名池。即向香嶋陸之驛道也。郡南七里男高里。古有佐伯小高。爲其居處。因名。國宰當麻大夫時所築池。今存路東。自池西山。猪猿大住。艸木多密。南有鯨岡。上古之時。海鯨匍匐而來所臥。即有栗家池。爲其栗大。以爲池名。北有香取神子之社也。麻生里。古昔麻生于渚沐之涯。圍如大竹。長餘一丈。周里有山。椎栗槻櫟生。猪猿栖住。其野出筋馬。飛鳥淨御原大宮臨軒天皇世。同郡大生里。建部袁許呂命得此野馬。獻於朝廷。所謂行方之馬。或云茨城之里馬非也。郡南二十里香澄里。古傳曰。大足日子天皇登坐。下總國印波鳥見丘。留連遙

望。顧東而勅侍臣曰。海即青波浩行。陸是丹霞空朦。國有其中。朕目所見者。時人由是謂之霞鄉。東山有社。板槻椿椎竹箭麥門冬。往々多。此里以西海中北洲。謂新治洲。所以然稱者。立於洲上。北面遙望。新治國小筑波之岳所見。因名也。從此往南十里板來村。近臨海濱。安置驛家。此謂板來之驛。其西板木成林。飛鳥淨見原天皇之世。遣麻績王之居處。其海燒鹽藻海松白貝辛螺蛤多生。古老曰。斯貴滿垣宮大八洲所馭天皇之世。爲平東垂之荒賊。遣建借間命。即此邪賀國。引率軍士行略。凶猾頓宿安婆之嶋。遙望海東之浦。時烟所見。爰疑有人。建借間命仰天誓曰。若有天人之烟者。來覆我上。若有荒賊之烟者。去靡海中。時烟射海而流之。爰自知有凶賊。即命從衆。稗食而渡。於是有國栖。名曰夜尺斯夜筑斯。二人自爲首帥。掘穴造堡。常所居住。覘伺官軍。伏衛拒抗。建



借間命縱兵驅追。賊盡遁還。閉堡固禁。俄而建

借間命大起權議。按閱敢死之士。伏隱山阿。

造備滅賊之器。嚴飭海濱。連舟編楫。飛雲蓋

張。虹旌。天之烏琴。天之烏笛。隨波逐潮。烏杵

唱曲。七日七夜。遊樂歌舞。于時賊黨聞盛音樂。

舉房男女。悉盡出來。傾濱歡笑。建借間命令騎

士問堡。自後襲擊。盡囚種屬。一時焚滅。此時

痛殺所言。今謂伊多久之鄉。臨斬所言。今謂

布都奈之村。安殺所言。今謂安伐之里。吉殺所

言。今謂吉前之邑。板來南海有洲。可三四里

許。春時香嶋行方二郡男女盡來。拾津白貝雜

味之貝物矣。自郡東西十五里當麻鄉。古老曰。

倭武天皇巡行過于此鄉。有佐伯。名曰鳥日

子。緣其逆命。隨便略致。即幸屋形野之帳宮。

車駕所經之道狹地深淺。惡路之義。謂之當麻。

俗云曰多支支斯。野之土塙。然生紫艸。香嶋香取二神

子之社。其周山野。標作栗柴。往々成林。猪猴狼

多住。從此以南藝都里。古有國栖名曰寸津毗

古寸津毗賣二人。其寸津毗古當。天皇之幸。違

命背化。甚无肅敬。爰抽御劔。登時斬滅。於

是寸津毘賣懼悚心愁。表舉白幡。迎道奉拜。天

皇矜降恩旨。放免其房。更廻乘輿幸小坂野

之頓宮。寸津毘賣引率姊妹。信竭心力。不避

風雨。朝夕供奉。天皇歎其懇懃惠慈。所以此野

謂宇流波斯之小野。其名田里。息長足日。皇后

之時。人此地。名古都比古。三度遣於韓國。

重其功勞。賜田。因名。又有波耶武之野。倭武

天皇停宿此野。修理弓弭。因名也。野北海邊

在香嶋神子之社。土墾標作楡。一二所生。從

此以南相鹿大生里。古老曰。倭武天皇坐相鹿

丘前宮。此時膳炊屋舍構立浦濱。編辦作橋通。

御在所。取大炊之義名。大生之村。又倭武天皇

之后大橘比賣命自倭降來。參遇此地。故謂安

布賀之邑。行方郡分不界之。



香嶋郡。

東大海。南下總當陸堺。安是湖。西流海。北那賀香嶋堺。阿多可奈湖。

古老曰。難波長柄豐前大朝。宇天皇之世。己酉

年。大乙上中臣<sup>（錄）</sup>子。大乙下中臣部菟子等。請惣

領高向大夫。割下總國海上國造部內。輕野以

南一里。那賀國造部內。寒田以北五里。別置神

郡。其處所有。天之大神社。坂戶社。沼尾社。合

三處惣稱香嶋天之大神。因名郡焉。風俗說云。自

國。清濁得糺。天地草昧已前。諸神天神<sup>（謂）</sup>賀味留<sup>（賀）</sup>。

會集八百万神於天之原。時諸祖神

告云。今我御孫命。光宅豐葦原水穗之國。自高

天原降來大神。名稱香嶋天之大神。天則號曰

香嶋之宮。地則名豐香嶋之宮。俗云曰。豐葦原水

留爾。荒振神等。又石根本立草乃片葉辭語之。畫者狹蠅音聲。

夜者火光明國。此乎事向平定。大神御<sup>（尊）</sup>上天一降供奉<sup>（之）</sup>。

其後至初國所知美麻貴天皇之世。奉幣大刀

十口。鉾二枚。鐵弓二張。鐵箭二具。許呂四口。枚

鐵一連。練鐵一連。馬一疋。鞍一具。八咫鏡二

面。五色繩一連。

俗曰。美麻貴天皇之世。大坂山乃頂爾。白細乃大御服坐而。白梓御杖取坐。識

賜命者。我前乎治奉者。汝開勝。省<sup>（省）</sup>食<sup>（食）</sup>。大國小國

莫依給等議賜岐。于時追集八十之伴緒。舉此事一而訪問。

於是大中臣神聞勝命答曰。大八嶋國。汝所知食國止事向賜

之。香嶋國坐天津天御神之舉。敬戒事者。天皇聞<sup>（聞）</sup>諸。即恐驚

奉<sup>（納）</sup>前件幣。神戶六十五烟。本八戶。難波天皇之世。加

朝加<sup>（奉）</sup>九月。合六十七戶。庚寅年<sup>（庚寅）</sup>。奉五十戶。飛鳥淨見原大

編戶減三二戶。令<sup>（定）</sup>六十五戶。淡海大津朝。初遣使

人造神之宮。自爾已來修理不絕。年別七月

造舟而奉納津宮。古老曰。倭武天皇之世。天之

大神宣。中臣臣狹山命。今社御舟者。臣狹山命

答曰。謹承大命。無敢所辭。天之大神味爽後

宣。汝舟者置於海中。舟主仍見在岡上。又宣。汝

舟者置於岡上也。舟主因求。更在海中。如此

之事。已非二三。爰則懼惶。新造舟三隻。各長

二丈餘。初獻之。又年別四月十日。設祭灌酒。

卜氏種屬男女集會。積日累夜。樂飲歌舞。其唱

云。安良佐賀乃。賀味能彌佐氣畢。多義止。伊比

祁婆賀母與。和我惠比爾祁牟。神社周匝。卜氏



居所。地體高敞。東西臨海。峰谷犬牙。邑里交錯。山木野艸。自屏內庭之藩籬。潤流峴泉。□涌朝夕之汲流。嶺頭構舍。松竹衛於垣外。谿腰掘井。薜蘿蔭於壁上。春經其村者。百艸□花。秋過其路者。千樹錦葉。可謂神仙之幽居之境。□異化誕之地。佳麗之豐不可悉記。其社南郡家北。沼尾池。古老曰。神世自天流來水沼。所生蓮根。味氣太異。甘絕他所。有病者食此沼蓮。早差驗之。鮎鯉多住。前郡所置多蒔橘。其實味之。郡東二三里高松濱。大海之濱邊。流着砂貝。積成高丘。松林自生。椎柴交雜。既如山野。東西松下出泉。可八九步。清淳太好。慶雲元年。國司姪女朝臣率鍛佐備大麻呂等。探若松濱之鐵以造劔之。自此以南至輕野里。若松濱之間。可卅餘里。此皆松山。伏苓神母。年掘之。其若松浦。卽常陸下總二國之堺。安是湖之所。有沙鐵造劔大利。然爲香嶋之神山。不得輒

入代松穿鐵之。郡南廿里濱里。以東松山之中。一大沼。謂寒田。可四五里。鯉鮎住之。萬輕野二里。所有田少。潤之。輕野以東大海濱邊。流着大船。長一十五丈。闊一丈餘。朽摧埋砂。今猶遺之。謂淡海之世。擬遺寬國。令陸奧國石城船造作。作大船。至于此。着岸。卽破之。以南童子女松原。古有年少僮子。俗云曰。加味乃乎止男。古。加味乃乎止賣。稱那賀寒田之郎子。女號海上安是之孃子。竝形容端正。光華鄉里。相聞名聲。同存望念。自愛心滅。經月累日。耀歌之會。俗云曰。宇大我岐。又云曰。加我毘也。邂逅相遇。于時郎子歌曰。伊夜是留乃。阿是乃古麻都爾。由布悉豆々。和乎布利爾。由母。阿是孃子報歌曰。宇志乎爾波。多々牟止伊閉止。古志麻波母。奈西乃古何。夜蘇志麻加久理。和乎爾佐婆志理之。便欲相語。恐人知之。避自遊塲蔭松下。携手低膝。陳懷吐憤。既釋。故戀之積疹。還起新歡之頻咲。于時玉露抄候。金風□節。皎々桂月照處。唳鶴之西洲。颯々松颺吟處。度雁□東帖。山寂寞兮巖泉舊。夜蕭條兮烟霜新。近



山自覽黃葉散林之色。遙海唯聽着波激磧之聲。玆宵于玆樂。莫之樂。偏沈語之甘味。頓忘夜之將開。俄而鷄鳴狗吠。天曉日明。爰僮子等不知所爲。遂愧人見。化成松樹。郎子謂奈溪松孃子稱古津松。自古着名。至今不改。郡北三十里白鳥里古老曰。伊久米天皇之世。有白鳥。自天飛來。化爲僮女。夕上朝下。摘石造池。爲其築堤。徒積日月。築□壞不得作成。僮女等志滿止利乃。芳我那了。我那々。我那々。斯呂等。牽止母。安良布麻目右疑。波古歌。恐有脫。斯呂唱。昇天。不復降來。由此其所號白鳥鄉。以下略之。

以南所有平原謂角折濱。謂古有大蛇。欲通東海。掘濱作穴。蛇角折落。因名。或曰。倭武天皇停宿此濱。奉羞御膳。時都無水。卽執鹿角掘地。爲其折。所以名之。以下略之。

那賀郡。東大海。南香嶋茨城郡。西新治縣。下野國堺大山。北久慈郡。

平津驛家。西一二里有岡。名曰大櫛。上古有

人。牀極長大。身居丘壟之上。手盤其所食貝積聚成岡。時人不朽之義。今謂大櫛之岡。其踐跡。長卅餘步。廣廿餘步。尿穴趾可廿餘步許。以下畧之。

茨城里。自此以北高丘。名曰輔時臥之山。古老曰。有兄妹二人。兄名努賀毗古。妹名努賀毗咩。時妹在室。有人不知姓名。常就求婚。夜來晝去。遂成夫婦。一夕懷妊。至可產月。終生小蛇。明若無言。闇與母語。於是母伯驚奇。心挾神子。卽盛淨杯。設壇安置。一夜之間已滿。坏中更易釜而置之。亦滿釜內。如此三四。不敢用器。母告子云。量汝器宇。自知神子。我屬之勢。不可養長。宜從父所在。不合有此者。時子哀泣拭而答云。謹承母無敢所辭。然一身獨去。無人共去。望請矜副一小子。母云。我家所有。母與伯父。是所汝明所知。當無無相可從。爰子含恨而事不吐之。臨決別時。不勝怒



怨。震殺伯父。昇天。時母驚動。取盆投觸子。

不得昇。因留此峰。所盛盆甕。今存片岡之村。

其子孫立社致祭。相續不絕。以下畧之。

自郡東北。挾粟河而置驛家。本近粟河。謂河內驛家。今隨本名之。

當其以南。泉出坂中。多流尤清。謂之曝井。緣

泉所居。村落婦女。夏月會集。浣布曝乾。以下

畧之。

久慈郡。東大海。南西那珂郡。北多珂郡。陸奥國堺岳。

古老曰。自郡以南。近有小丘。體似鯨鯢。倭武

天皇因名久慈。以下畧之。

至淡海大津大朝光宅天皇之世。遣〔倭〕檢藤原內

大臣之封戶。輕直里麻呂造堤成池。其池以北

謂谷會山。所有岸壁。形如磐石。色黃。穿腕欄

猴集來。常宿喫瞰。自郡西北六里河內里。本名

古々之邑。俗說謂猿聲。爲古々。東山石鏡。昔在魍魎。〔卒〕率

集翫。見鏡。則自去。俗云。百疾鬼。面鏡自滅。所有土色如青

紺。用畫麗之。俗云。阿乎爾。或云。加支門爾。時隨朝命。取而進

納。所謂久慈河之濫觴。出自猿聲。以下畧之。

郡西里靜織里。上古之時。織綾之機未〔未〕在。知

人。于時此村初織。因名。北有小水。丹石交錯。

色似〔瑠〕瑠碧。火鑽尤好。以號玉川。郡〔東〕里小田

里。多爲墾田。因以名之。所有清河。源發北山。

近經郡家南。會久慈之河。多取年魚。大如腕

之。其河潭謂之石門。慈樹成林。上即幕歷。淨泉

作淵。下是潺湲。青葉自飄。蔭景之蓋。白砂亦

鋪翫。波之席。夏月熱日。遠里近鄉。避暑追涼。

促膝携手。唱筑波之雅曲。飲久慈之味酒。雖

是人間之遊。頓忘塵中之煩。其里大伴村有涯。

土色黃也。群鳥飛來。啄咀所食。郡東七里太田

鄉。長幡部之社。古老曰。珠賣美万命自天降時。

爲織御服。從而降之神名綺日安命。本自筑紫

國日向二折之峰。至三野國引津根之丘。後及

美麻貴天皇之世。長幡部遠祖多豆命避。自三

野遷于久慈。造立機殿。初織之。其所織服自



成衣裳。更無裁縫。謂之內幡。或曰。當織純時。輒爲人見。南屋扉闔內而織。因名烏織。兵及不得裁斷。今每年別爲御調。獻納之。自此以薩都里。古有國栖。名曰土雲。爰免上命發兵。誅滅。時能令殺。福哉所言。因名佐都。北山所有白土。可塗畫之。東大山謂加毗禮之高峰。卽在天神。名稱立速日男命。一名速經和氣命。本自天降。卽坐松澤松樹八俣之上。神祟甚嚴。有人向行大小便之時。令示災致疾苦者。近側居人。每甚辛苦。具狀請朝。遣片岡大連敬祭。祈曰。今所坐此處。百姓近家。朝夕穢臭。理不合坐。宜避移可鎮高山之淨境。於是神聽禱告。遂登賀毗禮之峰。其社以石爲垣。中種屬甚多。并品寶弓梓釜品之類。皆成石存之。凡諸鳥經過者。盡急飛避。無當峰上。自古然。爲今亦同之。卽有「小水」名「薩都河」。源起北山。流南。同入「久瀝河」。以下畧之。

所稱高市。自此東北二里密筑里。村中淨泉。謂大井。夏冷冬溫。湧流成川。夏暑之時。遠邇鄉里。酒肴齋資。男女會集。休遊飲樂。其東南臨海濱。石決明。棘甲藏。西北帶山野。樵樵樵栗生。凡山海珍味。不可悉記。自此良井里助川驛家。昔號遇鹿。古老曰。倭武天皇至於此時。皇后參遇。因名矣。至國宰久米大夫之時。爲河取。鮭。改名助川。俗語謂鮭胆。爲須介。多珂郡。東南竝大海。西北陸奥。常陸二國界之高山。古老曰。斯我高穴穗宮。大八洲照臨天皇之世。以建御狹日命。任多珂國造。茲人初至。歷驗地體。以爲峰險岳崇。因名多珂之國。謂建御狹日命者。卽出雲臣間。今多珂石城所謂是也。風俗說云。自麿枕多珂之國。建御狹日命當所遣時。以久慈界之助河。爲道前。去郡西北六十里。今猶稱道前里。陸奥國石城郡苦麻之村。爲道後。其後至難波長柄豐前大宮。臨軒天皇之世。癸丑年。多珂國造石城直美夜部。石城評造部志許赤等。請申物領。



今亦然。以下畧之。

右常陸國風土記以中山信名本書寫一按了  
〔更以西野宣明所校標注古風土記一按了〕

高向大夫。以所部遠隔往來不便。分置多珂石城二郡。石城郡。今存。陸奥國界內。其道前里飽田村。古老曰。倭武天皇爲巡東垂。陸奥頓宿此野。有人奏曰。野上群鹿。無數甚多。其聳角如蘆枯之原。比其吹氣。似朝霧之立。又海有鰻魚。大如八尺。并諸種珍味。遊鯉□多者。於是天皇幸野。遣橘皇后。臨海令漁。相競捕獲之利。別探山海之物。此時野狩者。終日駢射不得一穴。海漁者。須臾才採盡得百味焉。獵漁已畢。奉羞御膳。時勅陪從曰。今日之遊。朕與家后各就野海同爭祥福。俗語云。日佐知。野物雖不得。而海味盡飽喫者。後代追跡名飽田村。國宰川原宿禰黑麻呂時。大海之邊石壁彫造觀世音菩薩像。今存矣。（之イ）因號佛濱。以下畧之。

郡南卅里。藻嶋驛家。東南濱基。（子イ）色如珠玉。所謂常陸國所。有麗基子。唯是濱耳。昔倭武天皇乘（船イ）舟浮海。御覽嶋磯。種々海藻多生茂繁。因名。



# 豐後國風土記

郡捌所。一。一百四十里。驛玖所。放小。烽伍所。放下。寺貳

所。僧寺。尼寺。

豐後國者。本與豐前國合爲一國。昔者纏向日

代宮御宇大足彥天皇詔豐國直等祖菟名手。遣

治豐國。往到豐前國仲津郡中臣邨。于時日晚

偶宿。明日味爽。忽有白鳥。從北飛來翔集此

邨。菟名手即勤僕者。遣看其鳥。鳥化爲餅。片

時之間。化更芋艸數十許株。花葉冬榮。菟名手

見之爲異。歡喜云。化生之芋。未曾有見。實至

德之感。乾坤之瑞。旣而參上朝廷。舉狀奏已上

本聞。天皇於茲歡喜之有。即勅。菟名手云。天

之瑞物。地之豐草。汝之治國可謂豐國。重賜姓

曰豐國直。因曰豐國。後分兩國。次豐後國爲

名。

日田郡。鄉五所。里一十。驛壹所。

昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇征伐玖摩贈

於凱旋之時。發筑後國生葉行宮幸於此郡。有

神。名曰久津媛。化而爲人參迎辨中國消息。

因斯曰久津媛之郡。今謂日田郡者訛也。

石井鄉。在郡南。昔者此邨有土蜘蛛之堡。不用石

築以土。因斯名曰無石堡。後人謂石井鄉誤

也。鄉中有河。名曰阿蘇川。其源出肥後國阿蘇

郡少國之峰。流到此鄉。即通玖珠川。會爲一

川。名曰田川。年魚多在。途過筑前筑後等國

入於西海。

鏡坂。在郡西。昔者纏向日代宮御宇天皇登此

坂上。御覽國形。即勅曰。此國地形似鏡而哉。

因曰鏡坂。斯其緣也。

鞆編鄉。在郡東。昔者磯城嶋宮御宇天國排開

廣庭天皇之世。日下部君等祖邑阿自仕奉鞆

部。其邑阿自玖就於此。造宅居之。因斯名曰

鞆負邨。後人改曰鞆編鄉。中有川曰玖珠川。其



源從玖珠郡東南山出。流到石井鄉。通阿蘇川。會爲一川。今謂日田川。是說也。

五馬山。在郡南。昔者此山有土蜘蛛。名曰五馬媛。因曰五馬山。飛鳥淨御原宮御宇天皇御世。

戊寅年。大有地震。山岡裂崩。此山一峽崩落。溫泉處々而出。湯氣熾盛。炊飯湯早熟。但一處湯。

其穴似井。口徑丈餘。無知深淺。水色如紺。常不流。聞人之聲。驚慍騰壑。一丈餘許。今謂溫湯是也。

玖珠郡。鄉參所。里九。驛壹所。昔此邨有洪樟樹。因曰玖珠郡。

直入郡。鄉肆所。里十。驛壹所。昔者郡東。垂水邨有桑生之。其高極陵。枝幹直。

美。俗曰直桑邨。後人改名曰直入郡。是也。柏原鄉。在郡南。

昔者此鄉柏樹多生。因曰柏原鄉。

福疑野。在柏原鄉之南。昔者纏向日代宮御宇天皇行

幸之時。此野有土蜘蛛名曰打媛。八田國摩侶等三人。天皇親欲伐此賊。在茲野。勅歷勞兵衆。因謂福疑野是也。

蹴石野。在柏原鄉之中。同天皇欲伐土蜘蛛之賊。幸於柏峽大野。中有石。長六尺。廣三尺。厚一尺五

寸。天皇祈曰。朕將滅此賊。當蹴茲石。譬如柏葉。而卽蹴之。騰如柏葉。因曰蹴石野。

球覃鄉。在郡北。此邨有泉。同天皇行幸之時。奉膳之人擬於御飯。令汲泉水。卽有蛇竈。謂於

於茲天皇勅云。必將有竜。莫令汲用。因斯名曰毘泉。因爲名。今謂球覃鄉者訛也。

宮處野。在之野。同天皇爲征伐土蜘蛛之時。起行宮於此野。是以名曰宮處野也。

球覃峰。在郡南。此峰頂大垣燎之。基有數川。名曰神河。亦有二湯河。流會神河。

大野郡。鄉肆所。里十一。驛貳所。烽壹所。此郡所部。悉皆原野也。因斯名曰大野郡。



海石榴市。血田。竝在郡南。昔者纏向日代宮御宇

天皇在球軍行宮。仍欲誅寶石窟土蜘蛛。而詔

群臣伐採海石榴樹。作椎爲兵。卽藺猛卒授

兵椎。以穿山靡艸。襲土蜘蛛。而悉誅殺。流血

沒踝。其作椎之處。曰海石榴市。亦流血之處。

曰血田也。

網磯野。在郡西南。同天皇行幸之時。此間有土蜘蛛。

名曰小竹鹿奧。謂志努汗意招物。小竹鹿臣。此土蜘蛛

二人擬爲御膳。作田獵。其獵人聲甚譁。天皇

勅云。大囂。謂阿那美須。因斯曰大囂野。今謂網磯野

者訛也。

海部郡。鄉肆所。里一十。驛壹所。烽貳所。

此郡百姓。竝海邊白水郎也。因曰海部郡。

丹生鄉。在郡西。昔時之人取此山沙。該朱砂。因

曰丹生鄉。

佐尉鄉。在郡東。此鄉舊名酒井。今謂佐尉鄉者

訛也。

穗門鄉。在郡南。昔者纏向日代宮御宇天皇御

船泊於此門。海底多生海藻。而長美矣。卽勅

云。取最勝海藻。謂網磯郡。便合以進御。因曰寂

勝海藻門。今謂穗門。訛者也。

大分郡。鄉玖所。里二十五。驛壹所。烽壹所。寺貳所。

尼寺。

昔者纏向日代宮御宇天皇豐前國京郡行宮幸

於此郡。遊覽地形。歎曰。廣大哉。此鄉也。宜名

碩田國。碩田謂大分。今謂大分。斯其緣也。

大分河。在大分南。此河之源。出直入郡朽網之峰。

指東下流。經過此郡。遂入東海。因曰大分川。

年魚多在。

酒水。在郡西。此水之源。出郡西柏野之盤中。指

南下流。其色如水。味小酸焉。用療癩癬。謂盼氣。

速水郡。鄉伍所。里十三。驛貳所。烽壹所。

昔者纏向日代宮御宇天皇欲誅玖摩贈。幸於

筑紫。從周防國佐婆津。發船而渡。泊於海部郡



宮浦。時於此<sub>村</sub>邨有女人。名曰速津媛。爲其處

之長。卽聞天皇行幸。親自奉迎奏言。此有八

磐窟。名曰鼠磐窟。土蜘蛛二人住之。其名曰青

白。又於直入郡<sub>無</sub>禰疑野。有土蜘蛛三人。其名曰

打援。八田。國摩侶。是五人竝爲人強暴。衆類亦

多在。悉皆謠云。不從皇命。若強喚者。與兵距

焉。於茲天皇遣兵遮其要害。悉誅滅。因斯名

曰速津媛國。後人改曰速見郡。

赤湯泉。<sub>在郡西北</sub>此湯泉之穴在郡西北竈門山。

其周十五許丈。湯色赤而有泥土。用足塗屋柱。

泥土流<sub>不</sub>出外。變爲清水。指東下流。因曰湯泉。

玖倍理湯井。<sub>在郡西</sub>此湯井在郡西河直山東

岸。口徑丈餘。湯色黑。泥土常不流。人竊到井

邊。發聲大言。驚鳴湧騰。二丈餘許。其氣熾熱不

可向泥。緣邊艸木悉皆枯萎。因曰溫湯井。俗語

曰玖倍理湯井。

柚富鄉。<sub>在郡西</sub>此鄉之中。栲樹多生。常取栲皮。

以造木綿。因曰柚富鄉。

柚富峰。<sub>在柚富鄉西</sub>此峰頂上有石室。其深一十

餘丈。高八丈四尺。廣三丈餘。常有水凝。經夏不

解。凡柚富鄉近於此峰。因以爲峰名。

頸峰。<sub>在柚富峰西南</sub>此峰下有水田。本名宅田。此田

苗子鹿恒喫之。田主造柵伺待。鹿到來舉已頸

容柵間。卽喫苗子。田主捕獲將斬其頸。于時

鹿請云。我今立盟免我死罪。若垂大恩得更

存者。告我子孫勿喫苗子。田主於茲大懷怪

異。放免不斬。因時以來。此田苗子不被鹿喫。

今獲其實。因曰頸田。兼爲峰名。

田野。<sub>在郡西南</sub>此野廣大土地沃腴。開墾之便無

比。此土昔者郡內百姓居此野。多開水田。餘

糧宿畝。大奢已富。作餅爲的。于時餅化白鳥。

發而南飛。當年之間百姓死絕。水田不作。遂以

荒廢。自後以降不宜水田。今謂田野其緣也。

國埤郡。鄉陸所。<sub>里一十六</sub>



昔者纏（誤イ）向日代宮御宇天皇御船從周防國佐婆  
津發而度之。遙覽（誤イ）此國勅曰。彼所見者。若國  
之埼。因曰國埼郡。

伊美鄉。（付イ）在郡（云イ）。同天皇在此鄉。勅曰。此國道路

遙遠。山谷阻深。往還踈稀。乃得見（此イ）國。因曰國  
見鄉。今謂伊美鄉其訛也。

右豐後國風土記以屋代弘賢本校正了

〔更以田能村孝憲本一校了〕



## 群書類從卷第五百

## 雜部五十五

## 對馬國貢銀記

對馬嶋者。在本朝之西極。屬於太宰府。孤立海中。四面絕壁。其名兼見於隋唐史籍。自肥前國博多津。西向飛帆。一日。到壹岐嶋。自斯又到對馬嶋。一日。自非大風。不得渡矣。與高麗隔海。北□金海府牧野之馬。掛帆之布。分明互見。其近可推。彼國之無窺窬心。八幡大菩薩之威神也。欽明天皇之代。佛法始渡吾土。此嶋有一比丘尼。以吳音傳之。因茲日域經論皆用此音。故謂之對馬音。全無田畝。只耕白田。或置諸租稅。至此嶋以大豆爲正稅。嶋中珍貨充溢。白銀鉛錫真珠金漆之類。長爲朝貢。其

採銀之地極爲險難。多年穿壙中漸深。自口入底二三許里。日月之光不得照之。三人連手以爲一番。一人秉燭以萩爲地里是イ許也。不銷久焉。一人探器。一人時拂イ□鎚取之。鼓蜚雜入。常法三人。其後量於斗斛置之於高山四面受風之處。以松樹薪燒之。數十日以水洗之。斛別定其率法。其灰爲鉛錫。滿千二百兩以爲年輸。推其單功不可勝計。若不造之時。雨水□壙。三四人連座於壙中。汲水土壙猶如行香。三里之水。漸々傳出。費民力盡。人功可長大息。其人夫所須年糧米二千二百餘斛。支分於管內。諸國度窮海向絕域。漕之最重也。其



來於太宰府。敢不逗留。殊撰行李。進藏人所。自嶋到府用海路。着五十丈綱以備入海。自府到京用陸路。送之間。人不敢近之。嗟呼。鄱湯之見於漢家。賢王聖主。殊不爲用。慎本禁末。以誠遊手。護桑之外記。無益民。殆不異沙石之故也。然而千載之事。一旦難改而已。

## 伊勢國風土記

夫伊勢國者。神武天皇勅詔。天日別命曰。國有天津之方。宜平其國。卽賜標劍。天日別命奉勅。東入數百里。其邑有神。名曰伊勢津彥。天日別命問曰。汝國獻於天孫哉。答曰。吾覓此國。居住日久。不敢開命矣。天日別命發兵。欲戮其神。于時畏伏。啓吾國悉獻於天孫。吾不敢居矣。天日別命令問云。汝之去時。何以爲驗。啓云。吾以今夜起。八風吹海水。乘波浪。將東入。此則吾之却由也。天日別命令。整兵窺之。比及中夜。大風四起。扇舉波瀾。光曜如日。陸國海共朗。遂乘波而東焉。古語云。神風伊勢國。常世浪寄國者。蓋此謂之也。詔曰。國宜取國神之名。號伊勢桑名郡。

常郡東西拾二里。南北九里。河海多而少。山



林。五穀多而民戶富盛。雜魚多。陽年。大魚多。陰年。樹木貧而土地出名竹。

槇山。此山出松柏多。狐兔。文武天皇二年戊戌三月。此山燃數日也。爾來松柏等猶少焉。

野上山。此山狸兔多。而无樹木。掘窟則美石多。而疑珠玉焉。

中村山。此山竹木繁蔓而爲國用。

中村神社三座。秋九月。草木黃色。則年々山上鳴動數日。則此時祭此神。今九月中子。或始子祭之也。

玉置山。此山少樹木。又无禽獸。

神戶岡。此山多出桃花。少而其實大。如雞卵。土民食之无病。又商之。

藤澤山。此山多諸鳥。和銅三年出黃鳥。大勝

諸鳥。其後時々出之。

永山。此山有松竹不多。

潮干神社五座。齋宮尾崎。

蜆濱。去永山二里餘。出雜魚。

田鶴濱。有民戶海苔。色青而連綿五尺餘。土

民食之濟飢。愍而當國海上多出之。

市部磯。海上多口女。而商民賣。中古以來有

夢想之事。而備熱田之神膳。其魚大者如鯉。

細鱗而長口。其味美也。

粟畑。在市部北。土民植五穀難熟。但粟而

已大熟焉。故名之。

亥鼻野。此野多桃梅。□出餘木。

河內野。此野廣方二里。

平岡神社一座。奉崇時代難知矣。

絲川野。此野隣河內野。

薦生野。多異竹。平岡之神領也。

天。此下鼠損

員辨郡。

當郡東西七里。南北八里。河海多而山材出

樹木。神戶十八座。土地豐饒也。但不出大竹。

魚鳥禽獸不少。



水无瀬山。此山出名材。當郡神社有破壞則用此材。又禽獸繁多也。

杉田山。此山諸木不少。又出名石。大者如大象。深堀則出美沙。

月讀神。坐山之尾。

和田獄。此山少樹木。猿兔多焉。

諸羽山。此山樹木繁多。而民戶富矣。出小竹。又多禽獸。

諸羽神社四座。在山上。此下闕

阿波野。此野出名草。其名難知。土人者稱川

芎也。治產婦有驗。

佐陀野。在阿波野北。多出藥艸。

井戶野。在水无瀬河東。

兩宮神社二座。竹草繁蔓多諸草。此下闕

荻野。此野多諸鳥。又有名竹。

光森。神護二年秋七月。森中鳴動。而有異香。

清光隔三日。而土民牛馬遭疫疾而失命。故

民戶祭之稱光宮。今絕而无興造。此森多鳥

獸。此下闕

玉手森。此森出名草。又多諸鳥。

韃尾森。韓神宮三座。森之中祭之。時代不可

知。又多狸狐鳥類。

膳森。カシハテ此森在韃尾村西一里。雖森无樹木。唯

有一席祭。大己貴神處也。土民每歲落梅之

時供神膳。此處四時无蚊虻。此下虫喰

度會郡。

夫所以號度會郡者。畝傍橿原宮御宇神日

本磐余彥天皇詔。天日別命禰國之時。度會

賀利佐嶺火氣發起。天日別命視之曰。此小

佐居歟。禮使迷命見。使者還來中曰。有大國

玉神賀利佐到。于時大國玉神遣使奉迎。天

日別命。因令造其橋。不堪造畢。于時到。今

以梓弓爲橋而渡焉。爰大國玉神資彌豆佐

佐良比賣神參來。迎相土橋鄉岡本村。申天

日別命歎地出之參會。日刀自余度會焉。因

以爲名也。



# 駿河國風土記

日本惣國風土記第五十三

薦河。七郡。大參。中貳。小貳。

烏渡郡。大。

伊穗原郡。大。

富士郡。中。

安弁郡。中。

薦河郡。大。

志太郡。小。

麻賤郡。小。

薦河。仙河。珠流河。駿河。尖蛾。

以上異其名。而其國號者同也。

薦河者。依其河流薦々。而不知淀溜也。所謂志通波他河。不二河。大堰河也。

仙河者。不二河出自蓬萊嶋峰。故名之。

珠流河者。急波奔濤之流派。國郡繁多也。其

河百琢波磨風。恰如珠玉。故終以爲國號。

駿河者。有三大河。而其濤勢如駿馬驅千里。

故爲國號。

尖蛾者。舉國之四至。信甲相豆遠參紀勢之衆峰粒々。而嶮嶺尖立。地勢峨々焉。故有此號。

虫食

薦河國。

御間城入彥五十瓊殖天皇三年。割伊豆國而爲分國。此國東西三日之宿。南北一日半之宿。北西地勢強。西山嶺多。東南海嶼多。而河流帶之焉。東限息田神祠。西限大堰川。北限猪川。南限有度沖。定穀上之上。橫穀貢麥。五十箇日。霜雪不滿釐。潮風不成害。樹竹山野之土貢倍他邦。海鹽鮮魚飛禽之產尤膏腴也。櫻花孟春開。嚴冬不見氷。國造伊豫部直來于此。梁橋海潮之害鮮聞之。當時所築之嶋田之堤。志津機之要障。今猶存之。

虫食

烏渡郡。



浦六。名山五。河六流。川二派。澤九。

池三。宮祠<sup>十五箇座</sup>。寺院七字。墳陵<sup>五箇基</sup>。

東限藍染川。廣野姬天皇四年庚寅。春以前以淨見闕爲限。後以藍染川爲限。西

限狐崎。南限有度濱。一作北限。鳥渡。正木山。產

早田荊麥。長短多樹。修竹海鹽魚鹽。茯苓柴胡

藿香。香薷川。芎土。茯苓。山梔子。牡蠣。常山。葛根

樗雞。蠻笏麴毛等。惣而拔群之利。舉國之用。

有此國而已。

眞壁。公穀六百束。假粟貳百九。

產荊麥。山藥當歸。亦有遊雉之圃。

眞弓神社一座。武甕槌神也。

中嶋。公穀九百束。假粟二百五十九。

成願寺。岡本天皇三年丁巳六月。造營之

地。緣宗沙門開基之所也。

西嶋。公穀三百束。假粟百九十九。<sup>五</sup>

產蕎麥。芋。薯蕷。胡蘿。芋。莠等。又產晚稻。雉鳩

雲雀。鴻雁之群。備<sup>二</sup>獵<sup>一</sup>。

岡野井陵。國造岡野井真人葬於茲。早稻

熟時。以穗竝拔祭之。神祇官之下文。每祭

至於此。治部省解牒<sup>一</sup>。牒戶。

他田。公穀六百二十三束。八字田。假粟二

百六十九三畝。其產同西嶋。

松城之社。所祭饒速日命也。<sup>〔松寺〕</sup>

神宮寺。松城之鎮守。仲大兄皇子之開地。<sup>〔本〕</sup>

也。後行基住此院。

弁志田地。調御鯉鮒鮮魚。葛根。荷葉。鯉御寄膳。<sup>〔本〕</sup>

部。葛根。荷葉。附典藥寮。

加美嶋。<sup>或神嶋</sup>。公穀二百束。假粟。虫食。

有鮮鱗粒具之利。

智美志麻之祠。稚足彥天皇五年乙亥五月。

被奉官幣。少彥。園韓神之二神祭也。

豐炊禰乃陵。有度采女數子葬于此。

有度清水。<sup>或玉潔水</sup>。公穀千二百束。假粟五百九。

海磯之貢。月料百駄。



伊軻麻神社。淨見原天皇御宇四年四月被

祭之。應勤處分爲四宮奉祭。譽田天皇所也。

圓頓寺。豐櫻彥天皇之勅願也。俊良阿闍

梨居于茲。

池田。或築田。公穀六百束。假粟二百丸。

產早稻晚麥地黃當歸橘柚。供典樂膳部調。

池田神社。所祭事代主神也。小泊瀬若鯉

鷄天皇九年乙卯六月祈雨祭之。

萬福寺。安聖德太子十如來佛。天平神護

元年乙巳之造營也。

文澤。生鯉鮒。旱歲水不死。雨歲不增波。膏

腴之地利也。

一色。或一織。公穀二百束。假粟百五十九。

一色川。白蘆原川。落于茲。有鮎鰻之利。

幸社。所祭高皇產靈神。

瀧祭宮。與伊勢同神也。

綠澤。出實活イ符蓮根菱實。

吉田。公穀千三百束。假粟五百丸。

吉田川。出白蘆原川。

廣野社。日本武尊所奉祭素盞烏尊也。

此間虫喰

草奈岐。公穀六百束。假粟四百丸。

草薙神社。香具山日記曰。天照太神以天

孫瓊瓊杵欲爲豐葦原中津國神。君既欲天

機之時。左御手持携八坂瓊之曲玉。右御手

携天叢雲劔。叢雲或稱草薙劔。號叢雲者。

素盞烏尊欲下根國。吟出雲國之時。出雲

與伯耆國之境有緩川。其川上常世有大蛇

橫行。松栢生背。其往尋尋何里氏蔓延八丘八谷

之間。其眼如赤酸醬。頭尾各有八岐。因之史

家謂八岐大蛇。不云大蛇。可謂於呂地。取

於土曾。於土曾。志機之義也。其大蛇之常住

之傍有奇雲氣云々。依之盞尊誅之。寸々而



至尾。劍乃少缺。故割裂其尾視之。尾中有  
一奇神劍。尊取之名草薙亦別名也。草者生  
無主之地。此葦原自天孫降臨。無草叢之神。  
專其國輝然焉。繁草以利鎌。知拂其草葉。  
故天孫降臨之後有草薙之號。又齋部記云。  
取燒鎌乃敏鎌之義。又善哉

胸

與腹之間中八咫鏡。神祝曰。天孫視吾如視  
此三種之寶共倍止。又同床共大殿氏麻志止。自

此天嗣不絕。以此三種之璽被奉持之云々。  
依之見之。則草薙者。叢雲之別名也。一書曰。

日本武尊（稚）越東夷至駿河國浮嶋原。與阿部  
市。東夷欺尊託狩獵。令遊御廣野。日中縱

火。于時十月旬。衆草枯死。而宜添史恰如塗  
油烟已進。而尊軍危。所帶之叢雲劍自脫。拂

野火。依此有草薙名。此事大謬也。唯自神  
代同名。而此神社者。所祭天照太神之地

也。

草薙山。

或矢田山。

出走兔雉狐狸等。又產南萱

松等。

深澤。

出鯉鰻魚。當國造之用。

葵澤。

同澤。公穀四百束。假粟百丸。

敢國神社。奉祭金山比咩。與伊賀美濃之

社同。

建崇寺。蘇我稻美連之願也。安多羅葉彌

勒。

澤田河。

玖乃。

或久能。取久能義。後思久義之皇子御名。而改玖乃。

公穀六百束。

假

粟二百丸。

山料月別三十駄。浦料食鹽四十五駄。出雉

兔鴻雁雕隼鮮魚茯苓柴胡綿毛等。

稻荷神社。

神護景雲三年己酉正月初祭

之。

有度山。

又鳥渡山。

炊屋姬天皇之御宇。秦川勝之

二男秦尊良之弟。

或尊良之子。

久能朝昏信佛願拜。



千手觀音像。連夢念此事。一老翁夢程示曰。  
汝欲拜正身之觀音像者。赴薦河國有度山。  
可待一浦之風至時。晨枕如見真老翁。忽  
進杖屨。不陪家僕。唯自己而赴。茲寄身禽  
獸之栖穴。專念正身謁見之事。松風改更。月  
落潮海之時。浦風陣々而成寂寥之思。不期  
着睡。往時之老翁再來。我是補陀落之僧也。  
今夜應汝望。

虫食脫落二十五行程歟

有度濱。自久能浦至御穗吳服之神社前。都  
行程七里。曰有度濱。

深澤。公穀七十束。假粟四十九。

澤料大膳臈。但待國造守家處分。

深澤神社。鳴澤女神也。

瀬織戸。公穀百束。假粟八十五丸。

海料十五駄。但年別食鹽廿駄。

織戸神社。神護景雲元年丁未。所祭瀬織

津比咩也。

海松院。安千壽中藏人偷菩薩作。天平二年

丙午勅願也。

此間虫食

高麗肥。越公穀二百五十束。假粟百八十二

丸八文。

止由氣神社。泊瀬邊天皇二年己酉七月。初

奉例幣。

烏澤。貢鯉鮒鰻菱海申等。

矢部田山。貢鹿角頭走免血山藥葛糰等。

此間虫食

村松。或邑公穀五百束。假粟二百七十丸。食鹽

十七駄。但年別供內膳司海料十二駄。

直日神社。所祭手力雄神也。

此間虫食

八幡岡。貢橫稅百七十駄。出松栢杉樟。又貢

兎狐狸狼之皮毛。



八幡神社。神護景雲三年九月。太宰神主阿

曾麻呂。五畿七道。各置<sub>〔成コ〕</sub>譽田先君宮舍政如

王。<sub>〔脫字〕</sub>譽田王室之舊跡也。<sub>〔宮コ〕</sub>

稻河。<sub>或伊奈川。</sub>公穀七十束。假粟六十九。

生<sub>〔生〕</sub>片蘿蔔。入<sub>〔入〕</sub>內膳司料。

會星。公穀三百束。假粟百六十九。

香椎神社。所祭神功皇后也。

會星澤。出<sub>〔出〕</sub>鰻鯉鮒鮎之魚。

新居。公穀二百五十束。假粟百七十九。

新居神社。押盾天皇二年丁巳三月初祭之。

大歲神也。

鰻墳。公穀二百三十二束。<sub>〔口无〕</sub>假粟九十九。

鰻澤。貢<sub>〔貢〕</sub>菱澤瀉獨活荷葉。典藥寮之料也。

虫食七十行

袖師浦。以自<sub>〔自〕</sub>烏渡濱。以東<sub>〔東〕</sub>號<sub>〔號〕</sub>袖師浦。憶良

以<sub>〔以〕</sub>盧崎<sub>〔盧崎〕</sub>爲<sub>〔爲〕</sub>連景。<sub>〔二イ〕</sub>

此脫前十行

矢部渡。<sub>有渡。</sub>公穀二百六十束。假粟八十九。

貢<sub>〔貢〕</sub>海料食鹽。亦有<sub>〔有〕</sub>驛船。<sub>〔驛船〕</sub>

和泉。<sub>或出水。</sub>公穀百七十束。假粟六十九。

有好井。其底二尺餘。旱水不枯。洪水不增。

常有<sub>〔有〕</sub>小蟹。數頭住<sub>〔住〕</sub>井底。取<sub>〔取〕</sub>之不<sub>〔不〕</sub>當手。其水

味如<sub>〔味如〕</sub>甘露。<sub>〔甘露〕</sub>

履奴伎。公穀二百束。假粟百八十九。

有志難神社。或止由氣神社。則所祭<sub>〔所祭〕</sub>外宮

也。

長澤。公穀二百二十束。假粟百二十九。

貢<sub>〔貢〕</sub>五穀綿麻<sub>〔等賦〕</sub>寺。<sub>〔寺〕</sub>

宗隆寺。此<sub>〔此〕</sub>呂菅天皇之御願也。

長澤神社。奉<sub>〔奉〕</sub>祭高皇產靈尊。神皇產靈尊

也。

惣日本風土記薦河烏渡郡終

日本惣國風土記第五十四



薦河伊穗原郡。

浦五。名山<sup>十五箇所</sup>。河七流。川三派。池七。

澤四。宮祠<sup>十八箇所</sup>。寺院<sup>十一宇</sup>。墳陵<sup>十二基</sup>。

堤<sup>五箇所</sup>。岡<sup>六箇所</sup>。

東限。蒲原板田堤。西限。西奈山微雨川。南限。

美髯田子浦之間。北限。大平山。其土滑。其居

濕焉。貢。早穀。橫產。白絹。商布。驛馬。松栢。杉。樟。怪

石。奇草。零。羊草。鎧箭。鏑鐵金。鯉。鮒。鮎。鰭。雁。鴨。

雉子五味子。薯蕷。香需。葛根。雞丹草等。其上貢。

秀餘里。其田者中之上也。

蒲原。<sup>或神原</sup>。公穀六百撥十二束。假粟三百

六十三丸。驛長田二十九。

板田堤。每歲仲春仲秋之望。令郡民植柳粟。

日別一千丁。丁食充。國府師家。其食鹽。元御

供田。居。廬崎。海戶。三年別防河使令之正事

故。

岩淵。出。橫穀。竝川。苔。前。胡。柴。胡。鰯。鱧。等。又。甲

斐檜皮木楨桐等。令筏舟着于茲。

西山寺。和銅元年戊申。聖仲沙門開基之地

也。安。十體。無量壽佛。

東山寺。大寶元年辛丑三月之旬。疫疾入

戶。病骨滿。市府。官命。官舍。官舍埋。此寺。

阿蘇宇伊。公穀三百十五束。假粟百二十

丸。

出。麥。麴。商。絹。鹿。革。等。

阿蘇宇神社。所祭大山祇命也。

內富瀨。公穀二百六十七束。假粟九拾六

丸。

油伊。<sup>或由尹。或由騰澤。</sup>公穀二百五十束。假粟百十

二丸。

出。白絹。麻。布。竹。籠。土。陶。瓶。海。莫。礪。苔。食。鹽。

飯田八幡。神護景雲二年戊申八月十五日。

所祭。譽。出。天皇。與。荒。木。田。襲。津。彥。也。

向海寺。靈龜二年丙辰二月。吉備右府開。



此地。安釋佛。

關澤。公穀二百六十五束。假粟百二十九。

出獨活荷葉菱實芹菜。

關口神社。所祭建角身命也。

來迎院。天平寶字二年戊戌。高寬沙門開基

之地也。安三十體釋佛。

寺尾。公穀三百八十束。假粟百七十九。

寺田九十二畝。

鞍佐里。公穀二百八十束二字田。假粟百三

畝六字隻字田。

出杉樟松柏。

鞍佐里神社。所祭日本武尊也。往昔古老

傳。日本武尊逢野火。鞍馬馱駢矣。自居鞍

下念神明。忽自鞍其鞍破盡。依之有此名

焉。

袖師洞。或佐惠田乃岡。海岸如立屏。驛馬沿波。清見關

之要領也。

井上。公穀三百二十束。假粟百六十丸。

出羣羊角猪皮狐狸兔犬等之革。

他伊原。或橘原。公穀二百六十束。假粟百十三束

三字田。

此間三十二行虫食不見

鹿原并山。公穀六百七十三束。假粟二百九

十三丸。

出鹿猪狐狸革并隼鷹鷺鶴雁鶺鴒等。

鹿田神社。所祭建角身命也。泊瀬部天皇

三年庚戌三月之遷座也。

古國府。公穀三百十八束三字田。假粟百六

十三丸。

出麴麥苜蓿當歸芍藥人參黃芪等。充主藥

寮。

紀幣。公穀三百三束二畝二字田。假粟百二

十七丸。

貢麻帛野劍等。



紀幣神社。所祭大歲神也。圭田八十束。

充國府下文。

中藏寺。神龜三年丙寅三月。什肅法師開基也。〔滿コ〕

雄嶋。公穀三百二十束。假粟二百三十二九

隻毛。

酒瓶神社。大酒解命。小酒解神也。彥押別

天皇十三年癸未六月。初奉官幣國中四

宮也。

浦田川。或興津川。出利瀨里河。

貢鮎鰯川苔。亦有鵜飼業。充國府之科。慰

官使之鬱。

興津。或興津。或興津驛。公穀三百六十束。假粟二百五

十九。

貢海魚食鹽。又充開戶之守部。〔關コ〕

茨原神社。稚足彥天皇二年。初奉官幣帛

絹。

此間虫食

東草奈岐。或久佐奈岐。公穀三百九十束。假粟百六

十九三毛田。

貢修竹杉松等。

草奈岐神社。稚足彥天皇元年辛未。始祭

之。奉官幣。

廬原。或伊穗原。小府有大。公穀五百六十束。假粟二百七

十九。

貢松栢葦菰等。

豐積神社。或止由氣神社。日本武尊祭之地也。國中之二

宮也。

此間虫食

高橋。公穀五百六十三束。假粟二百七十九。六イ

貢澤料鶴雁川魚等。

北高橋。公穀四百六十七束三字隻毛。假粟

二百三十九二毛田。

其貢同高橋。



國分寺。豐櫻彥天皇神龜四年丁卯三月初  
定額之寺。

山原。公穀二百十四束七字田隻毛。假粟九  
十七丸三畝三毛田。

許山貢居其豐饒。

貢山禽鹿草零羊角猪肉膏充主藥司。商絹

五十匹。每歲充國府處分。

關田神社。所祭大山祇尊。木花開耶姬也。

此間虫食二十行計

瀬名田。公穀百六十束。假粟七十二丸三畝

三毛。

貢澤芹。菜根等。

西奈。公穀五百六十束。假粟二百七十九三

畝三字田五毛。

此間虫食行數不知

美髯。或御穗。美保。三保。微方。公穀百八十束。假粟二十九。

浦料三十駄。食鹽四十駄。各月別。

出。鰐魚長短粒具異石等。產松樟檜松茅伏  
苓伏神琥珀松脂柴胡黃芩山梔子橘柚川芎  
香薷藿香土茯苓牡蠣。胡膏海鹽針茸  
薯蕷等。

御穗神社。

所祭大己貴命。

又號御穗津產御穗比咩也。

本武尊奉勅供官幣。始獻圭田五百畝。爲國

之三宮。所謂瀬織戶邑。矢部村。興津鄉。廬崎

役也。羽車磯田社離宮也。大己貴。天孫降臨

之機爲顯其時。大己貴登天上奏。可順條

條。忽乘御天日鷲大羽鷲羽車休御穗御崎。

後其鷲爲舉之社曰有天女脫羽衣。謬羽車

也。潮風不連時。波濤不舉。境可奇之嶋也。

田子里。或苦屋里。公穀二百五十束。假粟百三十二

丸三畝。

田子浦。出食鹽鰐魚海苔等。

此後虫食不見



日本惣國風土記第五十五

薦河安弁郡。

浦四。河五流。川派。澤七。池四。祠

宮<sup>十一箇座</sup>。寺院五字。墳陵<sup>三箇基</sup>。

東限布留志河。而西限志津機河。北限平野

山。南限藤井浦。

產早中田橫苗綿麻繭虫松柏樟楠橘柚柴胡<sup>斯イ</sup>

黃芩川芎楊梅公棟楮<sup>楮梅イ</sup>檀。貢海料禽料河料

等。

廣伴。公穀五百束十七字田。假粟貳百五十

九。

貢松栢杉梅鶴雁野雞等。

廣伴神社。所祭經津主神也。

安樂寺。行基菩薩之開基之地也。安置瑠

璃之四方佛。

山崎。公穀二百束。假粟百質拾參丸。

橫貢梨桃梅栗楊梅等。

椎乃尾。公穀七百束拾九田。假粟三百伍拾

丸二田。

貢樟杉竹藪。

椎乃尾神社。所祭事代主神也。

椎田池。出美石。和銅元年戊申自三月至

五月。地底鳴晝夜百餘度。恰如地震。五月望

夕。有一黑牛。出池底。負一顆之玉。其玉光

照四邊。後以其牛獻京。家路程不堪暑。

至白湊計渡斃死。號其處曰牛瀨。今猶存

焉云々。

宇知牧。公穀百六十束。假粟七十二丸。

貢寮馬并驛馬。例歲八月。信濃駒使宿此。

宇知之宮。所祭天照太神忍穗瓊尊之地

也。

迎仙寺。神護景雲元年之願寺也。安秘雄

崇經之法。

白澤。公穀伍佰束。假粟二百十二丸。



頁澤瀉獨活菱實荷葉鯉鮒蟹蝦等。

白澤神社。所祭伊弉册尊也。豐國成姬天皇三年庚戌添祭諏訪神社。

芸野牧山。公穀百六十束。假粟七十二丸。

出鹿猪狐狸狼兔雉鳩鷄葛蕨楊梅山藥等。諏訪神社。豐櫻彥天皇二年乙丑夏五月始祭之。

大河內。公穀百二十三束。假粟八十四丸。

產葛粉蕨艾菜等。

大河內河。河流分爲三。一爲思豆機川。一爲鞠子川。二爲猪川。終純入海。

出鮎鰯魚鮒等。又出奇苦怪石。

葛間。公穀三百六十束。假粟百四十九。

鞠神社。廣野姬天皇三年己丑。所祭少彥名園韓神。

壽量寺。高野姬天皇六年甲午四月。安置無量壽佛。

皇之池。日本武尊討蝦夷之時。暫時屯于茲。

浴此池。獲東軍之地也。故曰皇之池。

中河內。公穀二百六十束。假粟百貳拾丸。

貢葛粉蕨鮎鰯松栢杉樟竹柴等。役府舍。

木枯里。公穀三百二十束。假粟百陸十二丸。

出松杉鹿狐松杉當圖書寮內寮。鹿狐當兵庫寮武器。

木枯森。廣野姬天皇庚寅十月。府官史生吏

部奉役入山中。暴風陣々。樹木顛倒。荒忽

如酒醉。于時風雨一行。後已至黃昏。月清明焉。有一大男居巖頭。其威風如生毛髮。暫

時難對顏。史生秦助右解腰劒當之。下

手不覺目眩。四邊無物。唯如覺醉夢。吏部

并餘生如此。其後不知其過蹤云々。

安藤驛。公穀六拾貳束。假粟貳拾七丸。

日別駄。官物。省物。二百駄。高駄。別百伍駄

園。草料當手越原。鹽料當中里持舟燒津之



民戶。

思津機山。或志豆機山。或思豆機山。或賤淺多山。

又號青葉岡。有山土憶良短歌。薦河路乃青

葉岡爾身波須禮止袖波于志鬼丹成茂古會云々。

志津機神社。日本武尊征東蝦夷之時。遭

野火屯此山。避其勞厄。尊深志。專守倭姬命之神教。神教見世記。依之以栲幡千千姬祭。此

山合之以〔稚〕椎日女尊。天照太神有深理。潛心宜功。依兩神名與其功業而號之也。志津機之名者本女

麓山神社。去志津機神社五十步。譽田天

皇五年甲午冬十一月所祭大山祇神與日本武尊也。此則依祝部氏祐忌寸之夢託也。

府。無正稅。假粟六百撥十九。

掃科百九。固關料百六十九。府直川邊卿。〔邊卿〕四

圍楠杉松栢等待府務處分植之。阿部役夫

掌之所也。

橫太。無正稅。

鄉學醫生之給料。驛馬之草料當此鄉。〔公穀一〕

橫移野。穀二百五十束。假粟百貳拾九。

去府官舍纔二百步許。故其役繁多也。假粟

准府官地。

太歲御祖神社。或雷神。譽田天皇四年癸巳始祭

之。大歲御祖神者。號玉依姬。賀茂健角見命

之女也。雷神者。伊弉冊尊生火神訶遇突智

終燒。伊弉諾尊斬爲三段。得其一爲雷神云。

建保。或建穗。公穀三百仇拾束。假粟百二十九。

產竹杉瀧米早麥桔梗半夏等。

建保神社。所祭天照太神也。日本武尊之

舉之所也。

此後虫喰落了三葉計。善提寺。法宗。公穀三十一束。養老五年

三月始云々。



大澤。公穀二百五十束。假粟百十七丸。

大澤池。出鯉鮒獨老等。

菅沼。公穀五百貳拾束。假粟二百六十九。

菅沼神社。所祭糟垣大神也。依豐櫻彥天皇

三年丙寅御祈也。

松墨。公穀二百五十束。假粟百二十九。

井宮。公穀百二十束。假粟百十九。

農田三箇二。貢圭田注連田三毛殘之。

井宮神社。所祭瑞織津姬也。

崇德寺。道鏡法師宿願之地。安置彌勒佛。

神護景雲二年戊申三月。別置別當職。

廣野。公穀二百五十束。假粟百十七丸。

海料准正稅貢諸鱗田禽諸苔怪石等。

持舟泊。無正稅。

往返諸帆盡入此湊。故府官奉度決此云々。

足坏。公穀二百二十束。假粟百三十九。

足都幾神社。所祭蛭兒也。卜部兼臣承而

祭之也。

神部。公穀三百束。假粟百七十七丸。

日本武尊驛此。護持神劔。故有神部號。

神部神社。則日本武尊所祭太神宮也。

此間虫喰

中津神社。所祭住吉神也。天平神護元年

乙巳三月造社也。

小梳。公穀二百六十束。假粟百二十九。

小梳神社。所祭素盞鳴尊與奇稻田姬也。

小梳後號東川邊。

足濯。公穀三百二十九束。假粟百三十九。

出芹菜蘿蔔牛蒡等。

萬行寺。厩戶皇子之御願也。

足濯澤。出諸鱗。其役當府官祭國神之用云々。

横雄河。出中河內落有度海。

此後虫喰落丁五葉計

南内屋。公穀三百六十束。假粟二百十五丸。



貢羅蔔芹菜當府務官使。

白髮神社。神護景雲年中。所祭之也。

平峽。公穀二百三十束。假粟六百十九。

貢鵜鷗鰓鰒。

壽福寺。行基之願寺。安無量壽佛。

池峽。公穀百三十束。假粟六十七丸。

鴻之池。祭瀬織津比咩。

日本惣國風土記第五十六上

薦河富士郡。

名浦七。

名山<sup>二十三箇所</sup>。

瀧四。

宮祠<sup>三十七箇座</sup>。

寺院<sup>十六箇所</sup>。

墳基<sup>十七箇所</sup>。

池十二。

東限箕鳥大己貴嶽。西限刀世岡。南限雄度

海。北限八枚之富士<sup>牧</sup>。北西南續平原海陸。東

北隣山岳不二之横十之七。

出茯苓當歸土茯苓川芎甘草人參地黃琥珀

筍長高皮蒼根急鼓皮。又貢鹿革兔毛菌蕈等。

水口。小府。公穀七百五十束。假粟二百七十九。

貢飴米。

水口神社。所祭水口鮮命也。

養仙寺。神護年中之造營。而朗山沙門居

之。有丈六之佛像。

溝口。公穀六百八十二束二畝三錢。假粟三

百七十二丸。

外貢山藥橫稅干柿干栗。

波布羅子神社。饒速日神也。稚足彥天皇三

年癸酉八月。始被祭之。

隨願寺并山。豐櫻彥天皇神龜三年丙寅四月。

永向□逢□供會。

槿原。公穀七百三十束二錢田。假粟三百六

十八丸三畝二字二毛田。

豐麻神社。二座。所祭大己貴命與少彥命名

也。□長彥天皇二年癸酉十二月之旬。始奉。



官幣。

邊野。公穀千三百九十束三字田。假粟七百

四十七丸三毛田。

迎靈寺。浮見原天皇四年乙亥四月。始建

之。

早山田。

貢人參白朮香附子。恰越夷域貢。

互河輪。公穀七百二十二束三畝七字田。假

粟三百二十二丸三毛田。

外貢。橫稅名菜等石菖蒲黃芩。

互河輪神社。所祭大歲神也。押武金日天

皇二年乙卯十二月。始祭之。

德應寺。豐國成姬天皇和銅二年己酉六月。始

建之。安不動尊體。

藤色淵。出清田苔香□等。充內膳大膳等之

膳部。

東海林川。公穀七十貳束。假粟百六十二

丸壹畝。

榎柚野。公穀七百六十二束三畝二字田。假

粟三百九十三丸三毛田。

貢香橘松栢杉樟脩竹等。

此間三十二行程虫喰不分明

不二神社。大山祇之命也。深待彥天皇二年

丁卯六月之旬始祭之。馬養祝部掌祭之。爲

一宮。

真柳木岡。

在神祠南東。

城望山。貢松栢杉樟菰藁等。

城望神社。所祭伊弉冊尊也。御間城入彥

五十瓊殖天皇元年甲申八月祭之。

中具羅。公穀六百七十二束三畝。假粟二百

九十七丸三字三毛田。

貢正稅橫稅鹿革恰奇革等。

中貢羅神社。所祭經津主神也。活目入彥

五十狹智天皇三年甲午八月祭之。

杉原。

或椎原。

公穀七百六十二束三畝三字田。



假粟三百五十三九二毛。

杉原神社。虫喰

此間虫喰

淺宇麻神社。所祭木花開耶姬也。活目入  
彦五十狹智天皇三年甲午八月祭之也。

神多地山。同森。

御手洗洞。出珍石奇樹。

白絲乃瀧。其水落而出芝瀨川。終落富士川。

入滄海。其瀧如亂白絲。或號鷄口瀧。出奈

師苔比岐田苔等。

御守神社。所祭瀨織津比咩也。

井手野。公穀五十三束。假粟三百二十七九

三畝二毛田。

假宿牧。公穀二百二十三束二字田。假粟百

七十二九三畝三字二毛田。

外有牧馬料田。信濃牧養之。

淀師。公穀七十三束三畝二字田。假粟二百

五十九三畝田。

田無口。或田奈口。

公穀七百八十二束。假粟三百

九十三九半毛田。

廣國寺。豐稷彦天皇神龜年中。滿隨沙彌建  
之。

小泉。公穀三百二十九束。假粟百六十九九

二字半毛田。

其小泉恰如小圓器。極旱水不涸。淺底如扇

尺。

野中。公穀三百二十七束。假粟百八十五九

三字田。

野中神社。所祭手力雄神也。虫喰

懸畑。公穀八百二十束三畝二字田。假粟四

百六十二九三畝田。

懸畑神社。所祭蘇我稻目也。和銅三年庚

戌八月祭之。

深澤。公穀三百二十七束。假粟百二十三九



阿波山。公穀七百五十二束。假粟四百二十七九三畝田。

貢早蕨葛粉五味子石菖蒲等。

阿波水神社。所祭思兼神也。

山宮。公穀六百二十七束。假粟二百三十九

二畝田。

山師神社。所祭武甕槌神也。日本武之

（下開）

村山。公穀無正稅。

貢橫稅。郡ヶ一。

村山神社。所祭別雷神也。活目入彥五十

瓊殖天皇之御宇祭之也。

此間虫喰落丁有

富士。或不盡。不二分地。粉陣。富智。風士。風

詩。福智。

等載先代國史等。

日本惣國風土記五十六下  
薦河國薦河郡。

浦四箇所。名山八。岡四。池四。河五流。

川二派。泉三磯。宮祠七箇座。寺院十二

墳墓九

東限滋輪津山。西限杉岡。北限北河內。南

限手越浦。穀實中之中。而山貢海料中之上

也。貢橫穀獨活薯蕷葛粉器。藤柴胡川芎黃芩

茯苓茯神松栢杉樟竹葦鹿猪熊狸之皮革黃

金堅鐵海鹽鮮魚鶴鵲雁雉惣羽類等。

栢原。公穀五百七十二束三字田。假粟二百

六十七九二圍三毛田。

貢鶴鵲雉鴨鳩。豆麥紅角豆川芎柴胡布綿等。

山陰天皇。神貢百七十束。天平勝寶三年辛

卯三月。所祭素盞烏尊也。季春以子日祭

之。神戶祝戶數十家。以神貢爲祭。

中佛寺。寄田二十八束二字田。天平寶字二



假粟三百五十三九二毛。

杉原神社。虫喰

此間虫喰

淺字麻神社。所祭木花開耶姬也。活目入

彥五十狹智天皇三年甲午八月祭之也。

神多地山。同森。

御手洗洞。出珍石奇樹。

白絲乃瀧。其水落而出芝瀨川。終落富士川。

入滄海。其瀧如亂白絲。或號鷄瀧。出奈

師苔比岐田苔等。

御守神社。所祭瀬織津比咩也。

井手野。公穀五十三束。假粟三百二十七九

三畝二毛田。

假宿牧。公穀二百二十三束二字田。假粟百

七十二九三畝三字二毛田。

外有牧馬料田。信濃牧養之。

淀師。公穀七十三束三畝二字田。假粟二百

五十九三畝田。

田無口。或田奈口。

公穀七百八十二束。假粟三百

九十三九半毛田。

廣國寺。豐櫻彥天皇神龜年中。滿隨沙彌建

之。

小泉。公穀三百二十九束。假粟百六十九九

二字半毛田。

其小泉恰如小圓器。極旱水不涸。淺底如扇

尺。

野中。公穀三百二十七束。假粟百八十五九

三字田。

野中神社。所祭手力雄神也。虫喰

懸畑。公穀八百二十束三畝二字田。假粟四

百六十二九三畝田。

懸畑神社。所祭蘇我稻目也。和銅三年庚

戌八月祭之。

深澤。公穀三百二十七束。假粟百二十三九



阿波山。公穀七百五十二束。假粟四百二十七丸三畝田。

貢早蕨葛粉五味子石菖蒲等。

阿波水神社。所祭思兼神也。

山宮。公穀六百二十七束。假粟二百三十九

二畝田。

山師神社。所祭武甕槌神也。日本武之下關

村山。公穀無正稅。

貢橫稅。郡々一。

村山神社。所祭別雷神也。活目入彦五十

瓊殖天皇之御宇祭之也。

此間虫喰落丁有

富士。或不盡。不二分地。粉陣。富智。風士。風

詩。福智。

等載先代國史等。

日本惣國風土記五十六下  
薦河國薦河郡。

浦四箇所。名山八。岡四。池四。河五流。

川二派。泉三磯。宮祠七箇座。寺院十二。

墳墓九

東限滋輪津山。西限杉岡。北限北河內。南

限手越浦。穀實中之中。而山貢海料中之上

也。貢橫穀獨活薯蕷葛粉器。藤柴胡川芎黃芩

茯苓茯神松栢杉樟竹葦鹿猪熊狸之皮革黃

金堅鐵海鹽鮮魚鶴鵲雁雉惣羽類等。

栢原。公穀五百七十二束三字田。假粟二百

六十七丸二圍三毛田。

貢鶴鵲鶴鵲雉鴨鳩豆麥紅角豆川芎柴胡布綿等。

山陰天皇。神貢百七十束。天平勝寶三年辛

卯三月。所祭素盞烏尊也。季春以子日祭

之。神戶祝戶數十家。以神貢爲榮。

中佛寺。寄田二十八束二字田。天平寶字二



年戊戌慶檢律師建之。安置沈木之釋迦佛。

箭柄墳。白鳳年中有樵翁食芝絕粒。恰

如仙客。齡歷九旬。其步行一日期。貳百里。隣

國自在也。白鳳十二年癸未十月朔。至一原

之巖窟。忽不見其跡。行人咸其奇異。所殘

所携右手之箭柄而已。故國造舉之埋。其箭

柄。曰箭柄墳。樵翁不委其姓氏。

藁科山并鄉。公穀二百六十二束。假粟九十

三九二字田。

貢松竹杉梅薯蕷豆綿紅角豆等。

藁科神社。神貢五十束三字田。和銅元年

戊申四月。所祭田心姬也。

藁科川。出自滋輪津河落海。出鮮魚怪石

等。國造取鵜師之貢。

矢集。公穀四百八十束二字半毛田。假粟二

百三十九二畝。

貢松柴鹿革菌等。

香取神社。所祭經津主神也。養老二年己

未八月之勅也。

寶幢寺。寄田二十五束。行基菩薩開基之

地。而神龜三年丙寅之建立也。

鞠込。

或丸子。或圓子。

公穀二千五百束三畝二字田。

假粟七百六十九三畝。

貢松栢杉樟竹藟鹿猪熊狸之皮革黃金等。

鞠込神社。去來穗別天皇御宇四年癸卯。所

祭金山彥也。神貢百束。

葦名川。流鞠込之西。出鮮魚鮎鮒等。又出豐

苔。

宗教寺。白鳳十年辛巳。多武峯定惠和尚

安置乘船之觀音。寄田五十束三畝二字田。

此間落丁三葉許

桃澤。公穀七百五十束三畝二字田。假粟三

百七十九二圍半毛田。

貢市綿葛布之類鶴鴈雁雉鴨鴛等。



桃澤神社。神貢百五十束二畝田。靈龜二年

丙辰九月所祭建御名方神。

桃澤池。東西三里。南北四里程。出于鮮魚。又

令栖鴻雁鸕鷀鷺名禽。池嶋有神。所祭

鳴澤女神也。土俗以兒之夜啼祈此社。其忽

驗如巡掌。曰鳴明神。

子松井山。公穀三百七十束二畝三字田。假

粟百六十七丸二畝二毛田。

貢松栢竹藁鹿猪狸之皮革。

子松岡神社。和銅二年己酉。所祭饒速日

命也。

古家。公穀二百七十束二畝半二毛田。假粟

百三十二丸二畝半。

狹見川。出小鮮魚。

青龍寺。寄田二十七束二畝半毛田。朱鳥元

年丙戌十月。役小角點小龍而爲佛體。故曰

青龍寺。

玉造。公穀三百二十七束三畝半二毛田。假

粟百八十九三畝三字田。虫喰。

玉手池。貢小鮮魚。又出葭薦充國務。

玉手川。貢小鮮魚。又出怪石。

橫走。公穀七百八十二束三字二毛田。假粟

三百九十二丸三畝六步田。

橫走井社。大泊瀬幼武天皇御宇。所祭級

長石邊命也。神貢五十束二畝三字田。

山崎。公穀四百三十束。假粟二百二十七丸

三字田。

廣隆寺。寄田三十七束二畝半毛田。

天平二年。行基建立之池也。

山崎岡。貢松竹藁。此下虫喰

手越。公穀三百七十束三字田。假粟百八十

丸二字田。

貢松栢杉樟狐狸狼兔之皮毛薯蕷柴胡茯苓

葛根布綿等。



諸羽神社。勾大兄廣國 武金日天皇御宇

三年乙卯歲。所祭天兒屋根命。天太玉命也。

德宗寺。寄田八十束三字田。朱鳥元年道照

和尚開基之地也。安玉體之尊彫佛。

驛亭。減半貢。

手越浦。貢食鹽鮮魚怪石等。

星澤。公穀百七十束二字田。假粟六十九二

畝半毛田。

此間虫喰

羅細道。橋雉曆詠〔讀歌〕見須雅良郡多布也。

貢葛根山藥獨活等。

宇都乃谷并山。華夷之往路鞍至此爲其難。

九折盤桓而茂樹藏道。至申後無往還之易。

本原神社。大鷦鷯天皇御宇七年乙卯。所

祭軻遇突智也。

日本惣國風土記第五十七

薦河國益頭郡。

浦五箇所。名山五。岡五。池六。河六流。

川三派。泉一磯。宮祠八十座。寺院十一。

墳陵七基。

西限大猪河。東限岡部驛。南限濱名。北限

庄林山。

貢松栢杉竹梅桃櫻香葛蔭松葦橘柚及諸菓。

橫穀〔无〕鶴鶴鴻雁鴨鴛山海諸鮮等。

益頭小府。公穀五百七十二束三畝田。假粟

二百七十二丸三字田。

貢橫穀鶴鶴鮮魚橘柚等。

原木神社。勾大兄廣國押武金日天皇二年

乙卯二月。所祭手力雄神也。神貢五十束。

妙藏寺。釋惠灌開基之地也。安丈六壽佛。

寄田十八束三畝二毛田。

西刀。公穀三百七十五束二畝七字田。假粟

百六十七丸二毛一字田。



貢松竹杉梅鹿革猪肉態膽等。

早良神社。泊瀬部天皇三年庚戌七月所祭。

玉依比咩也。神貢三十束三毛二字田。

鳥羽陵。天國排開廣庭天皇三十七年庚寅

二月。蘇我稻目薨逝。以夢之兆藏骸於茲。

其骸以鳥羽(鳥羽邑號)故號之。

淨土寺。豐御食炊屋比咩御宇十八年庚午

秦河勝各置一國一院。其一院也。寄田五十

束三畝三字田。

高瀬池。出鯉鮒鰻魚澤菜滑菜等。

豐日岡。出奇檜材松等。

澤食。公穀二百七十束三畝二毛田。假粟百

十七丸三字田。

貢葭兼食筍菱豆等。

野澤。周程六里許。祭瀬織津比咩。神貢七

束三畝。

羽食溪。公穀二百八十束三畝三字田。假粟

百三十五丸二畝三毛田。

貢葛藏松葦澤瀉獨活等。

蓮光寺。天平勝寶三年辛卯三月行基開基

也。寄田三十束六畝三字田。

猪田墓。猪田直負疫死此。諸民患疫者告

此墓。忽然治其疫如神。迹墓戶田二十九三

畝田。

此間虫喰

那閉崎。公穀四百七十二束三字田。假粟二

百三十九丸二畝三毛田。

貢松竹梅桃橘柚子等。亦出諸鮮山海美

味。

那閉神社。男大跡天皇三年乙丑四月。所

祭事代主神也。神貢三十五束三字田。

顧成寺。白雉二年辛亥五月道昭和尙造立

之。欲成入唐渡法之願。寄田廿五束三畝。

放生也。淳中倉太珠敷天皇七年正月。令



天下之海川池澤。每月六度放生。其一池也。

山西。公穀六百七十六束三畝三字田。假粟

三百七十八丸六字田。

貢松栢杉竹桃梅栗葛蕨松葦鸛鶴鴻雁鴨鷺

諸雀海鹽諸鮮諸菜等。又出怪石奇砂。

坂本神社。瑞齒別天皇二年戊申四月所祭。

大己貴命也。神貢百束三畝三毛田。

坂田森。坂本神社之行在宮。

德行院。百濟日羅法師安。無量壽佛□。寄

田三十二丸二畝田。

葛間池。貢鯉鮒諸鮮魚。

此間虫喰

藤枝驛。公穀百六十束三畝。假粟七十二丸。

驛料四百七十九三字田。

〔大寶二年壬寅爲新驛〕

其那輪川。爲藤枝之田水。四五月頃者。洪

水爲害。河西河東經廿數日次大猪之難瀨。

此間虫喰

三輪。公穀三百七十二束三字田。假粟百七

十六丸十字田。

貢松竹松葦橋柚等。

三輪神社。天豐財重日足姬天皇二年丙辰

四月所祭。大物主神也。寄田五十束三字

田。

勝間陵。國造勝間直死之。故葬之。

虫喰

嶋田驛。公穀百六十束三畝田。假粟九十二

丸三毛田□字田。

貢柴胡香薷鮎鮪諸鮮蘿蔔澤芹等。

大猪河。爲其堺。四時洪水。霖雨之時者往返

扣馬。笠簔經日朽破。涉月其水派未治。尤

爲邊要。其急馳官使國奏之人者。編藤繩橫

修竹。任其波浴其瀨二三町。下大碇而待

海船。而着金峽之岸。多者損其命沈其駄。

小河。公穀二百七十二束三字田。假粟。虫喰。



瀬麓瀉。公穀二百六十束三字出。假粟百六

十二丸一字田。

貢諸鮮鸛鶴鴨鴛等。

加太乃加美。公穀三百六十二束三字田。假

粟百八十二丸三畝田。

貢松竹梅桃栗橘等。

三田川。貢鮎鮒等。其源出片瀬瀉。

箭葛。公穀二百七十束二字田。假粟百二十

三丸六字田。

貢芹菜等科。(科コ)

柳田神社。大化二年丙午二月所祭。雙粟(粟コ)

神也。

赤見川。出鮎鰻鴨鴛等。又出珍石。

朝夷田。公穀三百六十二束三字田。假粟百

九十二丸六畝二毛田。

貢松梅杏栗柴胡蘿蔔等。

朝夷田神社。所祭饒速日命也。白雉年中

之勅也。

飽波井。公穀三百七十二束三字田。假粟二

百十六丸。

貢葛蕨松竹鹿猪狐狸等。

飽波神社。大鸛鶴天皇六年戊寅十月。所

祭少彥名神也。神貢八十二丸三字田。

八田。公穀三百七十束。假粟百二十九二畝

田。

貢松竹梅橘鸛鶴等。

成龍院。朱鳥元年行立法師立之。□寄田

二十七丸三字田。

虫喰

物部。公穀二百七十二束。假粟百六十二丸

二字田。

貢松竹梅柳等。

物部川。出鮎及諸小鮮。

高柳。公穀百七十二束六字田。假粟八十三



九三字田。

貢羅蔔薯蕷澤潟等。

正法寺。慶雲二年乙巳五月。義淵僧正開基之地也。安。沈木中佛。寄田五十七束三畝三字田。

燒津。公穀五百八十二束三字田。假粟百九

十三九六字田。

貢松梅橘柚柑子修竹鴻雁鷺雉。

燒津神社。瑞齒別天皇四年己酉。所祭。市杵嶋比咩也。神貢三十束三畝三毛田。

日本惣國風土記第五十八

薦河國止駄郡。

浦二箇所。名山九。岡五。池二。河四流。

川三派。泉三磯。宮祠十五箇所。寺院十三宇。

墳墓三基。

止駄郡。東限岩田山。西限八木間山。南限開

杉。北限大野峰。國之要壘在岩田山下。

貢杉竹梅櫻芹菜鶴鵜鴨鷺鹿狐狸兔并諸鮮魚食鹽。

岩田。公穀三百七十二束三字田。假粟百八十二九三畝六字田。

貢竹梅杉并薇蕨鹿狐皮。

岩田神社。大化二年丙子三月。所祭天照太神宮也。神貢百束。

岩田山并岡。其貢記前。

極樂寺。白雉四年戊午十月。法明尼草創之地也。寄田三十丸。

大長山。公穀二百七十二束三字田。假粟百三十二九三字田。

貢芹菜鶴鵜鷺鴻。

大長山神社。號健部宮。白鳳二年癸酉正月。所祭健角見神也。神貢二十八丸。

行教寺。大寶二年壬寅四月。玄昉開基之地。



也。寄田二十五束。安彫木之不動尊佛。

大津。公穀三百九十二束七畝三毛田。（三〇七）假粟

百九十七丸三畝三毛田。

貢食鹽諸鮮魚鸛鶴鴨鸞諸采。其濱隣田井浦。

直江神社。慶雲三年丙午正月。所祭瀬織

津比咩也。神貢三十九。

岩城浦。其貢似大津。

岩城神社。和銅四年辛亥八月。所祭三所

熊野也。

久保田。公穀二百五十束三字田。假粟百四

十三丸三毛田。（字三）

虫喰

宗德寺。朱鳥元年丙戌十一月。

開基。寄田二十七丸。

虫喰

葦原。公穀四百三十束。假粟二百十七丸三（五）  
（束三）

字田。

豐受神社。大寶三年癸卯九月。所祭國常

立尊也。神田三十束。有神戶巫戶。

行住寺。定額。靈龜元年乙卯十二月。玄昉開

基之地也。寄田三十五束三字田。

山世墳。紀直山世死。于役葬此。故有此

號。

虫喰

餘野。公穀二百六十七束二畝田。假粟百二

十七丸。

貢芹菜梅櫻走兔。

餘野川。其流入興津河。

貢鮮魚。又出怪石。年魚以尺筭之。充內膳

司之子之厨用。（子三）

宿曜星。往昔宿曜星落于此。故有此號。

佛德寺。白鳳三年甲戌三月。少僧都義成開

基之地也。寄田三十九三畝田。



英原。公穀二百七十二束。

虫喰

大野。公穀二百七十二束三字田。假粟百三

十九三畝二毛田。

貢芹菜梅竹松櫻薇蕨葛根。

大野神社。大化三年丁未三月所祭。猿田

彦也。神貢二十五束。

大野岡。在神社之東爲假之宮社。

此後虫喰

右風土記殘冊十七冊之內。薦河。止駄郡之餘

卷。求藤大納言高基卿之家本。與官本按合

畢。雖然蝨魚之害。闕誤繁多。而悲於兔園之

冊。暫時取其朽卷而爲政事之一助者也。

文和元年壬辰八月下旬

朝散大夫中原師行

右風土記。以舟橋秀賢家本寫之畢。

明曆第二丙申。被聽之。書寫之畢。尤當

家之制書也。

中原職忠

右風土記。薦河郡。以於野村宗竹子本與中

原職忠入道萃菴翁家本按合之畢。

萬治元年戊戌十月上旬

交野内匠頭在判

右駿河國風土記非上古物蓋後人作耳然其中間有可取者姑載備博覽

〔更以後藤嘉繁本校正註卽是〕



群書類從卷第五百一

雜部五十六

安東郡專當沙汰文

元德元年後醍醐已十一月注之。

安東郡權專當方御田供用。御粃。大餅。小餅等収納。并宮中奉納以下方々支配沙汰之次第。

一既得歲者。御田半仁所納之御粃事。滿熟歲事也。

一新加御田壹段。御粃納定一石四斗一升。半御田。納升定七斗五合。大餅一段三十枚。半大餅十五枚也。小餅一段三十枚。半十五枚也。但損亡之歲。得田分勘可納之也。

一本加御田壹段。御粃納升定一石三斗一升宛納之。大餅一段二十二枚宛。小餅六十枚宛也。半御粃六斗五升五合宛也。大餅十一枚宛。小

餅三十枚宛也。但損亡之歲。得田分勘可納之也。

一新加御田。損亡之歲。御粃餅等可勘納之次第。

六十步。御粃貳斗三升五合宛也。十步。粃三升九合二夕宛也。六十步。大餅五枚。小トハ一枚ガ三分ノ一ノ事也。十步。大餅八分八分トハ一枚ガ五分四ノ事也。アタル。於小

餅者雖爲損亡之歲。無減失之儀者也。本加同前也。

一本加御田分損亡之歲。粃餅等可勘納之次第。六十步。御粃貳斗一升八合三夕宛也。十步。粃三升六合四夕宛也。六十步。大餅三枚七分也。七分トハ一枚ガ三分ノ二ノ事也。十步。大餅六分也。六分トハ一枚ガ半分過ガ事也。於小餅者。如新加。雖爲損亡之歲。不可



有減失之儀者也。

一新加御田大餅事。背先例減進之條。無謂之

由。盛光奉行之時。于時元弘元年辛未歲致訴訟之間。自

當年段別參十枚宛。可備進之由治定事。

半十五枚宛也。損亡歲可結解之分。六十步。

大餅五枚宛。十步。八分。八分トハ一枚カ五分四ノ事也。

一當時宮中注進之分。本御田名付。并丁部等名

字事。合宮中注進之分一町。但此內五段半。供用動仕之御田也。殘四段

半。或ハ在地直會要料。或船所料。或專當得分田也。

半。赤坂。丁部鶴三郎。納所住人。

半。泉御田。丁部河路宮內。

半。奧波井。丁部中跡部半四郎。

半。淺方。丁部河路石若四郎。

半。森前。一。丁部跡部宮內允。

半。古神田。丁部同宮內允。

半。鳥加部。但大餅十七枚成之。丁部納所全次郎。

半。鳥加部。丁部藤三郎。

半。野依。丁部納所若大夫入道。

半。比津目。丁部納所松三郎。

半。木本。丁部金輪乙石四郎。

半。木本。丁部金輪閑王六郎。

半。道師田。丁部納所勾當。

半。深見。丁部納所道海房。

半。深見。丁部納所乙四郎。

半。平田。一名多毛。丁部押加部刑部入道。

又一名丸子。

半。多毛石瀬。丁部同刑部入道。

半。小世古口。丁部彥三郎。

半。小世古口。丁部文三郎。

半。赤目。丁部納所左近允。

已上一町也。此內五段半。宮中供用備進之

御田也。殘四段半。內一段半。漕丁部船所料。



田船貨用<sup>ニ</sup>立之。<sup>又號ニ直</sup>一段半。在地直會祓  
饗料所<sup>又號ニ衆</sup>一段半。宮中直會祓酒肴并方

方所進酒肴料被<sup>レ</sup>置之。

一除御田分

<sup>本加</sup>半。世古口。丁部孫次郎。

<sup>本加</sup>半。堀田。丁部納所左近允。

<sup>新加</sup>半。垣副。丁部納所若大夫入道。

<sup>新加</sup>半。遮見。丁部押加部刑部入道。

<sup>本加</sup>半。葦田。丁部金輪秋太郎。

<sup>新加</sup>半。氣宇志<sup>キウシ</sup>。一丁部納所忍阿彌陀佛。

<sup>新加</sup>半。赤目<sup>アカメ</sup>。丁部納所忍阿彌陀佛。

<sup>新加</sup>半。龜森<sup>カメガモリ</sup>口開<sup>ミチノ</sup>。丁部納所忍阿彌陀佛。

已上四段。<sup>此内ニ二段者。專當分田也。</sup>

此外專當分田一段。<sup>半(新加)井手。</sup>

所一段。御田前々專當ガ爲<sup>ハ</sup>由來之間。相互

爲<sup>ハ</sup>無<sup>ニ</sup>當職<sup>ニ</sup>達亂。雖爲<sup>ハ</sup>專當分田。彼由來

彼由來爲<sup>ハ</sup>當職之時者。彼分田一段者。當方

可知行之由。亡父氏光神主被<sup>レ</sup>契約<sup>ニ</sup>畢云々。

一寄御田名字并御粗員數丁部等名字事。

合。

<sup>新加</sup>半。古河。丁部納所忍阿彌陀佛。

雖<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>寄御田。本田之役勤之。

<sup>新加</sup>半。丸子<sup>マロコ</sup>。一丁部同忍阿彌陀佛。

<sup>新加</sup>半。聖田。丁部金輪隣次郎。

<sup>新加</sup>半。龜森<sup>カメガモリ</sup>。御粗三斗一升。

大田分ニ。粗一斗一升。彼是四斗二升。丁部<sup>幸德</sup>三郎。

半。古神田。割田一段也。粗四斗丁部結緣寺橋爪右衛門次

郎。

<sup>横井御田</sup>粗二斗一升。丁部土與熊大夫入道。



一段。クツト久津止。口<sup>戸ト云。</sup>粃六斗一升。丁部下次郎。

ヨモギハラ 蓮原御田半  
粃二斗四升。野垣内左近允。ヤカイツノ

クラカキツノ 倉垣内御田半  
粃一斗一升。代錢百文成之丁部結縁寺右衛門入道圓覺。

コモグチノ 舊口御田半  
粃一斗一升。丁部。同右衛門入道。代百文弁也。

ハウシカイト 方士垣内分  
粃一斗一升。丁部。同右衛門入道。

エノキ 榎木  
半。粃二斗三升。丁部德阿彌陀佛後家。

水坪半  
粃一斗。丁部津矢佐宇垣内。掃部

松本半  
粃一斗一升。丁部森鶴次郎。當時垂見越中入道知行也。

ナカダ 中田半  
粃二斗一升。丁部蓮佛次郎。領主河邊少副入道次男八郎。

田半  
粃一斗一升。丁部千與石次郎。當時河崎長松二郎知行也。

音木  
半粃二斗四升。丁部。結縁寺住。大進方。

一神戶寄御田一町。字音木。別記。但五段敷。

號能登守一。

音木 但一斗二升也  
粃二斗二升。白米二升。神戶侍從房

音木 但一斗二升也  
粃二斗二升。白米二升。神戶九郎兵衛子息。

音木  
粃二斗一升。白米二升。神戶駒次郎。

音木  
粃二斗一升。白米二升。神戶龜王兵衛。

音木  
粃二斗一升。白米二升。神戶三位房。

木坪御田半  
粃二斗二升。垂見越中入道。每年代錢百五十文成之。

一音木寄御田一町。神戶住丁部等沙汰分。段別

粃二斗二升。納定。白米二升。宮中御饌宛。此白米龍

馬子ノ號鯛鯛代。錢十二文成之。但鯛專當之御

饗料也。又開祓酒同。丁部等段別二升宛出之。在

肴。先例也。而丁部等彼所役。稱為大事。強歎

申之間。近年段別代錢二百文宛。可致沙汰

之由令契約云々。當今四段令隱田。可尋付

也。

一御本田。宮中注進之分一町也。而此内五段半。



宮中供用御粃大餅等沙汰上之。御粃。正供用

段別一石宛也。其外口粃。斛別四斗也。然者五

段半之分。正供用五石五斗。口粃二石二斗也。

而彼口粃二石二斗也。內一石一斗。出納所鑑

取二人得分之。殘一石一斗之內五斗。西御倉

量之。是號<sup>ニ</sup>祓<sup>ニ</sup>粃<sup>ニ</sup>。物忌等得分之云々。殘六斗。公

文所方量之。已上正供用五斛五斗。口粃

二石二斗。彼是七斛七斗也。仍殘御田四段半。

方々分田也。所役支配之分奥注之。

一宮中奉納之時。供用御粃口粃等運上量定之

次第。

一御粃。俵二十四俵量之。但此內廿二俵正供用

五斛五斗并口粃一石一斗量之。年々無相違。此廿二俵ニテ奉量

レ之。又殘二俵內是家用升一斗二升。殘之殘一

俵餘御器御倉五斗粃量之。號<sup>ニ</sup>祓<sup>ニ</sup>粃<sup>ニ</sup>。前々此分

無相違。又於公文所分之口粃<sup>號<sup>ニ</sup>口<sup>ニ</sup></sup>六斗者。或

年粃量。或年以代錢沙汰上之。但代物之時

米和市賣<sup>ヲ</sup>勘<sup>テ</sup>成<sup>レ</sup>之。

一宮中供用之御粃奉<sup>ニ</sup>量<sup>ニ</sup>之斗與。在郡御倉付奉

納之升高下量立事。

合。以<sup>ニ</sup>在地納俵一俵。宮中斗ニ三斗ニ令<sup>ニ</sup>量<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>也。在地納俵者。一俵別三斗五升宛入也。以<sup>ニ</sup>彼俵<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>宮

中數<sup>ニ</sup>斗<sup>ニ</sup>量<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>也。定三

宮中御粃納之斗在郡御倉付御粃納之升一斗

一斛七合以。宮中ノ斗量<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>之。譬ハ在郡之納升。一石一斗七升ヲ

以<sup>ニ</sup>宮中ノ斗一石ニ量<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>之。更無<sup>ニ</sup>相違<sup>ニ</sup>。

一宮中御倉納御粃俵五斗俵也。斗量定。以<sup>ニ</sup>彼一俵<sup>ニ</sup>三升摺<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>之云々。但有<sup>ニ</sup>未進<sup>ニ</sup>之時。以<sup>ニ</sup>代錢<sup>ニ</sup>沙汰之時。以<sup>ニ</sup>彼勘定<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>致<sup>ニ</sup>其沙汰<sup>ニ</sup>也。

一長御館納粃量之次第。但御館納粃以<sup>ニ</sup>寄御田<sup>ニ</sup>之粃<sup>ニ</sup>量<sup>ニ</sup>進<sup>ニ</sup>之先例也。

正納粃九斗。宮中ノ斗定也。口粃一斗八升。彼是一斛

八升量之。但御粃俵四俵之內是家用升<sup>八合ニ</sup>升也。

二斗。殘之殘三俵餘正納粃。口粃。皆量滿之。

年々此分無相違。但彼粃量之時。自專當方

酒肴送之。清酒二升。干魚一連也。無<sup>ニ</sup>干魚<sup>ニ</sup>之時。小海老四五



具用之。長御館ノ出納々々之先例也。又彼粗量之時。爲御館之出納之役。專當方之使酒等給之先例也。

一滿熟歲宮中奉納之時。清酒支配之次第。

清酒五升。御祓方進之。

清酒一斗一升三合。直會方進之。

清酒一升五合。號二酒殿進之。

清酒一升五合。號二御器御倉進之。

已上宮中分壹斗九升三合也。

近代以二代錢全次郎荷用ニ下ニ行之。奉ニ成事。嘉曆二年。三百七十二文下ニ行之。元亨二年。四百五十八文下ニ行之。又彼全次郎荷用ニ大餅一枚志レ之。以二代錢沙汰者。爲專當ニハ莫大ノ利潤也。可レ得ニ其心之者也。以酒沙汰之時ハ酒屋ノ升定ニ斗五升ノ斗入也。

一滿熟歲。宮中奉納并方々支配之大餅事。已上

貳百卅六枚也。此內方々分配之次第。

大餅廿五方ニ進レ之。大餅七十二枚。直會方ニ進レ之。十七枚。酒殿ニ進レ之。御器御倉。五十枚。長官ニ進レ之。廿八枚。二禰宜殿ニ進レ之。廿八枚。政所大夫之分也。是皆自政所大夫之方被出支配

目六之間。守其旨如此分進之。先例也。但

近代僞。大餅不法之由。物忌以下方々精好之間。號ニ毛餅。又稱ニ次。直會祓長官御分。三方之分依。精好ニ二三枚宛差進之。自餘之方々不

及精好之上。向後又不可有其儀之者也。

一宮中奉納日。大餅二枚下部等中下ニ行之。

一宮中奉納時并次日方々送進之酒。大餅。籠餅

等事。籠餅ハ一籠三十枚入レ之。

合。但大餅并宮中奉納之時。清酒支配事。右雖注レ之爲目安ニ重注レ之。滿熟之歲分也。損亡之歲大餅ハ可レ減也。

大餅二十五枚。清酒五升。御祓方進之。

大餅七十二枚。清酒一斗一升三合。直會方進之。

大餅拾七枚。清酒一升五合。

酒殿進之。

大餅拾七枚。清酒一升五合。

酒殿進之。

奉納日。



大餅十七枚。清酒一升五合。號二一。御器御倉進

之。奉納日。

大餅五十枚。小餅七籠。一籠別三十枚宛入レ之。清酒二瓶子。

四升也。長官進之。送文進之。但里殿進之也。

大餅廿八枚。小餅一籠。清酒一瓶子。二升。二殿

進之。送文在之。號三獻文。

大餅廿八枚。小餅一籠。清酒一瓶子。二升。政所

大夫方進之。送文在之。

小餅一籠。清酒一瓶子。二升也。長御臺所進之。

送文在之。

小餅一籠。清酒一瓶子宛。二升。長官家子之御

方進之。送文在之。但隨三人數。各一荷宛可進之也。當時ハ二人也。

小餅一籠。清酒一瓶子。二升。出納所大夫方連

之。送文在之。

小餅一籠。清酒一瓶子。二升。鑑取方進之。送文。但專當

之使酒無之。勸之云。

小餅三籠。宮中奉納之時進之。但此内二籠者。

物忌等得分之云々。一籠者。公文所被得分之

歟。而當時人長等抑留之云々。違先例歟。小

餅一籠。大餅一枚。漕丁部方遣之。在黑米二升。在郡之時。

已上大餅二百三十七枚。但目六之外。一枚過分。清酒三斗

九升三合。加長御館ニ。二升之定也。小餅十八籠也。一籠ニ三

也。籠別ニ三十枚宛入レ之。

但損亡之歲者。得田之分一町配分供用。御

五段半之分可備進者也。大餅者。一町之分可

令皆進。但泉御田半分ハ餅稱ニ無之由ニ不進之。殘九段之分ハ可進之。得田之分計也。

一損亡之歲。御粃。大餅等者雖減少。小餅酒肴

等方々皆無減少之儀。

一大餅籠餅并清酒等可用意分法事。

滿熟歲者。都合大餅三百枚可用意也。此内二

枚。任政所出對之目六可入レ之。又方々大餅等所進之段不法之由。令ニ精好ニ之間。或號ニ次餅。或稱ニ老餅。隨分

限。三四枚。又一二枚宛老レ之。彼料ヲ二十枚計用ニ意之。又此外親キ人々并ニ方々志ニ遣之分。三十枚計可用ニ意之。



而者彼是三百枚之用意不可有不足。又小餅  
廿箇可<sub>レ</sub>用意之。一籠ハ餘分。清酒四斗可<sub>レ</sub>用意之。

大餅者。餘丁部等之神德餅二十餘枚之定也。

一宮中奉納之時。安濃東西郡正權專當等。寄合  
直會祓料肴魚以下之物等買之。大意日記事。

直會料生鯛三隻。勢二尺一二寸計。代錢百五十計歟。

祓料大魚一隻。若無大魚者ワラサ二隻計歟。代錢百四五十計歟。

名吉十五隻計。方々ノ料。代錢三百計歟。高直之定。

酢二升。代錢十文計歟。

薪一荷。代錢廿計歟。酒ヲカサム料ナリ。

薑二把。代四文歟。

松一束。代廿文計歟。續松ツイマツ料ノ料ナリ。

箸百膳計。

眞菜箸四五膳可<sub>レ</sub>用意之。彼是都合代錢六

百四五十用意。不可有不足。但東西郡正權專當寄合之時之儀也。一郡ノ正權奉送奉納之時ハ可<sub>レ</sub>致減益之沙汰一者也。各同分ニ可<sub>レ</sub>出錢一也。但依<sub>レ</sub>時魚等高下可<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>之。

一宮中供用御粗送文案。奉納日出納所大夫(奉行方)ニ進<sub>レ</sub>之。厚紙一枚ニ書<sub>レ</sub>之。其上ニ羅伊志卷<sub>レ</sub>之。其立卷ヲ表書無<sub>レ</sub>之。

進上。

二宮朝夕御饌料御粗事。

合伍斛五斗者。私記依<sub>レ</sub>其年之既得損亡。員數ヲ可<sub>レ</sub>書載一也。

右安東郡權方。當年所當御粗進上如<sub>レ</sub>件。

嘉曆參年十二月廿日安東郡權專當守吉上  
一方々進之送文案。但酒大餅小餅等。員數之多少雖有子兩人。一殿政所出納所之許(送文)文章同前。但員數有多少。長進之分也。滿熟歲之定。

進上。

御酒二瓶子。

大餅五十枚。

小餅七籠。

右進上如<sub>レ</sub>件。

嘉曆參年十二月廿日安東郡權專當守吉上

一每年二月亥子日銚山神夏之時。山鳥雄一羽宛。政所大夫出納所大夫方。各一羽宛進<sub>レ</sub>之。



號亥子之鳥。

一每年五月五日節供料。御田半之丁部面々方。  
干名吉一隻宛上之間。專當使郡令入部。五月  
一日安乃津市大畧取集之歟。方々支配之次  
第。

七隻長官進之。二隻七殿進之。家子ノ分也。二隻  
多聞大夫殿進之。家子ノ分也。二隻政所大夫方進

之。已上十三隻方々進之。所殘之分專當得  
分之。但彼魚對捍之時者。代錢二十文宛取之。

一常樂寺御田米。無窄籠之時。魚等所進之送文  
案。爲後日注置之長進分。

進上。

名吉十三隻。

右任先例進上如件。

嘉元二年五月三日

安東郡權專當吉貞上

家子五殿八殿并政所大夫方へ所進之分員數文章皆同前條此文案  
進上。

名吉三隻。

右進上如件。

嘉元二年五月三日

安東郡權專當吉貞上

關ノ日記云。今日三日。丁部字福宜太郎。名吉廿九隻持  
來之間。相副彼太郎於若菜女。任送文所進之了。  
一每年正月專當之代官益取。又號職吏。丁部每家令

行之間。節餅居之。各二前宛居之。云一前別ニ餅七枚宛在之。酒同盛之。

一每年十二月廿七八日比。號節料鳥。但元三之饗時料ニ被用之。山鳥雄一羽。長御館進之間。出納請取之

云々。但近代檜垣東長官御時。依被精好。雉雄  
一羽進之。鷄新儀也。

一在潤月之歲。酒月粃。トテ錢三百文宮中出納所  
方進之。但此內正物二百五十文也。殘五十文。

郡奉行之人長得分之。元德二年午閏六月之時。三百鶴口有秀ニ渡ス之間。五十文。



得分之。彼<sup>ニ</sup>代者。西郡正權專當六百。三百文宛。東郡

正權六百。三百文宛。出對之間。彼是一貫二百文之

內。一貫爲正物。出納所<sup>或時ハ</sup>。方進之。二百文

人長得分之云々。件<sup>ニ</sup>代錢御田一段五十文宛。

半二十五文宛。丁部之手專當取之。若對捍之

時者。御<sup>ニ</sup>納之時。納定一段之分一斗量取之。

半五升也。

一在地御倉付之時。御<sup>ニ</sup>納之升勢寸法事。

弘六寸。深二寸五步也。鐵尺定。中ノ寸法也。高納在

之升上居程爲限。

一專當郡入部之時口開饗營之。料所者。龜森御田。半ニテ毎年ニ營之。

當時忍阿彌陀佛營之。彼口開<sup>又クチアケトモ云。</sup>

饗。專當并丁部等寄合食之。彼時先二種肴

一種<sup>ムキマメ</sup>。又毛立一酒三獻飲之。酒坏ハ白地也。先

專當飲之後。其酒坏丁部等飲流之。三獻畢之

後飯居之。飯勢四升盛計。專當前机重居之。汁一菜七

種。此內一種ハ生魚ヲ。一引渡ニ盛レ之。又號箸臺。錢五十文專當前

計。箸臺ノ佐羅置之間。專當ガ得分也。次丁部

前飯菜居之。但二種肴之折敷居之。菜三種

也。汁各一宛也。又饗取上之後。立酒名付酒二

獻飲之。打置肴在之。酒坏白地也。丁部前飯

一升五合計盛之。又專當ガ女房家子料饗。二前。專當許ニ進レ之。

一衆頭饗名付。總御田內一段丁部每年巡廻半

宛二日饗膳營之。專當并丁部等彼饗營之。丁

部許令<sup>ユキヲコナハ</sup>行行之習也。先二種肴。一種ムキマメ。一種鱸。

毛立一以。酒三獻飲之。酒坏白地也。專當先

飲始之。其酒杯丁部等飲流之。三獻終後飯居

之。飯勢四升盛計歟。專當前机重八種御菜也。

但一種生魚ヲ引渡ニ盛レ之。箸臺錢五十文在之。專當前計也。此外自餘ハ無レ之。此外

專當女房并家子料。饗膳二前。專當許送之。酒

二升同副之。次丁部前飯菜居之。三種御菜

也。二種肴折敷居之。立酒在之。打置肴在之。



一廻饗ト名付。丁部等皆寄合饗營之。專當給之。二種肴毛立。酒三獻飲之。其後飯四升盛居之。專當前机重七種御菜也。汁一。是箸臺錢無之。女房家子。飯二前在之。次丁部飯一升盛居之。二種肴之折敷居之。汁一。菜三種也。若依方々計會。此饗不動仕之時者。號廻饗錢。半丁部一人宛ガ手ヨリ錢參十二文宛。專當方取之。此饗如此代沙汰之時者。爲專當莫大之所得也。但此饗勤營之根元者。其古專當在郡之間。爲慰其徒然。丁部等寄合。以飯酒專當ヲモテナス夏有。其ヲ例ニシテ。當時マデ營之。饗毎度。專當之從。クチアケノ者ニ皆飯有レ之。

一口開饗以後。以吉日御倉付在之。先御倉シメラ標引廻。其後新筵敷。御料奉寫也。但御料持來丁部等。開祓酒。一人別酒二升宛。肴一種編魚一連。若海老。持來。先例也。職事號鑑取先奉寫之。御料之所捧。太麻。御祓勤行之。其後開祓酒御

料進之後。專當丁部等。彼酒飲之。其後職事御料奉量之。高納在之。升上居程爲限。又筵拂半別。料二升計量殘。職事得分之御料俵。以三斗五升爲一俵。升分法右注之。

一籠搦之時。其年饗勤仕之丁部三人。方人別酒五升宛出之。彼是一斗。彼肴干魚一連宛。又專當方大餅二枚出之。肴切之間。專當丁部等飲之。丁部等皆寄合御料餅俵等結誘。ト名付。ユイコシラフ是ナ籠搦。

一濱下者。籠搦日卽下之。彼時馬子酒專當方五升出之。前々彼酒直料百文出之云々。近代酒五升出之也。丁部等面々馬一疋。口付一人宛出之。御料俵餅俵等。津湊度々員下之間。湊漕丁部請取之。御船奉積之。

一湊祓料大餅一枚。小餅一籠。散供料黑米二升。ハ合。漕丁部方遣之。專當升定。役也。

一船中乘人一人。專當方乘之。彼糧米米三升遣



之。專當役也。

一神德餅。大餅一枚宛。丁部等籠搦之時。面々皆給之。每年不謂損得。如此人別一枚宛給之。先例也。

一丁部等巡廻。每年一人宛。宮役夫專當神宮參之時召具之。宮中奉納之間者仕之。奉納以後安乃歸。但神宮參之時。宮役夫方神宮糧米料白米二升。專當方沙汰上之間。令仕之程者。專當養之。但近年ハ夫役料ニ代錢百文出之間。專當請ニ取之。神宮ニテ雇レ人也。

一堅田寄御田。半一段。割田定者。和氣部伊勢守寄進之間。大餅十一枚。神德餅彼方遣之。但當時者。其子息藏人入道許遣之。

一專當在郡之時。漕丁部方生魚一貫。專當之方上之。先例也。御菜魚ト名付。

一專當在郡之間者。以私自糧米食之。

一專當令入部ニテ在郡之時者。先念濱出鹽アブベ

キ也。

一長官仰隨。京都夫一人出立之時在之。如此之時。丁部等寄合出立之。但一年中二ケ度出立之時。一度專當之役。上洛用途二百五十文沙汰之。二度丁部等之沙汰也。

一船貨糶二俵。漕丁部方遣之。但常樂寺御田無牢籠之儀也。古者船貨糶三俵遣之。云々。近年者二俵遣之。

一安東郡權專當方。大餅自昔段別五十五枚宛上之。先例也。而前專當能光神主假名吉貞。盛光ガ舍兄也。之時。丁部歎申云。可被減大餅於半分。然者錢貨取集專當可志之由就令申之。取最少分錢。段別大餅二十六枚被減之。被出狀於丁部等中云々。新儀非例之至。存外之次第也。就中盛光等之親父氏光神主奉行并能光神主。當職奉行之時。段別五十五枚沙汰之條無相違之處。近年丁部姦令出合少分用途前專當



能光神主志之。僅半分被減之條無謂之上者。許于神宮申下廳宣召出彼放狀不奉知于公方私破此狀而大餅如元段別五十枚宛可奉成之者也。

一宮中奉納日。新藁筵一枚。宮中進之。先例也。

事實之役也。大餅可量料也。正方ヨリ一枚出レ之ニハ被餅積レ之權方一枚ニハ直會餅積也。

一常樂寺御田奉作之時。權專當方所進之。大餅已上四百八枚云々。而當時餅減失之次第。大餅百十七枚。常樂寺御田四段半分。也。又二十六枚。河邊少副入道跡御田一段半。十三枚。泉御田分。已上百五十六枚當時減失也。

元弘元年辛未十一月二注之

一 大餅不足事。假名守吉。奉行之時。申下二ケ度

廳宣。兩使中。一志初王大夫殿。文棟神主相向于在郡。雖被問答子細於丁部等。前專當吉假名。出狀之上者。不可増進之由雖申之。再往問答之刻。以和談之儀。自當年元弘元年

辛未歲。又四段別四枚宛可春進之由。丁部等申之間。雖違所存。先令承知畢。仍向後者。段別大餅三十枚宛也。前段別廿六枚也。今又増分四枚也。半ニハ可爲二十五枚也。新加御田分也。

一亡父氏光神主。永仁六年十月十八日。在地御倉付御粃納帳之端書日記云。

一新加分正御田一段。大餅五十五枚。小餅三十枚。上之粃一石二斗。又風宮御料三升。節料二升宛。子鳥代二升。入落一升。日公事二升。雜事料四升。已上一石三斗四升上之。此内一石二斗者正物。殘一斗四升者專當得分。

一半正納六斗。風宮料一升五合。節料二升。鳥代二升。日公事二升。入コヲシニ一升。雜事二升。已上粃七斗五合上之。又大餅廿七枚。小餅十五枚上之。

一本加巡一段。正物一石一斗。風宮御料三升。鳥代二升。日公事二升。臨時雜事四升。入コヲシ



ニ一升。已上一石二斗四升上之。大餅廿二枚小餅六十枚上之。

亡父氏光神主自筆日記如此。仍爲後日了見書寫之畢。

一外宮長官以下禰宜。或依神宮大訴。或應勅

定。京都上洛之時者。其日安東郡被落着之

間。東郡正權專當等寄合落着。御雜事勤營之

先例也。禰宜御前衝重飯三升盛計歟。白米一升。四合之飯。

汁魚頭。菜八種。清酒進之。家子前衝重居之。飯

二升盛計歟。汁二菜七種。酒同。公文所。前折

敷居之。飯二升盛。但今少分可レ減之。汁二菜五種。酒

同。殿原分。折敷居之。飯一升盛。汁一菜三種。

濁酒出之。中間分。飯三合。汁一菜三種。白酒

出之。下部以下等。飯三合。菜二種。一種精進。一種干魚。以

荒物出于總中也。酒無之。但可依時儀歟。

後朝御立雜事者。西郡正權專當兩人勤營之。

先例也。但近年御上洛之時者。以代錢。人別

壹貫文宛長官進之畢。東郡正權シテ二貫。西郡正權分ニ二貫。彼是四

貫進之畢。兼又去元亨元年二月十一日。長官

并自餘禰宜御上洛之時者。以熟膳營勤之。

其後又依心御柱寸法不足否之事。一禰宜。常良。

傍官御上洛之時者。以代錢一貫文宛。令進

長官畢云々。又正慶元年壬申十一月。依有武家

憤之事。可有禰宜。常良。五禰宜良尙。上洛之

由雖被下度々院宣。依有先帝御謀叛同心

沙汰。恐京都公家武家理不盡之御沙汰。無上

洛之儀。於關東爲申披差違。長五殿鎌倉御

下向之間。同十二月五日御立。同六日自有龍乘船。彼時安東郡正權

專當等兩人シテ五百文宛出之。彼是壹貫文

且トテ令長進畢。正專當國綱。改名國久。權專當守吉。此分者准

御上洛也。同時西郡專當二頭工清正一貫文

進之云々。兩分正權。同時員弁郡正專當延景。權爲

廣兩人ニテ三貫文令進之。



一康曆元年<sup>己未</sup>八月廿三日。外宮依御遷宮十六

ケ年延引。禰宜京都上洛也。但今度ハ下向也。安濃津被

落着之間。東郡正權シテ一貫文出レ之。西郡正權シテ一貫文出レ之。彼是以貳貫

文。御雜事勤營之也。三禰宜朝照。五禰宜真昌。

六禰宜晨彦。七禰宜久彦。九禰宜常勝。上洛云々。

禰宜前十六文。ハタゴナリ。三殿。家子二人。殿原一人。五殿。家子二人。

殿原三人。六殿。家子一人。殿原二人。七殿。家子二人。中見十五人。殿原三人。但此七殿ハ長官ノ子息。但落着之雜事計也。但東西郡相共沙汰之一云々。公文所

政所文種。公文文奉。二云人々。私記於上洛米者。

隨眈之員數專當半分。丁部等半分沙汰之一云々。



康正二年造内裏段錢并國役引付

合。

五貫八十文。

五月廿九日廿六日定。  
送狀在。請取出。

五貫文。

同日。廿五日定。  
同。

九貫六百元。

同日。廿六日定。  
同。

參貫五百文。

同日。  
同前。

拾貫文。

同日。

五貫文。

同日。廿八日定。  
同。

壹貫六百元。

五月廿九日。  
送狀アリ。請取出。

拾貫文。

同日。廿八日定。  
同。

貳貫五百十六文。

同日。

三百六十文。

同日。

貳貫五百文。

同日。廿七日定。  
同。

五拾貫文。

同日。廿八日定。  
同。

四貫八百八十文。

同日。廿六日定。  
同。

嵯峨大雄寺領。  
尾州味岡庄  
段錢。

嘉隱領。  
段錢。

寶壽院領。  
雲州飯田也。  
段錢。

三條帥殿御家領。  
攝州細川庄  
段錢。

三條帥殿御家領。  
江州加田庄  
段錢。

結城越後入道殿。  
丹州丹波郷  
段錢。

莊修理亮殿。  
三川國莊山保  
段錢。

北野社領。  
所々段錢  
寶成院。

大内五郎殿。  
尾州青山——  
段錢。

大内五郎殿。  
賀州挾村之  
段錢。

尊勝寺法花堂領。  
備中國之内  
段錢。

相國寺諸塔頭。段錢嘉都聞。

大雄寺領。  
丹州賀悅庄  
段錢。



七百五十文。

同日。廿五日定。

四貫四百七十文。

同日。廿八日定。

百文。

同日。廿七日定。

三貫七百文。

同日。廿五日定。

八百十文。

同日。廿七日定。

三拾貫文。

同日。廿八日定。

三百文。

同日。廿八日定。

九百六十七文。

同日。

二百三十文。

同日。廿八日定。

一貫文。

五月廿九日。廿七日定。  
送狀アリ。請取出。

六貫文。

同日。廿七日定。

四貫百三十六文。

同日。十八日定。

四貫五百文。

同日。廿八日定。

拾貫文。

同日。廿七日定。

拾貫文。

同日。廿七日定。

檜葉左京亮殿。江州田上中庄  
段錢。

妙光寺領。加州豐田段錢。

東岩藏寺眞性院領。能州  
鮎上村段錢。

大統庵領。段錢。

借宿五郎殿。三川國豐原庄  
若林郷段錢。

高雄領。段錢。

大内四郎殿。三川國之内段錢。

市六郎左衛門殿。江州賀茂庄  
段錢。

吉見右馬頭殿。能州之内所々  
段錢。

二宮次郎左衛門殿。三川國  
兩所之段錢。

小倉十郎左衛門殿。通玄寺領攝州  
湖江庄段錢。

大内四郎殿。攝州之内段錢。

慈恩庵領。三川國宇利庄  
段錢。

小早川備後守殿。藝州  
沼田庄段錢。

清住院領。勢州攝州兩國内所々  
段錢。



貳拾貫文。

同日。廿七日定。

三十壹貫文。

同日。

五貫三百廿一文。

同日。

三十六貫三百四十文。

同日。

九百六十文。

同日。

四貫六百文。

同日。

十二貫二百九十文。

同日。廿六日定。

十八貫廿五文。

同日。廿六日定。

五貫三百八十文。

同日。廿六日定。

三貫三百九十文。

同日。廿六日定。

九貫八百七十文。

同日。廿六日定。

拾貳貫五百文。

同日。

四貫文。

同日。

一貫百文。

同日。

春日社領南都松林院段錢。

妙法院御門跡領。

栗見本庄段錢。

妙法院御門跡領。

筏立南庄段錢。

妙法院御門跡領。

仰木庄段錢。

妙法院御門跡領。

中野田段錢。

妙法院御門跡領。

普門庄段錢。

等持寺領。備中國。

日羽郷段錢。

等持寺領。越中國。

小布施庄段錢。

等持寺領。

江州新井郷段錢。

等持寺領。

尾張國中庄段錢。

等持寺領。

備後國信敷庄段錢。

等持寺領。

賀州栗津上下保段錢。

三寶院御門跡領。

越中國段錢。

三條八幡宮領。

越中國御服之庄吉川之段錢。

三寶院御門跡領。

伊勢國南黑田之段錢。



一貫二百五十文。

同日。

五百文。

同日。廿六日定。

八百五十文。

同日。廿六日定。

拾貫文。

同日。廿六日定。

三貫二百六十九文。

同日。廿五日定。

三拾貫文。

同日。廿五日定。

三貫五百文。

同日。廿五日定。

拾貫文。

同日。廿五日定。

一貫文。

同日。廿五日定。

三拾貫文。

同日。廿二日定。

八貫八百五十五文。

同日。廿二日定。

二貫四百六文。

五月廿九日。廿四日定。  
送狀アリ。請取出。

二拾貫文。

同日。廿六日定。

七貫五百文。

同日。廿七日定。

四百文。

同日。

三寶院御門跡領。

若州須惠野村  
段錢。

大草次郎左衛門殿。

伊勢國大連名  
未久之段錢。

泉涌寺末寺。

備州智多郡  
段錢。

退藏庵領。

段錢。

萬壽寺領。

泉州長瀧庄  
段錢。

三會院領。

段錢。

東岩藏寺眞性院領。

若州藤井保  
段錢。

實相院御門跡領。

段錢。

杉山彈正左衛門尉殿。

三川國設樂郡  
段錢。

臨川寺領。

賀州若州兩所之  
段錢。

新田左衛門佐殿。

濃州之内所々  
段錢。

權太茶德丸殿。

段錢。

常在光寺。

段錢。

小串次郎右衛門殿。

段錢。

岩堀修理亮殿。

三川國西郡  
中村段錢。



百貫文。

同日。廿七日定。

七百五十五文。

同日。廿六日定。

三貫文。

五月卅日。

二貫文。

同日。

百二十五文。

同日。

五百三十二文。

同日。

五百文。

同日。

三貫文。

同日。

貳貫文。

同日。

壹貫文。

同日。

六百五十文。

同日。

貳拾貫文。

同日。

五貫文。

五月卅日。廿八日定。  
送狀アリ。請取出。

一貫文。

同日。

一貫五百文。

同日。

遊佐川内守殿。

紀州役々  
御要脚。

大草次郎左衛門殿。

三川國大草郷  
段錢。

心慶。

伊勢因幡入道殿。  
庄々段錢。  
作州神戸郷北高田

伊勢因幡入道殿。

播州溝杭  
段錢。

伊勢因幡入道殿。

三川國赤羽根郷  
段錢。

伊勢因幡入道殿。

濃州則武郷  
段錢。

伊勢因幡入道殿。

伊勢國  
志賀間段錢。

伊勢因幡入道殿。

丹波國桐野  
河内段錢。

深坂次郎殿。

濃州深草保  
段錢。

竹藤五郎殿。

丹波國所々  
段錢。

高橋左京亮殿。

攝州嶋上郡  
段錢。

建仁寺領諸庄園。

段錢。

佐竹和泉守殿。

泉州鶴原庄  
段錢。

松住修理亮殿。

賀州石川之  
段錢。

伊勢平三左衛門尉殿。

尾州  
味岡段錢。



六貫文。

同日。

拾貫文。

同日。廿二日定。

一貫二百文。

同日。

貳貫文。

同日。

三貫文。

同日。

五拾貫文。

同日。

五貫文。

同日。

三貫八百六十七文。

同日。七貫八百六十六文之内也。

五百文。

同日。

貳貫四百文。

同日。廿八日定。

貳貫二百廿五文。

同日。

貳貫文。

同日。

一貫八百五十八文。

同日。

三貫文。

五月卅日。

五百文。

送狀アリ。請取出。

同日。

芝山三川守殿。海東郡之内  
段錢。

西芳寺領。段錢。

門真三川入道殿。作道條  
段錢。

田村刑部少輔殿。江州之内  
三ヶ所之段錢。

伊勢肥前守殿。丹州川上  
本庄段錢。

等持院領。段錢。

金山修理亮殿。丹波國  
兩所之内段錢。

武田兵庫頭殿。尾州  
三ヶ郷段錢。

大原備中入道殿。越中國新川郡  
段錢。

毘沙門堂殿。賀州能美庄  
段錢。

後藤能登入道殿。遠州小稅田  
宮口段錢。

屋代源藏人殿。濃州芥見庄  
段錢。

川田雅樂助入道殿。尾州兩所  
散在段錢。

佐波民部大輔殿。石見國  
佐波郷段錢。

武田下條殿。越中國塚原保  
段錢。



一貫五百文。

同日。廿八日定。

三貫三百卅四文。

同日。廿八日定。

三貫文。

同日。

五貫文。

同日。

一貫文。

同日。

拾貫文。

同日。

五貫九十六文。

同日。

五貫文。

同日。

五拾貫文。

同日。

拾貫文。

同日。

四貫八百八十文。

同日。

八貫二百六十文。

同日。

一貫七十六文。

同日。

八貫百五十三文。

同日。廿八日定。

拾貫文。

五月卅日。

送狀アリ。請取出。

杉原兵庫助殿。

備中國金恒名段錢。

齋藤兵庫殿。

因州大杉村段錢。

熊谷次郎左衛門尉殿。

江州淺井郡段錢。

宮下總殿。

備後一國之内段錢。

檜葉左京亮殿。

江州田上牧庄段錢。

毛利修理亮殿。

因州之内段錢。

佐野下野入道殿。

作州二ヶ郷段錢。

小笠原備前入道殿。

段錢。

天龍寺領。

段錢。

鹽冶三川守殿。

段錢。

花藏院領。

備中國水田庄段錢。

萬壽院領。

尾州味岡新庄段錢。

藤民部又六郎殿。

尾州田中庄段錢。

毘沙門堂殿。

若州向笠御厨分段錢。

南禪寺定稠都聞。

段錢。



拾貫文。

十三貫八百六十六文。

貳貫文。

五貫九百文。

三貫四百文。

八百文。

拾貫文。

貳貫八百六十七文。

四貫文。

一貫五百文。

三貫文。

貳貫八十三文。

九百六十三文。

六百五十文。

百七十五文。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

同日。

佐々木治部少輔殿。段錢。

丹比次郎殿。因州三ヶ所段錢。

杉原兵庫助殿。雲州安田庄段錢。

進士隱岐守殿。越中濃州江州因州作州五ヶ國之段錢。

山科右衛門督殿。濃州所々段錢。

屋代源藏人殿。能州西方村段錢。

宮下野守殿。備後國之内段錢。

伊勢平三左衛門尉殿。江州栗太郡笠河段錢。

熊谷新左衛門殿。江州佃江庄段錢。

小坂次郎左衛門殿。兩人沙汰。

伊勢彦左衛門尉殿。尾州味岡段錢。

花頂御門跡領。濃州小泉四ヶ郷段錢。

妙法院御門跡領。尾州一桶餘舊段錢。

妙法院御門跡領。越前國開發村段錢。

妙法院御門跡領。越前國岩永村段錢。

妙法院御門跡領。越前國栗生野村段錢。



一貫四百文。

五月卅日。  
送狀アリ。請取出。

貳貫文。

同日。

八百九拾二文。

同日。

七貫五百文。

同日。

三貫文。

同日。

六百五十文。

同日。

已上九百三拾四貫七百三十三文

貳貫二百五十文。

六月一日。五卅日定。  
送狀アリ。請取出。

三貫文。

六月一日。五卅日定。  
送狀アリ。請取出。

四貫文。

同日。

一貫文。

同日。

三貫六百卅文。

同日。

一貫文。

同日。

五貫文。

同日。

三貫文。

同日。

妙法院領。

越前國加志津村  
段錢。

妙法院御領。

江州平安寺小八王子  
段錢。

妙法院御領。

越前國江星村  
段錢。

妙法院御領。

越前國大虫社  
段錢。

妙法院御領。

越前國內郡村  
段錢。

妙法院御領。

攝州津江庄  
段錢。

武田中務大輔殿。

尾州之内  
三ヶ村段錢。

朝日孫左衛門殿。

幡州因州賀州  
三ヶ所段錢。

朝日孫左衛門殿。

賀州額田庄  
段錢。

問注所殿。

賀州石田保  
段錢。

勘解由小路三位殿。

遠兩所  
段錢。

宮彥二郎殿。

備後國之内  
段錢。

建仁寺新寶庵。

尾州越前  
所々段錢。

山縣左近將監殿。

濃州井郷  
段錢。



一貫六百卅三文。

同日。五卅日定。

四貫百十五文。

六月一日。五卅日定。  
送狀アリ。讀取出。

貳拾貫三百文。

同日。五卅日定。

七百五十文。

同日。五卅日定。

貳貫文。

同日。五卅日定。

三百八拾三文。

同日。五卅日定。

貳貫貳百五十文。

同日。五卅日定。

三貫文。

同日。五卅日定。

五貫文。

同日。五卅日定。

五貫文。

同日。五月卅日定。

九百五十文。

同日。五月卅日定。

壹貫五百文。

同日。五月卅日定。

拾壹貫四百五十文合。

同日。六月一日定。

六貫六百七十五文。

同日。五月卅日定。

壹貫六百文。

同日。五月卅日定。

本庄能登殿。作州本庄  
段錢。

千秋刑部少輔殿。賀州能坂庄  
段錢。

本郷美作殿。若州本郷  
段錢。

進士小次郎殿。三川國貴舟也。  
段錢。

因幡國吉田保。日野郷  
段錢。

布施伊賀守殿。濃州倉居嶋  
段錢。

後藤能登入道殿。遠州所々  
段錢。

小早川安藝殿。藝州竹原庄  
段錢。

建仁寺領洞春院。段錢。

南都東北院内領。越前國木田庄  
段錢。

彦部近江守殿。三河國設樂郡内  
黑瀬郷段錢。

齋藤能登入道殿。江州比良木  
保段錢。

佐々木黑田備前守殿。黑田高木貳ヶ  
所段錢。

高喜久鶴殿。備中國大井村  
段錢。

東山岡崎普明院領。尾張國一楊内  
伊勢方段錢。



壹貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

八百三十文。

同日。五月卅日定。  
同前。

拾貫文。

六月廿二日。五月卅日定。  
送狀アリ。請取出。

六貫七百六十文。

同日。五月卅日定。  
同前。

拾貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

壹貫四百卅三文。

同日。五月卅日定。  
同前。

五貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

拾貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

拾貳貫二百廿五文。

同日。五月卅日定。  
同前。

壹貫貳百五十文。

同日。五月卅日定。  
同前。

三貫文。

六月二日。五月卅日定。  
同。

五貫文。

同日。五月卅日定。  
同。

三貫文。

同日。五月卅日定。  
同。

五貫文。

同日。五月卅日定。  
同。

二貫文。

同日。五月卅日定。  
同。

大和兵庫助殿

備後國柞戶村  
且段錢。

進士小二郎殿

尾張國中嶋郡内  
郷作河室段錢。

大和彌九郎殿

丹後國河寺郷  
且段錢。

一色刑部少輔殿

三河國寶飯郡田  
三ヶ所段錢。

結城左近將監殿

段錢。

村上掃部助殿

尾張國二ヶ所  
段錢。

能勢掃部助殿

攝津國田尻  
庄段錢。

畠山播州守殿

段錢。

遠山左京助殿

遠山庄所々  
段錢。

相葉左京亮殿

伊勢國鈴鹿庄  
和田段錢。

矢嶋六郎殿

江州中村  
段錢。

同名次郎右衛門殿

泉州深井  
段錢。

攝津國大藏寺領

同國所々  
段錢。

春日社領

攝州六車原田  
段錢。

春日社領

内州中村西郡  
段錢。



一貫文。  
同日。五卅日定。

七百五十文。  
同日。

七貫七十六文。  
同日。五卅日定。

一貫三百文。  
六月二日。一日定。  
送狀アリ。請取出

二貫文。  
同日。五卅日定。

二貫文。  
同日。五廿九日定。

三貫文。  
同日。

二貫九百四十文。  
同日。五廿七日定。

三貫文。  
同日。五卅日定。

二百五十文。  
同日。五卅日定。

一貫二百五十文。  
同日。五卅日定。

四貫文。  
同日。

四貫九百廿文。  
同日。五卅日定。

三貫三百九十文。  
同日。

五貫文。  
同日。五卅日定。

彦部三州入道殿。  
江州大井郷  
段錢。

山下孫三郎殿。  
尾州賀野東方  
段錢。

日野前大納言殿家。  
攝州  
井尻段錢。

進士石見守殿。  
濃州沓部桐原  
段錢。

寶幢寺領。  
但州播州兩所  
段錢。

南芳院領。  
段錢。

曾我殿。  
若州三重村  
段錢。

一色千福殿。  
因州小幡郷  
段錢。

淡路左京亮殿。  
段錢。

疋田孫左衛門丞殿。  
三川國般樂郡  
段錢。

田村治部少輔殿。  
江州野路村  
段錢。

壽寧院領。  
段錢。

春日社領。  
賀州小坂庄西方  
段錢。

等持院領。  
段錢。

南都西大寺領。  
丹州志樂庄  
段錢。



貳貫文。

同日。五卅日定。

貳貫五百文。

同日。五卅日定。

拾五貫文。

六月三日。

八貫貳百七十五文。

同日。

一貫文。

六月三日。五卅日定。  
送狀アリ。請取出。

拾貫文。

同日。一日定。

四貫二百廿五文。

同日。

五百文。

同日。二日定。

六百文。

同日。五卅日定。

四貫文。

同日。

一貫文。

同日。二日定。

五貫文。

同日。五卅日定。

貳拾貫文。

同日。一日定。

六貫七百卅五文。

同日。

三貫六百十文。

同日。

彦部修理亮殿。

三川國江州兩庄  
段錢。

南都興福寺領。

段錢。

結城左近將監殿。

内州甲可郡  
段錢。

川内次郎殿。

尾州智多郡  
段錢。

安東平左衛門殿。

攝州  
中川原段錢。

赤松刑部大輔殿。

丹波國  
春日郡段錢。

聖護院御門跡領。

若州花生庄  
段錢。

勘解由小路刑部卿殿。

泉州段錢。

雅樂備中入道殿。

尾州長岡庄  
段錢。

荒尾小太郎殿。

尾州智多郡  
段錢。

宮五郎左衛門殿。

備後國神石郡  
高光郷段錢。

九條大聖寺領。

段錢。

赤松刑部大輔殿。

幡州所々  
段錢。

建仁寺給孤庵。

江州寺山の  
段錢。

彦部修理亮殿。

江州參州兩庄  
段錢。



拾貫文。

同日。

五貫文。

同日。

五貫文。

同日。二日定。

貳貫文。

同日。

拾五貫文。

同日。五廿二日定。

四貫二百廿五文。

六月三日。五卅日定。  
送狀アリ。請取出。

拾貫文。

六月七日。二日定。

三貫六百五十文。

同日。

六貫八百七十三文。

同日。六日定。

五貫文。

同日。

拾貫文。

同日。

五貫文。

同日。六日定。

三貫三百文。

同日。

拾壹貫六十五文。

六月四日。五日。六日分。  
送狀アリ。請取出。

七百五十文。

同日。五月廿九日定。

同前。

三上近江入道殿。

段錢。因州岩井庄。

松田次郎左衛門殿。

段錢。

富永彌六殿。

段錢。播州布施郷。

勝鬘院領。

段錢。

西部筑前入道殿。

段錢。賀州北畠庄。

安東平左衛門殿。

段錢。因州攝州兩庄。

堤新次郎殿。

段錢。越中國般若野。

一色式部少輔殿。

段錢。丹州所々。

片岡與五郎殿。

段錢。丹州永久保。

伊勢備後入道殿。

段錢。備後國志口利庄。

梶井御門跡領。

段錢。江州所々。

大聖寺領。

段錢。

仁木右馬助殿。

段錢。三川國大陽寺。

清住院領。

段錢。伊勢國所々四ヶ所分。

積善庵領。

段錢。濃州千株中村上方。



壹貫六百四十二文。

同日。六月三日定。  
同前。

拾貫文。

同日。同五日定。  
同前。

拾貫文。

同日。同三日定。  
同前。

壹貫貳百文。

同日。同二日定。  
同前。

參拾貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

拾貫文。

同日。六月五日定。  
同前。

壹貫五百卅二文。

六月四日五日六日分。  
送狀在。請取出。

參貫文。

同日。同六日定。  
同前。

貳拾貫文。

同日。同五日定。  
同前。

參貫文。

同日。同五日定。  
同前。

貳貫文。

同日。同五日定。  
同前。

八貫文。

同日。同六日定。  
同前。

壹貫一百文。

同日。同三日定。  
同前。

七貫文。

同日。同五日定。  
同前。

九貫四百廿六文。

同日。六五日定。  
同前。

飯河兵庫助殿。若州三方郡四上恒枝。段錢。

聖護院殿。新熊野領。備中萬壽庄段錢。

越前國別司保。遠江國一鄉。并。

彦部近江守殿。愛智郡吉田之内。段錢。

湯河安房入道殿。紀州芳養庄所々段錢。

日吉御師樹下知行分。段錢。

日野前大納言家御領。尾州貝村。段錢。

三秀院分。段錢。

一色殿。丹後國御要脚分。

光乘。近江國野洲郡杉若村之散々段錢。

長樂寺領。近江國金森村。段錢。

如是院領。段錢。

河原修理助殿。播州越郡下庄。湏富庄北方段錢。

金輪院。若州鳥羽庄段錢。

春日社領松林院。近江國大國上庄。段錢。



二拾壹貫九十文。

同日。六五日定。

拾貫文。

同日。六四日定。

參貫文。

同日。六五日定。

貳貫文。

同日。六三日定。

五貫文。

同日。五廿九日定。

三貫六百廿文。

同日。六六日定。

參貫文。

同日。六六日定。

貳貫參百七十文。

同日。六六日定。

參貫文。

同日。六六日定。

拾貫文。

同日。六六日定。

拾貫貳百文。

同日。六六日定。

五貫文。

同日。六六日定。

五百五十文。

同日。六六日定。

壹貫文。

同日。六六日定。

參貫文。

同日。六六日定。

同日。六六日定。

鰐淵寺領。雲州所々

段錢。

大和彌九郎殿。和泉國神野庄

段錢。

西南院近江國坂田庄。朝妻庄

段錢。

三統院領。段錢。

佐々木大原備中守殿。江州大原庄

段錢。

下瑠璃殿。山門領若州所々

段錢。

結城越後殿。丹波國穗津保

段錢。且。

上野與三郎殿。若州賢海村

段錢。

三上美濃殿尾張國八事。北通

段錢。

日野大納言家御領。段錢。

三寶院御門跡御領。丹後國朝米村

段錢。

三淵掃部助殿。江州口山庄

段錢。

瑞泉院殿御領。若州三方郡永富

庄段錢。

朝日近江守殿。江州朝日郷

段錢。

光聚院御領。丹後國祇園寺三ヶ村

段錢。



壹貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

伍拾貫文。

同日。六三日定。  
同前。

貳拾貫文。

同日。六三日定。  
同前。

貳貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

貳貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

貳貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

貳貫五百文。

同日。五卅日定。  
同前。

壹貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

參貫文。

同日。六月四日六日。  
送狀アリ。請取出。  
同前。

四貫文。

同日。六二日定。  
同前。

貳貫文。

同日。六五日。  
同前。

拾貫文。

同日。六五日。  
同前。

參貫文。

六月七日より十一日至。  
同前。

拾貫文。

同日。  
同前。

五貫文。

同日。五日定。  
同前。

朝倉左京助殿。

三河國寶飯郡  
爲任郷段錢。

相國寺。并諸塔頭領。段錢。

寶成院所々。段錢。

北野御社領

松尾社領攝州山本庄。且段錢。

安國寺。丹州河部村  
段錢。

春日御社領興福寺領。

若州耳面郷  
領家段錢。

日野前大納言御家領。

攝津國大田保  
段錢。

日野前大納言御領。

加州佐見保  
段錢。

八幡大乘院。

攝州有馬郡内  
鹽庄段錢。

朝日近江守殿。

加州額田庄  
段錢。

西南院。

播州世賀庄  
段錢。

西藏院。

江州神崎庄神田領  
段錢。

智光院領。

近江國今西庄延勝寺  
北伊香段錢。

赤松治部少輔殿。

攝州有馬郡  
段錢。

玉置民部少輔殿。

紀州河上庄  
段錢。



壹貫文。

同日。五日定。  
同前。

壹貫貳百五十八文。

同日。七日定。  
同前。

參貫文。

同日。七日定。  
同前。

參貫文。

同日。五卅日定。  
同前。

拾貫文。

同日。六七日定。  
同前。

四貫貳百文。

同日。六九日定。  
同前。

五貫文。

同日。六九日定。  
同前。

拾貫文。

同日。六八日。  
同前。

貳拾貫文。

同日。六十。  
同前。

一貫二百五十文。

六月自三十一日。至  
十一日。九日定。

貳佰貫文。

同日。同前。  
九日定。

五貫文。

同日。同前。  
八日定。

六貫文。

同日。同前。  
六日定。

貳貫文。

同日。同前。  
十日定。

參拾貫九百卅五文。

同日。同前。  
九日定。

富永彌五郎殿。

遠州所々段錢。

佐野孫次郎殿。

美作國月田鄉  
段錢。

毛利宮内少輔殿。

三頭行明段錢。

長伊豆守殿。

但馬伯耆  
段錢。

玉泉寺領。

賀州德丸尾州味  
鏡分段錢。

大和彌九郎殿。

但馬國新田庄  
段錢。

畠山兵部少輔殿。

紀州宮原  
段錢。

石橋殿御領。

段錢。

赤松治部少輔殿。

攝州有馬郡  
段錢。

大和彌九郎殿。

三河國一木村之  
段錢。

阿波參河兩國分。

飯尾因幡入道殿。  
段錢。

入江圓清殿。

丹後國板沼同東方  
段錢。

三寶院御門跡。

河內國五丁庄  
段錢。

江州鏡庄。

段錢。

松梅院。

和泉國坂本鄉  
段錢。



六貫文。

同日。同前。  
八日定。

貳拾貫文。

同日。同前。  
八日定。

八貫三百文。

同日。同前。  
十一日定。

拾貫文。

同日。同前。  
八日定。

參貫文。

同日。同前。  
九日定。

一貫九百五十文。

同日。同前。  
四日定。

拾五貫文。

同日。同前。  
十日定。

參貫文。

同日。同前。  
八日定。

九貫文。

同日。同前。  
九日定。

拾貫文。

同日。同前。  
九日定。

拾貫文。

六月自二七日至  
十一日。九日定。

參貫三百九十文。

同日。同前。  
九日定。

拾貳貫五百五十文。

同日。同前。  
十一日定。

參貫文。

同日。同前。  
十一日定。

貳拾貫文。

同日。同前。  
十一日定。

糴井殿。若州島羽上下保  
段錢。

南禪寺領。段錢。

三河國羽湍庄。段錢。

堤新次郎殿。越中國段錢。  
般若野庄。

鴨權祝。江州國高嶋之内下司  
職。段錢。

三寶院御門跡領。能州上日龍庄  
段錢。

常在光寺領。段錢。

北向三位殿。越中國吉良庄  
段錢。

鴨御社領。越前國志津庄  
段錢。

真如寺領。段錢。

善入寺領。段錢。

嵯峨諫寶院出官。段錢。

三條帥殿御家領。丹後國二ヶ所  
段錢。

大澤長門入道殿。備中國水田郷  
段錢。

内野島地口内。



貳貫文。

同日。同前。

八日定。

四貫卅二文。

同日。同前。

九日定。

拾貫文。

同日。同前。

十一日定。

五貫文。

六月十二日十三日分。

送狀アリ。請取出。

壹貫八百廿五文。

同日。六十一定。

同前。

七百五拾文。

同日。六十一定。

同前。

壹貫九百文。

同日。六十一定。

同前。

參拾貫文。

同日。六十一定。

同前。

貳拾貫文。

同日。六十一定。

同前。

五貫文。

同日。六十一定。

同前。

七貫八百六十七文。

同日。六十一日定。

同前。

拾貫文。

六月十二日十三日分。

送狀アリ。請取出。

貳百文。

同日。六十三定。

同前。

四貫八百文。

同日。六十二定。

同前。

五貫文。

同日。六十三定。

同前。

飯河兵庫助殿。丹波國二ヶ所分段錢。

姉小路宰相。御家領段錢。飛騨國土河鄉。

内野畠地口之内。

入江殿御領。近江國山前。同國茂立南庄。美濃國曾代三ヶ所段錢。

伊賀美作守殿。尾張國堀津北方段錢。

熊谷新左衛門尉殿。近江國今西庄。并早崎重且段錢。

富永彌五郎殿。伊勢國所々段錢。

田斐美濃殿。越前國万足分御要脚。

田美濃殿。遠江國万足分御要脚。

宮式部丞殿。備後國段錢。

武田兵庫頭殿。尾張國坂田庄。同高島村段錢。

廣德院領。若州向笠半濟方御要脚内。

神谷四郎殿。伊勢國朝明郡内太子堂段錢。

加治豐前守殿。近江國比江郷前。尾張國狩津段錢。

結城越後殿。丹後國丹波郷段錢。



貳貫文。

同日。五月卅日定。  
同前。

五貫文。

同日。六五日定。  
同前。

壹貫五百文。

同日。六十三日定。  
同前。

參貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

貳百文。

同日。六十三日定。  
同前。

貳拾貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

五貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

貳百貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

五貫文。

同日。六十二日定。  
同前。

貳貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

貳貫五百文。

同日。六十三日定。  
同前。

貳貫五百文。

同日。六十三日定。  
同前。

壹貫五百文。

六月十一日定。  
同日。同前。

壹貫五百文。

六月十四日。八日定。  
同前。

壹貫六百文。

同日。六十四日定。  
同前。

花頂御門跡御領。江州草野庄段錢。

安富勘解由左衛門尉殿。勤修寺御門跡領。和州郡家庄段錢。

御園五良左衛門尉殿。尾張國御園村散在段錢。

河合權祝殿。鴨社領越前國志津庄段錢。

嶋田藏人殿。伊勢國朝明郡內宇津尾段錢。

內野畠地口之內。

日吉禰宜殿。江州愛智上庄段錢。

安富近江殿。周防長門兩國御要脚。

伊勢國無水山成就寺領。段錢。

山下孫三郎殿。美濃國西庄內惣領段錢。

近衛殿御領。近江國柿御園中郷山主、段錢。

近衛殿御領。江州柿御園下郷〔島嶼〕段錢。

中嶋次良殿。賀州益四田保段錢。

養春院殿御領。濃州西郡本所方段錢。

北野社領。尾張國下淺野保段錢。



六百五十文。

同日。六十二日定。  
同前。

貳貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

壹貫文。

同日。六十四日定。  
同前。

壹貫文。

同日。六十三日定。  
同前。

拾八貫六百文。

同日。六十四日定。  
同前。

拾貫文。

六月十五日。

貳拾五貫文。

六月十五日定。  
同前。

貳貫文。

十四日定。  
同前。

貳拾貫文。

六月十五日定。  
同前。

一貫七百五十文。

同日。同前。  
八日定。

一貫七百五十文。

六月七日定。  
送狀在。請取出。

八貫八百文。

六月十八日。  
同日。同前。十七日定。

百文。

同日。同前。  
十三日定。

一貫百五十文。

六月同日。  
同前。十五日定。

一貫七十五文。

同日。同前。  
十四日定。

佐脇三河守殿。伊勢國朝明郡內柿郷段錢。

伊勢左京亮殿。尾張國落合郷段錢。

日吉社領近江國。小幡位段錢。

伊勢左京亮殿。越前國三職郷段錢。

北野社領和泉國。八田庄段錢。

富永庄江州山門領。段錢。

內野島地口內。

聖護院御門跡。江州石田郷段錢。

山名與次郎殿。御沙汰。且御要脚內。

聖護院御門跡領。江州藏田庄段錢。

聖護院御門跡。江州田賀郡內檜物庄段錢。

三條帥殿御家領。所々五ヶ所段錢。

東岩藏寺領。美濃國澤鯨村段錢。

山鹿駿河守。勢州三ヶ所分段錢。

大祥院領。伊勢國大社村段錢。



參百文。

同日。同前。  
十七日定。

拾貫文。

同日。同前。  
十五日定。

貳拾五貫文。

同日。同前。  
十七日定。

貳貫七百卅四文。

同日。同前。  
十四日定。

五貫文。

同日。同前。  
十七日定。

拾五貫六百廿三文。

同日。同前。  
十七日定。

貳貫文合。

同日。同前。  
十七日定。

拾貫文。

同日。同前。  
十一日定。

參貫九百五十文。

同日。同前。  
十五日定。

參貫貳百五十文。

同日。同前。  
十五日定。

拾貫文。

同日。同前。

二百卅文。

同日。同前。

參拾貫文。

同日。同前。  
六月廿日定。

八貫二百五十文。

同日。同前。  
六月十八日定。

拾八貫二百七十五文。

六月十八日。  
送狀アリ。

鴨社領邇保庄。段錢。

上坂兵庫助。江州坂田德兩郡之内  
十ヶ所段錢。

内野島地口。

東岩藏眞性院。段錢。

北野領。伊勢國二ヶ所段錢。  
寶成院。

北野領。大鳥下條段錢。  
寶成院。

北野領。備前國金畏東西領家職。  
丹後國太田庄領家職。

長井因幡守殿。越前國  
從都郷段錢。

三條帥殿御家領。美濃尾張兩國  
之内段錢。

鴨社領。備中國富田庄  
本上之段錢。

宮下野守。備後國之段錢。

權太慶德丸。越中國婦負郡田中  
保惣領。段錢五分一。

山名與次郎殿。御要脚  
万疋之内段錢。

向水所様御軒所。近江國長裏彌度  
幸嶋石見守。段錢。

正親町家。加賀國是時庄之内  
宮永郡段錢。



參貫五百文。

同日。同前。  
十七日定。

參貫文。

同日。同前。

一貫文。

同日。同前。

拾五貫文。

同日。同前。

貳貫文。

同日。同前。  
十七日定。

一貫五百文。

同日。同前。  
十七日定。

貳拾貫文。

同日。同前。

貳拾貫文。

同日。廿日定。  
同前。

五貫文。

同日。同前。

參拾貫文。

同日。廿日定。  
同前。

四貫七百五十文。

同日。廿日定。  
同前。

四百六十七文。

同日。廿日定。  
同前。

壹貫二百卅五文。

同日。廿日定。  
同前。

四貫七百五十文。

同日。同前。

拾貫文。

六月。同日。十九日定。  
同前。

沼田彌三郎殿。若州菰生庄之段錢。

同歸院領。丹後國木津郷段錢。

妙藏院。北野社領加賀國小泉保一分段錢。

速成就院。雲州福願庄之段錢。

宮彥次郎殿。備後國內三ヶ所之段錢。

鴨社領。丹波國三和庄公文職并賀州開發庄段錢。

甲斐美濃殿。越前國万正御要脚之内皆濟。

南禪寺領。段錢。

賀茂社領近江國。丹木庄段錢。

山名相摸寺殿。御沙汰分。

富永彌六殿。三河國設樂郡之内富永保段錢。

三浦平四良殿。尾張國中嶋郡内赤地段錢。

建仁寺光澤庵領。段錢。

攝津國水無瀬庄内。井内段錢。兵庫沙汰。

野島地口内。



五貫二百五十文。

同日。

大館上總入道殿。攝州溝杭村段錢。

拾四貫六百元。

同十八日定。  
同前。

今出河殿御領。泉州下石津村段錢。

五百五十五文。

同十七日定。  
同前。

天花寺領。三河國葦谷郷段錢。

參百五十文。

六月十八日定。  
同前。

三淵掃部助殿。三河國荒井井萩分段錢。

四貫五百文。

同日。  
同前。

彦部四郎殿。三河國額田郷所々段錢。

五貫文。

同日。  
同前。

大館上總入道殿。江州草野庄段錢。

參貫五百文。

六月十九日。  
六日定。

設樂越中守殿。三河國下郷河路村段錢。

貳拾貫文。

六月廿一日。  
送狀アリ。請取出。

鹽冶參河守殿。段錢。

壹貫貳百五十拾文。

同日。廿日定。  
同前。

建仁寺禪居庵。越前美濃兩庄段錢。

一貫貳百五十文。

同日。廿日定。  
同前。

□瀨次良左衛門尉殿。伊勢國朝明郡庄長庄段錢。

六貫八十文。

同日。十三日定。  
同前。

荒河宮内大輔殿。越前國五ヶ所段錢。

八百五十六文。

同日。  
同前。

岩堀左近將監殿。三河國岩堀屋敷分段錢。

一貫五百六十五文。

同日。廿日定。  
同前。

大祥院殿。加賀國和氣保分段錢。

參貫六百元。

同日。  
同前。

善法寺領攝津國水無瀨庄。段錢。

貳貫六百六十六文。

同日。  
同前。

屋代源藏人殿。美濃國芥見庄地頭職段錢。

但四貫百六十六文之内



拾貫文。

六月廿一日。送狀アリ。請取出。

貳貫七百五十文。

同日。廿日定。同前。

三貫貳百廿文。

同日。廿日定。同前。

參貫文。

同日。同前。

三貫五百八十二文。

同日。同前。

九貫五百九十文。

同日。廿日定。同前。

三貫文。

同日。廿日定。同前。

拾貫文。

同日。廿日定。同前。

拾貫文。

六月廿日。送狀アリ。請取出。十九日定。

參百文。

同日。十七日定。同日。

貳貫五百八文。

同日。同前。

參拾貫文。

同日。同前。十九日定。

貳貫廿五文。

同日。同前。十九日定。

貳貫八百五十文。

同日。同前。十九日定。

拾參貫文。

同日。同前。十九日定。

建仁寺領所々段錢。

大和彌九郎殿。和泉國神野庄段錢。

大和彌九郎殿。備後國十田村段錢。

細河左京亮殿。淡路國津名郡內段錢。

三吉大郎殿。備後國布野郷段錢。

大和彌九郎殿。丹後國河守郷段錢。

正實坊所々知行分且段錢。

小早河備後守殿。安藝國沼田庄段錢。

佐々木兵部少輔殿。知行分段錢之內。

鴨社領。攝津國平安庄之段錢。

山下上野入道殿。參河國保久郷段錢。

甲斐美濃殿。遠江國万正御要脚之內。

宇津野三郎殿。三河國三ヶ所段錢。

相河彌三郎殿。加賀國村東方并松成丸之段錢。

桃井治部少輔殿。段錢之內。



貳拾貫文。

同日。同前。  
十九日定。

四貫七十三文。

六月廿日。  
送狀在。請取出。

貳貫五百文。

同日。同前。  
十九日定。

四貫文。

同日。同前。  
十七日定。

參貫文。

同日。同前。

貳拾貫文。

六月廿二日。  
同前。廿一日定。

貳貫五百五十八文。

同日。同前。

五貫文。

同日。同前。

拾貫文。

同日。同前。  
廿一日定。

貳貫七百文。

同日。同前。  
廿一日定。

拾參貫百五文。

同日。同前。  
廿二日定。

貳貫參百文。

同日。同前。  
廿一日定。

四百六十文。

同日。同前。  
廿日定。

百五十文。

同日。同前。  
廿一日定。

壹貫文。

同日。同前。  
廿一日定。

一色殿。丹後國御要脚之内。

江州衣川三世寺。段錢。

小島掃部助殿。參河國額田郡内  
四ヶ所段錢。

鴨因幡社宜。(國直縣)因幡國土師庄  
段錢。

岩山美濃守殿。出雲國大峯國  
段錢。

畠山中務少輔殿。和泉國八木郡  
國衙(舊縣)段錢。

飛鳥井殿家。尾張國竹鼻和鄉井  
小熊保段錢。

林光院。段錢之内。

正親町宰相中將家。江州坂田郡内  
祇園保段錢。

伊勢因幡入道殿。丹波國相肺河内村  
段錢。

鹿苑寺領。同州味野郡  
段錢。

山下孫三郎殿。美濃國西庄内之内段  
錢。四貫三百文之内。

疋田孫左衛門尉。越中國婦負  
田中、保内段錢。

勢多判官。江州勢多郡之内  
判官久田段錢。

廣橋殿家。美濃國宇多院  
段錢。



拾貫文。

同日。同前。

壹貫三百廿五文。

同日。同前。

五貫四百文。

五月卅日定。

貳貫文。

六月廿二日。廿日定。

五貫文。

送狀在。請取出。

二拾五貫九百四十六文。

同日。同前。

參貫文。

廿一日定。

參貫文。

同日。同前。

九貫六百文。

同日。同前。

六貫五百七十九文。

同日。同前。

拾貳貫三百七十五文。

廿日定。

八貫二百八十五文。

同日。同前。

五貫文。

同日。同前。

九貫文。

同日。同前。

貳貫文。

同日。同前。

實相院御門跡領。所々段錢。

檜葉左京亮殿。攝津國。原之內。龍屋段錢。

安居院殿。江州。福光保。段錢。

建仁寺領知足院。越前國。布施。田名之內。段錢。

飛鳥井殿。攝州。今。南庄。段錢。

春日社領。南。刻。松。林。院。段錢。四拾貫九百四十六文內。

大和坂田殿。段錢。

杉原新藏人殿。備後國。草原村。段錢。

杉原美濃守殿。備後國。父。木野。四ヶ所。分。段錢。

杉原因幡守殿。備後國。信。數。名。立。主。職。段錢。

杉原彥四郎殿。備後國。木。梨。庄。段錢。

杉原千代松丸。備後國。三。原。浦。井。高。洲。社。分。

杉原左京亮殿。備後國。杉。原。本。庄。段錢。

速成就院。近江國。東。庄。山。前。段錢。

齋藤能登入道殿。但馬國。上。三。郡。庄。坂。本。方。段錢。



六百文。

同日。同前。  
廿日定。

五貫七百七拾五文。

同日。同前。

四貫七百五十文。

同日。同前。

壹貫文。

六月廿三日。  
送狀在。請取出。十五日定。

參貫文。

六月廿四日。  
送狀在。請取出。

七百五十文。

同日。同前。

貳貫六百七十文。

同日。同前。

參拾貫文。

同日。同前。

貳貫五百文。

同日。同前。

拾三貫三百十九文。

同日。同前。

拾五貫文。

同日。同前。

貳拾貫文。

六月廿五日。  
送狀在。請取出。

五貫三百卅二文。

同日。同前。

八百五拾文。

同日。同前。

拾貫文。

同日。同前。

廣橋殿家領。尾張國一橋之神公方之段錢。

伊勢因幡入道殿。美作國神戶賴嫡男分二ヶ所段錢。

七條全光寺領之內。三河國中山之郷段錢。

丹波國。山田庄高屋村。佐竹和泉守殿。山田千次郎。小僂十郎。村上若萬丸。段錢。河庄名兵庫助。

檀那院御門跡領。江州粟太郎三ヶ所分段錢。

上野刑部大輔。若狹國神谷村段錢。多河國實麻郡内三ヶ所分段錢。

丸山掃部助殿。段錢。

土岐殿。御要脚之內。

速成就院。丹波國氣保分段錢。

右兵衛佐殿。備中國多氣庄同國國安散在分。

山名相摸守殿。御要脚之內。

宮上野介殿。備後國所々七ヶ所段錢。

聖護院御門跡。江州志賀郡之内小松庄同。

聖護院御門跡。河内國豐田松原同。

如是院領分。同。



六貫貳百七十五文。

同日。同前。  
廿三日定。

壹貫文。

同日。同前。  
廿二日定。

三貫七百廿五文。

同日。同前。  
廿四日定。

五貫文。

同日。同前。  
廿一日定。

拾五貫百十五文。

六月廿五日。  
送狀在。請取出。

五貫文。

同日。同前。  
十七日定。

拾貫七文。

同日。同前。

貳貫八百六十七文。

同日。同前。  
廿四日定。

貳貫文。

同前。同前。

參貫七百九十文。

同日。同前。

貳拾貫文。

同日。同前。

拾壹貫五百文。

同日。同前。

五拾貫文。

同日。同前。  
廿三日定。

拾貫文。

六月廿三日同。  
同日。同前。

拾貫八百五十五文。

同日。同前。  
廿日定。

同歸院領。丹後國  
木津郡同。

桐井殿。美濃國  
二木庄同。

飯尾孫左衛門殿。北野社領同。  
因轄國日野郡。

廣橋殿家領。江州羽  
田庄同。

三條右大臣家。河內國  
鼓呂岐庄段錢。

圓滿院御門跡。江州草  
野庄同。

玉置民部少輔殿。紀州  
河上庄同。

佐波民部大輔殿。石見國  
佐波鄉段錢。

結城左近將監。河內國  
甲可鄉段錢。

結城左近將監。加賀國  
河田庄段錢。

內野畠地口內。

金山修理亮殿。知行分  
段錢。

相國寺并諸塔領。段錢。

赤松治部少輔殿。攝州有馬郡  
段錢。

富永彌五郎殿。遠州三ヶ所。

但拾一貫八百五十五文之內當歸院領



一貫百五十文。

同日。同前。  
二日定。

貳貫文。

同日。同前。  
二日定同。

貳拾三貫六百元。

同日。同前。  
廿一日定。

四貫文。

同日。同前。  
廿一日定。

八貫三百五十文。

十三日定。  
同日。同前。

八貫六百元。

六月廿五日。  
送狀在。請取出。廿一日定。

參拾貫文。

同日。同前。  
廿日定。

五貫文。

同日。同前。  
十四日定。

七貫文。

六月十五日ニ納之内。  
加送狀ヲ。請取出。十四日定。

七貫三百十八文。

同日。六十四日定。  
同前。

貳貫三百卅五文。

同日。六十四日定。  
同前。

四貫文。

前日。六十二日定。  
同前。

惣已上。三千五百五十四貫八十三文。

右以伊勢林崎文庫本書寫一校了

堤新次郎殿。

三河國重原庄也。  
内 郷段錢。

廣橋殿御家領。

江州 羽田庄段錢。

八幡宮領。

丹波國篠村庄  
所々段錢。

建仁寺給孤庵領。

段錢。

速成就院。

若州國富庄  
段錢。

三寶院御門跡領。

丹波國曾地村  
段錢。

細河刑部少輔殿。

泉州平國段錢。  
五十疋内皆濟。

野島地口之内。

鴨社領越中國倉埴庄段錢。

北野社領。

但馬國氣比庄  
段錢。

吉見彌二郎殿。

因幡國高野郷  
内小田保段錢。

鴨神領。

雲州美州  
兩國兩所段錢。



群書類從卷第五百二

雜部五十七

東北院職人歌合

建保第二の秋の比。東北院の念佛に。九重の人々。男女。たかきもいやしきもこぞり侍しに。みち／＼のものと。人なみなみに参りて。聽聞し侍けるに。時しも九月十三夜の月くまなかりけるに。こゝろある人は。歌をよみ連歌などして。こころをすましつゝ、遊けるを。うらやましとやおもひけむ。月やう／＼山のはに入なむとするおりふし。各々今宵のなごりこそなぐさめがたく侍れ。かくて八雲の烟立はなれなば。何事なかはおもひ出にせむ。我も人も心の色をあらはして。水莖のながき世のかたみにせんとて。哥合をすゝめけり。

題

月

戀

作者

左  
醫師 佛師 鍛冶 刀磨 巫女 深草 紺搔 塗師 博打 針磨 桂女 商人 一番

右  
陰陽師 經師 番匠 鑄物師 盲目 壁塗 篋打 檜物師 船人 數珠引 大原人 海人



左

醫師

村雲のかゝれる月のくすりにには夜はの嵐なるへかりける  
君ゆへに心とつけるやせ病あはぬつきめに灸治して見ん

右

陰陽師

再拜や高間の原にすむ月に天の八重雲かゝらすもかな  
思あまり君には鬼氣の祭してしろしもみえぬ御神樂そうき

月

左の風。めづらしくとりよせて。心詞共にいひしられて侍  
り。右歌。初句みゝにたちて侍り。たかまの原といふすゑ  
に。あまの八重雲をむすはれたる。病にや。されば左爲勝。

戀

左右いづれも興にきこえ侍。判者の及所にあらず。何を勝  
とも定がたし。ふたりの男をわきかて。生田川に身をな  
げし心ちし侍る。

二番

左

佛師

刻置みそきあらはに月すめはひとへはくひく心ちこそすれ  
逢事は片ゆかみなる居佛のなき名をたにもたゝは社あらめ

右

經師

禿はてし文字かたもなきすりかたき今宵の月にあらはかさはや

思あまり露の夜すからうつ紙の音にたてゝも人をこはゝや  
月

左歌。風情よろしく侍り。但きさみたらんみそぎに。はく  
引たらんは。げに／＼しからずや。かててはくひくまや侍  
るべき。右。月をほめたるたより。さもとおぼえはべり。歌  
すがたもことの外。左よりは立まさりて聞え侍り。仍爲

レ勝

戀

左歌。逢事はかたしとつゞけんために。よしなき佛をゆが  
めてよまれたる。聊罪ふかくや侍らん。右歌。思あまり露  
の夜すがらうつ紙とつゞけられたる。げに／＼しからず  
や。思あまるまじき紙にや侍る。思あまるとよまずとも。  
うちてはかく玉章のとも。たつる錦木ともあらばこそ。其  
詞の詮にては侍らめ。左歌。いますこし聞所あり。仍爲勝。

三番

左

鍛冶

月にれぬ宿とや人の思ふらんいつも絶せぬあひつちのなと  
わが戀はなまし刀のかねあまみ思きれともきられざりけり

右

番匠

墨かれのななきを正す身なれとも傾く月にかふはりそなき



切すかす長押の小口すちりつゝいかになせ共おはて社有め  
月

左歌。詞つゞき。をしこめてなだらかに侍り。月にねぬ宿  
とや人の思ふらんとて。頻にさしもなきよしを陳ぜられ  
たる。無下に心のうちよらすや侍らむ。右。かたぶく月に  
とよまれたるこそふかき難にて侍れ。月を題にえては。さ  
かりによむべきなり。但月を惜まれたる心ざしすてがた  
し。仍右爲<sub>レ</sub>勝。

戀

左。なまし刀のかれあまみ。誠にさもとときこえ侍り。右。た  
だなげしのこぐちのあはねばかりにては。こひのこゝろ  
ざしに聞えず。是を落題とは申也。仍以<sub>レ</sub>左爲<sub>レ</sub>勝。

四番

左

刀 磨

我宿の砥水にやとる月影のあやしやいかにさひてみゆらん  
君ゆへにきもゝ心もときはてゝ我身計りそきえなかりける

右

鑄 物 師

たゝらふむやとの烟に月影のかすみもはてぬ有明の空  
頼めしなまつとせしまに真金ふくきひの中山跡たえにけり  
月

左右。いづれもたよりありて。思わきがたく侍れども。か  
すみもはてぬ有明の空。心はとまり侍り。仍右を勝とす。

戀

左。始より終まで。あまりにさせる事なくて。きゝ所なし。  
右。詞つゞき。めづらしからすきこゆれど。なだらかに侍  
り。猶右を爲<sub>レ</sub>勝。

五番

左

巫 女

大かたのさはりもしらす入月よひくしめ繩をこゆな夢く  
君と我口をよせてそれまほしき鼓も腹もうちたゝきつゝ

右

盲 目

さくれ共手にもさはらぬ月影のさやけき夜半を數へてをし  
かくはかりねりちかひたる戀路には河原に迷ふ心ち社すれ  
月

左歌。めづらしく取られたり。但あまりに風情をめづら  
しく。月に心ざしなくきこゆ。右歌。心詞艶にして。よくよ  
く和歌の道をしれり。藤原範永が。山家月の歌にはづべか  
らず。仍右可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>勝。

戀

左は詞すくなくして。風情めづらしく。右先心能<sub>二</sub>一興。勝



劣不三分明。仍爲レ持。

六香

左

深 草

月ゆへに内へもいらてとにたてはやうの者とや人の見らん  
ひとめみしかはらけ色のきぬかつき我に契や深草の里

右

壁 塗

白土をかされてしろき月を見てもろこしまての昔をそしる  
忍へともしたちよはなる古かへのたこほれなる我涙かな  
月

右歌。五文字耳にたちて侍れども。漢家三十六宮の心を想  
せられたり。證文たしかなるにつきて勝とすべし。

戀

左。詞のたよりを得て。戀の心もたしかにきこゆ。右。たゞ  
こほれなるわが涙かなとよみたるすがた。見所ありてお  
もしろく侍り。仍持たるべし。

七番

左

紺 掻

月すめば夜はの嵐の色あけてむらこにみゆる森の下陰  
うとくなる人の心の花淺黄いくしほそめて色あかるらん

右

筵 打

うちをける戀のさむしる徒らにれぬ夜の月にしく物そなき  
荊すかす蘭田のほそえのうきぬなは苦しき物をしたの思は  
月

左。風情めづらしくとりなされたり。題を五文字にすへら  
れたる。聊耳にたち侍り。右。戀のさむしる。さもと覺えて。  
大江千里か。くもりもはてぬ春の夜とよみけん事思ひ出  
られて。今すこしれぬ夜の月に心ひかれ侍り。

戀

左。古歌の心をめづらしくとりなして誠にいひしりて侍  
り。心詞艶にして哥の姿を兼たり。たとへば梅林の風前に  
仙方の雪かとうたがひ。紫藤の露の底に崑崙の玉をあら  
そひて。紅紫二の色。淺深辨がたし。右の哥のうきぬなは。  
いますこし上手のしわざと覺て。住吉玉津嶋もさだめて  
ゆるし給はん。仍勝とす。

八番

左

塗 師

我宿の糸ほうし絹をいかにせむぬる夜すくなき月の比哉  
露とのみぬりやる袖の涙こそつちむろしてもほされさうけれ  
右  
檜 物 師  
おけしりの臈けならぬなかめよりもるもくるしき軒の月影



おしきひく杉のまさ板ふししけみ横目をもせて逢由もかな  
月

左。ぬる夜すくなき心。さもと聞ゆるに。胸腰の句かきあ  
はすして。たゞの直垂に。薄色の指貫などきたらん様に覺  
え侍り。右の五文字。しなをくれてきにくみえ侍。又  
月のもるなくるしとは。いかやうにそへられたるに。か。  
得がたく侍。持と申べし。

戀

左。露とのみぬりやるそでも誠におもひあまれる心をさ  
きだて。詞づかひ詮をあらはせり。右の五文字。ことの  
外にしなをくれて。上下かきあはす侍り。ふるき人も女の  
わらはべのかふしと。歌の五文字とは。なだらかなれとこ  
そもふし侍れ。仍左爲勝。

九番

左

博打

おほかかなたれにうちいれて月影の雲の衣をぬきてみゆらん  
わりたてゝきはひはてたるいりかしのあはしとすまふ戀もする哉

右

船人

しはしみあまけの空の夜嵐に雲のみなとを出る月かけ  
こかるれとかけて心をつくし舟ちきりし事を思ひもそする

月

左。我身をつみて。誰に打入てとよめる心ざし。はかなく  
きこえて。これもひとつの姿なり。右歌は。詞たくみにし  
て。當世の和歌の道をしれり。このすがたをたとふれば。  
楚王臺上夜琴聲と覺えて。感涙をさへがたし。仍右可爲  
勝。

戀

左。なだらかに聞え侍り。右。古哥の下句をさながらとり  
て。ふなことはにひきもとされたる。無下にて徒らにや侍  
らむ。仍以左爲勝。

十番

左

針磨

うり残すわか數針をまきすてゝひろふはかりにすめる月影  
瘠細る我身よされは針になるつれなき人の手にやかゝると

右

數珠引

さやけさは秋をためしにひくすゝの露よりつたふ袖の月影  
君もこす我もかよはぬ中なれはろくろひきにてあはぬ比哉  
月

左。ふるき風情をめぐらしく取なされていと優にきこ  
え侍り。人丸が哥の心にや。右。上下よろしく侍るに。露よ



り傳ふ袖の月影。いまひとしほの色をそへて。心ぐるしく侍り。仍右を勝とすべし。

戀

凡彼是いづれも心ありて。勝負弁がたし。但左。いますこし思入たる所ありて。哥姿まさりてや侍らん。

十一番

左

桂 女

桂川ふるかはのへの鵜かひ舟いく夜の月をうらみきぬらん戀わひて瀬にふす鮎の打さひれ骨と皮とにやせなりにけり

右

大 原 人

すみ木つむ山路の庵に立けふり今宵の月にこゝろよはかれ浮身には數はつかしくゆふ萩の其結めもあらはこそあらめ月

左。桂川ふるかはのべとつゞけられたる證哥の侍るにや。

萬葉集よりはじめて代々の集にも。泊瀬川ふる川のべとこそつゞけられ侍めれ。又鵜かひ舟に月をいとふならひはさる事なれども。題の心にそむけり。右哥。宜く侍る上に。今宵の月に心よはかれとよまれたる。力およばず。右の勝と申べし。

戀

左は誹諸の哥の姿にて。當世の風情にはあらず。右。何となくなだらかにして。よく／＼哥道をしれる人のしわざなるべし。大原の里には神のちかひにて男になれたる數を。あしのくびにゆふ事の侍とかや。それもあはねば。むすびめなしとよまれたる心のうち。なしはかられて心ぐるしく侍り。仍右勝とす。

十二番

左

商 人

もろこしの入江の月を捨なきて昔もかくや世をわたりけん命にも身にもかへんと思へともあふことなる市のなき哉

右

海 人

月を見てさても過へき身なりせば秋はもしほの煙たてしなもしほくむならひはさそといひなせとことの外なる我涙哉

月

左哥。潯陽江の月を思はれたるにや。誠に世を渡る心ざし。昔も今もかはらぬ事なれば。范蠡が五湖の浪に棹さし、事を思出られて。いとあはれにこそ。右の。月をみてとなかれたる五文字。聊とがなりといへども。大かたのすがたうらさびて。こゝろの中やさしうきこえ侍り。仍いますこし。月に心ざしふかきにつきて。右を勝とすべし。



戀

左。逢に命をかへんと思はれたるさもおぼえて。戀の哥はかやうにこそよまほしけれ。紀友則が。逢にしかへばおしからなくにとよみけんもこの心なるべし。右なべての人のしはざにもあらず。上代にも見およばず侍り。世の末には有がたくいできたる哥にこそ。凡嶺松雨を捨て深夜の夢を破る。左の歌よろしけれども。物にたとふれば。玉と瓦との如し。仍右勝侍らん。

## 鶴岡放生會職人歌合

いづれの年にか。鶴岡の放生會ことに事と、のほり。菖園の御行粧いとめづらかにて。一日の見物なれば。万人きをひこぞる。道々の輩ども。あるは役にしたがひ。あるは友にさそはれて。やすらひくらす。秋のなかげ月のさかりなれば。雲おさまり星まれにして。南にのぞめば海濱茫々たり。秦甸の一千餘里おもひやられ。北にかへり見れば。社壇重々として漢家の三十六宮にことならず。爰によしづきたる第二人いひけらく。むかし宮にて。東北院の念佛。九月十三夜にあたりて。諸道の歌合ありけり。いまあづまにして榆柳營の敬神。八月十五夜をてらして。衆生の化度をみそなはず。かかる法會にあひて。この良辰を得たり。舊遊をしたひて。新詠を番はんといひければ。おの／＼しげき世つぎにあへりけんこゝちして。かづ／＼題をおもひ筆をとるに。白露點じて苗瀾うつり。青風吹て蕭瑟とかすかなり。さてやがて當社神主を判者として勝負を定め。優劣をわきまへ侍りけるとなん。

題

月

戀



作者

左方

樂人

宿曜師

持經

遊君

繪師

銅細工

疊差

鏡磨

相撲

猿樂

相人

樵夫

講師

讀師

判者

八幡宮神主

一番

右方

舞人

竿道

念佛者

白拍手

綾織

壽繪師

御簾編

筆生

博勞

田樂

持者

漁父

左

樂人

右

舞人

ものゝねや月の宮にかよふんのほりし橋の跡を尋て  
一夜たにあふことしらぬ笛竹のあなうたて共云きかせはや  
たちまふは入日なへす袖をかしおしまはとまれ山端の月  
立ぬにも手なる計りの故や有と戀しき人のひさまきもかな  
列云。月は。左の哥。のほりし橋のといへるを思わたり  
に。羅公遠が事にや侍らん。まことに思風となくあふぎ  
て。玄宗のあそびにかよひ。詞露あざやかに見えて。赤  
人が様を習へり。右哥。入日なへす袖は。魯陽公がた  
めしを引て。羅凌王のたすけとなせるとこそ。兩首とも  
に溫故知新と候べし。然て月宮の仙遊は猶たかくやこ  
えはべらん。仍而以左爲勝。

戀は。左の。笛竹のことばには。いたくめづらしきふし  
もなく。すがたなにとなく。ことこもりて。さる手づかひ  
もや侍らんとゆかしければ。尤以右爲勝。

二番

左

宿曜師

くもりなく星のやとりは見しかとも月の哀も捨てたきかな  
うき人の生れの月日間きけんけにあひかたき事やみゆると



右

童道

詠むれは月のたゝちは人しらすみちかけするも我を定むる  
うくつらき數のみおほくつもりなほなき所なき物や思はん  
判云。口は。左右歌。いづれもこゝろありてことばたら  
ず。彼在原朝臣。しほめる色なしたひて。残れる匂をた  
のむにことならず。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持にや侍らん。

戀は。右の哥。九々といふより。億兆のうへにも。いくら  
の數か侍らん。なき所なきや。その道の事たへぬ様にな  
され侍らん。

三番

左

持經者

まきれにし袖のしら玉いかにそとなしへ顔にも見ゆる月哉  
しのひかれ心を人にそめ紙のくりかへすにも色は見ゆらん  
右 念佛者

あはれいつか果す涅槃の心にて常住世なる月を見るへき  
聲のあやはつるゝ糸のよりすちり人にかくるはこゝろ

判云。月は左歌。五百弟子品をさゝげ。右哥。四十八願門  
をひらけり。教の文句。哥の勝劣。定め申がたく侍べし。

戀は。左の哥。詞つゞき心のなきて。歌。みといはんに  
たらんことなく。まことしくよめるにこそ侍らめ。經を

そめがみといへるも。物のゆへしれりと見ゆ。右の哥。

聲のあやはつるゝ糸のといへるに。人思よるべからず。  
君子なりと申べくや。自由ならずして自由を得たり。但  
たゞしからぬ所の侍れば爲<sub>レ</sub>持。

四番

左

遊女

河瀬より影さす月のみなれさは船もなかれの波のよるゝ  
はれなからたのまれかたき契かな思ひきためぬ人を戀つゝ  
右 白拍子

秋の思一聲にてもかそへはや月見ることのつもる夜ころを  
思ひ心をせめてふまれけりつらしとていひかされつゝ  
判云。月は左哥。三秋のあはれになへす。一聲の心ざし  
ないひて侍れど。右哥。紅衣青袂万人の往來をたのみ。  
船中浪上一生の浮沈を思へば。よその心もしゆるばか  
りにて。勝と申侍ぬる。

戀は。左の哥。よくありてとがなく侍れど。みなれなる  
様。や侍らん。右の哥。ことのさま哥のすが言。感動  
頗可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>勝歟。

五番

左

繪師



同しくは月のゑしまを 見にゆかん波の汐草かきやよすると  
黒髪をやみのうつゝにかきやりて 見ぬ面影を寫しかねつゝ

右

綾織

雲鳥のあやとそ月にみなさましたなひく雲に 初鴈の聲  
今宵さへ妹かこまくらよそにしておほとのゐにや 獨あかさん  
判云。月は雲鳥の綾もなりえたる心地して侍れど。ゑじ  
まの波はみどころたちまさると申べし。

戀の番も。左。やみのうつゝは優に侍べし。右は。つくろ  
はぬ様に聞えて。歌めきたる事なければ。猶左の勝にこ  
そ。

六番

左

銅細工

影白きめぬきのたちのつかの間も月にのみ社みかゝれにけれ  
離れ行人の心のこはかれなからくりかれてれをのみそなく

右

蒔繪師

月影にみきはのまさこかきませて浦に 蒔ゑの箱さきのまつ  
あふことなよそになしちの敷はかり哀こまかにちる泪かな  
判云。月の左右。哥の心詞。あらぬ跡にして。得失はかは  
ること侍らず。

戀は。兩首興あるさまにとりなせり。おほかたまことな

るにも。狂たるにもよらず。哥ときこゆる心むけ詞づか  
ひとぞなるものにて侍なり。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

七番

左

聲差

いつくにか月の光のさゝさらん波をたゝみの浦のみちしほ  
戀すれは心たかくぞなりにけるへりも 置すやいひ聞かせさし  
右

御簾綴

夕まくれこすの間とる月影はくまなきよりもあはれなる哉  
よなくは思隠るを葦すたれなとふしゝのあはすなり劍  
判云。月は。左の。光くもりなくあさやかに侍るべし。右  
は。時も夕のまきれ。月もかすかなる程なれば。たとへ  
なかるべきな。心ちあるさまのすてがたさに。持と申侍  
りぬる。よのつれの判者はあざけり侍らんかし。

戀は。左の。聲しきしのぶさまは見ゆれど。さしも侍ら  
ず。右のすだれ。秀句にかゝりて侍れど。一ふしあるに  
似たり。爲<sub>レ</sub>勝。

八番

左

鏡磨

おなしくは入江にやかてとりみかけ鏡も 水の月をうつして  
露深きかたはら草をたもにてしほりかくれば面影も見す



右

筆生

水莖の岡へにわれは家ゐせん月に卯の毛のすゑをそへて  
入してを思ふ心はいはすへきふてには跡の見えもこそすれ  
判云。月は。左の。鏡を見るに。百練の銅なるべし。所獻  
君王なり。不明臣妾とかや。思なしもけだかく侍れど。  
右水ぐきの岡べをしめて。月の卯の毛のといへる事の  
よせ。物のゆへありてや侍らん。而勝と申侍べし。  
戀は。右の哥。つねきく心地して。めさむる所も侍らず。  
左歌。戀の哥はかくこそあらまほしけれと見えて。切な  
る様なり。可レ爲レ勝歟。

九番

左

相撲

日は入て月こそ空にねり出れ獨すまひの心地のみして  
とりもあへす心に人をかくれともいさとよそれも移る習は

右

博勞

御空行月毛の駒をひきとめてひのくま川にすそやあらはん  
なへて世の人にたなれのあた心つけすまひ社由なかりけれ  
判云。月は。衆星あれとも一月にはしかすと申とあり。  
おかしく思よそへて侍かな。さゝのくまにかけなだに  
といへる哥なとりて。すそあらはんといひなしたる興

あるべし。爲レ持。

戀は。兩方の作者。申なれたる詞づかひ。思ひならはし  
たること草。哥となりてもいひしりて侍るべし。さるに  
ても。左うるはしく侍り。爲レ勝。

十番

左

猿樂

今宵さへ月の前には出て見んうしろと、こそいひなさる共  
厭はる、我とは更に見えしとておもてかたなもせま

右

田樂

打た、く中門口のやすらひにさゝらあふきて月をこそ見れ  
玉章を手玉にませてつきやらんつれなき人もとりやいと

判云。月は。左。たしかにしてすがたをくれ。右。けしき

づきてことばあまれり。いづれとなくや侍らん。

戀は。左。まことしからんとよし。右。興あらずおもへり。

なぞろふるに。持などにて侍るべし。

十一番

左

相人

かれてより月の行衛のみえし哉いふにたかはて雲晴にけり  
我といは、あはんと人と思ふ迎戀るあたりに打なのりつ、

右

持者



やとれ月心のくまもなかりけり袖をはかさん神の宮つこ  
なへてには戀の心も變るらんまことはうなひかりは乙女子  
判云。月。左は。世のつれの哥さき也。右。やどれ月とて。  
袖をはかさんといへる事がら。上手めきて侍べし。性を  
得ずしてまなばんはあしかるべきにや。これは始終い  
ひかなひて侍れば爲レ勝。

戀は 右。たゞありのまゝのおしはかりにて。題の心い  
なく思ひ入す。左は。戀の行衛も今すこしたゝりあるべ  
くやとて爲レ勝。

十二番

左

樵夫

月のみそ歸れば人を送りけり山風たのむ谷のゆふくれ  
戀ち山うきにもいたくこりぬれば峯の妻木はとし忘れつ、

右

漁夫

とる棹の歌の聲まで浦さひて月のしほせに出る 船人  
ふかくとも人の心をつるはかり哀いかなる江をかたつねむ  
判云。月は。左歌は。若耶溪の風のみにもあらず。鳳凰池  
の月さへ思出られ侍べし。右哥。棹歌一曲釣漁翁と申詩  
の心ばへなるべし。いづれもよろしく見え侍かな。爲  
レ持

戀の左は。義婦。坂のさかしきにつかれて樵路をわすれ。  
右の哥は。竊娘。堤の邊を誘て釣處にまよふ。皆いひし  
りて侍。戀路山や名所ならず。なさて侍らん。さらば  
右の勝と申すべし。

判者神主

ひくしめの長き夜すからなかわれは神さひにけり袖の月影



# 三十二番職人歌合

やまと歌の道都人士女の家。これをもちて花鳥のなさをそへ。山林乞食の客。なな活計の媒とするにたれり。しかあれば。よききぬをさざるあき人も。あじかなになへるわらはべも。各月によせ戀になすらへて歌をあはせ。心ざしなあらはすたぐひ。たびかさなれり。こゝに我等卅餘人。いやしき身。しな同じきものから。そのむしろにのぞみて。その名をかかげること。將來多生の恨なり。今たま／＼過ぬるあとを。はんことをおもふに。猿牽の大夫のいはく。もし月と戀とを題とせば。すゝみては。なくれたるにむちうち。えすゝみがたきをそりあり。しりぞきては。同類のしりぞけがたきおもひあり。いはゆる田夫の花の前にやすむは。我家の風躰なり。まさに花を題として。又おもひをのぶる一首をくはふべきをやと。衆議これにくみす。すなはちつがひをさだめ。一卷にしるして。勸進のひじり弁説上人の庵室にいたりて。判のことばをもとむ。もしこれひさこのえのながくつたはり。ふみならすたいらのこゑの遠くきこえば。世のあざけりなはづといへども。利口滑稽のすがた。艶詞正道のたすけとならざらめかも。

題

花

述懐

作者

左

右

千秋万歳法師

獅子舞

うぐひす飼

大かひき

桂の女

算をき

高野聖

かれ藪

へうぼうゑ師

渡もり

農人

材木賣

結おけし

糖棕賣

簀つくり

繪解

猿牽

鳥さし

石切

鼈捻

こも僧

巡禮

胸たゝき

はり殿

奥昇

底掃

竹賣

火鉢うり

地黃煎うり

しきみ賣



菜うり

鳥賣

判者

勸進聖

一番 花

左持

千秋万歳法師

春の庭に千秋万歳いはふより花の木のねはさしきかへなむ

右

繪解

見處や繪よりもまさる花の紐とかうとかしな我儘にして

左歌。千秋万歳の能作は。毎年正月の佳曲なれば。諸職諸

道の窠初にいでて。哥合の一番ににすゝめり。まことに花

木の春にあひて。さしきかへなん根元をいはへるは。あら

興がりときこゆるに。右歌。繪よりもまさる花の紐といひ。

とかうとかしは我まゝと侍る。思ふさまにいひかなへた

る姿詞。雉の尾のさしてなしへずとも。繪ときの歌とは。

いかでかきかざらん。歌合の一番の左は。勝の字おほむれ

定るやうなれど。このつがひになきては。持とつけ侍るべ

し。

二番

左

師子舞

戯ふれて春の木蔭にまふ師子のたゝくつゝみに花も咲そへ

右勝

猿牽

花のさく蔭にはよせしひく猿の枝をゆふらはちりもこそすれ

師子は文殊の御のり物。猿は山玉の御使者のもの。本地垂

跡の勝劣さため申がたきに。花の木かげより舞いて。た

はぶるゝ師子に。鼓のこゑも。さくなもよなす心は。もろ

こしの鞆鼓樓の春をもおもひよせめるにや。猿ひきの枝

をゆふらんことをおそれて。花の陰をよくべきよしのこ

ころづかひ。優にきこゆ。右まさるべきにや。

三番

左持

うぐひすかひ

羽風たに花の爲にはあたこ鳥おはら巢立にいかゝあはせん

右

とりさし

春は又ところも花の千本にみせなくたなの鳥のいろゝ

左。羽風だに花のためにはあたこ鳥といへる。やさしくき

こゆるに。をはらすだちにいかゞあはせんと侍るこそ。い

かなるゆへとも覺侍られ。おはらは花の名所なれば。かく

いへるか。なしほ山よめるも。せかひの清水よめるも。お

ほはらとこそ申ならはしたれ。狂哥なれば。わざとかくあ

るもさる事ながら。所の名などは。いくたびも哥によむや

うにぞありたく侍る。千本の小鳥も。秋の色鳥にこそよま

まほしく侍れ。これらはしめたる申事にや。いかさま同じ



程の哥とぞ見え侍る。

四番

左

おがひき

鋸のこのめも春のやま風に花の香なからおかくつそちる

右勝

石切

あかす思ふ春の心のたかれあらは石にも花を切つけて見ん  
のこざりおほがは。大小の差異のみにて。同じことにや。  
歌合には。病とて難申べき事なるうへ。石にも花をきりつ  
けてみむといへる心のたがれ。まことに色香をしたふ方  
も堅固にきこえ侍り。右勝と申べきなり。

五番

左勝

桂の女

春風にわかゆの桶をいたきてたもつしか花を折かな

右

髪捻

花髪おち髪ならはひろひをきひねりつきてもうらまし物を  
左。わかゆの桶をいたきて。袂もつしか花をおるといへ  
る。かの月中の桂男よりは。此桂の女は。きよげにみゆる  
にや。きぬあやならぬ布のひとへぎぬながら。つじが花を  
なるとあるも。よくいひなされてきこゆ。春風こそさせる  
よせなく侍れど。孟郊が一日見盡長安花も侍るうへ。つじ

が花染ばかりにては。春の花の心も。かすかに侍るべきに  
や。右。花かつらのおち髪ならば。拾をきてもひねりつか  
むといへる。花を思ふ心はせちに侍れど。左は猶ちからい  
りてきこゆるにや。

六番

左

筭をき

なくさんのさうしやうしたる花の時風をはいれぬ五形也見

右勝

虚妄僧

花さかりふくとも誰かいとふへき風にはあらぬこもか尺八  
算道の指南。五形の相尅相生を本鉢にて。一切の吉凶を判  
定する事なれば。花の時の相生に。風をばいれぬ五形と勘  
あげぬるいと興あり。薦僧の三昧紙ぎの肩にかけ。面桶腰  
につけ。貴賤の門戸によりて。尺八ふくほかには。別の業  
なき者にや。さればふくとも誰かいとふべきといひて。風  
にはあらぬこもの尺八とよめるに。花盛とをける五文字。  
風なき花の時節。ふく尺八の興は一しほなるべく。いひい  
だせる尤よろし。筭をきの五形よりも。こも僧の一曲やさ  
しくきこゆるにや。

七番

左勝

高野聖



たかのやま行せぬまも宿がせと坊なうかれて花や尋ねん

右

巡禮

おひすりに花の香しめて中いりの部の人の袖にくらへん

高野居住之聖。諸國巡禮之客。或期五十六億之會座。或約三十三所之靈場。共雖結佛道修行之果。互慕人間榮耀之花。哥科更無三甲乙。判詞難弁勝劣者乎。

八番

左

かれたき

道場のあるしならねとかれたき花に遊行の跡やたつれん

右

むれたき

宿ことに春まいらんと契りしは花のためなるむれたき哉

左のかれたき。念佛弘通の心ざしをわすれ。乞食頭陀の求をも捨て花に遊行せんといへるは。飛花を觀する聲聞にもあらず。花のうき世にまよふ心のみぞふかく侍る。

右のむれたき。すみかへりたる。寂寥のむれたきの、じりて。せめてのまさらかしにするにや。宿ことに春まいらんと節季に契した。花の爲ぞと。春おもひしらせぬる胸のうらやさしくこそ侍れ。左右勝劣なし。持にて侍りなむ。

九番

左

へうほうふし

山水もはるそ見事のへうほうふ花の錦をちうへりにして

右

はりとの

きの共な春の日しめしなきもあへず花見の立立急かる、比

此山水の繪。象牙の軸。金欄の表紙よりも。はなの錦の中べり。うつくしくしてたてられて。山水の香景も。光そふ心地し侍るに。右の張殿の。春の日しめしなきあへず。花見の立立に。男女の衣服ども。取みだしたるさま。つきなくしくいひいだされたり。女の歌は。よはきもゆるさるゝ事なるに。かひなくしく手きゝたる日つきは。たなばたの手をも。立田姫の心をも。へつらひ侍っじ。花の錦の一幅の繪よりは。いくむらともなきはりきぬは。めとまるこゝろぞし侍る。

十番

左

渡守

櫻川花にゆるさぬふなとこをなしてはいかゝわたるはる風

右

興昇

やすますはこゝろなからむ茶屋の前花の下行道のこしかき左のわたしもり。在中將に都鳥の名をなしへけんやさしさにもすぎ。貫之が。はるべになればといひけん波の花にも立ならぶべく。歌のすがたひびやかにきこゆ。右のこし



かきやすまずば心なからんとよみて、茶屋の前と花の下  
となともにいひ出たるは、喉かはけるとを道にて。春茶の  
煙をとひ、陸羽盧全を學ばんとおもへるか。又雲門禪師の  
學者にしめしけん、胡餅の味を心がけぬるか。花の陰なれ  
ば、別の用所なくとも。しばしかきすへたらん、興こそ風流  
なるべけれ。但そのさま身におはぬ哥なば、文屋康秀をも  
難じて侍れば、持にて侍りなむ。

十一番

左持

農人

とりをける我ものたねの色々は春の花にもいか、まくへき

右

庭掃

名にたてゝこや庭はきの家の風花を我世のあさきよめかな  
五穀十穀の物だねを。我園我門田にうへたてゝ。春の花に  
もまくまじう思へる。農業の家には。花よりも心をそむべ  
き事ことはりに侍り。春の田を人にまかせて。我はたゞ花  
に心をつくる。比叢とよめるも。農人にあらざる。齋宮の内  
侍が哥なれば。作例にひくべからず。又庭掃の。我家の風  
にて。花の塵をさよめたる。かゝる庭はきにあひてこそ此  
春ばかりとも制したくは侍れ。農人も庭掃も。花にはめて  
てもきこえど。我藝にあそぶ心は。捨がなく侍り。歌の

しなおなじ程にや。

十二番

左持

材木うり

吉野木の材もくなればあたひなも花におほせて花たかる也

右

たけ賣

手あたりのよき枝あればおるもうし花の園のまかり竹めせ  
吉野木の材木。花におほせてはなたかるといへる詞。いひ  
しりてきこゆ。まことに此判者。先年。あるわれ鐘を鐺な  
なすに。鐘樓をもたてんとて。材木尋に吉野山に入し事思  
出られて。興ある心ちし侍り。又此竹賣の。花のあるじに  
才學をつけて。花あればすなはちいる。貴賤の手あたりの  
枝に。用心をすゝむるに。花のかこひのまかり竹めせとい  
へる心。かしこくきこゆ。この竹。材木におとらずや侍ら  
ん。

十三番

左

結おけし

春はまつ柳のおけをいさ結てかうし花をもめにあけてみむ

右持

火鉢うり

八重櫻名におふ京のものなれば花かたにやくなら火鉢かな  
左。結桶師。哥合の題に花をとりて。かうじ花を存の花の



類なき色香によみなさん事。柳の桶ゆひおほせてもきこえず。落題とまでは中べからず。正位には侍らぬにや。右。火鉢賣。奈良の都の八重櫻をよみて。けふ九重の哥合の衆につらなれり。まづやさしく侍るに。火鉢のかたちをさへ花がたに造り出して侍るは。心もたくみに。詞もゆへあるさきにきこゆ。右勝べし。

十四番

左持

糖棕賣

手ことにそとるはしつるの糖ちまき花をもみわの晝の休みに

右

地黃煎うり

花をとふよし野もやまと地黃煎草にも木にも心ひかれて前陣慷慨茅粽。慰三輪山之露宿。後陣地黃煎。助大和路之風發。各於其境界之土産。共其時節之風味也。有レ興有レ感。無レ優劣二乎。

十五番

左勝

箕つくり

右

檜うり

れなからも花はよろみん星の名の箕作る業に日を暮しつ、一枝の花はひとゝきかはも葉もとるや檜のたえぬかうめせ花の前の二人の願。左は。箕弓の藝のその一なり。南箕北

斗は。かすなき中にも。光輝ある星にや。れながらも花はよるみん星の名のといひて。箕つくるわざに目をばくらしつといへる。よくいひ流されて。しきみの抹香。無下にはなかなうばはれ侍るにや。返々左の星は。位たかく侍れば爲レ勝。

十六番

左持

なうり

春霞にくゝたちぬる花のかけにうるや榮さうも心あらなむ

右

鳥うり

かへらすて花にとまるもあき人のうる膺かれは心なきもの右膺料理。得三左句々多智一添二氣味。此番可レ爲レ持。

十七番 述懷

左

千秋万歳法師

立まへる千秋万歳いつくにもけしきはかりの祿そかひなき

右勝

繪解

繪を語り比巴ひきてふる我世こそうきめみえたるめくら成けれ左哥。いづくにても。氣色ばかりの祿の乏少なる事ないへる。さぞとなしはからるゝに。袖かへす所を。一おれけしきばかり舞たまふとある詞つゞきふと思いでて。猶優にきこゆるにや。右哥。琵琶ひきてふるといへる二の句こそ



にはひなく侍れ。平家は入道の姿にて盲目なり。繪をとくは俗形にて離装が明をおもてとして。しかも四紋を弄せり。然るに繪をかたり。比巴ひくといひ。うきめみえたるめくらといひて。自他の所作をよくよみわけたる。心ふかくきこゆ。左は詞の優なるのみなり。右は義理ふかく侍れば。いさゝかまさるべきにや。

十八番

左

師子舞

我なからおほつかなしや骨なしの何を力に世をわたるらん

右

猿牽

ちく生もつかひいるれば中々に我にはましの能のおほさよ左。師子舞の自歌に師子のすがたはなくて。骨なしの一能を取りでぬる。傍題とも難じ申べきに。落葉浮水といふ題にて。筏士よめる哥。元久の勅撰に入られぬる事ふと思出侍るうへ。この骨なしといふ事は。かならず師子舞の兼帯する能にて。骨なしな。すなはち師子相撲とも申とかや。しかれば尤興ある事にや。何を力に世をわたるらむと骨なしのよめる。利口にご侍る。右。猿引のつかひいるれば。畜生も我にはましの能のおほさよといへる。やすらかにいひくだされてきこゆ。右は。猶題の心たしかに侍れば。師

子にはましごましにて侍るべき。

十九番

左

鶯かい

すゑあけてよき鶯とまむすれば麴てとびなきするも恐ろし

右

とりさし

哀なり小とり一羽をさゝむとて天にせくゝめ地に足をぬく

鶯飼高慢をおこさば。我身こそ鶯にも天狗にも成べきに。

鶯のとびなきな。そへよまれたるは。事たがひてや侍らむ。鳥さしの。小鳥一羽に目をかけて。わりなきしげ本。やぶ

のかげなどに。さほくりいだして窺よれるさま。みる心地しておかしくぞ侍る。下句は。さながら毛詩正月の篇の本文を。ありのまゝになかれたれば。自作の本意なきやうなれど。これ又哥の一帖にまれゝある事なるうへ。道理のたしかなると見様態との侍れば。右勝べきにや。

二十番

左

大かひき

柚板は世にいてなから哀れ身のおかひきこもる山住そうき

右

石きり

あなたうとつくるゝもいしの火の光をやかてはなつ御佛左。おがひきこもる山すみといへる。宜く侍るに。三の句



より四の句へうつる詞づかひ心ゆかす。右の。石切のつくるつくる光をはなたるは。佛の通力にてはなくて。石にあたるたがれの力よりみゆる光明なれば。火打の石佛と申さむも。道理かなふべくや。當時のはやり佛谷の觀音も。石佛とこそ申なれ。この佛のつくるくひひかり。疑なき光明にて。たうとく侍り。返々右勝なむ。

二十一番

左

桂女

名乗のみあゆは上臈けたましやよこれわらうつしほれ帷子

右勝

髪ひれり

美しくかゝれとてしももうば御前はよめか髪を捻らさりけむ  
左哥。上句は桂が境談の持言。下の句は桂が朝暮不斷の出立なり。名のみ上臈にて。出立はよこれわらうつしほれかたびらといへる。おかしくきこゆ。右歌。花山僧正の。ならちればかゝれとてしもむば玉の我黒髪はなですや有けんといへる歌を。このかつら捻の貧女の思よれる。まづ希有に侍るに。かゝれとてしももうば御前はよめが。かつらをひねらざりけん。と。本歌をへつらはずして。しかも其詞をうつせり。歌がらのゆらくとなびやかなるさま。たかねくたれの桂の上。たかうしる手のふさやかなるそぎめにも。

かゝる品はありがたくこそみたまふれ。かつら捻といへば。暖きやうなれど。かの常陸の宮の御娘も。我おちがみなこそ。薰衣香の壺にそへて。乳母の侍従にもたびけれ。いやしきあまのすさみにも。たゆまじき道のすぢは。詞の玉かつらにて侍りけり。桂が歌よめるかつらよりも。見所なくや侍らん。

二十二番

左哥

筭をき

右

虚妄僧

こし程のかりやのうちに身をなける筭所の者の恨めしのや  
さし入もみそや酒やの槽法師聲をかへてもこふ。茶ばかり筭をきの述懐。輿程のかりやのうち。さぞとをしはかられ侍り。かうなの貝。かたつぶりの家も。みななのが身にあはせては不足なきにや。五尺の身。三尺のかりやにて。目れもすとふ人を待たる。一生涯の果報をも。自身にかんがへぬらん。なげるさん所といひ。さん所のものゝとつやけぬる。いとよくいひくさりぬるにや。こも僧の哥。かすほうしに。乞食の愁吟をゆづりて。わづかなる竹のふしに。世をわぶることをきりいだしけんも。わりなき方便とこそおぼえ侍れ。みそにも酒にもはなれぬ詞にて。此槽法師



いひしりてきこゆ。此つがひ持にて侍るべし。

二十三番

左脇

高野ひしり

やれ衣かたにかくるは憂物とわひつゝ老のしわもよりぬる

右

巡禮

同行のめくる御てらのそのかすに三十三の茶かはりもかな  
せなかにおへるおいのしわ。かほによれる老のしわ。とも  
によくおもひよせられて。やれごろも肩にかゝれる和歌  
の浦波も。びじりの口よりわき出ぬれば。卅三の茶がはり。

一丁のおいにをよぶべからず。

二十四番

左

かれたゝき

息のをの苦しき時は鉦鼓こそ南無阿彌陀佛の聲たすけなれ

右脇

むれたゝき

淺ましく膚かくさぬ胸たゝき身の皮きぬもいかでつゝかん  
稱名念佛の一行は。自力聖道の諸宗にもまさるなれば。む  
れたゝきの狂ぜる軀。立ならぶまじき事ながら。左右の哥  
を吟味し侍れば。あさましくとうち出たるより。はだへか  
くさぬ胸たゝきといひ。身の皮きぬもいかでつゝかんと  
わびたる詞姿誠秀逸の軀とみえたり。かの重明のみこの。

七重がされてきたまひけん黒貂のかはさぬにも。かゝる  
詞の花の色香は。なよばじと覺侍り。左の息の緒。右の身  
の皮にまけ侍なん。

二十五番

左持

へうほう繪師

いかにせん馬ならぬ繪の表法をまさたしわろくのりこはをき

右

はりどの

雨の日をもらすはおしきあきなひに内はり廣き殿作りせん  
表法繪師のよめる左の哥。いかにせん馬ならぬ繪のへう  
ほうと侍る。上句にて思やらぬ馬の。ふとかけ出たる心  
ちし侍るに。下句をよみつゞけぬれば。まさだしわろくの  
りのこはきかとあるにこそ。此馬の尾髪もとゝのほりて  
みえ侍れ。はり殿の右の哥。内はりひろきやうに造作をし  
て。雨儀にも装束に事をかゝず。潤色のまゝにて出仕させ  
ん事をたくめる女工所のねがひも。心ひろくきこゆ。左は  
たくみなる軀をそなへ。右はたけたかき徳を具せり。可い爲  
と持。

二十六番

左

わたし守

夏河やせにたえゆけはみなくちもはたらかてある渡守かな



右勝

輿舁

旅の世のうきなはいとは、輿舁のくるしむみちこそし合せなる

左歌。夏河炎旱に瀬だえすれば。渡守口中の補なきことな。

みな口もはたらかでなどよそへいへるは。たくみに侍る

な。せにたえゆけばといへるや。錢の字にはあたれども。

瀬の字には。に文字あまれり。飛鳥河瀬にはあらぬ我宿も

とよめるこそ瀬と錢とな相兼てはきこゆれ。此渡守心な

ば。よく取よせて侍れど。第二の句の一字。心ゆかす侍り。

右のこしき。旅の世に身を捨て苦なしのがば。終に安樂

の國にのぞまむ心を會得せり。三人輿にてさへ遠路はか

なひがたきに。さし合せの苦行あぢきなくぞ侍る。左右の

乗物。舟よりもこしにとこそ思ひ侍れ。

二十七番

左

農人

さしつとひ損七こはんあらましや百姓くちの名にも立らん

右勝

庭掃

捨やらぬ世なにかにかすへ帚拂ふも庭の塵の身ながら

農耕之士民。對地頭乞損亡。掃除之庭拂。立庭上。好奇

麗。共先道理。又兼風情。雖然帚猶有千金之譽。百姓閉

口乎。

二十八番

左持

材木うり

あらましの我屋作りは杉の門身のさいもくを人にうりつゝ

右

竹賣

うりかぬるしれんこ竹の末の露もとの雪のまうけたになし

材木賣の哥。紺かきの白袴などいふたぐひなるべし。竹賣。

又自然期の病竹をうりかれぬるうれへも。同じ程の歌に

侍り。左右無勝負。可爲持。

二十九番

左

結おけし

竹ならぬ心はまけし桶ゆひて世をまはる身は正直にして

右勝

ひはちうり

風呂火鉢瓦灯り桶みつこほしよきあきなひとならの土哉

左歌。結桶師の三昧正直といへるも。家業の器なり。竹な

らぬ心はまげじとみづから心に制戒をたもてる。胸襟神

妙に侍り。右。上の句の三句に。五種の家ぐをいだして。南

都一境の土に功なつものれり。まことに土は。万物をのせた

る徳あり。さましくにつくりいだし。やきなせる奈良の土。

たいらの京へも。いかばかりかのぼり侍らむ。左は聲韻の

病侍れば。よきあきなひ可然にや。



三十番

左持

糖粽うり

さ月にやまこものみとも成なましあめてふ物のかきり粽は

右

地黄煎うり

うなひ子か乳房に似てもすふ物はちのみちおもふ地黄煎哉

兩方のうり物。左。發句に五月にはといひて。四の句にあ

めてふ物と侍る。五月雨の心をふくめるにや。四時あめに

てさいすくちまさな。端午にはまこもにてかきり粽にせ

んとよめる。心詞巧に氣味ふかく侍り。右。うなひこが母

の乳味にもなとるまじう。すいしはふくむ口つき。みる心

ちしていたひげにぞ侍る。地黄は血道衰上の良藥なるに。

骨肉同胞の契をも。血の道通ふなど申せば。うなひ子にた

よりありて。かたぐよろし。是もおなじ程の甘味にこそ

侍らめ。

三十一番

左持

箕つくり

徒にふるみのはてないかゝせむ人のひいつる事をなしても

右

しきみうり

よしや身の佛くさきなわきにして憂世の袖にしめぬ花かう

うき世の袖にしめぬ花かうといへるよりも。いたづらに

ふる身のはての愚昧なるをなげき他人の秀才なるをうら

やみて自己の商賈に懷をのぶ。まことに思ひれて。心ある

様にきこえ侍り。十五番の左にては。花の本に高臥の高吟

を述て。感をもよほさしむ。此箕うりは。馬祖の母にもま

さりてや侍らむ。

三十二番

左持

なうり

定めなく宿もなさうのあき夕にかよふ内野の道のくるしさ

右

とりうり

擔ひもつあふこの竹も青くひのとりやう身社世にふしやうなれ

左歌。定めなく宿もなさうのあきゆふにといへる。なだら

かに侍り。かよふ内野の道の苦しさこそさばかりはと覺

ゆれど。春は雪のこりかぜさゆる松の下道。秋は露ふかく

霧まよふ芝ふのうへ。冬は神がきとなき雪の中など。まこ

とにさはる陰なき大掌島。はるかに見渡されて。心すこき

おりくも侍るらむ。右哥。竹のあふこ竹のあじか。かゝ

るわざにとりあふ事の不祥なる身な。世話の童謡によせ

ていへるも。恨あさからずきこゆ。いかさま左の榮り。

哥のすがたまさるべきにや。



群書類従卷第五百三

雜部五十八

七十一番歌合

天地ひらけし時。さかほこのくだれりけるより。道を玉ぼことなづけて。よろづの道をたてたり。ことに歌をやまとなづけて。わがくにのことわざなりければ。神の道にもかよひ。人の心をもやはらげければ。金殿の光ことなるみぎり。なるかなる草のむしろにも心なのべけるあまり。その道をかたどりて。なのく左右をわかつて哥を合侍けり。題は月と戀を出して。衆議にて判けるなるべし。いと興ありけるにや。

題

月 戀

一番 左

なしなをす工もいさやすみかれにさけすむ月のかたふきにけり

右

軒あれて古きかちやの太郎槌ふりさけみれば月のさやけき

左の歌。さけすむ月とよくつゞけたれども。うた合には。かたぶく月あやなくきこゆ。右のうた。太郎づちふりさけ見ればといへるも月をほめたり。まさると申べけれども。一番の左なれば。なすらへて持と申べし。



くれことに獨ふし木のあらつくりいつてなのめのあはむとすらん  
うらめしや人の心のあらやすりひかきめにたにのそかれぬ哉

左右ともにてなのめ。ひがきめとよめり。おなじほどの哥ざまなるべし。猶持とす。

番匠。

我々もけさは

相國寺へ

又めされ候。

暮てぞ

かへり

候はん

すらむ。





京ごく殿より

うちがたなを御

あつらへ候。大事

に候

かなかゝる

べきと。

鍛冶。

二番

故郷の壁のくつれの月影はぬるよなくてそみるへかりける  
月のもる軒端のきりの薄ひはたふきもとなさぬ秋の風かな

左。壁の崩といひて。ぬるよなく月みる。いとやさし。右は。霧の薄ひはたふきとは續きたれども。風を本にいひて。月  
をもてなす心少し。仍左勝にこそ。





我袖のひろよもしらぬなまかへのよりそふ人のなきもうらめし  
軒つけを先ふきそむるひはたやのまたむねあはぬ戀もするかな

左。なま壁のひろよなきに。よりそひがたきといふ。いと興あり。右。軒つけを葺はじめて。まだむねあはぬとよめち下  
句。歌さますこしまさるべくや。

壁塗。

やれくうばらよ。

いへにてこて

猶とりてこ。

かべの大きく

まいりて候。

したちとく

して

候はゞや。





檜皮葺。

このむな

がはらが

なそき。

三番

いかにせんとかすもいらぬつるき太刀峯なる月のさひのころ哉  
なかむとてぬるよもなきにあら漆はけめもあはぬ村雲の月

左哥。五文字かなはすきこゆ。峯のあひしらひ。あらまほしくや。右は。あら漆のはげめあはぬな。村雲にたとへたる哉。





左右ともにさしても聞えず持にて侍べし

いつまでか鈴になるこなたなのあふへきことのかなはさる覽  
しほれとも油かちなる古うるしひることもなき袖をみせはや  
左右ともに。心ことばきゝて。面白くきこゆ。よき持にこそ侍るめれ。

礪。

さきがおもき。

今少なさ。

ばや。

ぬしにとひ

申さん。

はいや。さは

いかに。手を

きるぞ。





塗士。

よげに候。

きがきの

うるしげに候。

いま

すこし

火とるべ

きか。

四番

壺ここの只一しほのそら色に光そへたる秋の夜の月  
よるさへや織となさまし機絲のたてぬきしるくみゆる月影





左は。我道の才覺誠に聞えたり。右は。歌さまうるはしくて。しかも月の殊なるを褒たり。はた絲は。心引筋也。勝べくや。

しかま川逢瀬もいつとちきらぬにあなかち人の戀しかるらん  
織はつるしつ機帶の今はとていつうちとけてあひみそめまし

左右ともに歌さまよろし。しゐて勝負あるべきならば。右の哥。五文字より末の句まで。よくいひかなへり。すこしは  
まさるとや申べからん。

紺搥。

たししほそめ

よと

おほせらるゝ。





機織。

あこやう。

くだもて

いふ。

五番

汲たむる桶なる水に影みれば月なさへこそ曲いれてけれ  
心して車つくらむ秋のよのなかえの月のなそくめくらは

左歌。月をまげいるゝこと。八月を願ふににたり。すこし心  
なきにや。右は。月をなそく造りなさむといふたくみよく

きこゆ。右勝にこそ。

逢ことはそれとちめの櫻かはかはかりとこそ思はさりしか  
我戀はくさひもさゝぬ小車のめくり逢へきたのみたになし





左。とちめの櫻がはかばかりと續けたるさま。面白く聞ゆ。  
 右心はさもと聞ゆるな。月の哥にも戀の哥にも。めぐる  
 とよめり。懷狹になたり。是は左勝侍るべし。

檜物し。

ゆおけにも

これはことに

大なる。

なにのため

に。

あつらへ

給ふや

らむ。





車作。

びりやうのわとて。

よくつくれと

おほせ候。

六番

なにしおへは秋のうちにも播磨鍋ふたゝひにゝる月をみる哉  
あち酒の霞し空に似たる哉あまけの月のしほり出つゝ





左は。ともに八九月二たびの名月をよくよせて。なべぶたとつゞけて。しかも月を褒たり。右は。秋の明月にむかひて  
 春を思ひ出るのみならず。雨氣をさへ詠すること。風情を失ふにいたり。仍以左爲勝。  
 うらめしや筑摩のなへの逢ことを我にはなとかかされさるらん  
 我戀は忍ふとすれとさ。か瓶子口こそつゝめ色に出つゝ

左歌。誠に撰集などに入たりとも耻すや侍らん。右は。いさゝかたはぶれ哥なり。仍左可勝。

鍋賣。

はりまなべかはしませ。

かまもさふらうぞ。

ほし

がる人あらば仰られよ。

つるなもかけてさう。





先さけめせかし。

はやりて候。うす

にこりも候。

酒作。

七番

宵ことに都に出るあふらうり更てのみ見る山崎の月

見渡は秋の田面のいなもちぬおほきに出る山のはの月

左哥 暮ごとにとこそいふべけれ。夜やはあぶらうるべき。右歌は。秋のたのものいなもちぬ。まことにさることとき  
こゆ。仍もちぬにつくべきにや。

山崎やすへり道ゆく油うり打こはすまてなく涙かな  
なからへて君とれのこはいさしらす三かひとつもせめてあはゝや。





左哥二首ながし第三句にあぶらうりとなけるふところせばくきこゆそのうへ此哥の故事を思ふにも山ざきのう  
 ばがもとにあぶらかひにいたればとこそ侍れそれないま作者なれば油うりとよめるも本説にたがふめり。たゞあ  
 ぶらかひと詠べきにこそ。又なく涙とばかりにては戀のこゝろうすくや右は。ともに本説ないひ出て。もちゐといふ  
 字をまはしてよめる。やさしくきこゆ。勝と申べし。

あぶらうり。

きのふからいまだ

山ざきへも

かへらぬ。





もちゐうり。

あたゝかなる

もちまいれ。

八番

筆つかにきりつゝめたるさゝ竹の永夜しらす月をみる哉  
打絶ていとめまはらのあら庭いのねらるへき月の影かは

左。筆柄にきりつゝめたるといひて。末にながき夜しらぬとよめる。たくみ也。右。始申終。當道をのべたり。是又捨が  
なし。よき持にて侍なり。





なひくほといかいゆはまし我爲は夏毛の筆のこゝろこはきを  
戀しさの心ものへぬ獨寝は九條むしろせはからぬかな

ふではいふばかりなくおもしろく。むしろは。うちすてがたし。是もよき持にこそ。

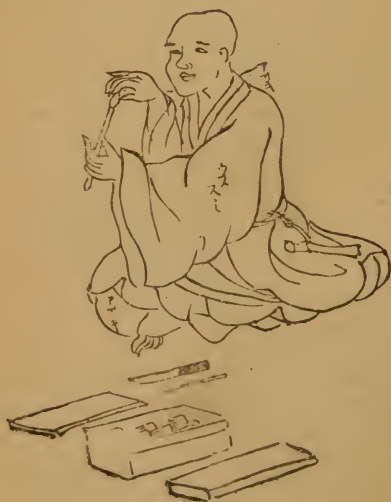
筆ゆひ。

うのけは。

毛のうらおもて

みえぬが

大事にて候。





薙うち。

てしまむしろ。

かしまへ御ざ

も候ぞ。





九番

秋までは煙もたてぬ炭やさの心とすます月をみる哉

一たきにさも燃やすき小原木のあかしもにてす入かたの月

左は月を翫ぶ心深けれども此風情當時連歌などにいひふるしたるにや。右は哥合に入かたとよめる。聊心なきに似たれども。巧なるによりて爲し持。

炭竈も我にはなとる思ひかなけつことしらぬ戀の煙よ。

かこたるゝ身の程ならはおはら木のふすへらるゝも嬉しかりまし左。させる難なし。右は。かこたるゝふすべらるゝ。此るゝの病ありといへども。心珍しきにゆづりて爲し勝。

炭やき。

けさいで

いイ

さうまう

たか。





小原女。

あござは

まいり

あひ

て候けるか。

十番

秋のよも限有けり馬かはふ聲すむほと明方の月

いけはきの皮かはふ時なむれはあかはたかにもすめる月哉

左右ともに。なのれが時の月を詠たれば月の難あるべからず。右は。逸興あるに似たり。仍爲ノ勝。





馬かはふはくらう時の立君の宵曉にかよひなれはや  
朝かへる道行ふりのかはかはふ我逢つると人にかたるな

左歌、身におふ戀とおぼえて。立君に寄たり。心あるににたり。ばくろう時。又よせあるにや。右。別路の時分、行逢べき  
こと眼前也。心詞同品なるべし。爲レ持。

むまかはふ。





かはかはふ。

十一番

秋さむき深山の里にたくはたの永き夜盡ぬ月影も哉

闇にこそいさりはせしか鹽かまのぬる夜すなく月をみるかな

左。ほたのながくつきぬに。月を思よせたる。いうに聞ゆ。漁人はやみにねす。月に休むといふを。是は松嶋のあまにや。  
心有さま也。持にてこそは侍らめ。





獨れの數もしられぬあは畑のうちわするへき時のまもなし  
忘らるゝ汀にすつるたくなはのくりかへしてもうらめしきかな

左。粟のかすしらぬばかりな詮とよめるにや。右。哥がらよろしく侍り。可レ勝。

山人。

ことしは秋より

さむくなり

なるは。





この繩。はや  
きるゝは。

たかうれ。

浦人。





十二番

歸るさの暮はつるまでこる柴のおひ／＼出る山のはの月  
夕草になく露なからかけこめて月影をさへつかれつる哉

左右ともに。おもしろく侍り。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

やすむとおるす薪につみしりぬ後にたにも人のよせねは

朝夕に君をはかれすみまくさのしかなかりそと人なとかめそ

左は。逸興あり。右は。かのなかの哥をよくとけなしたり。尤かつべくや。

木こり。





草かり。

ふしみ草とて。

世にもてなざるゝ

みまぐさよ。

十三番

秋や深き月の光もさひえほし頭の上に影の成ぬる  
秋寒きれやの扇の風絶て雲の折めの月そかくるゝ

左歌は。停午の月をよめるか。右は。雲のおりめことゝしく聞ゆれども。今少しまざるにこそ。





いかにせんしなにぬ戀の瘦やまひむくのみ色に身は成にけり  
骨こはき扇の紙の薄そくい思もつかぬ人に戀つゝ

左。戀に瘦くろむこと。本説なきにあらす。烏帽子のむくのみ色。能思寄たるにや。右は。道理は立て聞ゆれど。五文字誠にこはく侍り。左勝べくや。

えぼし折。

今時の御

えぼしは。

ちと

そり

て候。





あふぎは候。

みな一ぼん

扇にて候。

扇うり。

十四番

遠山の腰めくるまで更にけり雲間の月のあての下帯  
秋寒み雲も残らぬ月かけは霜とみるまでしろい物哉

左哥。いひしれるさまにはみえ侍れど。右。逸興ありてめづらし。よりて爲勝。  
人妻にかけし衣の細帯のくけちもあらは嬉しからまし





戀すとや人のみる覽おしろいのきはつくまでに流す涙を

左。衣のはそ帯といひ。人づまのくけ地など。能取なしたり。右は。白い物の涙に際づくらん。いかさま色の黒きにや。  
然らば戀さめしつべし。左勝にこそ。

おびうり。

此おびたちて

のち見候はむ。

いそがしや。





しろいのうり。

百けも。なからげも。

いくらもめせ。

いかほどよき

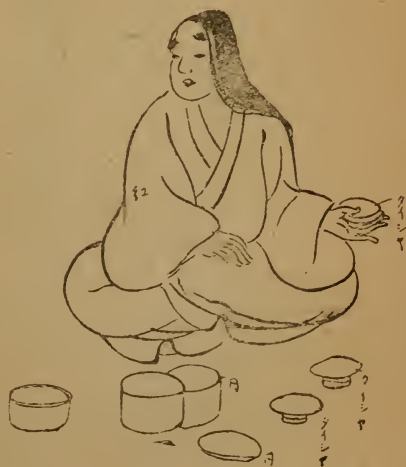
御しろいが候ぞ。

十五番

こと浦の月もなにはの蛤の貝ひろふまでえやはすみける  
かつら鮎とりてうるかとやみまたは月の價はなく成ぬへし

左。本歌にすがりて。しかも月をほめたる宜侍り。右。あたひといふ詞。哥にも侍らめど。何とやらん賤くきこゆ。やみを  
待らむも又いかゞ。仍以左爲勝。

待人のさはるといはたきませかし蛤うらふ雨は降とも





はやくこそ六角町のうり魚のなれぬ先よりかはりはてけれ

右。六角町如何。古歌にも。町なば市とこそよめれ。又六角町ならでも。魚は賣かひてん。いかさまにも。猶左可レ勝也。

蛤うり。

ひげのあるは。いへの

はちにて

さうぞ。

ことのほかなる

ひげのなきかな。





いとは候。

あたらしく候。

めせかし。

いなうり。

十六番

引はへて永き夜なからなかめはや影も白木の弓張の月

夕暮の山端みれはまつさかやつるくとこそ月はいてけれ

左。本末ゆみの心ひき合たり。右。まつ坂やつるとは續きたれど。つるくの詞。たゞ詞也。以レ左爲レ勝。玉札もはれのけらるゝ荒弓のなしかへしても人そ戀しき





たのまめや人を猫ふせつるのきれぬ契とおもはましかは

左。はねのけらるゝと  
いふ。又たゞことばな  
り。右。ふせつるのきれ  
ぬ契。よくきこゆ。可  
レ爲レ勝。

弓つくり。

此ゆみはつるな

きはんする

ぞ。

にへおり。大事

なるべき。





つるめし候へ。

ふせづるも候。

せきづるも

候。

つるうり。



十七番

秋うるしぬる夜はいかにわれひきればけめは白き村雲の月  
かくはかりまとかになりて照月の赤かはらけのわれぬもかな

左。さることとは聞ゆるな。はげめと云やたゞ詞ならん。絶まといふべきな。ひきれに引れていへるにや。右は。満月を  
よめり。赤土器のわれすもがなとれがふもげにと聞ゆ。かの好患が古風。いさゝか残れるにや。右勝たるべし。

我戀はしはすのはてのうりひきれぬるかとすれはいそく別路



あしさまに取落しつるかはらけのわれてくたけて物おもふ哉

左。しはすのいそがはしさに。なま壁のひきれは。さもと聞えたり。右。五文字いかにぞや聞え侍れども。末の句をはらめるもあしからず。われてくたけて物思ふ戀の心。猶宜によりて爲レ勝。

ひきれうり。

これはいなば

がうしにて候。

めせ。





かはらけつくり。

赤かはらけは

めすまじきか。

かへりあしにて

やすく候ぞ。

十八番

うり盡すたいな餅やまんちうの聲ほのか成夕月夜哉

夏まではさし出さりしほうろみそそれさへ月の秋をしるかな

左右。ともにさせる事なし。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

思ひわひ千度悔てもまんちうの残るへきな猶つゝむ哉





うとくのみならの都のほうろみそほろくとこそれはなけれ  
 左くひてものこりなつゝむことしかり。右は「今すこし戀の心まさるべくや。」

まむぢう賣。

けさは。いまだ

あさなひなき

うたてさよ。





われらも。けさ

ならより

きて

くるしや。

ほうろみそ賣。

十九番

すきかへし薄墨染の夕暮もしら紙色に月そいてぬる

一か二かめも消はつるつふれさいそれたにみゆる秋のよの月

左右ともに。我道をふかくいひたてゝ。しかも月をもてなせり。なすらへて爲レ持。

忘らるゝ我身よいかにならかみの薄き契はむすはさりしな

れたやけにかたつきしたるえせさいのかくかひもなきめなもみる哉

左は。奈良紙のうすきといふばかりな。詮とよめり。右は。始をはりこゝろざしたのべて。ちからいれるさまなり。などか勝侍らざらむ。





さゝや  
かしが  
たらぬ  
げな。  
かみすき





さしちがへのさいも

めし候へ。いねを

物の

いきめも

候ぞ。

さいすり。

二十番

此ころのならひ成けり町かふと星みえぬまですめる月影

嬉しくもひきねにしたるつきの木の月のかけぬをこよひみる哉

兩首ともに。あしからすきこゆ。仍爲持。





し返しなむくひはいさや古鑑さへくてこそわかれはてぬれ  
今は我きればてぬるなさても猶ろくろの繩のひく心かな

左右ことなる難なし。あながちに毛を吹てきずなもとむべからず。又持とす。

よろひざいく。

しかへしの物は

され

かしらが

そろはで。





ろくろし。

木がたらで。

いそぎのもの

をそくなる。

いかゞせむ。

廿一番

とかむへき人もあらしなぬけ、はき雲井の月なのほりてやみん  
 晝なれやよはの月ともいか、ゆわうは、きの塵も曇なき哉





左哥衣がづき御所侍などは、中々おげはきて、恐なきにこそ、草履作の身のほどもしらす。昇殿の思も哀なるべし。  
有。いるなれやとて。よはともいかどゆわう簪の塵も曇らぬなど。長々と言下せる。優ならざるにあらず。同科にや。  
暮ことにさうりやめすといひなして人のあたりに立ならすかな  
我戀とゆわうは、きのいつとなく離れぬ中とおもはましかは  
左も右も。さることと聞ゆ。是又勝負なかるべし。

さうりつくり。

じやうりく。

いたこんごうめぜ。





ゆわうはゝきく。

よき

はゝき

が候。

硫黄簪賣。

廿二番

けにふらは又もきせなんそのほとはあまけの月の筈ぬかせはや  
山風の落くる露の古あしたかたはの月は水のみ成けり

左は。月にむかひて。雨げをよめり。哥合の故實なきにや。哥さまはよろし。右は。心詞よくかなへり。木のまの月のか  
たはもみる心地す。可勝也。

いつしかに我にみえしとかくれかささしもへたてぬ心なりしを  
獨れの身は我なれやさしあした二めみつめもあれはこそあれ

左は。歌さまゆうくと聞ゆ。右は。逸興あり。第三句大事なるべきを。さし足と續けたるも捨てたし。可爲持。





傘張。

えのあ

ぶらが

たらぬ

なげ。





あしだつくり。

めのゆがみ

たるから

心地あしや。

廿三番

雪とみて巻あくるかな玉すたれいとさやかなる秋夜の月  
空色の薄雲ひけとから紙のしたきらゝなる月の影かな

左は。かの雪の朝の簾を。月に引かけてよむ。右は。五文  
字始て。から紙の心強くきこゆ。よき持なるべし。

人めさへあな耻かしや破れみす丸ねはかりにあかすよは哉  
ひと心かゝらましかはひねのりの何につけても離かたきを  
左。みすのまるね。右。ひねのりのはなれがたき。なにに  
つけても。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。





翠簾屋。

新御所の

御わたま

し

ちかづきて。

いそ

がはし

さよ。

イ

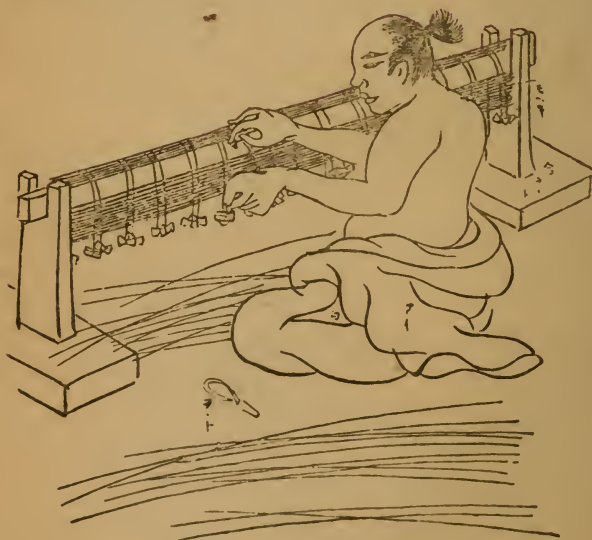
この衛殿

より。

御いそぎの

みす

にて。





から紙し。

のりが

ちと

こはければ。

きらゝな

いれよ。





七十一番歌合中

廿四番

のむ人もおほ水のみになつる茶のさもすみはつるよはの月かな  
あたひなきよるをはいかゝせんし物月みあるそひにかよふ人もかな

左歌。のむといふ詞二あり。もじつゞきたると心得たるにや。病と申べし。右も。風  
情つきて聞ゆ。此煎じ物は。左のやまひ哥にのますべくや。いかさま持たるべし。

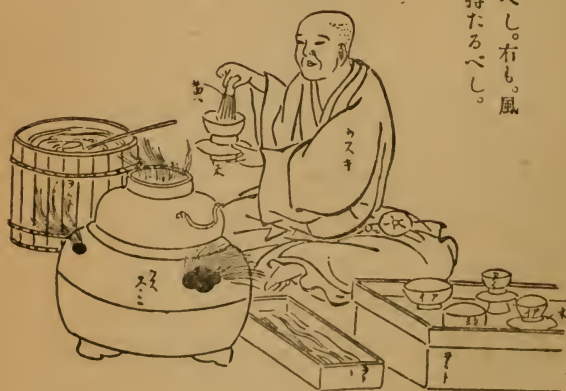
たつる茶のあはれ消とも逢ふことのせにかふる命ならはや  
思ひわひさてもいかゝはせむしもの戀のやまひの薬なられば

左。たつる茶のあはれとつゞけて。一錢をひとせに  
となすらへたる。いとやさしくきこゆ。右は。いか  
がは煎じ物。戀の病の薬にならぬと思わびたるも。  
あはれにきこゆ。なを手に侍るべし。

一服一錢。

こ葉の御茶

めし候へ。





煎じ物賣。

おせんじ物く。

廿五番

れ覺してあな面白といふ聲に月さゆるよな空にしる哉  
月影のさゆるもしらすめくらきは秋の物うき涙なりけり

左は。目のみえぬ事を。よせいにてよめり。右は。めくらきとよせたる心  
ばせ。ともにあはれにきこゆ。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

吹風のめにみぬ人の戀しきを軒はにおふるまつときかせよ  
いかにしてさのみたつ名を大鼓かしらうつまで戀しかるらん

左は。古歌の詞。あまりにながく聞ゆれど。歌がらあしからぬにや。右  
は。大つとみにかしらうつといふこと侍にや。されどいやく聞ゆれば  
まけ侍べし。





琵琶法師。

あまのたくもの  
ゆふけぶり。おのへの  
しかの曉のこゑ。





女盲。

宇多天皇に

十一代の後胤。

いとうがちやくしに

かはづの三郎

とて。一

廿六番

しはしまて造かけたる木ほとけの光そふへき夕暮の月  
かまくらや經師かやつのみみれは浦山かけて澄わたるかな

左哥。みがきかけたるといひてこそ光そふはかなふべけれ。右。經師が谷。もし浦山かゝらずば如何。暫く可レ爲レ持。  
もし我にいたきやあふと聖天のことくに人をつくりなさはや  
我戀はふりたる經のすりかたき絶まかちにも成にける哉





左。あまりにもとめたるすがた見ぐるし。右。いますこしまさるべくや。

仕候。

たがひて手づから

おりふし法師ばら

つくり候。

れんげさを

あみだのざう。先

佛師。





經師。

この巻きり。

いかに

したるにか。

きりめの

そろはぬよ。

廿七番

いかけ地のところ／＼のきり金の光ことなる秋のよの月  
秋はけにさすかなりけりかひ刀さやかに月の光さしつゝ、

左右ともに。月の光とよめり。猶右は。句ごとに一首の心いひあらはして。さすがすてがたし。爲し勝。





したへとも我々は人の目にそへてうとくなしちの絶まかちのみ  
色に出て人に心なくたきかひ背さめはつる戀もする哉

左は。こともなくよろし。右は。まことに戀する人の面かげうかびたり。猶勝べくや。

薛繪士

此御たらひは。

いかけ地にせよと

仰られ候。手まは

よもいらじ。





貝磨。

この太刀の

さやは。ばく

だいのかひが

入べき。

廿八番

後しろし峯の紅葉の下枝より色とりいつる夜半の月影

ふくるまで雲井の月になかむとて冠の影もかたふきにけり

左哥。たくみにきこゆ。右は。ことの外に風情つきたり。以<sub>レ</sub>左爲<sub>レ</sub>勝。





恨めしや墨繪ならぬに玉つさの唯一筆に書すつる哉

くらきよに冠のえいやとられけん人にしらぬ我思かな

左。させるなんなくきこゆ。右は。故事を思て。しかもその心あり。いとやさしく侍。仍爲レ勝。

繪師。

すみゑは

筆勢が

大事にて候。





冠師。

別當どの、御

はいがにめさるべき

御かぶりにて候。

いそがしや。

廿九番

なかむとてたゝすむ庭の月影にいさこの沓の跡もみえけり

しほかまやかはらの院の鞠かたのまろきは月なうつす成けり

左。ながむるとみるとは。おなじことにや。右。河原院にしほがま月なうつす心。すこしはまさるべくや。  
ぬく沓のかさなるとてもいかゝせん我を思はぬ人の契は





毛かはりをと<sup>り</sup>あはせたる鞠かはの思もあはぬ人に戀つゝ、

左は。ぬぐぐつのかさなれるは。妻の外心あるしるしといふ故事を思てよめる歌。右は。常道さることも侍らめども。哥がらいやし。左可<sup>レ</sup>勝にや。

鞠括。

難波殿は。

大がたを御

このみある。





沓造。

まりぐつは。

はだかなるが

わるきと。

三十番

宵のまはえりあまさるゝ立君の五條わたりの月ひとりみる  
奥山も思ひやるかな妻こふるかせきかつしの窓の月みて

左右ともに『其道』たしか也。しゐて勝負あるべくは。つまこふるかせぎ。より所あるか。可勝にや。

あちきなや名は立きみのいたつらに獨れあかすよはも有けり  
三つ川うはとやつゐになりなまし地こくかつしに残るふる君

左。名はたちきみやさしけれども。右。さうづがはのうばは。よくよれり。猶以レ右爲レ勝。





たち君。  
すは御らん  
ぜよ。  
けし  
からずや。

よく見  
申さむ。  
きよ水  
まで  
入らせ  
給へ。





つじ君。

や。上臈

いらせ給へ。

お中人にて候。

みしり

まいらせて

候ぞ。

いらせ給へ。

卅一番

眞砂地の月かけみれば白かねのなこ蒔たる心地こそすれ





池水の月影みればしろはくの泥になりても光やはけつ

左歌。みるやうによみたり。右は。始中終よくかなへり。でいにけつなど尤よせあり。可<sub>レ</sub>勝にや。

はいらふのたらしりけるか我に人とろほされしとおもひあはれは戀すとして青みはてたるひたちかれいつ色よしと人にみえまし  
左右ともに。歌ざまいやし。又逸興侍らず。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

銀ざいく。

なんりやうの

やうなるかねかな。





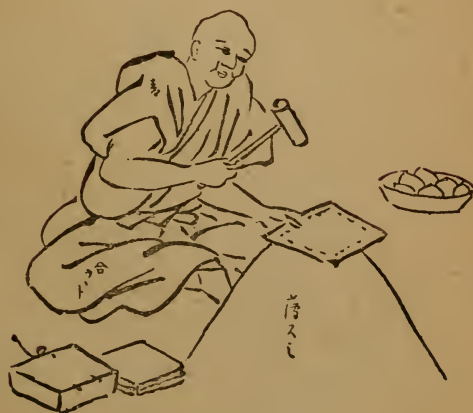
薄うち。

なんりやうにて。

うちいでわろき。

卅二番

月をみは猶ものへはや針かれの長さよとてもいやはねらるゝ  
いつとなくすゝやのまとの影なればひきいりてのみ月をみるかな





左右ともに。興なきにあらず。よろしき持と申べし。  
 情なき人に心をつくし針みつからなと思ひそめけむ  
 獨れの身をもはなたてぬきれこそ我手枕のふしのなりけれ  
 これ又よき持に侍り。

針磨。

こばりは

みつが

大事に候。





念珠挽。

かすとりと。

七へんの玉

むづかしき

ぞ。

卅三番

幾入のへに皿よりも秋の月あか／＼とこそ澄渡りけれ  
水かれやさくろのすます影なれや鏡と見ゆる月のおもては  
左。さしても聞えず。月のあかきとべにの赤きは。かはるべきにや。右も。にせ物さることなれど。月を水がれ。さくろ。い





かゞすまさむ。たゞ可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

心さへ人のけはひにみゆる哉。さにつらへにの移りやすきは  
うき人のかけたにみえぬ鏡ときわきもすかさて副臥もかな

左。さにつらべに。尤より所あり。右。わきもすかさぬ故事。又逸興あり。よき持に侍り。

紅粉解。

御べに

とかせ

給へ。かた

べにも

候は。





しろみの御

かゞみは。とき

にくゝ侍。

鏡磨。

卅四番

風心地あれはややかてつくしやみ雨氣の月の晴そめにける  
みねからに今宵の月は晴ぬへしゆふけの風を占方にして

左は。哥のやまひはなくて。こしの病あり。右は。月にむかひたる心すくなし。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持歟。





あはれ我戀の病を藥なきうき名はかりをたち物にして  
こひ路にて後もや逢と心みにわか人かたの身かはりもかな  
左。藥なければ。たち物は。よく思ひよりためり。右は。心ふかくして歌がらよろし。爲レ勝。

醫師。

殿下より續命湯。

獨活散を

めされ候間。たゞ今

あはせ候。





われらも今日は

晦日御祓

持参候べき

にて候。

陰陽師。

卅五番

山陰や木の下やみのくろ米の月出てこそしらせ初けれ

まめかくるさはりもいとまざる哉せとの高木の葉かくれの月

左右共に。歌様も作者の品に似たり。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

戀せしと神の御前にぬかつきてさんくの米の打はらふ哉

こひすればやせちのまめのさるなかせ涙の川は我そましける





さむぐのこめのぬか。さるなかせまじなど。へつらへるさま。うるはしきすがたならず。猶持にや。

米賣。

ななこめ

は候。

けさの市

には

あひ候べく

候。





われらが

まめ

も。

いまだあき

ない

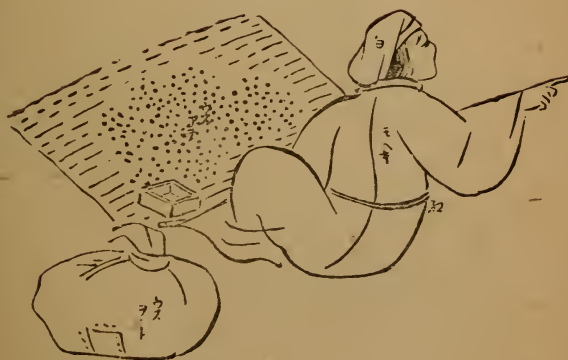
をそく候ぞ。

まめ賣。

卅六番

文字はよしみえもみえすもよるめくるいたかの經の月のそら讀  
人なから如是畜生そ馬牛のかはらのものゝ月みてもなそ

左。いたかの經のやうに。空よみとこそいへ。是は經の月とつゞけ  
たり。よらずや侍らむ。右。馬牛のかはら。ことによろし。可レ勝なり。





いかにせむ五條の橋の下むせひはては涙の流くわん頂  
忍ひ妻たゝすむよひの門の犬えたに別の人をとかむる  
猶右勝侍べし。

いたか。

ながれくわんぢやう

ながさせたまへ。

そとばと申は

大日如來の

三摩耶形。





穢多。

このかは、  
大まいかな。

卅七番

故郷はかへのとたえにならとうふ白きは月のそむけさりけり  
てうさいのこしきの上のあつむきのむしあけのせとの月渡るみゆる

左。何となく宜し。右も心はめぐれり。されどもこしきの上とむしあげと。おなじ文字にや。よりて左を勝とす。  
戀すれは苦しかりけりうちとうふまめ人の名ないかてとらまし





我戀は建仁寺なるさうめむの心ふとくもおもひよるかな  
左。うちどうふまめとよくつゞけたり。まめ人のこと兩説有にや。實ある人とも云り。かの源氏の夕霧の大將はまめ  
としきによりて。まめ人の大將といへり。一義には。ぬしある人を夜ばふな。まめといふといへり。此哥は。いづれにも  
かなふべし。右は。第二の句こはし。左。勝べきにこそ。

豆腐りり。

とうふめせ。

ならより

のぼりて候。





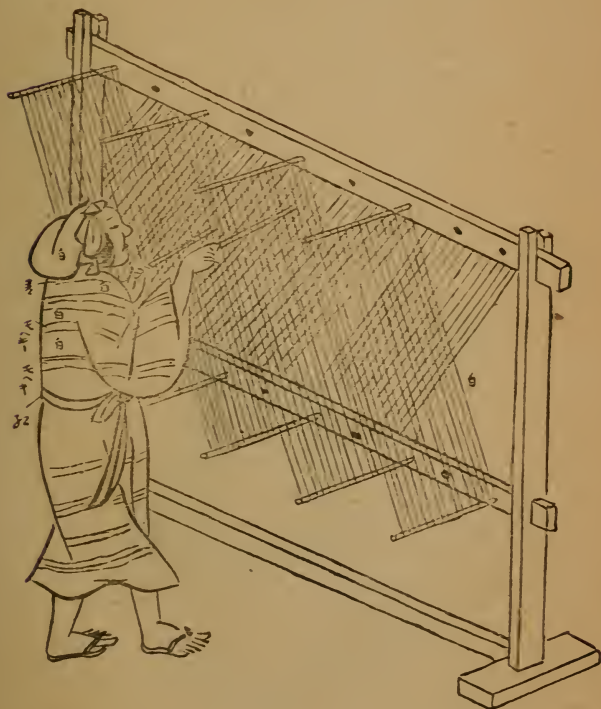
索麵賣。

これはふと

ざう

めむにし

たる。





卅八番

あきなひの秋のあたひも高潮の今宵そ月の名をもうるなる

西京やかうちのむろや垂こめて月のよころをよそにみるかな

左右。哥さまおなじほどに見侍るにとりてむろや

なたれこめたらんよりは。名月こそ勝侍らめ

思ひ初るむれのやきての鹽けふりなひきなひかすせてとは、や

戀すれば足もとよはし麴賣たふれあやうや火事出すな

右。依レ有レ興。可レ爲レ勝。

鹽うり。

きのふのくれ

うりの

あたひまで。けふ

たまはる人もがな。





麴うり。

上戸たち

御らんじ

て

よだれながし

給ふな。

卅九番

軒の露玉屋の月の影みれはみかゝすとてもことたりぬへし  
かきのから月かけみれは土左石のほしの光はすくなかりけり

軒の露玉やといひ。かきのから月かけといひ。ともに金玉なみがき出たり。よき持なるべし。





縁かへし悔しき物を片思おもひの玉の数がきりなく

逢事は猶かたければ覗いし金剛しやうもかなはさりけり

左は首尾やさしくよめり。右は堅ければ。こんがうじやうもかなはざるらむ。ことはりは能聞えたれども。第四の句。あまりにこはくきこゆ。仍左勝べくや。

# 玉磨。

是はちかごろの

玉かな。火をも水

なもとりつべし。

念珠のつぶには

あたらしもの哉。





硯士。

じやくわう寺は。  
しろみかたくて。

きりにくき。

四十番

紅葉せて秋も萌黄のうつほ艸露なき玉とみゆる月哉

月に寝ぬとうしみ賣の身の業を誰聞しらぬいひきとかいふ

有歌。心詞能調ふりて。殊に源氏物語槿の巻にや。程もなくいびきとか聞しらぬ音すればといへる詞も。此燈心によく引出られて。艶に聞え侍。左哥。露なき玉と侍。疑無にあらされ共。水晶の葱なども申侍れば。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>難歟。准て持と可<sub>レ</sub>申や。

戀といふ一もしゆへにいかにかきやる文のかす盡すらん  
とうしみの契やすきをためしにいていさゝは人を先引てみむ





左。一文字故にとばかり云て。此題に叶べしとは心得侍らず。右。尤巧にして。凡骨更に及がたし。左を順に不<sub>レ</sub>及。右に肩ぬぎ侍べし。

燈心うり。



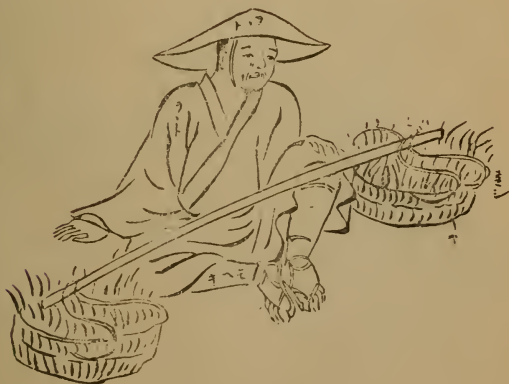


葱うり。

四十一番

月のきる雲の衣をうり物やさふらふといふ人もかはめや  
藏まはりたいたつらにくるゝ戸のあけぬ夜深き月をみる哉

左右。ともにさせる難なし、可レ爲レ持。





思ふこと人に傳ふる道ならておようや有といふはよしなし  
戀衣袖をかへばや藏まはり絶す涙のなかれ物とて

左は。よその人の詠哥ならば。尤きもと聞ゆ。作者の身にて。歌の意たがふべし。右。袖をかへばや。ながれ物。さもと聞  
ゆれど。是も袖をかへばやといふいかゞ。袖をかへよなど詠べきにや。取合て爲し持。

すあひ。

御ようや

さふらふ。





藏まはり。

御つかひ物く

四十二番

大井川流につるゝいかたしのくれ毎にみる月のさやけさ

出やらていとゝ心を筑紫飾はわけの月に山風もかな

筏の。さして難なけれども。葉分の月に山風なれがふ心あり。以て右爲る勝

山國やよせ木のくれはかさなれときらはるゝみは獨こそおれ  
いかにせん逢ことかたきゆすの木の我にひかれぬ人の心を

左右ともに。いとはるゝ戀の心。おなじかるべし。仍爲る持。





筏士。

此ほどは水

しほよくて。

いくらの材木

をくだしつ

らむ。





先こればかり

ひきて。のい

ぎりの

めなきらむ。

〃  
櫛挽。



四十三番

秋寒き聞の戸口の杉まくらさしいるからに月そ身にしむ  
山端にいさよふ雲のなしく、み月にへりある秋の夕暮

左歌。さるべかしう聞ゆ。右は。雲の匂ひて。月にへりの有様にみゆること。さもとおぼえたれど。いさゝかなしつけた



る詞。わたくしににたり。左勝べくや。

むろ出しまたひもやらぬ新枕かふれかゝりてそひもはてはや

獨ふすたゝみのうらのかくし針人にしられぬ戀もするかな

左。漆にかふれかゝる。巧なれども。右。隠し針人にしられぬ。當道の秘事とかや。戀のさし續き能聞ゆ。右可レ勝。

枕賣。

今一のかたも

持て候。ひそ

かに

めし候へ。





疊刺。

九條殿に何事の

御座あるやらむ。

帖をおほくさゝ

せらるゝ。

四十四番

しはし只うつふせくしめ瓦のあふけはこそは月もみえけれ  
名にしおはゝ我こそはみめ笠縫のうら淋しかる秋夜の月

左。かはら彦の才學。猶入たらぬ月也。右。まことに

作者の名におふ浦の月。より所あるか。右可勝。

いつまでを限ならまし瓦屋の下焼むれなしる人はなし

見えしとやうちかたふくるつほね笠すけなけなるはうらめしき哉

左右。おなじはどなれども。右は。すこしふるまへるさま。まさるべくや。





南禪寺

・より

いそがれ

申候。

瓦焼。





世にかくれ

なき

かさねひ

よ。

笠縫。

四十五番

浮雲の晴もやられはさや巻の引こみかちにみゆる月哉

夕まくれ山かた近き三日月のまかりなからに入ぬへきかな

左は、いさゝかざれ歌に似たり。右は、ことばつゞきやさし。可爲勝。

我戀はよりさや巻のやれすのこぬる人のこぬ身をいかにせん





いかにしてまつ人くちに乘めらんしらほね鞍のぬるよなき身に  
左右。なくみにて。哥さま猶狂歌なり。ともにうるしほしげなり。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持敷。

鞠卷きり。

當時はやらで。

得分もなき

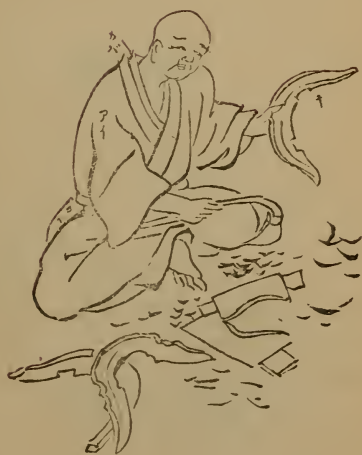
細工かな。





あらはれおれや。

鞍細工。



四十六番

法の月廣くすまして武藏のに起ゐる暮露の草の床哉  
住吉の入江の月や故郷の姑蘇城外のあきのおもかけ

暮露の心。月いる計の法の光をか廣め侍べき。信仰もなく覺ゆ。右。住の江の月に對して。名高き楓橋のわたりなも。我故郷と云出たる所。他人のをよばざる風跡。かの仲鷹が。三笠の山の月にも。澄増りてこそ侍らめ。



いとふなよかよふ心のむまひしり人の聞へきあの音もなし  
 唐大和しるへするみのかひそなき思ふ中には言かよはさて  
 右は。只よの常のことほり聞えたるのみ也。左の馬壺は。あの音ぜず。ゆかん駒もがといへる万葉の古風も。よりきたり  
 て神妙に侍り。尤可爲勝

暮露。





通事。

七十一番歌合下

四十七番

月になに勸學院のもんせむは立入道の人を稀なる  
なしかるこあてたになし夜引日のいる方暗き月のあたりは。

左。まことに文者の作とおぼえて。ことばやはらがすとも申がたし。文選を目前によせたるも。ついでに稽古の人のま  
れなる迷懷の心も。おもしろく聞ゆ。右も詞こはし。げにもつよき弓とりのわざなり。されど月の哥に。いるかたは。心  
なきに似たり。以て左爲勝。

とくにつくさいはひなればひんしけん薄き衣は人もかさねし  
膺腹の二道かゝるものれたみ矢先は胸をとすかひなし

左も。右も。ことばやはらがざるは道にかなへり。歌のこゝろは。ともにこひの迷懷なり。よき持なるべし。





文者。

六韜の末は。

むねと武道

にて候。御稽古も

候へかし。





運は天に

あり。

命は義

に

よりて

かるし。

弓取。

四十八番

鼓うちみはやしけるもいちしろく月になつる白拍子説  
くせ舞の月にはつらき小倉山その名かくれぬ秋のもなかな

左。させるふしなき哥なるなや。右は當世曲舞に。月にはつらき小倉山。

その名はかくれざりけりといふ音頭を思よせたるにや。道によりてかしこければ爲レ勝。





忘れ行人もむかしのおとこ舞くるしかりける戀のせめかな  
車にて袖打ふりしまひ女かゝる戀すと人はしりきや

左昔の男舞戀の責など。歌めきたるに。腰の匂つゞかすきこゆ。右は。袖うち振しといひて。しりきやといひとちめ  
たるは。彼光源氏の歌を思へる歎。やさしく侍るな。なのが名を顯はして。かゝるといへるや。あまりならむ。少左可  
勝也。

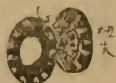
白拍子。

所々に

ひく水は。

山田のゐど

のなはしる。





曲舞。

月にはつらき

をぐら山。その

名は

かくれざり

けり。

四十九番

月見つゝうたふはうかのこきりこの竹の夜聲のすみ渡る哉  
むしやう聲人きけとてそ瓢箪のしはくめくる月のよねふつ

左右。夜こゑ。念佛。おなじほどの事にや。

やふれ僧えほしきたれはこめらはの男とみてやしりにつくらん  
うらめしやたかわさつのそ昨日までこ<sup>く</sup>やといひてとはぬは





左は。さもと聞えたり。みるやうなり。右は。はちたゝきの祖師は。空也といへり。わざつのも。此道ぐといへり。されど  
 哥の逸興猶左にあり。

放下。

うつゝなの  
 まよひや。



〔タニサク上青下エンシ二ツ共同〕



昨日みし人

けふとへば。

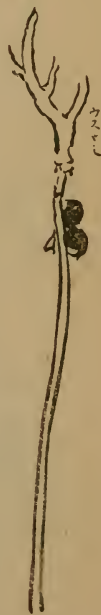
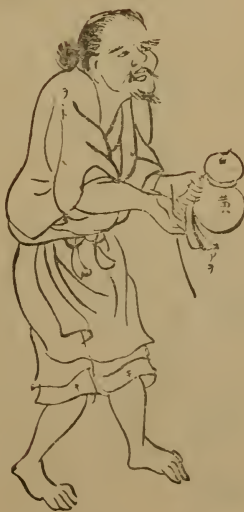
鉢扣。

五十番

田樂のちうもむくちの透れんしのそくそ月の細め成ける  
秋の霜翁おもての白髭のなかきよあかす月をみるかな

左は。首尾いひかなへり。右は。上句事ありといひたて。長夜月みるとにかりは。少し末よはく聞ゆ。左可勝。  
よそへてもけにそ戀しき人まねのおほひかつらの女すかたな  
戀られてむくひやすると点めい冠者うつくしけなる人とみえはや

左右ともに。我道のすがたなかりて。戀をよせたるこゝろばせやさし。仍爲レ持。





でんがく。





あげまきや

とんどう。ひろ

ばかりや。とん

どう。

猿がく

五十一番

繻の裏薄やうの紙までもすきかけ白くすめる月哉  
やおもてにしはしみえつる月影いせとに成まで更めくるかな

左。繻のうらに薄様すきたるまでさやかなる月。いとめでなし。右は、又組に。やおもてといふ組。家の面に寄て。よ  
とまで月をめぐらす心ばせ。よき持なるべし。





さしも我ちきり置しを今宵又誰とぬものゝいと恨めし  
 戀しぬときく／＼なをもさまでやと我をへしきに人のいふなる  
 左。誰とぬものゝいと／＼いへる。さま宜し。右。首尾かなへり。へし木とは。くみの具なめり。詞にへしきといふは。たゞ  
 言葉也。されどよくよせたれば。猶爲レ持。

ぬひ物し。





たくふくは。

この比めす

人もなき

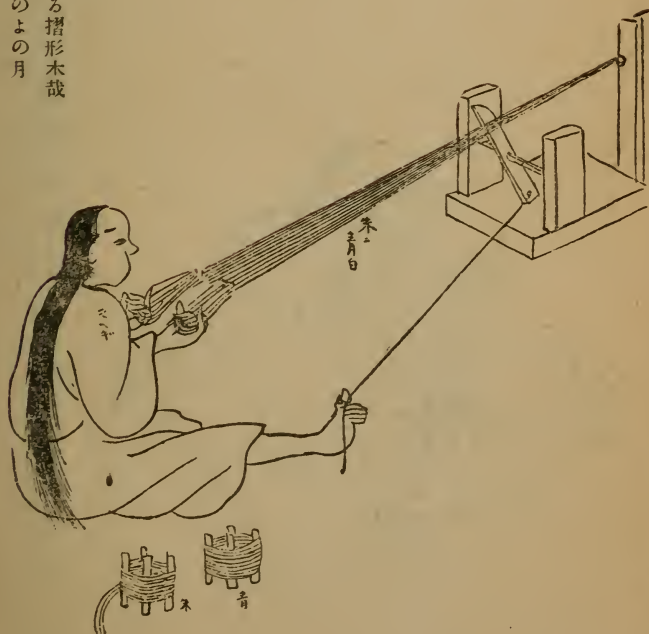
うたてさ

よ。

組し。

五十二番

明らけき月とはみれとさすか猶ほりめはくもる摺形木哉  
た、う紙みかき打たる切はくの光ことなる秋のよの月  
ともにさせることなし。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。





点ひすりの花田にましろみむらさきいつれにうつる人の心そ  
忘めやき殿に染るたうかみしなやか成し人の手さはり

左右ともに歌仙のうたともみえず。ふところせばし。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

すりし。

梅の花ばかり。

するほどに

やすき。





御たゝうがみ

めせ。色も

よく

いできて

候ぞ

とよ。

疊紙うり。



五十三番

四十九ゐてんやにみゆるうりつゝらさし出はめる軒の月影  
月見つゝいたつらふしのなきまゝによの程造る竹かはこ哉

左。風情盡て開ゆ。見ぐるし。右は。ふしよなど竹かはごによせあり。すこしまさるべくや。



我戀はまたさらされぬ青つゝらくるとはすれとされしよそなき  
逢事のしゆくせぬ柿のされかはこしふくにたに人のこめかな

左の哥。つゞらにされといふ物待るや覺未分明ならず。右。熟といふ詞こはけれど。柿のされかはこ熟しなど。縁の言  
葉にや。されのこと聞さだめんほど。先爲ニ右勝一。

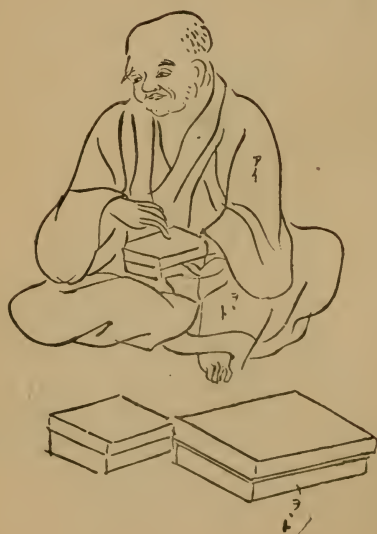
葛籠造。

茶つゞら

も候。

かはせ

給へ。





いのかはい

は

人のあつ

らへ物

にて候。

皮籠造。



五十四番

なかむとて我さへめをそひれりぬるのためかた成在明の月  
れやのうちに枕がたふけなむれはさかつらにこそ月もみえけれ

左右。非無興。左時べきを。在明は。月の歌に心なきに。たり。仍爲持。



のこゝろ、更にかはらて一手矢のおなしふしにはいつかなれまし  
人心うけなかけ緒もきればてゝ腰はなれたる古えひら哉

右 猶たくみなり。仍爲<sub>レ</sub>勝。

矢細工。

これはぢく

の

とてあつらへ  
られて候。





さかづらが  
なくて。柳

ふびらに  
する。

簀細工。

五十五番

くり絶かたいたりしたるやふれめの其まゝにすむひきめやの月  
秋深き星はくもれとむかはきの白毛の月のさやか成哉

左行。ともによろしからず。可レ爲レ持。

我戀はかさかけひきめ塗こめていとめもみえずなく涙かな





祈ても逢瀬やあると町人のむかはきかはのなてもものもかな  
左右。猶無風情。爲レ持。

墓目くり。

一尺にあまる

御ひきめは。

くり

にくゝて。道が

ゆかね。





あはれ御

むか

ばきや

けいろも

よし。

むかばき造。

五十六番

なかむとて金もほらぬつんさひのさひてそみゆる秋夜の月  
みつかねの草に置かとみゆる哉露にやとれる月の光を





左哥。月みると。金ほられば。つんさひのさびたるらん。ことはり叶て聞ゆ。つんさひとは。金ほる具足にや。右も。にせ物によみなへたれど。強て中さば。左可勝也。

一棹にあまるこかれのおもはかり幾目ともなく人をみらるゝあちきなやにふのみ山にほるかれのみつから人に思ひいりぬる

左歌。たくみ也。右。水とかれとを二にいひきりて。題のこゝろおもひ入たるにたり。仍爲持。

金ほり。





乖ほり。



五十七番

大鯉のかしらを三にきりかねて片われしなる在明の月

よもすからあすのてんしんいそくとて心もいらぬ月をみる哉

左右ともに吹毛の難も待れば。哥がらさせる事なきによりて爲レ持。

こひ故に庖丁月はなみればほろくとこそれもななけれ  
いかにせむこしきにむせる饅頭の思ひふくれて人の戀しき



左哥。庖丁には。魚も鳥も。いゝらもよせ有ぬべきな。二首なが。鯉をよめる。才覺なきにたり。せめて飯の饅頭のふくるらんは。才覺少し侍り。可勝。

はうちやうし。





さたう

まん

ぢう。さい

まんぢう。

いづれも

よく

むして候。

てうさい。

五十八番

一筋の霜かとそみる賤のめかゝる麻ぬの、月の夜さらし  
雲まきの町ひたゝれのすきかけのさしてさはらぬ月の袖笠  
左右共にさる事ときこゆ。よき持にて侍べし。





されはとて人もすさめぬ布織の我手つくりの戀もする哉  
忍ひあまる涙をいかにつまゝしまち直垂のせはく短や

左。我手つくりの戀よく布におもひあはせたり右は 哥もはたはりせばくきこゆ。以左爲勝。

白布賣。

しろぬの

めせ。なう。

はたはりも

しやくも

よく候ぞ。





直垂うり。



五十九番

賤のめか絲にするてふ麻のをのよるとみぬまですめる月哉  
一村も曇るとみゆるめなし綿おなし色なる月のさやけさ

右。めなし綿は。きはめて白く。きらの侍とかや。されどあさ絲の歌。心ひくすちなり。以左爲勝。  
櫻麻の思ひおもはすいかにして人の心をかなひきてみん



我戀は心一つにしのふ綿つみしらすへき便なけれは

左哥。かなひきは。よき苧といへり。右。又しのぶ綿。ともにすてがたし。よき持たるべし。

苧賣。

ちかきほどに。

又

を舟とかり

候べく候。

いかほども

めし候へ。





わためせく。

しのぶわた

候ぞ。

綿うり。

六十番

夕まとひする人もなしかなうすの月の夜聲のかしかましさに  
月ばかりめにかけてこそあかしければ薬の賣かひもなし

左。梅が枝の巻に。かなうすのなと。耳かしがましき比なりといへるも。月の夜こゑによそへられて。やさしく聞ゆ。右  
は。はかりな。かくし題によまれたるにや。されど左哥には。かけても及がたし。可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>左勝<sub>一</sub>。  
我爲のにはひにもせはたき物のおようやあるといひやりてまし





藥うる唐人とてや戀しともいふ事をたに聞もしらぬに  
 此番さしても聞えず。薰物も藥も。取合て爲し持<sup>はい</sup>

薰物うり。

随分此かうども。

えりとゝのへ

たれば。

この夕暮の

しめりぞ

おもしろき。









六十一番

あはれわか心すむへき便かな時しも秋の月の峯入

立かへり猶やなめむ東路の三のおやまの月のたひく

左右ともに行者の心をよめり。歌さまもおなじほどにみゆ。可爲持。

先たちのさんきさむけは我やせんいたの目につくむしのした哉

いかにしてけうとく人の思ふらん我も女のまねかたそかし

左右の作者。名をあらはさずして。しかもそのことゝきこゆ。是又おなじ程にや。

山伏。

是は出羽の

は黒山の客

僧

にて候。三のお

山に参詣申候。





地しや。

あらおんかな〜。

二所みしま

も  
御らんぜよ。



六十二番

さいはいや高天の原の秋の月とかてふとかの雲拂ひませ

神哥や鈴ふりたつる聲までも月澄わたる里かくら哉

左歌。中臣祓といふ詞を。やがて月の祈によめる。興あり。右は。神哥と神樂とおなじ言葉成べし。歌合には。故實なきにたり。仍左可レ勝。



我戀をいのると人のきゝやせんさゝやき聲にのと申さん  
かけ帶の長き契りのかひもなししめの外なる人と成つゝ

右哥。よしあるににたれども。左。さゝやきこゑのの。金玉ときこゆ。左猶可勝。

れぎ。

たかまの原

に

神とゞまり

まし／＼て。





神はやたち

まふ。

袖のなひ

風に。

かななぎ。



六十三番

暮るまで待なくれたるきはひ馬心ならずや月にのるらん  
影法師みくるしければ辻すまふ月をうしろになしてねる哉

左右ともに。心詞くみあひたるけいばすまふなれば。勝負ありがたし。よき持たるべし。



おい馬のなくれはてたる我なれや取つきかたき戀もする哉  
 わか戀はさつまの氏のおさなれやかたてにたにも逢人のなき  
 左右。おもしろきこゆ。猶右は。かの氏おさが。あふ人のなかりけん。よくとりよれり。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>勝。

競馬組。

むかしは。上さま

にももてなさ

れし

事の。今は、この

氏人のみに

のこりて。





道のおもひ出

に。

相撲の節

に

めされ

ばや。

相撲取。



六十四番

眠らぬはきやう釋までも無りけりさやけき月を伴道にして  
観念の月あきらかにみるまでは我行ひもさい大しかな

左は。座禪のゆかに月みるらむ他念こそ。經釋もあたりぬべけれども。月を翫心尤ふかし。右は。寺の名によせて。我宗  
をあらはす許也。左には及がたくや。

戀しさのたゝ本性を盡されはへちに障礙のなきはなきかは



中々に我なすゝめそ邪姪戒たもつやいなや戀は忘し

左は戀すれども。猶本性をなけきたり。右は。なを戒をやぶらんの心深し。罪のすゝむ所。いましめ深きによりて。猶  
左可勝。

禪宗。

二

文字の上に

なきては。御不

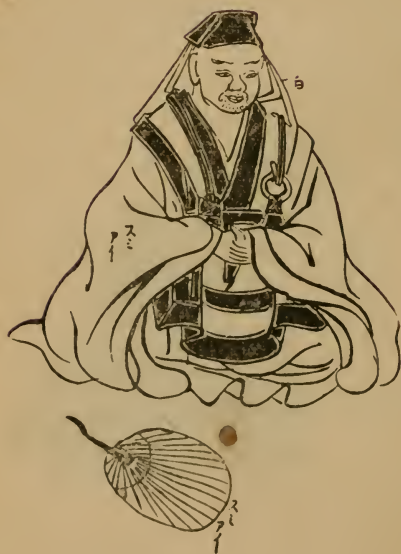
審たつべから

ず。若如何と

ならば。口をひら

かすしてとひ

きたれ。





一

けうげ別傳と

申候は。

などや祖師

とは

仰候ぞ。

律家。

六十五番

蓮葉のにこらぬ露にやとるなり是を上品上生の月

我法の月をてらさん末の世のよ經しちめつさもあらはあれ

左右ともに。我宗旨をあげたり。法の勝劣を論ずべからず。

往生のさはりもそする先人をくわん音せいし來迎も哉

一目みてわすれさりしおもかけは十羅刹女もかくやと思ふ





是又ともに観音勢至を使とし。十羅せつ女を思懸たり。且恐なきにあらず。光源氏の物語にも。法けだちくすしからむと申めり。左右ともに不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然。

念佛宗。

即便往生もたうとく。

往生も 只一たび南無と

となふれば。極樂に生。

なにのうたがひかあらん。

南無阿彌陀佛々々。





末法まんねん。よ經

しちめつの時。此妙法

花と申候は。我等が

祖師日蓮上人の

御時。くれぐれとかれ候

ときは。

法花宗。

六十六番

秋霧は月すむ山のうちこしも雨のたくひにきらふとそみる

諸共に月にうたはんげにやさは今はた誰もさそ覺たる

げにや婆婆の秘曲。其興侍り。但げにやさらば嘸覺たる。誰いひおほせざるにや。左。霧は降物に打越を嫌。新式の心。

可レ然は侍れど。山の打越。只詞にや。彼是を通はして可レ爲レ持哉。

戀佐て神に手向のつられ哥逢坂山をふし物にせん

別路になくかうたふかかれ聲のしほりあけたる袖の名残は





山を賦物にて。會坂の手向。よき連歌のよりあひ。神明納受の法樂成べし。又袖の餘波の美聲。近比の早歌の聽聞。耳を驚かし侍り。持とすべし。

連歌し。

いまだこの

おりには。花が

候はす候。





早歌うたひ。

かたみに

のころ

なでしこの。

六十七番

いつくしやこれん寺かけて見たせは京白川にすめる月影  
初夜中や後夜のつとめのひまなさにみるとしもなき法花寺の月

左右ともに。我寺々ないひたてたれど。させることなし。されど左は。月をひろくよめり。右は。月を翫ぶ心すくなし。  
すこしは左まさるべくや。





本性をつゝさんとこそ思ひしにへちにしやうけの男おそろし  
男より手わたしにこそとらねどもつゐに我らを落し文みつ  
左右ともに。ひじりの戀は。しかるべからずとも。題によりてよめれば。さも侍るべし。みなけさう人の侍るをあらは  
せり。さんげに罪あさくや。可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

びくに。

四

それはよも。

けうげ

べちでんにては

候はじ。



二

佛弟子は。大か  
たみなさこそ候  
へども。御尼衆  
もさげんかいと  
いふ事は候め  
は。我らはつと  
め行法はおなじ  
事にて候。さぜ  
んくふうは。お  
なじ仰ことにて  
は。よも候はじ  
な。



一

御びくにも。かいもんはまもらせ  
給ふなれども。などかなんじゆ  
たは。御やぶり候ぞ。

三

我らもくわん念と申すは。

さにてこそ候へ。

にしう。



六十八番

三の寺麓までたにをよはめや我山住の月の高さに  
さん論の御法の窓も明らかに南にめくる法相の月

左は。四大寺の中に我山に及がたきといひ。右は。南都の月をほめたり。共し是非を申がたし。可爲侍。

ひえあかる我獨れのことはにいちゝこならぬ人を戀しき  
戀しさにをこなふへきもわするれば我とくこうのほとそしらるゝ

左。一ちご二山王といふこと。よく思よせたり。右。なら法師は。得業になるゆへにや。されどたとこにこそ侍れ。と  
くは今より所なきにや。以て左爲勝。



山法師。

わがたつ

そまの

月になよぶ

べき

所こそおぼえれ。





もろこしの月

よりも見所あれ

ばこそ。春日なる

みかさの山とは

よみつらめ。

なら法師。

六十九番

我法のむしろいかにと人とは、清瀧川にすめる月かけ  
われにとへ易く答ん月しはし北をめぐるか土を巡るか





左右ともに。深き心をつたへざれば。まさりなとり申がたし。左は。定て其心深かるべき歟。清龍の流はかりがたし。右は。俱舎論にもかたはしあらはし侍るにや。それ猶定がたきにや。なすらへて爲し持。

思ふ人あはれ茶すきに成たらは摘しらすへき時もあらまし  
侍人のくるや／＼とおもふまに北斗の星なまほりあかしつ

左哥戀に茶のよせを求侍ること。才學少し。右。人を待とて。心ならず北斗を守る。さも有ぬべし。仍右爲し勝。

華嚴宗。

御点いぐの御

茶ののこり

にて候。





北斗の御祈

はじめ候間。

ひまなく候て。

俱合しう。

七十番

面白や竹のしらへにしたかひて夜ことの月も心すむかな

入かたの月にまはゝや陵王の日影をかへすはちの手つかひ

左。大かた管の聲。よにしたかふべき道理は聞えなれども。右。入日に月を准らへ。ばちにて招くこと。かの宇治の宮のこと。思よせたるにや。ゆへ有ににたり。以<sub>レ</sub>右爲<sub>レ</sub>勝。

吹たてし河よりなちの笛の音のゆかしとせめて聞人もかな  
袖ふらは涙やみえんから人の立まふこともいかゝと思ふ





左右ともに。かのはふ宮の宇治を思よせ。光君のそで打振し事になすらへて。おもひの色ないへり。ともにやさしく  
聞ゆ。よき持と申侍べし。

樂人。









七十一番

さもこそは名におふ秋の夜半ならめあまり澄たる月の影哉

うらぼんのなかはの秋のよもすから月にすますや我心てい

左。あまりといひて。すとは聞えたるな。かされてすとよめるやいかゞ。右は。うらぼんのよもすがら。心ぶとうるこ

しかり。心ていきく心地す。右可勝。

いつまてか待宵ことの口つけにあすや／＼といふななのまむ

我ながらなよはぬ戀としりながら思よりける心ふととよ

左歌は。酔つくる人は。あすや／＼といひて。祝ことにするといへるなよめるにや。えんにきこゆ。右は下句よろし。と

り合て持にて侍べし。

酔造。

あすし

きかき哉。





心ぶとめせ。

ちうしやくも

入て候。

心太うり。

右職人盡歌合繪土佐刑部大輔光信朝臣書東坊城權大納言和長  
卿筆也摹本在住吉内記家秘而不出闕外故使門人畫贈之其歌與  
詞以新井筑後守君美朝臣所傳之本寫之淨書者屋代弘賢也





# 群書類從卷第五百四

## 雜部五十九

### 十二類哥合

夫諸佛菩薩の本誓まぢ／＼なりといへども。轉法輪時の利益ことにすぐれますは藥師如來の悲願なるべし。衆病悉除身心安樂とちかひ給により。速證無上正等菩提の説にいたる迄十二大願。しかしながら現世當生を兼て衆生を濟度し。十二神將盡夜時尅を領して我等を擁護し給事。かたじけなしと申もおろか也。爰にいづれのよにか有けん。比は三五の良辰に。十二神將の仕者どもあつまりて。あそびたはぶれつゝ。此國の風俗なれば。いざや哥よみ侍らんとて。晝夜を左右にわかちて。歌合のため。月を題にて詠じける所へ。鹿一かしら。狸などを供に召具して來りつゝ。御歌合の御會しきこゆ。聽聞の爲に推參せり。かつは判者なくては無念なり。かたのごとく鹿仙の一分にて侍れば。判じ申べしと申ければ。各皆事外なる心ちして。とやせましかくやせむなど。

相議するところに。夜の一番の犬はしり出てとがめけるは。我等は藥師の眷屬として。十二時をかたどれり。御邊たち異類のともがら。此席に望べきにあらず。たしかにかへり給へとあらゝかにのゝしりて。すでにかゝらむとしけるに。鹿もあぶなくみえけるを。晝の第一番の龍いさめて。判者をゆるしつゝ。妻戀の御なぐさみにしたまへと申ければ。鹿よろこびて。座につきとゝのほりぬ。

一番

左

龍

右

犬

あまつ空かきたつくも、心して月にさはらぬよそのむら雨里のいぬの月みる秋のよはたにも星まもるとや人の思はむ判云。左の哥。月のため。うき雨を心にまかせ侍らん。あらまほしくや。右のうた。星まもるかとおやまたれむ。



いと無念にきこゆ。されば左勝と申べし。

二番

左

蛇

月みればうさも忘る、秋の夜をなかしと思ふ人やなからむ

右

猪

しなかりふすゐの床の山かせに雲もさはらぬ月をみる哉

判云。左の歌。月をみてうさをわすれ。秋のよをながし

と思はであかし侍らむ。いとやさし。右のうた。床のや

まかぜ。雲もさはらぬ月をみん心もわりなし。さればい

づれもわきがたくきこゆ。持とや申べき。

三番

左

馬

逢坂や關のこなたにまち出てよるそこえぬるもち月のこま

右

鼠

夜もすから秋の御空を詠れば月のれすみと身はなりぬへし

判云。雪月のこま。月のれすみ。ともにゆへありて。勝負

わきがたし。これも持とや申べき。

四番

左

羊

廻りきて月みる秋にまたなりぬこれや羊のあゆみなるらん

右

牛

むら雲の空さたまらぬ月をみて夜はの時雨なうしとぞ思へ

判云。左のうた。月みる秋をむかへては。まづこれふも

てなすは。よきひつじのあゆみ。世にいとほしくきこゆ

る心ちしておぼゆ。右のうた。つきをみて夜半のしぐれ

をかなしむこゝろ。まことにやさし。われもぬれて。ひ

とりなきてこそ侍し。右を勝とや申べからむ。

五番

左

猿

月をのみ深山をろしはしくるとも空曇らさる秋のよもかな

右

虎

みるまゝに涙露ちる月にしもとらふす野への秋かせの聲

判云。左のうた。山かせはしぐるとも。月なくもりそと

かなしみ給ふ。思ひやられてきこゆ。右の歌。とらふす

野邊と侍れば。月をみても口しけむ心いかゞとおぼゆ。

されば左を勝とや申べき。

六番

左

鳥

つれなしとゆふつけ鳥の鳴なへにかけほめかす左明の月

右

兎



明かたの月のひかりのしろうさきみにそたかき松風の聲  
左のうた。つれなく待わびて。影ほのめく有明の月。め  
づらしくおぼゆ。右の哥。松風耳にたかき。聞にくゝや。  
されば左を勝とぞ申たき。

和歌の會はてぬれば。各判者もてなすべしとて。めん／＼に  
めづらしきさかな。一種つつもとめてさかもりし。亂舞延年  
に及けり。鹿は色代して名残をおしみながら。山路はるかに  
侍ればとてたちかへりぬ。そのち兩三日をへて。有し名残  
のわすれがたさに。各又會合して。紅葉の山のふもとを會所  
にかまへて。かされて判者を請じければ。鹿思ひけるは。か  
やうのところへ二度のぞむ事。故人のいましめなればと斟酌  
して。出はすらめども。此度は參がたく候に。折節風の氣  
と申て。使をかへしければ。前に供したりし狸。しかのもて  
なされたりしを。あながちにうらやましく思ひて。我もなど  
か判者にならざらむとて。心計は出たちて。推參したりけれ  
ば。鹿をこそおそしと思ひつるところに。かゝる下臈。異躰  
不思議なる姿にて。やがて横座にはゞかる所なく着して。種  
種の過言ども申ければ。十二類大きにいかりて。是非迫出  
し。散々の耻辱におよびけり。狸はとかくしても命ばかり生  
て。からきめみて歸ぬ。しかまつところの狸とは。これより

申とかや。狸からき命いきてつかにかくれ。疵つくろひて息  
つき居たりけるが。この心うさを思ふに。いかにも耻ずして  
かくまであるべきにあらずとおもひて。萬のとりにけるを  
かたらひつゝ。一すぢに軍がまへをぞいとみける。都には  
少々しり侍れども。京上もみちゆかす。たゞ毛のふてをそめ  
鼻ののがみにふみをかきて。しのび／＼にぞかたらひける。  
先一門の河瀬守。稻荷山の老狐。熊野山の若熊。蓮臺野の狼。  
愛宕山の古鳶。ゆるぎのもりの白鷺。二日市場のむら鴉。み  
みづく。惡このむふくろうなどぞ同心しける。侍大將には  
猫てん。鼯なども候けり。其勢三百餘騎塚の域にたてこも  
り。各ぎせい評定とり／＼なり。その中にもはやりの狼すゝ  
み出て申けるは。かやうの事勝にのるこそ本意なけれ。さり  
ながら九月一日は赤舌日なれば。二日の戌の終程に押寄て  
夜討にせむと申ければ。みな／＼この議にぞ同じける。



## 調度哥合

やよひのすゑつかた。高野山の御幸とて世中ひゞきし。こと  
ふるき世のためしにもこえて。人のこゝろをおどろかすべ  
しと聞えしかば。思ひがけぬ人の車にあながちにしたひの  
りてみたてまつりしかば。太上天皇をはじめ奉りて。大臣。  
公卿。殿上人。まことにこのよのものともみえ給はず。めも  
あやに色々をつくして。げにもこれこそ都の春の花ともい  
はまほしけれとみえしか。

世をまもる法のひしりの故郷は春の錦を立きてそ行  
とぞうちおぼゆる。なにともなく。こうじ侍けるやらむ。  
又ゐでの河内もおくゆかしきにぞ。めなばかりとりて。みく  
るまよりまろびおちぬばかりれぶたくなりて。何のいみじ  
かりけることもおぼえれば。かへりつくとともに。日比すむ  
ところのうちふしたるに。あるじとたのみ聞ゆる人は。住吉  
のあべのとかやいふ所まで。見をくりたてまつらんとて。人  
みな引ぐして出給ぬ。三日ばかりして歸たる。かくするとい  
かゞ世中靜にて。おもふまゝにねいりにけり。けふの夕ぐれ  
よりあくる日の又曉になるまで。夢をだにもみずしてれし  
まゝに。うちみじろぐ事もなかりけるな。何としてやらむう

ち驚たるに。思ひまはすいとおそろしく。人ちかくだにあ  
らざりけるに。わづかにひまみゆる心地するな。あけにける  
にやと思ひて。やり戸を引あけたれば。山のはとなく。有明の  
露もはてぬ光ほのかにて。夜ふかき鳥のこゑもかすかにき  
こゆ。むかしよりいひしめし<sup>(こゑ)</sup>春のよなれば。そゝろに袖のみ  
ねれて。思ひつゞくることおほかり。さてのみたちあかすべ  
きなられば。みじかよも残おほかる心地して。まどろむとも  
なきに。おぼえなくもののおそろしきことぞある。ことやう  
なる御もののぐどもひし〜ととりをかれたる。聲々に  
物をぞいふなる。いとめづらかにて。みゝなたてゝきけば。  
このうちにとりては。おもき人といふべきにや。すびつの云  
やう。留守のいとゞつれ〜なり。さすがわれらは。たゞ人  
の御てうどににるべきやうなし。春のよの閑なるにさめに。  
哥の會はじめ侍らばやといひいだしたれば。此はいの上な  
る水がめ。やさしく侍りなん。な〜きかせ給へやとい  
ふ。めむ〜にいらへして。さるべしとさだめけり。すびつ  
のこゑにて。題は何とか侍るべきぞと。その中にも水がめ。  
口きゝたるものにて。たゞ思ひ〜に。戀のこゝろにてこそ  
おかしく侍べけれといへば。みないとよからんとて。うめき  
あひたる聲々いとふしぎに。おどろ〜しうぞ有ける。みな



みな讀いだして。人數をかぞふれば。さまざまの物おほくな  
みゐたれど。哥よみはたゞ廿人ぞありける。おなじくはこれ  
を哥合にせむと水がめいひ出したれば。いとよかりなんと  
て。どくし誰ぞ。判者はたれぞなど論するほどに。此事議判  
にてあるべしとて。なの／＼よしあしな定むるにとりて。哥  
はよまれど。只今のときにあたりたればとて。御硯のうの毛  
の筆ぞかきつけける。

一番

戀

左

とうだい

右

すびつ

しらせはやくる宵ことに灯火の明石の浦にもえわたるとも  
埋火のしたにこがるゝかひもなくちりはひとのみ立浮名哉  
左右。燈。埋火。うへもなく下にこがるゝほど。戀の心い  
づれもやさしくみえ侍り。げにも勝まけわがちがたけ  
れど。一番の左といひ。万葉の古風を思ひ入たる程もけ  
だかく侍れば。勝とさだめ侍りてむ。

二番

左

臺のさほ

右

びやうぶ

みさほにも涙のかゝるこひ衣あはぬ限りはほされやはする

いもにこひうきとし月を古屏風骨もあらはにやせなりに見

左の歌。すがた詞まことにえむにみえ侍を。みさほにも  
といへるもの字。あまりてや聞え侍らむ。右の歌。詞づ  
かひなどおくあるさまにみえ侍を。下旬あまりにかど  
かどしきさまにや。左。いさゝかなむは侍れども。すが  
たうるはしきにつけて。また勝とさだめ侍りし。

三番

左

たかつき

右

ちやうす

戀すてふ我うき名のみ高つきにもりし泪そくひてかひなき  
ひく人の心かはらはおなし世の契りものちやうすく成なむ  
左。たかつきの秀句おかしくは侍を。右。作者の名をか  
くされて。契りも後やうすく成なると侍る。いとやさし  
く聞え侍るにこそとて。右の茶うすに。なの／＼心ひき  
侍し。

四番

左

つくゑ

右

けうそく

袖かけて硯をならしかく文と人にすみつくえともなら南  
老人のちからとなれるかひもなし身さへ苦しき戀の道には



右のうた。老人の力となれる計にては。けうそくの心い  
さゝか不定にや聞え侍らん。左にすみつくといへる。か  
の平仲がためしもおもひ出られて。おかしく侍とて。左  
の勝に定りぬ。

五番

左

てうし

みきとたに人は今さら思はぬをしめてうしとや猶恨みまし

右

水がめ

口にさていつからもらさむ思ひせく心の水のわきがへる身を

左。すがた言葉うるはしく見え侍り。右。初五文字あま

りたしかにや。水がめの心かすかなるにつきて。左勝し

にや

六番

左

ごぼむ

めにも今みる心ちして亂れこのうちも忘れぬ面かけはうし

右

ながもち

徒らにあふこなければみしなかもちゝの恨の種とこそなれ

右の哥。難なくきこえ侍を。左。みる心地して。みだれ碁

のうちもわすれぬといへる詞づかひ。えむにおぼえ侍

れば。なな左の勝とこそ定りしか。

七番

左

ふせこ

衣／＼のあかぬ匂ひをかたみにて獨ふせこの床そさひしき

右

ちりとり

とはれればうちも拂はぬ床ゆへになと塵とりの名のみ立覽

左は。きぬ／＼のにはひに。ひとりふせこの名残をした

ひ。右は。うちもはらはぬ床に。ちりとりのなになつ事

をかこつ。とり／＼にいとをかしく侍れば。持とぞ申侍

りし。

八番

左

すぎびつ

三輪山にすみあるかひはなけれ共杉のしるしを猶や頼まむ

右

つゞら

人めのみしけき深山を分わひてゆきゝ休まぬつゝらなり設

左。杉びつのすみあると思よせられたるほど。たくみに

きこえ侍れど。右も。しげき深山の青つゞらくるしき世

をぞ思ひわづらふといひし本哥の心。とり過侍れど。こ

れも又やさしくも。つゞらなりを行なやむこひちにひ

きなされたるもいと哀に。左の。杉のしるしよりは。

猶ゆきゝやすまぬ青つゞら。をの／＼心ひき侍りし。



九番

左

したうづ

恨みすや扱も難波のあし袋つふふしのまゝあはぬつらさを

右

うらなし

揖をたえはなをきれぬと知せばや舟さしよする浦なしにして

左は。伊勢がふることをしたひ。右は。祿子内親王の家

の宣旨。つくりいだし出たる物語のしりを。おもひよそへられたるさま。ともにいうに聞え侍り。つぶふしのまもとあるぞ。きびすなめぐらさぬほど。すこしきうなるやうに侍る。はなをきれぬとあるも。はなかけうしの心ちすなむど。難じ申人々あるによりて。持とさだめ侍る。

十番

左

大つば

おるすにもとゝめなかるゝ我やさは名残おしとの形見成覽

右

おびのだい

しりしらぬ匂ひぞとまるふところを涙の川のうちすゝけ共左。名残おしとの形見なるらんと侍ることばつかひ。いひなれたるさまに聞え侍るな。ちかごろ花みる車より法師にいひかけたる同じふせい。今ものがたりにも侍

るにやと申出たる人あり。さりながらこれほどよりきたれることをいひもらされなましかば。口おしからまし。右の哥。人獨をこひたるにあらで。しらぬ匂ひなふところにとゞまるらむは。くゞつなどいふものどものすなる戀やかたらむと。興あるさまに聞え侍れば。何ともさだめかれて。又持とさだまりしにや。

かくて夢うつゝとも思ひわがざりしほどに。夜もあけにしかば。この物どもの聲もせずなりぬ。人にかたれば。まことともいはず。さては夢なりけるにやあらむ。いとくいぶかし。まことや大つばとおびの臺とは。かべのあなたにまなかなる。おちくぼの所にてありしが。このさだめなきゝて。我もまじり侍らむとのぞみて。物ごしに申上侍し。いとふしぎにこそおぼえしか。

鶯も蛙もうたなよむなればこゑなきものゝ聲もありけり

奥書

右一卷三條實隆入道逍遙院亮空真跡也臨于此卷書寫畢

公頼

右以濱田侯本校合畢



# 狂哥合

永正五年  
正月二日

衆儀判後日加判者詞

一番

左

今朝てらす日なたほかうに貧乏の神代の春や立かへる覧

右

ふる年の疊たゝきてしきなむか風呂のはこりも春や立ちらん

右方申云。左哥。今朝てらす日なたほかうあたゝかにして。貧乏の神代の春立歸るらむこゝろ尤よろしく聞え

侍り。左方申云。右哥ふる年の疊たゝきてほこりのたつ春。いひしりて聞え侍るな。このしきなんと侍るは。人の名にや。世にきこえ侍らず。仍哥合の例に任て。かたがた左の勝たるべきよし申也。

此十番の哥合は。初春の比。世にそむける貧客どものつれづれのあまりに狂哥をよみて。左右にわかちつがひ。おなじく方の人の申詞をしるし付侍るなるべし。當座の褒貶。兩方の難陳ことなはり侍りぬ。然ななを勝負のことばを加へ侍るべきよし衆中の嚴命に侍り。予とし老て後。み山の朽木にのみうづもれはてゝ。詞花言葉の色をたびゝいなみ申といへ共。しゐて是をしるす

べき由せめられ侍れば。とても狂哥の躰にまかせて。首尾顛倒の物ぐるなしきあしでな書付侍るべし。抑貧乏の神代の春に立かへる心。めづらしく見え侍り。又ふる年のたゝみたゝきて。ほこりのたつ春。いひしりて侍れども。しきなんといふ人の名。世にみえ侍らぬよし左方難じ申され侍る。尤にては侍れども。狂哥なれば。かゝる人しれぬ名もかへりて其興侍らんかし。なしはかり思ふにも。所につけて風呂もりなどする人の。ふるとしの風呂をたきて後。春なむかふる結構に。むしろだゝみ打たゝきて。しきをむと名におふかほして侍る。立春の景氣みる心地して。興ある姿に侍り。一番の左うた。まけに定侍る事も。其例なきにあらざれば。年のはじめの雅宴にことなよせて。貧乏の神は。かたよりても侍れかし。この御神の氏子は。世に多く侍らむなれども。さのみ信仰の人は。稀にや侍らん。此老法師も富貴を求むるにはあられども。貧乏このむまでの憂はなき身にぞ侍らむ。諸道のさまたげといふ事も侍れば。かたゝ件神風よりも。風呂のはこりたちまさるとや申侍らん。仍以

右勝に定申侍るべきなり。



左

春立といふはかりにや 三さいのときも霞てけさは見ゆらむ

右

節分にはけそこなひてふる衣きたる春こそおかしかりけれ  
右方申云。左うた。すがたよろしく。首尾いひしりてき  
こえ侍るも理なり。彼名哥の五句。そのまゝ侍ればなる  
べし。余にいかゞ。陳云。狂哥には。態此風を用侍る也。

左は。拾遺集の巻頭のこゝろ詞その儘にて。三さいのときも。かすみてみゆると思ひなのべ侍る。宜姿に侍り。右は。節分の百鬼夜行といふ物。よろづの古物のあまりに年をふる故に。自然の生をうけてばけ物と成て。こよひありき侍るとなり。小野宮殿節分の夜。参内せさせ給し御車の前をさまぐのばけ物となり侍りけるをみつけ給しより。百鬼夜行の顯形は。侍し事とうけ給及侍る也。然なばけそこなひたるふる衣。もとの姿にて春たちけむ。誠におかしき風情なるべし。返々此衣のしたてあたらしきは侍れど。忠峯が古風まくべきにあらざれば。なすらへて可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。

三番

左

御禮とてむれつゝ、人のくるのみそあたら 閑居の春には有ける

右

今は世にめたと酔たる我なれと酒かなければ斷酒をそする  
右哥も難なく。左方もよろしきよし。兩方申て持とさだめ侍りぬ。

左歌は。彼西行上人の。あたら櫻とよみ侍りし心。おかしきに似たり。世濁にめたと酔ふしたる身ながら無酒の斷酒。これも一ふしに侍り。されど餓鬼の斷食と申夏にて侍れば。心ざし深からずやと覺え侍るうへ。上人の法力には。まけても侍れかしいかゞ。

四番

左

錢米はてうち拂て露の身のなき所なき年をこそとれ

右

登りたさもゆるはかりに思へとも山におひつくさしも草哉  
右方申云。露の身のなき所なきさま。一ふしある躰に侍るな。露のえむの詞。秋の哥にや宜く侍らむ。陳云。寂蓮法師哥に。なげきつゝ、ことしもくれぬ露の命いけるばかりをおもひ出してと侍り。秋にかさるべからず。左方申云。山におひつきたらば。いづくへのぼりたきさし



も草の心そや。陳云。下界の人は天を望。いはゆる世三  
天梵天帝釋にいたるまで。次第に上天の望あり。其上山  
と云は惣名なり。なを高嶺なきにあらず。難するに及ま  
じきにや。

左右の難陳。共以其故ありてきこえ侍り。錢米はてかき  
はらひて。さすがに年ばかりとりけむ身のなき所なき  
貧者の心。あはれふかく見え侍るな。さしもぐさ。此山  
家になきては。所えたる物にて。すてがたくも侍るう  
へ。のぼりたさなど。旅宿のみやこをおもふ心こもり侍  
るにやとみえて。かたぐこれ心なきにあらず。仍可  
爲レ持。

五番

左

世中は正月小袖けふたつをしらみ布子のうらみてそきる

右

在國も年をかきぬる紙きぬやつくりひんほうしてもみゆ覽  
右方申云。虱布子。他人の正月小袖をうらやむ風情。お  
かしきこゆ。

左方申云。紙きぬのつくり貧乏。初のつらさよせあり  
て。よろしく見え侍り。

判者も左右のかた人におなじく侍べけれ共。いさゝか  
意趣を申侍るべし。抑紙きぬのつくり貧乏したては。あ  
たらしくみえ侍るな。衣服の類の位次をたてゝあらそ  
ひ侍らば。いかさまに見ぐるしきなとろへとも侍れ。古  
布子。新帯衣の下にはかさなりがたき恨侍らむかし。さ  
したるあかはなくとも。布子のゑりにつき侍らむと。判  
者の法師のおもひたまふるはいかゞ。

六番

左

思れのほとはつかし正月のもちぬをくふと夢にみしかな

右

御祝のよそにさゝめく響をもきかぬ耳こそひんほうけなれ  
左哥の。思ひれの程もはづかしといひて。もちなくふと  
夢にみしかなと侍るすがた幽玄にして。餅をおもふ心  
ざしわりなくみえ侍れば。右のうたの是非に及ばず。左  
の勝に侍るべきよし。左右一同申之。

右御祝のさゞめくひゞき。よそにてさへきかぬ耳を恨  
侍る。やさしきに似たり。ことに耳のなりによりて。貧  
福を相し侍る事。世話に申ならはし侍る事など思ひよ  
せ侍るも心なきにあらず。老耳のおぼろなるかた人に



は。此右の舟にとりつきたく侍を。左。涙おもひ入たる  
すがた、無三比類秀逸にて侍るべし。もちゐなれがふ戀  
慕の思ふかくぞみて侍る。ひとりねの床の上めもあひ  
侍らで。初春の餘寒もいとゞ身にしみ侍て。あかしがね  
けむ夜のふけ行まゝにうちまどろむ程に。白雪のはだ  
へやならたへぬ計に。手にふれ侍る夢の名残。おどろ  
きもあへぬ染心の涙にむせて。しばらくはうつゝとも  
なく。忙然としてうち返し。あかしてみれば。むば玉の  
はかなき夢成なりけり。あさましく心はつかしく。我な  
がら慚愧して。いひいで侍るこゝろ詞艶にたぐひなく  
みえ侍り。かゝる秀哥の妙句なも。よく聞わかぬ聾耳に  
て。此つがひにあひあたり侍るさへ。不運の貧業に侍れ  
は。中々しできて。耳を洗侍れかしと覺え侍る。いかさ  
まにも哥のたけ。左はるかに勝るべし。

七番

左

正月は午房はかりの尾をふりていなむとせしなくゝる大根

右

いそぐにてこちなしはかれ京のときくは心もひかぬ舟出を  
左哥。ことなる難なきよし。右方人をのく申之。

右哥。當時の都のさま。あはれに聞侍り。

左の。大根くるゝといふ事。此比世にもてあそび申狂哥  
に侍るべし。かゝる事の濫觴は。家々の相傳。説々もお  
ほく侍るべけれども。先當流の口傳の一説しるし申べ  
し。何の御代にかありけむ。かた山ざとの風ざぶらひ  
きはめていやしき。姿なるありけるが。大根をのみこの  
みてけるな。京童のにくみ笑。大なる大根をいかほども  
あたへて。神變奇特なくふ人かなとほめあげて。嘲弄す  
るなもしらず。さては我こそ大根くひて。天下無双の名  
人なれと高慢してくふほどに。口より血をながし。大あ  
せ水になりて食ひたりけるな。わらひ草にしてくはせ  
けるより。人のさしてもなき事をほめあげ。かしづきな  
どするな。大こんくるゝと申とうけ給及侍りしなり。右  
當時よろづの零落故。九重のなかも。みなあらしの山の  
はげしきたぐひになりはて侍りし後。綱なきがごとく  
にきゝをいため。おほきおりふしなれども。猶舊里をおもふ人は。ひなのすまひとて。心とゞ  
むる方や侍らざりけむ。あはれにいそぐ舟出侍りけり。  
此ともづなくり返しても。すがたなくおぼえ侍れば。左  
には大こんなくれずして。右の勝にさだめ申侍なり。



八番

左

下部とも徳よ福よと祝へ共ななくひたらぬいひはわけなし

右

我なからよつひけうなるやせつらなゝしのこひても世にまじる哉

右方申云。下部のくひたらぬ飯。さこそ侍るならんなれども。あまりに凡卑なる躰にや。左方申云。狂哥にとりては。首尾いひかなへられ侍るうへ。かはをしのこひて耻を忘るゝ事。世俗の風儀よろしく出侍り。

左右の申詞につき。かくもなを比興なるやせつら見所あるべからず。ことに判者の老俗愚詠に侍りけり。かたがた凡卑なる下部のすがたなりとも。此瘦顔にはなとる物やは侍らむ。仍以左かちとすべし。

九番

左

さく梅のこがるゝかにもなとらぬは風に散くる雪の花ひら

右

我身たゝえ心得ぬと心得てこゝろえかたき世にもふるかな  
右方申云。さく梅のこがるゝ花びらの色香やさしく見え侍り。左方申云。え心得ぬと身のありさまなば心得な

がら世にふるならひ。こゝろ得がたき物にて過行侍らん。狂哥ながら心あるさまにて。心えて心得がたきし

もしかたと云語にかよひて。たけたかくみえ侍り。梅咲色のこがるゝ花びら。又やさし。持と侍るべきよし各申す之。

誠にさく梅の色ふかきおりふしに。雪のごとくなる白餅の花びら。こがれそひ侍る。紅色にほひみちて。類もなき花味にて侍り。優艶のすがた。有心幽玄の躰をかれて。詞と言。心といひ。尤以秀逸又なくみえけり。右哥は。幸に作者もみづから心えがたきと難じ出たる詞なれば。先打まかせ。花びらもちのいしげなる氣味をしやうくわん申侍るべし。

十番

左

三世心不可得にてはくひかたき正月もちにむせてしなはや

右

禁戒はやふれころもとなれる身の代を五百にかふ人もかな  
右方申云。三世心不可得。金剛經の要文にて侍也。むせてしなばや。年始の哥に不吉なるべし。陳云。狂哥には。祝哥不吉の用捨までは。あながちにあるべからず。又難



## 常盤廻物語

云。過去現在未來不可得の觀念をはなれて。向上の禪に  
いたらば。なむぞむせてしなばやとねがふ。第二頭な  
り。生死にかゝはる物が。いかゞ。陳云。むせてしなばや  
といふ哥句に。落て生死厭離の見性をくらし侍るほ  
どの暇ならば。三十棒をあたへ侍るべきなり。

左哥。彼三世心不可得事。書記録のうへに見え侍る事な  
れば。今更しるし申に及ばず。され

野店の

老。此餅をば何の心に點じてくひ給ふべきぞといひけ  
るに。つまりて經をやきて。もちなくふ禪味を得侍し當  
意をおもひよせて。むせてしなばやとなし侍る。よろし  
くきこえ侍り。右哥も。禁戒のやぶれ衣代を五百よとい  
へる。實にたくみにて其さまいひしれり。しかれどもす  
でに破戒の比丘たり。見性の古徳にいかでか肩をなら  
べ侍べき。判者も衣鉢のかた人に一味の分に侍れば。か  
たぐすてがたし。此番にきては。まけても功徳にな  
〔最有誤謬〕  
しからむはやぶれ衣まづたちしのびてもや侍らん。我  
宗門の本意。善惡勝劣なも論すべきにあらねども。し  
ばらく哥合の法にまかせて。吹毛の難をもらし侍らぬ  
ばかりなり。あなかしこ。人數の外他の披見をゆるさる  
まじき物なり。

大和國にときはのうばといふ人侍りける。樂  
み榮へて過けるが。とし頃の翁にをくれて後。  
子共あまた有けれども。よろづ心にしたがふ  
ことぞなき。なを年つもり行まゝに思ふやう。  
過にしかたは扱置ぬ。老の末こそ悲しけれ。柴  
の編戸の明くれに。つもれる罪をもしらずし  
て。空しくとし月すぎゆかば。我後世をいかゞ  
せむ。朝には世路にほこれども。夕にはわれと  
なく白骨にいたる身をしらずして。赤白二つ  
の腸の蟠れるをたとふれば。毒蛇にかはらぬ  
ふせいかな。紅粉翠黛にかうべを色どりて。男  
女和合の愛欲は。臭きかばねをいだけり。死骨  
を焼ぬれば。白骨となりて野にじやれぬ。皮肉  
の間に亂散して。刹那のほどに離散する。惡  
業かたちをあらはして。正しく劔に身をさき



て。刀の林にかばねをきる。紅連大紅連の水に  
閉られて。焦熱大焦熱の焔に咽ばむ事のかなし  
さよ。うき身のほどを觀すれば。岸のひたひの  
根をはなれたる草程もなき。命を物にたとふ  
れば。江の邊りなる捨小舟。係る無常をおもふ  
には。若く盛の身なりとも。いとひはつべきあ  
だし世を。ましてうばらが老の身の。かしらに  
は雪をいたゞき。眉には八字の霜ををき。顔に  
は四海の波をたゞみ。目には霞を立籠て。耳も  
きこえず口かはき。息はあらくて齒は落ぬ。こ  
しは梓の弓をはり。立居る姿の耻しや。肌はあ  
らくて膝よはく。たをれがちなる佗しさよ。甲  
斐なきいのちながらへて。子どもにみゆるも  
はづかしや。念佛申て死なばやと。姫は俄に思  
ひ立。願ふ衆生を迎へとらむと。誓ひをたてゝ  
おはするか。誠さもあらば。姫がしわざを御覽  
せよといふまゝに。手水うがひするよりも。西

にむかつてふしおがみ。南無や西方彌陀如來。  
姫を極樂へぐしてゆき。よからむ縁をたづね  
つゝ。ありつけ候へ彌陀佛。夜とともに念佛す  
れば。のどかはきてかなしやな。あらお湯ほし  
や彌陀佛。湯でも水でも少したべ。是につけて  
も急ぎつゝ。淨土へ疾して參らばや。あみだよ  
／＼とよばはれど。惣じて佛のおはせぬか。佛  
の耳のきこえぬか。うばらが聲の及ばぬか。人  
ためならぬ姫ををき。こと人をばしむかへた  
まふなよ。世の人往生するときくならば。うば  
にはながくうとまれて。しらせ給ふな彌陀佛  
といひければ。子どもは是を聞からに。あはれ  
なるとはいはずして。にくみけるこそおかし  
けれ。うばが念佛申きけ。極樂淨土にせきあら  
じ。高聲せずと骨不折に。心の内に申せかし。  
あなかしましや年寄の。よな／＼ごとの高聲  
やとて。申せどすゝむる子はなくて。せいする



ことこそ悲しけれ。をのれらあまたそだてゝ  
は。老の行末かゝらむと。たのしびしことは飛  
鳥川。明日をもしらぬ此軀を。哀とおもはぬは  
かなさよ。朝夕付添あつかへと。いはゞこそ憎  
からめ。十日に一度いかなれば。かゝる齡の老  
の身を。などかみるめのなかるらむ。昔のはく  
ゆうは。其打杖のよはき事を悲しびしぞかし。  
況まさしく木をきざみ。母のかたちと見し事  
も。今更哀ぞまさりける。父母恩重經のことは  
りを。哀子共に聞せばや。父を害せし惡王は。  
むかしもためし有しかど。母の乳房のをんあ  
ひを。いかで愚におもふべき。斯は思へどこれ  
も父。子共のためを思ふなり。唯彌陀をこそと  
なへなめ。さても老後のならひとて。ものね  
がひこそ隙なけれ。子共が所はちかけれど。よ  
ぶことなければ南無あみだ。あらさびしさ悲  
しや南無阿彌陀佛。酒がなのまん。あら腰

いたや膝いたや。のどかはきや南無阿彌陀佛  
。子共はいかゞ竝居つゝ。おかしきことを  
ねむじつゝ。軀が願をきかむとて。耳をたてゝ  
ぞ聞にける。いもがなくてはむやはと。柿が  
なくはむあまゝと。やきたる餅のさねもな  
きを。健館にからみてくはばやな。白米がなひ  
めにして。湯をものまばやしなと。ゆやか  
うじ橋けんざくろ。栗柿なつめ梅すもゝりむ  
ごやなしやくはやな。びはや山もゝ山いち  
ご。榎の實も拾ひくはやな。あぢきなや。あ  
をのりわかめくひたやな。齒は落うせてなけ  
れども。はじゝをもつてあいしらひ。もときり  
昆布がなしはぶらむ。あをのりあまのりとつ  
さかのり。よろづのかいさうくひたやな。南無  
阿彌陀佛。あらくるしや。山のものにとり  
ては。ところさわらびくすの根。まつたけひら  
たけなめすゝぎ。かのしたしむたけしめりた



け。くりたけねすみて月よたけまでもくはゞ  
やな。扱またうをのほしき事。たとへむかたも  
なかりけり。鯉ふなわかあゆますうぐひ。ぶり  
たいすゞきいかめしく。思ひのまゝにくはゞ  
やな。しゝとりうさぎまみむじな。かはいりに  
してくひたやな。あはびやさゞいにしはまぐ  
りもあらほしや。さのみいふもはづかしや。か  
いもちひこそいづれより。片時へむしもわすら  
れね。あらあぢきなや。南無阿彌陀佛。念佛申身  
なれども。くうのもむじがたへせねば。せつの  
ほうともいひぬべし。わかくてのみし茶もほ  
しや。ちやのこもさらに忘られず。すいせんう  
どむまんちうひやむぎ。うむさうやうかんあ  
ぶらもの。ひきぼしいりつけうけこぶくはゞ  
やな。いにしへくひしものども。わすらればこ  
そ彌陀佛。南むあみだ佛。子共あまた有け  
れども。とぶらふ事はあらばこそ。何しに子共

をそだて置。今はうらみのたねとなりけむ。う  
ばらが若く盛りなりし時。子共がおさなくあ  
りつるに。ねがふことはなれども。ほしさう  
なる物をば。たづねもとめてくはせしに。うば  
らがかほどねがふには。あれども憎きくれば  
こそ。子共おもひし心ざしの。かたはしほども  
思へかし。九夏三伏のなつの日は。まくらをあ  
ふぎて乳をふくめ。涼しき風を子にあてゝ。玄  
冬素雪の寒き夜は。濡たる床に我は寢て。厚き  
衾を子にはきせ。風をもあてじといたはりし  
に。係る恩をば忘れはて。姫をばよそになしは  
てゝ。人すまぬ所々にをしこめて。ひこらがに  
くむもわびしきに。とくして淨土へまいらば  
や。灯火による夏のむし。笛の音による秋の鹿。  
其外地をかける獸鳥までも。子を思ふこそよ  
しなかりけり。淵にも瀬にも身をなげて。死な  
ばやと思へども。廣大慈悲の釋迦だにも。八十



一にて入滅し給ふ。うばらが九十にあまるま  
で。いきたるもげに耻もなし。しひてふ無碍の  
理をともし文殊の智慧もとらじな。りさう  
むげんの經をとく。ふげんぼさつも餘所なら  
ず。子共がにくむもことはりなり。かくはおも  
へど酒ほしや。鯉がな鯽がな煮てくはむ。秋の  
夜ながき夜もすがら。春の口ながきひねもす  
に。片時へんしもわすられず。まどろめば夢に  
見え。覺れば面影にたちて物ほしや。よぶかよ  
ぶかと待けれども。そらしらずして過ぬれば。  
嵐木がらし身にしてみて。えぞこらへねばうち  
ふしぬ。あしげの馬にはあらざれど。またはみ  
かへりく。足手も強く成ほどに。一日に百里  
も千里も行つべし。かくうらみて思へども。子  
共や孫があるならば。虎ふす野邊のはてまで  
も。などかありきてゆかざらむ。おく齒もきば  
もまだあれば。青梅かちぐりくひつべし。めよ

せてきかせむ人あらば。さうかうたふべし。燈  
火くらき陰にても。こはりのみゝも入つべし。  
人のひはうを思はずは。竹馬にむちもうちぬ  
べし。あまり居たるもわびしさに。まさりがほ  
なる風情にて。門へあそびに出たれば。わらは  
くはじやばらどつと笑ふぞや。あらくるし。南  
無阿彌陀佛くといひつゝ。うばは大きには  
らをたて。さるがくでむがくが物ぐるひのや  
うにといひてたちかへり。盥の水にうつりた  
る。姿をみればげにもまたおそろしや。鬼のひ  
ぼしにことならず。佗人のつくりしにあらね  
ども。まばらに見ゆる麻衣。きてもかひなしと  
音をぞなく。柴の編戸に立歸り。思ひの涙を  
流せども。哀ととへる人もなし。南無阿彌陀佛  
く。賤のを手巻くり返し。むかしは今にかへ  
らねども。思ひ出てもかひぞなき。過にし源氏  
の大將の。わりなくしのびし藤壺の。今いくよ



とか恨けむ。かしは木の右衛門督、みずもあらず見もせぬ人をおもひそめ。をよばぬ枝の色ふかき。身をいたづらになしはてゝ。をきてゆくいづくの露とまよひしに。空にうき身の消ぬらんと。の玉ふ聲を聞さして。出にしほどの玉しゐも。身をはなれてや御袖に。とまりぬらむとしたひける。其曉の衣々の。思ひにも劣らじな。今のうばらが念佛となふる心のわりなさは。人しれずのみ恨みわび。又或時はむさしの。草葉の露ぞ身をやどす。ひとかたならぬ大麻の。曳手あまたの其中に。伊勢齋宮の御事は。ねひとつばかり月影に。丑みつまでの御契り。君やこし我や行けむの返事。かきくらす心のやみにまどひにきと。かたみにかけし御情に。阿彌陀も姫等をおもへかし。薰大將のしげみをわけて。たづねとへりしなき人の。そのかたしるにすへをさし。匂ひもかほるもわかす

して。契りそめにし曉の。立はなれなばしぬべしと。情をこめて橘の小嶋が崎の舟のうち。川よりをちの中やどり。のどけきほどの春の日に。みれどもあかずかたらひて。終にうき身は兎道川の。底の水屑とおもひ立。涙に沈みし夕暮も。姫等がたもとにをとらじな。酒ほしやのどがはきや。霞を分て行鷹も。秋は歸るならひあり。嵐の風にちる花も。又こむ春のたのみあり。けてしばらくとまらぬは。うゐてんべんのさとしかや。さてもかひなき黒髪の。今年は白くなりにけり。宵の鏡を今朝みれば。老ほどつらきものあらじ。過にし昔を思ふには。さながら夢の心ちして。ねられぬ夜半の手枕に。落る涙ぞとまらぬ。うばが盛のかたちをば。あらしになびく女郎花。露にしほる。瞿麥の木高き峯の藤のはな。霞の中の樺櫻。谷より出るうぐひすの。羽風に靡く青柳の。まゆのうちな



るしら菊の。うつろふほどの歎冬の。さかりの露のこぼれたる。夕に思ひ出るといひしものを盧橘によそへても。むかしおぼゆるかたちぞと。さすがに人めや見るめぞよ。今は子共に憎まれて。花にたとふる人ぞなき。春の花と身をおもひ。秋の月ともひかりをあらそひし身を。いまは子共に憎まれて。闇のにしきにことならず。姫等若くありし時。人をもこひつ戀られつ。または心盡しの人々は。業平實方光君。大内おほやけへもめされつ。玉の床にもねしものを。長生殿の夜半に出。比翼連理の契りまで。後世かけてかたらひし。そのいにしへもわすられず。咸陽宮にあらねども。窓うつ雨ぞかなしけれ。小野小町が衰へしに。かはらぬ姫が有様に。百官万民ことく。あふがぬ人もなかりしに。玉樓金殿の床の上にしてかしづかれ。月卿雲客にうやまはれしも。唯夢とのみ

ぞ覺ゆる。たいなむざんの春の花。せいりやう殿の秋の月。げいしやうはくばのしらべまで。物あつかひはせしぞかし。うらなし。みゝなし。たかあしだ。くつやしたうづはきしかど。今は子共にかゝればこ。そびらかけをだにみつけえず。うむげむかうらいあやにしき。せんのむしろもしきしかど。今は子共にくまれて。破れむしろにふしたれば。あらやいぶせや身もいたや。狐の皮がな二三枚。責て魃の皮もがな。たとへ鼠の皮なりと。えさせたりせば宵ごとに。脊中ばかりにあてゝねむ。朧月夜にあらねども。しくものもなき姿かな。ひじきものには袖をして。葎の宿に寝もしなむ。小野小町にあらね共。みづから野べやをくらまし。いや／＼わかれし娑婆世界。これもおもひて何かせむ。阿彌陀佛の左右の弟子。觀音勢至菩薩たち。姫を導き給へ南無阿彌陀佛と唱へつ。高座に



のぼり念誦して。西に向ひて伏拜み。やがて臨終正念にして。紫雲忽棚引て。音樂空にあらたなり。華降異香薰じつゝ。往生疑ひなかりけり。後の世までも書とゞめける。ときはのうばこそめでたかりけるく。

## 精進魚類物語 一名魚島平家

祇園林の鐘の聲。きけば諸行も無常也。沙羅雙林寺の蕨の汁。盛者ひつすひしぬべき理をあらはす。おこれる炭も久しからず。美物を焼ば灰となる。猛き猪も遂にはかるもの下の塵となる。遠異朝をたづぬるに。獅子や象。豹や虎。これらは皆人主の政にも随はず。或時は人を損じ。或時は獸を害せしかば。つゝには人の爲にもとらはる。又ちかく本朝をたづぬるに。山の狼。里の犬。ことひの牛のそらだけり。荒たる駒のいばえ聲。これらはみなとりくくなるといへども。まちかくは越後國せなみ。あら川常陸國鹿島なめかた。凡北へ流る河を領知しける鮭の大介緒長が有様を傳へうけ給るこそ心も詞もおよばれぬ。去る魚島元季壬申八月一日精進魚類の殿原は。御新の大番にぞまいり



ける。遅參をば。關番にこそ付られけれ。折ふし御新は。八幡宮の御齋禮にて。放生會といひ彼岸といひ。かた／＼御精進にてぞ渡らせ給ひける。こゝに越後國の住人鮭の大介緒長が子共に。鯛の太郎粒實。同次郎弼吉とて兄弟二人候しをば。遙の末座へぞ下されける。こゝに美濃國住人大豆の御新の子息納豆太郎糸重ばかりをぞ御身近くはめされける。鮭が子共腹を立て。一はし申て。殿原にあちはゝせむと思へども。父大介に申合てこそ火にも水にも入らむずとて。干鮭色の狩衣着て。山吹の井での里へぞ下られける。其夜も明けぬれば。駒に鞭をあげて。夜を日についで打程に。同八月三日酉の一てむには。超後國大河郡鮎ノ庄。父大介の館に下着する。兄弟左右に相並びて畏て申けるは。われら此間大番近習の爲に上洛仕候しかども。大豆の御新の子息納豆太太郎に御心

を移し。御目にもかけられず。剩耻辱におよび。末座へをひ下され候間。常座にていかにもなり。火にも水にもいらんと存候しかども。如斯の子細をも申合てこそと存候つる間。是まで下向とぞ申ける。大介此事をき。赤かに腹をたて。我等が一門中には。北陸道。ゑぞが千嶋まで。北へながる。川をば。我等がまゝに管領すれば。國に不足はなけれども。御新不便と仰あればこそ。子どもをも進せられ。人も人々しく納豆太ほどの奴原に。思召かへさせ給はむには。番にもられても何かせむ。緒長年七十にあまりて。いく程ならぬ世中に。己故に物を思ふこそ口惜けれ。よはひ顔馴につけ。うらみ伯鸞におなじ。是につけても故御新の御事こそ思ひ出さるれ。惣じてこの君は。御心こはき御新にて。年ごろの我等が申事をも御承引なく。又諸國の受領。檢非違使。大名。小名にも。白



衣にて中帶ばかりに。曳入烏帽子にて對面し給ふも心得ず。哀此御斬の兄御前のらくい腹に。粟の御斬とておはしますこそ。御心もこまごまとしておはせしかども。それはもとより御身ちひさく渡らせ給へば。我等が奉公仕べきやうもなし。又君に仕へ奉るには。禮を以て本とすといふ事あり。人の身として。兩君に仕へざるは。忠人の法なり。されば我等が。又人をたのむべきにもあらず。就中此御斬の先祖をたづね承れば。天地開闢し。生あつて種くんだり。稻田姫の御腹にやどり。世に出させ給ひしより以來。伊勢天照太神宮のかりのつかひ。賀茂の御祭のみつぎ物。腹赤を奏する節會まで。魚類をもつてむねとする。仙人の琪樹は。冷して色なし。王母が桃花は。紅なれども芳しからず。かゝる非情の草木までも。分々に隨て徳をばどこさすといふ事なし。まして我等が先祖

譜代の從類として。いかでか君の御爲に不忠を振舞べき。か様におぼしめし捨られまいらすれば。けふより奉公ふつと無益とおもへ共。故御斬さしも見はなつたと御遺言ありしかば。それにぞしばらく思ひとゞまる。たゞ何としても。世間の示しの御斬となり給ふこそ心も詞も及ばれね。其儀ならば魚類の一門を催して。精進の奴原をうちほろぼし。われら御斬の御内に繁昌せむ事。いと安き夏なりとて。鰹房十連を指遣て。國々へぞ觸られける。その時馳參人々には誰々ぞ。先鯨、荒太郎、鯛の赤介。鰯の大内權介。さちはこの帶刀先生。石持の大介。大魚伊勢守。鮭大介。嫡子鰯太郎粒實。同じき次郎弼吉。鱧長介。鯢冠者。鱒藤五。ひらだの左衛門。をいかはの左京權亮。いさなごの源九郎。うるりの平三郎。太刀魚の備後守。鯖刑部大輔。鱈の判官代。鰻出羽守。ぎゝの左少將。も



ろこの兵衛尉。池殿の君達には。美鯉の御曹司。小鮒近江守。同山吹井手助。熊野侍には。鱸しらはすの左大忠。宇治殿の御内には。鮎介が一族に。白鯢河内守。王餘魚中務。鯰判官代。鱧右馬允。すばしり鯛鮓法師。柳魚新兵衛。鰻尉。鰻陸奥守。かいらぎの大藏卿。鮎介が子どもには。鰻の冠者。生海鼠次郎。鮎入道。魚鯉源六。あむかうの彌太郎。大蟹陰陽頭。あふらぎ。目戴。土長。飛魚。蛸入道が手に相したがふ者共には。鮑。鳥賊魚。小蛸魚。鰻の太郎。ひいをの源太。鯉又太郎。鰻藤三郎。鰻源三。ぶりの大隅守。鰻冠者。飯尾鯉介。守宮十郎。海老名の一族。此外。山のうちの殿ばらには。獅子。麒麟。豺。狼助。まみの入道が嫡子猪太郎。猪武者のそばみず。兎兵衛穴基。鳥の中には。鳳凰。鸚鵡。鵲。うつぼ鳥。呼子鳥。鰻。角鷹を大將軍として。金鳥大納言。鰻侍従。鰻大江尉。郭公中將。鰻少將。鰻中納言。鰻

五郎。鰻次郎。池上の鰻五郎。鰻。かひつぶり。鰻左近允。ながはしの宗介。侍大將には。飛鰻判官。鰻隼人佐。審の小三郎。隼右衛門督。鰻雅樂助。白鰻壹岐守。鰻新五。鰻新六。山鳥別當。山柄注記。水鰻主殿允。鰻左衛門。鰻のとやの頭。梟目代定觀。班鳩源八。松むしり。こがら四十柄。鰻又三郎。雀小藤太。鰻陰陽助。つゝ鳥。小鳥。鰻鰻を先として。以上その勢二万五千餘騎。魚鱗鰻翼の二陣に群て。官軍旗をなびかし。はげしき程の亂なり。凡四足の物ども。いづれも勝劣なかりけり。かゝるほどに。南都北京の貝のかたへもきこへければ。我等も海に生をうけたれば。まいらではあしかりなむ。いざや赤介殿の御供仕らむとて。鰻貝どもまいりけり。春は三吉のゝ仙家の昔を忘れぬ櫻貝。夏は泉の雀貝。秋は萩が花さし蘇芳貝。冬は時雨の音たてゝ。ね覺がちなる夜や貝。たま／＼まち



得て契る夜は。あはれをそふる鳥貝。世をいとへども尼貝の。おもひたえたる簾がい。とし老たればうばがいの。女貝こそせいしけれ。山臥の腰に付たる法螺貝の。友を促すばかりなり。螺の名を聞もおそろしきは。鬼がいのおどしかけたる鎧貝。總角かけてぞやさしかりける。石の中なるせい／＼を。かき集てぞまいりける。棹鹿の星の光はかすかにて。しかも海上はくらげなり。をの／＼しそくは持ながら。狐ばかりぞ火はとぼす。貂の目のやうにぞ赤かりける。かゝる處に哀なる事ありけり。鯛の赤介は。後見の鯀鮪の入道を近付てのたまひけるは。味吉は沖の昆布の大夫のむすめ。磯の若和布をむかへて。妻とたのみて。幾程なくて。此大事出来たり。昆布大夫といふは。精進のかたには。宗との物ぞかし。新枕せしその夜半は。すゑの松山はる／＼と。波こさじと。互に契りし

ことの葉は。卓文君にもをとらず。偕老同穴の契り。鴛鴦比目のかたらひあさからず。いかにせむとぞの給ひける。鯀鮪畏て申けるは。生死無常のならひ。有爲轉變の世間。釋尊いまだ旃檀の烟をまぬかれ給はず。はじめあるものは終りあり。逢ものは定りて別離の愁にあふこと。今にはじめぬならひ也。されば人間の苦の中に。五盛陰苦求不得苦愛別離苦と説れたる。就中弓箭とるものゝ。二心あらむなど。覺しめさむ事口惜かるべし。そのうへふるき詞の候ぞかし。唐土の虎は毛をおしむ。日本の武士は名をおしむとこそ申つたへて候へ。疵を當代に始てつけ。そしりを後葉に遺さむ事。家のため身のため口惜かるべし。世しづまる物ならば。いかなる波の底にても。めぐりあはせ給はぬ事よも候はじなど。様々にこしらへいさめ申ければ。赤介げにもと思ひけん。むかへ



ていくほどもなくて。磯の若和布を毘ぶの大  
夫もとへぞ送られける。その時わかめ。一首は  
かくぞ詠じける。

なみたより外に心のあらはこそ

思ひはわかれ後のちきりを

赤介もとりあへず。かくぞつらねける。

忘れしと思ふ心のかよひせは

なと二たひの契りなからん

かくて送るほどに。赤介猛き武者と申せども。  
泪は空にかきくもり。むかし王昭君を胡國の  
夷のためにつかはされし時。胡角一聲霜後夢。  
漢宮万里月前腸など詠せしこと。今さら思ひ  
しられて。むかしの人の別までも。おもひつら  
ぬれば。あかぬ別にぬるゝ袖。かはくまもなき  
旅衣。泣くゝ奥へぞ下されける。よそのみる  
めまで。みな鹽たれてこそ見えにけれ。又赤介  
は。もとするめの腹に六になる子の有けるを

近くよびよせて。汝をばいかにもして。御新の  
御見參にいれんとぞ思ひしかども。今此大事  
出来る上は力不及。さればいかならん岩の碯。  
波の底にもかくれぬて。世しづまるものなら  
ば。あらはれ出よといひ合て。父の鯛の乳母ご。  
駿河國高橋庄知行する伯母の尼鯛のもとへぞ  
遣されける。かゝる程に武者共鎧を着。甲の緒  
をしめ。馬に乗出立たり。鯉大介鯨長が其日の  
装束には。しかまのかちんの直垂に。刺烏おど  
しの鎧着。同毛の五枚甲に。鷹角うつてぞ着た  
りける。廿五指たる鶴の羽の箭頭高にとつて  
つけ。小男鹿の角はす入たる弓の真中にぎり。  
烏毛馬のふとくたくましきに。熊の革づゝみ  
の黒鞍置てぞ乗たりける。子息鯛太郎粒實。同  
次郎弼吉。前後左右にぞ打立ける。鯛赤介味吉。  
その日の装束には。水文の直垂に。宇治の綱代  
に寄ひをどしの鎧。草摺長にさくときて。同毛



の甲の緒をしめ。三尺五寸のいか物づくりの太刀をはき。廿四指たるうすべ尾の矢頭高に取てつけ。我爲まつこだいの弓のまなかにぎり。白波蘆毛の駒に。洲崎に千鳥すりたる貝鞍をきてぞ乗たりける。けふをかぎりと思ひけん。年ごろの郎等金頭太郎に。しやち鉾をもたせて召具したり。かくて奥の方を見わたせば。おびたゞしく物の光てみえければ。赤介あれは何ぞと問ければ。金頭申けるは。あれこそ一切衆生の御菜と成てまいらぬ人も候はぬ。鰯水にて渡らせ給ひ候へと申ければ。さてはわれらが氏神にてわたらせ給けるやとて馬よりをり。三度禮拜して。南無八幡大菩薩と祈念して。ゑびらの上指より鯖の尾の狩俣拔出し。鰯水にぞ奉りける。かくて出ける所に。年四十計なる物の色黒かりけるが。すこし長き馬に乗て。をくれ馳して來れり。大介あればたれとい

ひければ。手綱かひくり。弓杖にすがり。大音揚て名のりけり。是は近江國住人犬上河の惣追捕使鯰判官代とぞ申ける。など今まで遅參ぞとの給ひければ。さん候。鱸馬に轡をはめむくとして候つる程に遅參なりとぞ申ける。さるほどに國內通解の事なれば。精進の方へぞきこえける。戒餅の律師。四十八人の弟子を召具して。あたゝげの御所へぞまいられける。御所此よしを聞めし。大きに驚かせ給ひて。本人なれば先納豆太に告よと仰ありければ。律師が弟子けしやう文といふ物をもつてつけり。折ふし納豆太。藁の中にひるねして有けるが。ね所見ぐるしくや思ひけん。涎垂ながらかばとおき。仰天してぞ對面する。けしやう文。此由委く申ければ。納豆太その儀ならば精進の物共促せとて。鹽屋といふものをもつて。先身ちかくしたしきものなれば。すり豆腐權守



につげけり。道徳といふ物みそかにはせめぐりて催けり。先六孫王よりこのかた。まむぢう。素麴をはじめとして。蒟蒻兵衛酸吉。午房左衛門長吉。大根太郎。菅次郎。蓮根近江守。大角山城守。渡邊黨には。蘭豆武者重成。茗荷小太郎。蒔角戸三郎いらたか。筭左衛門節重。納豆太郎系重。甥の唐醬太郎。同次郎。味噌近冬。苺新左衛門。獨活兵衛尉。落源太苦吉。蕎麥大隅守。薯蓣藤九郎。芋頭大宮司。煎大豆咲太郎。こたうふの權介。實苺新左衛門。河骨次郎秋吉。昆布大夫。荒和布新介。青海苔。昆布。苔。雞冠。雲苔太郎。山葵源太。苺五色太郎。松籬壹岐守。樹中の上臈には。稚少將。栗宰相。桃侍従。栗伊賀守。大和國住人。熟柿冠者實光は。柿の蓋ばかりの所領とて。乗替一騎もひかざりけり。石榴判官代。枇杷大葉三郎。弟の柑子五郎。橘左衛門。李式部大輔。梨江藏人。松茸太郎。熊野侍には。柚皮庄司樵太

左衛門。青蔓の三郎常吉を始として。以上其勢五千餘騎。久かたや雲の梯引おとし。分取高名。我もくとおもはれける。中にも蒟蒻兵衛酸吉。氏神のはじかみへまいりて。酸吉が今度のからき命をたすけ給へと。終夜わが身の藝能をつくして。さまざまのなれこまひなどしけるが。管絃の具足や忘れけむ。しやうがばかりしたりける。さる程に。納豆太。敵は大勢也。縦討死するともはかしくしからじ。要害にかゝらむとて。美濃國豆津庄へぞ下ける。かの所と申は。究竟の城郭也。おぼろげにて落べきやうもなし。それをいかにと中は。青山峨々として。不破の關につゞき。伊勢路をさして遙也。青陽の春くれば。ゆう／＼たる遠山に。霞の衣たちかさね。紫塵。懶藏。こゝやかしこにおひ出る。後にはあしか。洲俣。くる瀬川。三の大河ぞながれたる。東岸西岸柳。遅速不同。南枝北枝の風



冷しく。寄くる白波は。舊苔の洗鬚。川のおもてには亂ぐる。逆もぎをひき。上下には大綱小綱をはへたれば。いかなるはやりおのしら鮠なども。たやすくとをるべきやうもなし。そのうへには。獅子がき。くゐがきをゆひたて。ひだや鳴子を用意する。かゝりければ。武者共既によすると聞えしかば。兵うつたち出たり。龍櫻の八陣をかまへ。當時漢王の七十餘度の戰に。秦王破陣樂を奏するも。いかでかこれには勝るべき。納豆太。その日の装束には。鹽干橋かきたる直垂に。しらいとおどしの大鎧。草摺長にさくときて。梅干の甲の緒をしめ。かぶら藤の弓のまむ中にぎり。礮のかちめをめし寄て。きたはせたる青蕪を。十六までこそ指たりけれ。五きにあまるむぎ大豆に。前後の山形には。陶淵明が友とせし。重陽宴に汲なれし菊酒に。さかづきをとりをへたる所を。みがきつけにし

たりける。金覆輪の鞍をきて。ゆらりと乗てうち出たり。甥の唐替太郎。これも同装束にて。河原毛の馬にぞのつたりける。煎大豆咲太郎。自然のことあらば。腹きらむずるおもひにて。おどりばねするごまめの五さゐなるにぞのつたりける。さるほどに。五聲宮漏明なむとする後。一點の窓灯消なんとする時。大手搦手に寄來り。一度に時をつくり。大音揚て名のりけるは。遠くは音にも聞つらむ。近くは目にもみよかし。極樂淨土にあんなる孔雀鳳凰には。三代の末孫。戀しき人に逢坂にすむ鶏の雅樂助長尾と名乗て。ほろ袋を敲てたゞかけろくとぞ下知しける。城の中にも是をきゝて。納豆太あぶみふんばり。つ立あがつて。大音あげて名のりけるは。神武天皇よりこのかた。七十二代の後胤。深草の天皇に五代の苗裔。畠山のさやまめには。三代の末孫。大豆の御新の嫡子納



豆太郎糸重と名乗て。二羽矢の味噌蕪をうちくはせ。よつびきつめてひやうと射。雅樂助長尾がほろぶくろ。ふと射とをし。次に立たる白鷺壹岐守が細頭。あやうく射かけて。後なる大角豆。畠山にこなりしてこそたちたりけれ。かゝる所に鯛太郎粒實。進出て申けるやうは。たゞ今よせたる物をばたれとかみる。今度謀叛の寂長。遠は音にもきゝつらん。近くはめにもみよかし。大日本南閩提正像二天はさてをきぬ。大通知勝の世と成て。二千餘年ははや過ぬ。自爾以降天神七代にいたるまで。豐葦原の中津國五畿七道をわかたれし。王城より子の方。北陸道越後國大河郡鮎の庄の住人。鮭の大介。鰯長が嫡子鯛太郎粒實。生年積て廿六歳にまかりなる。われとおもはむものは。押ならべてくめやといひて。ゑびらのうはざしより。鯖の尾の狩俣ぬき出し。能引つめて放矢に。芋頭の

大宮司かしら射われ。馬より下に落にけり。芋が子共引しりぞき。いかにせむとぞなげきける。燗大豆咲太郎是をみて。合戦に出る程では。それほど薄手おひて。さのみ歎くかとて。腹の皮をきつてぞ笑ける。芋が子共これをきき。にくき物共のいひ事かな。合戦に出る程にては。死せん事をば歎かねども。見放すべきにあらねば。かやうにあつかふぞかしといひて。御前なる瓶チに酒の残りの有けるをとりて。咲太郎が面にいかけたり。頓面にかゝとして。酢むづかりにぞ成にける。そのうち大宮司世にくるしげなる息をつき。鬚かきなでの給ひけるは。われはたけ黒を出しより。命をば御斬に奉る。かばねをば龍門原上の土にうづみ。名を後代にあげむと存せしなり。しかしりによりて此疵をかふむる。これにてたすかる事はよもあらず。たゞ跡に思ひ置事とては。そゝりこ



の事ばかり也。我いかにもなりなむ後は。すりだうふの權の守をたのむべし。始より今にいたるまで。なさぬ中はよからぬ事なり。かまへて／＼權の守にたのむべしとのたまひければ。嫡子黒ゆでの太郎是をきし。我等も弓箭とる身にて候へば。けふあればとて。明日あるべしとおぼえず候。乍去そゝり子は權の守に申つくべく候と申ければ。大宮司是をきし。すいきのなみだをぞ流されける。御料是を御覽じて。かくぞ詠せさせ給ひける。

このいものはいかはかりはかるらんにたる子ともをみるにつけても

其後は弓箭刀杖の庭に歩みを運といへども。觀念の床に心をすまし。輪廻得脱の不可思議なる所を覺りて。魚鳥元季八月廿八日の寅の一點には。終に空くなりにつけり。城の中には。大宮司射ころされ。むねん申ばかりなし。渡邊黨

の者共。藺豆武者重成。勘角戸三郎をはじめとして。深澤の芹尾の太郎。覆盆子。れいしなんどの究竟の手だれの精兵。荒馬乗の大力。同心にばつと掛出て。さしつめひきつめ射けるほどに。鯛の赤介は。ひれの所を窺ふかに射させて。馬より下へぞ落にける。後見の鯉飾の入道つとより。魚頭を膝にかきのせて。今生におぼしめし置事候は。鯉飾に委承候べし。さだめて北御方。少き人々の御事をぞおぼしめし給ふらむ。それは鯉飾かくて候へば。御心易覺しめせと申ければ。赤介。鬚かきなでての給ひけるは。人の親の心はやみにあらねども。子を思ふ道にはまよふならひぞといふ。誠に理なり。顔花忽盡春三月。命葉易零秋一時。いまさらなげくべきにあらねども。少き者どもの夏思ひつらぬるに。安き心更になし。いかさまよみちの障ともなりぬべし。只今黄泉中有の道に趣



きて。親きも疎なるも。たれか伴ひて行べき。鯀  
飾かしこまつて申けるは。人の親の子をおも  
ふこゝろざしの深き事。蒼海も不及。五岳も跡  
をとめがたくは候へども。親を思ふ子は。まれ  
なるならひなり。されば經にもとかれたり。諸  
佛念衆生。衆生不念佛。父母常念子。子不念父母  
とみえたり。少愛の人々の事おぼしめすも理  
也。夜の鶴の籠の中になき。焼野の雉子の徒に  
身をほろぼす。かゝる禽獸鳥類までも。子をお  
もふはならひなり。されども鯀飾かくて候へ  
ば。少愛の人々の御事は御心易おぼしめせ。た  
ゞ後生を御たすかり候へ。人の身には後生ほ  
どの一大事さらになし。今度三途の故郷を出  
ずば。又いつの時を可期せむ。あひ構てく後  
生を御ねがひ候へと申ければ。赤介さらば後  
生の爲に六道講の式を聴聞せむといひけれ  
ば。鯀飾急ぎ鉢法師を一人請じ。六道講の式を

讀せけり。その式に曰。謹敬て一代のかます。は  
へ。むつ。かれる。ゑゐ。鰯水の大明神に申て言。  
夫何の世々にもあひがたき鯀經にあふ変を得  
たり。無端も此鰯世界をふり捨て。或は入道い  
るかとなり。或は鉢法師となりて。此魚を網地  
獄に落す事なかれ。第一に地獄道といふは。以  
外にくらげなり。たすけよと蛸の手をするめ  
け共。ゑゐといふこのしろもなし。第二に餓鬼  
道といふは。面の赤き変いりゑびのごとし。頭  
の細き事蟹のひげに似たり。腹のふとき事ふ  
ぐのごとし。第三に修羅道といふは。太刀魚を  
以てきられ。さちほこを以てさへれ。如斯苦  
患。未來永劫にもうかびがたし。天の羽衣まれ  
にきて。撫ては必つきぬべしといへども。一た  
び惡趣におもむけば。うかびがたし。かむにし  
くついり。きゝうを。いつゑさい。鰻。海鼠。成  
佛道とゑかうしければ。僅に息ばかりを。すい



り／＼とぞしたまふ。されどもいかなる罪のむくひにや。うしをにといふ物にぞなられる。それにて御料はくはれさせたまひけり。おそろしかりしためしとぞきこえける。さる程に糍太左衛門は。赤鯛の首取て。分取高名は我一人とのゝしつて。御料の御前に高座してぞ座したりける。御新是を御覽じて。糍太左衛門が高座の振廻過分なり。あれへ下れと仰ければ。糍太左衛門かしこまりて申けるは。過去莊嚴劫より深きちぎりをおもへば。花下の半日客。月前一夜友。みなこれ多生廣劫の縁ぞかし。され共善を修ては佛となり。惡を行じては地獄に落。嗔恚をおこして修羅となり。慳貪にしては貧に生る。これみな過去の因果也。今更歎べきにはあらねども。身貧に候へば不及力。御料の御身。したしき物とはたれかしらず候と申ければ。御新是をきこしめし。げにもとやお

ぼしめしけむ。したしくはなどつねに此方へこぬか／＼とて。やがて備後守にぞなされる。爰にあはれなる事ありけり。さしもわかく盛に有しときは。紅梅の少將といひ。花やかにいつくしく。鶏舌を含で紅氣をかねたり。淺紅嬋娟。仙方之雪魄色。濃香芬郁。岐爐之煙讓薰事をわすれて。本結きり遁世して。石山の邊龜山寺といふ所に閑藏。名をば梅法師とぞ申ける。近比荒行をのみ好て。さしも暑き六月にも。晝は日にはされ。夜は定にぞ入にける。其頃御新の御氣色に入。よき酒にひたされて。ほうのかはすこしのびふくらびて有しが。弓矢とる身のならひとて。納豆太が謀叛にくみし。疵をかうぶるのみならず。遂にむなく成にけるこそ何より哀に覺えたれ。さるほどに寄たる武者共の申けるやうは。いつまでかくてあるべきぞ。一合戰とて。ひ鷹の判官代。白鷺壹岐守。



山の内の殿原には、獅子。きりん。猪武者をさきとして三百餘騎。馬の轡をとり。とがりやかたにたてならべ。おめひて懸ければ。ひだやるこにしぶかれて。左右なくはまけざりけり。しばらくありければ。ひだやることも見なれ聞なるゝ程に。しゝがき。くゐがき物ならず。屏のきはまでせめ付たり。城中にも是をみて。あはれよかんなる敵こそ近付たれ。あますな洩すな。生取ねち首にして。高名せよとて。柘榴判官代。びはの大葉の三郎を大將として。究竟の物ども五十騎。木戸をひらきてかけ出る。三百餘騎のものども。中をあけてぞとをしける。そのうちに引つゝゐて。くもで十文字にいれかへく戦。互に命をおします合戦す。究竟の兵二百餘騎。忽にうたれければ。ひだかの判官かなはじとやおもひけむ。陣をひらいてぞ歸られける。かゝりければ。鳥類の物共是を見て。

金鳥大納言。鴨五郎。鶴次郎。雁金のとゝやのかみをはじめとして。五百餘騎。入かへてかゝりけり。されども精進のかたには。一人もうたれざりけり。栗伊賀守はかゝしからじとやおもひけん。むきくゝにぞなりて落にける。御れう是を御覽じて。かくぞ詠せさせ給ひける。

いかくりのむくかたしらす落うせて

いかなる人のひろひ取らん

椎の少將はいづかたともなき谷そこへおちられけるが。獨ごとにかくぞ詠せさせ給ひける。

今こそは身のをき所しらすとも

つみうしなへや後の世の人

かゝりければ。魚類の方には。赤介を初として。宗との物ども三百餘騎うたれければ。あるひはおちうせ。或は降参して残りすくなになる程に。本人鮭の大介いた手負て。波うちぎはに有けるが。今は此事かなはじとや思ひけん。底



しらすといふち馬にのりて。鯛の太郎一人めし具して。河をのぼりにのどくとぞ落れける。爰に近江國蒲生郡豊浦の住人青蔓の三郎常吉といふ物。爰を落るこそ大介なれ。あはれ敵や。をしならべてくまむとて。二尺八寸のくゝ太刀をぬきて。まつこうにさしかざし。爰を落るは大介か。いかゞ敵にいひがひなく總角をみするものかな。かへせや／＼とて。をめていかゝりければ。大介名をや惜みけむ。引返し散々に戦ほどに。痛手は負たり。心ばかりは猛くおもへど。うでの力つき。うけはず所をさし及てぞうちたりける。胸元を後のひれをさして切付たり。鯛太郎も痛手負てんげれば。精進の物どもは。次第にかさなる間。かなはじとや思ひけん。もとより用意の事なれば。鍋の城をぞこしらへける。彼城と申は。究竟の要害也。たやすく人のおとすべきやうもなし。さ

ればこゝへむかふ物は。新豊の折臂翁が。瀧水の戦に。村南村北に哭する聲を聞て。五月万里雲南に征ことを辭するにことならず。されば面をむくる物一人もなし。爰に山城國の住人大原木太郎といふ物。三百餘騎にてをしよせ。下より猛火を放て責ければ。ほむらとなりてもえあがる。譬ば黒繩衆合叫喚大けうくわむ。八大地獄に異ならず。かゝる所に抄子の荒太郎。本より山をだちの男にて。心も甲にはやり物なりけるが。たゞ一人かけ入てひたとくむで。御器の中へどうとおとす。御斬取て引寄。御心みあつて。嗚呼生ても死ても。大介程のものはなかりけりと仰有ける。魚類のものども。爰にてさん／＼になり。大介うせぬるうへは。餘の物共とゞまる事なし。されば合戦のならひ。無勢多勢にはよらざりける。さしたる事なくして。かやうに促し亡びけるこそかへす／＼



もあはれなれ。さてこそ昔より今にいたるまで。青蔓の三郎常吉をば。御祈の近習の物にて。朝夕奉公つかまつりける。有がたかりし哀どもなり。于時魚鳥元季壬申九月三日靜謐畢。

### 柿本氏系圖

むかしならの御門の御時。かきの本の人丸といふいまそかりける。哥の道妙にして。院内へもおりふしごとにまいり。朝夕御遊のまじらひをのみし給ふほどに。御所がきとめさせ給ひける。さるべきいとなみもせで。のりをすりといちにうりければ。世の人。御所がきのこねりとなむ申ける。子どもあまたもちたり。太郎さねなりは。あかしのうらにてまうけたる子なれば。かのうらに住けり。はやうまだきにいと若き比よりびむひげしろくて。京にかへり。父とおなじく。君様御前へもたち出。はかくしきまじはりをゆるされたり。さればあまの子なればとて。つりがきとぞめされける。木ざはしの次郎は。心ざま父よりはをとりけれども。はらからのうちには。いちはやきみやびするものなり。三郎なりけるは。かたちふつゝか



にしてかたくなれば。ひえの山にのぼせ學問させけるが。びんぎのみねに行。みづから八わうじとがうす。その弟あり。しぶ川のなにがしとかや。武士のがり入むこしてけり。心すねきしぶりて。世の人の口あかすべきもあらず。やう／＼としへて後。しうともてあつかひて。様々いましめける。ことが中にうたてしきは。このむこしぶがきを粉にくだき。あぶらをこして。調度つゝむつぎ紙。ちはやぶる紙子をそめむとて。明くれうちたゝき。からきめうくるを。二郎あはれがり。かのしうとにたいめむして。我かたにてよきにいさめ申さん。しか／＼とつぶやき。やがてしぶがきに。青道心をこさせ。生干入道と號してゐてかへり。我がまどのうへ軒の下などに。なはをもつてあら／＼としめゆはせ。ぶらりとさげたり。月日へて後。今はこゝろもなをり。さまも見ぐるしからずとて。二郎ゆるしてけり。生干も道心ふかくおもひと

り。こきすみ染にやつれはて。いと味よくありとみえたり。ひたすらむまれかはりたる心ちして。見る人これをあまつしとて。もてはやしけり。かたちこそいな物なれ。外には胎藏黑色の相をあらはし。かきの衣のゆかりおもへば。頭巾に似たるへたあり。内には金剛の正躰をふくむで。かめどもわれぬさねあり。今はむかしのしうとえにくまず。あたらかはをなむと。くひの八千たび。紙子しぶがみをもめども甲斐なし。此法師がいとこにさはしがき。是も心いぶりなればとて。ふしつけにしたり。こゝろはすこしやさしきかたにもなりつれども。もがさのあときたなければ。法師が父のやうに。うへ様へまいることすくなし。さはしが弟筆がき。をひころがきさねしげ。しなのゝせんじさるがき。ひろ嶋のさい上へもんくしづら。太郎がまゝ子さいしん。是は人丸がまごちやくしなりといふ。その外はみな他こくにあればもらしつ。



人丸けいづ。

これり。後に御所がきとめさる。老後順妙寺に住。出家して日蓮の門に入。ちやうめうじがきと世人たつとぶ。

木こねり

太郎つりがき

心ざまよし。

次郎木ざはし

三郎八王子

心すなほならず。ひえの山に。學問してこゝろあぢはひよし。

四郎生干入道

生干入道。心ねかつゝか者。されども道心の後。よくたこなひ。心あぢよくて。世にもちゆる事はなほなし。十月五日より。眞如堂十夜に參詣の人はなつとぶ。

弟

さはしがき

實名くはしからす。としわかしくして入めつか。

筆がき

心あし。下ざまの人。もてはやす。

さいしん

生つき心れしぶとし。世の人もちひす。

はちや

あにゝまさり。世人もてはやす。心よし。

ころがき

宇治三室邊に住。

さるがき

なりふり尤よし。見所ある軀なれ共。おち生干入道わかき折ふしに能似て。人にくちあかさぬ生つき也。

くしがき



# 後奈良院御撰何曾

三輪のやまもりくる月はかげもなし。

すぎまくら。

あかしの浦には月すまず。

はりまくら。

瀧のひときに夢ぞおどろく。

あいさめ。

ゆきは下よりとけて水のうへそふ。

弓。

春は花夏は卵のはな秋楓冬は氷のしたくじる

水　しきがは。

おとゝひもきのふもけふもこもりゐて月をも

口をもおがまざりけり。御神樂。

おもふ事いはでたゞにややみぬべき我にひと

しき人しなれば。おしき。

ろはにほへと。岩なし。

ろはにほへと。

いろはならへ。

いちご岩なし。

さい。

やぶれ蚊帳。

みづ。

まへなは目あきうしろなは目くら。

みゝず。

ちりはなし。

田。

いもじ。

御おんばくだい。

七日にまはりて人さすむし。

尺八。

うみなかのかへる。

母には二たびあひたれども父には一度もあは

ず。くちびる。



三位の中將は何ゆへうたれ給ふぞ。

なら火鉢。

四季のさきに鬼あり。

花あふぎ。

花の山ははなの木は、その森はは、その木。

山もり。

梅の木を水にたてかへよ。海。

鷹心ありて鳥を取。應。

嵐は山を去て軒のへんにあり。

風車。

竹生嶋には山鳥もなし。

笙。

道風がみちのく紙に山といふ字をかく。

嵐。

みやづかひかひこそなければ身を捨てしはさか

さまに引は何ども。八はし。

情有人の娘に心かけゆふぐれことにこひぞわ

づらふ。姫小松。

もろこしにたのむ社のあればこそまいらぬま

でも身をばきよむれ。唐紙せうじ。

秋の田の露おもげなるけしきかな。

螢。

うはきえしたる雪ぞたえせぬ。

きつね。

待よひのうたゝね。車やどり。

上を見れば下にあり下をみれば上にあり母の

はらをとをりて子のかたにあり。

一

ほうしやうが刀にひをながくかいたる。

ほうづき。

しちくの中の鶯は尾ばかりぞ見えける。

はちす。

らうそくのさきたびの中にあり。

たらひ。

かみはかみに有しもはしみに有。

ト



櫻所々にひらけたり。

花むらさき。

人を恨て昔をかたる。

いれもとゆひ。

ねりいとのみむすび。

とくだいじ。

ないしのうへのきぬどのゝ上うへがさね。

しとゝ。

きとうちかへすさいのめ九ツ。

ときぐし。

喜撰が哥はせんもなく哥もなし秋の月の曉の

雲にあへるがごとし。

木まくら。

火をともし候ぞ御入候へ。

あかり明せう障子じ。

けふは朔日あすは晦日。

さかづき。

十里の道をさけ歸る。

にぎり酒。

やわたりのあした。

すみ染のけさ。

鈴虫。

ほうりほうす。

なげし。

戀の評定。

あふぎ。

因果歴然。

むくいぬ。

門を兩からたつる。

あはせと。

三里半。

よりかゝり。

ゆふまどひ。

あかね。

なぞ立十三。

ときぐし。

ふるてんぐ。

こま。

千じほ。

手おひ。

こよみ。

火かき。

あま雲。

日がくし。

かはかせ。

みづふぎ。

竹の中の雨。

やぶさめ。

いづみに水なくしてりうかへる。

白うり。

はちまき。

かし山からげ。

野中の雪。

柚の木。



わごせにそふも此春ばかり。

なつめ屬の木。

ひよく。

よびかへせく。  
御まへにさぶらふ。

五葉松。

ゆるりの追風。

はいたて。

柚は皮ばかり。

すみどり炭取。

火ばちの下にすみがしら。一はらす。

おくびやう武者の軍評定。投ひき木。

うへもなき思を佛とき給ふ。

心經。

けふのかり場は犬もなし。尺たかばかり。

おい男袖をひろげて立まはる。

せうまう焼亡。

ほうづき。

まさかり鉋。

十三になれどもひだるい。

くしがき申袖。

海の道十里にたらず。

蛤。

何も漆のあるとき。

ぬりおけ。

なせにゑひた。

種しろたけ。

かきの中の篠。

かさゝぎ。

深山路やみ山がくれのうす紅葉もみちはちり

て跡かたもなし。

ふくろうのくろうはなくて耳づくの耳になき

ちやうす。

こそおかしかりけれ。

ふづくゑ文。

宇佐も宮熊野もおなじ神なれば伊勢住よしも

おなじかみん。

うぐいす雲。

こしのうちの神べい。

かきうちは。

にくさにさりぬさりながらわすれぬ。

軒のしのぶ草。

よせてのひがごと。

じやうり。

ふづくゑの上の源氏の丸の巻。

ふすま敷。

鹿をさして言もならひ。

むまひゆ馬。

夢かへりてよひ過ぬ。

めゆひ川結。



さしぬきのすそそんじたるかへり花。

さしなは。

うしやたゞ足もやすめず古郷にかへりては行

山路なりけり。

また木天ゝび。

廿人木にのぼる。

茶。

きんかんのくひやう。

にし。

やぶれせんざい。

なし壺。

はちの中のかいそう。

しめし。

露霜をきて萩のはぞ散。

月。

風呂のうちの連歌。

ふくろ。

しほくとしほくくとしほくくとしほた

れまはる宿の夕がほ。

八鹽ぬのひさご。

いひそめし日より心をつくす哉いつあひそめ

てうちはとくべき。

めづくし。

ひとつくうしをとくうのき見ん。

ひつじ。

かりはひがごとはなをかへすゆへ。

かなは。

ひつじの角なきは仙人の乗物。

ひしづる。

妻戸のまより歸る。

松。

雪のうちに参りたり。

ゆまき。

かどの中の神なり。

かういと。

みたらしのみそぎ。

たらし。

京中にてぞ夜あけぬ。

五條げさ。

春の農人。

たすき。

田舎人のころ。

なまり。

脊の後は駒のすみか。

はらまき。

魚取鳥の物わすれ。

うどん。

ゑのころのゆあらひ。

いぬたで。

五論の下の化物。

はかま。

それたへとておつとる。

こうばい。

やどのけいせい。

一こつてう。



笹かきわけて鹿やふすらん。

さがさ。傘

楊枝のさきに血付たり。

丁子。

山がらが山をはなれてこぞとし。

からにしき。

卅六町さきにふくろう鳴てしとみやりどたまらず。

一りうほうさいやれ

八十一のきさきさがさね。

こしき。

御僧の寮に物わすれしたり。

あんどん。行燈

夏のむし。

ひとり。

ぬれふみ。

ほしみる。干海松

夏衣冬降にけり。

かたびら。

かねの柱に綱つけてつなをばひかで柱をぞ引

針。

はらの子のころ。

はしら。柱

鶴。

狐のともし火。

たづな。手綱

にがみくゆがみく。

かけおひ。  
はゝ木。

沖の中のつり舟浦によする。

あまかへる。鞋

いそがしげにもあゆまぬものか。

ねりぬき。腰負

ちやばなゝなひきそ。

薄折敷。紫  
しをん。紫

一字千金。

雪うち。

とをりざまに一こぶし。

雪うち。

ちごのかみなきはほうしにはおとり田舎にお

こいし。

け。

たまづさの中はことば。

戀には心も言もなし。

ひとまる。人丸



女房。

ふみ。

あまがさき。  
巾子紙  
こしがみ。

きりかさねたるなますなま鳥きりぐすかく

せ。

しらす。  
白砂

くへばおほしくはねばすくなし。

鳥の巢。

たちばな。

いぬざくら。

四々十六。

やつはち。

道風のゝち佐理手跡にはうへもなし。

たうせき。  
盜跡

西行はさととりて後かみをそる。

きやう。  
輕

紅の糸くさりて虫と成。

虹。

よしともはよしなき父のくびをとり弓とりな

がら弓を捨ける。

友千どり。

ひきての中のちり。

ひちりき。  
單襷

一谷の合戦に一の名を舉しは九郎判官義經熊

谷次郎直實これらは皆かへしあはせし故。

くぐい。  
總

四季のはじめ月のおはり。

はなあふぎ。  
花扇

さかづきをねざめにさゝるゝはよしなきとと

けゆへ。

きつね。  
狐

紫の上かくれし砌に源氏の跡をとゞめしはい

かに。

紙。

盃ねがはくかはくことなかれ。

きつね。

雨の中のねぶり二時過ぬ。

あぶりめ。

さびかへりたる劔のさき。

ひさげ。  
提子

夕良の上うせて後右近がこんといはぬもこと

はり。

かほうり。

源氏のはじめさ衣のはじめ人に申さん。

伊勢物語。

あかしのうへ桐つぼの更衣にはをと。

すまい。



むさしのははでもなし。むさし。

山を飛あらしに虫ははて鳥来る。

鳳。

車のうへにこしはをとれり。

櫓。

谷のとら。

たゝうがみ。

蟹たかをはさむ。

かたかに。

まろきもの。

すみとり。

ひかる君うつらふかたともろともにうせにし

君の末をしぞ思ふ。すまぬ。

長老の二たび寺を出給ふ。ついがさね。

谷の水柱はなかばとけたり。

たゝら。

春日の社。

ならがみ。

ともし火きえなんとす。

あぶらつき。

みづとりやめされよ。

かもうり。

かたえかるゝ林は土のあかはり若みどりだに

なし。かきつばた。

さけのさかな。けさ。

裕はふくろびはんび半やぶれぬ。

あはび

宇治ばしの上にて伊豆守殿はうたれぬ頼政は

刀をとられぬ。うづまさ。

はたちのこさか立ながら生るゝ。

薩。

山がらが山をはなれてやつしてはもなきはぎ

の上にくそぬれ。からにしき。

もろこしにとしへて歸るをまつ。

からびさしの車。

六は過たるけふの朝かな。たつがしら。

ちやうだい。ふすま。

さるくりまはす。くすり。

宿の柳に花のころなど花のなき。

ところ。



林の下に鹿ををうへしてぞなく。

麓松がね。

とし立歸るとしのはじめ。 　しとゝ。

女房のかみそぎたるはふきにはうへもなし。

ほうき。

古たゝみ。

いくち。

永正十三季正月



群書類從卷第五百五

雜部六十

公武大牀略記

二禁裏

帝王の御事は、一天の主。御諱なしといへども。天子。一人。聖主。聖王。金輪。大宅。大内。禁裏。今上。主上。當今。階下。陛下。震儀。鳳闕。朝廷など申奉る。皆是君の御事也。公武僧侶ともに詣侍るを參内と號す。君の出御なるを遠近ともに行幸といふ。又和哥にすべらぎと申は。御門の御惣名にて侍れば。皇王の二字同訓。何れをも書べし。位山。大内山。禁庭。百敷。大宮。九重。雲井なども。皆禁闕の御事也。玉牀。龍顏。宸襟。宸慮。宸旨等もこれ同じ。君の

御をば詔書。勅書。勅定。勅裁。鳳詔。綸旨。綸言。絲綸。綸命。宣旨。宣命。宣下。聖斷などと申也。和語にみことのりといへるは。詔勅の二字。何をいふべし。又もの申上るを奏聞と號し。被尋下を勅問と申。御返事をば勅答と申也。又勅許。勅封。勅願。勅判。勅點のたぐひ。何も帝王の御事也。御手跡をば勅筆。宸筆。宸翰と申也。

當今の御諱彥仁と申奉るは。崇光院興仁の曾孫。榮仁親王。法名通智の御孫貞成親王。法諱道欽後に太上法皇の尊號ましめて。後崇光院と申奉る宮の御子にて。伏見殿の御所に生たせ給ひ



けるに。さま／＼の御奇瑞どもおはしまして。  
 辱も人王の御始神武天皇より。今一百五世の  
 御後に當らせ給ふ。去ぬる正長元年戊申七月  
 廿日。後小松院禪定法王幹仁。御繼躰稱光院實  
 仁。と申奉し御門。崩御なりぬる間。君御年十歳  
 と申に小松法皇御養子の儀にて御讓位あり。  
 翌年己酉卽位ありて。永享と改元せらる。應而  
 永享二年庚戌年。二條攝政後福照院關白太政  
 大臣持基公良佐として御禊大嘗會行はる。普  
 廣院贈大相國義教公法名道惠。右近衛の大將にて。  
 七ヶ日の間官廳御節所に御伺候あり。攝政殿  
 同直廬におはしまして。日夜御遊宴ありき。同  
 五年癸丑正月三日。主上御元服。其時も二條太  
 政大臣持基公。御攝錄にて申沙汰せらる。かく  
 て今年長祿二年戊寅に至迄。御治世既三十年  
 にあまれり。目出度御ためし成べし。

一仙院。

天子御位をすべらせ給ひ。太上天皇の尊號ま  
 し／＼て。院の御所に渡らせ玉ふを上皇。仙洞  
 など申也。又和歌の諺に貌姑射山ハコト。綠洞ハコトなど申  
 奉るは院の御事也。公武僧俗ともに詣侍るを  
 院參と號す。御出なるを御幸と申奉る。政務に  
 付ての勅定をば院宣と申侍る也。

一后宮。

后宮と申奉るは當今のきさきの御事也。后妃  
 の位に備はり給ふをば立后と申。又女御。更衣  
 の御入内などと申侍りて。上代は大内に后宮  
 相竝。万機の政をたすけ參らせ給ひけるに。き  
 さいの宮の御方にも百官を召仕はせ給ひけ  
 るとなん。中務省。中宮職など申は。専后宮方の  
 官職也。其後は中宮と申御稱號にてまし／＼  
 けるなれど。當時は其御號さへおはしませず。  
 たゞ御息所とのみ申侍る也。君の帝位すべら  
 せ給ひて後。或は女院或は國母など申參らせ



て。御院號かうぶらせ給ひし御事にぞ侍る。  
一親王。

當今の皇太子をば。春宮と申まいらせ。今度御受禪あるべき御ために儲君と申。まうけの君の御事也。其外末々の若宮達。或は主上の御連枝。或は御室以下の諸門跡御相續。宮々のわたらせ給ふ御所御所を。僧俗とも親王の宣旨を蒙らせ給ふをば竹園と申奉る。今度帝位に備らせ給ふべき太子にも。かねて親王宣下と申御事あり。御室并諸門跡。法親王の號。姫宮には内親王宣下侍る也。

一執柄家。近衛殿。鷹司殿。一條殿。九條殿。

凡執柄御家門をば攝家。執政。殿下など申侍て。凡種に比類せざる御事也。百王の御政務輔佐のために。天地開闢の初。天照太神。天兒屋根命。御兄弟君臣の御約束たり。天兒屋根とは。今の春日。藤氏の祖神是也。往古の御誓約

今にくちせさせ給はずして。一天の君万乗の主。に御師範として。攝政關白の御職を受繼しめ給ふ。されば禁裏にしても。偏に殿とよび。一の人とも號し奉りて。百司千官を成敗せらる。縦當今の御連枝たりといへども。執柄の公達に對しては。各等輩の御禮節なり。

近衛殿は。藤原の正統たり。故に代々關白の詔を蒙らせ給ふ。其關白たる人。氏の長者職に居せられ。別段の御崇敬是あつし。曩祖大織冠鎌足大臣より十八世に至て。六條攝政太政大臣基實公と申侍りしより。當近衛左府房嗣公迄十二代。又春日大明神より大織冠に至まで。其間の曆數。或は千年或は万年。わだつ海の底や龍宮などにて。星霜を送り給て。子々孫々相續せさせ給ふ事廿一世也。然ば祖神より當代迄四十九世歟。又近衛の家門を陽明と稱し侍事。大内陽明門の中心にあたるによりて也。



鷹司殿の曩祖稱念院の攝政關白太政大臣兼平公と申は。六條攝政基實公の御孫猪隈攝政關白太政大臣家實公の息也。兼平より今の左府房平公迄は八代也。子細は近衛殿と等し。又攝政と申關白と申て同御當職を申替る事は。君の十五の御年。御元服以前幼主御童躰の程は。年中行事を執柄より執行はるゝによりて。攝政と是を稱し。御首服の後は關白と申侍也。攝政をば攝録と申。關白の時は博陸殿下と申也。

九條殿の曩祖は。光明峯寺禪定殿下道家公也。世俗に峯殿と申侍りし。御息に洞院攝政關白教實公より今大納言政忠卿に至迄八代。執柄の中に近衛殿に次奉ては。此家門峯殿の長子にうけつがせ給てより家督の様にならべて。世のおぼえもてなしも侍にや。

二條殿の曩祖。同峯殿の息福光園の關白左大

臣良實公より。當殿太政大臣持通公に至迄九代。此家門の下に月輪。法性寺。坊門。木幡。江邊などいひて。或は卿相。或は雲客にて。朝家に拜趨あり。

一條殿の曩祖。同峯殿の息園明寺の攝政關白左大臣實經公より。前攝政關白太政大臣准三宮兼良公に至まで七世也。

以上五ヶ所の家門を執柄家と稱す。仍鷹司家を近衛家に接稱して。攝家の御次第を近九二一と世俗の名目に申習せり。

二三家。閑院。中院。花山。

凡執柄家に次で三家と云。凡家とも稱し侍事。公家中にをいて。取分規模の流也。殊に三條轉法輪と稱す。の家門は閑院の家督たり。彼曩祖閑院

太政大臣公季公をば仁義公と稱す。九條右丞相師輔公の御息也。仁義公と稱せしより今の三條右府實量公迄十八世也。又仁義公より八



代に至て。左大臣實房公の息公房兄弟あり。兄

公房公家督の號を繼しめ。弟公氏庶流正親町

三條の先人として。今内大臣實雅公。舍弟亞相

公綱卿に至る。如此庶子惣領あひわかつて。

共に當代まで十世なり。

西園寺。閑院家也。家の曩祖公實卿の息通季卿より

今の公名に至るまで十四代也。持明院。京極。

橋本など皆此一流也。菊亭の家をば今出川と

號す。是も通季卿より今教季に至るまで十四代

也。洞院の家。是も通季卿より今内府實熙公ま

で十二代也。四辻の家をば數内と號す。是も通

季卿より今季俊まで十二代。正親町をば裏築辻

地と號す。これ又通季卿より今持季卿迄十三

世。其外清水谷。小倉。阿野。滋野井。一條等も。

いづれも通季卿の苗裔也。德大寺家の曩祖公

實卿息家能公より今左大將公有迄十二世。執

柄の後胤として閑院の流大概此家々也。何も

古今の朝弊綿々たり。

中院家村上天皇の皇子中務卿具平親王御子

師房公より源姓を給しに。今愛繼で。今久我通

尙卿に至るまで十七代。此門葉に堀川。土御門。

三條坊門。中院。千種。六條。愛宕。唐橋等也。又

北畠と稱して一流氏族あり。伊勢國司此族也。

彼先祖親房公依。文才之譽。准三后。凡家の准

后是始也。但太政大臣清盛公任彼官。其爲各

別之花族。故歟。具に注するに及ばず。亦中古

に歌道の名匠たりし通具。通光などは家の先

人也。

花山院家曩祖京極攝政太政大臣師實公の御

息左大臣家忠公より今時忠に至るまで十四

代也。此門葉に大炊御門家は。攝政師實公の三

男經實公を曩祖として。内府信宗公まで十三

代也。亦中山の始は内大臣忠親公也。忠親公よ

り今亞相親通卿に至るまで十代。彼忠親公は



ならびなき廣才博覽の英雄にて。當時朝家の

公事も大半此家の記録を本とせらるゝとか

や。飛鳥井の一流も花山の後裔也。參議雅經卿

を曩祖として。其子敎定。雅有。雅孝。家雅。雅

緣。雅世。今の黃門雅親迄八世也。專和哥蹴鞠

二道を家業とす。難波の家も雅經の連枝刑部

卿宗長の苗裔宗長より今宗相に至るまで八

代。是も蹴鞠の譜代なり。如此三家の家督を

凡家とも三家とも號し侍る也。此三胤の正嫡

たるにをいては。官加階の昇進。弱年なれども

傍親に超越して前途に滯らず。太政大臣則關

の官にものぼり侍る。頗拔群の佳名也。されば

大臣家を清花と號す。和哥にかけなびく台の

位といひ。三台。槐門。蓮府。丞相。僕射。鼎臣な

ど稱して。左右内大臣の三級を三脚の鼎にた

とへ侍る。故に君も不次の賞を行はれ。臣も又

扈從の媚をなすとは清花の家也。

### 一武家。

征夷大將軍源義政。御先祖は清和天皇の御孫

經基の王をば六孫王と申き。彼經基の王。天德

五年六月十五日。源朝臣姓を給はせ給ひき。其

御子攝津守滿中をば多田の滿中と號。其子左

馬頭賴信。其子伊豫守賴義。其子伊與守義家。を

ば八幡太郎義家と號す。次男甲斐守義綱は賀

茂次郎と稱し。三男義光をば新羅三郎と號し

て各子孫あり。當代弓馬の道の御師範に參り

侍る小笠原。其外武田。佐竹などは皆新羅三郎

の末葉也。然るに義家の子に義國。義康。義兼。

義氏。泰氏。賴氏。家時。貞氏まで九代を経て。

貞氏の息足利治部大輔尊氏等持院贈左大臣

殿の御時。御代をしろしめされ。其御次征夷大

將軍義詮をば寶篋院贈左大臣殿と申也。其御

次太政大臣准三后義滿公。法名天山道義。鹿園院殿と

申奉りき。其御次内大臣義持公。法名道詮。勝定院



殿贈大相國と申奉る。其御次征夷大將軍義量と申奉りしは。御世を早せさせ給ふて。内府に先立まいらせ給。長徳院殿と申侍る也。かくて去ぬる應永卅五年戊申正月十八日。義持將軍御薨逝之間。青蓮院門跡にてまし／＼けるが御還俗。普光院贈大相國義教公。法名善心道惠御猶子の儀にて御相續有て。年號を正長と改元せらる。又普光院殿の若君征夷大將軍義勝と申奉るは。御年十歳と申侍りし嘉吉三年癸亥七月廿一日にかくれさせ給ひて。慶雲院殿と申奉る。公方様御一腹の兄にて渡らせ給間。則御世を繼せおはします。しかれば等持院殿より今七代に渡らせ給。又關東の主君に等持院殿の御息左兵衛督基氏。瑞泉寺殿と申を下し參らせて。左兵衛督持氏長春院殿まで五世也。公方様の御先祖左馬頭義兼の御息遠江守義純と申は。畠山の曩祖也。義純。泰國。時國。家國。義

深。基國。長禪寺殿滿家。眞規寺殿持國。光孝寺殿義勝迄九代也。義純舍弟近江守義胤は。桃井の始なり。足利左馬助義繼と申は。吉良の始なり。上總介長氏は。今川の始。尾張守家氏は。斯波。石橋のはじめ。次郎義顯は。澁川の始。四郎頼氏は。石塔の始。足利陸奥守泰氏の息宮内卿律師公深は。一色の始也。公深。範氏。直氏。詮範。滿範。義貫。義直迄七世也。律師義弁は。上野の始。法印賢實は。小俣の始也。已上兄弟三人は。出家なり。六郎基氏は。加子の始。以上七人は。左衛門佐泰氏の息也。亦新田。山名。里見等の先祖に義重と申は。足利義兼の御伯父也。又仁木。細川の先祖に足利矢田の判官代義清と申は。義兼の舍弟也。又新田惣領大館次郎家氏と申は。新田大炊助義兼の曾孫也。家氏より今大館兵庫頭教氏迄六代歟。此外大井田。大嶋。竹林。牛澤。鳥山。堀口。一井。得川。世良田。江田。荒



川。田中。戸賀嶋。岩松。吉見等。何も御當家の累葉也。

一名家

諸家の中に先祖より近衛司を経て少將中將より昇進し。武官を兼。劔笏を帶するをば。羽林次將といひて。叙爵の始に侍從に任ず。又文筆を面として儒道を學び。弁官を経て万事を奉行するを名家と稱して。叙爵の始に五位に叙して大夫と號す。然ば左右の弁に各大中少あり。其階級を経て公卿に至り侍るにも。卿相の始宰相迄は左右の大弁を兼する事。古今の例也。弁官をば蘭臺。蘭省。夕郎など稱す。羽林にも宰相に中將を兼て任ずる事。其家の先蹤。其時の花族に侍れば。多分三家の條流たる人のなにかしの宰相中將と稱し侍る也。宰相をば參議。相公。八座など申也。勸修寺家の曩祖に良門。高藤といひ侍りしより今の教秀卿迄

廿二代。此門葉に吉田。万里小路。甘露寺。葉室。清閑寺。小川。坊城。中御門等也。

日野家の曩祖眞夏演雄より當日野裏松勝光卿迄十八世也。裏松の家は爲。庶子。宗領の家は繼絶畢。此一門にも烏丸大納言資任卿。勘解由小路。廣橋。柳原。武者小路。法性寺等也。

四條家の始は。房前公の息左大臣魚名公。中古は中御門中納言家成卿。其後隆房。隆親等也。魚名公より今鷲尾中將隆賴朝臣迄廿二代也。

此門葉にも油小路大納言隆夏。按察大納言隆盛。北畠と號す。西大路中將隆富。西川前宰相等也。山

科の始に大納言實教といひ侍るは。家成卿の息也。實教より今九世なり。飛驒の國司小嶋。姊小路等も此流也。

冷泉家。二條と號す。先祖長家卿の曾孫俊成卿。其子

權中納言定家卿。次に爲家。次に爲相也。此時より冷泉家と號す。次に爲秀。爲尹。爲之。今の



爲富卿也。爲家の長子爲氏。爲世。爲冬。爲重。爲右に至て斷絶し畢。累代和歌の名匠たるによりて。世舉知れる所也。

世尊寺の曩祖侍從大納言行成卿。日本無双の右筆たる條。世以て稱美し侍る。本朝三跡といへるは。佐理。行成。道風と云傳侍る也。行成卿より今の參議伊忠迄十五世也。綾小路。宇多源氏此親昵也。これは郢曲を家業とす。庭田の流も同じ。

中御門。號三松木一先祖右大臣賴宗公より大納言宗繼まで十五世なり。高倉の先祖參議清經より今藤中納言長豐迄廿世なり。此外水無瀬。楊梅。栗田口。大宮。玉櫛。五辻などいふて。藤氏譜代の名家おほしといへども。世澆季に下り果て。名のみ有て其實なし。

一菅家の事。忝も聖廟の御末として。稽古鑽仰を專とす。此祖神昔の聖代に風月の主として權

化の御作文ども有しに。今猶儒業を墮さず。紀典文章博士として朝の侍讀たり。此門葉數輩ありといへども。坊城の菅中納言益長卿家督たり。庶流には五條爲清。菅二位長政卿。西坊城壬生坊城繼長。號高北野長者在直等也。

一諸道。外記。官務。典藥。陰陽。

諸道の中に大少外記史は。清原。中原兩氏。累代の家業也。當代清三位業忠。法名常忠は。昔の清

大外記賴業。法名登順が苗裔也。中家には師郷。法名覺順

師世。師勝。師藤。師有等也。何も經典の儒者を兼じて。明法。明經道博士に任じて天下の公事を記録し。四書五經等の讀書に參仕す。其外公武の御沙汰。賞罰の次第。御尋に付て。舊記を引勘侍て注進申重職也。

官長者職の事。小槻氏累代相續也。晨照宿禰。同晴富。五條の坊門壬生に居住す。是は前官務也。當官務長興宿禰は。綾小路大宮に私宅あ



り。近來は土御門大宮也。日本國中神社佛寺の草創緣起及五畿七道の莊園田畠等ニ付て御尋の時。古今の法令文書を引勘侍て申上る重役也。仍官外記を兩局と號す。

醫家は和氣。丹波兩氏に傳之。朝恩に浴し家業を嗜侍る也。典藥頭。施藥院使等の司をなし置れ。月次日次の御藥を調進す。

陰陽は賀茂。安倍の兩氏重代也。何も朝家の御器として。御身固。反問など申事に拜趨をいたす也。曆博士。筭博士。漏刻博士。天文道博士。陰陽頭。諸陵頭などの司あり。是をも醫陰兩局と號す。然に賀茂の在貞。同在盛縣主は先祖より曆道を表として。每歲御曆を調進申。安氏。在季は晴明が苗裔。安倍泰親が後胤也。當氏には天文道を本として。天變地妖ごときの怪異を占ひ申て勘文を奉る。但是は凡の御定にて。時に随ひぬれば。いづれに仰付らるも上意に

よる也。

神祇伯家并伊勢の祭主。同造宮使。或吉田。平野。大原野等の神主。其外賀茂。下かもは鴨なり。八幡の社務。をよび日吉。春日等の神官等には。神宮の社例并臨時祭禮等の儀を御尋あり。又太神宮兩季の御祭。春日祭の勅使。日吉の祭禮。石清水放生大會に上卿。參議。辨。次將。御導師以下參向の儀は。時の貫首奉行の弁藏人等勅定を奉て。兼日御教書を成侍る也。

長祿二年三月四日

空藏主

年齡六十四



## 世諺問答

花のみやこのかたはら。よもぎが門のうちに。  
世にかすまへられぬひとりのおきなありけり。  
おほからねども。にるを友とせるたぐひもありけらし。  
春の日のつれぐなぐさみに。よも山の事どもかたり侍るついでに。さても世のことわざとして。としのうちにさまぐの事ども。申つたへ侍るは。いづれも根源たしかなる事にや。いとおぼつかなきよしとひ侍りしかば。おきなの中やう。そのことに侍り。とはすがたりもせまほしくおもひたまふれど。そのことゝなければ。いたづらにこゝろのうちにくらし侍るに。おもひよりとひ給こそさいはひなれ。おほかたはいたづらなるたはぶれ事のやうなれど。をのづからもろこしより。つたはれることもあり。また我國にはじまれる

事も侍り。おほくはわざはいをはらふまじなひ事どもに侍るべし。老のひがおぼえのみぞあるべけれども。いち／＼にとひ給ふならば。こたへ侍らむと申侍りしをよろこびながら。正月朔日よりしはすのつごもりまでの事ども。おきなのことたへ侍りしを。ひとつももらさずかきあつめて。世諺問答となづけ侍るなるべし。

一正月をむ月といへる事

一門松の事

一はごいたの事

一木丁の玉うつ事

一屠蘇白散の事

一餅かゞみすはる事

一三日にたうやくつくる事

一わかみづの事

一七日のかゆの夏



一七日に白馬を見事

一十五日のかゆの事

一さざちやうの事

一萬歳樂の事

一そみん將來の事

一正月はま弓の夏

一正月卯杖の事

一はつ馬の事

一二月十五日に涅槃像かくる事

一三月三日に桃の花の事

一同えもぎの餅の事

一同鷄合の事

一卯月八日に佛に湯あびせ奉る事

一加茂の祭にあふひかくる事

一ちまきの事

一同日藥玉とてかくる事

一同わらはべの小弓を持いんちの事

一五月九日の今宮まつりの事

一六月に嘉定日の事

一朔日にこほりくふ事

一七日に祇園會の事

一みな月の事

一七月七日にさくへいを用事

一七夕に物たむくる事

一七夕に花をたてる事

一十五日に生靈まつる事

一同すまふの事

一八月に御靈まつりの事

一朔日にたのむといふ祝事

一同日天中節といふて札を柱に立る事

一八月に放生會の事

一九月九日に菊の酒を吞事

一加茂籠とて虫入る事

一十月を神無月といへる事



一同亥の子の事

二亥子の日御げんてう事

一同とうじと申事

二十一月御火焼事

二十二月に節分のまめうつ事

一同はちたゝきの事

一同節分にせうの餅の事

一同おけらをたゝく事

### 正月

問て云。

まづ正月をむ月と申侍るは。いかなるいはれぞや。

答。正月は。としの始の祝事をして。しる人なるはたがひに行かよひ。いよくしたしみむつぶるわざをし侍るによりて。この月をむつび月となづけ侍り。そのこと葉を略して。む月と

いふとぞきゝをよびし。

問て云。

一日よりしづが家ゐに門の松とてたて侍るは。いつごろよりはじまれる事ぞや。

答。いつごろとはたしかに申がたし。門の松たつる事は。むかしよりありきたれる事なるべし。しづが家ゐは大かた封戸なるによつて民戸と申侍れど。むかしは一町のうちを五丈づつにわりて門をたてしかば。八の門ありしなり。その中に賤が家ゐをつくり侍れば。門なかるべきにあらず。その門の前に松竹を立侍り。松は千とせをちぎり。竹はよろづ代をちぎる草木なれば。としのはじめの祝事にたて侍るべし。またしだゆづり葉は。深山にありて。雪霜にもしほまぬ物なれば。しめ縄にかざりて。同じくひき侍るにや。しめ縄といふ物は。左縄によりて。縄のはしをそろへぬ物也。左は清浄な



るいはれ也。端を揃へぬは。すなをなる心也。さればあまてるおほん神の天の岩戸を出給ひし時。しりくめ繩とてひかれたるは。今のしめ繩也。淨不淨をわかつによりて。神事の時必ひく事に侍り。賤が家ゐにひく事も。正月の神をいはひまつる心だてなるべし。

問て云。

おさなきわらはのこさのこといひてつき侍るは。いかなることぞや。

答。これはおさなきものゝ蚊にくはれぬまじなひ事なり。秋のはじめに蜻蛉といふむし出ては。蚊をとりにくふ物なり。こさのこといふは。木連子などをとんばうがしらにして。はねをつけたり。これをいたにてつきあぐれば。おつる時とんばうがへりのやうなり。さて蚊をおそれしめんために。こさのことてつき侍るなり。

問て云。

木丁の玉うつ事は。なに事にかたとへるぞや。

答。もろこしのむかし。黄帝といふ御門ましましき。炎帝の子孫をほろぼして位につき給へり。その炎帝の臣に蚩尤といひて惡人あり。涿鹿といふ所にて黄帝のためにうたれしゆへに。その惡靈。疫病といふ神になりて。國土の人民をほろぼせり。これによりて末の代に疫病をおそれしめんために。蚩尤が身分をづたくにわかちて。ひとつものこさじのはかり事に。正月には彼まなこの中の人見をぬきて。木丁の玉にしてうつ事にせり。かのまなこのふくりんは。三重にありしゆへに。弓いる時のまにに三重に繪をかきて。中の人見をばのぞきたり。しかのみならず。正月のもちゐは。かの肉なり。烏頭藻はひげ。大根は齒となづけてくふことに



せり。此外五節供といふ事も。をの／＼かたどる所ありて。いかにも疫病の神をこらしめて。人をやましめぬまじなひ事にし侍るとぞ聞えよび侍りし。

問て云。

元三の日は。屠蘇白散の酒を吞といふ事ありや。屠蘇とはいかなるいはれになづけ侍るぞや。

此ことは醫心方。金谷園記などいふ書にしるせり。屠蘇は草庵の名なり。むかし草のいほりにすみける人の此葉をその里の人のかたへおくりて。大晦日に井の中にひたして。元日にとりいだして。酒樽にひたしてこれをのまば。其季疫氣におかさるまじきといへり。一人これをのめば一家に病なし。一家にのめば一里に病なしといふ功能侍り。また屠蘇をまづ小兒にのましめよといへり。小兒はとしをうるも

の也。老者は年をうしなふといふゆへなり。されば東坡が詩にも。不辭最後飲屠蘇とつくれり。としよりての事にいへり。是によりて禁中にての御藥にも。藥子となづけて。童女に御生氣の色の衣をさせられて。御前へめされて。とその酒を吞せられて後に供御まいらすことにせり。白散とは五色の藥をつきふるひて。二こんにこれを供す。功能は大略とそれごとし。これをば方寸のさじにてすくひて酒にいろ。また度瘡散といふは。九種の藥をつきふるひて。三獻にこれを供す。山嵐瘴氣をのぞく藥術也。風おこりの物をのぞく藥なり。これをば一錢の茶匙にてすくひて。酒にいれて可吞よし見えたり。

問て云。

同日齒固といひて。もちゐかゞみにむかふことはいかなることぞや。



答。人は齒をもつて命とするがゆへに。齒といふ文字をば。よはひともよむなり。齒がためは。よはひをかたむるこゝろなり。もちゐるは。近江國の火切のもちゐをもちふべき事なり。さて正月のかどみにしてむかふ時は。古今集に入たる

あふみのや鏡の山をたてたれば

かねてそみゆる君か千年は

といふ哥を誦するなり。このうたは。延喜の御門の御時。近江の國より大嘗會の御べたてまつりし時。大伴の黒主がよめる哥なり。源氏初音の巻にも。此歌の詞をひきてかける也。または餅は蚩尤が肉となづけてくふ説も侍り。問て云。

三日にたうやくとて。つくる事侍るにや。

答。たうやくは膏藥なり。かうやくといふは。きゝわろきによりて。たうやくといひかへたり。

延喜式には。千瘡万病膏といへり。もろくのかさ。よろづの病をなをすくのふあるにや。さて三日には。これをつけ給なり。後醍醐院の御次第には。たうやくをば。御ひたいと御耳のうらにつけ給よしのせられ侍り。右の第四の指をかどめてつくるなり。是は藥師の印相にて侍るとかや。

問て云。

立春の日若水とてのむ事侍るにや。

答。おほやけにふるとしの十二月の土用已前に。主水司御生氣の方の井を封じて。人にくませずして。立春の日の早旦に一返しとて土瓶に入て。女官につけてこれをたてまつれば。あさがれいの御座にて。御生氣の方へむかはしめ給ひて。これをきこしめすなり。わたくしにも此日は井花水とて。くみたる水を吞事も侍るにや。春のはじめにくめば。わか水とは申に



や。

問て云。

七日にあつ物をくふは何のゆへにて侍ぞや。

答。正月は小陽の月なり。また七日は小陽の數なり。よつて朝廷をはじめとして。わたくしの家にいたるまで。宴會をもよほすなり。それにあつものを食すれば。万病また邪氣をのぞく術なりといふ本文あり。荆楚記といふ文にも。羹を食して人俗病なければ。けふを人日とするとみえたり。延喜十一年正月七日に後院より七種のわかなを供すとみえたり。七種のわかなを供すとみえたり。七種わかなといふは。薺。はこべら。せり。御形。すしろ。佛の座などなり。北野天神も和菜羹啖口と作給ひたれば。むかしより侍りし事にや。

問て云。

けふおはやけにて白馬をみ給ふは何のいはれぞや。

答。十節記に白馬を馬の性の本とす。天に白龍あり。地に白馬あり。また天の用は龍なり。地の用は馬なりと申本文あり。また禮記といふ文に。春を東郊にむかへて。青馬七疋をもちゆるとみえ侍りし。また白馬を青馬と申侍は。陽の獸なり。青は春の色なり。きはめて白き物は。青ざめてみゆるものなり。されば青馬とも白馬ともかよひて申にや。正月七日に青馬をみれば。年中の邪氣をはらふといふ本文侍るなり。いまのわらはべのはる駒といふはこれよりはじまり侍るにや。

問て云。

十五日にかゆを食するは。何のいはれのはべるぞや。

答。人の國のむかし。黃帝。蚩尤を正月十五日に



たいらげ給ひしに。魂は天狗となり。身は蛇靈となり。人民をなやましかれば。時に黃帝。天にいのりしかば。天つげてのたまはく。魂魄をば崇。弊身をばめつせよとありしによりて。月毎にそのこんばくに弊をたてまつり給ひし。それによりて今の代にいたるまで。正月十五日の亥のとき。あづきのかゆをにて。庭中に天狗をまつりて。東に向ひ再拜して。ひざまづきてこれを食すれば。年中の疫氣をのぞくとうけたまはりし。わたましようぶやの時。かゆを四方にそゝぐも。このくのふとぞおぼえ侍る。問て云。

爆竹はなにのゆへにて侍るぞや。

答。神異經。西方の山の中に。たけ一丈餘の人有。これを見る者。則寒熱の病をうるをもつて。竹火をたきて爆竹の聲あれば。則驚去といへり。又事文類聚と申ふみに。

爆竹聲中一歲除。春風送暖入屠蘇。  
千門万户曠々日。總把新桃換舊符。  
屠蘇は孫思邈が庵の名なり。屠は割也。蕪は腐也とみえたり。寒熱和合の氣をほふるまじなひなるべし。爆の字は。廣韻に火烈と注せり。まはためくとよめり。

問て云。

せんずまんざいといふは。何のおこりにてはべるらん。

答。むかしは男踏歌とて。京中の男女。聲よきをつどへて。だいにて。祝詞をうたひて舞せられし也。持統天王の御時は。漢人踏哥をそうせしとかや。光源氏の物語のかうごしのよはなれたるさまも。かのたうかの事ぞかし。此餘風遙の末にとゞまつて。千壽万歳の祝詞をうたひ侍る也。踏哥の舞人。万春樂をそうせしゆへに。まんざいらくとはやすなり。



問て云。

そみんしやうらいとてわらはべのかけはべるは何のいはれぞや。

答。昔武塔天神。南海の女子をよばひに行給ふ時。日暮たりければ。かの所に蘇民將來。巨旦將來といふ二人の者あり。兄弟にてありしなり。天神。弟の巨旦將來に宿をかり給ふに。其身とめりといへどもゆるしたてまつらず。又そみん將來にかり給ふに。ひんなりといへども宿をかしたてまつり。粟がらを座とし。粟の飯をたてまつりけり。其後八年をへて。武塔天神。八はしらの御子をひき具して。かの蘇民が家に至り給ひて。一夜の宿をかしつる恩を報せんとて。蘇民に茅輪をつくべしとの給ふ。其夜より疫病万民を害せしか共。蘇民ひとりつゝがなかりしより。今の世にいたるまで。かれが名を書てかくるとぞうけたまはり侍りし。

問て云。

正月に弓いるは何のゆへぞや。

答。射禮とて。むかしは内裡にて弓射る事のありし也。孝德天皇の御宇に正月弓をいさしむ。凡まとは蚩尤が眼と名付て。これをいたましむるなり。仁德天皇の御宇に高麗國よりくろがねの楯。くろがねの的をたてまつりしを。盾人宿禰といふものいとしてかへしければ。それより日本をとらんといふ事をとめ侍り。正月五日に射場始といふ事むかしはありし也。公卿已下束帶にて是を射る也。天子も御射席に弓矢を御座の左右にたてらる。是は文武二道をば一をかくべからざるがゆへに。今天子も弓場殿にいで。武道をならはせ給ふ也。世のみだるゝ時は武をもておさめ。世のおさまれる時は文をもておさむると申なり。さればおさまるとて忘れざれと申也。是によりて



先としのはじめに射る事になれり。弓のおこり餘りにことごとくしければ畧しはべる也。

問て云。

正月に卯杖と申事の侍るにや。

答。をのづから。もろこしに桃杖をもて惡鬼をはらふ事の侍る也。本朝のおこりをたづぬれば。持統天皇三年正月の卯の日。大學寮よりたてまつるよし日本紀にみえたり。其後仁壽二年正月に諸衛祝の杖を獻じて。精魅ををふと見えたり。たゞこれ惡氣をはらふことなり。うづへといふものは。つくも所より。すはまの作物のうへにいはほをつくり。いはほの中に御生氣の方の獸をつくりてたてまつりて。卯杖にあはしむるなり。たとへば生氣東にあるとしはうさぎをつくり。南にあるとしは馬をつくる也。延喜式をかんがうれば。兵衛督已下まいりて。御杖をそうするとあり。いろ／＼の

木どもを五尺三寸づつにきりて。二束三束にゆひてたてまつる也。是を正月かみの卯の日たてまつれば卯杖といふなり。

二月。

問て云。

此月の馬の日いなりにまいるは何のいはれにか侍らん。

答。弘法大師。東寺の門前にて稻おひたる老翁に。二月の午の日あひ給ひて。則東寺の鎮守に勸請申されたりしかば。此寺はんじやうせしより。此日をもて縁日とや申べからむ。

問て云。

二月十五日にねはんざうとてかくるは何のゆへにて侍るぞや。

答。それ一代教主釋迦牟尼如來。下天のはじめをたづぬれば。淨飯王の宮に隆誕して。七日に其母摩耶夫人はうせ給へり。十九にして出家。



三十にして成道し給ひて。八年母の恩を報せんことをおもひ給ひて。一夏九旬に法を説つゝに娑羅雙樹の間にして。涅槃に入給ひし時のありさまを繪像にうつし。二月十五日に入滅し給へば。けふ是を掛たてまつる也。遺教經などとして人のまいるも。釋尊すでに涅槃にいらんとし給時に此經をととき。もろ／＼の弟子のために遺勅をのこし給ふ經をけふ講讀し侍る也。

三月。

問て云。

三月三日に桃花の酒をのみ侍るは何のいはれぞや。

答。人の國のことにや。太康年中に山民建山自然武陵といふ所にいたりて。桃花水にながれしをのみしより氣力さかなりしかば。いのち三百餘歳にをよべり。されば今の世に桃花

をもちひ侍るとかや。酒をのみ事は。周の曲水の宴に盃をながせしよりや初りけん。  
問て云。

けふ草餅をくふはなにのゆへにて侍るぞや。

答。周の靈王のきはめてはらあしくましければ。智臣の草餅をつねにまいらせければ。御ころよくなり給ひけり。それより人みなくふ事に侍りし。

問て云。

鶏合と申侍る事は何のゆへにて侍るぞや。

答。もろ／＼のことにや。明皇と申御門。たはぶれに鶏を闘はしめ給ひしに。ほどなく位につき給ひしより。小兒五百人をえらみ。治鶏坊といふ所をたてゝ。鶏をかはせられしとかや。またかの明皇は乙酉のとし生れ給ひしゆへ。闘鶏をこのみ給ひしよし。東城老子傳と申もの



にてみ侍りし。

四月。

問て云。

四月八日に佛に湯あびせ花たてまつるは何のゆへぞや。

答。此ことは推古天皇よりはじまり侍るとかや。釋迦如來の俱毘藍城にてむまれ給ひける時。天龍の下りてみつをそゝぎて釋尊にあびせ奉りし事をまねぶ也。禁中にても灌佛とて。いとにて瀧を落し。いろ／＼のつくりばななどそなへて。はちに五色の水を入れて。諸卿佛をあらひたてまつるなり。わらはべのさほのさきに花さゝぐるも。これよりことをこり侍りしとかや。

問て云。

賀茂祭の日あふひかくる事は何のゆへにてか侍るらん。

答。まつりの日。近衛の中將を勅使にたてらるるなり。むかし夢のつげ侍りしより。けふ人々あふひかづらのあふひをかくると申つたへたり。

五月。

問て云。

五月五日にしやうぶをもちゆるいはれは何のゆへにて侍るぞや。

答。昆明百節のしやうぶとて。一寸がうちに百ふしのあるしやうぶあり。かのしやうぶの根。万病をいやすといへり。されば百ふしなけれども。これをいはひ侍るなり。酒中に入。あるひは帶にし。あるひは沐浴に入侍る事は。本草また大戴禮月令などといふ書に侍るとなり。

問て云。

けふちまきくふは何のゆへにて侍るぞや。  
答。むかし高辛氏の惡子。五月五日に舟にのり



て海をわたりし時。暴風にはかに吹て。なみにしづみけるが。水神となりて人をなやましけるに。ある人五色の糸にてちまきをして。海中になげ入しかば。五色の龍となる。それよりして海神人をなやまさずと申つたへたり。または屈原汨羅にしづみ魚腹に葬せし楚人のまつりし供物とも申にや。

問て云。

同此日藥玉とてかくるは何のゆへぞや。

答。凡けふをば藥日といひて。一切の藥をばこの日とるなり。其ゆへは諸病かならず五月におこるなり。かんきを得てもろくのむし。へび。とり。けだものどもが。ちからを得ていきをはきだして。人の氣力をなやます日なり。さればけふ藥草を五色のいにてとゝのへてひちにかくれば。惡氣をはらふとも申本文侍るにや。公にも群臣に藥玉を給事の侍るなり。

問て云。

けふわらはべの小弓をもちていんちとして侍るは何のゆへぞや。

答。むかし左右近衛の馬場にて。馬にのりてゆみいし事の侍るなり。ひをりの日なども申にや。これらをやいんちのはじめとは申べからん。

問て云。

五月九日のいまみやまつりはいつごろにかはじまり侍りけん。

答。いまみやは疫病の神なり。正暦五年のころより天下しづかならざりしかば。社にまつりてときはかきはの祭禮たえずとぞうけたまはる。其時長能が二首哥をたてまつりしは。まさしく後拾遺に侍るとぞうけたまはり及びし。六月。

とふていわく。



嘉定と申事は何のゆへぞや。

答。この事はさらに本説ありがたきことにや。たゞかの錢の銘にかちやう通寶と侍れば。勝と云みやうせんをしやうぐわんするよしをぞ承をよび侍りし。

問て云。

六月朔日にこほりくふは何のくのふ侍るぞや。

答。仁徳の御代に大中彥皇子の鬪鶏といふ所にて狩し給ひしに。野中に庵あり。人をつかはしてみせ給ふに。窟なりと申。其時かの山のあたりなる人をめして問給ふに。氷室なりと申。皇子其氷をとりて。仁徳のひじりの御門に熱月に奉らせ給。御門寂感ありしより。氷室とて。所々にふゆの雪をおさめて。熱月にたてまつる事也。

問て云。

六月に祇園會といふことの侍るはいつの頃よりはじまれる事にや。

答。それ祇園のやしるのいはれをたづぬれば。そさのをのみことの童部にて。牛頭天皇とも武答天神とも申せしなり。そみん將來のこと。春の部にくわしく申侍りし。今七月にちの輪とてかけ侍るもこれよりはじまれるにや。又祇園の縁記にのせ侍るは。天竺より北に國あり。九相となづけて。その國に吉祥といふ園あり。其園に城あり。城に王有。牛頭天皇となづく。または武答天神といふ。沙羯羅龍王の女を后として八王子をうめり。八万四千六百五十四の眷屬ありと見えたり。我朝にてはそさのをのみこととあらはれ。九相國にては牛頭天皇とげんじ給ひし也。貞觀十八年にたくせんの事ありて。山城國愛宕郡八坂郷といふ所に神社をつくられたる也。このまつりの日。四條京



ごくにて。粟の御飯をたてまつるは。蘇民將來の由緒なりと承はる。まつりは天治元年六月よりはじまりしなり。むかし大内より勅使をたてられしなり。臨時のまつりとて。十五日に侍りし時のこと也。十四日には禁中にはことなる事なし。馬長などをつかはさるゝよしみえたり。今は其儀もなし。たゞ氏子の風情をつくすばかりなり。これはあづまあそびといふものを。内よりむかしたてまつられし餘風かとぞおぼえ侍る。

かみか代の八坂の里と今日よりそ

君か千とせはかそへはしむる

といふ哥を。東遊のうたひ舞しよし。天延の舊記に見え侍り。また臣下といふものは。何のころにかいとおぼつかなし。これはさだめて天王の臣下の眷屬のころにても侍るらん。山鉾などいふは。つくりものをして。神のこゝ

ろをいさめ奉るころにや。天照太神天の岩戸にこもり給ひし時。榊の枝に色々のものをかけて神樂をしてうたひ舞しかば。かんにたへずして出給ひし也。神も物めでするものにや。問て云。

みな月ばらへは何のゆへに侍るぞや。

答。夏と秋との尅したるを稔すつるくのうの侍るなり。天武天皇の御時よりはじまるなり。大ばらへといふは。朱雀門にて百官一同にせしとかや。わたくしの家に輪をこゆるとては。

みな月のなこしのはらへする人は

千とせのいのちのふといふ也

といふ哥をとなふるといへり。法性寺の關白の御記には。

おもふ事みなつきねとてあさのはを

きりにきりてもはらへつる哉  
といふ哥を詠ずべしとみえたり。



七月。

問て云。

七月七日に索餅をもちゆるいはれあるにや。

答。十節記といふ書に云。高辛氏の少子。七月七日に死て靈鬼となり。人に瘡病をいたす。その存日に麥餅をこのみしがゆへに。さくへいしてこれをまつりて病をのぞくと見えたり。

問て云。

けふ七夕に物たむくるはいはれあるにや。

答。けふは牽牛織女の二の星あひ逢夜なり。烏鵲はしとなりて。織女をわたすよし。淮南子と申書にみえたり。香花をそなへ。供具をとゝのへて。庭上にふみをおき。さほのはしに五色の糸をかけて一事をいのるに。三年のうちにかならずかなふといへり。このゆへに郝隆は腹中の書をさらし。阮咸は竿上の褌を手向した

めしも侍るにや。

問て云。

七夕に仙翁花を人にをくる事は何のいはれぞや。

答。七月七日を乞巧奠といひて。二星をまつり香花をそなふるよし。ふるくより申傳たり。しかれば。けふ花を人にもをくるにや。仙翁花は嵯峨の仙翁寺よりはじめていでしゆへに名とせりといへり。まことに唐書にはみえざるにや。

問て云。

十五日に靈をまつる事あるにや。

答。これは佛弟子目連はじめて六道を得て。其母の在所をみる。餓鬼の中にありしかば。これをかなしみ。釋尊に問たてまつりしかば。七月十五日に僧を供養せば。此くるしみをすくはんと説給ひしよりはじまれり。齊明天皇は須



彌山のかたをつくりて。飛鳥寺にて孟蘭盆會をまうけられしとかや。孟蘭盆は梵語なり。倒懸救器と翻譯す。倒懸はさかさまにかくるといふこゝろなり。餓鬼のくるしみを思に。さかさまにかけられたらんがごとし。救器とは。此餓鬼の苦をすくふうつはもの也。くわしくは孟蘭盆經にみえ侍り。七月十五日に冥官罪人をいましむる日なれば。けふをもて佛事をいたす也。

問て云。

七月にすまふとてとるはいつのころよりの事にて侍るぞや。

答。日本紀と申ものにてみ侍りしは。垂仁七年七月に當麻のむらに勇士あり。名をば當麻蹶速といふ。力は角をもさきつべし。天皇此よしきこしめし。これにつがふべき人をたづねられしかば。出雲國野見宿禰と申もの侍りしと

奏しければ。則めしあはせられて。相撲を御らんせらる。野見の宿禰力やまさりけん。くゑはやが腰うちくだきてたちどころにふみころしき。これをすまひのはじめとや申べからん。

八月。

問て云。

八月に御靈まつりとて侍るは何のいはれ侍るにや。

答。それ御靈八所の本地をたづぬれば。崇道天皇。吉備聖靈。伊與親王。

崇道天皇御子。

藤原夫人。

伊與親王母なり。

藤大夫。

大宰少貳廣繼。

橘大夫。

逸勢。

文大夫。

文屋宮田丸。

火雷

天神。此八の靈を神といはひしなり。これをいつよりまつる事ともみえ侍らず。さだめて託宣の事侍るべきか。さりながら年中行事の内にも見え侍らず。たゞこれはひとへにわたくしとして死靈のたゝりをなだめんとてのまつりとぞおぼえ侍る。ちかき世にもこゝろたけ



きものゝ靈をば神とまつりて。ときはかきはの祭をすれば。たゞりをとゞめ給と申はべる。新田義興の尊氏將軍のためにうたれて其靈火雷神となりしかば。神とまつりしよし申傳へたり。かくのごとくのこととは。今の代にもいくらも侍るべき事也。

問て云。

八月朔日にたのむとて人にもなたてまつる事侍るにや。

答。此事はさらに本説なし。世俗の風義なり。或説に建長の頃より此事あり。はじめはたのみとて。よねを折敷に入て。人のもとへつかはしけるとかや。ほづかひとて。わらはべのもち侍るはこのゆへにや。又圓明寺大閣の文永の記には。この七八年よりこのかたことに天下に流布せるよし載られたり。まことに建長の頃よりのことなるべし。又後嵯峨の院いまだ若

宮と申せし時よりはじまり侍ると申。いづれとたしかにさだめがたし。

問て云。

八月朔日天中節といふだをし柱にし侍るは何のゆへにて侍るぞや。

答。此事陰陽道の秘方といふ物にみえ侍。火難盜病口舌の災を拂ふ術にて侍る也。七月晦日。生氣の方の木をとりてすみにやきて。八月朔日日出のまへに。八月朔日天中節赤口白舌隨節滅と書て門にをすと見え侍り。むかし人の國のことにや。后天中樓にて人と契給ひしに。その人つゐにのぞみをとげずして忽死して火神となりて天中樓をやきしとき。后。此咒をとなへ給へば。其火則きえにしよし書にみへたり。

問て云。

八月に放生會とて合戦の場にのぞみても闘



をとめ侍るは何のゆへぞや。

答。抑八幡大菩薩と申たてまつるは。人皇第十六代の御門應神天皇の御事なり。仲哀天皇の第四の皇子。御母は神功皇后なり。天下を治給ふ事四十一年。寶壽は百十一歳をたもたせ給ひしなり。欽明天皇の御代に始て神とあらはれ。肥後國菱形池に跡をたれ。後には豊前の國宇佐の宮にしづまり給ひしが。清和の御時。男山岩清水にうつりすませ給ふ。其後は奉幣も岩清水にあり。一代一度宇佐へも勅使をたてまつらるゝ也。八幡と申御名は。御詔宣に。得道來不動法性。自<sup>ホイ</sup>八正道垂權迹。皆得解脫菩薩。故號八幡大菩薩とありしより。八幡大菩薩と號したてまつる也。又は八方に八色の幡をたつる事あり。密教の唱。西方阿彌陀の三昧耶形也。其故にや行教和尚には彌陀の三尊にげんじてみえさせ給けり。或むかし靈鷲山にし

て妙法花經を説とも。大自在王菩薩なりとも詔宣し給ふ。扱放生會と申は。元正天皇の御宇養老四年九月。異國より我朝をとらんとせしとき。大菩薩の神力によって異敵をしりぞけ侍りてのち詔宣ありて。合戰のあいだおほくの人をころしぬ。放生會ををこのふべきよしありしによて。毎年に諸國にてこの事あり。放生のいみじき事。寂勝王經長者子流水品の池魚のことよりおこれるにや。まことにいけるをはなつ御ちかひ。ありがたかりしことどもなり。早旦にゐのはなを神興くだらせ給ふ時は。行幸の儀式にて。音樂のこゑ雲を驚し。衣冠のよそほひ日にかゝやけり。それにまたひきかへて。還幸のありさまは。神人法師原にいたるまで白杖をつきて。かへらぬ道におくりたてまつる儀式なり。これやこの朝に紅顏ありて世路にほこれども。夕に白骨となりて郊原に



くちぬる世のありさまをしめし給ふ神慮のほどはかりがたくありがたき事どもなり。

九月

問て云

九月九日に菊の酒呑は何よりおこれる事ぞや

答。まづけふを重陽と申は。月と日と九陽の數にかなふがゆへに重陽と申なり。また菊を用ゐる事は。世風記といふ書にぞみえ侍る。費長房といふ仙人。汝南の桓景にかたりていはく。九月九日になんちが家にわざはひあるべし。茱萸の囊をぬひてひちかけ。山にのぼりて菊酒をのまば此災きゆべしといひければ。其日にいたりて教のごとくせしかば。其身はつゝがなくして。家中の鶏犬羊ことごとく死たり。かやうのくのふによりてやらん。むかしは大内にて。重陽の宴として茱萸の囊を御帳にかけ。

群臣に菊酒をたまはりしとぞうけたまはる。また後光明峯寺殿の御抄には。九月九日は寒温二季のさかひあひあふとき。身肉にわかるるなり。此時酒をのめば病を得ず。さてけふより酒をばわかすといへり。寒温の二氣。大增大減すれば。必病のおこるなり。故に針治灸治もみな肉別をしてするなり。また菊を用ゐる事は。魏文帝生れ給ふの時。紫雲殿上に懸りて例にも似ず。はたして七歳にして位につき給ひてけり。其時天下の物。壽命十五に過ず。ことに帝十五やうやくちかづくの時。なげきをふくみてあゆましめ給はず。其時穀祖といふ仙人のらきくゑんの菊のはなを折て。九月九日に持参りて奉りたれば。御門これを服し給ひて。延壽七十歳をたち給ふよしのせられたり。また世風記に漢武帝と申御門の菊酒をのみて長壽を得給ひし事侍り。また菊にわたきするこ



といつの頃よりはじまるともみえ侍らず。ただ菊をもてあそぶのあまりに寒霜をふせがんとこのころざしとぞ覺え侍る。

問て云。

此ごろ加茂籠とてむし入る事侍るは何のゆへに加茂より出侍るにか。

答。これは殿上の逍遙とて。むかし殿上人どものさが野などへむかひてむしを籠にえらびいれてあそびて。きみにたてまつりしは。堀川院の御ときよりぞはじまりける。むしえらびとも中なり。又むかしは賀茂社司などに仰られ。すむし。まつむしなどをめされけるよし。故禪閣の仰られしとかや。さればむしこは賀茂よりいで侍るとおもひあはせられ侍る。

十月。

問て云。

十月を神無月と申は何のゆへにて侍るに

や。

答。此月を神無月と申は。伊弉冊尊崩給月なれば申なり。また四方の木葉ちりすさむ頃なりとて。葉みな月と申人あり。いとおぼつかなし。また諸神いづもの大やしろへ下給へば申ともいへり。

問て云。

十月の亥子といふ事はいつの頃よりはじまれるぞや。

答。いつのころとはたしかに申がたし。承安四年の師尙が勘文にも。本朝のおこりをばしるさで。外朝の本書をぞひき申ければ。さらにしりがたし。延喜式にまさしくのせたる事なれば。往古より侍る事なるべし。群忌隆集といふ書に。十月亥日。餅を食すれば万病をのぞくよしみえ侍る。

問て云。



わの子の日御<sup>ミ</sup>げんてうとて大やけよりわた  
くしにわかち給事の侍るは何のゆへぞや。

答。さきに申ごとく。此わの子の根源たしかに  
いつよりとは申がたし。十月上亥日。内藏りや  
うより餅をそなへたてまつれば。あさがれい  
にて主上きこしめすよし年中行事といふ物に  
みえ侍り。今はそのすがたばかりなり。これを  
諸臣にわかち給こゝろにて侍るべし。上一人  
より下万民にいたりて。此餅をば食べしと見  
えたり。くらりやうのたてまつる餅の餘風を  
うつして。いまも御げんてうとて。人々にわか  
ち給ふとぞ覺侍る。

十一月。

問て云。

此月とうじと申事の侍るは何のゆへにて侍  
ぞや。

答。白虎通に周の世には十一月を正月とす。こ

れを曆家に天正月といふ。殷の世には十二月  
を正月とす。地正月とす。夏の世には今の正月  
を正月とす。人正月といへり。十一月は陽はじ  
めて生る月なれば。冬至の日より日かげのな  
がくなると申也。陰陽道の曆數をかんがへて  
十一月に奉るなり。朔旦冬至と申は。十一月一  
日の冬至に廿年に一度づつまはるを申なり。  
いとめでたき祥瑞なれば。異國にも我朝にも  
御門賀辭をうけ給なり。誠に目出度事にて侍  
る也。

問て云。

此月御火焼とて神火をたきてまつるは何の  
ゆへにて侍るにや。

答。この事たしかにおこりては侍らじ。たゞ  
し神樂とて。諸神の前にて。冬かならずし侍る  
ことのはべる。是等をはじめと申べき。大かた  
神樂と申は。天照大神の岩戸をさしてこもり



給ひし時。諸神のいのり申されけるに。天鈿目命まさきのかづらをかざしとし。ひかげをすすきにしてうたひ舞。庭火をたきしかば。天照太神天の岩戸を出給ひしより。諸神この事をこのみ給。今も内侍所にて行はるゝ神樂の事にて侍るなり。官人の庭火をば焼なり。諸卿近衛のめし人などと所作の人よりあひ。庭火などとして哥うたふも。たよりありておぼえ侍るはいかに。

十二月。

問て云。

せつぶんのまめうつ事は何のゆへにてかはべる。

答。としごしと世俗にいひならはして。こよひは惡鬼の夜行するゆへに。禁中にもむかしは陰陽寮さいもんをよみて。上卿已下これををふ。御所にともし火をおほくともして。四目あ

りておそろしげなる面をきて。手にたてほこをもて。内裏の四門をまはるなり。また殿上人ども御殿のかたに立て。桃の弓。蓬の矢にていはらふ也。これらをかたどりて。まめうちて鬼をはらふ事はじまれるにや。此内裏にて鬼をはれし事は。慶雲二年十二月。百姓おほく疫癘になやまされしゆへに。はじめられたるよし承をよびし。

問て云。

十二月にはちたゝきのあるき侍るは何のいはれぞや。

答。この事。更に根源たしかに申がたし。延喜の御門の皇子のかたはにましゝけるが。はちたゝきの先祖となり給ひし。其教養のためとかや申。いとおぼつかなし。蟬丸をめぐらの先祖とし。延喜の御門の御子と申侍るも。たしかならぬ事なり。これをもつてこれをおもふに。



その證跡侍らぬ事なれば。我等はいかで定め申侍るべき。

問て云。

節分にせうのもちゐとてくひ侍るはなにのゆへぞや。

答。この事さらにしりがたし。また五條天神に侍るよし申。彼天神いつよりあまくだりまします神とも見えず。さだめて縁記など侍るべし。國史にも見えず。儀式にも合せぬ神なれば。さらにしりがたし。此もちゐをくへば。物に勝といふくのう侍るよし申つたへたるばかりなり。

問て云。

節分におけるをたくは何のゆへぞや。

答。白朮は風氣をさる藥にて侍るうへ。餘薫あしきゆへに。疫病の神の夜行する夜なれば。是をたきて。おそれしめんがために侍る。

右世諺問答は。後成恩寺禪閣のかゝしめ給はんとて。みどりのかみにかうばしき筆のあとをのこし給ふといへども。わづかむ月のはじめより若水のみなもとにいたりて。八ヶ條をしるし給。つゐにその功終らざりしかば。目錄のみ残りて詞はなし。こゝに桃花の林にあそびて。累葉のちりをつぐひとりの童侍り。しかりといへども。雪をあつむる教をしらず。いはんやすたれたるをおこし。かけたるををぎなひて。ふるきをたづねあたらしきをしるは。まさしく先達のしはざなれど。かつうは班彪の史記を班固が受つぎ。紫式部が源氏物語に。大貳の三位が宇治十帖をくはへ侍りし事の有やうに。心經とやらむ教經とやらん申物語さうしにてみ給ひし事のおもひ出られて。かの目錄のむねにまかせて。正月七日のあつ物より十二月晦日の事にいたるまで。そこはかもな



きあまのもくづをかきあつめて。しづがたく  
火のほのかに。世の諺をあらはさんとする事  
しかり。

天文第十三曆中春下旬日

正二位行權大納言藤原兼冬

牙齒十六歳撰之

愚竹馬昔作此抄。今遮眼前。頗不思議之聞詞  
等有之。自嘲不少。堅可禁外見者也。

御判生年廿歳

右世諺問答以流布印本校焉



群書類從卷第五百六

雜部六十一

曆林問答集序

蓋曆數也。包天地陰陽之事。故帝王之政莫重於曆。自黃帝卯日推策。至姚舜輔造紀元。曆十有三家也。但上古之曆。僅極幽明。知微妙耳。然大唐長慶壬寅朝新用經。遂集而錄之。春夏秋冬。晦朔弦望。星辰伏見。日月盈虛。雷動虹出。蟲鳥獸魚之變化。稼穡採桑之時候。毫髮無差。於是世々曆經雖來朝。莫能得者。貞觀之初。大春日真野麻呂。又天德之末。吾祖司曆博士賀茂保憲。博考大成。而所獻之曆。天數不違。所傳。莫不規模。然歲々時々。愚師野巫之僻說多起。正理錯亂矣。故今剪截煩浮之辭。採機要之說。號

曰曆林問答。庶來詰補其闕焉。

應永甲午孟春日

正儀大夫司曆博士賀茂在方書

曆林問答集目錄上

釋天地第一

釋五行第二

釋日第三

釋月第四

釋星第五

釋大歲第六

釋歲德第七

釋大將軍第八

釋大陰第九

釋歲刑第十

釋歲破第十一

釋歲殺第十二

釋黃幡第十三

釋豹尾第十四

釋歲名第十五

釋歲次第十六



釋二十四氣七十二候第十七

釋六十四卦第十八

釋閏月第十九

釋日月蝕第二十

釋納音第二十一

釋十二直第二十二

釋十干十二支第二十三

釋月建第二十四

曆林問答集上

釋天地第一。

或問。天地何也。答曰。渾天儀經云。天大而包地外。地少而居於天內。天表裏有水。天地各乘氣而立。載水而行。關令內傳云。天地之南午北子相去九千万里。東卯酉亦九千万里。四隅空相去九千万里。天去地四十千万里。朱氏曰。黃帝書。天地者。在太虛空裏。大氣舉之。是天地未相分也。兩儀已相分運轉。而天乘炁而浮。地載水而行不息。天大而雖包地外。炁無涯。水亦無涯。故天外有水。亦地表裏有水。浮天而載地。

也。天大而半覆地上。半繞地下。故二十八宿半隱。天轉如車轂。但天無休。以二十八宿爲休。天從東繞西。故云左旋。日月五星同左轉。二十八宿諸星麗天常無動。只隨天轉耳。周天三百六十五度四分度之一也。故於天二十八宿各有領度。角十三度。亢九度。氏十六度。房五度。心五度。尾十七度。箕十度。合七十五度。三十二星東方宿也。斗二十四度。牛七度半。女十一度。虛十度。二十五分半。危十八度。室十七度。壁十度。合九十七度七十五分半。六十三星北方宿也。奎十七度半。婁十三度。胃十四度半。昂十一度。畢十六度。觜一度。參九度。合八十二度。五十一星西方宿也。井三十度。鬼三度。柳十四度。星七度。張十九度。翼十九度。轸十八度半。合一百十一度半。九十八星南方宿也。都三百六十五度四分度之一也。度一千九百三十二里也。於地有州國有分野。但自東漢以降。曆家之法。日月星皆逆天。



而爲右行。故日月會宿寅析木丑星紀子玄枵之次。謂之冬。會亥諏訾戌降婁酉大梁之次。謂之春。會申實沈未鶉首午鶉火之次。謂之夏。會巳鶉尾辰壽星卯大火之次。謂之秋。會則日月右行交會而成一月之辰也。於是因橫渠之說。朱氏曰。古今曆家之法。以退數筭之。故日遲而每日一度行。月速每日十三度行。此說如上。未一定之法。如兩先生者。天最速進。日一度退。月最遲而十三度退。皆雖同道同行。不及天。而所退行。反似右行。而全日遲非月疾。日月逆天非右行矣。又云。牛宿十一月星紀之次。天北端之極也。天運降近南。故牛降南端。自冬至漸而升。井宿四月實沈之次。南端之極也。天運升近北。故井升北端。自夏至漸而降。亦南北升降之中爲春秋。鎮成曰。日月隨天而下降。至南端之極。謂左旋。隨天而上升。至北端之極。謂右行。以爲南北升降爲左右。此說且爲好。姚信所天論曰。天体

南低入地。北則高冬至極低。日去人遠。北天氣至。故冰寒也。夏至極起。日去人近。南天氣至。故蒸熱也。天極高時。日行地中深。故夜長晝短。然則天行。冬依於渾儀。夏依於蓋天也。天似蓋笠。地法覆盤。天地各中高外下。地極之下爲天地之中。三光隱映爲晝夜。天圓而動。地方而靜。天十二神動移無窮。地之日辰靜而待之。夫星辰遲速。日月運行。雷發虹見。雲行雨施。是天之象也。二十八舍。內外諸官。七曜三光。星分歲次。是天之數也。山川水陸。高下平汙。嶽鎮河通。風廻露蒸。是地之象也。八極四海。三江五湖。九州百郡。千里萬頃。地之數也。於是元氣始萌。陰陽始生。炁形立端。清濁分別。質形已具。此五者。天地之運通也。天以剛健之德覆地。地以柔順之德載也。

### 釋五行第二

或問。五行何也。答曰。春秋元命苞云。五行萬物之始也。木居陽之位東方主春。以溫柔爲



休。以曲直爲性。含陰烝。內空虛。外有花葉。如人之威儀容貌。故相字目傍木也。其木不失。曲直之性。則五穀茂盛數實也。火居太陽之位南方主夏。以明熱爲休。以炎上爲性。故內暗外明也。其火不失。炎上之性。則天下大治。垂拱無爲也。土爲地道。万物貫穿而生。持實含散爲休。種曰稼。納曰穡。故以稼穡爲性。又土居中央。主四季成四時。爲內事宮室。夫歸親屬之象也。故順中和之氣。則土得其性。百穀實而稼穡成也。金居少陰之位西方主秋。以強冷爲休。以從革爲性。故禁不義以安百姓。不忌危則金順其性。故万物皆熟。百穀成也。水居大陰之位北方主冬。以寒虛爲休。以潤下爲性。陽之所始。陰之所終也。是綱紀之時。故宗廟祭祀之象也。是以順水氣。則依不失潤下之性。源泉通流。以利民用。是釋大槩如此。

釋日第三。

或問。日何也。答曰。定象紀云。日太陽之精也。又五經通義曰。陽以一起。故日行一度。陽成於三。故中有三足鳥。又云。日火精陽烝也。外熱內陰。象鳥之黑也。白虎通云。日徑千里。周三千里。下於天七千里。日一南万物死。日一北万物生。故夏陽盛而陰衰。故晝長夜短。冬陰盛而陽衰。故晝短夜長。日行陽道長出。入卯酉之北。行陰道短出。入卯酉之南。春秋陰陽等。故行中道。晝夜等也。漢書天文志云。日君之象也。君行急則日行疾。君行緩則日行遲。是以觀乎天文。以察乎時變。

釋月第四。

或問。月何也。答曰。定象紀云。月大陰之宗。積而成也。中有獸象。兔陰之類。其兔善走。象陽動也。春秋元命苞云。月水之精。故內明而氣冷爲陰精。故休自無光。藉日照之乃明。猶以臣自無威。假君之勢。乃成其威。月初未對日。故無



光缺。月半而與日相對。故光滿。十六日以後漸缺。亦漸不對日也。又云。月大陰之位。后妃之象。諸侯大臣之類。

## 釋星第五。

或問。星何也。答曰。張衡云。衆星万物之精。列布休生。於地各有攸屬。在野象物。在朝象官。在人象事。又居中央。謂之北斗。天之樞也。合誠圖云。第一名樞。二名璇。三名璣。四名權。五名衡。六名開陽。七名招搖光。黃帝斗圖云。第一名貪狼主子。二名巨門主丑亥。三名祿存主寅戌。四名文曲主卯酉。五名廉貞主辰申。六名武曲主巳未。七名破軍主午。孔子元辰經云。第一名陽明星。第二名陰精星。第三名真人星。第四名玄冥星。第五名丹元星。第六名北極星。第七名天閼星。又云。第一水。二水土。三木土。四金木。五金土。六火土。七火。於是子午爲天地之經。故斗第一主子。第七主午。從第二至第六。

各主兩辰。或主人之本命。以定吉凶。或主物之根元。以生万品。丑又有五星。則五行之精也。爲上帝五使。稟受神命。而各司下土。故配於五方。異于政。或有福德助。或禍罰威刑。順軌而常。錯亂以顯異。故歲星木之精。其位在東方主春。若帝之子。人君之象。五星之長。司農之官。主福慶。凡有六名。一曰攝提。二曰重華。三曰應星。四曰纏星。五曰紀星。六曰脩人星。其於五常仁也。於人主肝。凡歲星觀察三戈。以進退順逆。決定天下之理也。歲星其明如常。則五穀滋盛。國家安寧。民間有福慶。主歲。故名歲星。熒惑星火之精。其位南方主夏。赤帝之子。方伯之象。五星之伯。上象太一。下司人君。凡有二名。一曰執法。二曰罰星。其於五常禮也。於人主心。又主歲之成敗。察妖孽禍亂。所行有兵亂疫喪飢旱災火也。但其君修德則不爲咎而加福。出入無常。故名熒惑也。填星土之精。其位中央。主四



季黃帝之子。女主之象。主德爲五星之王。一名地侯。其於五常信也。於人主脾。填星順度則國寧民富。五穀豐熟也。若填星失度則歲多風殺無實。太白星金之精。其位西方。主秋。白帝之子。大將之象。以司凶兵。凡有六名。一曰天相。二曰天政。三曰大臣。四曰大師。五曰明星。六曰天璽。詩云。東曰啓明。西曰長庚。其於五常義也。於人主肺。太白亂行。不居其度。兵數起。不熟而惡。太白出入順度則天下昌豐也。西方金色白。故曰太白也。辰星水之精。其位北方。主冬。黑帝之子也。凡有六名。一曰安調。二曰細極。三曰能星。四曰鉤星。五曰司農。六曰勉星。其於五常智也。於人主腎。凡辰星司災變致伐。左氏曰。辰星四仲月。二月五月八月十一月出則天下太平。五穀豐熟也。天之執正。出入乎時也。此五星在天者。主木火土金水之五行。在地者主五方五岳。居人者主五歲五根。於五常主仁義禮智信。於五

事貌也。視也。言也。聽也。思也。此五者不闕行之者。終久保之者德顯。故動於天地。令感鬼神。天文要抄云。五星盈縮失度則其精降于地爲人。歲星降爲貴臣。熒惑降爲童兒。歌謠嬉戲。填星降爲老人老婦女。太白降爲壯夫。處於林麓。辰星降爲婦人。凡諸星皆如此。尙書靈耀云。二十八宿天元氣。万物之精也。故東方角亢角氏房心尾箕七宿。其形如龍。曰左青龍。南方井鬼柳星張翼轸七宿。其形如鶉鳥。曰前朱雀。西方奎婁胃昂畢觜參七宿。其形如虎。曰右白虎。北方斗牛女虛危室壁七宿。其形如龜蛇。曰後玄武。二十八宿皆有龍虎鳥龜之形。隨天左旋。亦五星從北行南爲順行。從南行北爲退行。爲逆行。又五星早出爲盈。晚出爲縮。又日月星辰謂之天文。日月與星謂之三光。日月五星謂之七曜。衆星竝光謂之辰。各晨昏正。寒暑生。歲時成也。六合之無不照明。皆知天下之損益。定人



倫之禍福耳。

釋大歲第六。

或問。大歲者何也。答曰。曆例云。大歲者。歲星之精。降天地之間。觀察萬物。臨見八方。故名歲之君。慎之者保。逆之者亡。巡行於十二支也。子歲在正北。丑歲在丑。餘方皆爾。十有二年。運終而復始。其方主歲。故爲一年之君。有福最吉方也。更不可犯。作凶事。殊出軍討敵。向之大凶。若向此方。舉凶事。疫病起也。

釋歲德第七。

或問。歲德者何也。答曰。五行書云。凡陰陽用事。遇德爲善。故歲德方一年間。有德方也。皆十干德也。但五爲陽德。甲丙戊庚壬。五爲陰德。乙丁己辛癸。其甲歲德者在東宮甲方。丙歲德者在南宮丙方。戊歲德者在中宮戊方。中宮者在丙方。庚歲德者在西宮庚方。壬歲德者在北宮壬方。此五干歲德各爲陽德。故在其方次。乙歲德者在西宮庚方。丁歲德

者在北宮壬方。己歲德者在東宮甲方。辛歲德者在南宮丙方。癸歲德者在中宮戊方。其乙丁己辛癸者爲陰干。故自無德。配合陽干而成德。是以乙爲甲妻相合。故己歲德在甲。辛爲丙妻相合。故辛歲德在丙。乙爲庚妻相合。故乙歲德在庚。癸爲戊妻相合。故癸歲德在戊。孔子曰。稟氣於陽。定形於陰云。其戊己者火生土之故。戊屬丙方。己屬丁方。又號中宮。戊己土也。五行木也。言宮者舍也。故稱之五行。皆畏於相尅。故以木妹庚。庚金以火妹妻於壬水。以土妹妻於甲木。以金妹妻於丙火。以水妹妻於戊土。是五行皆畏於相尅。故各配合而以生萬物也。

釋大將軍第八。

或問。大將軍者何也。答曰。新撰陰陽書云。大將軍者。大白之精。天之上客。太一紫微宮方伯之神也。不居四孟。常行四仲。以正四方。三歲一移。百事不可犯云。其太白西方星金精也。降地



而三歲之間爲方伯之神。十有二年運四方。終而復始矣。金者禁也。主裁斷。故犯之者必受殃。其居礎。立柱。上棟。修造。移徙。嫁娶。塗竈。掘井。築垣。出軍。葬埋。起土。百事犯用之。大凶。於是大將軍常行四仲以正四方。三歲一移云。以此文在東方者只卯方可忌之。寅甲乙辰之四神者無忌之。昔者雖有其說。先詰之所不用也。紫微宮。方伯之神也。伯長也。正也。禮云。千里之外設方伯云。在卯者寅甲乙辰四神相兼可忌之。餘之方皆爾也。今爲決後生之疑。引舊勘聊記之耳。非愚所謂也。

### 釋大陰第九。

或問。大陰者何也。答曰。曆例云。大陰鎮星之精。歲之皇后也。常居歲後之二辰。故子歲者大陰在戌。丑歲者在亥。餘例皆爾。大歲皇后移居之方也。故惡婦人事也。妊者移其方。產期犯向凶。

### 釋歲刑第十。

或問。歲刑者何也。答曰。金匱經云。刑凡有三。第一衰謝之刑。有五。謂金木水火土之刑。第二制御之刑。有十。謂十干之刑。第三不遜之刑。有三。謂十二支之刑也。今之曆所載之歲刑者。謂衰謝之刑。制御不遜之兩刑者不載。故略之。第一云。衰謝刑者金剛也。刑自在西方。火猛也。刑自在南方。木落歸根。刑在北方。水流皈末而不皈。刑在東方。土王於四季。故天能刑之。今按。巳酉丑金之位也。金以剛強之。故陽氣入而挫之。故巳酉丑之刑自在西方。申酉戌之位也。寅午戌火之位也。火以強猛故。陰氣來而挫之。故寅午戌之歲。刑自在南方。巳午未之位也。亥卯未木之位也。木雖恃榮觀。陰氣來而殺之。故亥卯未歲。刑在北方。亥子丑之位也。申子辰水之位也。水雖恃陰浮之智。陽氣往而刑之。故申子辰之歲。刑在東方。寅卯辰之位也。土五行之王也。天能刑



之。未丑辰戌土之位也。各相刑之。未刑丑也。戌刑未也。辰之刑辰也。丑之刑戌也。於是金雖剛火挫之。火雖猛水挫之。木雖榮觀陰氣殺之。水雖恃智陽刑之。金木水火各雖有剛猛榮智之德。莫不刑之也。土五行之王。天刑之。尙書曆云。歲刑者天之陰精。水曜精也。一名法曹司馬。以殺爵爲名。是五行各一方刑之也。夫寒暑推移應時而動不失其節者。獨雖無受刑治不可不刑也。呂氏春秋云。刑討不可伏於國。鞭笞不可廢於家。其歲刑者一歲之中受刑殺方也。故多禍少福。百事不可觸犯之。大公兵書云。舉事。善則天應之以德。惡則天應之以刑也。

### 釋歲破第十一。

或問。歲破者何也。答曰。曆例云。歲破土曜之精。大歲所對衝方也。一歲之中爲大歲見衝破。故云破子。歲破者在午丑。歲破者在未。餘例皆

爾。於是破有輕重。故寅申巳亥方破者四孟爲五行一生也。子午卯酉方破者四仲爲五行一盛壯也。丑未辰戌方破者四季爲五行一衰老也。故歲破在寅申巳亥者無咎。在子午卯酉者輕凶。在丑未辰戌者在衰老無生盛重凶也。起土移徙不可犯向之。又馬牛之類。不可於其方求矣。

### 釋歲殺第十二。

或問。歲殺者何也。答曰。曆例云。歲殺陰氣尤毒害方謂之殺。金曜之精專主致氣。万物滅方也。故丑未戌方運轉而不居於餘方不吉方也。

### 釋黃幡第十三。

或問。黃幡何也。答曰。曆例云。黃幡羅睺星之精。大歲之墓也。万物皆有生死。故有墓。其物皆皈於土。常運轉於丑未辰戌方。不行餘方。主於土色。故名黃。又幡者旗也。其形如樹幡。故云幡。又五行墓。皆以丑未辰戌日爲五墓日。是主土之故也。向其方立門取土不吉。餘無咎也。



釋豹尾第十四。

或問。豹尾者何也。答曰。曆例云。豹尾計都星之精。黃幡對向之方也。故幡在辰方。尾在戌方。相對。餘歲亦爾。其幡尾之指靡。形變動而速疾。似豹尾之動。又豹以有君子之喻。故象之馬牛犬之有尾類。不可於其方來也。餘無妨。

釋歲名第十五。

或問。歲名何也。答曰。爾雅云。寅名攝提格之歲。格起也。万物蒸陽起也。卯名單闕之歲。闕止也。言陽氣推万物而起。陰氣盡止也。辰名執徐之歲。執蟄也。徐舒也。言伏蟄之物皆散舒而出也。巳名大荒洛之歲。荒大也。言万物熾盛而大落而布散也。午名敦牂之歲。言万物盛壯也。未名協洽之歲。協叶和也。洽合也。申名涒灘之歲。涒灘大脩也。言万物皆脩其精氣。酉名作噩之歲。噩落也。言万物循其墮落。否也。戌名閹茂之歲。閹大也。言万物皆大冒也。亥名大淵獻之

歲。淵藏也。言万物終亥也。大小深窟。伏以迎陽也。子名困敦之歲。困混也。敦沌也。言陽氣混沌。万物垂孽也。丑名赤奮若之歲。奮起也。言陽氣奮迅而起。赤陽之色也。自攝提格至赤奮若。皆十二支名也。故曰歲名。

釋歲次第十六。

或問。歲次何也。答曰。淮南子曰。寅曰析木。言万物始萌。分別水木也。卯曰大火。言東方者木也。心宿之三星在卯方。心星火。火出於木心。故云大火也。辰曰壽星。言万物各任其命達。故云壽星也。巳曰鶉尾。言巳主南方軫尾之兩宿。在朱雀之宿。故有鳥名也。午曰鶉火。言火在離方。陽氣大火星中在朱雀之處。故曰鶉火也。未曰鶉首。言南方之宿之形皆象鳥。以井宿爲冠。以柳宿爲口。故曰鶉首也。申曰實沈。言陰氣沈重。降實於物。故曰實沈。酉曰大梁。梁強也。言白露降。万物堅強也。故曰大梁。戌曰降婁。降下也。婁



曲也。言陰氣上侵萬物婁曲。故曰降婁也。亥曰  
 娵訾。言陰壯陽伏萬物愁哀也。故曰娵訾。子曰  
 玄枵。玄黑也。枵耗也。言陰氣盛。萬物雖動未出  
 空虛謂之耗。故曰玄枵也。丑曰星紀。言紀統也  
 領也。萬物所始終。故有期名矣。今按歲名者自  
 子歲至亥歲。各因造化之根元。表其德以爲名  
 也。假令子名困敦。丑名赤奮若。皆如前說。餘倣  
 之。又歲次者。假令析木寅之次。大火卯之次。壽  
 星辰之次。是東陸之辰也。鶉尾巳之次。鶉火午之  
 次。鶉首未之次。是南陸之辰也。實沈申之次。大梁  
 酉之次。降婁戌之次。是西陸之辰也。娵訾亥之次。  
 玄枵子之次。星紀丑之次。是北陸之辰也。此十二  
 辰。日月五星。大歲運轉之舍也。但自大歲在子  
 次第順行止亥。周而復始。日月五星者各退行。  
 而自玄枵子之次移娵訾亥之次。餘倣之。大歲  
 日月五星順退而成歲月也。

釋二十四氣七十二候第十七。

立春正月節配于艮。東風解冰。東風者候風也。  
 陽風也。已來而解冰也。又立春陽氣已發雖在  
 上。陰氣猶厚在下。而陽氣尙微。故艮主立春。在  
 東北之維。以配於土也。次蟄蟲始搖。此時候伏  
 蟄蟲得陽氣振動將出土中。故云振也。次魚上  
 冰者。魚盛寒之時。伏於水下。逐其溫暖。至正月  
 陽氣游水上近於冰。故云爾。雨水正月中配于  
 寅。獺祭魚。此時候魚肥美也。獺將食之。先祭  
 之。易通卦驗云。雨水之氣。獺不祭魚。國有盜  
 賊也。又雨水者雪散爲雨水也。又寅木故主正  
 月中也。次鴻雁來。此時候鴻雁從南向北至中  
 國。故云來也。次草木萌動。此時陽氣蒸達。可耕  
 之候。農書云。耕者此時急可發也。驚蟄二月節  
 配于甲。桃始華。前候萌動。陽氣上達而始花也。  
 又驚蟄者伏蟄之蟲大驚而走出也。甲者萬物咸  
 解。孚甲自出。故主二月節。以配於木也。次倉庚  
 鳴。倉庚者黃鸝也。謝氏云。布穀也。此鳥鳴時。布



種其穀。次鷹化爲鳩。此時候鷹化爲鳩。至秋鳩化爲鷹。然後設罝羅。春分二月中配于卯。玄鳥至。玄鳥燕也。陽而至也。集人室爲嫁娶之象。此鳥至之時。祀媒神而祈子孫也。又春分是爲陰陽之交會。而此節之大者。故卯主正東。以配於二月中。次雷乃發聲。雷是陽氣之將上。與陰相衝也。動於地上。天之下發陽。則蟄虫應而振出。孔子曰。迅雷甚雨風烈則變。雖夜必興。衣服冠而坐。所以畏天威也。次始雷電。是陽光也。陽微則光不見。此月陽氣漸盛。以擊於陰。其光乃見。故云。始電。清明三月節配于乙。桐始華。桐陽木。故以清明氣始花也。又清明者謂生物。天氣清淨明潔。万物盛大而可觀。故云清明。又乙軋也。万物奮軋而出也。故乙主三月節。以配于木也。次田鼠化爲鴽。郭璞曰。鴽是鴿也。化者蓋鼠化爲鴽。鴽化爲鼠乎。失節不化。則國不正也。莊子曰。田鼠化爲鴽也。次虹始見。虹者。爾雅釋



蚯蚓動宛而上首。漸得陽氣。今出乎。次王瓜生。王瓜者艸挈也。又王賁也。此時宜種瓜也。小滿四月中配于己。苦菜秀。此時物咸秀生也。又小得盈滿。故云小滿。三禮義宗曰。已起也。物至此時皆畢起。故已主四月。以配于火也。次靡艸死。此時候无文。故引內說以明之。葶藶之屬也。以其枝葉靡細。故云靡草也。次小暑。至此時候无文。今案仲夏之節漸近。而炎上氣雖至。陰氣猶殘。熱氣最微也。故云小暑至。歟。芒種五月節配于丙。蟠蜋生。舍人云。蟠蜋今之蟠蜋也。又謂之貪尾。又謂之馬穀。又名其子云。蟠蜋也。鄭玄云。丙者柄也。物之生長各執其柄。万物強大而炳然著見也。故丙主五月節。以配於火。又芒種者有芒之穀可稼種者也。次鵬始鳴。鵬一名伯勞。又名缺也。應陰而殺物。鳴則將寒候也。以五月應陰氣之動。陰爲殘賊。蓋賊害之鳥也。京房易傳曰。伯勞聚邑中歲大水。若軍中鳴。師

分而且水卒至。若見軍前後鳴。賊來圍。入舍有仇。恐外謀內。口舌。若悲鳴來。有死者也。次反舌無聲。此鳥春初鳴。至五月稍止。其聲數轉。故名反舌。易緯通卦驗曰。能反覆其口。隨百鳥之音。故爲反舌鳥。又百舌也。周書云。芒種五日之後。反舌無聲。若有聲。佞人在側。孔子明鏡曰。國臣謀臣有反舌鳥入宮。夏至五月中配于午。鹿角墮。易通卦驗曰。鹿者獸中之陽也。此時候應陰解角也。大陽始屈。陰氣始升。陰陽相向之候也。若不解則失君臣之禮。臣不承君之象也。故貴臣作奸也。此時陰氣動於黃泉之下。又午盛陽之位而居南方。故主夏至以配于火。次蟬始鳴。此亦無文。今按。仲夏者麥秋盡成而陰陽相向之節。應之而蟬始鳴乎。次半夏生。此時候無文。蓋半夏是藥草也。小暑六月節配于丁。溫風始至。此亦無文。今按。南方名暑門。生景風盛熱之時也。故溫風至矣。又小暑者極熱之物也。鄭玄



云。丁亭也。物生長。時應而止也。故丁主小暑以配于火。次蟋蟀居壁。爾雅釋虫曰。蟋蟀蛭也。此物生在土中。至季夏羽翼稍成。未能遠飛。但居其壁。至七月則能遠飛在野。次鷹乃學習。此時陰氣既起。應感乃有殺心。學習搏擊之事。張逸曰。秋鳩化爲鷹。春鷹化鳩。又自有真鷹可習矣。大暑六月中配于未。腐草化爲螢。此時腐草得暑濕之氣。爲螢。李巡云。螢夜飛。腹下如火光。故曰。卽炤也。又大暑月半極熱之中爲大。又未者味也。物向成皆有氣味。故未主六月中以配于土。次土潤溽暑。潤溽者塗濕也。此時陽氣將在土。故暑乎。次大雨時行。六月建未。未值井宿主水。故大雨時行節也。周禮曰。此時立其官使除田草也。五月夏至之時。艾草殺暴之。至六月燒之。大雨行之時。田中蓄漬之。瘠地爲肥也。立秋七月節配于坤。涼風至。此時候無文。今按之。涼風者秋風也。陰氣淒涼。收成萬物。鄭玄云。

坤純陰之象。能養萬物。莫過於地。陰動于午。至未始著。故坤主立秋。在西南之維。以配于土。次白露者陰氣漸重。露濃色白之謂。次寒蟬鳴。寒蟬一名寒蜩。又謂蜩也。郭景純云。寒蜩也。似蟬而小。青赤也。處暑七月中配于申。鷹乃祭鳥。此時候鷹祭鳥者。欲食之時。先斂鳥而不食。與人之祭食相似也。先神卽不食。既祭之後。不必盡食。若人君行刑戮而已矣。次天地始肅。肅急之言也。今按。天氣漸上。地氣漸下。肅然而物改更。秀實新成也。將収不可懈也。次禾乃登。此句不見本經。農乃登穀蓋謂之乎。月令曰。天子嘗新薦寢廟。註云。黍稷之屬於是始熟也。白露八月節配于庚。鴻雁來。說文云。大曰鴻。小曰鴈也。雁有人情。暑則北翔。涼則南飛。履霜懼冰。識微知機。故隨陰陽。不居中國。鄭玄云。庚更也。萬物代改。故庚主八月節在西方。以配於金也。次玄鳥歸。玄鳥者燕也。釋鳥文曰。玄鳥歸爲仲秋。至



爲仲春。此鳥不遠去。必在四夷。不居中國。在幽僻之處。不常見也。次群鳥養羞羞進也。雖有鳥名蟲也。是螢火也。又云。丹鳥也。其謂之鳥者。其所養之物不盡食之故。雖蟲謂鳥也。秋分八月中配于酉。雷乃收聲。雷是陽氣主於動。今地中潛伏焉。今按之。雷生於震。震木也。中秋金王之時也。木畏金。故雷潛入地中伏乎。三禮義宗云。酉老也。万物老極成熟。故酉主地分以配于金。次蟄虫坏戶。此時候蟄益戶者。小虫以土漸增。益穴之四畔。使通明。而溫煖之間出入也。陰氣至之時。稍坏之。十月寒甚乃閉也。次水始涸。涸竭也。八月末。角宿朝見。東方時。殺氣盛。而雨氣盡之後。天根朝見。東方時。水潦盡竭也。天根者氐也。是寒露之前五日之候也。農既收。則治道水上爲梁。是利民轉運故也。寒露九月節配于辛。鴻雁來賓。仲秋節云。鴻雁來。今季秋節云。來賓止。中國未去。猶如賓客。故云賓。仲秋之

候初來過去。故不云賓也。鄭玄云。辛新也。万物皆秀實新成。故辛主九月節以配於金。次雀入大水爲蛤。大水海也。國語云。雀入于海爲蛤。故知大水海也。次菊有黃華。此時候无文。霜降九月中配于戌。豺乃祭獸。此時候祭獸者戮殺禽獸也。初得者皆殺而祭之。後得者殺不祭也。三禮義宗云。戌滅也殺也。此時物衰滅。故戌主九月中以配於土。次草木黃落。此亦无文。今按。伐木必可用致氣乎。次蟄虫咸俯。此時垂頭以土堦塗也。前月但藏而坏戶。至此月垂頭嚮下。以隨陽氣故也。塗塞其戶穴。辟地上陰殺之氣也。立冬十月節配于乾。水始冰。此時候无文。按之。陽氣漸沈。陰氣已來乎。鄭玄云。乾純陽之象。生物之首也。陽氣之本也。故先子之位以堅剛也。故乾主立冬在西北之維以配于金。次地始凍。此時候无文。次野雉入大水爲蜃。大水者淮水也。大蛤曰蜃。晉語云。雉入乎淮爲蜃也。小雪十



月中配于亥。虹藏不見。此亦無文。今按。虹者陰陽交會之時見。故陰陽等則虹出也。今純陰之時。虹藏不見乎。小雪者霜露凝結而爲雪。十月猶小。故云小雪。三禮義宗云。亥閔也。言陰氣劾殺万物。故亥主十月中以配於水也。次天氣上騰。地氣下降。易云。天休在上。陽氣歸虛元。故云天氣上騰。陰氣下連於下。故云地氣下降。各取其義。不相妨也。次閉塞而成冬也。時使有司助閉藏之氣。門戶可閉閉之。牕牖可塞塞之。大雪十一月節以配于壬。鷓旦不鳴。此鳥求旦鳴。蓋是山鷓也。大雪者小雪之相對也。鄭玄云。壬任也。閉藏万物。懷任於下。故壬主十一月節以配於水。次武始交。交猶合也。次荔挺也。馬雅也。出。此時候。應陽氣而出艸也。依皇氏之說焉。冬至十一月中配于子。蚯蚓結。蔡云。結猶屈。蚯蚓屈首下嚮。陽氣動則宛而上首。故結而屈也。易通卦驗云。冬至。陽氣動於黃泉之下。子雖大陰之位。陽氣在

內而動其下。故居水之位。假令水外陰內明。象懷陽也。故子主冬至以配于水。次麋角解。此時候。麋角解者雖說多。皆無明據。但能氏云。鹿是山獸之陽也。故夏至得陰氣而解角也。麋是澤獸陰也。故冬至得陽氣而解角也。麋爲陰獸。情淫而遊澤也。冬至陰方退。故解角。從陰退之象也。亦鹿爲陽獸。情淫而遊山也。陽方退。故解角。從陽退之象也。夏小正云。十一月麋角墮。是也。次水泉動。此時候無文。今按。陽氣漸動於水下也。小寒十二月節配于亥。雁北嚮。雁之北嚮有早有晚。早則北嚮。晚則二月北嚮也。小寒者極寒之時。月初爲小。月半爲大寒。鄭玄云。癸探也。陰任於陽。而萌芽於物也。故癸主十二月以配於水。次鶡始巢。詩緯推度災云。復之日鶡始巢。是也。復之日者。當復卦日也。次雉始鳴。鳴也。詩云。雉之朝鳴。尚求其雌。大寒十二月中配于丑。雞始乳。此時候無文。大寒者相對小寒。月半寒爲大。三



禮義宗云丑紐也結也繫也。言居于十二支終始之際以紐結爲名。故主十二月中以配于土也。次征鳥厲疾鷙鳥。征鳥者鷹隼之屬也。時殺氣盛極故鷹隼之屬取鳥捷疾嚴猛也。蔡云大陰致氣將盡故猛疾而與時競。次水澤腹堅此時寒水盛而水澤腹堅也。謂水濕潤澤厚水堅固也。腹者形軀腹長故爲厚矣。

右七十二候者五日一候十五日三候一氣也。一月三十日六候二氣。凡一歲十二月二十四氣七十二候也。皆知草木萌芽鳥獸變化耳。以月令正義之說載之。十干十二支以爾雅淮南子等之說註之。定可多誤乎。後見之人可改之。

釋六十四卦第十八。

立春候。小過。少陰也。大夫蒙。蒙昧也。卿益。惠也。雨水公漸。進也。辟泰。大通也。驚蟄候需。萬物待三時節也。大夫隨。待時升也。卿晉。進也。春分公解。舒緩也。辟大壯。盛也。清

明侯豫。大夫訟。爭競也。卿蠱。事也。亂也。迷也。穀雨公革。改也。辟夬。決也。物夫斷也。立夏侯旅。散也。大夫師。象也。二千五百人爲師。卿比。竝也。親附也。配也。小滿公小畜。小陰也。畜積養也。辟乾。天之用也。萬物之事跡也。芒種侯太有。保義也。大夫家人。內治也。卿井。不變也。夏至公咸。感也。辟姤。過也。小暑侯鼎。新變也。大夫豐。大也。卿渙。散也。大暑公履。禮也。履行也。辟遯。遁也。立秋侯恒。久也。曆作常。大夫節。止也。卿同人。同和也。處暑公損。懈怠也。辟否。閉也。白露侯巽。入也。柔也。順也。大夫萃。聚也。卿大畜。大陽也。畜陰也。秋分公賁。飾也。辟觀。看也。自下見。寒露侯販妹。販嫁也。妹姊也。大夫無妄。復正也。路也。卿明夷。夷傷也。地中火也。霜降公困。若也。辟剝。剝落也。立冬侯艮。止也。抑止也。大夫既濟。濟渡也。卿噬嗑。小雪公大過。辟坤。柔順也。生也。大雪侯未濟。濟成也。大夫蹇。難也。卿頤。養也。冬至公中孚。實也。辟復。未復也。小寒侯屯。危難也。陰陽交而暢達也。故大夫謙。地道也。卿睽。睽異也。大寒公昇。登也。辟



臨，大也。事成也。  
自<sub>上</sub>臨<sub>下</sub>也。

右六十四卦之中。震兌離坎四卦者。十二月消息之卦也。故不載曆面。六十卦註之。六日一卦一月五卦。一歲六十卦成歲也。是以觀天地之損益。知人主之吉凶。定聖人之奧藏也。文大而志深。非予所知。不可說。

釋閏月第十九。

或問。閏月何也。答曰。堯典曰。三百有六旬有六日。定四時成歲云云。又朱子曰。天躰至圓。三百六十五度四分度之一。繞地左旋。常一日一周而過一度。日麗天而少遲。故日一日亦繞地一周。而在天爲不及一度。月麗天尤遲一日。常不及十三度十九分度之七。積二十九日九百四十分日之四百九十九。而月與日會。又日與天會而多五日二百三十五分。者爲氣盈。月與日會而少五日五百九十二分。者爲朔虛。合氣盈朔虛。一歲之內餘十日九百四十分。名潤率。故三年

有一潤。五歲有再閏。十九年有七閏。而氣朔分齊無毫髮之差。是爲一章之運。今按。失一潤則子之一月入于丑月。失三閏則春季入于夏。失十二潤則子歲入于丑年。故聖人作曆。必歸餘潤。以補月行不及於日之數也。其日與天會成二十四氣。必有三百六十日。故自今年冬至至來年冬至前一日。必三百六十六日。上會而成一歲。雖遇閏年亦同。又一月三十日。十二月三百六十日。一歲之常數也。以朔虛言之。三百五十四日也。則成日月交會。謂之朔也。於是按乎漢儒之說。日行一度尤遲。月行十三度尤遲。此法本朝曆家久所用也。但朱子曰。日速月遲。故日月會於晦朔之間。初一日之晚日西墜。微月亦隨之墜矣。初三生明以後。相去漸遠。是日行速進而至半天。月行遲退而不及。亦半天遠矣。自十六日至月晦。日行全遠盡一天。月行全不亦盡一天。即日進至本數。月退在本數。而晦



朔之間。復相會也。又按。漢宋兩儒之說。可否不知之。古今曆家之法。日在進數。月有退數。是以日速月遲乎。凡閏月法雖多說。乃三百六十六日名氣盈。日之不及天數六日。則成沒日。又三百五十四日小歲之法也。日與月會而月之不及日數六日。則成小月也。名朔虛。此氣朔合一歲十二日餘。故一年三百五十四日也。三歲得三十六日。則有一閏。猶六日餘。又至于二年。得二十四日。前餘六日。與今二十四日。合得一月之數。故五歲有再閏。但知何月者。以推歲之術。決定矣。一歲之大數。自今年立春。至來年立春前日。三百六十六个日。是大歲數也。

釋日月蝕第二十。

或問。日月蝕何也。答曰。蝕者雖多說。今曆家法。周天之位。三百六十五度二十五分半也。二十八宿行度亦同。故天以二十八宿爲體。則二曜五星皆行。二十八宿之度。晦朔之間月及於日。與

日相會而正爲朔。凡日月一歲十二會也。於是君之政急。則日行疾。緩則日行遲。有疾遲失其常度。則日蝕。蝕者日月同道而月揜日而相重之時。現虧蝕。故日蝕則陰侵陽。臣凌君之象也。王者修德行政。用賢去奸。則月當避不蝕也。張氏曰。春秋云。五星潛在日下。禦侮言之乎。又月與日相對。則月光正滿。而爲日月正對衝。而日光遙奪月光。則有月蝕。又云。月之側有靈雲謂之闇虛。當月則月蝕。當星則星亡。月蝕者陽侵陰之象也。董仲舒云。月后妃大臣諸侯之象也。故月蝕修刑以攘災也。

釋納音第二十一。

或問。納音何也。答曰。五行者。生數。壯數。老數。各有三種之數。其納音者。論人之本命。故取末之老數以說之。土老數一。火老數三。水老數五。金老數七。木老數九也。樂緯云。納音者。謂之本命所屬之音。卽宮商角徵羽也。納者取其音之



調。知姓所屬也。孔子曰。丘吹律定姓。一言得土曰宮。三言得火曰徵。五言得水曰羽。七言得金曰商。九言得木曰角。今按。庚午。辛未。戊子。己卯。丙戌。丁亥。庚子。辛丑。戊申。己酉。丙辰。丁巳。此歲生人者皆得宮音。故受氣於土生人也。丙子。丁卯。甲戌。乙亥。戊子。己丑。丙申。丁酉。甲辰。乙巳。戊午。己未。此歲生人者皆得徵音。故受氣於火生人也。丙子。丁丑。甲申。乙酉。壬辰。癸巳。丙午。丁未。甲寅。乙卯。壬戌。癸亥。此歲生人者得羽音。故受氣於水生人也。甲子。乙丑。壬申。癸酉。庚辰。辛巳。甲午。乙未。壬寅。癸卯。庚戌。辛亥。此歲生人者得商音。故皆受氣於金生人也。戊辰。己巳。壬午。癸未。庚寅。辛卯。戊戌。己亥。壬子。癸丑。庚申。辛酉。此歲生人者皆得角音。故受氣於木生人也。謂之人姓也。

釋十二直第二十二。

或問。十二直何也。答曰。新撰陰陽書。又郝震

堪餘八會經等兩說皆以同。而上配于星辰。下主万物。以配於人事。故吉凶尤大。不可不用捨也。建者斗柄所指之名也。能建生万物。故曰建。尚書曆曰。安社稷。冠帶。立柱。納財及奴婢。出行。吉也。除者斗柄前辰也。又名戶曹。折衝万物。除。去百凶。故曰除。書云。療病。祠祀。合樂。針刺。吉。滿者天之倉曹財貨所也。奄覆凶咎。滿蓋万物。故曰滿。書云。造屋舍。移徙。嫁娶。內財及奴婢。裁衣。出行。造車。塗竈。吉也。平者天上會曹平分万物也。又名帝路。故曰平。書云。造屋舍。移徙。嫁娶。內財及奴婢。裁衣。吉。定者斗柄前之四辰也。又名大忌。能定諸客。故曰定。書云。造屋舍。移徙。嫁娶。安宅。內財及奴婢。裁衣。買馬牛。起土。祠祀。吉。執者斗柄前五辰也。能執斷万物。故曰執。書云。張設羅網。射獵。收捕盜賊。吉。破者斗柄之相衝破所也。又名天之游激。故曰破。書云。收鬼。捕邪。治病。舉軍攻擊所向。吉也。危者斗



魁之前險也。不可昇高。故曰危。書云、張設羅網。魚捕射獵。伐樹木。吉。成者斗柄當相對。又名天之主記。爲事必成。故曰成。書云、祠祀。入宮。造屋舍。移徙。嫁娶。出行。裁衣。吉。收者謂收歛。萬物。又名天倉。故曰收。書云、造屋舍。入室。入宮。移徙。嫁娶。治壁垣。張設羅網。捕縛田獵。下種。種樹。吉。開者斗柄居前也。天之使者。開險通後。故曰開。書曰、造屋舍。起土。移徙。嫁娶。內財及奴婢。立門戶。祠祀。出行。入學。加冠。拜官。治病。吉。閉者名嘆星。閉塞不通。故曰閉。尤禁邪惡之日也。修隄防。塞穴。吉。郝震堪餘八會經云、建者主足除者主尻滿者主腹平者主背定者主胸執者主手破者主口危者主鼻成者主眉收者主髮開者主耳閉者主目十二直釋大槩如此。

釋十干十二支第二十三。

或問。支干者何也。答曰。支干者。蔡邕月令章

句云。昔大槁探五行之情。占斗機所建也。始作甲乙以爲日。謂之幹。作子丑以名辰。謂之支。甲丙戊庚壬爲陽爲剛。乙丁己辛癸爲陰爲柔。是合十干天之數也。子寅辰午申戌爲陽。丑卯巳未酉亥爲陰。是合十二支地之數也。皆天地陰陽造化之根元也。陽剛陰柔主歲月日時。人事覆載之間。吉凶窮達。不可離之也。

釋月建第二十四。

或問。月建者何也。答曰。月建者。北斗之所指。柄之辰也。觀斗柄之指於寅方。定歲首。故以寅月今爲正月。北斗第一名樞。第二名旋。第三名機。第四名權。第五名衡。第六名開陽。第七名搖光。又稱斗柄。又名尾。北斗居天中。隨二十四氣運轉。而指柄於十二辰。是以夏殷周三代。受天命而改歲首。史記云。夏時者以建寅月爲正月。殷時者以建丑月爲正月。周時者以建子月爲正月。皆天地人爲法乎。又秦代以建亥月爲



歲首。漢初猶用秦正朔。自魏已降復于夏時。以建寅月定歲首。自爾至今無改。其星躔殊建謂之乎。孔子得天道四時之氣。應八節生殺之期也。故云行夏時也。新撰陰陽書云。天道方者有兩道。或有黃道。或有黑道。其黃道者順天氣。尤吉。黑道者逆天氣。尤凶。今所載曆者是黃道也。順天氣方也。故同天德方。天道南行月者天德在丁。天道西南行月者天德在坤方。餘例皆爾。宜向天道方修造天德方。取土修造。避病。月德月空二方。又同上也。三鏡者天鏡。地鏡。人鏡也。言鏡明也。向其方成百事吉也。又月致者義同歲致。隨事尤凶也。用時者凶事用之方也。凡天道天德。月殺月德。月德合月空三鏡。皆一月中法也。或取日。或取方。以有吉有凶。可求知也。

曆林問答集上終

曆林問答集目錄下

釋土用事第二十五

釋弦望第二十六

釋社日第二十七

釋三伏第二十八

釋臘第二十九

釋沒滅第三十

釋大歲位前對後第三十

釋天恩第三十二

釋天赦第三十三

釋母倉第三十四

釋歸忌第三十五

釋血忌第三十六

釋厭厭對第三十七

釋無翹第三十八

釋九坎第三十九

釋重第四十

釋復第四十一

釋往亡第四十二

釋日遊第四十三

釋凶會第四十四

釋八龍七鳥九虎六蛇第四十五

釋五墓第四十六

釋伐第四十七

釋遠行第四十八

釋忌夜行第四十九

釋天間第五十

釋歲下食第五十一

釋下食時第五十二

釋天一天上第五十三



釋大將軍行第五十四 釋土公土府第五十五

釋伏龍第五十六 釋十干吉凶第五十七

釋十二支吉凶第五十八

釋二十八宿吉凶第五十九

釋七曜吉凶第六十

釋滅門太禍狼藉第六十一

釋羅刹第六十二 釋甘露第六十三

釋金剛峯第六十四

曆林問答集下

釋土用事第二十五

或問。土用事何也。答曰。曆例云。土用事筭定之。不可起土。其五行皆配於四方。故主十干十二支以成四時。春木用事。子十八日。甲十八日。乙十八日。卯十八日。合七十二日也。木一氣之數。木王時也。辰十八日。土用事。土王時也。夏火用事。巳十八日。丙十八日。午十八日。丁十八日。

合七十二日。火一氣之數。火王時也。未十八日。土用事。土王時也。秋金用事。土王時也。秋金用事。申十八日。庚十八日。酉十八日。辛十八日。合七十二日。金一氣之數。金王時也。戌十八日。土用事。土王時也。冬水用事。亥十八日。壬十八日。子十八日。癸十八日。合七十二日。水一氣之數也。水王時也。丑十八日。土用事。土王時也。土爲五行之王。故爲王於四季。四時土用數。合七十二日。爲土王之位。是五行之數。合三百六十日。一歲之數也。但春秋冬之三土用者。皆爲散王之位。未能相生。春土畏木。故春土用者不專。秋土用者。土衰老。故無威。冬土用者。居水與木間而不專。故爲王之位。夏獨正爲土王之位。戊屬於丙。己屬於丁。其土見生於火。故以夏土用正爲土王之時。是以生金於酉也。春木用事。無伐木。夏火用事。無縱火。秋金用事。無禁金石。冬水用事。無澤池堰。四季時無犯土。是五行



妙用大槩如此。

釋弦望第二十六。

或問。弦望者何也。答曰。曆例云。上弦者。陽光漸照。陰体未成。而遲速交際也。又云。望者。陰陽相對者。月正滿。而交在望。下弦者。陽明漸消。而陰体在半也。月獨無光。依日之照。有明。其陽成於三日。故月初三生於小明。而見西天。因茲朔與望半。爲上弦。日光照月之半。其形似弓。故云弦。又弦之後。大陰之位盈。而正相對於太陽之照。故月圓滿也。謂之望。又望之後。月漸近日。是故日月不相對。而月漸虧也。望與晦半。月又半也。下弦者。至晦而月光死。而至朔而月蘇也。其朔者。日月正交會之辰也。

釋社第二十七。

或問。社者何也。答曰。尙書曆云。社者。歲之春秋可祀之社事。土地之主也。稷五穀之長也。二月八月之中氣也。二月爲春社。八月爲秋社。百穀

實而稼穡成。報德而祀之。故春社者近於春分戊日。秋社近於秋分戊日也。各命民祭於土地。將攘惡氣。其戊土也。故取其日祭之也。

釋三伏第二十八。

或問。三伏者何也。答曰。曆例云。伏者。藏也。謂四時代謝。而皆以相生移行也。而秋之金代於夏之火。火者既錯金。金者畏於火。故夏至後第三庚日爲初伏。第四庚日爲仲伏。立秋後第一庚日爲後伏。是謂三伏。言春木也。代於水。而夏者火也。代於木。冬者水也。代於金。皆以相生代行也。於是夏之火代秋之金。是相尅也。故夏之王之時。金氣尤伏藏也。立秋者主庚。故第一庚日。金氣伏矣。是不可遠行。療病凶也。

釋臘第二十九。

或問。臘者何也。答曰。說文云。臘者。無定日。冬至後第三戌日也。廣雅云。夏曰嘉平。殷曰清祀。周曰大蜡。秦初曰臘。皆祭之名也。主者各以其



行之盛日爲祖。以終日爲臘。假令火德君者以午爲祖。以戌爲臘。木德君者以卯爲祖。以未爲臘。金德君者以酉爲臘。以丑爲臘。水德君者以子爲祖。以辰爲臘。魏者爲土德王。以子爲祖。以辰爲臘。魏者爲土德王。以子爲祖。以辰爲臘。水土之君者子爲祖。辰爲臘。今臘者以辰日取臘日。夫季冬者水之終時也。辰日土之位也。者以水土爲本。故近于大寒辰日。獵而取獸祭先祖報鬼神也。是故季冬云臘月。近於大寒辰日云臘日乎。

釋沒滅第三十。

或問。沒滅者何也。答云。曆例云。滅沒者是曆數餘分。陰陽不足非正日。故堯不以此日下堂。舜不以此日通四方也。又沒者天與日會。而日不及於天餘分也。是曰氣盈。又曰。沒又滅者日與月會。而不及於日餘分也。是名朔虛。又曰。滅也。皆以非正日。故聖人慎而不用也。百事

勿用之。大凶焉。

釋歲位歲前歲對歲後第三十一。

或問。歲位歲前對後四種何也。答曰。陰陽書云。四種者皆主五行。大歲之位同之。子歲者大歲位子也。前丑對午也。後亥也。餘例皆爾也。歲位者王者之位。歲前公侯之位。歲對卿大夫位。歲後庶人之位。但無吉凶。故皆通無妨也。

釋天恩第三十二。

或問。天恩者何也。答曰。曆例云。天恩者天之位。有四禁之道。常開一也。其自甲子至癸亥六十日也。四分一是十五日也。其甲配于子。己配于卯酉。甲在十干之始。子在十二支之始。故自甲子至戊辰五日之間爲天恩之日。又己爲十干之主。卯酉爲天地之緯。故自己卯至癸未五日之間爲天恩日。又自己酉至癸丑五日之間爲天恩日。合十五日皆爲天恩日。如此支干偶助而成育万物。故名天恩日。尤好日也。



釋天赦第三十三。

或問。天赦日者何也。答曰。通鑑云。天赦者。天之生養萬物。宥其罪日也。故曰。天赦。百神上天之日也。無所禁忌。春戊寅。夏甲午。秋戊申。冬甲子。此皆天赦日也。夫甲戌者。爲陽干之位。子午者。爲天地經。寅申者。爲陰陽之主。是以戊寅甲午戊申甲子者。於四時而名。天赦日。舉百事吉也。

釋母倉第三十四。

或問。母倉何也。答曰。曆例云。母倉者。五行所生之母辰也。春之木王之時。亥子母倉日。水生木故也。夏之火王之時。寅卯母倉日。火生土故也。秋之金王之時。丑未母倉日。土生金故也。冬之水王之時。申酉母倉日。金生水故也。五行皆以母之位。爲母倉日也。是舉百事吉也。

釋歸忌第三十五。

或問。歸忌者何也。答曰。曆例云。歸忌者。天棊星之精也。此星上衝紫宮。下防門闕。凡有四名。

一曰歸忌。二曰皈化。三曰天小女。四曰皈來。主丑寅。子日自天降地而來。居人家門。防禦皈家所。故遠行。皈家。移徙。嫁娶。加冠。入國。皆不吉也。

釋血忌第三十六。

或問。血忌者何也。答曰。郝震堪輿經云。血忌者。天精也。云梗河之精也。有三名。一曰殺忌。二曰日忌。三曰血忌。從丑始至子終。來往十二辰。運而復始。主致伐。故刑戮及針灸。出血等犯用之凶也。

釋厭厭對第三十七。

或問。厭厭對者何也。答曰。曆例云。厭者有三名。一曰遊斂。二曰陰建。三曰厭斂。季氏注云。厭是天上將軍主征伐之事日也。故主斂。其辰在奎婁兩宿。從正月戌日左行。十二辰二月酉日也。餘月效之。厭對者。厭在戌對在辰。只相對也。又云。厭者。天帝車。王者用之吉。諸侯以下至庶



人用之皆凶。

釋無翹第三十八。

或問。無翹者何也。答曰。曆例云。無翹者天一之精也。翹者猶羽。無定日。厭日之後一辰爲無翹日。隨厭日无定位。故如鳥之無羽。是以名无翹也。祠祀出兵嫁娶皆凶也。

釋九坎第三十九。

或問。九坎者何也。答曰。尙書曆云。九坎者九星之精也。又云。名天之河伯。其虛危兩宿之下有九星。是名九坎。是云九坎星。又云。天管鑰也。名鉤鈴。其精氣屬北方。水星也。故主河伯舉百事凶。此九星二十八宿之外有之也。

釋重第四十。

或問。重者何也。答曰。曆例云。檢巳當純乾。檢亥當純坤。陰陽是重也。又云。巳亥天地之本也。今按。巳四月建主。乾卦重陽也。亥十月建主。坤卦重陰也。以重陽重陰故爲重日。舉百事必重。

疊也。更不可爲凶事。又雖吉事。隨事可用之矣。

釋復日第四十一。

或問。復日者何也。答曰。曆例云。復者。寅卯月者木王。故正月甲日復日。又相對庚日復日也。二月乙日復日。又相對辛日復日。三月土王。故戊己日復日。土者依無相對之位。連日復日也。巳午月者火王。故四月丙日復日也。又相對壬日復日也。五月丁日復日也。又相對癸日復日也。六月土王。故戊己日連日復日也。申酉月者金王。故七月庚日復日。又相對甲日復日也。八月辛日復日。又相對乙日復日也。九月土王。故戊己日連日復日也。亥子月者水王。故十月壬日復日。又相對丙日復日也。十一月癸日復日。又相對丁日復日也。十二月土王。故戊己日連日復日也。其木與木。火與火。土與土。金與金。水與水相重。故名復日也。吉凶皆同重日也。



釋往亡第四十二。

或問。往亡者何也。答曰。新撰陰陽書云。往亡者。天之致鬼也。曆例云。往者去也。亡者無也。有三名。一曰往亡。二曰天門。三曰天從。行十二節。而一歲有十有二日。今按。自立春七日。自驚蟄十四日。自清明二十一日。合四十二日。春往亡也。自立夏八日。自芒種十六日。自小暑二十四日。合四十八日。夏往亡也。自立秋九日。自白露十八日。自寒露二十七日。合五十四日。秋往亡也。自立冬十日。自大雪二十日。自小寒三十日。合六十日。冬往亡也。四時合二百有四日。是丁歲之數不足。故失陰陽之數。仍云窮日。其日不可遠行。又出軍憂死不還。尤凶也。

釋日遊第四十三。

或問。日遊者何也。答曰。訪諸文。日遊之說多矣。日遊所在。尤有忌諱。夫日遊者。天一火神也。日之精氣下主宮舍內外。而遊八方。主日精之

故名日遊也。自癸巳日至己酉日十七日。在屋內。又戊己日居屋舍內。餘日皆運轉八方。今曆所載者。只在屋舍內耳。八方遊行。者皆略之。此日勿掃屋舍內。又婦人產期之時。避母屋移。庇間。無咎也。

釋凶會第四十四。

或問。無大歲二字者何也。答曰。陰陽書云。無大歲二字。皆云凶會。或二字。或四字。今按。純陽者。陰氣伏藏。純陰者。陽氣微弱也。純陽純陰者。變化終也。或陰。或陽。相向致衝破。或孤陽。或孤陰。而失德。故無大歲二字。是日尤凶。百事勿用之。

釋八龍七鳥九虎六蛇第四十五。

或問。春八龍。夏七鳥。秋九虎。冬六蛇者何也。答曰。群忌隆集云。春甲子乙亥爲八龍日。夏丙子丁亥爲七鳥日。秋庚子辛亥爲九虎日。冬壬子癸亥爲六蛇日。今按。春木王。甲木也。子者十二



支之首。亥者十二支之終。故甲子乙亥。春八龍日也。八木數也。龍東方青龍之故也。夏火王。丙丁火也。子亥如前。故丙子丁亥。夏七鳥日也。七火數也。鳥南方朱雀之故也。秋金王。庚辛金也。子亥如前。故庚子辛亥。秋九虎日也。九金數也。虎西方白虎之故也。冬水王。壬癸水也。子亥如前。故壬子癸亥。冬六蛇日也。六水之數也。蛇北方玄武故也。蛇配於龜。龜玄武故也。其四季皆凶也。百事莫用之。

釋五墓第四十六。

或問。五墓何也。答曰。五行大義云。五墓者。木生於亥。死於午。墓於未。火生於寅。死於酉。墓於戌。金生於巳。死於子。墓於丑。水生於申。死於卯。墓於辰。土生於卯。死於戌。墓於辰。今按五行皆有生死。故入于墓。乙未日爲木五墓。丙戌日爲火之五墓。戊辰之日爲土之五墓。壬辰之日爲水之五墓。五言五行之總名。丑未辰戌土之

位也。爲五行之墓。万物皆皈於土。故配丑未辰戌。是日尤惡。百事莫用之。

釋伐第四十七。

或問。伐者何也。答曰。伐者支尅干日也。謂之下尅上日。又謂子尅母日。但輕凶也。隨事用之無咎。

釋忌遠行第四十八。

或問。忌遠行者何也。答曰。堪輿經云。忌遠行。名天斂日。今按。遠行。飯家。移徙。嫁娶。冠帶。大凶也。

釋忌夜行第四十九。

或問。忌夜行者何也。答曰。曆圖云。忌夜行者。名百鬼夜行日。但忌時不忌日。今按。子時忌之。是子陰陽之始終。故此時不可出行。遠近皆死亡。

釋天間第五十。

或問。天間者何也。答曰。群忌隆集云。天間者。



百神上天之日也。皆使成之無咎。勿令有餘。若有餘者。當待後間。故舉百事無咎矣。

釋歲下食第五十一。

或問。歲下食者何也。答曰。尚書曆云。歲下食者。有天狗星。其精也。是以云天狗出食日。又號深惡神日。六十日一出食。一歲六食也。但輕凶也。支于吉并者。用之無咎也。

釋下食時第五十二。

或問。下食時者何也。答曰。尚書曆云。下食時者。避其時。不忌其日。沐髮種菜木忌其時。假令子時忌其一時。餘無咎。

釋天一第五十三。

或問。天一者何也。答曰。春秋命曆云。天一者。地星之靈也。太一者。人星之靈也。尤爲尊星。俱在天上紫微宮門外。左曰天一。右曰太一。天一主戰鬪。知吉凶。太一主風雨。水旱兵革。飢疫災害。而遊行九宮。陰陽書云。天一者。己酉日從

天來居東北維。六日化人頭蛇身。乙卯移居正東。五日化人頭魚身。庚申日移居東南維。六日化人頭鷹身。丙寅日移居正南。五日化人頭鷄身。辛未日移居西南維。六日化人頭牛身。丁丑日移居正西。五日化人頭馬身。壬午日移居西北維。六日化人頭龍身。戊子日移居正北。五日化人頭龜身。從癸巳日上天。十六日間招搖。大微星大紫房等宮遊行。而從己酉日降地。運行八方。而角六日方五。都四十四日運終焉。其天一遊行方角。百事犯向之大凶。戰鬪向之弩弓折。產乳向之死傷尤大凶。東北維艮方。正東卯方也。餘傲之。

釋大將軍遊行第五十四。

或問。大將軍遊行者何也。答曰。大將軍從甲子日至戊辰日五日。遊卯方。從戊子日至壬辰日五日。入來中宮。中宮屋內。從中子日至庚辰日五日。出遊午方。從庚子日至甲辰日五日。出遊



酉方。從壬子日至丙辰日五日。出遊子方。每巳日還本所者。大將軍云。在卯方三歲間。云東方也。餘方皆爾。於是遊行五日之間。雖大塞方。致修造無咎。但遊行方五日之間。犯之大凶。釋土公遊行土府所在第五十五。

或問。土公土府者何也。答曰。群忌隆集云。土公土府者地神也。今按。土公者。從甲子日至己巳日六日。出遊子方。自庚午日至丁丑日還。而八日入地中。從戊寅日至癸未日六日。出遊卯方。從甲申日至癸巳日十日。又入地中。自甲午日至己亥日六日。出遊午方。從庚子日至丁未日。又八日。入地中。從戊申日至癸丑日。出遊酉方。從甲寅日至癸亥日又十日。入地中。如此運轉而復始。尙書曆曰。土公土府所在。不可犯觸之時。明可避之。又土公春者在竈。夏者在門。秋者在井。冬者在庭。四時所在。不可犯之。但庭者犯土无咎。又云。土府者正月

丑取丑方土。致家長。二月巳取巳方土。三月酉取酉方土。皆同上。四月寅取寅方土。殺少子。五月午取午方土。又殺家長。六月戌取戌方土。七月卯取卯方土。八月未取未方土。九月亥取亥方土。十月辰取辰方土。害六畜。十一月申取申方土。大凶。十二月取子方土。害子孫。土府土公之所在。明可避之。

釋伏龍第五十六。

或問。伏龍者何也。答曰。新撰書曰。伏龍者從立春之日。在內庭六十日。從清明之日。在門內一百日。從小暑十一日。在東垣六十日。從白露十一日。在四隅一百日。從大雪二十一日。在竈內四十日。如此周而復始。群忌隆集云。黃帝問地主曰。人之居世。何以有吉凶乎。地主對曰。凡人之宅神。名曰郭登。常乘伏龍而行。避之則吉。犯之則凶。急宜慎之。尤不可犯之也。

釋十干第五十七。



或問。十干有吉凶乎。答曰。訪諸文。十干吉

凶尤大。故今具說之。甲日不作車。填輿經云。奚仲古聖人。解

木作車以爲三十八輪。甲日死。故忌之。不開倉。同云。倉中必空。不治兵仗。向

曆曰。自害大凶。乙日不內金錢。同云。主不治兵仗。久受。丙

丁日不書計。五行備問云。倉頡丙寅日死。故忌之。不堅柱。群忌云。見

不治竈。同云。火不裁女衣。同云。主不剃小兒髮。火光大凶。

尙書曆云。凶。不乘船。戊日不觀病。群忌云。久不哭

泣。必重有不裁衣。主不渡田。尙書曆云。主神不

乘始車。同云。主己日不問疾。五行備問云。上古聖人

己酉日庚日不出金錢。群忌云。不祥。不治竈。同云。不針

灸。同云。不吉。不作車。同云。不乘始。不造酒。同云。

人必不裁男衣。不吉。辛日不上棟。群忌云。不作

車。同云。不乘始。不造酒。反漿主不治竈。主

不治兵仗。自傷害不裁男衣。主不服藥。扁鵲以

死。故忌壬日不券書。群忌云。後必不決水泉。八會經

詔有凶殃。

達癸日不布席。群忌云。鬼不乘船。同云不買履。見凶

### 釋十二支第五十八。

或問。十二支有吉凶乎。答曰。訪諸文。吉凶尤

大也。子日不卜問。尙書曆云。不夜哭。必受不買

釜。必有丑日不冠帶。群忌云。不還故鄉。書云。失

不堅柱。舍宅圖云。不內錢財。家不不出行。不吉。寅

日不解祭。書云。鬼神不解除。反受殃卯日不穿井。

書云。百泉不通。不作車。不吉。不乘船。必遇辰日不哭。

書云。重不吊人。反受巳日不造屋舍。不吉。不吊

人。反受不移徙。不吉。不嫁娶。女身有不出行。逢虎

也。午日不堅柱。八會經云。必不治竈。有凶不吊

人。反受未日不服藥。書云。毒不嫁娶。必不昌不

移徙。不吉。申日。百事忌之。但酉日不會客。主人受

不移徙。不吉。不出行。不吉。不作車。不吉。不嫁娶。



不吉。戊日不祠祀。書云。室亡。不祭神。群忌云。神不嫁。

娶。子孫亡也。亥日不豎柱。書云。災火起也。不嫁娶。必殺始公。不移。

徒。大凶。不遠行。不善。不成凶事。重有凶殃也。

釋二十八宿吉凶第五十九。

或問。二十八宿有吉凶乎。答曰。二十八宿并

七曜者天之元氣。萬物之精也。故吉凶甚明矣。今

大槩釋之。宿曜經云。牛宿爲吉祥宿。每日午時

直事。是以午時爲吉祥。又云。畢翼斗壁爲安重

宿。此等宿直日。造宮殿伽藍館宇寺舍。種蒔。婚

姻。造家具。入道場。入壇受灌頂等宜。皆角房

奎爲和善宿。此宿直日。學伎藝。習真言。受灌

頂。求婚姻。舉錢。對君王。參將相。冠帶。出行。服

藥等吉。參柳心尾爲惡害之宿。此宿直日。圍城。

斫營。徵兵。略賊。交陳。破敵宜。鬼軫胃婁爲急

速之宿。此宿直日。進路出行。入學。受業。服藥。入

道場。受灌頂吉。星張箕室爲猛惡之宿。此宿直

日。射獵。祭天。祈神。求兵威吉。井亢女虛危五宿

爲輕躁之宿。此宿直日。學乘象馬。種蒔。服藥吉。

昂氏爲剛柔之宿。此宿直日。造家具。送葬。鑽火。

入宅。王者盟會吉也。

釋七曜吉凶第六十。

宿曜經云。太陽日曜。此直日。拜官。教兵。習戰。遠

行。設齋。祈神。合藥。內財。入學。臨官吉也。大陰月

曜。此直日。造功德。洗頭。割甲。著新衣吉。又家

娶。入宅。出行凶。熒惑火曜。此直日。決罪人。捕盜

賊。買金寶牛馬。動甲兵。修戒。具教旗。打賊必

勝。吉。又云。合藥。種蒔。除甲。出病者死。凶也。辰星

水曜。此直日。入學。事師長。出行。伏怨。敵吉。又

云。修造舍宅。對戰不吉。歲星木曜。此直日。命王

公。求善知識。學問。禮拜。布施。入宅。著新衣。沐

髮。種菓木。調伏。買牛馬及奴婢。作諸事吉。又

云。作誓。賊必敗。妄語。爭競。必吉也。大白金曜。此

直日。見大人。著新衣。吉。又云。沐浴。冠帶。買饌

具。入宅凶也。鎮星土曜。此直日。買賣田宅。合藥。



立精舍。作竈。入宅。鞍馬。倉庫。內財吉也。又云。結婚。冠帶。出行凶也。

釋滅門大過狼藉第六十一。

或問。滅門。大禍。狼藉者何也。答曰。宿曜經云。一月之內。三箇之凶日。一切不可舉行。慎而能慎。若犯滅門日。者家門亡。若犯大禍日。口舌發。不休息。若犯狼藉日。所作不宜。万事散失。凶也。

釋羅刹第六十二。

或問。羅刹者何也。答曰。宿曜經云。或曜宿相尅。或宿曜相加爲羅刹日。不宜百事。必有禍殃。

釋甘露第六十三。

或問。甘露何也。答曰。宿曜經云。取曜宿相應日名甘露日。一切大吉祥。受灌頂。造寺宇。受戒習經。出家修道吉也。

釋金剛峯第六十四。

或問。金剛峯者何也。答曰。宿曜經云。宜作一切降伏法。此名金剛峯日。誦真言作護摩猛利事吉。今按。二十八宿。七曜。滅門。大禍。狼藉。甘露。金剛峯吉凶。皆一經之說也。是弃於四時生殺之理。不取五行日辰之妙也。於是玄女云。不知五行之相尅。日辰之吉凶者。如盲馳於曠野云。所詮滅門。大禍。狼藉。羅刹等四箇日。灌頂。受戒。習經。出家。修道。入寺。供佛。立寺。受真言護摩。此三寶類。皆以可忌之。餘無咎。又甘露。金剛峯日等兩箇日。雖有吉文。不并支干之吉者。勿用之。

昔者河圖畫八卦。洛書叙九疇。由此天數。地卦爲用。休則子午卯酉爲四仲。乾坤艮巽爲四維。而陰陽定。而禍福驗矣。是故聖人曆數在躬。齊七政於星躔。慎萬機於月令。與天地合其德。與日月爭其明也。因茲雖顯密超佛之宗。無不用曆家之法。矧輔國養民之理。豈非作曆之



右曆林問答以印本及五行大義校合了

功。於是自吾曩祖以降。四百餘載。子々相續。綿綿不絕。念茲心神竭。筋力屈。推步之術。惟乎勤也。今所具註者。三墳五典之大道也。始自天地之根元。終至宿曜之吉凶。粗舉八八問。故儲一問答。所輯錄者。皆諸文之說也。則乎周易卦爲六十四段。分上下卷。象乎二儀。上二十四段者。節氣之定法。下四十段者。五行之成數也。情見陰陽之窮達。五行之妙用。吉非吉。凶非凶。圓轉無窮。如環無端。但近代末葉。皆假名於道。覓利於衢之流。寫此曆。以曆爲涉世之資而已。繫豈可以國家重器。類商賈之輕物耶。大槩所詮者。雖述而不作。家之口傳。或道之樞要也。烏焉之誤。須招後見之嘲。慎勿出深室。是幸焉。

龍集甲午 孟春日

在方誌

右曆林者祖父在方卿書之。然者依持明院殿御所望寫之奉備覽者也。

田中敏治  
齋木一馬 校



昭和八年十一月十五日  
 昭和八年十一月廿五日  
 昭和十四年八月二十日  
 昭和十八年二月二十日  
 訂正再版發行  
 發行 (四〇〇)

發行者

東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八  
 續群書類從完成會代表者  
 太田藤四郎

印刷者

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九  
 永島喜代次郎

印刷所

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九  
 新英社印刷所

發行所

東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八  
 續群書類從完成會太洋社

(文協會員番號115116)

出文協承認ア363251

不許  
 複製

配給元

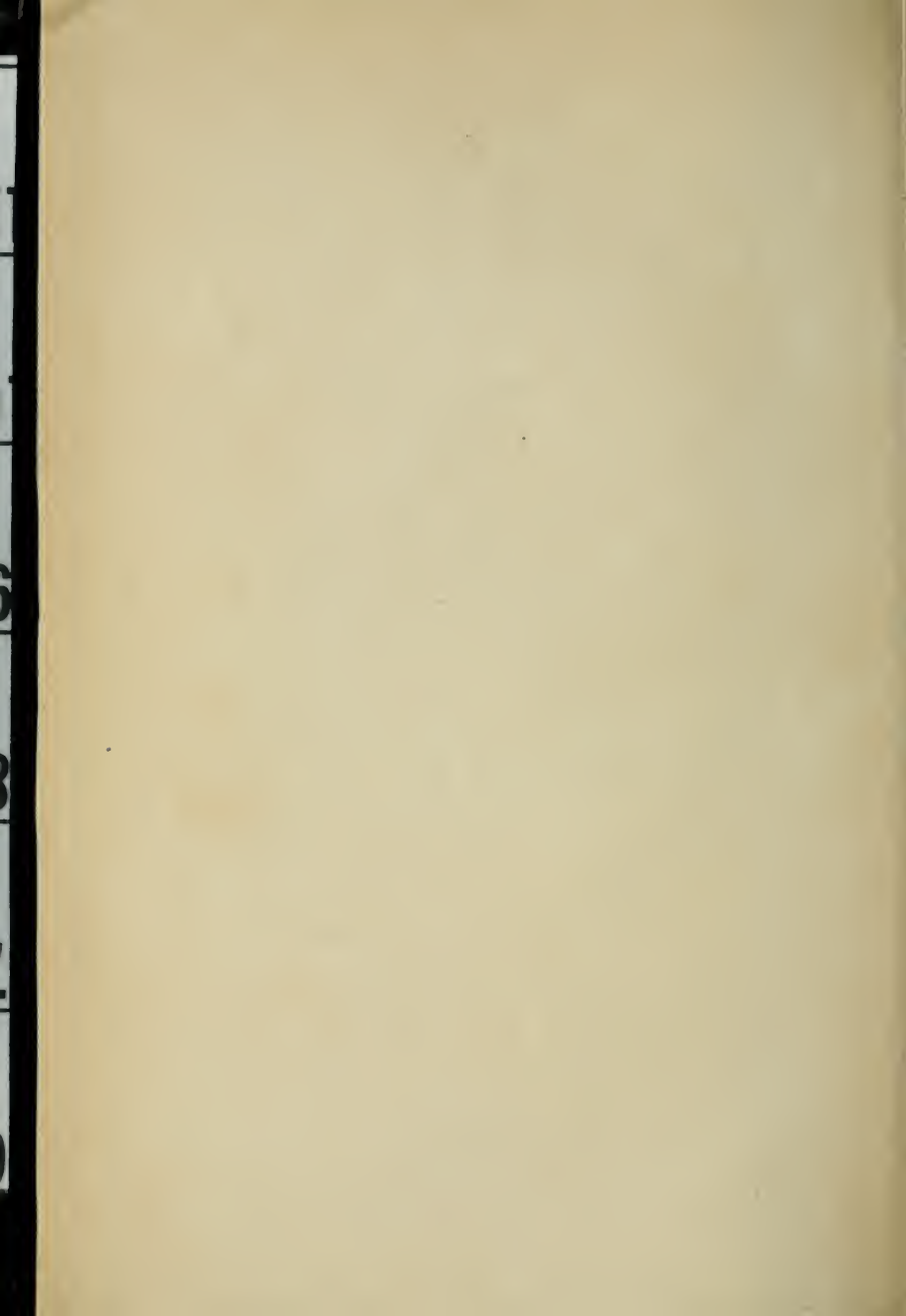
東京市神田區  
 淡路町二ノ九  
 日本出版配給株式會社

振替東京六二六〇七  
 電話大塚七一八

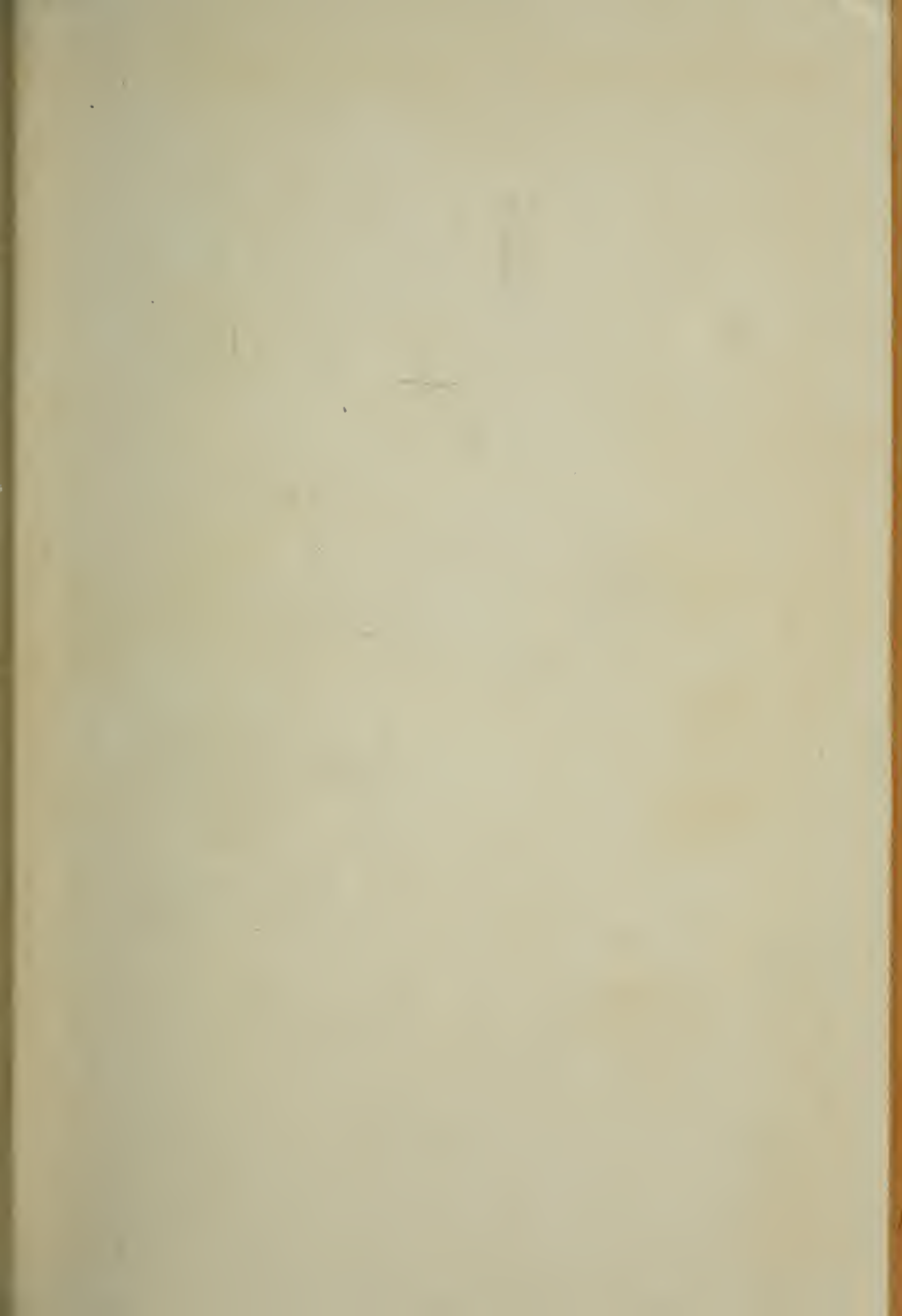




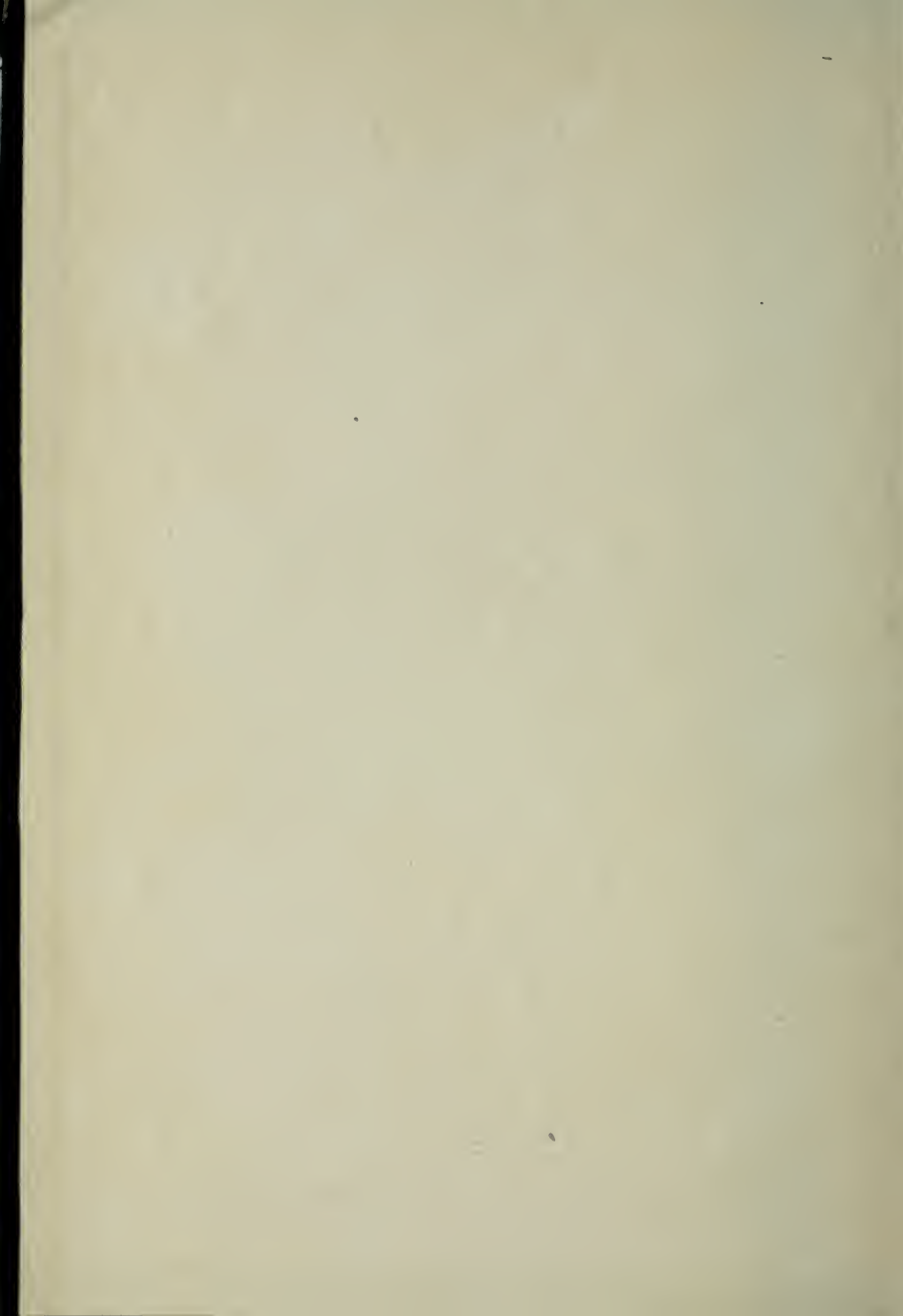














EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 9209

FOR USE IN  
LIBRARY  
ONLY

BRITTLE SHELF